

岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第21冊

津島岡大遺跡 16

第17・22次調査

〔環境理工学部棟新営〕

2005年

岡山大学埋蔵文化財調査研究センター

岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第21冊

津島岡大遺跡 16

第17・22次調査

〔環境理工学部棟新営〕

2005年

岡山大学埋蔵文化財調査研究センター

序

本報告書は、岡山大学環境理工学部校舎新営工事に伴って1996（平成8）年・1997（平成9）年に実施した津島岡大遺跡第17次発掘調査および1999（平成11）年に実施した同遺跡第22次発掘調査の成果をまとめたものである。両次発掘の調査地は南北に接しており、調査成果をまとめてここに報告するものである。

これらの調査地は、朝寝鼻貝塚の南西に位置し、従来から縄文時代の遺構・遺物が濃密に分布するところとみなされてきた。この度の発掘調査でも遺跡の重要性を再確認することになり、とくに2基の竪穴住居状遺構の発見や豊富な土器・石器の出土は岡山平野の縄文文化を考えるうえで貴重な成果といえ、後期前葉を最盛期として中期末から後期中葉へ移り変わる縄文時代一集落の歴史を解き明かす有力な資料となろう。

第22次発掘調査を行っていた1999（平成11）年3月には、あわせて調査地北側にひろがる馬場の周辺で遺跡確認のための試掘調査を実施した。重要な遺跡の保護対策を検討するために資料を得ることが目的であった。試掘の結果、朝寝鼻貝塚のある丘陵から今回の調査地まで微高地が続き、遺跡の連続が予想できた。それまでの発掘成果や新たな試掘の結果を受け、1999（平成11）年9月には当時の埋蔵文化財調査研究センター管理委員会が津島地区東北隅地域に学内措置として遺跡保護区を設けることを決定し、同年12月には施設設定委員会が施設長期計画配置図に遺跡保護区の範囲（約17,000平方メートル）を明示することとなった。埋蔵文化財のなかでもとくに多くの文化層を含み調査に多大な時間と経費を要する地域については、施設建設用地からあらかじめしておくのも一つの工夫であろう。

第22次発掘地では、縄文時代より上層で東西にのびる古代の大溝を確認した。条里地割の里境となる溝の一部にあたり、これまで東方のベンチャー・ビジネス・ラボラトリーや西方の図書館新館建設地等の発掘地でもその延長部分を調査してきた。今回の報告では、硯の出土等により古代山陽道とのかかわりも議論しているが、これからの発掘調査によって十分な資料を積み上げていくことが課題である。

2回にわたる発掘調査の実施にあたっては、新設なったばかりの環境理工学部から格別のご配慮をいただいた。また遺跡の保護措置については、本センター管理委員長であった当時の小坂二度見学長が積極的に推進されるとともに施設部からも具体的な提案をいただいた。関係各機関・各位にあらためて深甚の謝意を表する次第である。

岡山大学埋蔵文化財調査研究センター

センター長（理事・事務局長）

阿 部 健

副センター長（文化科学研究科教授）

稲 田 孝 司

目 次

第1章 遺跡の位置と環境	1
第1節 近隣の遺跡	岩崎志保 1
第2節 津島岡大遺跡	3
1. 構内座標の設定	岩崎志保 3
2. 遺跡の概要	山本悦世 3
第2章 調査経過と概要	7
第1節 第17次調査の経過	野崎貴博 7
1. 調査に至る経緯	7
2. 調査体制	7
3. 調査の経過	8
第2節 第22次調査の経過	岩崎志保 10
1. 調査に至る経緯	10
2. 調査体制	10
3. 調査の経過	11
第3節 報告書作成にあたって	岩崎志保 12
第4節 調査の概要	岩崎志保 12
第3章 調査の記録	17
第1節 調査地点の位置と区割り	岩崎志保 17
1. 調査地点の位置	17
2. 調査地点の区割り	17
第2節 層序と地形	岩崎志保 18
1. 層序	18
2. 地形	22
第3節 縄文時代の遺構・遺物	岩崎志保・野崎貴博・高田貫太 23
a. 竪穴住居状遺構	26
b. 土坑・ピット	33
c. その他の土坑・ピット出土遺物	71
d. 溝	84
e. 焼土遺構	86
f. 落ち込み	88
g. 包含層出土の遺物	88
第4節 弥生時代の遺構・遺物	岩崎志保・高田貫太 136
(1) 微高地部	138
a. 溝	138
b. 畦畔	143

c . たわみ	144
(2) 谷部	144
a . 土坑	144
b . 河道と溝	145
c . 谷部出土遺物	153
第 5 節 古墳時代の遺構・遺物	岩崎志保 160
a . 溝	160
b . 畦畔	163
c . 柱穴列	164
第 6 節 古代の遺構・遺物	岩崎志保・山本悦世・高田貫太 164
a . 溝	165
b . 畦畔	178
第 7 節 中世の遺構・遺物	岩崎志保・高田貫太 178
a . 溝	178
b . たわみ	181
c . 畦畔	182
d . 耕作痕	182
第 8 節 近世・近代の遺構・遺物	岩崎志保・高田貫太 183
1 . 近世	183
a . 土坑	184
b . 溝	188
c . 集石遺構	190
d . 柱穴列	191
2 . 近代	191
第 9 節 包含層出土遺物	岩崎志保・高田貫太 193
第 4 章 考察	199
1 . 津島岡大遺跡第17・22次調査出土縄文土器の型式学的検討	野崎貴博 199
2 . 津島岡大遺跡第17・22次調査地点出土石器の特徴	高田貫太 211
3 . 中部瀬戸内地域の縄文時代における収穫具について 津島岡大遺跡出土の石器を中心に	高田浩司 213
4 . 条里の溝について	岩崎志保 221
第 5 章 自然科学的分析	227
1 . 津島岡大遺跡第22次調査出土木材の樹種	能城修一 227
2 . 津島岡大遺跡第17・22次調査における自然科学的分析	古環境研究所 236
(1) 植物珪酸体分析	236
(2) 放射性炭素年代測定	243
第 6 章 結語	岩崎志保 245

挿図目次

図 1	周辺遺跡分布図	2	図38	土坑 6・7	53
図 2	岡山大学津島地区構内座標と各調査地点	4	図39	土坑 6 出土遺物	53
図 3	調査区と調査風景 (第17次調査)	9	図40	土坑 6・7・落ち込み 1	54
図 4	調査風景 (第22次調査)	11	図41	土坑 7 被熱礫群出土状況	55
図 5	検出遺構全体図	13	図42	土坑 7 出土礫	55
図 6	調査地点位置図	17	図43	土坑 7 出土遺物	55
図 7	調査地点区割り図	18	図44	土坑 8	56
図 8	土層断面図 1	20	図45	土坑 8 出土遺物	57
図 9	土層断面図 2	21	図46	土坑 8	58
図10	土層断面	22	図47	土坑 9	58
図11	15・16層検出遺構全体図	24	図48	土坑 9	59
図12	14層検出遺構全体図	25	図49	土坑 9 出土遺物 1	59
図13	竪穴住居状遺構 1	26	図50	土坑 9 出土遺物 2	60
図14	竪穴住居状遺構 1	27	図51	土坑10遺物出土状況	61
図15	竪穴住居状遺構 1 出土遺物 1	29	図52	土坑10出土遺物 1	61
図16	竪穴住居状遺構 1 出土遺物 2	30	図53	土坑10出土遺物 2	62
図17	竪穴住居状遺構 1 出土遺物 3	31	図54	土坑10出土遺物 3	63
図18	竪穴住居状遺構 2・出土遺物	32	図55	土坑11遺物出土状況・出土遺物	63
図19	土坑・ピット検出状況	36	図56	土坑12遺物出土状況・出土遺物	64
図20	土坑 1・2	37	図57	土坑・ピット出土土器 1	66
図21	土坑 1 出土遺物 1	38	図58	土坑・ピット出土土器 2	67
図22	土坑 1 出土遺物 2	39	図59	土坑・ピット出土土器 3	68
図23	土坑 1 出土遺物 3	40	図60	土坑・ピット出土土器 4	69
図24	土坑 1 出土遺物 4	41	図61	土坑・ピット出土土器 5	70
図25	土坑 2 出土遺物 1	42	図62	土坑・ピット出土土器 6	73
図26	土坑 2 出土遺物 2	42	図63	土坑・ピット出土土器 7	74
図27	土坑 2 出土遺物 3	43	図64	土坑・ピット出土土器 8	75
図28	土坑 2 出土遺物 4	44	図65	土坑・ピット出土土器 9	76
図29	土坑 2 出土遺物 5	45	図66	土坑・ピット出土土器10	77
図30	土坑 3	46	図67	土坑・ピット出土土器11	78
図31	土坑 3 出土遺物	47	図68	土坑・ピット出土土器12	79
図32	土坑 4・土器集中箇所	48	図69	土坑・ピット出土石器 1	80
図33	土坑 4・土器集中箇所出土遺物	49	図70	土坑・ピット出土石器 2	81
図34	土坑 5	50	図71	土坑・ピット出土石器 3	81
図35	土坑 5 出土遺物 1	51	図72	土坑・ピット出土石器 4	82
図36	土坑 5 出土遺物 2	52	図73	土坑・ピット出土石器 5	83
図37	土坑 5 出土遺物 3	53	図74	溝 1	84

図75	溝 1 出土遺物 1	84	図116	13～16層出土石器 3	117
図76	溝 1 出土遺物 2	85	図117	13～16層出土石器 4	118
図77	溝 2	86	図118	15層出土石器	120
図78	溝 2 出土遺物	86	図119	14・15層出土石器	121
図79	焼土遺構 1	86	図120	14層出土石器 1	122
図80	焼土遺構 1	86	図121	14層出土石器 2	123
図81	焼土遺構 2	87	図122	14層出土石器 3	124
図82	焼土遺構 3	87	図123	14層出土石器 4	125
図83	焼土遺構 4	87	図124	14層出土石器 5	126
図84	焼土遺構 5	87	図125	14層出土石器 6	127
図85	焼土遺構 6	87	図126	14層出土石器 7	128
図86	焼土遺構 7	88	図127	13・14層出土石器 1	129
図87	焼土遺構 8	88	図128	13・14層出土石器 2	130
図88	落ち込み 2	88	図129	13・14層出土石器 3	131
図89	15層出土石器 1	90	図130	13層出土石器 1	133
図90	15層出土石器 2	91	図131	13層出土石器 2	134
図91	14・15層出土石器	92	図132	13層出土石器 3	135
図92	14層出土石器 1	93	図133	13層出土石器 4	136
図93	14層出土石器 2	94	図134	弥生時代遺構全体図	137
図94	14層出土石器 3	95	図135	溝 3	138
図95	14層出土石器 4	96	図136	溝 4	139
図96	14層出土石器 5	97	図137	溝 4 出土遺物	139
図97	14層出土石器 6	98	図138	溝 5～7	139
図98	13・14層出土石器 1	99	図139	溝 8	140
図99	13・14層出土石器 2	100	図140	溝 9・出土遺物	140
図100	13・14層出土石器 3	101	図141	溝10・11・溝10出土遺物	141
図101	13・14層出土石器 4	102	図142	溝12	142
図102	13・14層出土石器 5	103	図143	溝13	142
図103	13・14層出土石器 6	104	図144	溝13出土遺物	142
図104	13・14層出土石器 7	105	図145	溝14	143
図105	13層出土石器 1	106	図146	13層出土石器	143
図106	13層出土石器 2	107	図147	畦畔 1	143
図107	13層出土石器 3	108	図148	畦畔 2	143
図108	13層出土石器 4	109	図149	たわみ 1	144
図109	13層出土石器 5	110	図150	土坑191	144
図110	13層出土石器 6	111	図151	土坑191出土遺物	145
図111	13層出土石器 7	112	図152	河道・谷 1～3	146
図112	13層出土石器 8	113	図153	河道出土石器	147
図113	13層出土石器 9	114	図154	河道出土石器 1	148
図114	13～16層出土石器 1	115	図155	河道出土石器 2	149
図115	13～16層出土石器 2	116	図156	河道出土石器 3	150

図157	河道出土石器4	151	図195	土坑195	186
図158	溝15出土遺物	152	図196	土坑196	186
図159	溝15	153	図197	土坑197	186
図160	谷1層出土石器1	154	図198	土坑198	187
図161	谷1層出土石器2	155	図199	土坑199	187
図162	谷1層出土石器1	156	図200	土坑200	188
図163	谷1層出土石器2	157	図201	土坑201	188
図164	谷2層出土石器	158	図202	溝26	189
図165	谷2層出土石器	158	図203	溝26出土遺物1	189
図166	谷3層出土石器	159	図204	溝26出土遺物2 石器	190
図167	古墳時代遺構全体図	160	図205	集石遺構	190
図168	溝16・出土遺物	161	図206	近代遺構平面図	191
図169	溝17	162	図207	溝27	192
図170	溝18	162	図208	溝27出土遺物	192
図171	溝19・20、畦畔	163	図209	包含層出土陶磁器・土製品	193
図172	柱穴列1	164	図210	包含層出土石器1	195
図173	古代遺構全体図	165	図211	包含層出土石器2	196
図174	溝21杭出土状況	166	図212	包含層出土石器3	197
図175	溝21・22	167	図213	包含層出土石器4	198
図176	堰状遺構	168	図214	津島岡大遺跡第17・22次調査地点 出土縄文土器の器種と分類	201
図177	溝21出土遺物1	169	図215	口縁部形態の分類	202
図178	溝21出土遺物2	170	図216	口縁部形態の比率	203
図179	溝21出土遺物3 土製品	172	図217	口縁部肥厚手法の分類	203
図180	溝21出土遺物4 木器	173	図218	E1種接合状況	204
図181	溝21出土遺物5 木器	174	図219	E2種接合状況	204
図182	溝21出土遺物6 木器	175	図220	口縁部肥厚手法の比率	204
図183	溝21出土遺物7 石器	176	図221	複数の型式で共有される文様の変遷	206
図184	溝21出土遺物8 石器	177	図222	各部位の名称	213
図185	中世遺構全体図	179	図223	弥生時代中期の打製石包丁	213
図186	溝24・25	180	図224	各種石器の法量	214
図187	溝25・畦畔、水口1・2	181	図225	津島岡大遺跡出土縄文時代の石器	214
図188	溝25出土遺物	181	図226	側縁に抉りをもつ縄文時代の石器	215
図189	たわみ2・出土遺物	181	図227	突帯文期の打製石包丁と関連する石器	218
図190	鋤溝1	182	図228	弥生時代前期の打製石包丁	218
図191	近世遺構全体図	183	図229	第6・9・12・22次調査地点東西溝	222
図192	土坑192	185	図230	第12・22次調査地点の古代～近代溝	223
図193	土坑193	185			
図194	土坑194	185			

表 目 次

表 1 津島岡大遺跡文献一覧	6	表 5 型式分類と事実報告掲載資料との対応	200
表 2 検出遺構一覧	14	表 6 各型式の器種組成	202
表 3 土坑・ピット一覧	34	表 7 第17・22次調査地点出土石器の組成	211
表 4 土坑7出土被熱礫群一覧	56	表 8 出土したサヌカイトの総量	212

図 版 目 次

図版 1 ~ 19 縄文土器 1 ~ 19	図版22 ~ 28 石器 1 ~ 7
図版20 古代土器	図版29 ~ 30 木器 1 ~ 2
図版21 陶磁器・土製品	

例 言

1. 本書は岡山大埋蔵文化財調査研究センターが実施した、環境理工学部校舎新営工事に伴う以下の2つの調査の報告書である。
第17次調査：期間1996年5月21日～1997年1月9日、面積1451㎡ 第22次調査：期間1999年3月1日～7月12日、面積773㎡
調査地点はいずれも岡山市津島中3丁目1番1号に所在する。
2. 発掘調査から報告書作成までの諸作業は、岡山大埋蔵文化財調査研究センター管理委員会・同運営委員会の指導のもとに行われた。
委員・幹事の諸氏に御礼申し上げる。
3. 調査については『岡山大埋蔵文化財調査研究年報』14・15に報告しているが、細部にわたる事実関係は本書をもって正式のものとする。
4. 本書掲載の図面・写真のうち、調査時の遺構・遺物実測・写真撮影の担当は以下の通りである。
第17次調査：小林青樹・野崎貴博・横田美香・猪原千恵；第22次調査：岩崎志保・喜田敏・野崎貴博・山本悦世・横田美香・福井優・嘉原倫子
5. 報告書作成にあたっての主な担当は以下の通りである。遺物 土器の実測・浄写・観察表：岩崎志保・野崎貴博・高田貴太・光本順・山本悦世・横田美香、石器の実測・浄写・観察表：高田浩司・高田貴太・景山明香、木器の実測・浄写・観察表：岩崎志保・高田浩司・伴裕子、遺物写真：高田貴太・野崎貴博・山本悦世、遺構 浄写：岩崎志保、整理作業 井口三智子・片山純子・黒藪美代子
6. 本書の執筆分担は目次に示した通りである。岩崎志保・野崎貴博・高田貴太連名の場合は、土器は野崎貴博、石器は高田貴太が担当した。
7. 編集は、稲田孝司（副センター長）・山本悦世（調査研究室長）の指導のもと、岩崎志保が担当した。
8. 本書作成にあたって、木材樹種同定を能城修一氏（農林水産省森林総合研究所） 石器石材の同定は鈴木茂之氏（岡山大埋蔵文化財センター）に依頼し、有益な教示を得た。また縄文土器について木下哲夫・清水義宣・高橋健太郎・高橋護・田中耕作・千葉豊・富井眞・柳澤清一の各氏に、石器について中村豊氏・米田克彦氏、近世陶磁器について乗岡実氏に多くの助言・教示をいただいた。記して感謝する。
9. 本書に掲載した調査の記録・出土遺物等はすべて当センターで保管している。

凡 例

1. 本書で用いる高度地は海拔標高であり、方位は国土座標第 座標系（日本測地系）の座標北である。
2. 土器の遺物番号は原則として遺構別に付し、その他は通し番号を付した。石器にS、木製品にW、土製品にTを付けて区別する。
3. 遺物の計測値と観察所見は観察表を作成し、実測図と組み合わせて掲載した。観察表の表記基準は以下の通りである。
観察表中の土器胎土の表記基準は次の通りである。
微砂：径0.5mm未満、細砂：径0.5～1mm未満、粗砂：径1～2mm未満、細礫：径2mm以上
遺物法量は、残存部分が全周の1/2以上の個体は実測値を、1/2に満たない個体は推定復元値をカッコをつけて表示した。
色調は欄中に表記している場合は「外面・内面」の順で表示している。
実測図中では、断面に、須恵器は黒塗り、陶磁器はトーンを貼ることで識別している。
4. 写真図版の遺物番号は本文中の遺物番号に一致する。
5. 本書で使用した地形図は、建設省国土地理院発行の1/25,000地形図「岡山北部」・「岡山南部」（平成6年発行）を合成したものである。

第1章 遺跡の位置と環境

第1節 近隣の遺跡

津島岡大遺跡は岡山市津島中所在の岡山大学津島地区構内に位置する遺跡の総称である。本遺跡の所在する岡山市津島一帯は、中国地方でも最大の平野である岡山平野の北半を占め、主要河川の一つである旭川の西岸にあたる。北側には半田山・ダイミ山・烏山といった標高150m前後の山塊が連なっている。

岡山平野は、旭川・吉井川・高梁川の三大河川の沖積作用により形成されたもので、縄文時代の前期頃に海進のピークを迎えると、海岸線は次第に後退し始める。そして河川の堆積作用と氾濫等の繰り返しにより自然堤防と後背湿地とが形成される。本遺跡周辺でも旭川旧河道や大小様々な規模の支流と、それらの間に形成された自然堤防上の微高地とが複雑に展開する地形をなしていた。このような平野の中に形成された微高地上に集落が進出し始めるが、岡山平野で人類の痕跡が認められるのは、今のところ縄文時代前期以降のことである。前期にさかのぼる遺跡は、半田山丘陵の下端に立地する朝寝鼻貝塚¹⁾である。以後この平野を舞台に、人々の歴史が現代まで連続と展開していく。ここでは、本報告に関連して縄文時代中期以降の時期を中心に周辺遺跡の概要を述べることとする。

本遺跡周辺では、縄文時代中期の遺物が百間川沢田遺跡で認められる。後期になると遺跡数が増加し、前出の朝寝鼻貝塚のほか、後期から晩期にかけては、津島岡大遺跡で、貯蔵穴・竪穴住居・炉痕等の遺構や、土器・石器等の遺物がまとめて検出されている。同様の状況は旭川東岸の百間川遺跡群²⁾でも認められ、後期・晩期の貯蔵穴・土坑・炉・貝塚等の遺構や、中期～晩期の遺物等が検出されている。

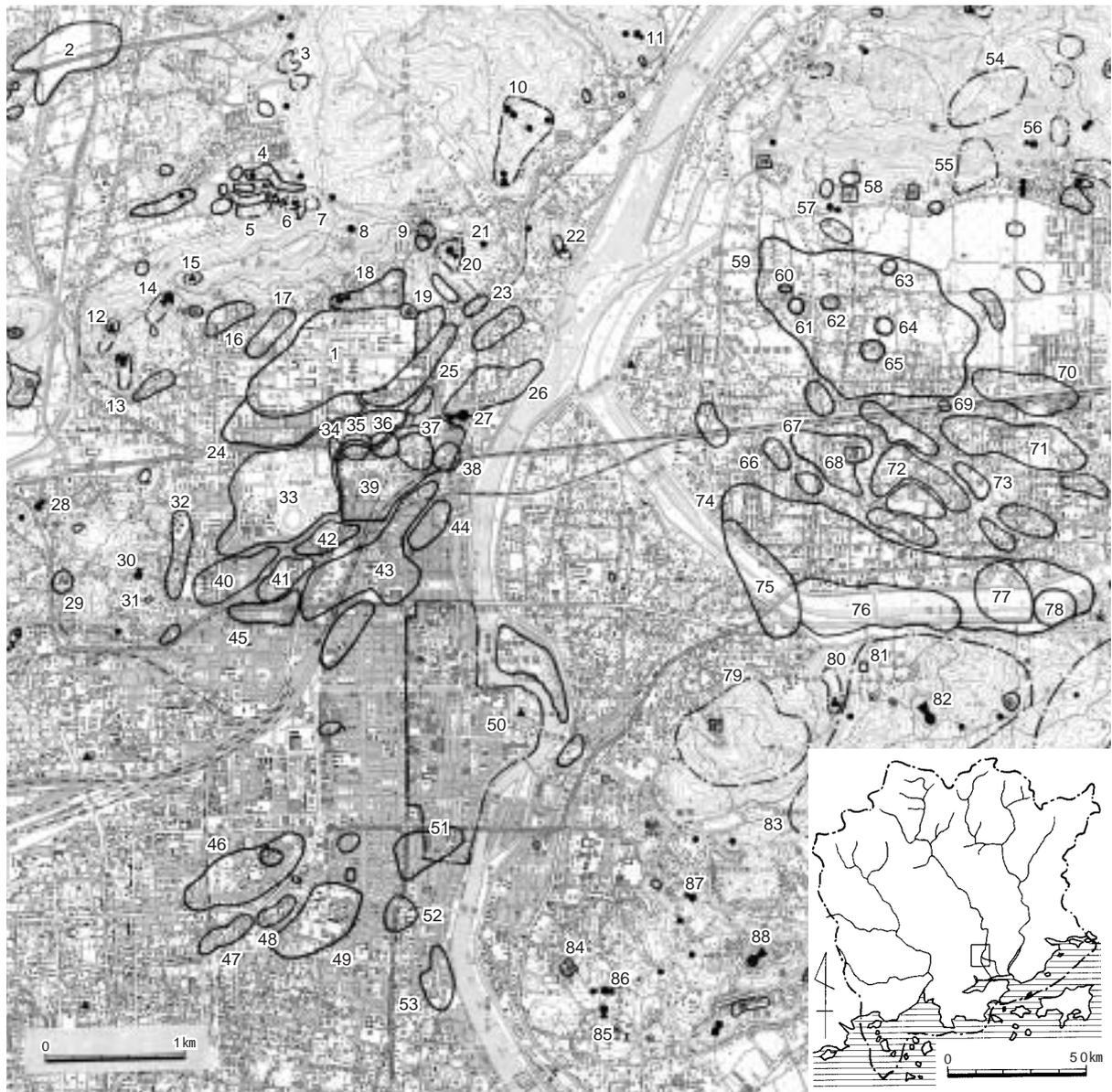
縄文時代の終わりに北部九州に稲作農耕が導入され、各地へと伝播していく過程で、瀬戸内地域へはかなり早い段階に情報もたらされたとみられる。本遺跡周辺において出現期の水田遺構は、弥生時代早期～前期にかけて堆積したと見られる黒褐色粘質土層上面で検出されている水田畦畔である。津島江道遺跡³⁾、北方中溝遺跡・北方地蔵遺跡⁴⁾等で確認されている。また国指定史跡である津島遺跡⁵⁾においては、前期前半に微高地上で住居・倉庫群が検出されている。また水田遺構は広範囲に検出されており、弥生時代前期における集落と水田の関係が示されている。

弥生時代中期以降も平野部の拡大は続き、農耕技術や水利技術の進歩も相俟って生産基盤が安定したことから、微高地上に集落が次々に出現、発展していく。前出の津島遺跡⁶⁾をはじめ、前期後半から出現する南方遺跡⁷⁾、中期からは絵図遺跡⁸⁾・上伊福遺跡⁹⁾・鹿田遺跡¹⁰⁾、後期には天瀬遺跡¹¹⁾というように、集落遺跡の増加が認められる。

一方、岡山平野の北側の半田山山塊には、弥生時代中期～古墳時代中期にかけて、有力な首長系譜をたどれる弥生墳丘墓、前方後円墳、前方後方墳等が相次いで築かれる。すなわち都月坂2号墳丘墓¹²⁾・1号前方後方墳¹³⁾・七つ塚古墳群¹⁴⁾、ダイミ山古墳、一本松古墳群¹⁵⁾、さらに麓部にはお塚(様)古墳¹⁶⁾が所在している。またやや東に離れた平野の中に神宮寺山古墳¹⁷⁾が築かれている。これらの墳墓の造営に関わった人々と、本遺跡周辺で検出されている遺跡とは密接な関わりを想定できる。津島遺跡では多数の竪穴住居址が検出されており、中心的な集落とみられる。その周辺に広がる水田域のひとつに、津島岡大遺跡は位置している。

次いで古墳時代後期では、周辺での造墓活動は見られなくなるが、本遺跡では第6・7次調査地点で水田遺構、第10次調査地点で竪穴住居址が検出されており、概期の集落構造を知る手がかりが少しずつではあるが増加している。この時期、岡山平野で遺跡の活発な動向をたどれるのは旭川の東岸地域で、百間川遺跡群¹⁸⁾・原尾島遺跡¹⁹⁾・湯迫古墳群・操山古墳群等が知られている。

古代から中世にかけてみると、古代においては、岡山平野でも条里制に関係する遺構が若干であるが検出され



1. 津島岡大遺跡

- | | | | | |
|----------------------------|---------------------------|--------------------------|---------------------------|------------------------|
| 1. 田益田中(国立岡山病院)遺跡(縄文~近世) | 15. 半田山城(戦国) | 35. 北方横田遺跡(弥生~室町) | 54. 竜ノ口山頂古墳群(古墳後期) | 72. 赤田東遺跡・関遺跡(弥生~室町) |
| 2. 白壁奥遺跡(古墳後期)製鉄 | 16. 津島福居遺跡(古墳~室町) | 36. 北方中溝遺跡(弥生~室町) | 55. 湯迫古墳群(古墳前期) | 73. 関遺跡(弥生) |
| 3. 津高住宅団地内遺跡群(古墳他)製鉄遺跡群を含む | 17. おつか(様)古墳(古墳中期) | 37. 北方地藏遺跡(弥生~近世) | 56. 備前車塚古墳(古墳前期) | 74. 百間川遺跡群(縄文~近世) |
| 4. 佐良池古墳群(古墳後期) | 18. 津島東遺跡(縄文~室町) | 38. 北方藪ノ内遺跡(弥生~近世) | 57. 唐人塚古墳(古墳後期) | 75. 百間川原尾島遺跡(縄文中期末~近世) |
| 5. 播鉢池古墳群(古墳後期) | 19. 朝寝鼻貝塚(縄文前~後期) | 39. 北方上沼遺跡他(弥生~近世) | 58. 賞田慶寺(飛鳥~室町) | 76. 百間川沢田遺跡(縄文中期~近世) |
| 6. 奥池古墳群(古墳後期) | 20. 一本松古墳(古墳中期) | 40. 上伊福遺跡・伊福定国前遺跡(弥生~室町) | 59. 備前国府関連遺跡 | 77. 百間川兼基遺跡(弥生~室町) |
| 7. ダイミ山古墳(古墳中期?) | 21. 不動堂古墳 | 41. 上伊福遺跡(弥生~古墳) | 60. 備前国庁跡(奈良~平安) | 78. 百間川今谷遺跡(弥生~古墳) |
| 8. 津島東3丁目1地点(弥生~古墳) | 22. 妙見山城跡(戦国) | 42. 絵図遺跡(弥生~平安) | 61. 備前国府推定地(南国長)遺跡(弥生~鎌倉) | 79. 83. 操山古墳群(古墳後期) |
| 9. 宿古墳群(古墳前期~後期) | 23. 鎌田遺跡(弥生他) | 43. 南方遺跡他(弥生~近世) | 62. 南古市場遺跡(奈良~平安) | 80. 妙禅寺城跡(戦国) |
| 10. 片山古墳(古墳前期) | 24. 津島新野遺跡(弥生) | 44. 広瀬遺跡(弥生) | 63. 北口遺跡 | 81. 操山219号遺跡(旧石器) |
| 11. 鳥山城跡(戦国) | 25. 津島江道遺跡(縄文~近世) | 45. 上伊福立花遺跡(弥生~室町) | 64. 八丈(高島小)遺跡(奈良~室町) | 82. 金蔵山古墳(古墳中期) |
| 12. 七ツ 墳墓・古墳群(弥生~古墳) | 26. 北方長田遺跡(弥生~近世) | 46. 47. 散布地 | 65. 中井・南三反田遺跡・古墳群(弥生~室町) | 83. 網浜慶寺(飛鳥~平安) |
| 13. 都月坂墳墓・古墳群(弥生~古墳) | 27. 神宮寺山古墳(古墳中期) | 48. 鹿田(県立岡山病院)遺跡(平安~鎌倉) | 66. 原尾島遺跡(弥生~室町) | 84. 操山109号墳(古墳前期) |
| | 28. 青陵古墳(古墳前期) | 49. 鹿田遺跡(弥生~近世) | 67. 赤田西遺跡(弥生~室町) | 85. 網浜茶臼山古墳(古墳前期) |
| | 29. 石井慶寺(奈良?~室町) | 50. 岡山城跡(室町~近世) | 68. 幅多慶寺(飛鳥~平安) | 86. 操山103号墳(古墳前期) |
| | 30. 津倉古墳(古墳前期) | 51. 天瀬遺跡(弥生~近世) | 69. 70. 雄町遺跡(縄文晩期~平安) | 87. 操山103号墳(古墳前期) |
| | 31. 妙林寺遺跡(弥生) | 52. 新道遺跡(奈良~近世) | 71. 乙多見遺跡(弥生) | 88. 湊茶臼山古墳(古墳前期) |
| | 32. 上伊福西遺跡・尾針神社南遺跡(弥生~平安) | 53. 二日市遺跡(弥生~近世) | | |
| | 33. 津島遺跡(弥生~近世) | | | |
| | 34. 北方下沼遺跡(弥生~室町) | | | |

図1 周辺遺跡分布図(縮尺 1/50,000・1/2,500,000)

ている津島遺跡、北方中溝・北方下沼遺跡などでは東西方向の大溝が確認されているほか、中溝遺跡²³・南方釜田遺跡²⁴では条里関連の遺構の検出が認められる。また津島江道遺跡²⁵では、古代の倉庫群・建物群が発見され、御野郡衙に関連する施設との想定がなされている。旭川東岸では八ガ遺跡²⁶、百間川米田遺跡²⁷といった国府関連の遺跡がみられる。一方、岡山平野南半では、古代から中世にかけていくつかの荘園の存在が知られ、鹿田遺跡²⁸・新道遺跡²⁹では建物群・井戸等の遺構の検出から、摂関家殿下渡領「鹿田荘」比定地とされる。この時期には平野の南半でも開墾が一層進んだことが窺える。中世には耕地造成により、岡山平野北半ではそれまで僅かながら残っていた微地形が消え、平野一面に水田が広がったものと推定される。本遺跡でも水田関連遺構が検出されており、また旭川西岸の鹿田遺跡・二日市遺跡³⁰、東岸の百間川遺跡群³¹等が該期の集落遺跡として知られている。

近世、特に16世紀以降は、児島湾の干拓が進んで急速に陸化した。岡山平野の水田化はさらに進み、そのなかで本遺跡周辺では御野郡一帯が岡山藩の穀倉地帯となっていたことが知られている。しかし1907～1908年に御野郡御野村・伊島村に旧陸軍屯営用地が造成され、旧陸軍による造成と、土地利用の痕跡は岡山大学津島地区構内にも随所に認められる。さらに近年の急速な市街化によって、かつての田園風景は一変し、現在に至っている。

第2節 津島岡大遺跡

1. 構内座標の設定

現在、岡山大学津島地区構内では、世界測地系による国土座標第Ⅴ座標系に基づいて、構内座標を独自に設定している。これは、国土座標系の座標北に軸をあわせたもので、本地区の地割りがほぼ東西・南北方向に合致していること、また岡山市街地に残っている条里の地割りが正方位となっている状況に対応したものである。

本センターでは、従来は日本測地系を用いていたが、2002年4月1日に改正された測量法の施行に伴い、2003年度以降に作成する報告書・概報に使用する国土座標を世界測地系へと変更した。変更の際して、構内座標の原点については、従来の構内区割りとの整合性を可能な限り保つために、その座標値のみを世界測地系による数値へ変換することとした。すなわち原点について、これまで日本測地系による座標値（ $X = -144,500.0000\text{m}$ 、 $Y = -37,000.0000\text{m}$ ）であったものが、新たに世界測地系による座標（ $X = -144,156.4617\text{m}$ 、 $Y = -32,246.7496\text{m}$ ）となった。原点の位置を従来と同じ位置に設定しているため、構内座標による区割りはこれまでのものと見かけの地図上は変わらない。

この原点から、一辺50mの間隔で、東西・南北方向に方形の区割りをを行った。座標軸の名称は原点を基準に、東西線に関しては北から南へAA～BGライン、南北線に関しては東から西へ00～48ラインとする。50m四方のそれぞれのグリッド名については、東西・南北方向の軸線の名称を組み合わせた北東隅の交点の名称を用いる。従って、原点はAA00となり、その他の交点についてもAW03、AZ05、……と呼称する。

2. 遺跡の概要

津島岡大遺跡では、2003年度までに発掘調査として、第29次調査までを終了している。遺跡の範囲は、大学敷地の西北部にあたる一部を除き、構内のほぼ全域にわたると推定される。

旭川に近接する位置あるいは半田山丘陵の裾部という立地条件から、縄文時代には数条の流路が入り込んでおり、低地部と微高地で構成される起伏のある地形が復元される³²。また、周辺の植生などの環境についても分析が進みつつある³³。

津島岡大遺跡において最も古い遺構・遺物は、第21次調査で確認された縄文時代中期中葉頃に属する土坑と土

遺跡の位置と環境

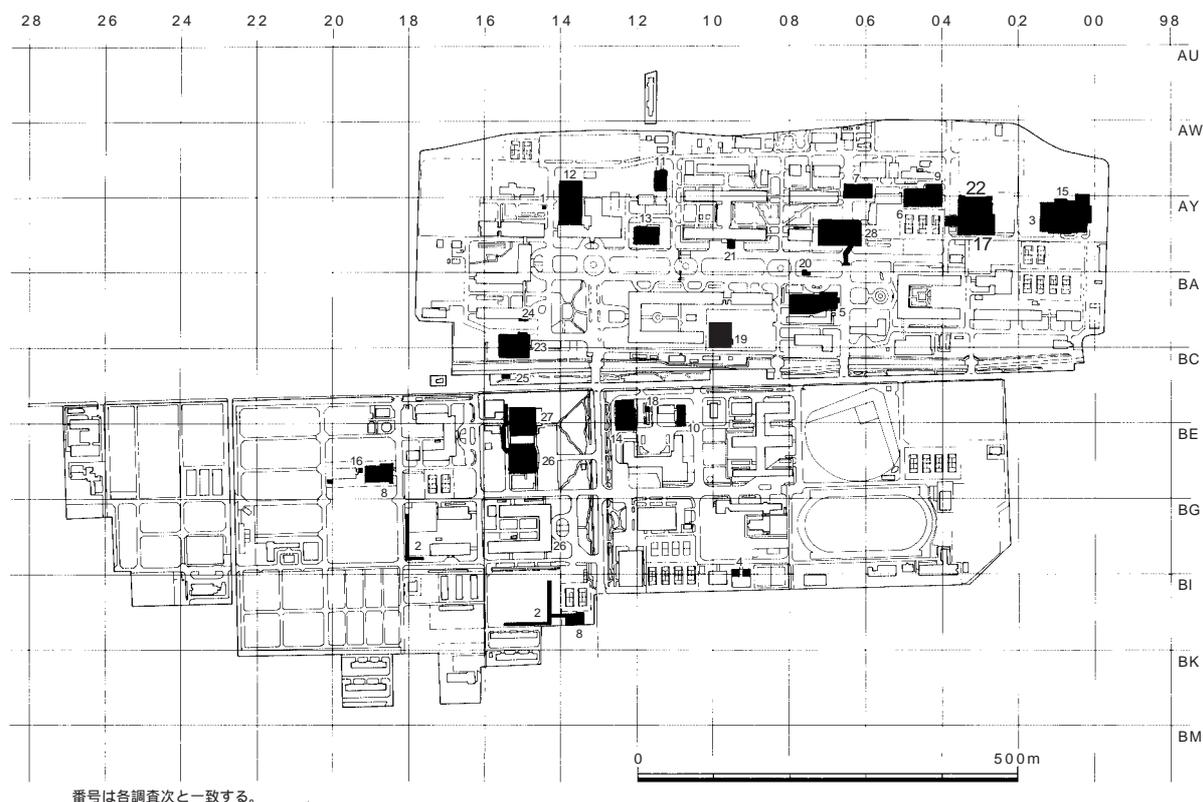


図2 岡山大学津島地区構内座標と各調査地点 (縮尺 1/10,000)

器があげられる。それに続く中期後葉～末葉では、各地点において遺物の出土が確認される(第3・15・17・19・27次など)が、明確な遺構の報告はない。同時期の人間の活動痕跡は大半の地点で希薄な状態であり、そうした状況が遺跡全体にひろがる傾向を示す点を指摘しておきたい。

一方、後期前葉には、遺構・遺物の出土量は大幅に増加しており、集落構造に関して一定の解明が可能な資料の蓄積が進んでいる²³。本遺跡の北東部にあたる第3・15次調査地点から本調査地点(第17・22次調査)を経て第6・9次調査地点に至る東西約300m程度の範囲では、微高地部に竪穴住居・大形土坑・ピット群・炉・焼土遺構・溝、河道部には貯蔵穴群が集中する。出土遺物も質・量とも他の地点とは際だって良好な状態を示しており、本遺跡における居住域の実態をうかがうことができる。また、後期中葉にはその範囲を拡大する(第5次調査など)。一方、居住域周辺部には焼土遺構を形成する地点が点在し(第7・11～13・27・8a次調査など)河道部では杭列群の存在(第23次調査)も、その機能が注目される。

弥生時代早期～同前期には、「黒色土」と呼称する黒褐色の土が本遺跡周辺にあたる津島地区一帯に形成される。「黒色土」の上面には、小区画がなされた弥生時代前期の水田畦畔が残される場合が多く、縄文時代から弥生時代への生業のあり方を考える上で、重要な手がかりとなっている。津島岡大遺跡には、こうした前期の水田がまとまって広がっており(第3・7・11・12・14・17・19・22・27・28次)、弥生時代開始期の農耕の実態を解明する上でも重要な地域である。

弥生時代前期末～中期初頭の時期には、それまで遺跡内で流路を構成していた河道や谷部の多くが洪水によって埋没し²⁴、微高地部の拡大が進行する(第3・15・5・19次調査など)。続く中期の資料は、第8・12次調査地点などで溝や遺物がやや多く報告されているが、全体としては希薄な状態である。後期初頭に入ると、第10次調査地点周辺に新たな集落形成が認められる。同地点では、後期初頭の遺物を多量に包含する土坑群が集中し、古

墳時代初頭には井戸が形成されている。耕作関連では、用水路が遺跡全域に検出される（第3・6・15・12・19・27次など）ほか、第12次調査では、整備された後期初頭の大溝から土器・木器が多数出土している。また、水田畦畔は第3・5・15次調査地点で確認される。こうした資料からは、弥生時代において中核的集落である津島遺跡の周縁部の様相を描き出すことができよう。

古墳時代では、引き続き水田経営が継続されるが、集落の居住域内では、後期における鍛冶の存在が明らかとなっている。第10次調査地点において、竪穴住居の周囲に鍛冶関連遺構が検出され、鉄滓・炉壁なども出土しているほか、第19次調査地点でも鉄滓が確認されており⁸⁾、集落内での手工業生産の一端が窺われる。

古代には、条里関連の遺構として、坪境と推定される東西の大溝が検出されている（第1・3・6・7・12・22次調査）。その他に水田畦畔が、第3・6・7・9・12・15次調査地点において確認された。集落に関しては、第8・10次調査地点にその可能性が考えられる。

中世後半では、大規模な土地造成がなされる。一定の規模を有する土地造成は、少なくとも古代段階には既に行われていたことは土層堆積状況から想定されるが、中世層からは、少量ながら、円筒埴輪片がいくつかの調査地点から出土していることから、同時期の造成が、古墳を破壊するほどの従来にならぬ大規模なものであったことが推定される。その結果、広域におよぶ地形の平坦化が大きく進行していく。また、それに際して、条里関連の溝の形状変化や位置のずれ（第12次調査）あるいは集落の移動（第10次調査）などが認められるほか、耕作関連遺構に関しても、比較的小規模な区画を残す古代の畦畔が消失し、面積が拡大した田面に多数の鋤痕を残す耕作形態へと、様々な点において大きな変化を示す（第6・9次調査ほか）。こうした状況は近世・近代に踏襲され、1907～1908年に日本陸軍が駐屯地の設営のために大規模な造成を行うまで、基本的な構造は継続されている。

註

- (1) 富岡直人 1998 『朝寝鼻貝塚発掘調査概報』加計学園埋蔵文化財調査室発掘調査報告書2
この発掘調査において、縄文時代前期のプラントオパールが確認されている。
- (2) 二宮治夫 1985 『百間川沢田遺跡2 百間川長谷遺跡2』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告59
- (3) 日本考古学協会静岡大会実行委員会編 1988 『津島江道遺跡』『日本における稲作農耕の起源と展開 資料集』
- (4) 岡田 博 1998 『北方下沼遺跡 北方横田遺跡 北方中溝遺跡 北方地蔵遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告126
- (5) 津島遺跡調査団 1969 『昭和44年度岡山県津島遺跡調査概報』
岡山県教育委員会 1970 『岡山県津島遺跡調査概報』
島崎東ほか 1999 『津島遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告137
平井 勝 2000 『津島遺跡2』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告151
島崎 東ほか 2003 『津島遺跡4』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告173
岡本泰典 2004 『津島遺跡5』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告181
- (6) 註5及び杉山一雄 1999 『津島遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告145
- (7) a 岡山市遺跡調査団 1971 『南方遺跡発掘調査概報』
b 岡山市遺跡調査団 1981 『南方（国立病院）遺跡発掘調査報告』
c 岡山県教育委員会 1981 『南方遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告40
d 内藤善史 1996 『絵図・南方遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告110
e 岡山市教育委員会 1996 『上伊福・南方（済生会）遺跡（南方蓮田調査区）』・『上伊福・南方（済生会）遺跡（上伊福立花調査区）』岡山県埋蔵文化財調査の概要』1994年度
f 岡山市教育委員会 1997 『上伊福・南方（済生会）遺跡（南方蓮田調査区）』・『南方（中電）遺跡』岡山県埋蔵文化財調査の概要』1995年度
- (8) 註7 d
- (9) a 岡山県教育委員会 1984 『上伊福（ノートルダム清心女子大学構内）遺跡』岡山県埋蔵文化財報告』14
b 中野雅美・根木 修 1986 『上伊福九坪遺跡』岡山県史 考古資料』
c 杉山一雄 1998 『伊福定国前遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告125
- (10) 吉留秀敏・山本悦世 1988 『鹿田遺跡』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第3冊
小林青樹 2000 『鹿田遺跡第9次調査』岡山大学構内遺跡調査研究年報』16 1998年度
喜田 敏・岩崎志保 2000 『鹿田遺跡第9次調査追加分』岡山大学構内遺跡調査研究年報17』1999年度
- (11) 出宮徳尚 1986 『天瀬遺跡』岡山県史 考古資料』
- (12) 近藤義郎 1986 『都月坂二号弥生墳丘墓』岡山県史 考古資料』
- (13) 近藤義郎 1986 『都月坂一号墳』同上
- (14) 七つ塚古墳群発掘調査団 1987 『七つ塚古墳群』
- (15) 近藤義郎 1986 『一本松古墳』岡山県史 考古資料』
- (16) 近藤義郎 1988 『岡山市津島の俗称『おつか』と称する前方後円墳についての調査の概要報告』『古代吉備』10集

遺跡の位置と環境

- (17) 鎌木義昌 1986 「神宮寺山古墳」『岡山県史 考古資料』
- (18) 宇垣匡雅 1994 『百間川原尾島遺跡3』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告88
平井 勝 1995 『百間川原尾島遺跡4』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告97
- (19) 宇垣匡雅 1999 『原尾島遺跡(藤原光町3丁目地区)』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告139
- (20) 日本考古学協会静岡大会実行委員会 1988 「中溝遺跡」『日本における稲作農耕の起源と展開 資料集』
- (21) 日本考古学協会静岡大会実行委員会 1988 「南方釜田遺跡」『日本における稲作農耕の起源と展開 資料集』
- (22) 高畑知功 1988 「津島江道遺跡」『岡山県埋蔵文化財報告18』
- (23) 草原孝典 2004 『八ガ遺跡』
- (24) 註19及び岡山県教育委員会 1981 『百間川長谷遺跡 当麻遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告46
井上 弘ほか 1982 『百間川当麻遺跡2』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告52
岡本寛久 1989 『百間川米田遺跡3』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告74
- (25) 註11及び山本悦世 1990 『鹿田遺跡』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第4冊
松木武彦 1993 『鹿田遺跡3』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第6冊
- (26) 草原孝典 2002 『新道遺跡』
- (27) 出宮徳尚 1985 「岡山県二日市遺跡」『日本考古学年報』35
- (28) 正岡睦夫ほか 1984 『百間川原尾島遺跡2』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告56
柳瀬昭彦 1996 『百間川原尾島遺跡5』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告106
- (29) 山本悦世 2004 「縄文時代後期の集落構造とその推移」『岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要2004』
- (30) 津島岡大遺跡文献一覧v、「第5章 自然科学的分析」
- (31) 野崎貴博 2003 「岡山平野における弥生時代前期～中期の洪水と集落の動態」『津島岡大遺跡12』
- (32) 川鉄テクノリサーチ 2004 「津島岡大遺跡(第10次・第19次調査)出土鉄滓類の分析」『岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要2004』

表1 津島岡大遺跡文献一覧

	調査次	文献 *ただし【 】付きのものは概報	発行年
a	1	岡山大学津島北地区小橋法目黒遺跡(AW14区)の発掘調査(岡山大学構内遺跡発掘調査報告第1集)	1985
b	2	岡山大学津島地区遺跡群の調査(農学部BH13区他)	1986
c	3	津島岡大遺跡3(岡山大学構内遺跡発掘調査報告第5冊)	1992
d	4	岡山大学構内遺跡調査研究年報4	1987
e	5	津島岡大遺跡4(岡山大学構内遺跡発掘調査報告第7冊)	1994
f	6・7	津島岡大遺跡6(岡山大学構内遺跡発掘調査報告第9冊)	1995
g	8	津島岡大遺跡5(岡山大学構内遺跡発掘調査報告第8冊)	1995
h	9	津島岡大遺跡10(岡山大学構内遺跡発掘調査報告第14冊)	1998
i	10・12	津島岡大遺跡11(岡山大学構内遺跡発掘調査報告第16冊)	2003
j	11	津島岡大遺跡7(岡山大学構内遺跡発掘調査報告第10冊)	1995
k	13	津島岡大遺跡8(岡山大学構内遺跡発掘調査報告第12冊)	1997
l	14	津島岡大遺跡9(岡山大学構内遺跡発掘調査報告第13冊)	1996
m	15	津島岡大遺跡14(岡山大学構内遺跡発掘調査報告第19冊)	2004
n	16	岡山大学構内遺跡調査研究年報14	1997
o	17	本書【岡山大学構内遺跡調査研究年報14】	1997
p	18	岡山大学構内遺跡調査研究年報16	2000
q	19・21	津島岡大遺跡12(岡山大学構内遺跡発掘調査報告第17冊)	2003
r	20	岡山大学構内遺跡調査研究年報16	2000
s	22	本書【岡山大学構内遺跡調査研究年報16・17】	2000
t	23・24・25	【岡山大学構内遺跡調査研究年報17・18】	2000・2001
u	26	津島岡大遺跡15(岡山大学構内遺跡発掘調査報告第20冊)	2005
v	27	津島岡大遺跡13(岡山大学構内遺跡発掘調査報告第18冊)	2003
w	28	【紀要2002】	2004
x	29	紀要2002	2004

第2章 調査経過と概要

第1節 第17次調査の概要

1. 調査に至る経緯

岡山大学では1995年度に環境理工学部が新設された。これにともない、早急に校舎を建設する必要が生じたため、津島北地区北東に位置する馬術場を新営予定地とすることになった。この環境理工学部校舎新営予定地となった馬術場周辺は、これまでに第3・6・9・15次調査を行っており、津島岡大遺跡の中でも遺跡の状況が比較的明らかにされてきている地点である。その成果を鑑みれば、この地点において縄文時代以降、各時期の遺構・遺物が良好な状態で検出されることが予想された。しかし、掘削深度や遺構密度などの点では不確定な要素を残していることから、1995年11月に試掘調査を実施した。2ヶ所の試掘坑を設定した試掘調査の結果、新営予定地内にも埋蔵文化財が包蔵されていることが明らかとなり、土層の堆積状況や発掘調査を要する掘削深度を確認した。この試掘調査の成果をうけ、1996年度に発掘調査を実施することとなった。発掘調査期間は1996年5月21日～1997年1月9日、調査面積は1,451㎡で、調査員3名がこれにあたった。

2. 調査体制

調査主体	岡山大学	学 長	小坂二度見
調査担当	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター	センター長	稲田 孝司
調査研究員	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター	助 手	横田 美香（主任）
"	"	助 手	小林 青樹
"	"	助 手	野崎 貴博

管理委員会

【委員】

学 長	小坂二度見	文化科学研究科長	岩間 一雄
文学部長	成田 常雄	自然科学研究科長	岩見 基弘
教育学部長	松畑 熙一	資源生物科学研究所長	青山 勲
法学部長	植松 秀雄	附属図書館長	神立 春樹
経済学部長	坂本 忠次	医学部附属病院長	大森 弘之
理学部長	佐藤 公行	歯学部附属病院長	村山 洋二
医学部長	産賀 敏彦	固体地球研究センター長	久城 育夫
歯学部長	松村 智弘	医療技術短期大学部長	遠藤 浩
薬学部長	篠田 純男	学生部長	伊澤 秀而
工学部長	中島 利勝	事務局長	新井 輝隆
農学部長	内田 仙二	埋蔵文化財調査研究センター長	稲田 孝司
環境理工学部長	河野伊一郎		

【幹事】

庶務部長	厚谷 彰雄	経理部長	黄揚川英了
施設部長	井内 敏雄		

運営委員会

【委員】

センター長	稲田 孝司	医学部教授	村上 宅郎
文学部教授	狩野 久	農学部教授（調査研究専門委員）	千葉 喬三
理学部教授	柴田 次夫	施設部長	井内 敏雄
経済学部教授	建部 和弘	埋蔵文化財調査研究センター調査研究室長	新納 泉

3. 調査の経過

発掘調査を開始するにあたり、1996年5月13日から約1.2mの厚さで堆積している近代以降の造成土の掘削を機械によって行った。明治層以下については人力による掘削とし、発掘調査は造成土の除去がほぼ終了した5月21日から開始することになった。ただし、この時点では発掘調査対象範囲内のうち北側1/3については馬場としての使用が継続されていたため、その範囲を残した状態で、調査区の南側から発掘調査を進めることとなった。

南側の調査区では、試掘調査のデータを踏まえながら、近世・近代～古代層までのそれぞれの面で耕作関連遺構の調査を行った。造成土直下において確認した2層（明治）上面では南北方向に延びる多数の畝を検出した。その際、明治層上面の調査と併行して近代以降の攪乱の除去も行っている。なお、2層以下の3～13層上面までの堆積層のうち、土層断面の観察において、遺構が確認されず、砂質を強く帯びていた土層については洪水砂層と判断し、遺構検出は5（近世）・6（中世）・8b（古代）・10（古墳後期）・13（弥生前期）層上面で行うこととし、水田畦畔検出のために、水田面と判断される面から数cm上部でとどめ、以下を精査することで畦畔の検出に努めた。5層（近世）上面では南北方向の鋤溝と、柵列と考えられるピット列を検出した。6層（中世）上面では南北方向の浅い溝、多数の鋤溝を検出した。8b層（古代）上面ではほぼ正方位の畦畔を確認した。

当初、北側に残っていた北側の範囲についても、8b層上面の遺構検出を行っていた7月24日から機械による近代以降の造成土の除去を行い、30日から発掘調査を開始した。また、調査開始後の6月に、校舎建物の東側を拡張し、西に共同溝を設置するように変更が加えられていたが、この東側拡張部についても7月26日から土取りを開始し、30日から発掘調査を実施した。これら北側・東側の調査区のうち、東側拡張区については面積も小さく、隣接する先行調査において8b層までは遺構が非常に希薄であったため、8a層上面までを機械で掘削することとした。また、これらの調査区ではそれぞれの進行状況を勘案し、13層上面で全体の進行を合わせることとした。13層は黒褐色の色調を呈し、土層の境界を認識しやすいことと、上面で弥生時代前期の水田畦畔を確認できる可能性があり、全面で遺構検出をする必要があると判断したためである。

8月からは10層（古墳後期）上面で遺構検出を行った。一部で溝群を確認することができたが、埋土の土色や土質が周囲の包含層と近似しており、その多くについて遺構としての認定が困難であったため、下層の13層（弥生前期）上面まで掘削して遺構を確認することとした。13層上面では北西 南東方向の平行する溝群、北東 南西方向、東西方向の溝群、柱穴列、水田畦畔を検出した。この間に、北側調査区と東側拡張区では近世～古代の堆積層の調査を進めた結果、本体部分全体の調査は、13層上面の調査を終える9月中旬の段階でほぼ揃うこととなった。

ところで、13層上面までの調査を行った9月中旬までに、調査区の周囲や横断面、縦断面の土層観察用の側溝は、縄文時代後期層である14層まで掘削が達していた。その掘削の過程で大形の縄文土器片を含む後期の遺物が集中して検出されることが調査区の北半を中心に増加し、また、断面の精査が進行するに伴って、遺構とみられる落ち込みを多数確認することとなった。このような状況から縄文時代後期の遺構・遺物が予想以上に良好に遺存していることが明らかとなった。

9月下旬からは13層の掘削を開始したが、特に北側調査区に堆積した13層中には縄文時代後期の遺物が大量に

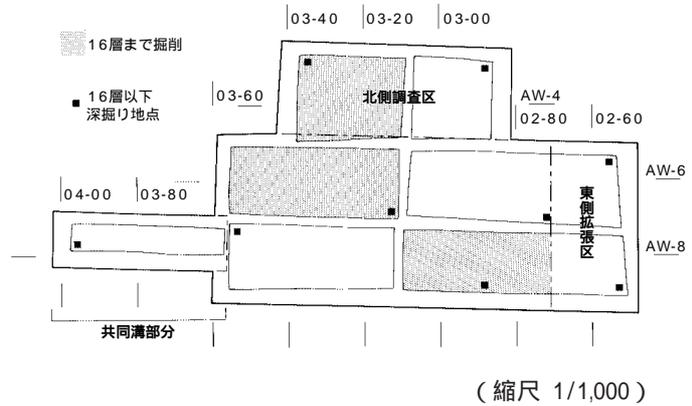
包含されていた。一方、調査区の南半から東半にかけての黒色土には縄文後期の遺物はほとんど含まれていない上、上面では畦畔が検出されており、従来から弥生時代早期～前期の土層であるとの認識にある「黒色土」と同様の状況を示していた。そのため、調査区の北側と南側の黒色土は同一の時期に形成された土層ではなく、北側の土層は縄文時代後期に属するとの見方を強めることとなった。

13層の掘削が終了した範囲から、14層上面での遺構検出を順次行い、10月上旬には住居址状遺構や、数基の大型土坑、北東から南西方向の溝、さらに炉跡をともなう住居址を検出し、そのほか調査区のほぼ全域で多数のピットや土坑を確認した。これらの遺構の中には複雑に切り合っている部分が多く認められたことから、平面形の確定が大変困難であった。そのため、一部の範囲においては下層での検出によって、より正確な遺構の確定を求めたこととした。14層以下の調査面については、14層と土質的にはほとんど差がなかった15層上面において土坑を確認していたため、11月中旬からは14層の掘削と同層上面での調査に入り、上面において14層から残された遺構を含む、多数の土坑やピット、焼土遺構を検出した。同層上面での調査が終了した12月中旬からは、遺構密度が比較的高く基盤層(16層)に汚れが依然として残る地区に関してさらに掘り下げ、16層上面での最終的な確認によって、数基の土坑を検出し調査を行った。

共同溝部分については、11月25日から調査を開始した。開始にあたっては、東側拡張部と同様の判断から、13層からの調査を行い、12月上旬に終了した。

最後に、調査区全体に約2m四方のトレンチを9ヶ所に入れて、基盤層下部の状況を確認し、発掘調査を終了した。また、「黒色土」(13層)の性格を考える上で、花粉および植物珪酸体の包含状況を探るために土壌のサンプリングを行い、全ての作業を終了した。

なお、1996年11月16日に現地説明会を行い、200名を超える参加者があった。



現地説明会



縄文土器検出作業

図3 調査区と調査風景(第17次調査)

第2節 第22次調査の経過

1. 調査に至る経緯

環境理工学部棟の新営工事は1997年度に 期工事分が着工され、竣工間近になった1998年度に 期工事の計画が具体化した。新営予定地は 期工事の北側隣接地である。 期工事に際して実施した第17次調査の成果では縄文時代後期の遺構・遺物が密度高く遺存していたことがわかっており、同様の状況が北側にも広がるものと考えられた。また第6・9次調査の成果から、今回の調査地点内に縄文後期の河道の存在が予測された。そのため1998年6月に試掘調査を実施して調査深度等の把握に努めた。その結果調査区の北側には河道が位置する可能性が高く、南側は微高地部分にあたるものと予測された。また東西方向の古代溝の存在も確実視された。

これらの認識に基づき、1999年3月1日から6ヶ月間の予定で発掘調査を実施することとなった。発掘調査面積は773.5㎡で、2～4月は調査員1名、5～7月は調査員4名が担当した。

2. 調査体制

調査主体	岡山大学	学 長	小坂二度見	1999年6月13日まで
	"	"	河野伊一郎	1999年6月14日より
調査担当	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター	センター長	稲田 孝司	
調査研究員	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター	助 手	岩崎 志保 (主任)	1999年5月より
	"	助 手	野崎 貴博	1999年4月まで
	"	助 手	山本 悦世	1999年6月1日より助教 1999年5月より
	"	助 手	横田 美香	1999年5月より
	"	助 手	喜田 敏	1999年5月より
	"	技術補佐員	福井 優	1999年5月より

管理委員会

【委員】

学 長	小坂二度見	1999年6月13日まで	医 学 部 長	産賀 敏彦	1998年度
"	河野伊一郎	1999年6月14日より	"	難波 正義	1999年度
副 学 長	松畑 熙一	1999年6月13日まで	歯 学 部 長	松村 智弘	
"	佐藤 公行	1999年6月14日より	薬 学 部 長	篠田 純男	1998年度
文学部長	成田 常雄	1998年度	"	原山 尚	1999年度
"	稲田 孝司	1999年度	工 学 部 長	中島 利勝	1998年度
教育学部長	松畑 熙一	1998年度	"	大崎 紘一	1999年度
"	森川 直	1999年度	環境理工学部長	河野伊一郎	1998年度
法学部長	植松 秀雄	1998年度	"	阪田 憲次	1999年度
"	石島 弘	1999年度	農 学 部 長	内田 仙二	1998年度
経済学部長	坂本 忠次	1998年度	"	稲葉 昭次	1999年度
"	建部 和弘	1999年度	文化科学研究科長	岩間 一雄	1998年度
理学部長	佐藤 公行	1998年度	"	工藤進思郎	1999年度
"	山寄比登志	1999年度	自然科学研究科長	岩見 基弘	1998年度

自然科学研究科長	中島 利勝	1999年度	歯学部附属病院長	佐藤 隆志	1999年度
資源生物研究科学研究所長	青山 勲	1998年度	固体地球研究センター長	久城 育夫	1998年度
〃	本吉 総男	1999年度	〃	河野 長	1999年度
附属図書館長	神立 春樹	1998年度	医療技術短期大学部長	遠藤 浩	1998年度
〃	岩見 基弘	1999年度	〃	太田 武夫	1999年度
医学部附属病院長	大森 弘之	1998年度	学生部長	松畑 熙一	1998年度
〃	荒田 次郎	1999年度	事務局長	諸橋 輝雄	
歯学部附属病院長	村山 洋二	1998年度	埋蔵文化財調査研究センター長	稲田 孝司	

【幹事】

事務局庶務部長	厚谷 彰雄	1998年度	事務局経理部長	菊地 俊彦	1999年度
事務局総務部長	山崎 洋輔	1999年度	事務局施設部長	遠藤 久男	
事務局経理部長	黄揚川秀了	1998年度			

運営委員会

【委員】

埋蔵文化財調査研究センター長	稲田 孝司		医学部教授	村上 宅郎	
文学部教授	狩野 久	1998年度	農学部教授(調査研究専門委員)	千葉 喬三	
〃	倉地 克直	1999年度	環境理工学部教授	名合 宏之	1999年度
理学部教授	柴田 次夫		施設部長	遠藤 久男	
経済学部教授	建部 和弘	1998年度	埋蔵文化財調査研究センター調査研究室長	新納 泉	

3. 調査の経過

1999年2月19日より造成土除去作業を開始した。隣接地点(津島岡大遺跡第9・17次調査)の調査で状況が判明していることから、造成土及び近代層については重機で掘削した。

発掘調査は同年3月1日より近世層(3～5層)の調査から開始した。3月24日までに3層上面遺構の調査を終え、3月末までに5層上面遺構の調査を終了した。

年度が変わり、4月2日からは中世の調査へと進んだ。中世の遺構(畦畔・溝・耕作痕)の調査を5月上旬までに終了し、5月半ばから調査体制を増強して、古代の調査に入った。古代では東西方向の大溝と水田畦畔を確認した。古代の調査は6月2日に終了し、古代層を除去した後、10層では古墳時代の溝・畦畔を確認した。ついで11層で古墳時代の溝、12層で弥生時代の畦畔を検出した。調査区の北側では弥生時代前期以降、谷部を埋めていく土層が堆積しており、これを順に除去していった。

一方調査区の南側では6月下旬から黒色土(13層)上面の調査に入った。調査区南側は、第17次調査地点と接しており、第17次調査では縄文時代後期の遺物を大量に包含した13



谷部調査風景(北より)



小学生の見学風景

図4 調査風景(第22次調査)

層の堆積が確認されていたことから、本調査においても、13層の時期・内容の把握に特に注意して、調査を進めていった。その結果、第17次調査地点で認められたような遺物を多量に包含する状況は認められず、通常のいわゆる「黒色土」層と同様の堆積状況であり、その時期は弥生時代早期～前期であると判断された。そのため第17次調査地点の13層については再考する必要があると言える。

6月下旬からは13層と谷部の最下層を埋める土層の除去に入り、16層上面で土坑・ピットを検出した。遺構の調査終了後、基盤層を確認するために調査区の西壁沿いにトレンチを設定し掘り下げた。その結果16層以下が無遺物層であり、16層を基盤層であると判断した。また17層以下の土層堆積状況の確認も併せて行った。7月6日に写真撮影を終え、7月12日に調査を終了した。調査終了後、7月16日に各時期の土層について分析試料のサンプリング採取を行った。

第3節 報告書作成にあたって

第17次調査と第22次調査の発掘調査報告書の作成にあたっては、当初、発掘を実施した年度が異なっていることから、隣接地点ではあるものの個々の地点毎に個別に報告することとして整理作業を開始した。しかし、その後、報告書刊行が近接した時期となることとなり、工事主体は同一事業でもあることを鑑みて、微高地部分が大半である第17次調査地点と、谷部にかかる第22次調査地点とを併せて記述することにより、本調査地点の様相をより理解しやすいものと考え、2地点をまとめて報告することとした。

本書の記載の中では、土層番号・遺構番号は統一して付している。遺構・遺物の検出地点についてはそれぞれの調査次を明記し、図面・観察表中でも読み取れるようにしている。

第4節 調査の概要

縄文時代(図5)

調査区のほぼ中央に微高地がひろがり、第17次調査地点の5・6区(AW-3～5ライン間)が最も地形的に高い。この地点を頂部として周縁は北側及び南側に向けて緩やかに傾斜している。

縄文時代の遺構は14層・15層・16層上面で検出したものである。大半が第17次調査地点にあたる微高地では、竪穴住居状遺構2棟、土坑・ピット805基、溝2条、焼土遺構8カ所を検出している。

第22次調査地点にあたる調査区の北側は谷状地形へと続く傾斜面をなしていたものと考えられるが、弥生時代以降の河道等によって大きく削平されているため、詳細は不明である。しかし周辺の調査成果等から考えると、本調査地点よりもさらに北側に縄文時代の河道が存在する可能性は高い。

弥生時代～古墳時代(図5)

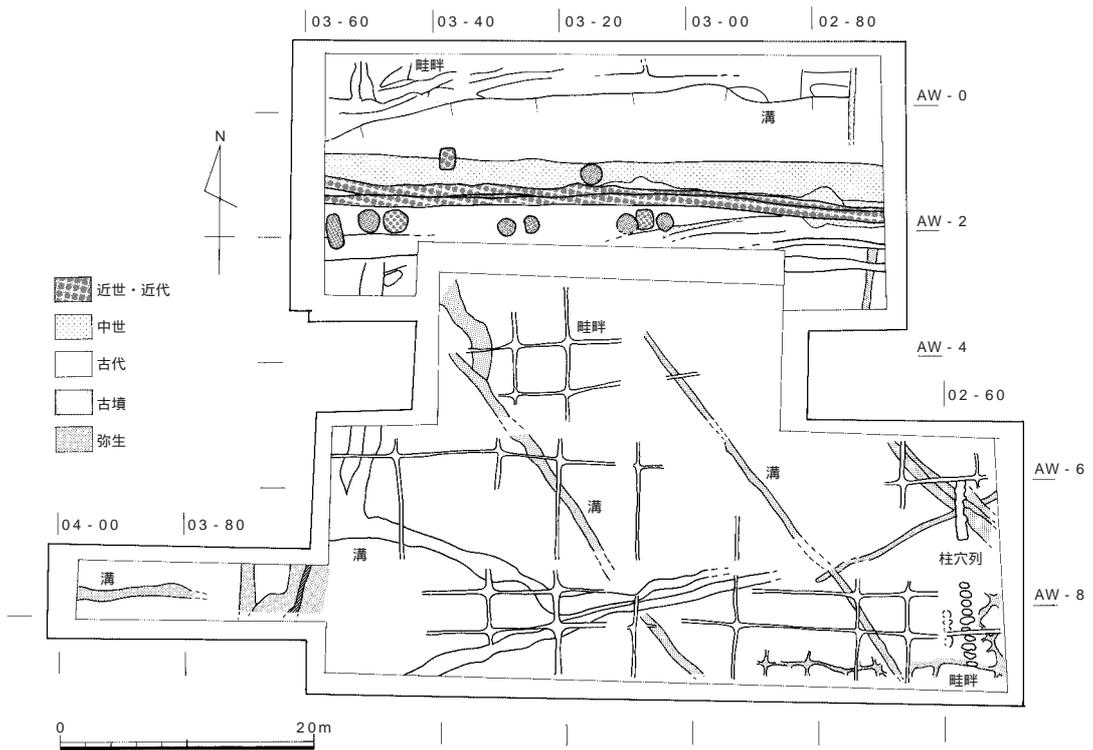
弥生時代の遺構は、主に12層・13層の上面で検出したものである。第17次調査地点の北半から第22次調査地点の南側にあたる微高地では、弥生時代前期の畦畔2面・溝2条、前期～後期と考えられる溝10条、後期の溝1条を検出している。調査区の南半を除いては13層の直上には古墳時代層が堆積しており、このことから13層上面は削平を受けていることがわかる。

一方、第22次調査地点の北側を占める谷部は、前期から徐々に堆積が進み、前期末に小規模な河道が出現する。中期前半には河道に沿う形で溝が掘削され、水路として利用されたことがうかがえる。その後中期末までにさらに堆積が進み、後期には谷地形は解消している。

古墳時代の遺構は調査区南半(第17次調査地点)では弥生時代遺構と同様、13層上面で検出した。溝2条と柱穴列がある。北側(第22次調査地点)では10b層・11層で、溝3条、畦畔を検出している。



縄文時代遺構平面図



弥生時代～近代遺構平面図

図5 検出遺構全体図(縮尺 1/600)

古代(図5)

古代の遺構は8層・9層の上面で検出した畦畔2面、溝3条である。畦畔は8b層・9b層で確認した。そのうち8b層上面の畦畔は比較的残りが良く、第17次調査地点のほぼ全域で検出した。第22次調査地点では弥生時代前期の谷部上に東西方向の大溝を検出している。この溝は他調査地点でも確認されている条里に關係する溝である。本溝からは多量の土器・石器・木製品が出土している。

中世～近世(図5)

古代以降、調査区の北側に主要な用水路となる溝が東西方向に走行し、その南北に耕作地がひろがるといった土地利用形態が各時期において確認されている。溝の位置は大まかにはほぼ同様の地点を走行しているが、溝の形態・規格は、中世から近世の間に変容していることが窺え、中世後半に大規模な区画整理が行われているという、他調査地点の成果とも合致する。

中世では古代の大溝に重複する形で溝2条・水口2カ所、耕作痕を検出している。近世では溝1条・土坑10基・柱穴列と耕作痕を検出している。近代では、ほぼ近世に踏襲する形で、溝1条を検出した。

表2 検出遺構一覧

a. 竪穴住居状遺構

番号	時期	平面形	規模(cm)	深さ(cm)	床面高(m)	柱穴	炉	検出高(m)
1	縄文後期	楕円	630×450	40	2.55～2.6	4本?	有(1ヶ所)	2.85～3.0
2	縄文後期	円	300×300	15	2.55	4本	無	2.7

b. 土坑

番号	時期	平面形	長辺(cm)	短辺(cm)	深さ(cm)	底面高(m)	断面形	検出高(m)
1	縄文時代後期	隅丸長方形	600	350	20	2.6	皿形	2.9
2	縄文時代後期	隅丸長方形	100	250	18	2.7	皿形	2.98
3	縄文時代中期末	楕円	360	(188)	60	1.8	皿形	2.4
4	縄文時代中期末	楕円	230	(200)	50	2.35	皿形	2.65
5	縄文時代後期	楕円	270	220	65	2.05	U字形	2.7
6	縄文時代後期	不整楕円	430	240	60	2.24	U字形	2.84
7	縄文時代後期	不整楕円	160	150	60	2.25	U字形	2.9
8	縄文時代後期	楕円	200	180	30	2.57	U字形	2.86
9	縄文時代後期	楕円	260	230	50	2.13	U字形	2.64
10	縄文時代後期	円	138	79	35	2.3	U字形	2.69
11	縄文時代後期	円	95	95	15	2.75	皿形	2.9
12	縄文時代後期	円	80	80	10	2.5	皿形	2.66
191	弥生時代早期	長楕円	215	(205)	45	1.77	逆台形	2.2
192	近世	円	163	155	83	2.68	逆台形	3.55
193	近世	円	135	120	78	2.92	逆台形	3.75
194	近世	隅丸方形	192	158	40	3.0	逆台形	3.4
195	近世	円	170	(140)	80	2.95	逆台形	3.7
196	近世	円	126	113	15	2.85	U字形	3.0
197	近世	円	135	135	82	2.9	逆台形	3.7
198	近世	長方形	165	117	30	3.05	逆台形	3.35
199	近世	円	195	190	80	2.85	逆台形	3.55
200	近世	円	180	165	80	2.7	逆台形	3.5
201	近世	隅丸長方形	226	95	50	2.65	逆台形	3.3

c . 溝

番 号	時 期	幅(cm)	深さ(cm)	底面高(m)	断面形	検出高(m)
1	縄文後期	40 ~ 100	18 ~ 26	2.92 ~ 2.52	U字形	2.75 ~ 3.03
2	縄文後期	110 ~ 540	30	2.45 ~ 2.25	皿形	2.58 ~ 2.68
3	弥生時代前期	30 ~ 50	10	2.7 ~ 3.05	逆台形 ~ 皿形	3.0 ~ 3.15
4	弥生時代前期	50 ~ 65	40	2.55 ~ 2.7	逆台形	3.0 ~ 3.12
5	弥生時代前 ~ 後期	(200)	35	2.7	皿形	3.05
6	弥生時代前 ~ 後期	(60)	25	2.8	U字形	3.05
7	弥生時代前 ~ 後期	70 ~ 140	35	2.7	U形	3.05
8	弥生時代前 ~ 後期	110	35	2.7	皿形	3.05
9	弥生時代前 ~ 後期	80	30	2.75	皿形	3.05
10	弥生時代前 ~ 後期	40 ~ 120	17 ~ 23	2.97 ~ 3.0	皿形	3.18 ~ 3.2
11	弥生時代前 ~ 後期	60	10	3.1	皿形	3.18
12	弥生時代前 ~ 後期	60	10	3.06 ~ 3.12	丸底	3.12 ~ 3.17
13	弥生時代前 ~ 後期	60	7 ~ 15	2.98 ~ 3.04	丸底	3.04 ~ 3.08
14	弥生時代前 ~ 後期	120 ~ 160	18	2.82 ~ 2.91	丸底	2.9 ~ 2.96
15	弥生時代中期	230	55	1.68 ~ 2.36	皿形 ~ 逆台形	2.2 ~ 2.5
16	古墳時代前期	60 ~ 200	10 ~ 25	2.8 ~ 3.07	U字形	2.9 ~ 3.1
17	古墳時代後期	90 ~ 110	10	3.0	U字形	3.1
18	古墳時代後期	200	40	2.8 ~ 2.9	U字形 ~ 皿形	3.1 ~ 3.3
19	古墳時代後期	(650)	10	2.8	皿形	2.9
20	古墳時代後期	280 ~ 350	15	2.75 ~ 2.8	皿形	2.9
21	古代	700 ~ 1020	50	2.5	U字形	3.2 ~ 3.4
22	古代	(350)	(50)	2.8 ~ 2.9	U字形	3.1 ~ 3.2
23	古代	30 ~ 420	9 ~ 19	2.8 ~ 3.1	皿形	3.2
24	中世	280 ~ 400	45	2.9 ~ 3.05	U字形	3.2 ~ 3.4
25	中世	80 ~ 100	35 ~ 40	3.1	逆台形	3.4 ~ 3.5
26	近世	(60)	30	3.35	逆台形	3.4
27	近代	70 ~ 100	20 ~ 30	3.4	逆台形	3.75 ~ 3.8

d . 焼土遺構

番 号	時 期	比熱範囲・焼土分布範囲(cm)	焼土厚(cm)	備 考	検出高(m)
1	縄文後期	95 × 75	15	浅い皿状	2.5
2	縄文後期	20 × 30	5		2.7
3	縄文後期	80 × 80	7		2.55
4	縄文後期	40 × 50	2		2.6
5	縄文後期	50 × 80	18		2.6
6	縄文後期	20 × 20	15		2.7
7	縄文後期	20 × 30	5		2.65
8	縄文後期	20 × 20	5		2.65

第3章 調査の記録

第1節 調査地点の位置と区割り

1. 調査地点の位置

本調査地点は、津島岡大遺跡の北東部に位置する（図6）。津島地区構内に設定した構内座標ではAV・AW02～AW04区にあたる。東側に大学院ベンチャー・ビジネス・ラボラトリー、南側に教育学部、西側に工学部の敷地が広がり、北側は現在馬場として利用されている。周辺ではこれまでに第3・6・7・9・15次調査が実施され、特に東側の第3・15次調査地点及び西側の第6・9次調査地点では縄文時代後期の貯蔵穴群を中心とした集落縁辺の状況や、古代の条里に関わる溝等を確認している。こういったことから調査前には、縄文時代及び古代を中心とした遺構・遺物の存在が予測された。調査終了後には、特に第17次調査地点を中心に縄文時代後期の集落が質量ともに際だって展開していたことを受け、1999年9月に津島地区東北隅地域の約17,000㎡の範囲について、遺跡保護区を設けることが決定した。

2. 調査地点の区割り

調査にあたっては、50m区画の構内座標内をさらに5mの小区画に細分した区割り（図7）を使用している。

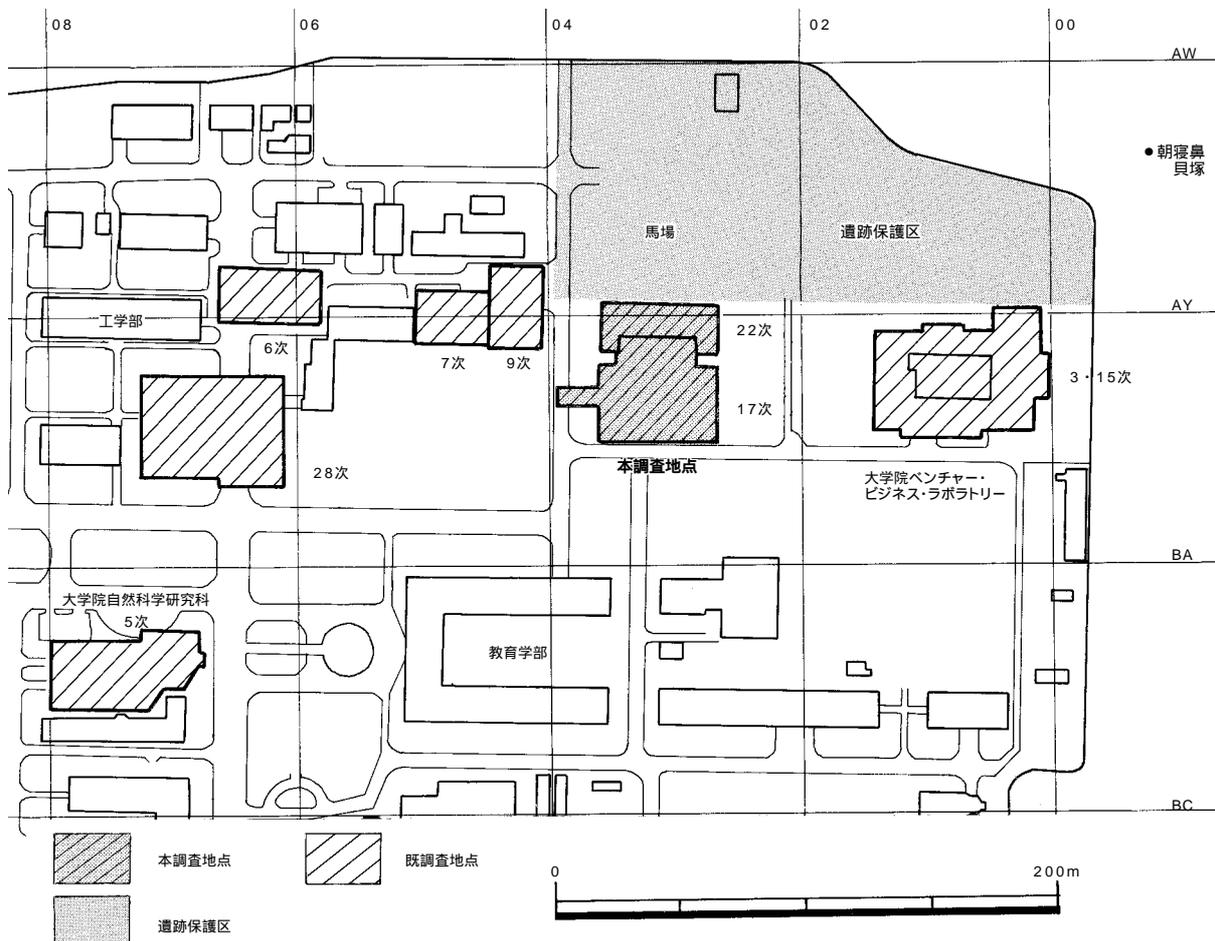


図6 調査地点位置図（縮尺 1/3,000）

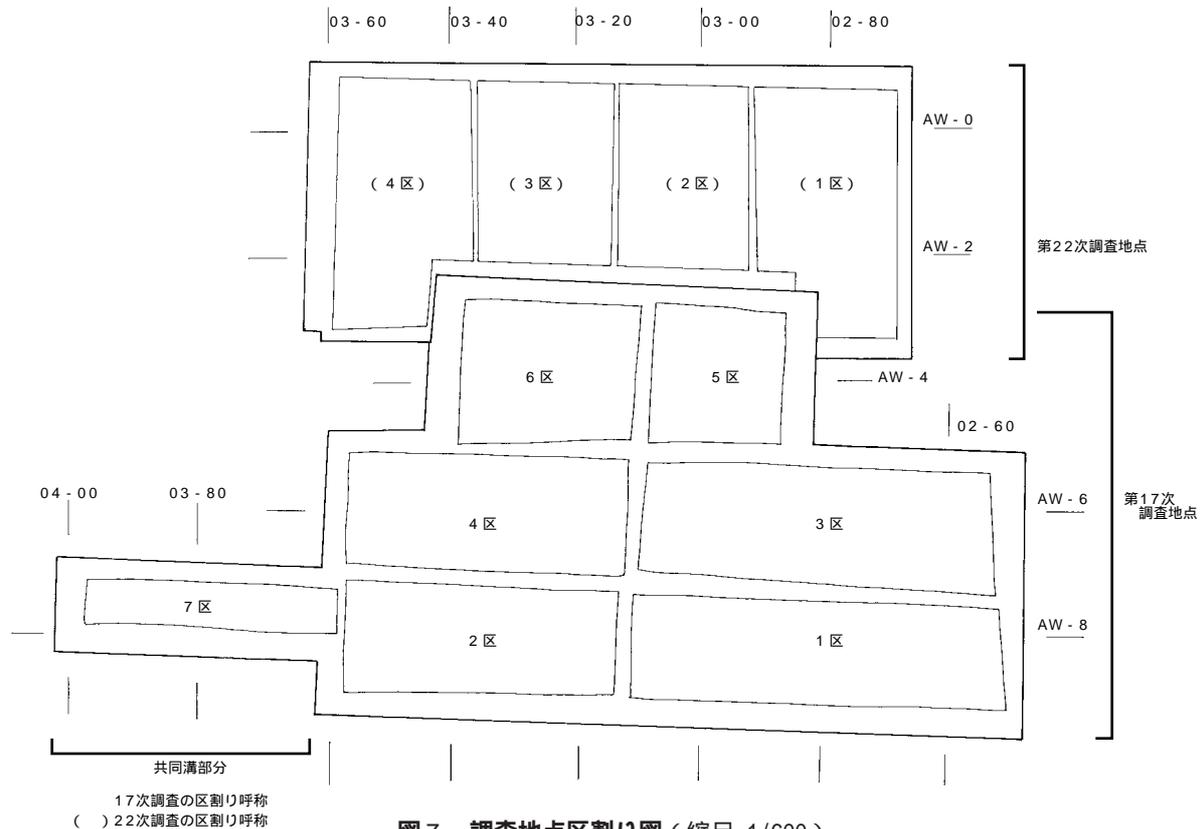


図7 調査地点区割り図 (縮尺 1/600)

例えば東西方向の00線と01線間では00 - 10ラインから00 - 90ライン、南北方向のAV線とAW線との間ではAV - 1ラインからAV - 9ラインを設定することで、それぞれを10分割する。こうして設定した5m四方の小グレースはそれぞれ北東角で交差する2線の名称を組み合わせ、AV00 - 00、AV00 - 10.....と呼称する。この区割りでは、本調査地点は北東角AV02 - 69区から、南西角AW03 - 97区までの範囲にあたる。

調査の際には、調査範囲や効率のよいまとまりを勘案して、便宜的に第17次調査地点においては1～7区、第22次調査地点においては1～4区の計11ブロックにまとめて、遺物の取り上げ等に対応した。その詳細は図7に示した通りである。

第2節 層序と地形

1. 層序

南北方向の土層観察に際しては、調査区の中央を裁ち割る形で、第17次調査地点では1・3・5区と2・4・6区との間、03 - 20ラインの東約2m付近に、また第22次調査地点では2・3区間、03 - 20ラインの東約1mのところに土手を設定した(図8aa'断面)。調査区西壁も併せて掲載している(同bb'・cc'断面)。東西方向の土層については第17次調査地点では調査区の南壁(図9ee'・ff'断面)、第22次調査地点では北壁(同dd'断面)を掲載して、説明を行う。

また調査区の中心が微高地上にあたり、ここから北西方向と、南東方向とに向かって傾斜する地形を示すために土層柱状図を掲載している(図9)。

【表土】 現地表は標高5.1m前後である。1層は1907～1908年にかけて旧陸軍により行われた屯営地建設の際の造成土である。

【近代層】2層は近代の耕作土で淡青灰色～淡緑灰色の砂質土である。第17次調査地点では主に鉄分やマンガンの沈着により近代層を2a～2c層の3枚に細分した。2層上面では近代の畝を確認している。

【近世層】3～5層は近世の耕作土である。淡黄灰色系の砂質土で、上面の標高は3.65～3.9mである。3～5層はほぼ水平堆積であり、鉄分・マンガンの沈着が帯状に認められる。

3層は淡黄灰色砂質土で、上面の標高は3.6～3.85mである。3層上面で土坑・溝・耕作痕を検出した。4層は暗灰褐色砂質土である。上面の標高は3.55～3.8mである。5層は淡黄褐色砂質土である。上面の標高は3.4～3.7mである。5層上面で耕作痕・集石遺構を検出した。

【中世層】6・7層は中世層である。調査区全域にほぼ水平に堆積している。7層は第22次調査地点においては古代の溝の上位にあたる部分で厚く堆積しており、さらに7a・7b層の2枚に細分できるところがある。

6層は淡緑灰色～灰褐色砂質土で、上面の標高は3.35～3.65mである。7層は淡青灰色～灰褐色粘質土が主体で、上面標高は3.4～3.55mである。7a層は灰褐色砂質土であり、洪水砂と考えている。7b層は灰褐色土層で、若干粘性を帯びる。耕作土層と考えられる。

【古代層】8・9層は古代層である。8層は調査区の全体で堆積が認められる。9層は第22次調査地点では全域に広がり、第17次調査地点では、その大半を8層に削平されている。8層上面の標高は3.25～3.5m、9層上面の標高3.15～3.4mである。全体としてほぼ水平の堆積であるが、北に向かうにつれ、徐々に北へ傾斜している。

8・9層はそれぞれ洪水砂と耕作土としてa・bの2層に細分できる。8a層は淡橙褐色砂質土で洪水砂と考えられる。8b層は淡青灰色粘質土で耕作土である。9a層は淡黄褐色砂であるが、その堆積は調査区の北西部に限られる。9b層は暗緑灰色粘質土で、耕作土である。8b・9b層上面でそれぞれ畦畔・溝を検出している。

【古墳時代層】10・11層は古墳時代層である。10層は古墳時代後期層であり、耕作土である。上面の標高は2.9mである。第22次調査地点では10a～10c層に細分することができた。10a層は灰色砂質土層である。10b層を覆う洪水砂と考えている。10b層は明灰褐色～暗灰色を呈する粘質土層である。主に土質から耕作土にあたるものと考えている。南の微高地部分では柱穴列を、また調査区の北側では後世の溝による破壊を免れている僅かな範囲ではあるが、畦畔の一部と溝2条を検出した。10c層は暗灰色砂質土層である。調査区の北側、第22次調査地点全体に堆積する。

11層は古墳時代初頭の土層である。灰褐色を呈する粘質土であり、上面の標高3.15mである。第17次調査地点ではほぼ全域、第22次調査地点では4区の南側の一部でのみ分布を確認した。

【弥生時代層】12～13層は弥生時代の包含層である。12層は黄灰色を呈する土層で、弥生時代前期層と考えている。上面のレベルは標高2.8～3.15mである。第17次調査地点と第22次調査地点4区の南側一部に堆積する。これより以北では古墳時代層により削平されている。微高地部分では砂質が強く、北側に向かうに連れ粘性を増す。第22次調査地点4区では、この層の上面で畦畔を検出した。

13層は黒褐色～暗褐色を呈する粘質土層で、津島岡大遺跡一帯で認められる、いわゆる「黒色土層」にあたる。弥生時代早期～前期の間に形成されたものと考えられる。上面の標高は2.6～3.2mである。第17次調査地点のほぼ全域で堆積が認められるが、第22次調査地点のAW-0ライン以北では、弥生時代前期以降の河道や古代の溝により削平されている。微高地上では薄く、調査区南東側ではやや厚く堆積する。本層上面では溝10条、畦畔を検出した。微高地にあたる第17次調査地点5・6区では上面を削平されていることもあり、畦畔の検出はできなかった。またこの地点の13層からは縄文後期の遺物を大量に検出した。この遺物の包含状況と、後述する14層での遺構検出状況を考え合わせると、本調査地点の13層は何らかの理由により「動かされた」土層であり、その時期は谷部の堆積時期を参考にすると、弥生時代前期末と考えられる。

【縄文時代層】14・15層は縄文時代後期の土層である。いずれも時期は縄文時代後期前葉と考えられる。14層は淡黄褐色砂質土層である。上面の標高は3.0mである。微高地部分を形成する土層であり、第17次調査地点では

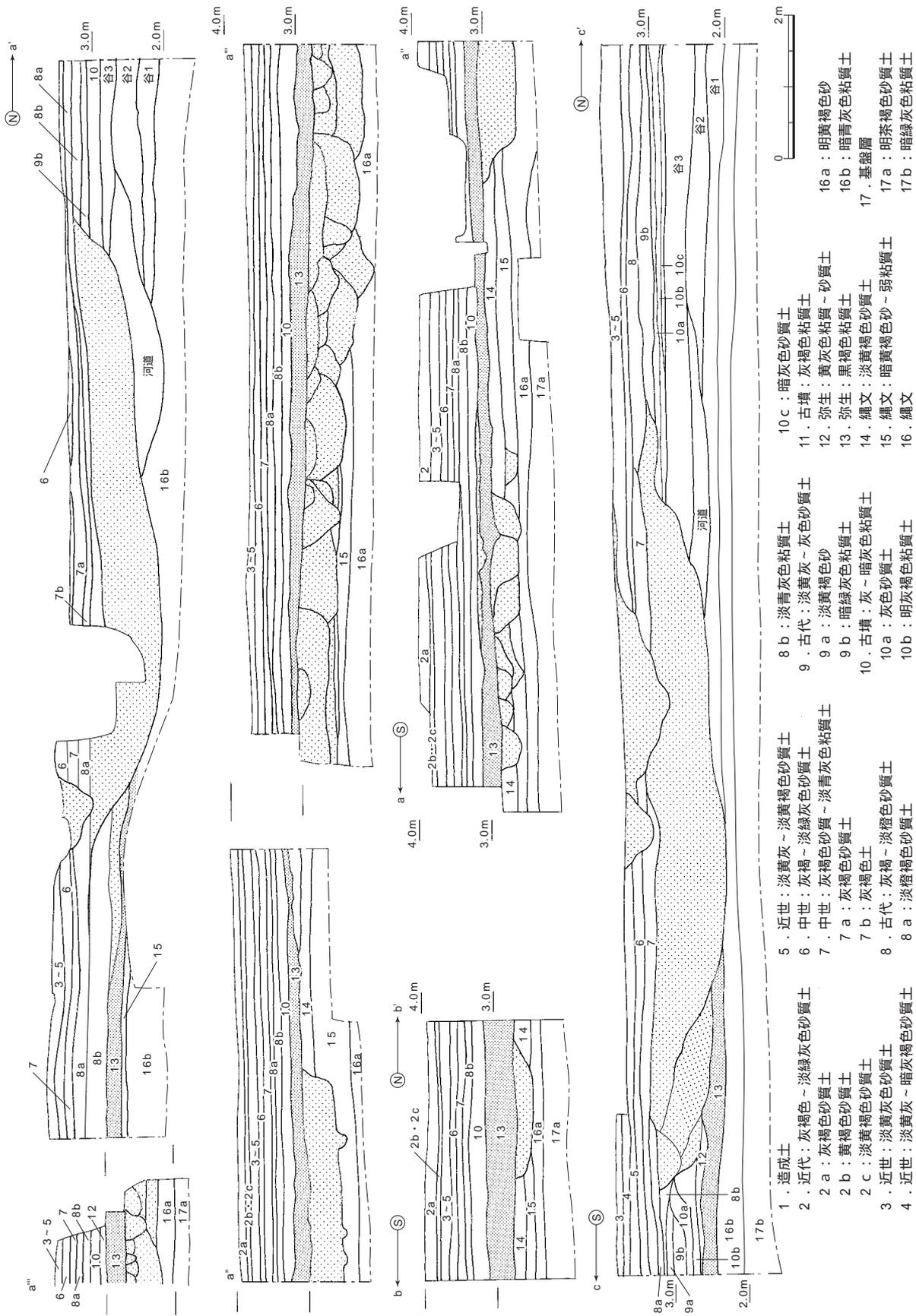
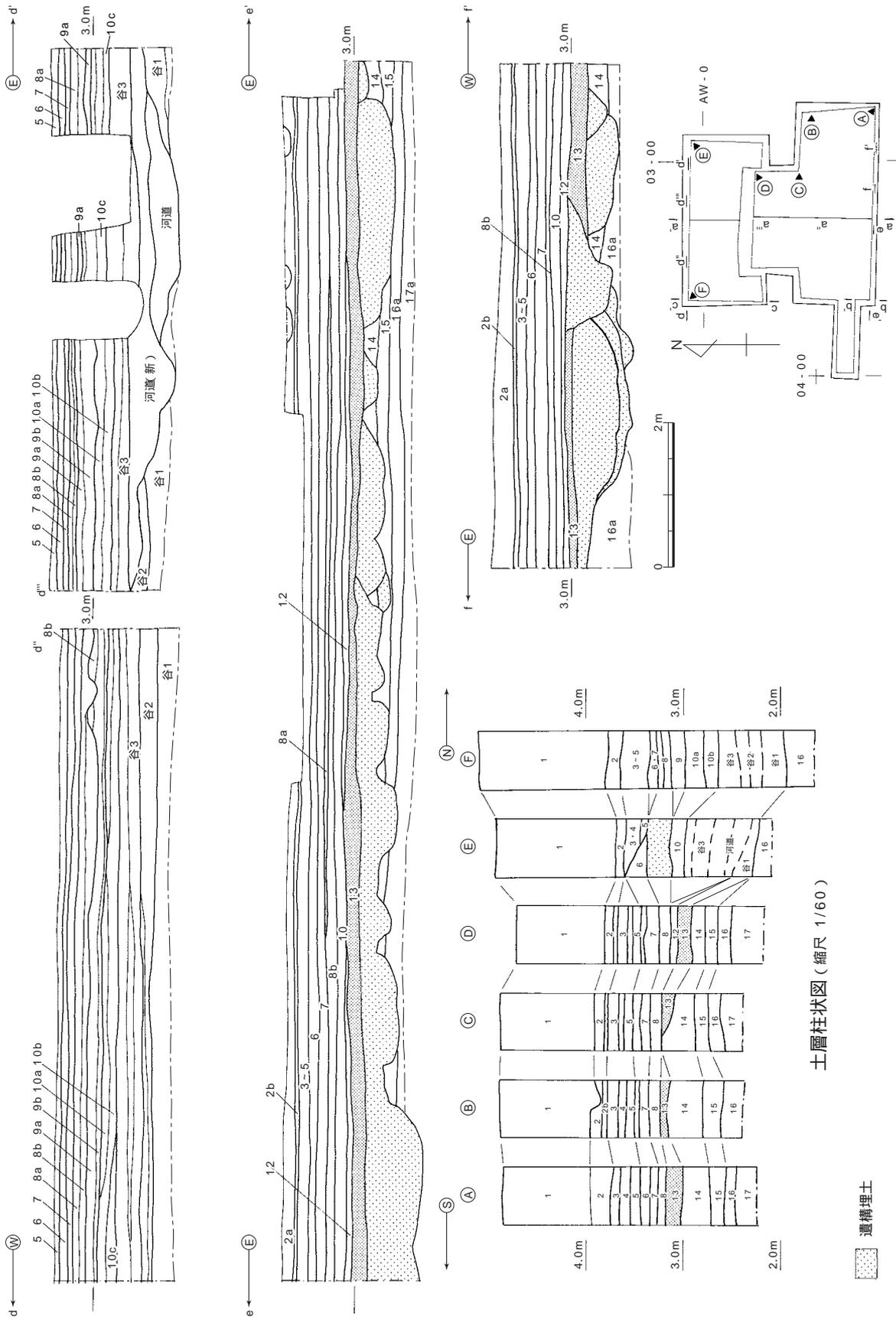


図8 土層断面図1 (縮尺 1/80)



断面位置図 (縮尺 1/1,600)

図9 土層断面図2 (縮尺 1/80・1/60・1/1,600)

土層柱状図 (縮尺 1/60)

層厚15～20cmでほぼ全域で確認されるが、5・6区では多数の遺構の切り合いによって14層はほとんど確認できなかった。また第22次調査地点では本層の堆積は認められなかった。上面で竪穴住居状遺構2基、溝2条のほか、多数の土坑・ピット及び多量の遺物を検出した。

15層は明黄褐色～暗黄褐色を呈する砂質土層である。北に向かうにつれ色調は暗さを増し、土質は粘性が増す。上面の標高は2.6～3.0mである。時期は縄文時代後期前葉と考えられる。調査区全域に堆積が認められ

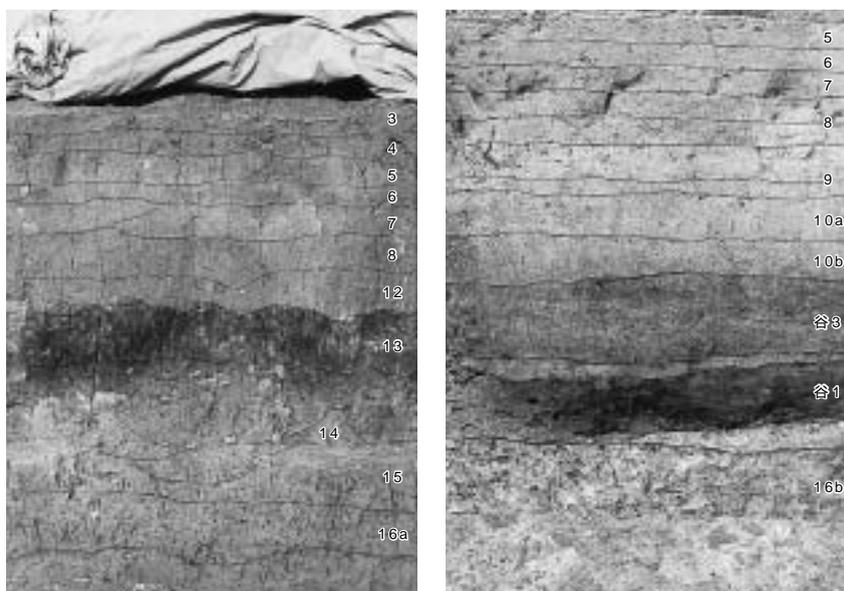


図10 土層断面 左：第17次調査6区北壁（南より）
右：第22次調査2区北壁（南より）

る。本層上面では第17次調査地点において多数の土坑・ピットのほか、焼土遺構8基を検出している。

16a層は明茶褐砂質土層で微高地部に堆積する。上面の標高は2.5～2.7mである。北に向かうにつれて粘性を帯び、谷部では16b層にあたる暗青灰色粘質土層となる。後世の削平もあり、上面の標高は2.0～2.7mの幅を有す。16層上面では土坑を検出しているほか、縄文時代中期末～後期の土器を僅かではあるが出土している。調査時には、こうした遺構・遺物の少なさから、無遺物の基盤層と判断されていたが、その後の整理によって、縄文時代の土層と評価している。

【基盤層】17a層は基盤層と考えられる。17a層は明褐色砂質土、17b層は暗緑灰色粘質土層で、いずれも無遺物層である。

2. 地形

【縄文時代】調査区のほぼ中央、AW-3～6ライン間が、14層上面での標高3.0mの微高地であり、すなわち第17次調査地点を中心とした一帯が集落を営むのに適していたと考えられ、遺構・遺物とも密度が高く検出された。ここより北側の第22次調査地点では北西角で標高2.0mと、北西方向へと傾斜する谷地形の状況を呈しているが、後世（弥生時代前期以降）の破壊により詳細は不明である。ただ従来の調査成果と周辺の地形とを考え併せると縄文時代後期の河道本体は、本調査地点よりも北側を流れている可能性が高い。一方微高地の南側では調査区南端で標高2.9mと僅かに南へ傾斜するが、周辺の調査等から、南側にも微高地がひろがることわかっている。

【弥生～古墳時代】調査区の中央部に微高地が広がり、その北側には北西方向に下がる谷部と、南東方向側には若干傾斜する地形が続いている。微高地と谷部との比高差は弥生時代前期には1.0m程であるが、弥生時代後期段階には0.2mと浅くなり、古墳時代層が堆積する段階には全域がほぼ平坦化する。

【古代以降】古墳時代初頭までにほぼ平坦化した地形を呈し、以後基本的に近代まで同様の地形が継続する。古墳時代・古代の土層はいずれも灰色系を呈する粘質土（耕作土）を、洪水砂が覆うという状況が看取された。中世の土層も古代と近似する灰色系の粘質土（耕作土）を呈するが、近世の土層は砂質土が主体となり、その違いには農法等の点を考える必要がある。また、土地利用についてみると、調査区の南側（主として第17次調査地点）に耕地、北側（第22次調査地点）のAW-1ライン～2ライン間を主軸とする一帯に主要な用水路となる溝が掘削されるという形態が古代以降続くこととなる。

第3節 縄文時代の遺構・遺物

縄文時代の遺構は調査区の南約2/3に広がる微高地部分で、その大半を検出した（図11・12）。遺構の種類は、竪穴住居状遺構・土坑・ピット・溝・焼土遺構である。北側約1/4にあたる谷部では、弥生時代前期以降の河道等によって大きく削平されていることもあり、縄文時代の遺構の検出はできなかった。遺構の密度は調査地点のほぼ中央部分にあたる第17次調査地点の4・5・6区に最も高く、周縁に向けては次第に希薄となるというように場所によって違いがあり、当時の土地利用形態を考えるうえで重要な点の1つである。地形をみても、遺構密度の高い部分、すなわち構内座標でいうとAW-3ライン～AW-6ラインの間が、14層上面の標高3.0m前後と本調査地点の中で最も高い部分に当たっている。この地点から北側に向けては緩やかに傾斜していくが、第22次調査地点にあたる部分のほぼ全域が弥生時代前期以降の河道や溝によって削平されており、標高差は不明である。一方南に向けては、僅かに傾斜しており、調査区南端での14層上面のレベルは標高2.8mで、最高地点との比高差は20cm程である。

遺構・遺物の検出層位は14層上面、15層上面、16層上面の大きく3つに分けられる。縄文時代の遺構として、竪穴住居状遺構2棟、土坑190基、ピット615基、溝2条、焼土遺構8基を検出した。検出面でみると、14層上面で検出した遺構は竪穴住居状遺構2棟、土坑112基、ピット363基、溝2条である。15層上面で検出した遺構は土坑59基、ピット235基、焼土遺構8基である。16層上面で検出した遺構は土坑19基、ピット17基である。

また出土遺物に関しては、14～16層に包含されている遺物のほか、弥生時代に形成されたと考えられる13層中にも大量の縄文時代の遺物が含まれており、これらについてもここで記述する。遺物の総量はコンテナ（1箱約28リットル）にして土器60箱、石器10箱と大量であった。

各層の時期については、16層が縄文時代中期末～後期初頭、14・15層が福田K式土器の時期を主体とする縄文時代後期前葉と考えているが、15・14層については明確に分けられるといった出土状況ではない。16層から14層にかけて継続的にかつ漸移的に形成されていったものと理解される。

本調査地点で確認された遺構・遺物の内容は、津島岡大遺跡の中でも際だって密度の高いものである。遺構の点から本調査地点を概観すると、16層の時期、すなわち中期末頃から人為的な活動の痕跡が窺える。後期前葉と考えられる15層は土質の点では14層と区別しにくく、検出した遺構には14層からの遺構を含んでもいるが、上面で焼土遺構が認められることから同面が生活面であると判断した。居住域として最も盛んに利用されたのは14層の時期である。後期前葉と考えられる14層上面の遺構の状況からは、検出時の標高3.0m前後の微高地上に、竪穴住居状遺構1～2棟と、その周辺に大型の土坑数基、微高地の南縁に溝という、他には見られない特徴を示す集落の存在が窺える。こういった遺構の特徴と、大量の出土遺物から、この地点が縄文時代後期前葉の中心的な居住域であったと考えられる。

多数の土坑・ピットについては断面・平面の観察から非常に重複した状況が認められる。特に14・15層上面では顕著である。これらの土坑・ピットは、それぞれのベースとなる土層に非常に近似する埋土を持ち、また遺構ごとの埋土の差も少なく、平面の輪郭や深さを正確にとらえることが極めて困難であった。

土坑・ピットとして記録した落ち込みの中には、遺構の形状や包含遺物を確実に検出したものもある（土坑3～9）が、その他については、堆積土のわずかな色調の違いや粒度の差異、遺物のまとまり等を手がかりにして、とりあえず土坑ないしピットとして記録し、遺物をとりあげた。従ってこれらについては、遺構の可能性のあるものの確実さに欠ける面を残している。



図11 15・16層検出遺構全体図 (縮尺 1/400)

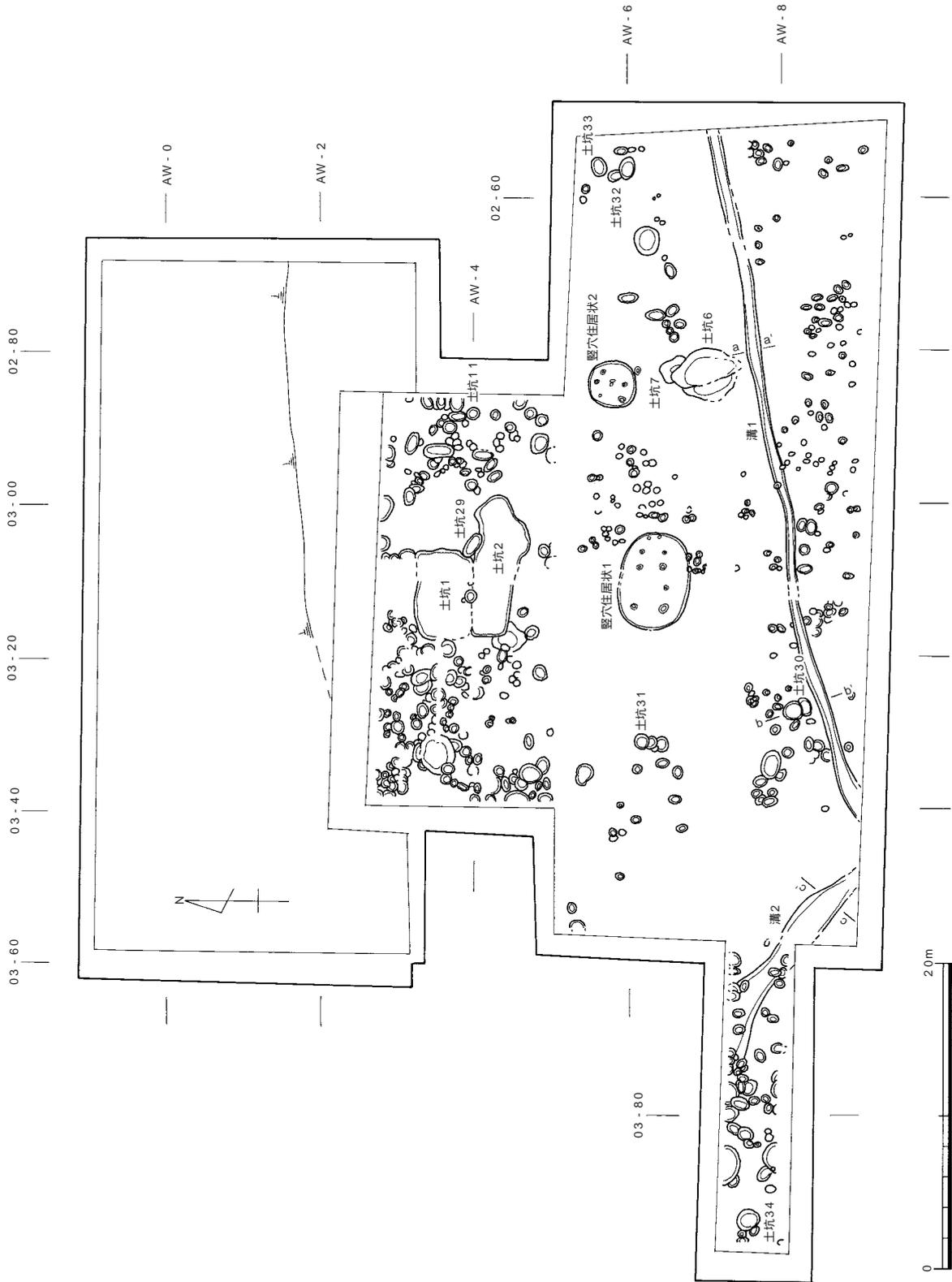


図12 14層検出遺構全体図（縮尺 1/400）

a . 竪穴住居状遺構

竪穴住居状遺構 1 (図13~17 図版 8・10・18・25)

AW03 - 05・06・15・16区で検出した。検出面は14層上面で、検出レベルは標高2.85~3.0mである。平面形は東西に長い長楕円形を呈し、東西6.3m、南北4.5mである。検出面からの深さ35~40cmである。壁高等を考慮すると、上面は削平を受けていると考えられる。底面のレベルは標高2.55~2.6mで床面にあたる。壁面の立ち上がりは比較的明瞭である。底面ではピット 9 基を検出した。ピットは径20cm、深さ20cm前後の小規模なもの、径30~40cm、深さ40cm前後のものに分かれる。このうちP1~P6は位置関係から柱穴と判断した。埋土はいずれも暗灰褐色砂質土である。間隔を考慮するとP2・3・5・6で構成される4本柱の可能性が高い。P1・P4も対であり、他の4基と底面レベルが近く、これらも柱穴として機能したと考えられるが、6本柱とするには間隔が均等でない点で問題がある。建て替え、あるいは拡張した際のものの可能性がある。P7については規模・深さは他の6基と同等であるが、対になるものが確認されていないことから、現状では柱穴としての機能は想定できない。また、ひとまわり小さい規模のP8・P9の2基は対になっており、入り口を示す柱穴とも考えられる。

本遺構内では炉址と考えられる焼土の集中する面を二カ所で検出した。これらは炉として少なくとも3回の使用が想定され、以下に炉址1~3として記述する。

炉址1は本遺構のほぼ中央で検出した。一辺0.4mのいびつな方形を呈する焼土面である。上面は標高2.7mで、

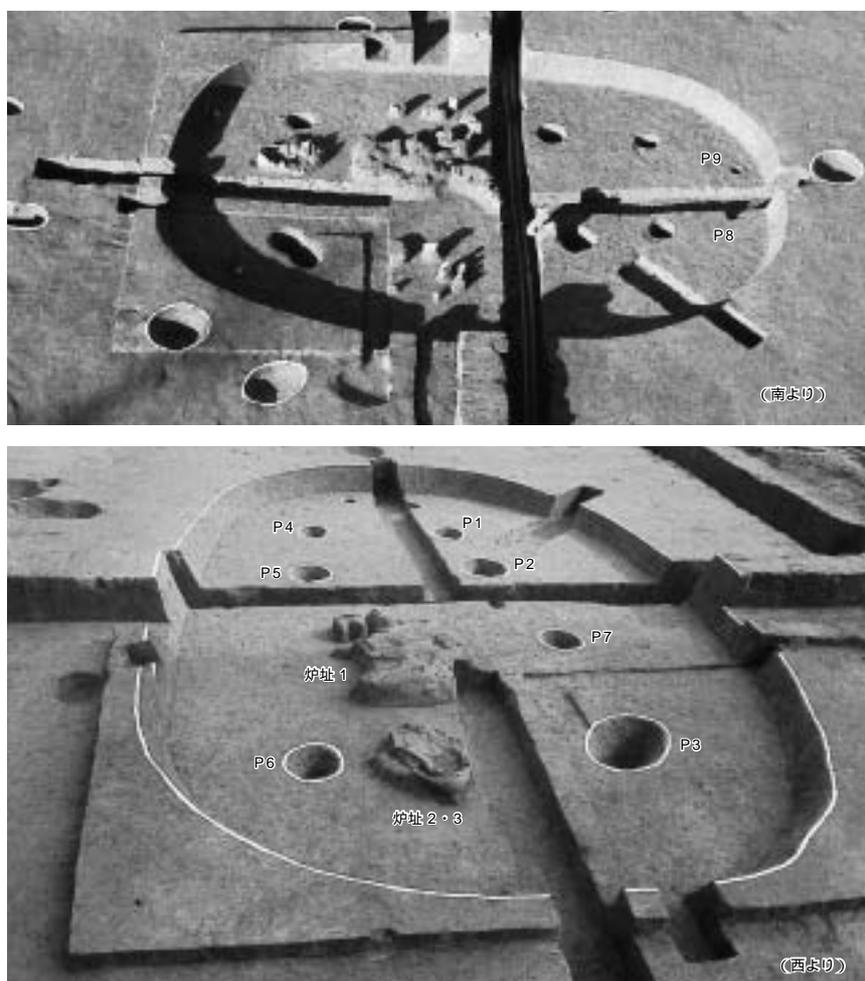
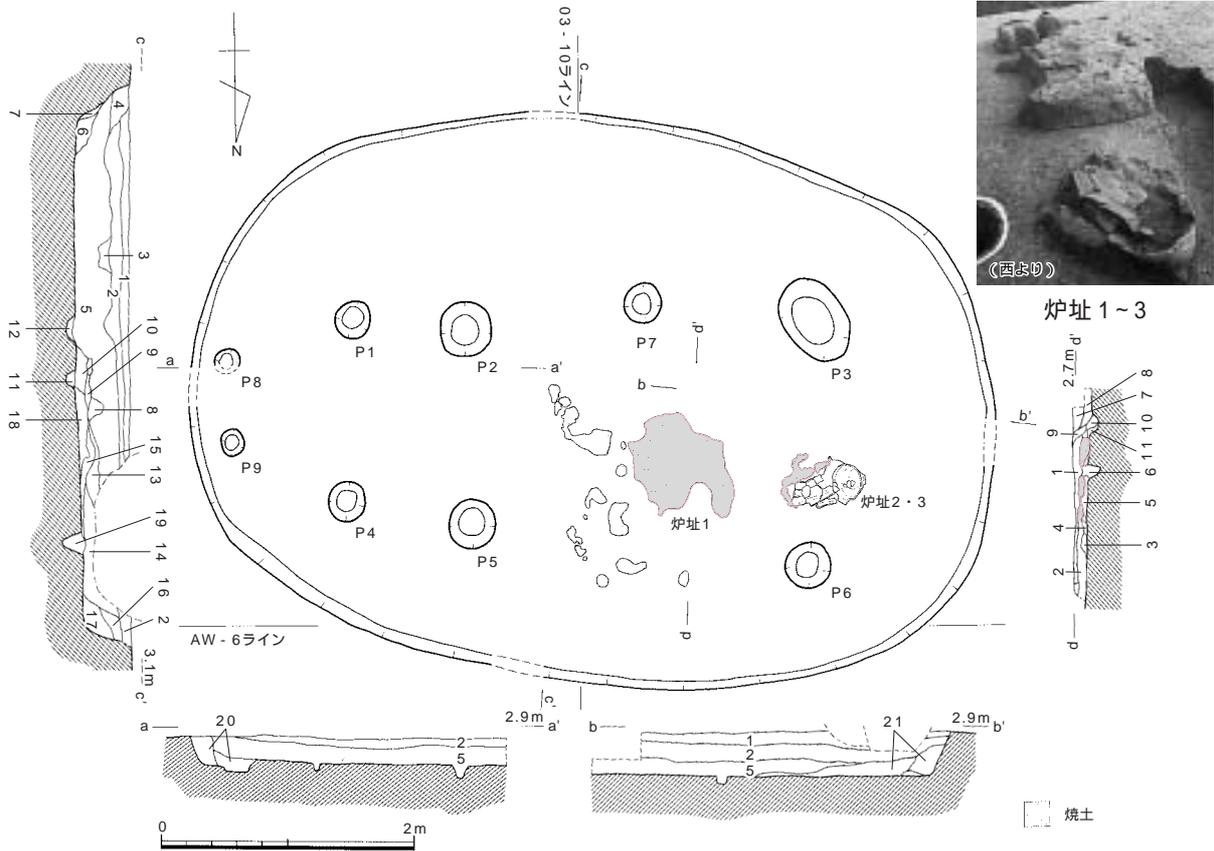


図13 竪穴住居状遺構 1



aa'・bb'・cc'断面

- 1. 暗黒色粘質土
- 2. 暗黒褐色粘質土
- 3. 黒褐色粘質土
- 4. 暗灰褐色土
- 5. 暗灰褐色砂質土
- 6. 暗褐色砂質土
- 7. 暗褐色土
- 8. 明灰褐色粘質土
- 9. 暗灰褐色砂質土
- 10. 暗褐色土
- 11. 暗褐色砂質土
- 12. 暗褐色土
- 13. 暗褐色粘質土
- 14. 暗褐色砂質土
- 15. 暗褐色砂質土
- 16. 暗灰褐色砂質土
- 17. 暗灰褐色砂質土
- 18. 暗褐色土
- 19. 暗褐色砂質土
- 20. 暗褐色砂質土
- 21. 暗褐色砂質土

dd'断面

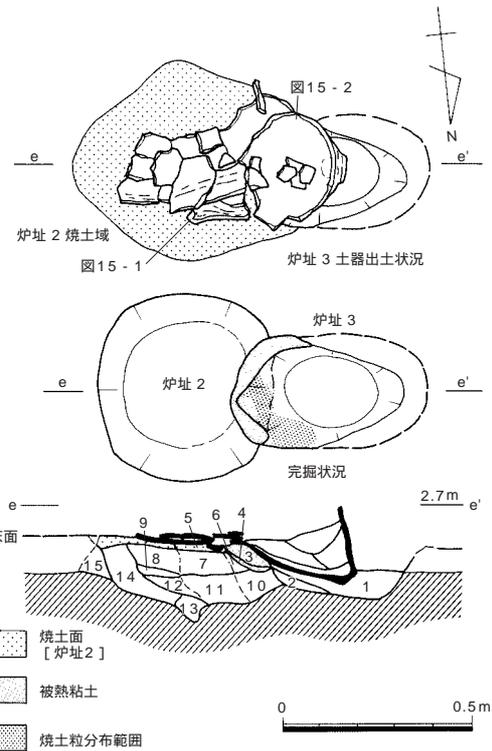
- 1. 暗褐色砂質土
- 2. 灰茶褐色砂質土（炭化物多）
- 3. 暗黒褐色土
- 4. 暗褐色砂質土
- 5. 灰茶褐色砂質土（焼土多）

- 6. 暗灰茶褐色砂質土（炭化物多）
- 7. 暗灰褐色砂質土
- 8. 暗褐色砂質土（炭化物多）
- 9. 暗褐色砂質土
- 10. 暗灰褐色砂質土（焼土多）
- 11. 暗灰褐色土

ee'断面 炉址1~3

- 1. 暗褐色砂質土（焼土少）
- 2. 暗褐色砂質土（焼土多）
- 3. 暗赤褐色土（焼土特に多い）
- 4. 暗赤褐色粘質土
- 5. 暗褐色砂質土（焼土少）
- 6. 暗褐色砂質土（焼土多）
- 7. 暗褐色砂質土（焼土少）
- 8. 暗赤褐色砂質土（焼土特に多い）
- 9. 暗青灰色粘質土（炭化物少）
- 10. 暗褐色砂質土（焼土少）
- 11. 暗赤褐色砂質土（炭化物少）
- 12. 暗赤褐色土
- 13. 暗褐色砂質土（焼土多）
- 14. 暗灰色粘質土（炭化物少）
- 15. 暗褐色粘質土（炭化物少）

- 暗褐色土
- 暗黒色粘質土
- 暗紫黒色粘質土
- 暗褐色土



炉址2・3

図14 竪穴住居状遺構1（縮尺 1/60・1/20）

下面は床面に接する。焼土面の厚さは5～8cmで最終的に床面から盛りあがる状況を呈す。dd'断面でみられるように焼土面は赤変しておりこの場で被熱している。炉址1は掘り込みを持たない地床炉と考えられる。

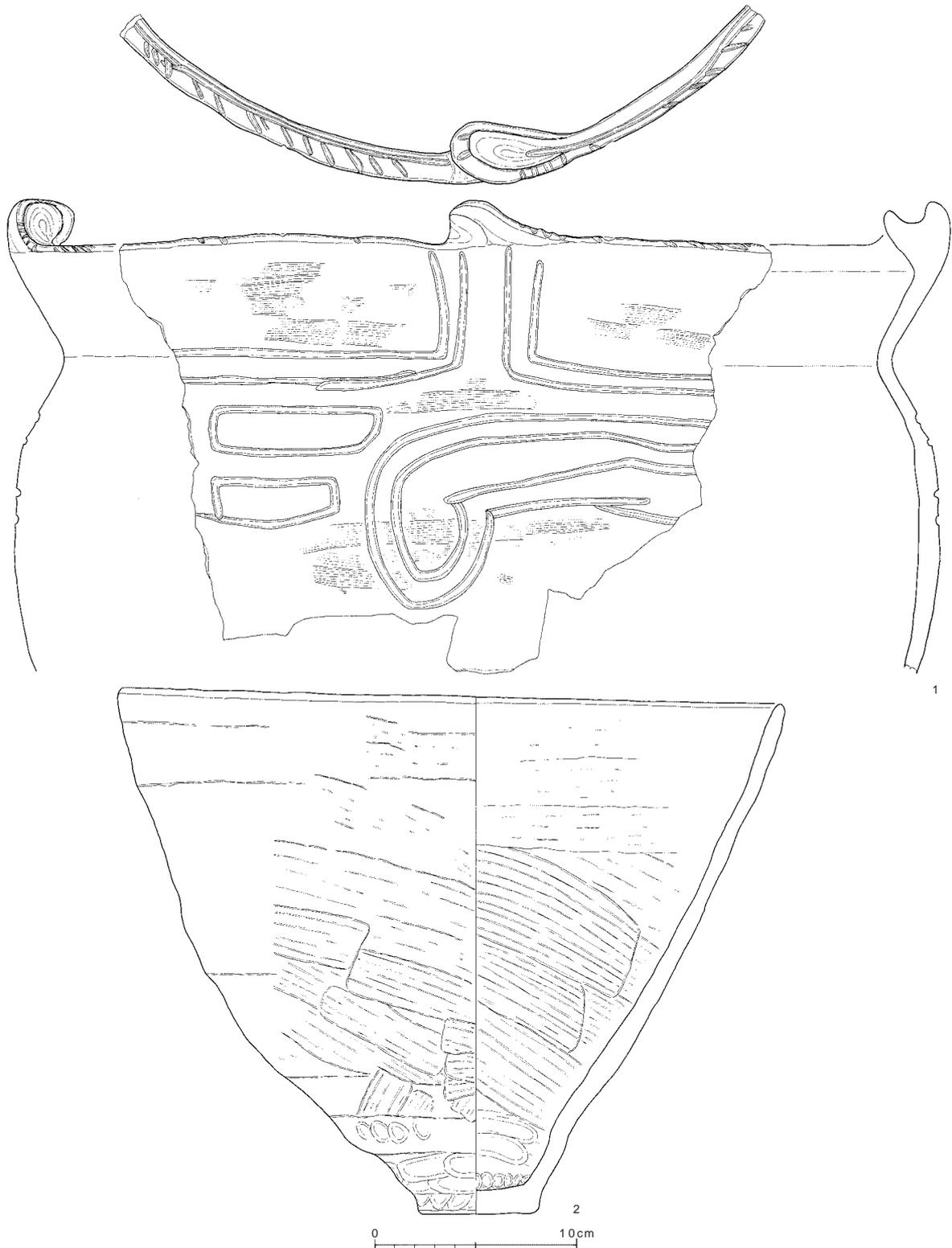
炉址2・3は、炉址1の西0.4mに位置する。P3・P6間にあたり、本遺構内の西寄りにあたる。上面のレベルは2.6mで、これは床面と同レベルである。炉址2・3は、いずれも掘り込みを有する炉で、東側を炉址2、西側を炉址3とする。炉址2は被熱範囲の広がりから、使用面は径約0.5mの円形を呈する地床炉と予想される。下部には深さ15cm程の掘り込みをもつ。ee'断面をみると、14層は掘り方底面に貼られた粘土であり、6～14層は防湿等のための下部構造と想定される。15層については同様の性格も想定されるが断定はできない。また6～8層あるいは10～12層では炉址3側からの変色がみられ、炉址2の廃絶後、炉址3の使用による影響によるものと考えている。炉址3は、炉址2の西側にずらして構築されている。東西0.5m、南北0.3mの楕円形を呈し、深さ0.15mの掘り込みをもつ炉である。内部には炉に据えられていた深鉢形土器(図15-2)が東に倒れ込んだ状態で検出された。炉址2の西側にずらして構築され、掘り込みの東側の肩部に粘土(3・4層)を貼っており、被熱痕は粘土層上部と東側の土器の下面が特に顕著であり、西側からの加熱作業が推測される。以上のように、炉址1と2・3は次第に西へと位置をずらし、かつ地床炉から掘り込みをもつものへと変化しており、柱穴の構成から想定される拡張の可能性を補足する材料と考えられる。

また、炉址1の東側から北東部に5～30cm大の焼土塊が散在している。aa'断面ではこの一帯が台状を呈しており、この高まりを炉とする考え方もあるが、周囲に被熱痕がない点や、これらの上面のレベルが2.65～2.7mと床面および炉址1よりも高いことから、本遺構の廃棄時に炉壁の一部が壊されて廃棄されたものと考えている。

本遺構から出土した遺物は土器50点と石器があり、そのうち土器18点、石器2点を掲載した(図15～17 図版8・10・18・25)。詳細は後述するが、出土遺物の状況から、本遺構は縄文時代後期前葉に使用されており、廃絶後短期間のうちに埋められたものと考えられる。なお、本遺構の炉址2から採取したサンプルにより、年代測定を行っており、補正年代で3770±40年BP、2950±50年BPという2つのデータが得られている(第5章参照)。

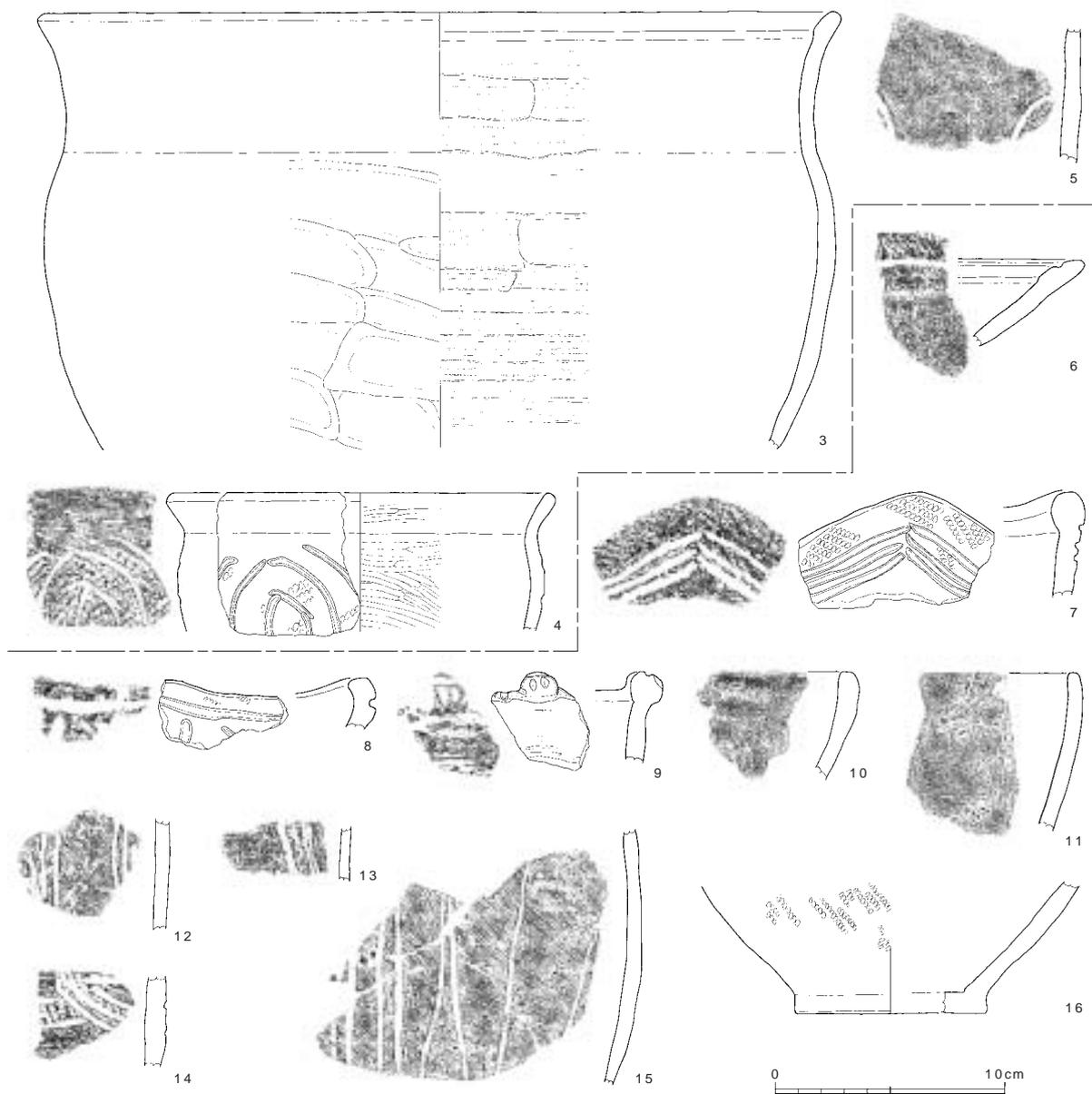
図15-1・2は住居址内の炉址3から出土したもので、1の上に2が重なって潰れるように出土した。図16-3～5は住居址内の床面から、6～15は覆土もしくは床面から、16～18は覆土から出土したものである。1は有文深鉢で口縁部に突起を有する。口唇部には並行する1条の沈線と、斜交する多数の刻目状の沈線が施される。口縁部突起下から垂下した沈線によって胴部文様帯に連続する。胴部の文様は、退化した渦巻文と上下2段に描かれた長方形区画文である。器面の調整は巻貝条痕である。2は無文深鉢である。底部が小さく、口縁部に大きく開く器形を呈し、口縁部付近では長楕円形に歪んだ平面形となっている。器面の調整は巻貝条痕であるが、粗い調整である。3は無文深鉢で、胴部上半に屈曲部を有する。粗い巻貝条痕による調整である。4は有文の鉢である。5は深鉢胴部の一部で、文様帯は細い沈線に区画された磨消縄文がわずかに残る。6の浅鉢は口縁部内面に隆帯状の段を持ち沈線を引くものである。口唇部内面には縄文帯を有する。9は小突起を有する平縁の深鉢である。突起上面に沈線を引き、その外側に刻みを施すものである。10・11は無文深鉢あるいは鉢の口縁部、12～15は有文深鉢胴部文様帯である。15は縦位に簾状の沈線が多条にひかれるものである。17は杵状区画の内外に縄文を施す。18は無文深鉢口縁部である。出土土器群のうち、炉址、床面のものは縁帯文土器の成立段階、覆土のものは福田K式～津雲A式に位置づけられる。断面図にみられるように、本遺構の上には複数の土坑が切りあっており、それらの遺物が混入している可能性はある。

石器は乳棒状磨製石斧2点が出土している(図17、図版25)。いずれも覆土から出土した。S1は砂岩製で刃部を欠失する。丁寧な研磨で仕上げられているが、一部、側縁を中心に敲打痕が確認できる。側縁は基部から斧身にかけて、緩やかに湾曲する。S2は流紋岩製で、基部先端部のみが残存する。丁寧な研磨によって仕上げられているが、一部、敲打痕が確認できる。基部先端に平坦面をもつ。なお、サヌカイト剥片が18点(総重量86.6g)出土している。本遺構内で石器製作を行っている可能性もあろう。



番号	器種	器形の特徴：文様と調整（外/内）：分量	色調（外/内）	胎土
1	深鉢	平縁、耳状突起：口唇部には沈線と斜めの刻み、長方形区画、横に連続する閉じたJ字文、条痕、ナデ/条痕：口径43.2cm、1/3残	赤褐～淡茶褐/赤褐～淡茶褐	やや粗：細～粗砂
2	深鉢	平縁、平面楕円形に歪む：条痕/条痕、ナデ、指頭痕：口径32.5cm、底径5.4cm、1/1残	淡灰黄～黄褐/淡灰～暗灰黄	粗：粗砂多、細礫

図15 竪穴住居状遺構1出土遺物1（縮尺 1/3）



3～5：床面出土

番号	器種	器形の特徴：文様と調整(外/内)：法量	色調(外/内)	胎土
3	深鉢	平縁：糸痕後ナデ/糸痕	明黄橙～橙褐/淡黄灰褐～淡橙	やや粗：微砂多、細礫
4	鉢	平縁：弧状文、縄文(LR)ナデ/ミガキ	明橙茶褐/明橙褐	精良
5	深鉢?	: 対向する弧状の沈線、磨消縄文/ナデ	明橙褐/灰褐～暗灰茶褐	やや粗：微砂多
6	浅鉢	平縁、口縁部内面隆帯状に肥厚：ナデ/口唇部縄文(RL)ナデ?、沈線	茶褐/暗茶褐	やや粗：細礫多
7	深鉢	波状口縁、口唇部肥厚：3本沈線、縄文(RL)ナデ/ナデ	茶褐/暗茶褐	やや粗：細礫多
8	深鉢	波状口縁：沈線文、口唇部縄文(RL)ナデ?/ナデ	淡黄白～明橙褐/明橙褐	細礫多
9	深鉢	平縁、小突起：棒状工具による刻み、糸痕/ナデ	淡茶褐/淡灰茶褐	良：微砂多
10	鉢	平縁：ミガキ/ミガキ	灰茶褐/暗茶褐	粗：微砂多、細礫
11	深鉢? 鉢?	平縁：ミガキ/ミガキ	淡灰白～暗灰/暗灰～黒褐	良：細砂多
12	深鉢	: 3本沈線磨消縄文/糸痕	黒褐/黒	やや粗：細砂多
13	深鉢	: 2本? 沈線磨消縄文、摩滅/摩滅	淡黄灰/淡灰白	やや粗：細砂多
14	深鉢	: 3本沈線磨消縄文、ナデ/ナデ	灰白/赤褐	良：微砂
15	深鉢	: 糜状に垂下する多糸の平行沈線、糸痕/糸痕	淡黄灰～明茶褐/淡灰白	やや粗：細礫
16	深鉢	平底：底部ナデ、縄文(RL)ナデ：底径8.2cm、1/6残	赤褐/淡茶褐～灰茶褐	精良

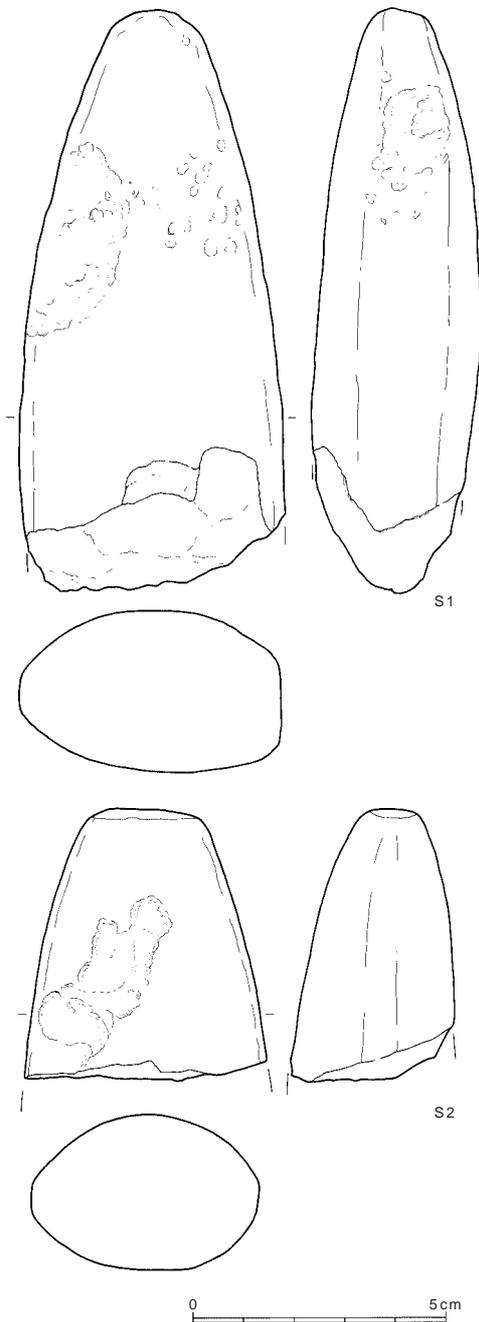
図16 竪穴住居状遺構1出土遺物2(縮尺 1/3)



番号	器種	器形の特徴：文様と調整（外/内）	色調（外/内）	胎土
17	深鉢	顎状口縁：口縁部に文様集約、杵状区画、縄文（RL）、ナデ/ナデ	暗茶褐/灰茶褐	粗：微砂多、細礫
18	深鉢？ 鉢？	平縁：糸痕後ナデ/ナデ	暗茶褐/淡茶褐	良：細砂
19	深鉢	：沈線、ナデ/摩滅	灰茶褐/暗灰茶褐	やや粗：細礫多

番号	器種	最大長（cm）	最大幅（cm）	最大厚（cm）	重量（g）	石材	特徴
S1	磨製石斧	（11.70）	（5.20）	（3.30）	（292.6）	砂岩	刃部を欠損。一部、敲打痕が残る。
S2	磨製石斧	（5.50）	（4.80）	（3.40）	（111.9）	流紋岩	基部先端のみ残存。一部、敲打痕が残る。

図17 竪穴住居状遺構1出土遺物3（縮尺 1/3・2/3）



竪穴住居状遺構2（図18 図版22）

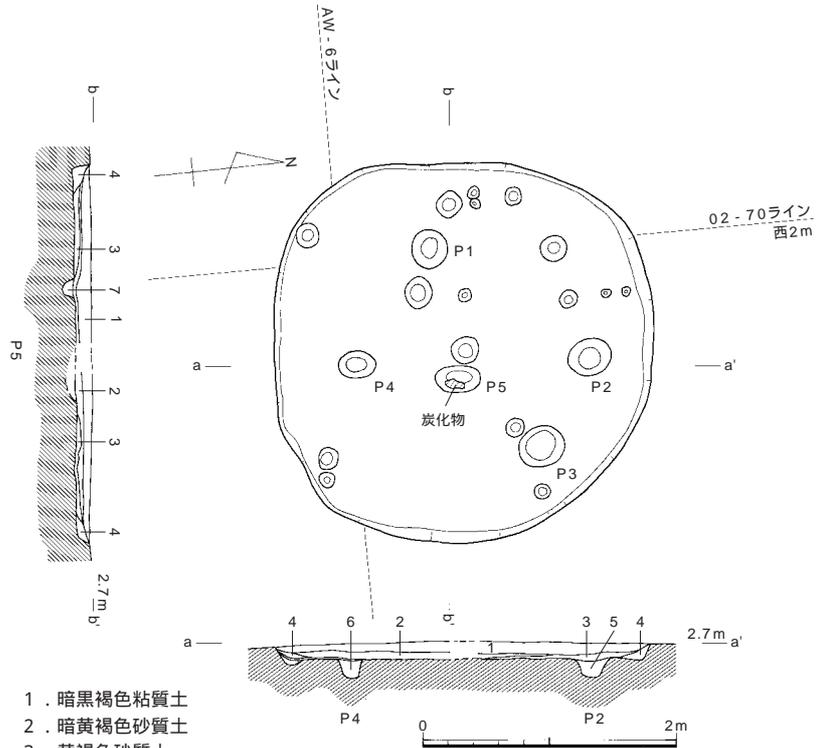
AW02 - 94・AW03 - 04区で検出した。検出面は14層上面である。13層を除去した段階で、一定の範囲に炭化物の散布が認められたことから検出した。平面形は円形を呈し、直径3.0mである。深さは検出面から12～15cmであり、壁面の立ち上がりは比較的明瞭であるが、上面は削平を受けていると考えられる。検出面の標高2.7mで、底面レベルは2.55mである。底面ではピットを多数検出したが、そのうち柱穴状になるものが11基認められた。これらのピットの規模は径15～35cm、深さ15～20cmである。位置的に本遺構に伴う柱穴を構成すると考えられるP1～P4は径30cm、深さ20cmの掘り方をもつ。炉址の可能性のあるものとしてはこれら4基のピットの内側にP5が位置する。P5も同等の規模であり、ピット内からやや大きめの炭化物が出土した。しかしピットの壁に焼けたような痕跡は認められず、炉址と断定するにはやや根拠不足である。埋土は1～4層が認められる。最初の埋土と考えられる4層と3層はともに黄褐色砂質土層を主体としている。1・2層は暗褐色を主体とする砂質土層である。2層には若干黄褐色土ブロックを含む。1層は炭化物を含んでおり、埋土中で最も多く遺物を包含する土層である。

本遺構の性格については、前述の竪穴住居状遺構1に比較すると全体の規模が小さい点、また柱穴の可能性のあるピットの配列もさらに小規模である点、明確な炉址を持たない点等から、一般的な竪穴住居と断定するのは難しい。出土遺物の点からも小片が多く、竪穴住居状遺構1とは状況が異なる。しかし、何らかの作業場といったような機能を想定することはでき、以上のような状況から、ここでは竪穴住居状遺構として報告する。

本遺構からは縄文土器と石器が出土し、54点の縄文土器のうち4点、石器1点を図化した(図18)。1~3は波状口縁有文深鉢の口縁部片である。1は沈線で区画された文様の内外に縄文が施されることから、中期末に位置づけられる可能性がある。2は振幅の小さい波状口縁の波頂部である。口縁部は大きく肥厚した「く」字状のもので、波頂下の円形の浅いくぼみの周囲には縄文が施される。3は2条の平行する沈線を描出し、全面に縄文を施す。4は高台状の底部である。

石器はサヌカイト製石鏃1点(S3)が出土した。覆土からの出土である。小型で薄いつくりの凹基式である。上半部、特に左側縁に細かい調整を施すが、それ以外は素材面を多く残す。

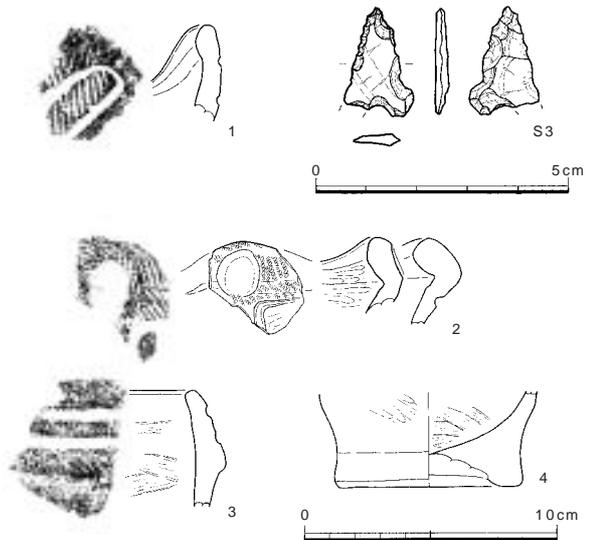
本遺構の時期は縄文時代後期前葉と考えられる。



- 1. 暗黒褐色粘質土
- 2. 暗黄褐色砂質土
- 3. 黄褐色砂質土
- 4. 暗黄褐色砂質土
- 5. 暗黄褐色砂質土
- 6. 黄褐色砂質土
- 7. 暗黄褐色砂質土



完掘状況



番号	器種	器形の特徴：文様と調整(外/内)：法量	色調(外/内)	胎土
1	深鉢	波状口縁：沈線、縄文(RL)、ナデ/ナデ	明茶褐/淡茶褐	粗：細砂多
2	深鉢	波状口縁：波頂部に円形窪み、口縁部全面縄文(RL)、ミガキ/ミガキ	淡灰褐/暗茶褐	良、均質：微～細砂、稀に細礫
3	深鉢	頸状口縁：平行沈線、摩滅/捺痕	淡灰褐/暗褐	やや粗：細～粗砂多、細礫
4	深鉢	高台状：ナデ、ミガキ/捺痕：底径7.2cm、1/3残	橙褐～茶褐/暗褐	粗：微～細砂多、細礫

番号	器種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石材	特徴
S3	石鏃	2.15	(1.40)	0.20	(0.5)	サヌカイト	凹基式。左下端を欠損。

図18 竪穴住居状遺構2・出土遺物(縮尺 1/60・1/3・2/3)

b. 土坑・ピット

14～16層で検出した土坑・ピットの総数は805基に上る(表2・3)。ここでは便宜的に径80cmを境に、80cm以上を土坑、未満をピットとして報告する。805基のうち土坑が24%(190基)、ピットが76%(615基)を占める。土坑は16層上面で19基、15層上面で59基、14層上面で112基を検出した。ピットは16層上面で17基、15層上面で235基、14層上面で363基を検出した。

土坑の規模は径80～130cmが77%(146基)を占め、径が200cmを超える大型のものも4%(8基)認められる。平面形は円形あるいは楕

円形を呈する。遺物は土坑の46%から出土しており、100点以上出土している土坑が4%(7基)認められる。分布では4・5・6区に特に多く、特に14層上面においては、これらの地区で全体の60%弱が検出されている。

ピットは円形を呈するものが大半で、径31～60cmのものが全体の64%(394基)を占める。ピットの深さをみると、20cmまでのものが78%(478基)を占めている。ピットの分布も4・5・6区に多く、土坑の分布とほぼ一致する傾向を示す。ピットのうち遺物を包含するものは全体の30%弱で、その大半は5点以下の出土点数である。100点以上の土器片が出土したピットは1基、50点以上の土器片が出土したピットは5基認められた。土坑・ピットともに埋土は主に色調から(1)黒～褐色系、(2)黄色系、(3)灰色系の3タイプがある。

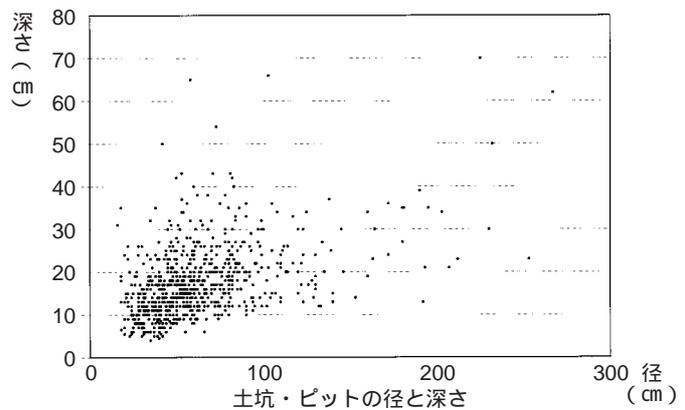
以上のように土坑・ピットの概要をみてきたが、多くのものについて、いくつかの点において遺構とするには疑問点がある。問題となるのは以下の点である。14層上面で土坑・ピット140基を検出した第17次調査地点6区でみてみよう(図19)。ここでは14層上面全体での検出基数の約30%が集中している。北壁断面を例示しているが、断面観察でも多くの土坑・ピット状の落ち込みが重複している状況が見取れる。また全体土層図(20頁図8aa'断面)でも同様の状況が明瞭に認められる。これらの落ち込みに共通する特徴としては断面形状が皿状、あるいは浅いすり鉢状をなしている点、断面・平面の観察から非常に重複した状況で認められる点、平面的には不整形を呈し、また深さは浅いものが多い点、出土土器に時期幅が認められる点が挙げられる。また特に埋土(1)タイプのものでは遺物の出土レベルが標高2.4～2.6mと共通している点、埋土(図19北壁断面トーン部分)と13層との差異が少ない点が挙げられ、埋土(2)・(3)タイプのものも、それぞれのベースとなる土層との差異が少ないという共通した特徴を示す点も遺構としての疑問を残す。埋土(1)タイプとして土坑1・2が、埋土(2)・(3)タイプとして土坑10～12が挙げられる。

こうした状況は、調査区全体に共通しており、土坑・ピットを明確に検出することは困難であった。その中で土坑3～9については埋土・掘り方がしっかりとしており、また遺物が底面近くから多く出土している点、他の落ち込みとの重複が比較的少ない点も考慮して、遺構として評価される可能性が高いものと考えられる。しかしその他については、明確な遺構としては断定し難い。出土遺物に関しては、土坑3～9以外の土坑・ピットについて図化可能な遺物を掲載している。その出土状況に何らかの有意性があるかもしれないが、上述したように確実な遺構としては断定し難いため、これらから出土した遺物については遺構毎(土坑1・2・10～34)に掲載しているものもあるが、一括遺物のまとまりを示したものではないことを断っておきたい。

土坑1・2(図20～29)

次に土坑1・2の検出状況をみてみよう(図20)。図20の写真からも明らかなように土層観察用の畦と側溝を挟んで東西に土坑とピット群が位置している。調査時においては、6区側では、2棟の住居址状遺構として検出・

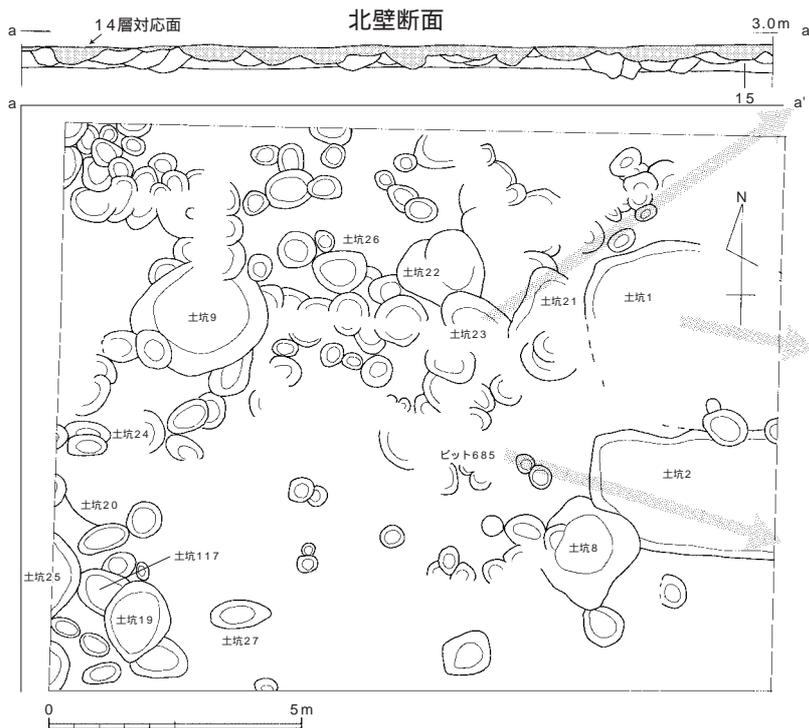
土坑・ピットの規模



134	64	53	20		214	38	27	19		296	44		15		379	48	45	14	
135	47		27		215	24	21	14		297	65		13		380	56	50	13	
136	73	60	21		216	24	21	10		298	51	49	17		381	56	21	14	
137	69	40	22		217	26	18	17		299	51	35	18		382	48	34	18	
138	70	70	23		218	24	24	12		300	63		19		383	55	40	19	
139	79	70	23		219	21	18	14		301	43	30	18		384	58	49	13	
15層3区					220	34	21	17		302	53		21		385	41	40	11	
140	30	27	12		221	28	20	9		303	61		16		386	45		17	
141	40	32	13		222	47	24	8		304	46		23		387	43	28	16	
142	48	34	15		223	25	22	7		305	56		21		388	53	31	18	
143	56	42	12		224	27	22	20		306	54		17		389	75	48	17	
144	28	23	8		225	28		14		307	40		20		390	47		21	
145	34	32	10		226	36	27	14		308	50		28		391	66	49	23	
15層2区					227	54	29	10		309	53		37		392	70		20	
146	53	42			228	51	32	17		310	69	58	22		393	40	36	8	
147	62	58			229	60	41	25		311	45		23		394	55		12	
148	58	41	22		230	28	21	9		312	60		8		395	49	31	17	
149	37	31	13		231	26	20	8		313	59		18		396	30	24	16	
150	38	30	8		232	30	28	5		314	48				397	56	40	16	
151	44	40	11		233	67	38	9		315	60		23		398	40		13	
152	62	23	13		234	40	31	11		316	66		22		399	52	39	19	
153	50	41	11		235	40	27	10		317	75		20		400	57		12	
154	35	28	32		236	40	23	11		318	78		30		401	62		16	
155	22	20	12		237	27	21	10		319	73		26		402	70		23	
156	21	19	15		15層7区					320	40		27		403	73		17	
157	18	17	18		238	50	40	17		321	47		31		404	55	31	6	
158	34	27	13		239	50	38	9		322	22		23		405	38	30	8	
159	40	31	17		240	30	27	7		323	66	45	18		406	70		15	
160	32	25	12		241	43		9		324	54		19		407	62		18	
161	28	21	11		242	31	29	8		325	56		21		408	75		16	
162	53	42	17		243	58	37	9		326	52	48	17		14層4区				
163	53	49	34		244	59		10		327	60		17		409	64	59	20	
164	48	42	26		245	28		12		328	30	45	8		410	45	39	9	
165	52	40	16		246	72		12		329	58		32		411	56	36	15	
166	43	32	17		247	40	32	9		330	68	61	12		412	47	40	25	
167	54	45	18		248	20	20	24		331	76	58	14		413	58	42	28	
168	57	50	22		249	20	20	24		332	51		27		414	38	32	12	
169	28	20	11		250	18	12	19		333	43	38	18		415	65	40	31	
170	33	30	12		251	67		15		334	55		17		416	56	50	21	
171	58	48	11		252	36	19	12		335	52		14		417	50	40	15	
172	40	32	12		14層6区					336	42	36	16		418	40		20	
173	68	50	14		253	50	42	23		337	18		35		14層3区				
174	16	14	31		254	47	40	18		338	46		18		419	36	31	18	
15層1区					255	50		19		339	75		36		420	48	42	21	
175	50	30	8		256	50		19		340	56		28		421	35	30	23	
176	40	29	14		257	44		24		341	44		25		422	43		13	
177	44	30	12		258	35	32	18		342	75	64	16		423	23		20	
178	43	28	23		259	54	48	26		343	61	60	30		424	60	34	23	
179	23	18	5		260	49	44	20		344	46	29	13		425	49		25	
180	36	17	11		261	79		19		345	60		17		426	55		15	
181	31	20	10		262	60		40		346	33		24		427	54		16	
182	60	29	12		263	48		14		347	38		35		428	42	40	17	
183	39	35	14		264	49	31	23		348	64		26		429	62	35	11	
184	26	25	9		265	37	22	11		349	27		19		430	78	59	38	
185	43	26	9		266	54	32	9		350	63		18		431	70	66	32	
186	24	20	17		267	69	40	20		351	42		50		432	76		19	
187	24	21	6		268	58	39	20		352	78	39	29		433	68	51	19	
188	41	31	7		269	73		54		353	53		24		434	77	61	21	
189	28	21	10		270	46	40	32		354	51		31		435	70	58	26	
190	28	26	11		271	54		25		355	40	23	13		436	72		21	
191	36	31	17		272	53	50	14		356	48		13		437	67		23	
192	40	30	9		273	73		17		357	71		28		438	70		23	
193	32	28	15		274	43	39	17		358	38	29	13		439	47	31	20	
194	37	25	12		275	44	31	9		359	46	40	13		440	59		16	
195	28	21	15		276	58		65		360	42	28	8		441	64	50	32	
196	52	36	12		277	72	51	21		361	75				442	49	38	8	
197	70	35	13		278	29		17		362	66		12		443	59	38	11	
198	62	37	12		279	65.5		11		14層5区					444	58		11	
199	60	30	15		280	39		23		363	21		14		445	54	36	34	
200	39	20	5		281	53		18		364	50	42	11		446	59	51		
201	南:38	27			282	61		9		365	78	70	18		447	53	36	43	
	北:44	29	6		283	40		23		366	46	40	10		448	65		18	
202	54	29	12		284	56		36		367	78		15		449	50		11	
203	78	40	22		285	72		17		368	76	60	20		450	63	45	19	
204	31	17	6		286	71		20		369	71	70	17		451	60		19	
205	22	18	9		287	38		24		370	40		13		452	69		20	
206	22	21	13		288	36		12		371	70		25		453	45		22	
207	28	22	7		289	58		16		372	50	32	13		454	41		19	
208	24	18	11		290	31		14		373	66		16		455	59		14	
209	30	21	13		291	40		18		374	60	42	20		456	47		14	
210	29	19	15		292	73	59	24		375	72		10		457	47	39	18	
211	37	28	9		293	34	40	11		376	53	39	16		458	44	41	10	
212	20	18	9		294	64	43	21		377	48		12		459	78	61	11	
213	26	18	19		295	50	48	42		378	61	42	26		460	33	30	17	

調査の記録

14層2区				500	42	36	13		539	32	25	10		579	48	37	10
461	54	42	13	501	29		8		540	29	22	11		580	50	41	12
462	50	39	25	502	57	54	19		541	37	31	6		581	63	39	14
463	48	38	19	503	67	41	20		542	36	30	8		582	44		19
464	34	30	18	504	36	23	18		543	40	32	7		583	34	28	16
465	32	27	14	505	22	20	26		544	38	21	10		584	60	32	10
466	18	18	13	506	31	20	10		545	56	31	10		585	44	36	16
467	42	31	15	507	28	23	10		546	55	34	16		14層7区			
468	36	29	13	508	33	24	16		547	51	29	9		586	70	40	21
469	70	38	15	509	40	36	13		548	60	41	16		587	73	54	18
470	31	27	12	510	49	38	25		549	41		5.5		588	72		13
471	31	28	13	511	45	40	21		550	58	34	12		589	58	51	13
472	28	27	13	14層1区					551	48.5	30	9		590	45	43	13
473	33	32	10	512	60	40	10		552	62	38	9		591	43	32	26
474	36	34	13	513	18	17.5	6.5		553	41	28	8.5		592	45	30	14
475	42	39	14	514	20		5.5		554	37	34	5		593	30	25	16
476	20	18	13	515	24		5.5		555	40	40	8		594	28		17
477	22	19	15	516	50	32	12		556	31	28	5.5		595	54	50	14
478	25	20	15	517	45	34	11		557	42	31	5		596	57	42	24
479	40	30	10	518	46	35	12		558	46.5	28	7		597	64	57	17
480	34	31	9	519	48	40			559	42	33	7		598	60		14
481	40	38	19	520	40	35	13		560	35	26	6		599	46		17
482	40	37	11	521	36	31	21		561	35	22	4		600	61		25
483	65	61	14	522	37	38	7		562	40	31	4.5		601	47		30
484	25		9	523	40	41	18		563	33	31	8		602	59	50	26
485	50	41	11	524	46	22	8.5		564	44	39	9		603	45		17
486	29	28	15	525	52	31	9		565	39		8		604	28		17
487	58	36	12	526	55	40	10		566	50	41	11		605	71		28
488	37	31	15	527	41	19	10		567	38	32	8		606	65		24
489	60	60	20	528	39	20	8.5		568	40	23	8		607	56	48	9
490	64	53	26	529	24	21	11		569	27	23	9		608	67		22
491	30	30	13	530	25	18	10		570	45	34	11		609	74		18
492	31	31	15	531	38	34	11		571	31	30	12		610	31		16
493	43		7	532	40	29	11		572	47	32	14		611	50		18
494	47	30	12	533	44	37	11		573	39	30	11		612	70		18
495	46	31	11	534	33.5	29	6		574	37	41	14		613	60		20
496	59	52	24	535	32	30	6		575	50	40	10		614	59	41	
497	53	41	18	536	40	31	6		576	40	33	12		615	72	55	
498	51	43	17	537	33	24	10		577	60	39	11					
499	66	49	16	538	25	20	6		578	32	28	8					



土坑23 遺物出土状況



土坑1 遺物出土状況



ピット685 遺物出土状況

図19 土坑・ピット検出状況 第17次調査地点6区(縮尺 1/150)

掘り下げ、5区側ではひとつひとつの落ち込みを個別のピットとして検出・掘り下げを行った。

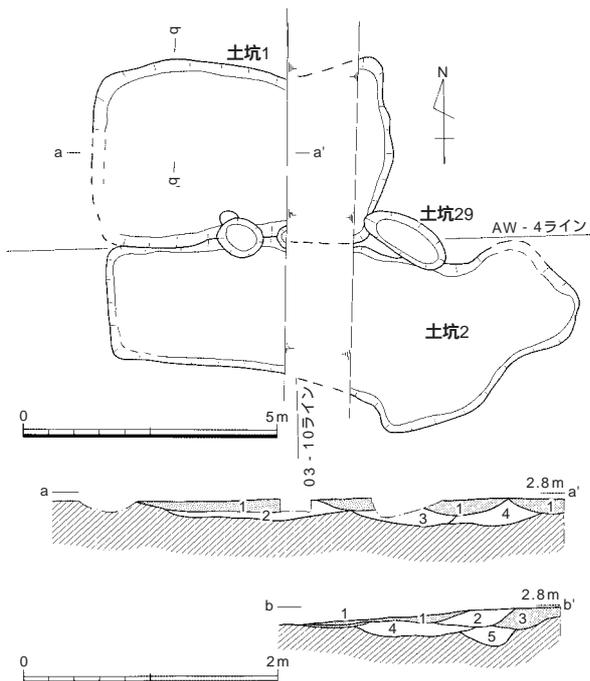
この範囲から大型の破片を含む遺物が特にまとまって大量に出土しており、埋土の特徴や、遺物の出土レベル・底面レベルが揃うということから、これらは東西それぞれが対応する可能性を考え、北側を土坑1、南側を土坑2として報告することとした。

しかし、既述しているように、13層に類似する黒褐色～褐色系の粘質土層（図20土坑1 トーン部分）が、レンズ状に堆積して埋没している点、5区側では多くのピット状落ち込みの重複として検出したものの、それぞれでの遺物の出土レベルにまとまりがあり、底面が揃う点、平面形は不整形を呈し、浅い点等から、これらを確実な遺構とは断定し難い。

土坑1（図20～24 図版3・6・8・11）

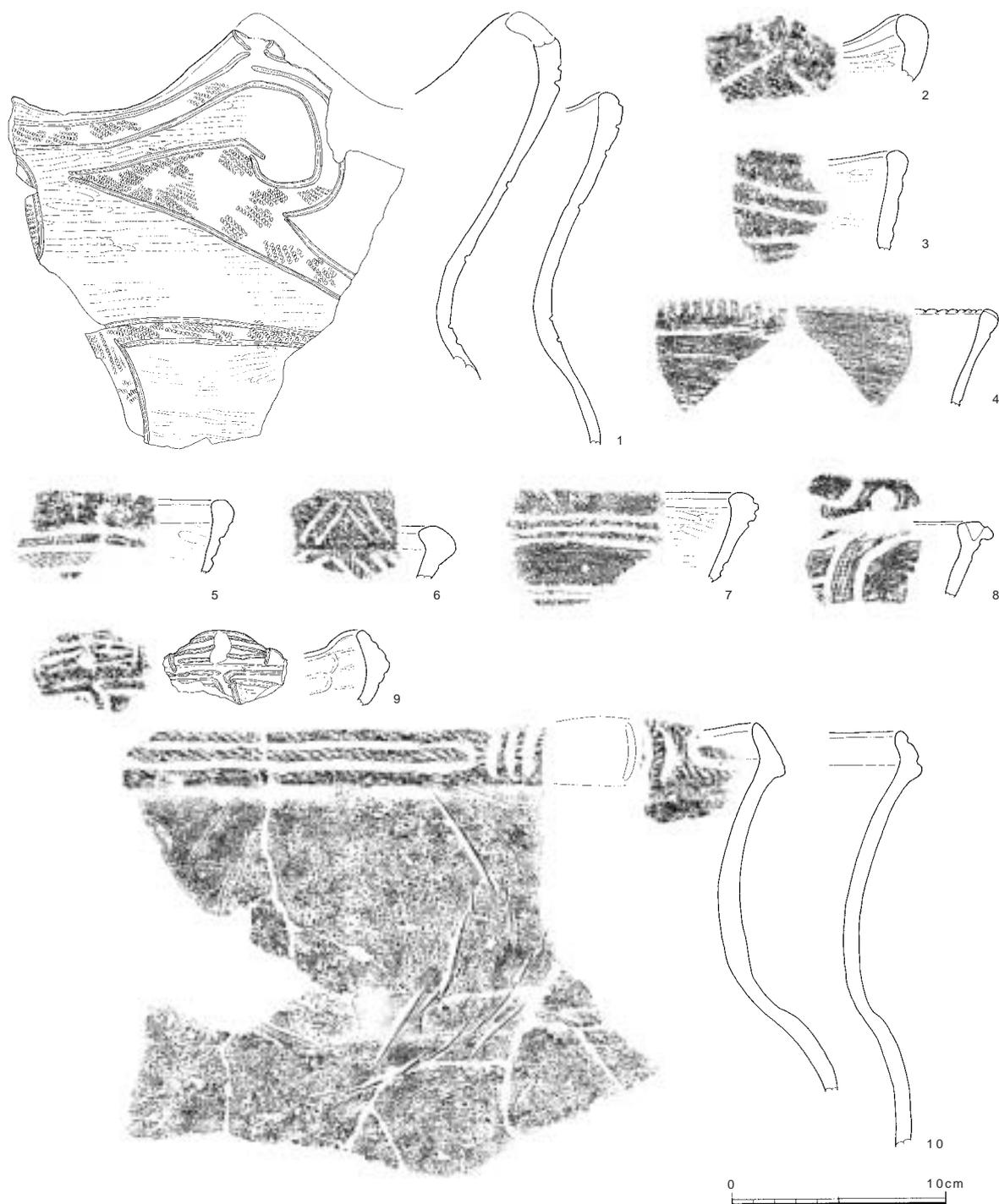
14層上面で検出した。AW03 - 03・13区に位置する。東西約6m、南北約3.5mの規模である。検出面のレベルは標高2.8～2.9mを測り、埋土は黒褐色～淡黒褐色の砂質～粘質土で底面レベルは標高2.6～2.7mで、深さ20cmある。平面形は隅丸長方形を呈する。5区側では径64～100cm程度のピット5基として掘り下げを行ったもので、また、上層に13層類似土層（図20 - トーン部分）の堆積があり、底面に凹凸が多い。ただ集落の中心に近いところに位置しており、遺物量も豊富である点などを考慮して、何らかの作業場の可能性も考えられないことはないが、前述の理由により断定できない。

本土坑から出土した遺物は縄文土器と石器であり、土器は411点のうち29点、石器5点を図示した（図21～24 図版3・6・10・18）。図21 - 1～10は有文深鉢の口縁部、図22 - 11～13は有文浅鉢、14は有文深鉢の胴部、図23 - 15～18は無文深鉢、19、20は無文浅鉢、21、22は底部である。図24 - 23～27は有文深鉢、28、29は無文深鉢である。1は波頂部が大きく屈曲した振幅の大きい波状口縁を有する有文深鉢である。沈線は深く、沈線同士の切り合い関係は無い。2は波頂部が肥厚した波状口縁磨消縄文土器である。この破片にも波頂部に円形のモチーフがみられる。4は口唇部に刻みを有する条痕調整の土器片であるが、口唇部下に沈線が1条観察されるため有文土器に含めておいた。6は口唇部上面に2条の並行する沈線が1単位となった鋸歯文状の文様を描出するも



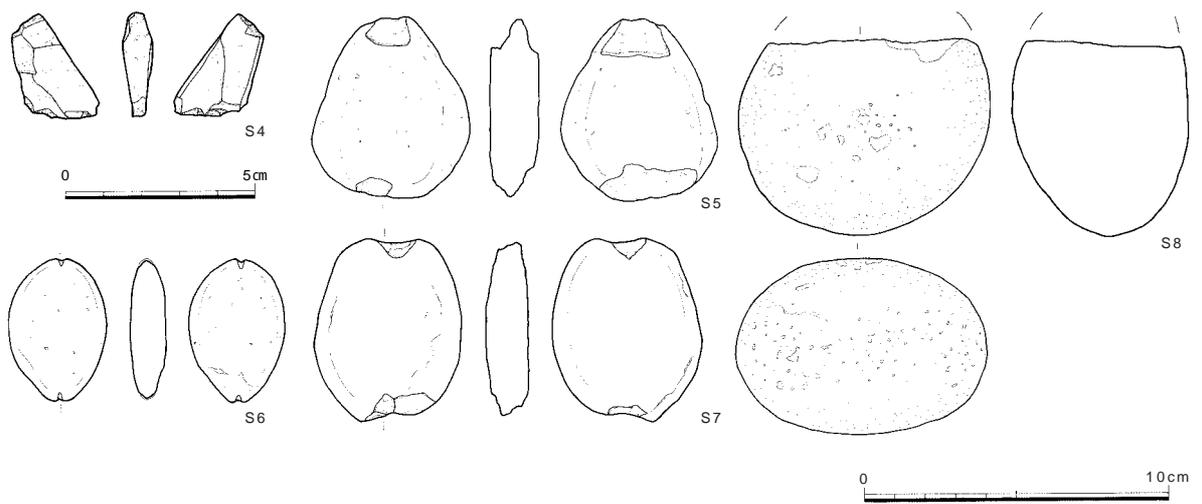
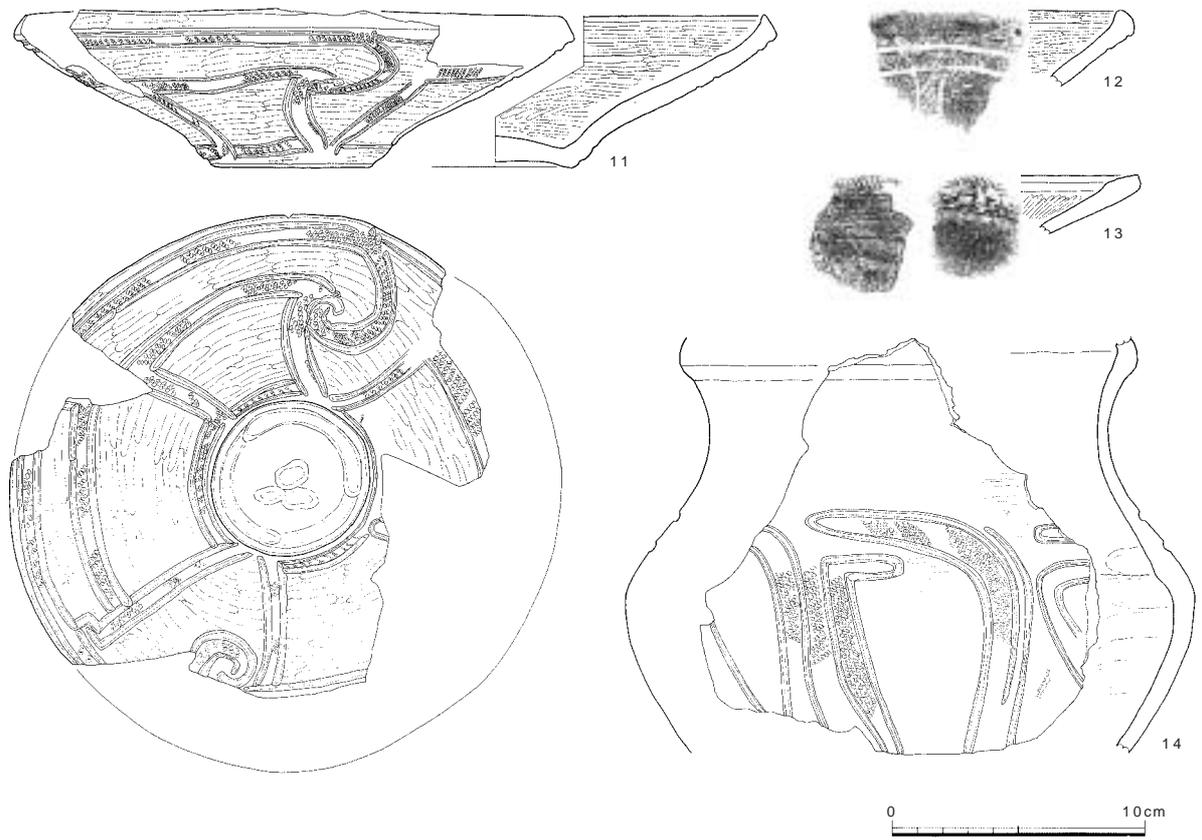
- | | |
|---------------|---------------|
| aa' 断面 | bb' 断面 |
| 1. 暗黒褐色粘質土 | 1. 暗褐色粘質土 |
| 2. 暗黄灰色砂質土 | 2. 暗黒褐色粘質土 |
| 3. 淡褐色砂質土 | 3. 茶褐色粘質土 |
| 4. 淡茶褐色砂質土 | 4. 暗褐色粘質土 |
| | 5. 黄褐色砂質土 |

図20 土坑1・2（縮尺 1/150・1/60）



番号	器種	器形の特徴：文様と調整（外/内）	色調（外/内）	胎土
1	深鉢	波状口縁：2本沈線磨消縄文（RL）ミガキ/ナデ？	黄橙褐～明茶褐/明灰黄～黄褐	粗：細～粗砂多、稀に細礫
2	深鉢	波状口縁：幅広縄文帯、磨消縄文（RL）ミガキ？/ミガキ	明灰/橙褐	やや粗：細砂多、稀に細礫
3	深鉢	波状口縁：浅めで幅広の沈線、摩滅/ミガキ	明橙褐/淡灰橙	やや粗：細砂多
4	深鉢	平縁：口唇部直交刻み、下位に沈線1条、口唇部に縄文、条痕/条痕	淡明黄白/淡明黄白	精良：細砂
5	深鉢	平縁、口唇部肥厚：3本沈線磨消縄文（RL）ナデ/ナデ	暗灰褐/暗褐～黒	粗：細礫多
6	深鉢	平縁、口唇部肥厚：口唇部鋸歯文、縄文（RL）/ナデ	暗灰褐/淡灰白	やや粗：細～粗砂
7	深鉢	平縁、口唇部肥厚：3本沈線磨消縄文（RL）/ミガキ	淡灰茶褐/淡灰茶褐	精良、均質：細砂
8	深鉢	平縁、口唇部肥厚：円錐状窪み、2本沈線磨消縄文（RL）ナデ/ミガキ	淡茶褐/淡黄褐	精良：細砂
9	深鉢	平縁？、低い台形突起：梯子状沈線文、縄文（RL）/ミガキ	暗灰褐/明～暗茶褐	やや粗：細～粗砂
10	深鉢	平縁：（対向）連弧文、杵状区画文、縄文（RL）ナデ/ナデ	淡茶褐/茶褐～暗茶褐	粗：細砂多、細礫

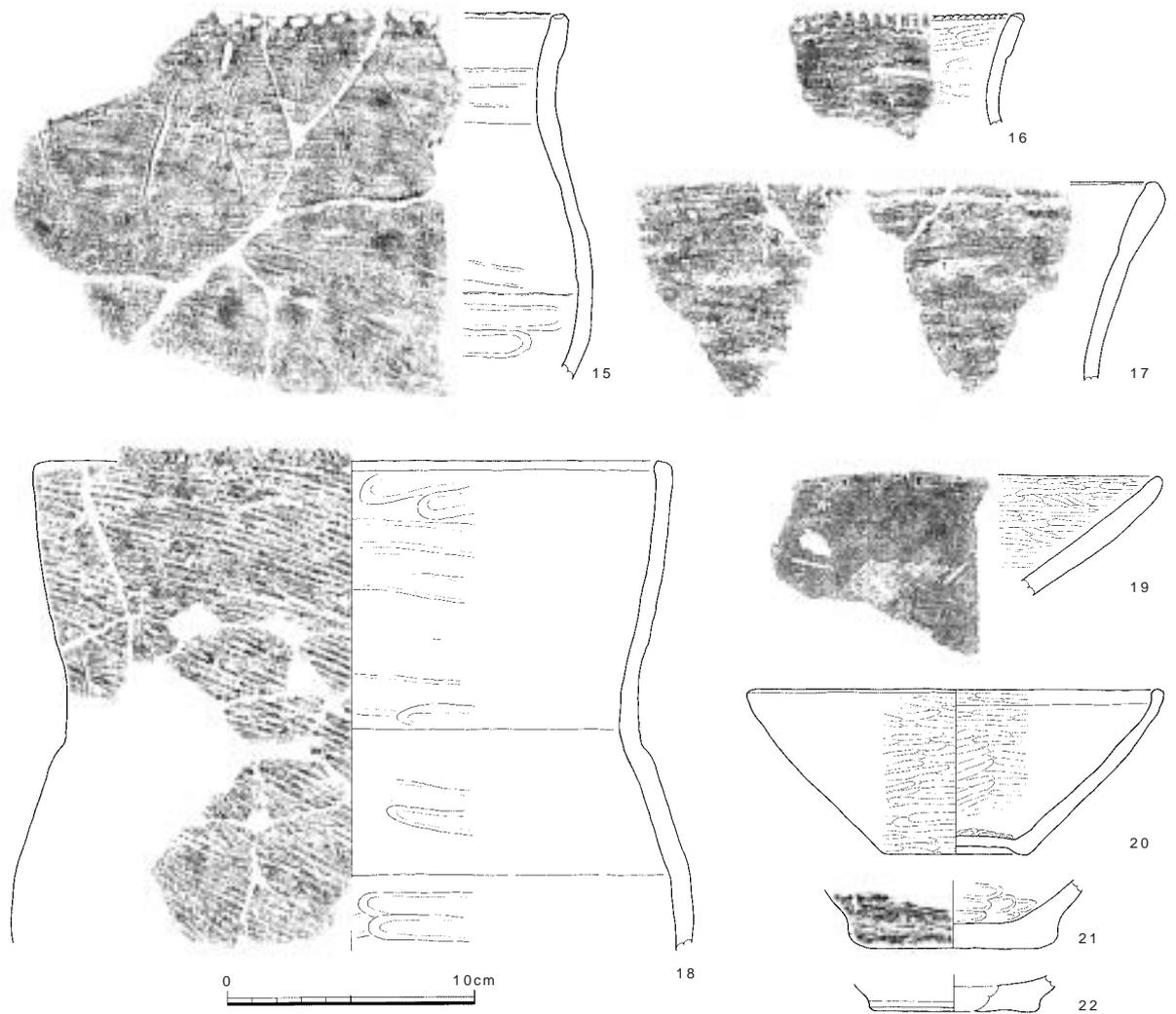
図21 土坑1出土遺物1（縮尺 1/3）



番号	器種	器形の特徴：文様と調整（外/内）：法量	色調（外/内）	胎土
11	浅鉢	平縁、やや凹み底：2本沈線磨消縄文（RL）J字文、縦横の連繫文、ミガキ /ミガキ：口径21.2cm、底径6.1cm	茶褐～暗茶褐/明～暗茶褐	精良、均質、細砂、稀に細礫
12	浅鉢	平縁、口唇部肥厚：2本沈線磨消縄文（RL）ミガキ/ミガキ	淡灰白～淡橙褐/橙褐	精良、均質、細砂
13	浅鉢	平縁：ミガキ、口唇部縄文（RL）/ミガキ	明黄茶褐/灰茶褐～暗灰茶褐	やや粗：細～粗砂多
14	深鉢	：縦位の鈎形区画文、磨消縄文（RL）ミガキ/ナデ：胴部径22.5cm	明黄茶褐～暗茶褐/黄茶褐～茶褐	やや粗：細砂多、細礫

番号	器種	最大長（cm）	最大幅（cm）	最大厚（cm）	重量（g）	石材	特徴
S4	楔形石器	2.75	2.40	0.80	4.3	サヌカイト	右側面に剪断面。下端に階段状剥離。
S5	石錘	6.00	5.20	1.60	69.5	閃緑岩	円礫の上下端に打ち欠き。
S6	石錘	4.75	3.20	1.15	25.4	流紋岩	小型品。円礫の上下端に擦切りによる溝。
S7	石錘	6.00	4.90	1.50	64.9	珪質片岩	円礫の上下端に打ち欠き。
S8	磨石	(6.55)	8.35	5.77	479.3	安山岩	円礫を素材。下端部に明瞭な敲打痕。

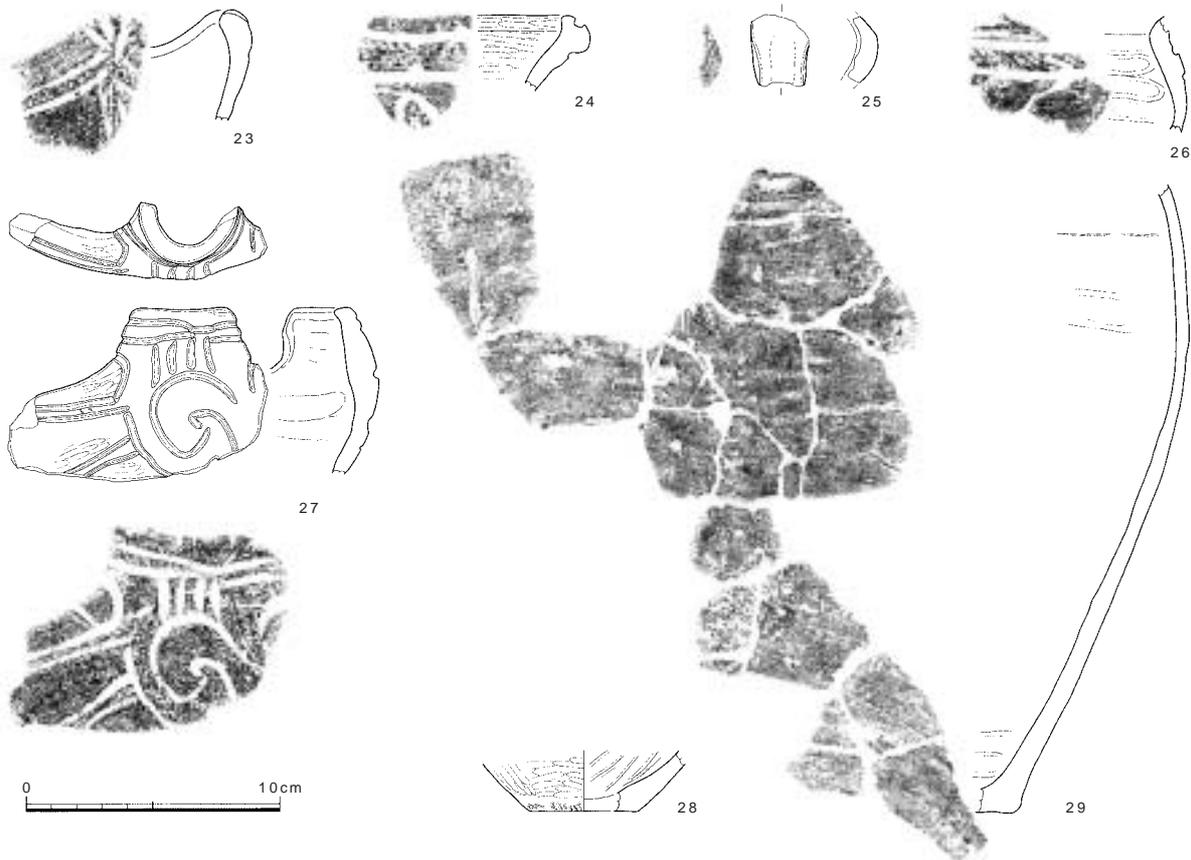
図22 土坑1出土遺物2（縮尺 1/3・1/2・2/5）



番号	器種	器形の特徴：文様と調整（外/内）：法量	色調（外/内）	胎土
15	深鉢	平縁：口唇部刺突、条痕/ナデ	明黄茶褐～暗茶褐/明橙～暗茶褐	精良：稀に細礫
16	深鉢	平縁：口唇部直交刻み、条痕/ナデ	淡橙灰/灰茶褐～暗茶褐	精良、均質：細砂
17	深鉢	平縁：条痕、ナデ/条痕	灰褐～暗灰褐/灰茶褐～暗灰褐	粗：細～粗砂多、稀に細礫
18	深鉢	平縁：口唇部縄文（RL）、条痕/ナデ：口径24.6cm、1/3残	灰茶褐～暗茶褐/明黄茶褐	粗：細砂多、稀に細礫
19	浅鉢	平縁：ミガキ/ミガキ	明橙褐/灰褐～暗灰褐	精良、均質：細砂
20	浅鉢	底部高台状：底部ミガキ、ナデ/ミガキ：口径16.2cm、底径5.9cm	暗橙～黄褐/暗灰褐～橙灰	精良：細砂少
21	深鉢	平底：条痕/ナデ、底面ナデ：底径7.0cm、1/2残	淡灰白/淡黄白	良：細砂
22	鉢？ 浅鉢？	平底：ナデ/ナデ：底径6.5cm、1/3残	暗橙褐/暗灰褐	やや粗：細砂

図23 土坑1 出土遺物3（縮尺 1/3）

のである。口唇部上には縄文が施される。8は口唇部が内外に大きく肥厚した形状を呈し、器面の文様が口唇部上まで伸びて一連の文様を構成するものとなっている。大きく肥厚した口縁部端面には断面三角形に深く抉った窪みがある。11～13の浅鉢はいずれも皿状の器形を呈するものである。このうち、11・12では、2本沈線によって区画された縄文帯による文様が描出される。文様の構成が明らかな11の浅鉢では、渦巻文、渦巻文を挟む「V」字状の縄文帯、縦位に伸びる縄文帯、これらを連繋するように横位に伸びる縄文帯によって文様帯が構成されており、2単位で器面を一周する。13は口唇部内面が肥厚し、端面には縄文が施される。14は深鉢の胴部である。鍵形に向かい合う2つの変形区画文が1単位となる。15～18は無文の深鉢、19・20は無文の浅鉢、21・22は底部である。21・22の底部はいずれも立ち上がりの角度が緩く、浅鉢もしくは鉢の底部であると思われる。本遺構出土



番号	器種	器形の特徴：文様と調整（外/内）：法量	色調（外/内）	胎土
23	深鉢	波状口縁：2本沈線磨消縄文（RL） 摩滅/摩滅	暗赤褐～暗茶褐/暗茶褐～黒	粗：細砂多、細礫
24	深鉢	平縁、口唇部外方に大きく肥厚：沈線文、口唇部縄文？、摩滅、ミガキ/ミガキ	茶褐/暗茶褐	精良：細砂
25	深鉢	橋状突起、横断面「U」字状：ナデ、側縁に縄文（RL）/ナデ	淡～灰茶褐/暗茶褐	やや粗：微～細砂、粗砂少
26	深鉢	：2本沈線磨消縄文（RL） ナデ、ミガキ/ナデ	淡橙茶褐/淡黄橙褐	精良：微～細砂、稀に細礫
27	深鉢	口縁突起部、「C」字状の突起：波頂部沈線と垂下する4条沈線、渦巻文、磨消縄文、ミガキ/ナデ	明黄茶褐～明橙褐/淡灰黄白	精良、均質：細礫
28	深鉢	平底：ミガキ、縄文（RL） 底部ナデ/ナデ：底径4.4cm、1/4残	淡黄白/淡灰白	やや粗：微～細砂、細礫少
29	深鉢	平底？：条痕後ナデ/条痕後ナデ	乳白/乳白	精良、均質：細～粗砂少

図24 土坑1出土遺物4（縮尺 1/3）

土器には、福田K 式から津雲A 式までの土器が含まれる。

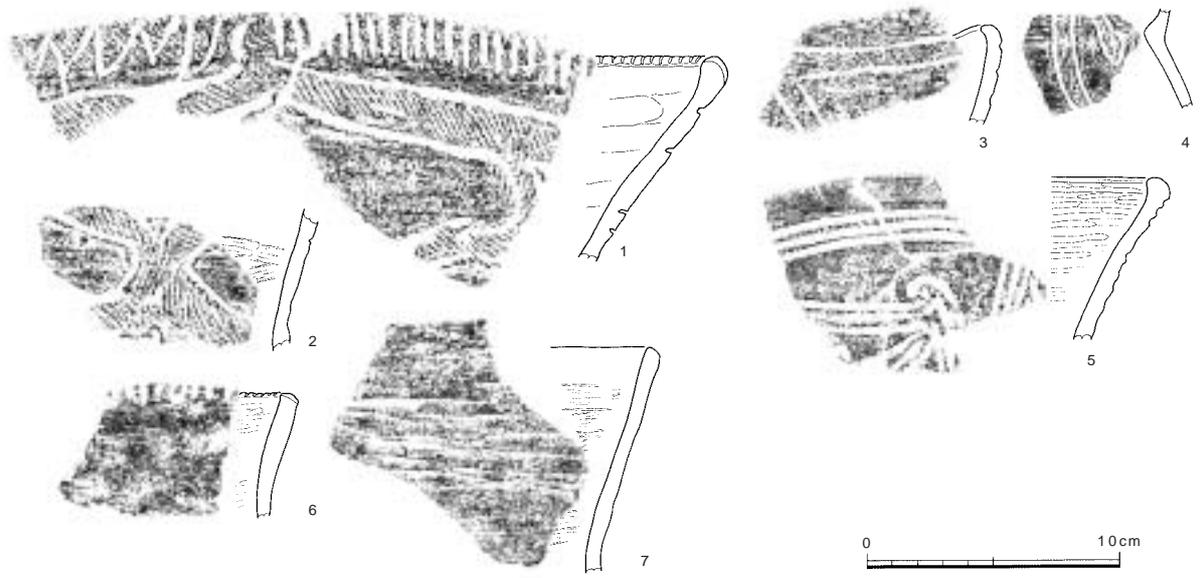
石器は、楔形石器1点、磨石1点、石錘3点が出土した（図22）。サヌカイト製楔形石器（S4）は、右側面に剪断面が認められ、上下端に階段状剥離が認められる。磨石（S8）は流紋岩製で上半部は欠損している。ただ、握り具合を考えると、意図して整形した可能性もある。側面全体が摩滅する。石錘には、上下端に研磨によって溝をつけた小型品（S6）と、上下端両面を打ち欠いた中型品（S5、S7）がある。

出土土器は縄文時代後期前葉のものが主体であり、本遺構の時期もこの範疇と考えている。

土坑2（図20・25～29 図版4～7・9・10・12・13・15・22）

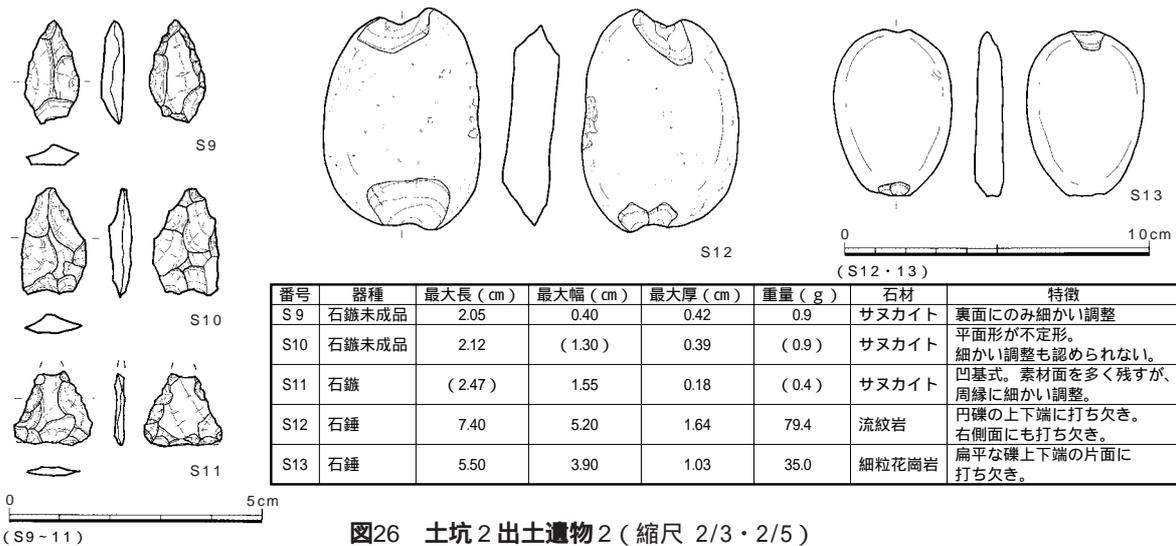
14層で検出した。AV03-04・14区に位置する。東西10m、南北2.5mの範囲である。検出面のレベルは標高2.87～2.98m、埋土は暗褐色～暗灰褐色の砂質土で、底面レベルは標高2.7～2.8m前後である。6区側では大型土坑として、5区側では径30～120cm前後の大小様々なピット状落ち込み30基として掘り下げたものであるが、埋土の特徴や堆積状況は土坑1と同様であり、遺構とするには不確実な面がある。

平面形では特に東側で不整形を呈し、底面も凹凸が顕著である。遺物の出土は「土坑2」とした範囲の中でも特に北東側に顕著である。



番号	器種	器形の特徴：文様と調整（外/内）	色調（外/内）	胎土
1	深鉢	平縁：2本沈線磨消縄文（RL） 口唇部に直交刻み+鋸歯文、糸痕/ナデ	茶褐/黄茶-茶褐	精良、均質：稀に細礫
2	深鉢	：2本沈線磨消縄文（RL） 糸痕/糸痕後ナデ	茶褐-暗茶褐/灰茶褐	良：微-細砂、稀に細礫
3	深鉢	緩い波状口縁：2本沈線磨消縄文（RL） ミガキ/摩滅	淡黄褐/淡灰茶褐	やや粗：細-粗砂多、細礫多
4	深鉢	：2本沈線磨消縄文、ミガキ/糸痕、ナデ	黒褐/暗灰褐	やや粗：細砂多、細礫
5	深鉢	平縁：3本沈線磨消縄文（RL） ミガキ/ミガキ	淡茶褐/茶褐	精良、均質：稀に細礫
6	深鉢	平縁：口唇部直交刻み、糸痕/ミガキ	暗茶褐/赤茶褐-茶褐	粗：細-粗砂多、細礫多
7	深鉢	平縁：糸痕/糸痕後ナデ	灰茶褐/灰黄茶褐	良：細-粗砂、細礫

図25 土坑2出土遺物1（縮尺 1/3）



番号	器種	最大長（cm）	最大幅（cm）	最大厚（cm）	重量（g）	石材	特徴
S9	石鐵未成品	2.05	0.40	0.42	0.9	サヌカイト	裏面にのみ細かい調整
S10	石鐵未成品	2.12	(1.30)	0.39	(0.9)	サヌカイト	平面形が不定形、細かい調整も認められない。
S11	石鐵	(2.47)	1.55	0.18	(0.4)	サヌカイト	凹基式。素材面を多く残すが、周縁に細かい調整。
S12	石錘	7.40	5.20	1.64	79.4	流紋岩	円礫の上下端に打ち欠き。右側面にも打ち欠き。
S13	石錘	5.50	3.90	1.03	35.0	細粒花崗岩	扁平な礫上下端の片面に打ち欠き。

図26 土坑2出土遺物2（縮尺 2/3・2/5）

本遺構からは縄文土器と石器が出土し、785点の縄文土器のうち土器51点、石器5点を図化している。図25-1～5、図27-8～25は有文深鉢である。図25-6・7、図28-26～35は無文深鉢、図29-36～45は浅鉢、46は特殊な器形の器種、47～50は深鉢底部、51は注口土器である。

1は口唇部に刻みを施すが、文様帯から口縁部にのびる主文を挟んで直交する刻み、鋸歯状の刻みとなる。2は1と同一個体になると思われる。3・4・8～13は2本沈線、5・16～18は3本沈線の磨消縄文土器である。21は内面に口唇部から垂下する隆帯上に撥形の沈線文を描く。23・24は橋状突起で、いずれも沈線で区切られた中央部が窪む。26・27は口唇部に刺突列を施す無文土器、28～33は口唇部に刻みを施す無文土器、34・35は無文土



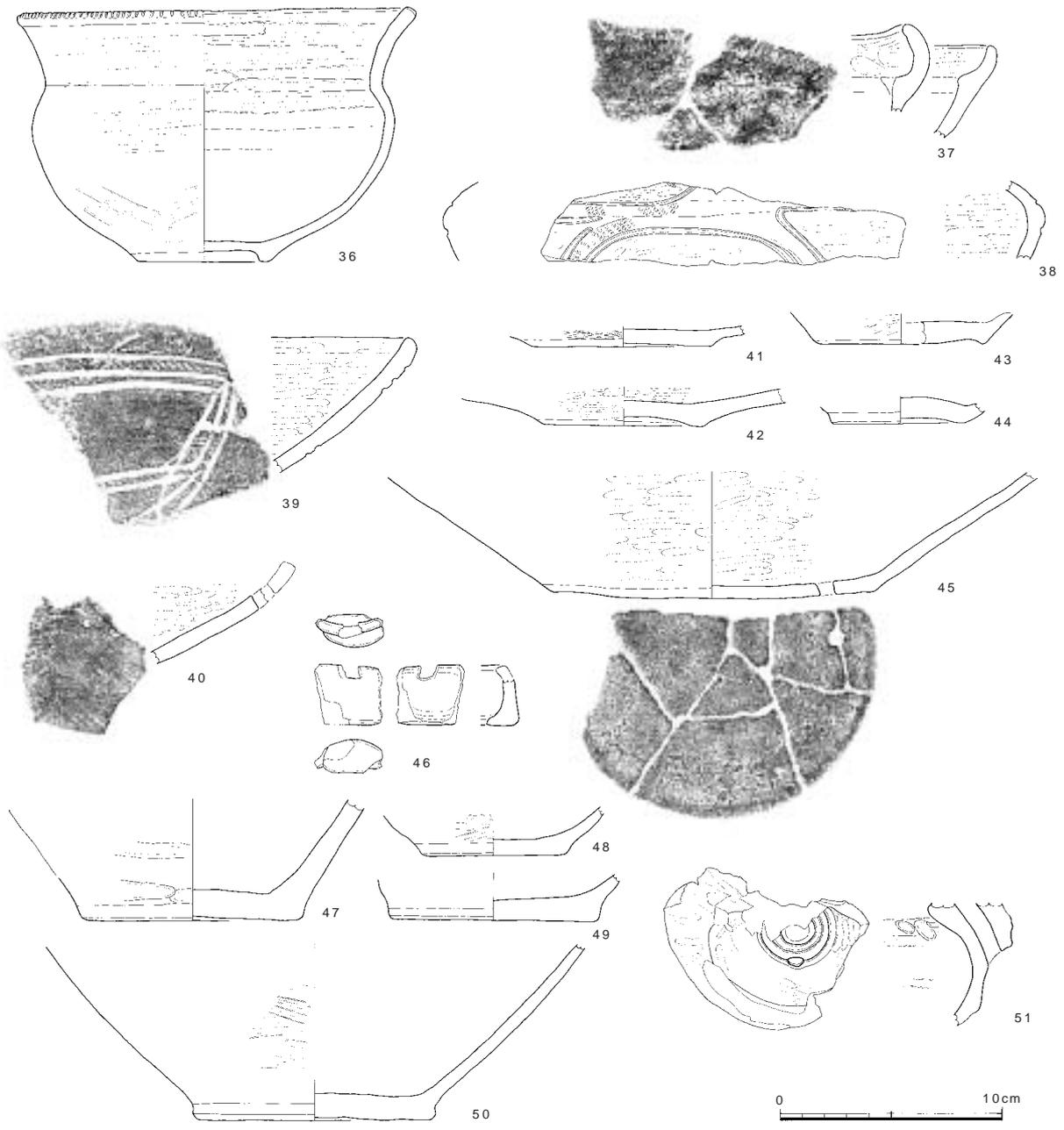
番号	器種	器形の特徴：文様と調整（外/内）	色調（外/内）	胎土
8	深鉢	平縁+「C」字状突起：モチーフ2段構成、2本沈線磨消縄文（RL）ミガキ/ミガキ	明茶褐～茶褐/灰茶褐	精良、均質：微砂、細礫少
9	深鉢？ 鉢？	平縁：2本沈線磨消縄文（RL）ミガキ？/ミガキ	暗赤褐～暗茶褐/淡黄茶褐	精良、均質：細砂、稀に細礫
10	深鉢	波状口縁：2本沈線（浅い）、摩滅/摩滅	明橙/淡橙白	やや粗：細砂多
11	深鉢	ゆるい波状口縁：2本沈線（太目）磨消縄文（RL？）ナデ？/ナデ？	淡茶褐/茶褐	やや粗：微砂多、細礫
12	深鉢	平縁：2本沈線磨消縄文（RL）ミガキ/ミガキ	淡黄橙茶褐/淡黄茶褐	良：細砂、稀に細礫
13	深鉢	平縁、口唇部肥厚：2本沈線磨消縄文（RL？）ミガキ/摩滅	淡橙茶褐/淡茶褐	良：細～粗砂
14	深鉢	平縁：2本沈線磨消縄文（RL）ミガキ/ミガキ	暗茶褐/淡灰茶褐	精良、均質：微砂
15	深鉢	波状口縁：2本沈線磨消縄文（RL）ナデ/ナデ	暗茶褐/淡茶褐	粗：粗砂、細礫多
16	深鉢	波状口縁、口唇部肥厚頂部内面「C」字状の空隙：3本沈線磨消縄文（RL）ミガキ/ミガキ	明茶褐～淡明黄灰白/淡灰	精良、均質：稀に細砂
17	深鉢	平縁：3本沈線磨消縄文（RL）ミガキ/ミガキ	茶褐～赤茶褐/暗茶褐	精良、均質：稀に細砂
18	深鉢	平縁：3本沈線磨消縄文（RL？）ミガキ/ミガキ	暗灰褐～暗褐/暗灰褐	やや粗：粗砂、細礫多
19	深鉢	：2本沈線磨消縄文（RL）/摩滅	灰茶褐/灰茶褐	良、微～細砂、稀に細礫
20	深鉢	：2本沈線磨消縄文（RL）ミガキ/ナデ	暗茶褐/暗灰茶褐	精良：細礫
21	鉢？ 深鉢？	平縁、内面に縦方向の隆帯：3本沈線？、ナデ？/隆帯上に撥形モチーフ、磨消縄文？、ミガキ	明茶褐/灰褐	精良
22	深鉢？	刻み状凹凸、内面に肥厚：肥厚した口唇部内面下端の屈曲部に刺突、摩滅/摩滅	淡黄褐/淡黄褐	やや粗：微砂多
23	深鉢	橋状突起：2本沈線磨消縄文（RL）ミガキ/ナデ	暗茶褐/暗灰茶褐	精良、均質：微～細砂
24	深鉢	橋状突起：2本沈線磨消縄文（RL）ていねいなナデ/ナデ？	灰褐～暗灰褐/灰茶褐	精良、均質：微砂、稀に細礫
25	鉢？	橋状突起：2本沈線磨消縄文（RL）ミガキ/ナデ、糸痕、指頭痕	明橙～赤茶褐/茶褐～暗褐	良、均質：細砂多、細礫

図27 土坑2出土遺物3（縮尺 1/3）



番号	器種	器形の特徴：文様と調整（外/内）：法量	色調（外/内）	胎土
26	深鉢	平縁：口唇部刺突、糸痕/ナデ：口径38.0cm、1/4残	茶褐～暗褐/淡灰黄白～淡灰黄	粗：細～粗砂多、細礫多
27	深鉢	平縁：口唇部刺突、糸痕/ナデ	灰褐/灰褐	良：細～粗砂
28	深鉢	平縁：口唇部直交刻み、縄文(RL)摩滅	淡黄橙/淡黄白	良：細～粗砂、細礫
29	深鉢	平縁：口唇部直交刻み、糸痕後ナデ/糸痕、ナデ	淡橙灰褐/淡灰白	粗：細～粗砂多、細礫少
30	深鉢	平縁：口唇部直交刻み、ナデ/ナデ	淡茶褐/淡茶褐～茶褐	精良：稀に細砂
31	深鉢	平縁：口唇部直交刻み、糸痕/糸痕	淡茶褐/淡黄白	精良、均質
32	深鉢	平縁：口唇部直交刻み、摩滅/ナデ	黄褐～赤橙/暗赤茶褐	やや粗：細砂多、細礫
33	深鉢	平縁：口唇部直交刻み、糸痕/ミガキ	茶褐～暗茶褐/茶褐	良：細砂、細礫
34	深鉢	平縁：ナデ/ナデ	灰褐/灰黄	良：微～細砂
35	鉢？ 深鉢？	平縁：口唇部ナデ、摩滅/摩滅	淡灰白/淡灰白	精良

図28 土坑2 出土遺物4 (縮尺 1/3)



番号	器種	器形の特徴：文様と調整（外/内）：流量	色調（外/内）	胎土
36	鉢	平縁、高台状：口唇部直交刻み、条痕/条痕：口径17.2cm、底径5.8cm/、1/2残	淡黄橙茶褐/淡橙灰	やや粗：細砂多
37	浅鉢？ 鉢？	内面有段：ミガキ/ナデ後ミガキ	灰褐～暗灰褐/灰褐	やや粗：細～粗砂多、細礫
38	鉢	：2本沈線磨消縄文（RL） ミガキ/ミガキ：胴部径27.2cm、1/1残	淡灰茶褐/暗茶褐	良：細～粗砂
39	浅鉢	平縁：3本沈線磨消縄文（RL） ミガキ/ミガキ	黄橙茶褐/橙茶褐	良、均質：細砂
40	浅鉢	穿孔：ミガキ、条痕/ミガキ	淡橙茶褐/暗茶褐	精良、均質：細砂、粗砂少
41	浅鉢？ 鉢？	平底：条痕、ナデ/ミガキ：底径8.1cm、1/2残	暗褐～黒/茶褐～暗茶褐	精良、均質：微砂
42	浅鉢	平底：ミガキ、ナデ/ミガキ：底径7.0cm	明橙褐/暗茶褐	良：細砂
43	浅鉢	高台状：条痕後ナデ/ナデ：底径7.4cm、1/4残	淡黄橙灰/淡黄橙灰白	良：細砂
44	浅鉢	凹底、楕円形：摩滅/ナデ、指頭痕：底径5.9cm、1/1残	黄茶褐～明橙/淡茶褐	粗：微砂多
45	浅鉢	平底、底部焼成後穿孔（補修孔？）：ミガキ、底部ナデ/ミガキ：底径14.4cm、1/3残	茶褐/茶褐	精良、均質：細砂
46	器種不明	部位不明、上下端部残存、下端は半円形：赤彩/赤彩	暗赤褐/暗赤褐	良：細～粗砂多
47	深鉢	平底：ナデ、底面指頭痕/摩滅：底径9.6cm、1/1残	明橙褐/淡黄茶褐	粗：細砂多、細礫
48	鉢	平底：ナデ/ナデ：底径5.8cm	淡黄灰褐/暗茶褐	粗：細～粗砂多、細礫
49	深鉢？	平底：ナデ/摩滅：底径9.2cm、1/2残	淡灰茶褐/淡灰茶褐	粗：細礫多
50	深鉢	平底：条痕後ナデ/摩滅：底径10.5cm	淡黄灰褐/淡黄橙灰茶褐	やや粗：細～粗砂多
51	双耳壺	把手部、ツマミは上下に穿孔あり：ミガキ、ツマミ部はナデ/条痕、指頭痕	明灰白～灰白/淡灰茶褐	良、均質：微砂、稀に細礫

図29 土坑2出土遺物5（縮尺 1/3）

器である。浅鉢には頸部がくびれるもの(36)と、皿状あるいは椀状になるもの(39)がある。37は内面に段を有する浅鉢である。45の底部には焼成後の穿孔がある。46は器種不明の小型土製品である。内外面に赤彩がみられる。47~50の底部はいずれも平底である。51は球形の胴部に円形のつまみが付く双耳壺で、つまみには上下方向の貫通孔がみられる。本遺構出土土器群には福田K式~縁帯文土器成立段階までの時期のものを含む。

石器は石鏃3点、石錘2点が出土した(図26 図版22)。石鏃はすべてサヌカイト製である。S9の先端部裏面は、両側縁に細かい調整を施している。しかし、背面側には対向する何枚かの剥離が確認されるのみである。また、厚みも厚く断面も不定形である。さらに背面側の基部下端は、基部側からの剥離が確認できるのみであり、製作途中で放棄した石鏃未成品と判断できる。S10も石鏃未成品と判断される。平面形態も不定形で、細かい調整も一部に認められるのみである。一方、S11は、基部がわずかに内湾する凹基式である。先端部は欠損する。素材面を多く残すが、周縁全体に丁寧な調整を施している。S12は流紋岩製の石錘である。円礫の上下端を大きく打ち欠き、左側縁中央にもわずかに打ち欠いた痕跡が認められる。S13は細粒花崗岩製の石錘である。小型品で上下端をわずかに打ち欠いている。

本遺構の時期は縄文時代後期前半と考えている。

土坑3 (図30・31 図版1・2・17)

調査区の南東部、AW02-98・99~AW03-08・09区に位置する。16層上面で検出した。南半部は調査区外に続いており、全体の約1/2を検出しているものと考えられる。検出した部分の長径3.6m、検出面からの深さ0.6mで、円形あるいは楕円形を呈するものと思われるが、検出時の状況は非常に不明瞭であった。調査区南

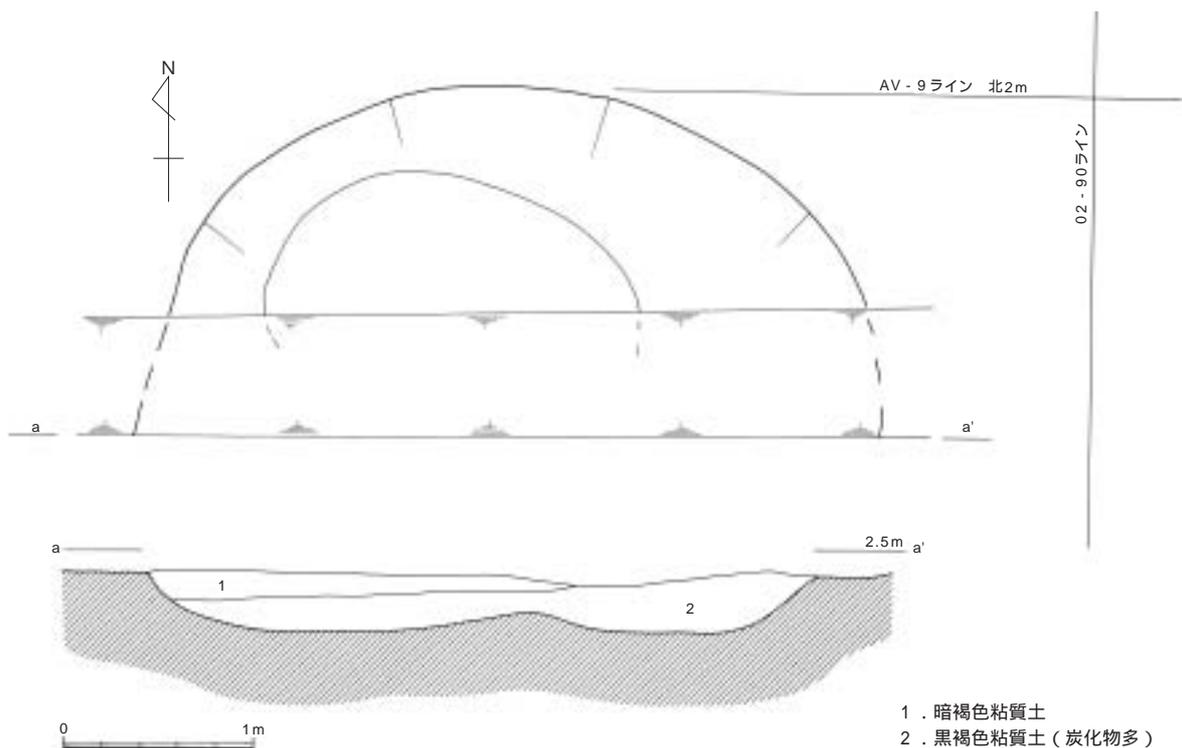
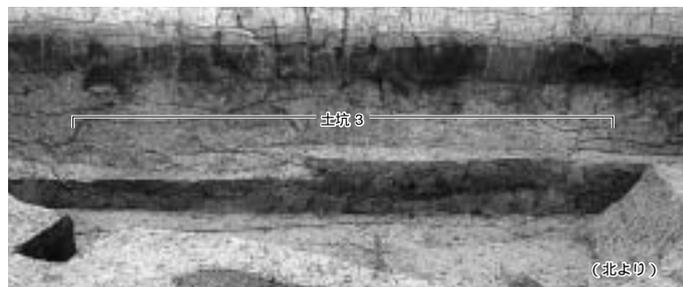
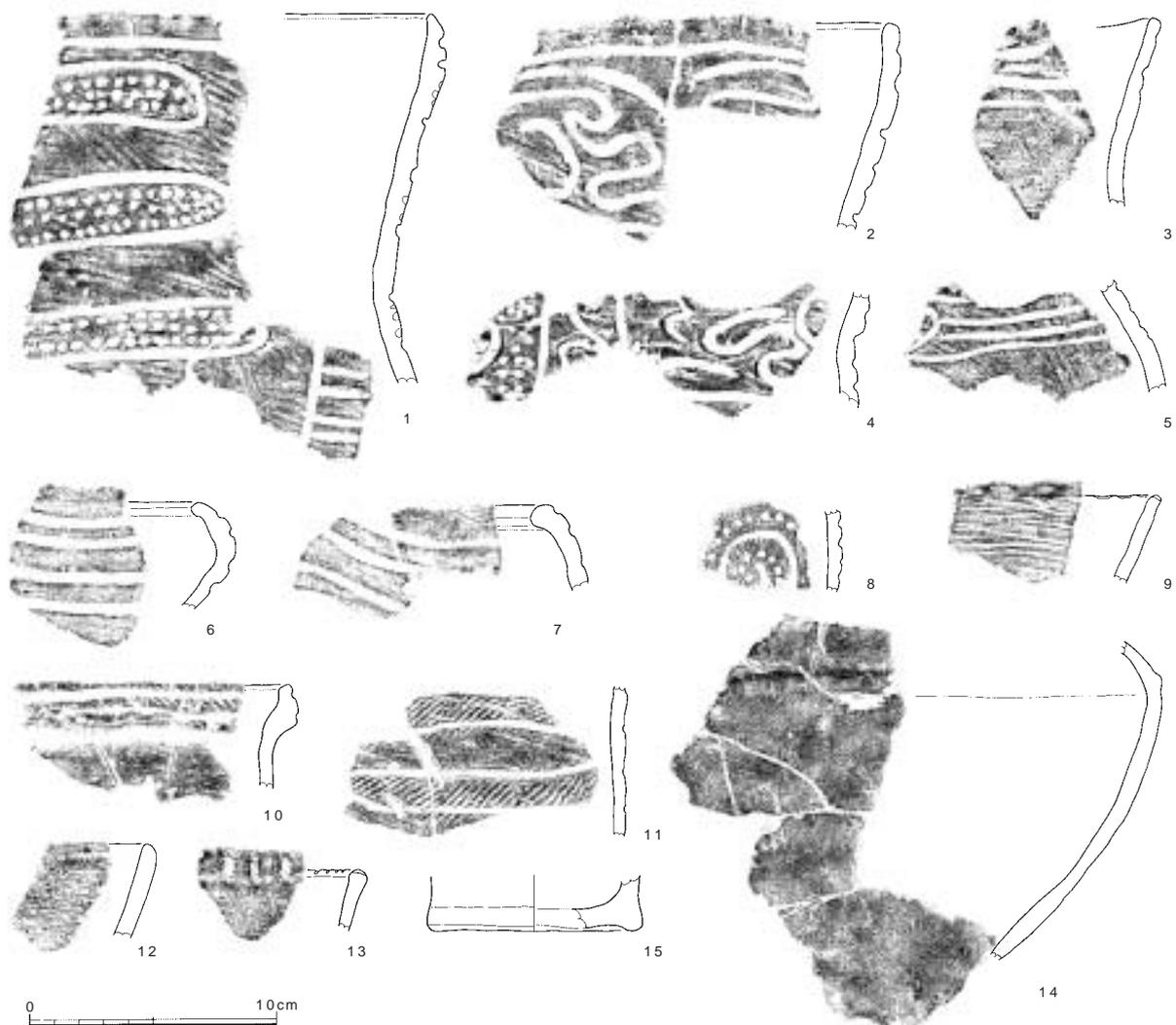


図30 土坑3 (縮尺 1/40)



番号	器種	器形の特徴：文様と調整（外/内）：法量	色調（外/内）	胎土
1	深鉢	平縁：刺突列点文充填した多段の杵状モチーフ、梯子状モチーフ、条痕/ナデ	灰褐/灰褐	やや粗：微砂多、細礫
2	深鉢	平縁：縦位の多段蛇行沈線文、ナデ/ナデ	灰褐/灰褐	やや粗：微～細砂多、細礫
3	深鉢	波状口縁：太い沈線文、ナデ/ナデ	暗灰黄/暗灰黄	良：微～細砂、稀に細礫
4	深鉢	：曲線的沈線、刺突充填した区画、ナデ/摩擦	灰褐/灰褐	やや粗：微～細砂多、細礫
5	深鉢？	：弧状文+横走平行沈線文、ナデ/ナデ	暗灰褐/淡灰褐	粗：粗砂多、細礫多
6	浅鉢	平縁：太く深い沈線、ナデ、条痕/ナデ	淡灰褐/淡灰褐	細～粗砂、稀に細礫
7	浅鉢	平縁：太く深い沈線、ナデ/ナデ	淡灰褐/淡灰褐	細～粗砂多、稀に細礫
8	深鉢？	：沈線+刺突列点文で円形モチーフ、ナデ/ナデ？	淡黒灰/暗灰褐	良：微～細砂、稀に細礫
9	深鉢	平縁：口唇部に刻み目状の貝殻文、条痕/ナデ	暗灰/淡灰褐	微～粗砂、稀に細礫
10	深鉢？	顎状口縁：口縁沈線、縄文（RL）、ミガキ/ナデ	暗褐/暗灰	やや粗：微～粗砂、細礫
11	深鉢	：2本沈線磨消縄文（RL）ナデ/条痕	茶褐/明茶褐～茶褐	精良：細砂少
12	深鉢？ 鉢？	平縁：ナデ/摩擦	淡灰褐/淡灰褐	良：細～粗砂、細礫少
13	深鉢	平縁：口唇部直交刻み、ナデ/ナデ	淡黄白/淡灰褐	精良：細砂少
14	深鉢？	：ナデ/ナデ	淡灰褐/淡灰褐	良：粗砂、細礫多
15	深鉢	高台状、直立気味に立ち上がる：ナデ、指頭痕/ナデ：底径8.7cm、1/4残	暗灰/淡黒灰	粗：粗砂多、細礫多

図31 土坑3出土遺物（縮尺1/3）

壁断面の観察では本遺構の上部は別のピット状の落ち込みによって破壊されているため、厳密な掘り込み面を確定することはできなかった。

本遺構では149点の縄文土器片を検出し、15点を図化した（図31）。図31-1～5は有文深鉢である。1は3段に区画された隅丸方形の区画の内部に刺突を多数施すものである。頸部の屈曲部下半には梯子状文がある。2・4は太く深い沈線によって入り組み文が描かれる。6・7は浅鉢である。8は深鉢胴部片、9は無文深鉢の口縁部片である。口縁端部に貝殻圧痕が施される。10は「く」字状に折れる口縁部である。13は2本沈線で磨消縄文の胴

部片である。11・12は粗製深鉢の口縁部で11は無文、12は口縁部に浅い刻みを施すものである。14は高台状の底部である。15は無文胴部片である。内外面とも丁寧なナデによる調整である。出土土器群は中期末に位置づけられるものが主体であるが、一部福田K式、津雲A式に該当するものを含む。

出土遺物からみると中期末～後期前葉のものが認められるが、上部に重複遺構があることから、後期遺物が混入している可能性も考えられ、中期末の遺構である可能性を考えたい。

土坑4 (図32・33 図版1・2・15・17・22・23)

調査区南東部、AW02-78・79・88・89区に位置する。16層上面で検出した。土坑4の南半部は調査区外に続くものと考えられ、検出部分の長径2.3m、検出面からの深さ0.5mで、復元形は楕円形を呈するものと考えられる。本遺構についても前述の土坑3と同様、検出時の状況が非常に不明瞭であった。断面観察では黒褐色粘質土が本遺構の埋土であり、その上位の土層は、13層からの落ちこみと判断した。

隣接する「土器集中箇所」については、若干の凹みの中に遺物の集中が認められたが、掘り込み面は明確でなく、落ち込みの下端となるラインと、基盤層である16層の下端ラインとがちょうど合致するといったことから、遺構ではなく「土器集中箇所」と報告することとした。すなわち出土遺物は16層に包含される遺物である可能性が高いが、土坑4と「土器集中箇所」との遺物の内容は類似し、近接した位置にあることから、ここでまとめて掲載する。本遺構の時期は、遺物の内容から考えて縄文時代中期末～後期初頭の範疇と考えられる。

土坑4から土器200点、石器1点、土器集中1から土器約100点、石器1点が出土している。そのうち土坑4の土器6点、石器1点(図33-6・7・10・11・13・14・S15)、土器集中1の土器8点、石器1点(図33-1~5・8・9・12・S14)を図化した。

土坑4出土土器は中期末～後期初頭のものであるため、遺物からは時期は後期初頭と考えられる。1は波状口縁を呈する沈線文系の土器で、沈線は太く、深い。2・3は平縁で、口縁部に並行する沈線を数条描くものである。4・5は口縁部が内面に屈曲する形状を呈するもので、これらも沈線文系の土器群である。6・7は弧状の沈線を数条平行に引いたあと、内部に刺突による列点文を施すものである。8は屈曲部の段の上面に竹管の押し引きによる刺突文を連続して施すものである。9の浅鉢は内面に縦位の隆帯を有し、内面に肥厚した口縁部とそれに連続する隆帯上に縄文を施す。肥厚した口縁部下端と隆帯の左右には深くえぐるような沈線が引かれる。10~14はいずれも条痕による調整である。このうち、10は刻みを、12は貝殻圧痕を施すものである。出土土器群は中期末に位置づけられるが、9はそれ以降に位置づけられる可能性もある。

石器は石匙、スクレイパーが各1点ずつ

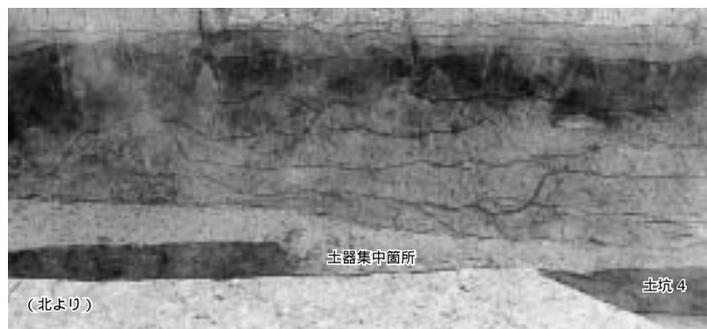
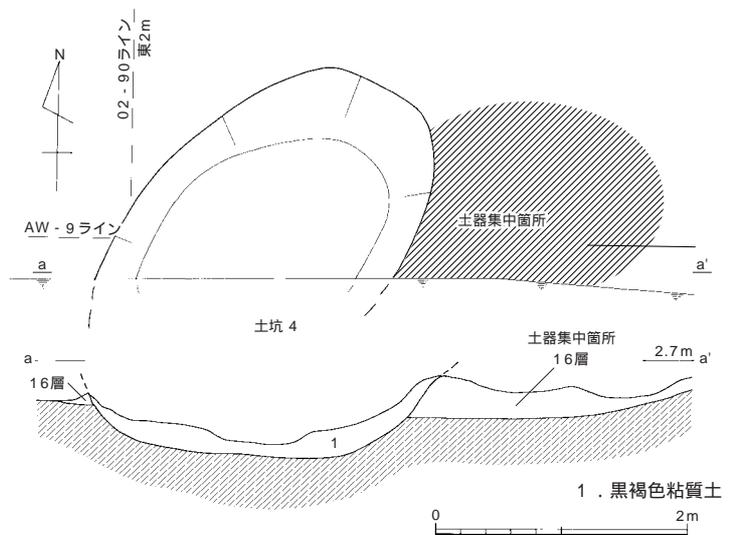
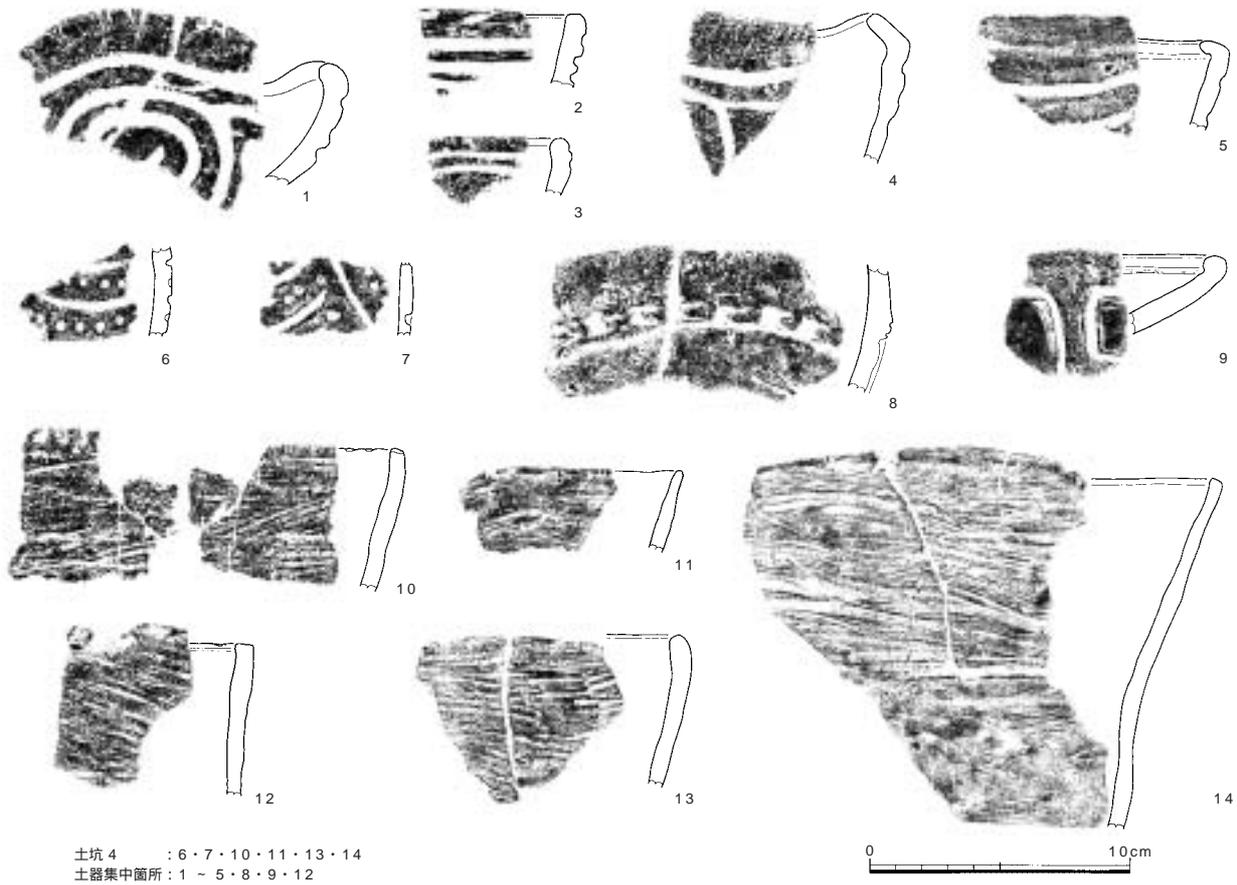
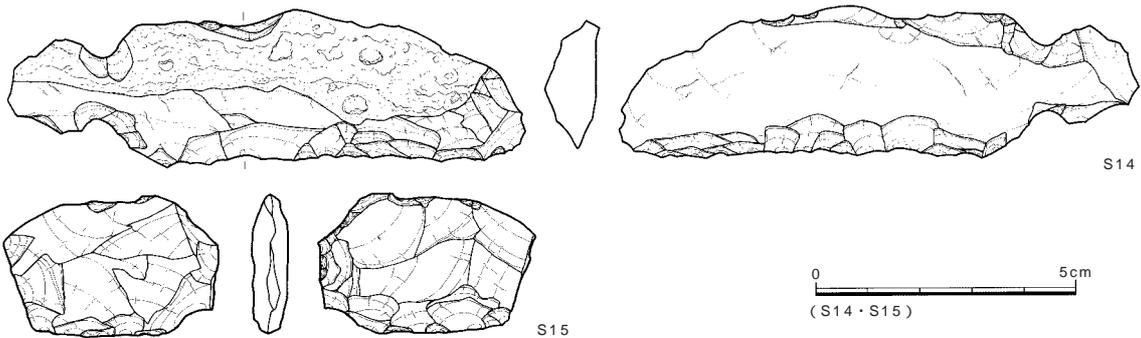


図32 土坑4・土器集中箇所(縮尺 1/60)



土坑4 : 6・7・10・11・13・14
土器集中箇所: 1 ~ 5・8・9・12



番号	器種	器形の特徴: 文様と調整 (外/内)	色調 (外/内)	胎土
1	深鉢	波状口縁: 太い沈線、渦巻文、ナデ/ナデ	橙褐/橙褐	精良: 細~粗砂、稀に細礫
2	深鉢	平縁: 太い沈線、ナデ/ナデ	黒褐色/褐	やや粗、細~粗砂、細礫多
3	深鉢	平縁: 2本沈線、ナデ/ナデ	灰黄褐/暗褐	やや粗、細~粗砂、細礫多
4	深鉢	口縁部内面に屈曲: 太い沈線、ナデ/ナデ	褐~黒褐/黒褐	良: 細~粗砂、細礫多
5	深鉢	口縁部内面に屈曲: 太い沈線、ナデ/ナデ	黒褐色/褐	良: 細~粗砂、細礫多
6	深鉢	: 沈線+刺突列点文、ナデ/ナデ	暗茶褐/暗茶褐	良: 微~細砂
7	深鉢	: 沈線+刺突列点文、ナデ/ナデ	暗褐/淡黒灰	良: 微~細砂、稀に細礫
8	深鉢	有段: 段下端部に竹管押引文、ナデ?/ナデ	淡橙褐/淡黄褐	良: 細~粗砂、稀に細礫
9	浅鉢	平縁、内面隆帯: 方形区画の隆帯沿いに沈線文、条痕/口唇部・隆帯上縄文(RL)、ナデ?	淡灰~灰褐/灰褐	精良: 細~粗砂、稀に細礫
10	深鉢	平縁: 口唇部直交刻み、条痕/条痕	暗灰褐/暗灰	粗: 細~粗砂多、細礫多
11	鉢?	平縁: 条痕/ナデ	暗灰黄/暗灰黄	良: 細砂、粗砂少
12	深鉢	: 口唇部貝殻押圧文、条痕/ナデ	黄褐/黄褐	良: 細砂、粗砂~細礫多
13	深鉢? 鉢?	平縁: 条痕/条痕	暗灰褐/暗黄灰	良: 細~粗砂、細礫多
14	深鉢	平縁: 条痕/ナデ	暗褐/淡黄灰	良: 細~粗砂、稀に細礫

番号	器種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石材	特徴
S14	石匙	3.05	10.00	1.09	28.4	サヌカイト	横長剥片の一端に抉り。下辺は丁寧な両面調整。
S15	スクレイパー	4.65	5.50	0.90	19.7	サヌカイト	下縁に不規則な両面調整。左側縁は折れの可能性。

図33 土坑4・土器集中箇所出土遺物 (縮尺 1/3・2/3)

出土した(図33 図版22)。サヌカイト製石匙(S14)は、「土器集中箇所」から出土した完形品で、原礫面を残し厚みをもつ横長剥片の一端に丁寧な両面調整によって抉りをもうけている。また、下縁全体に丁寧な両面調整を施すことで直線的な刃部をつくり出す。サヌカイト製スクレイパー(S15)は、全体に剥離を重ね、厚みを整えた素材の下縁に両面調整を行っており、右側縁には抉りを意図したような調整も認められる。ただ、抉りは不明瞭で刃部も鈍く、左側縁の折れのために途中で廃棄された可能性もある。

土坑5 (図34~37 図版4・5・10・15・23・26)

調査区の中央付近AW02-94・95・AW03-04・05区に位置する。長径2.7m、短径2.2m、深さ0.65mである。本土坑は15層上面から掘り込まれたものであり、埋土は1-4層の暗灰色砂質土層と、それより下位の灰褐色~暗褐色系の砂質~粘質土層とに大別される。

図34をみると、土層観察のための土手と側溝のためにほぼ中央部分が断裂された状況にある。このため、平面のラインの検出にはやや困難を生じたこともあり、このことと遺物の構成とを考え合わせると、15層上面から掘り込まれた土坑と、もうひとつ14層からの土坑とが重複している可能性も考えられる。図示しているものは古段階のプランであり、その時期は後述する福田K式(古相)の土器(図35-1~6)から縄文時代後期前葉と考えられる。また新しい時期の別遺構が重複しているとすると、埋土1-4層にあたる可能性が想定される。その時期は縁帯文土器成立段階と考えられるが、いずれにしても、遺物の正確な出土位置・レベルは不明であり、確定は困難である。

出土遺物には縄文土器と石器があり、190点の土器のうち土器23点、石器4点を掲載している(図35~37)。

図35-1~13は有文の土器、口唇部を肥厚した浅鉢、注口土器、双耳壺、図36-14~22は無文深鉢あるいは鉢である。1~4・6は2本の沈線によって縄文帯が区画された磨消縄文によるものである。5は口縁部が「く」字状を呈する磨消縄文で、沈線が多条化、口縁部外面には杵状の横位の区画がみられる。7~9はいずれも「く」字状に屈曲した口縁部を有する破片である。7は口縁部文様帯のほか、屈曲部の下位にも文様

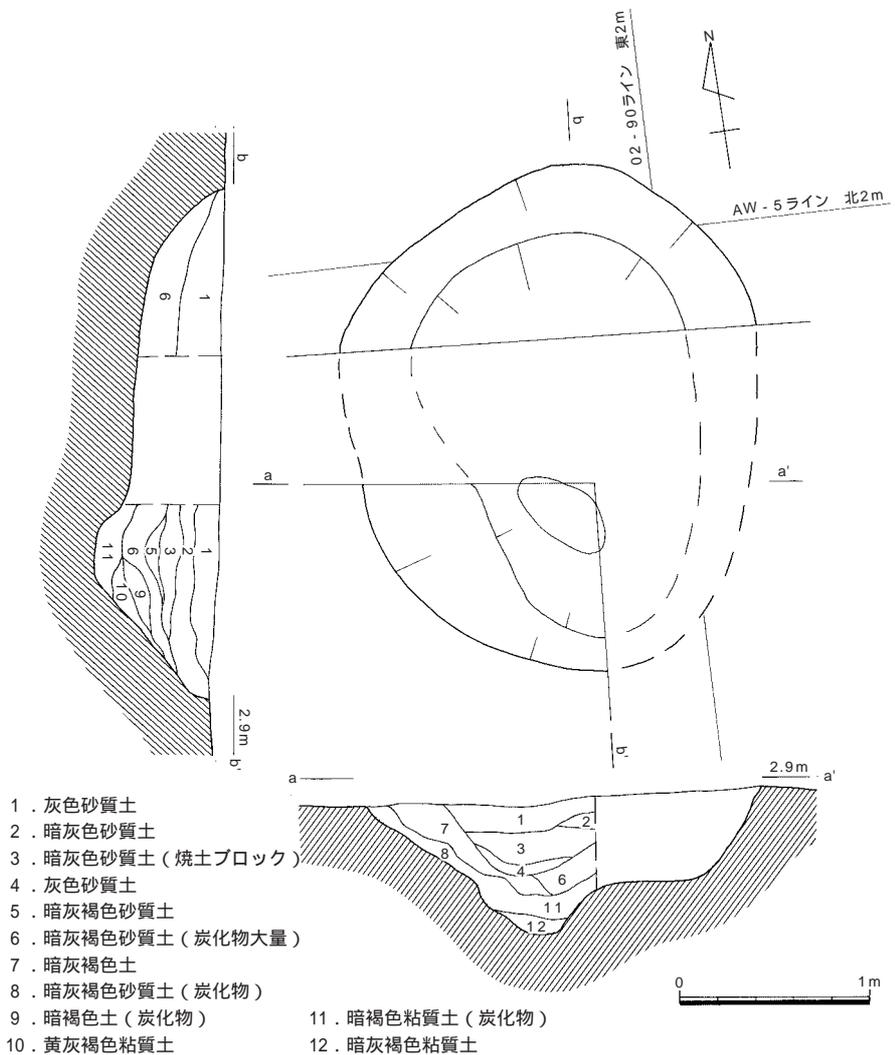
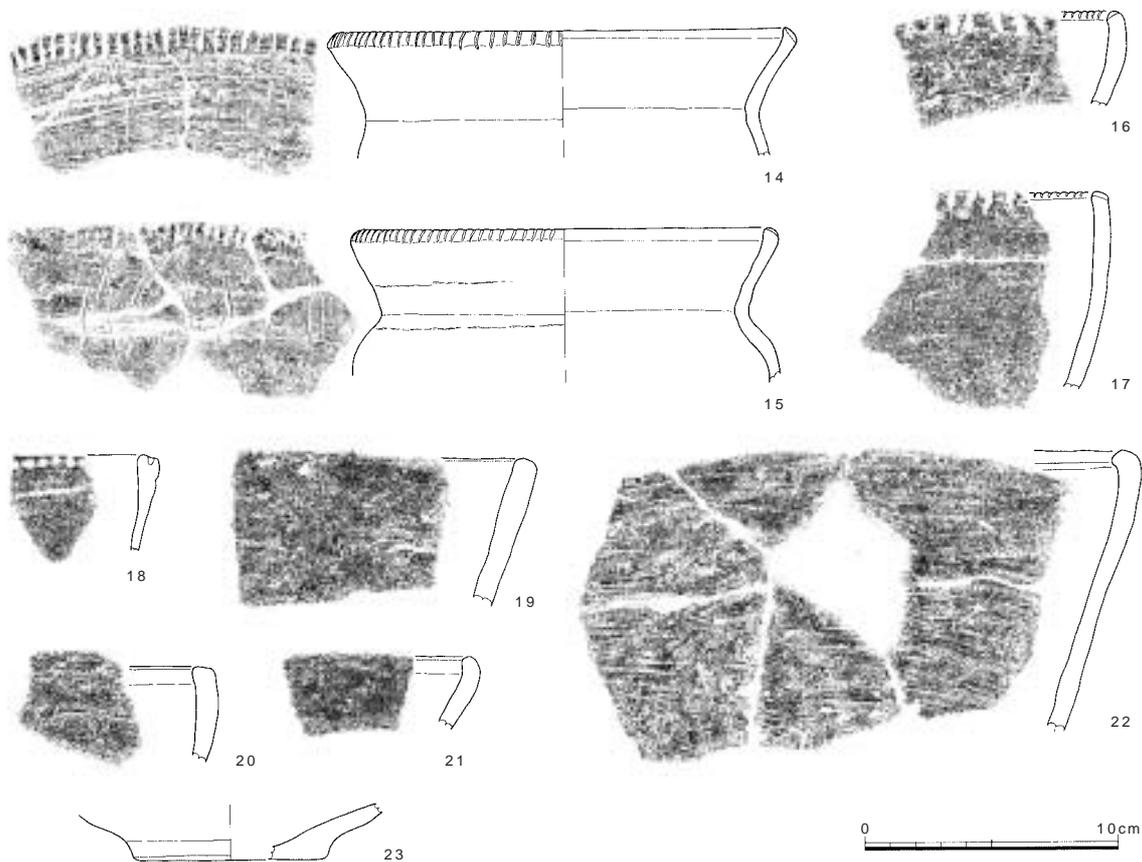


図34 土坑5(縮尺 1/40)



番号	器種	器形の特徴：文様と調整（外/内）：法量	色調（外/内）	胎土
1	深鉢	平縁、端部内面に屈曲して肥厚：2本沈線磨消縄文（RL） ナデ/ナデ	淡灰黄～黄褐/淡灰白	粗：細礫多
2	深鉢	平縁：2本沈線磨消縄文/ナデ？	淡橙/淡黄灰	精良：細礫
3	鉢	平縁：2本沈線磨消縄文（RL） ミガキ/ナデ	暗桃灰/茶灰	良：細～粗砂、細礫少
4	鉢？ 浅鉢？	平縁：2本沈線、摩滅/摩滅	明橙褐/暗茶褐	粗：細砂多
5	深鉢	波状口縁：沈線深く引く、杵状の区画、磨消縄文（RL） ミガキ、赤彩/ミガキ、赤彩	灰白/淡黄褐	精良：微～細砂
6	深鉢	：器面を広く埋める鎌形モチーフ、ミガキ、縄文（RL）/ミガキ	暗茶褐/暗灰茶褐	精良：細砂
7	深鉢	波状口縁、波頂下に円孔：（対向）連弧文・曲線沈線文、摩滅/摩滅	淡黄橙/暗灰褐	やや粗：細礫
8	深鉢	波状口縁、波頂部に半円＋鈎形モチーフ、摩滅/摩滅	淡黄白/明黄褐	粗：細砂多、細礫
9	深鉢	波状口縁、波頂部突起：沈線内に刺突列点文、/ナデ	明橙/淡橙灰	精良：細砂
10	浅鉢	平縁、端部内面に肥厚：摩滅/ミガキ	淡灰褐/淡黒褐	良：微～細砂
11	浅鉢	平縁＋突起、内面隆帯、穿孔：ナデ、縄文（RL）/隆帯上縄文（RL）、ナデ：口径24.7cm、1/6残	茶褐～暗茶褐/灰黄褐	良：細砂多、細礫
12	注口土器	片口状：ナデ/ナデ	暗褐～灰褐/暗褐	精良：細砂
13	双耳壺	把手部、ツマミ状、上下の貫通孔：沈線内に刺突列点文、ナデ/ナデ	灰～暗褐/灰	精良、細砂（白色粒）多

図35 土坑5出土遺物1（縮尺 1/3）



番号	器種	器形の特徴：文様と調整（外/内）：法量	色調（外/内）	胎土
14	深鉢	平縁：口唇部直交刻み、糸痕/ナデ：口径16.0cm、1/5残	暗灰褐～黒褐/暗灰褐～黒褐	良：細～粗砂
15	深鉢	平縁：口唇部斜め刻み、ナデ/ナデ：口径17.7cm、1/5残	暗橙褐/暗橙褐	やや粗：細～粗砂、細礫
16	深鉢	平縁：口唇部斜め刻み、糸痕？/ナデ？	灰茶褐～暗褐/灰茶褐～茶褐	良：細砂多、細礫
17	深鉢	平縁：口唇部直交刻み、糸痕後ナデ？/ミガキ	暗茶褐～黄褐/暗灰褐	粗：細礫多
18	深鉢	平縁：口唇部刺突、摩滅/摩滅	淡黄褐/淡黄褐	良：細礫少
19	深鉢	平縁：糸痕/糸痕	褐～淡茶褐/橙灰	良：細砂多、細礫少
20	深鉢	平縁：糸痕、赤彩/ナデ？	明橙褐～暗褐/淡黄灰褐	粗：細砂～粗砂多
21	鉢？	平縁：ナデ/ナデ	暗灰褐/暗灰茶褐	精良：細砂
22	深鉢	平縁：糸痕/ナデ	黄灰褐/黄灰褐	やや粗：細～粗砂多
23	浅鉢？ 鉢？	平底：ナデ？/ナデ？：底径7.3cm、1/6残	明橙/淡黄灰	粗：細砂多、細礫

図36 土坑5出土遺物2（縮尺 1/3）

を描出している。9は弧線の内部に刺突による列点文を施している。10・11は皿状の浅鉢である。10は口唇部を内側に肥厚させたもの、11は口唇部内面に縄文帯を施し、四方に突起を付したもので、突起の外面には小刺突を有する。突起から内面に向けて縦位の隆帯が伸びる。この縦位の隆帯は内面を口縁部に平行して走る隆帯に接続する。これらの隆帯はRLが施される縄文帯となっている。12は注口土器である。12は内面に肥厚させた口縁部を有するボウル状の器形となると思われる。この口縁の一端を片口状に外方に引き出して注ぎ口としているものである。13は双耳壺の把手である。ほぼ円形のつまみ状で上方から下方に向けて穿孔が施される。14～17は口唇部に刻みを施すもの、18は口唇部の端面に刺突を施すもの、19～22は無文深鉢もしくは鉢である。23は底部の小片であるが、立ち上がりの角度が緩いことから浅鉢の底部と考えられる。

出土土器群には福田K式、縁帯文土器成立段階のものを含む。

石器はスクレイパー片、加工痕のある剥片、叩石、石錘が各1点ずつ出土した（図37 図版23・26）。サヌカイト製スクレイパー片（S16）は、鎌状の形態をしたものの先端部と考えられる。下縁に細かい両面調整を施し、刃部をつくり出す。サヌカイト製の加工痕のある剥片（S17）は、上縁と左側縁に不規則な両面調整が認められる。叩石（S18）は流紋岩製の楕円形円礫を用いており、上端に敲打痕がわずかに確認できる。

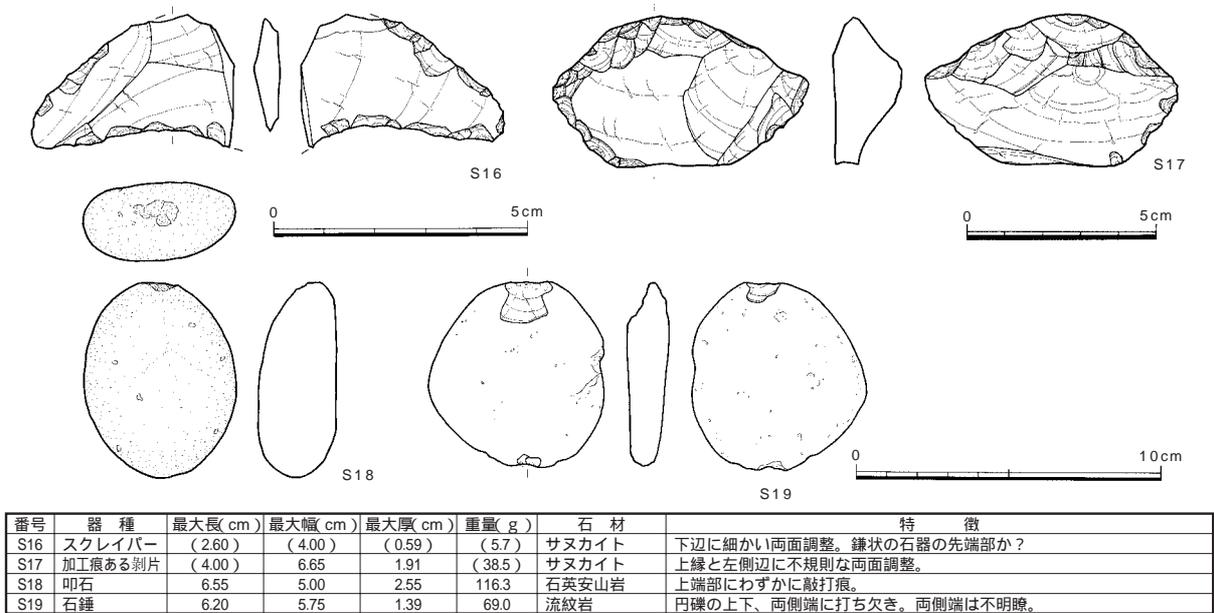


図37 土坑5出土遺物3 (縮尺 1/2・2/3・2/5)

土坑6 (図38～40)

AW02 - 86・87区で、14層上面で検出した。南北に長い不整楕円形を呈し、長径4.3m、短径2.4m、深さ0.6mである。検出面の標高は2.84mを測る。埋土は15枚に分層したが、主体となるのは黄褐色～灰褐色砂質土である。bb断面2・4・5層には炭化物が含まれており、aa断面9層は炭化物は確認されていないが、これらに対応するものと考えている。しかし被熱面などは認められず本土坑の機能を判断することは困難であった。本遺構からは23点の縄文土器が出土したが、いずれも小片で1点のみ図化した(図39)。図39-1は有文深鉢口縁部である。平行する2条の波状沈線文の内部には縄文が施される。沈線は深く、太い。本遺構の時期は縄文時代後期初頭と考えられる。

土坑7 (図40～43、図版26)

AW02 - 86区に位置する。南端を土坑6に切られている。長径1.6m、短径1.5m、深さ0.6mで、平面形は歪な楕円形状を呈する。検出面は14層上面である。検出面は標高2.9m、底面は2.25mである。埋土は灰褐色土を主体とする。土坑7からは7点の縄文土器が出土したが、いずれも小片で1点のみ図化した(図43、図版26)。1は深鉢の底部である。高台状の底部で立ち上がりの角度がきつい。石器は叩石1点(S20)安山岩製の杵状の礫を素材としたもので、下端部に明瞭な敲打痕が認められる。また、表面にもわずかに敲打痕が残る。



図38 土坑6・7

その他に本土坑からは76点の礫が出土している(図41)。0.5×0.4mの範囲にま



番号	器種	器形の特徴：文様と調整(外/内)	色調(外/内)	胎土
1	深鉢	平縁：磨消縄文(RL)、ナデ/ナデ	明橙褐/淡黄橙白	良：細礫

図39 土坑6出土遺物(縮尺 1/3)

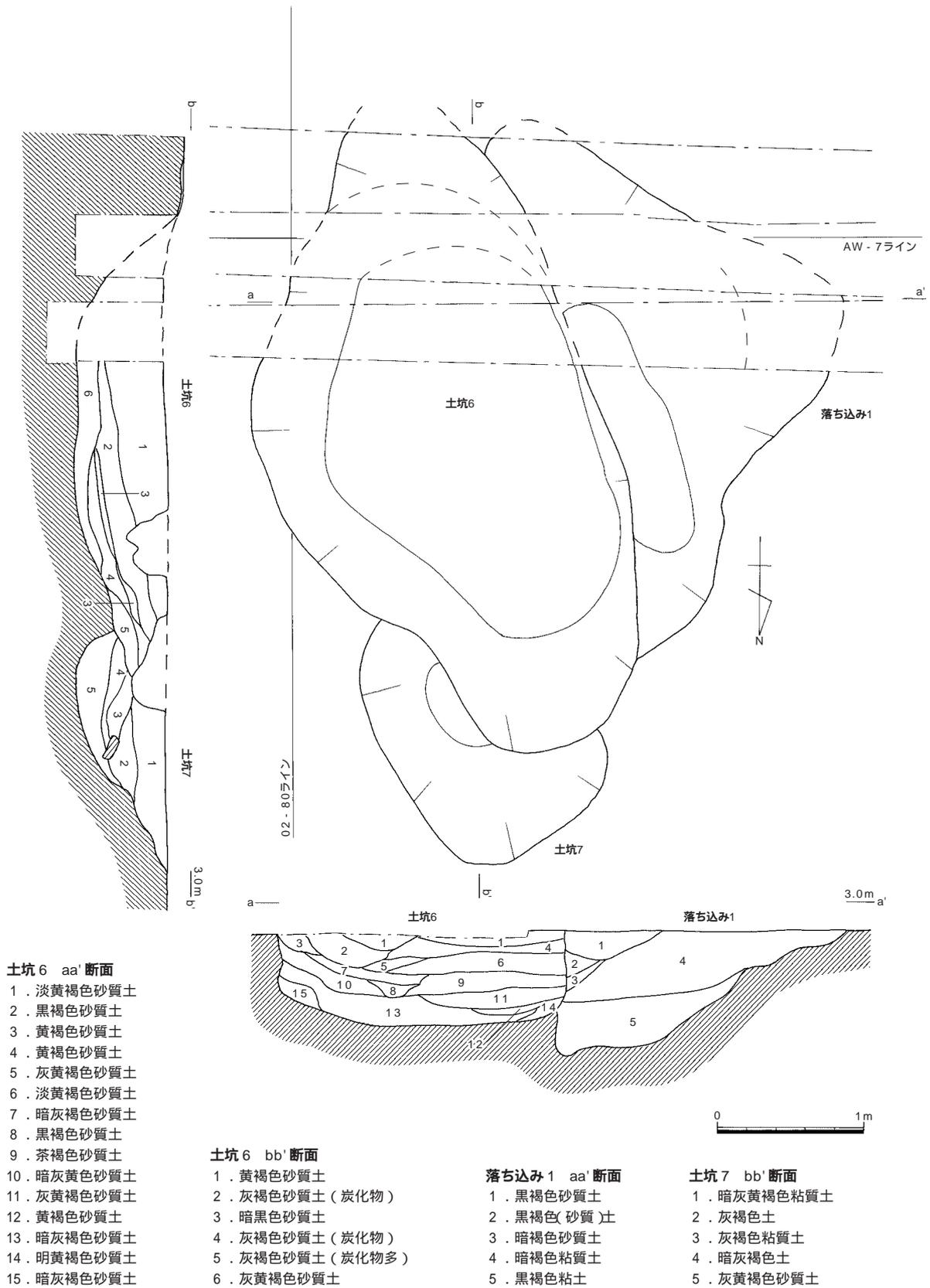


図40 土坑6・7・落ち込み1 (縮尺 1/40)

とまっており、礫群の上面は標高2.45mで、礫群の高さ0.2m程度である。これらはいずれも円礫で、石材には様々な種があり、特定の石材の選択といったことはみられない。すべて火を受けた痕跡があり、そのうち22個については、顕著に被熱痕が認められた(表4・図42)。赤化が著しく、割れが生じていたり、原形を留めないほど壊れたものもある。長さ1.9cm~15.0cmのものまでであるが、長さ3~7cm大の小ぶりなのが6割(58点)を占める。重さでは17g~1,563gまでのものがあるが、250gまでの礫が8割(60点)を占める。総重量は14.8kgを測る。土坑7の底・壁面に被熱痕跡は認められない。以上のような礫群の被熱および出土状況からこの礫が焼石を用いる調理などに使用された可能性が考えられる。ただ本土坑内に

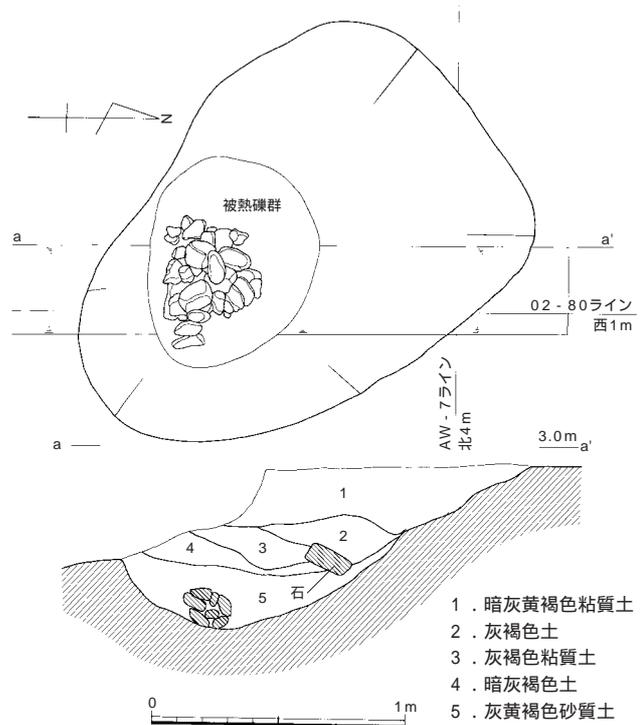
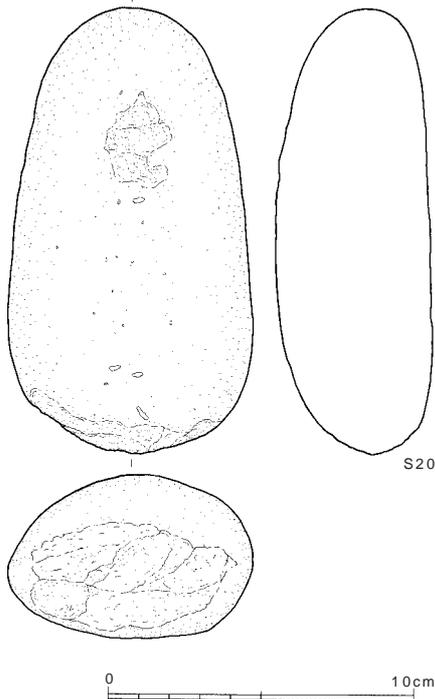
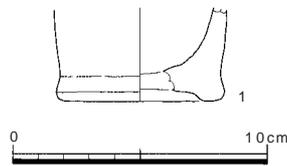


図41 土坑7被熱礫群出土状況(縮尺 1/30)



1 被熱による礫の破断(76) 2 被熱による礫の破断(10・16)
3 破断部分の詳細(76) ()内の番号は表4に対応

図42 土坑7出土礫

番号	器種	器形の特徴: 文様と調整(外/内): 法量	色調(外/内)	胎土			
1	深鉢?	高台状、径小さく、直立気味に立ち上がる: ナデ/ナデ: 底径6.4cm、1/4残	暗灰褐/淡乳白	やや粗: 細礫多			
番号	器種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石材	特徴
S20	叩石	14.75	8.60	5.30	983.8	安山岩	下端に明瞭な敲打痕。上端にもわずかに敲打痕。

図43 土坑7出土遺物(縮尺 1/3・2/5)

表4 土坑7出土被熱礫群一覧

番号	石材	長さ(cm)	重さ(g)	被熱	番号	石材	長さ(cm)	重さ(g)	被熱	番号	石材	長さ(cm)	重さ(g)	被熱
1	流紋岩	15.0	1563.1		27	流紋岩	5.4	121.4		53	粘板岩	3.5	41.3	
2	流紋岩	9.7	302.5		28	流紋岩質凝灰岩	8.6	352.3		54	粘板岩	5.5	168.4	
3	流紋岩質凝灰岩	10.1	364.8		29	細粒花崗岩	6.1	81.1		55	流紋岩質凝灰岩	7.0	232.5	
4	粘板岩	8.8	232.9		30	流紋岩	6.7	140.7		56	安山岩	6.1	274.3	
5	流紋岩質凝灰岩	12.7	707.0		31	流紋岩	4.6	54.7		57	流紋岩	4.3	26.0	
6	石英脈	14.0	1409.0		32	粘板岩	3.5	34.9		58	流紋岩・珪質片岩	3.1	31.3	
7	石英安山岩	9.6	434.8		33	流紋岩	7.1	168.0		59	流紋岩	5.6	101.5	
8	粘板岩	4.0	60.9		34	流紋岩	5.8	81.5		60	流紋岩	5.6	143.2	
9	細粒砂岩	7.1	228.2		35	流紋岩	3.2	39.7		61	石英安山岩質凝灰岩	6.7	189.1	
10	流紋岩	9.1	364.0		36	細粒砂岩	3.7	58.7		62	粘板岩	7.2	125.3	
11	流紋岩	9.7	467.5		37	花崗岩	7.0	139.9		63	珪質片岩	8.7	223.6	
12	流紋岩	7.7	282.0		38	細粒砂岩	3.5	34.2		64	石英脈	6.5	210.6	
13	珪質片岩	6.6	168.4		39	断層岩	2.2	22.3		65	流紋岩	8.1	272.4	
14	流紋岩	6.1	127.6		40	粘板岩	1.9	17.4		66	流紋岩	3.9	44.3	
15	泥岩	9.6	430.6		41	泥岩	3.8	33.3		67	流紋岩	6.7	109.0	
16	流紋岩	7.9	168.2		42	流紋岩	3.9	82.9		68	細粒砂岩	3.0	31.3	
17	砂岩	5.0	110.8		43	珪質片岩	7.0	86.1		69	粘板岩	3.9	47.5	
18	砂岩	8.6	109.5		44	流紋岩	2.9	32.3		70	珪質片岩	5.0	50.5	
19	粘板岩	5.7	139.0		45	花崗岩	3.6	67.4		71	粘板岩	3.5	51.7	
20	細粒砂岩	9.6	654.5		46	流紋岩	5.8	144.7		72	粘板岩	5.1	58.6	
21	流紋岩	7.0	247.7		47	粘板岩	4.9	67.5		73	流紋岩	4.5	43.9	
22	流紋凝灰岩	8.2	259.6		48	粘板岩	4.7	63.6		74	細粒砂岩	6.6	243.0	
23	流紋岩質凝灰岩	9.7	380.6		49	粘板岩	5.0	47.3		75	流紋岩質凝灰岩	6.8	66.5	
24	細粒斑状花崗岩	7.3	204.1		50	粘板岩	4.5	45.3		76	流紋岩	7.9	255.6	
25	粘板岩	4.5	65.9		51	粘板岩	4.1	51.2						
26	珪質片岩	7.7	153.2		52	礫岩	6.7	135.0						

:被熱が特に著しい
「長さ」:最大長を示す

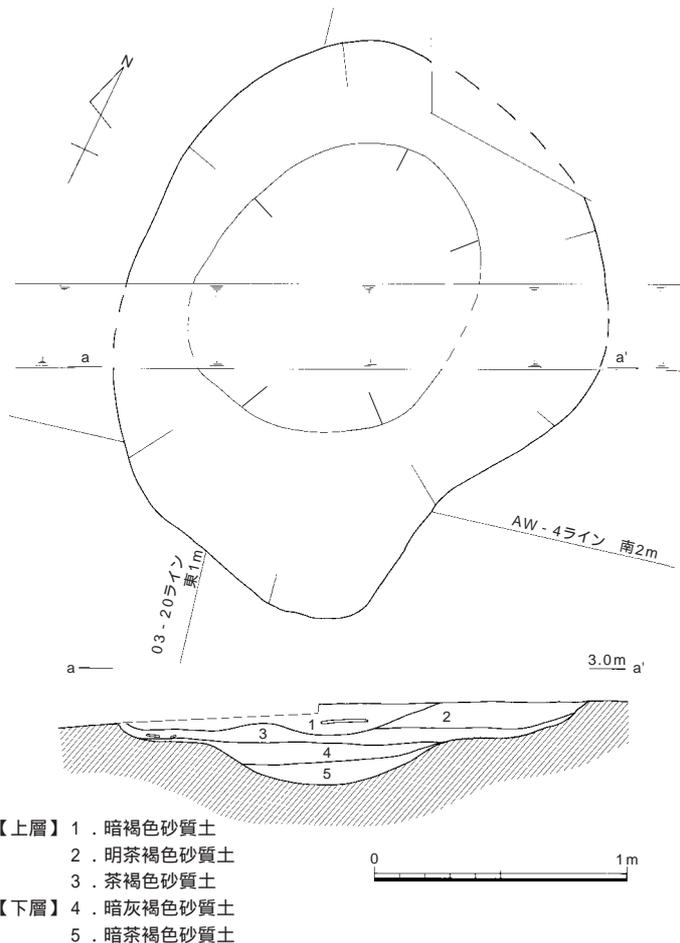
は、被熱面は認められず、埋土中にも焼土、炭といった加熱作業に関連するものはみられないことから、他所で被熱し、まとめて廃棄された可能性を考えている。

本遺構の時期については縄文時代後期と推定し、それ以上の断定は困難である。

土坑8 (図44~46 図版4・5・15・27・28)

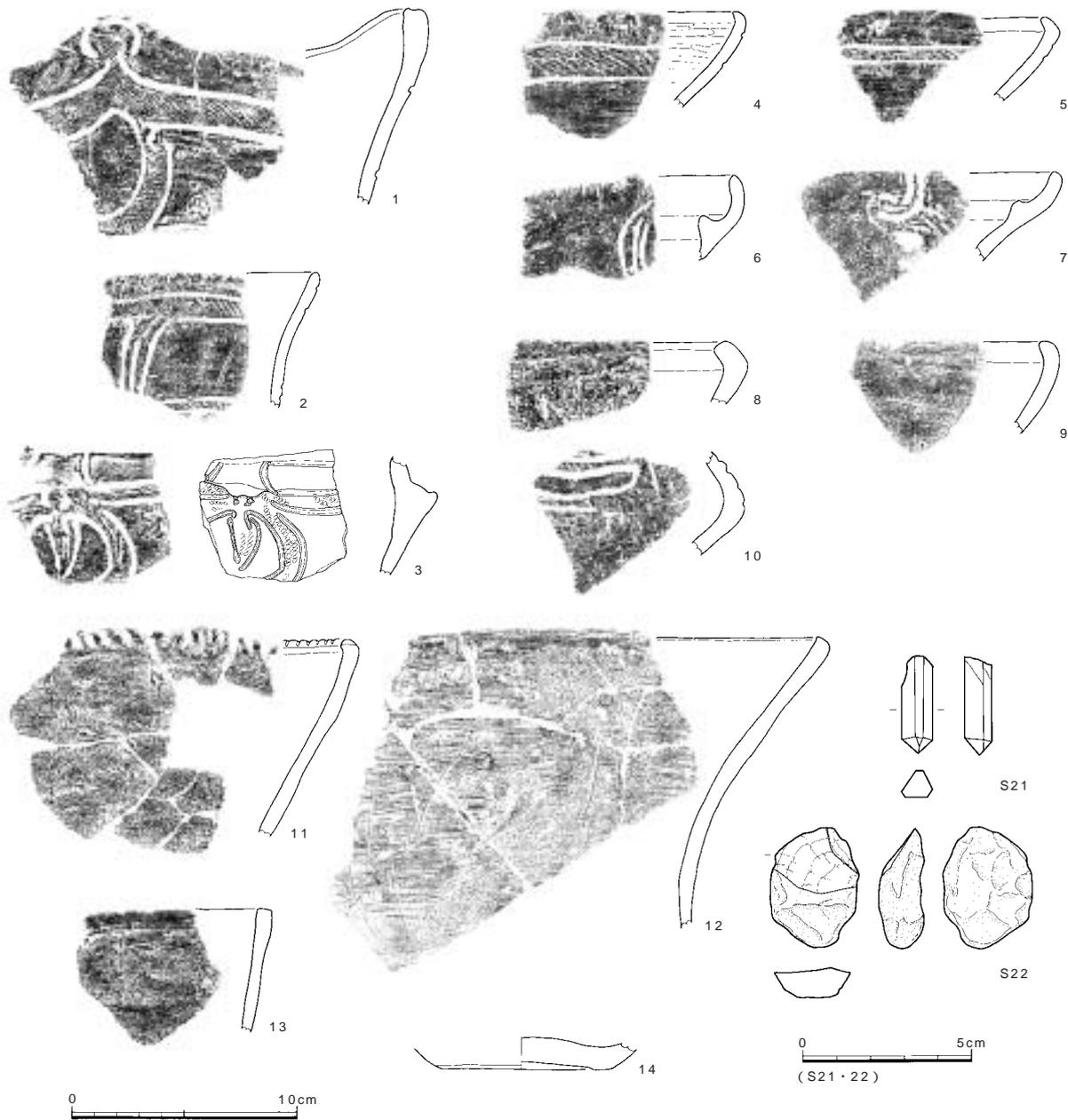
AW03-14区に位置する。前述の土坑2の南西角を切って構築されている。検出面は14層である。長径2.0m、短径1.8m、深さ0.3mを測る。検出面の標高2.86m、底面のレベル2.57mである。埋土は5枚に分層されるが、大きくは上層の暗褐色砂質土層と、下層の暗灰褐色砂質土の2種である。遺物を多く含むのは主に上層であり、基本土層である13層に近似した埋土中から土器185点、石器2点が出土し、そのうち土器14点・石器を図示した(図45)。13層に近似した埋土から出土しているため、出土遺物の中には土坑に直接伴うものかどうかは疑問であるものがあり、13層由来の可能性を残す。

土器のうち図45-1~3は有文深鉢、4~10は浅鉢、11~13は無文深鉢、14は浅鉢の底部である。1は波状口縁波頂部の円文、その下位にJ字文が描かれる。2の口縁部文様帯は2本沈線であるが、垂下する文様帯は3本沈線である。3は円形モチーフの上端面が剥落して段状になる。段より上位の器壁はやや内反りのカーブと



- 【上層】 1. 暗褐色砂質土
- 2. 明茶褐色砂質土
- 3. 茶褐色砂質土
- 【下層】 4. 暗灰褐色砂質土
- 5. 暗茶褐色砂質土

図44 土坑8 (縮尺 1/30)



番号	器種	器形の特徴：文様と調整（外/内）：分量	色調（外/内）	胎土
1	深鉢	波状口縁：2本沈線磨消縄文（RL）幅広縄文帯、J字文？、ミガキ/祭痕後ナデ	淡灰～淡黄灰/暗灰	精良：細砂、稀に細礫
2	深鉢	平縁：3本沈線磨消縄文（RL）ナデ/ナデ？	淡橙白/茶褐	精良：細砂、稀に細礫
3	深鉢	屈曲部に段、橋状突起？剥落痕：円形モチフ内に矮小化したJ字文？、磨消縄文（RL）ナデ/ミガキ	橙褐/灰茶褐～暗灰茶褐	精良、均質：微～細砂
4	浅鉢	平縁：2本沈線磨消縄文（RL）ミガキ、ナデ/ミガキ	明橙/淡橙灰褐	精良：細砂
5	浅鉢	平縁：2本沈線磨消縄文（RL）ミガキ？/ミガキ？	明橙/淡橙灰褐	精良：細砂
6	浅鉢	平縁、内面有段：3本沈線磨消縄文（RL？）、ナデ/ナデ	乳白～灰/乳白～淡灰白	精良：細砂
7	浅鉢	平縁、内面有段：2本沈線？磨消縄文（RL？）、ナデ/ナデ	乳白/乳白～淡茶褐	精良：細砂
8	深鉢	平縁：摩滅/摩滅	淡灰褐/淡灰茶褐	粗：細～粗砂多、細礫
9	浅鉢	平縁：ミガキ/ミガキ？	暗茶褐/暗茶褐	良、均質：細～粗砂
10	浅鉢	；杵状区画文、磨消縄文？、摩滅/摩滅	暗褐/暗灰褐	精良、均質：細砂
11	深鉢	平縁：口唇部斜め刻み、祭痕/摩滅	暗茶褐～暗褐/明茶褐	粗：細～粗砂多、細礫
12	深鉢	平縁：祭痕/祭痕	淡黄白/明黄茶褐	精良、均質：細～粗砂
13	深鉢	平縁：ナデ/祭痕	暗茶褐/茶褐	良：細～粗砂
14	浅鉢	高台状：摩滅/ナデ：底径7.4cm、1/1残	淡黄白～暗灰褐/灰	精良、均質：細砂、稀に細礫

番号	器種	最大長（cm）	最大幅（cm）	最大厚（cm）	重量（g）	石材	特徴
S21		2.20	0.70	0.60	1.4	水晶	六角柱状。水晶結晶。
S22	石核	3.60	2.60	1.40	12.9	赤色チャート	小剥片を剥離。周辺では採取されない石材。

図45 土坑8出土遺物（縮尺 1/3・1/2）

なるので、この剥落部分には橋状突起が付されていたことが想定される。沈線の末端に刺突、あるいはやや強く工具を当てたため、端部が深くなる部分もみられる。4・5は口唇部を内面に屈曲させる口縁部を有する2本沈線浅鉢、6・7は内面に段を持つものである。11は口唇部に刻みを施す。以上の特徴から、土坑8出土土器は福田K式に該当する。

石器は水晶の結晶と赤色チャート（ジャスパー）製の石核が1点ずつ出土した（図45 図版27・28）。水晶の結晶（S21）は六角柱状で良質なものである。石核（S22）は4cm大の原礫に剥離を施し小剥片を取っている。この石材は周辺では採取されない。

本遺構の時期は縄文時代後期前葉と考えられる。

土坑9（図47～50 図版8・9・16～19）

AW03-33区に位置する。検出面は14層である。

長径2.6m、短径2.3m、深さ0.5mである。検出面の標高2.64m、底面の標高2.13mである。埋土は5枚に分層されるが、遺物が特に集中して出土したのは1・2層であり、黒褐色系粘質土を主体としている。遺物は検出面からの深さ15～20cmのレベルで出土したものが大半を占めている。

遺物の詳細は後述するが、出土遺物も考慮して本遺構の時期は縄文時代後期前葉と考えられる。なお、本土坑の土壌サンプルにより、放射性炭

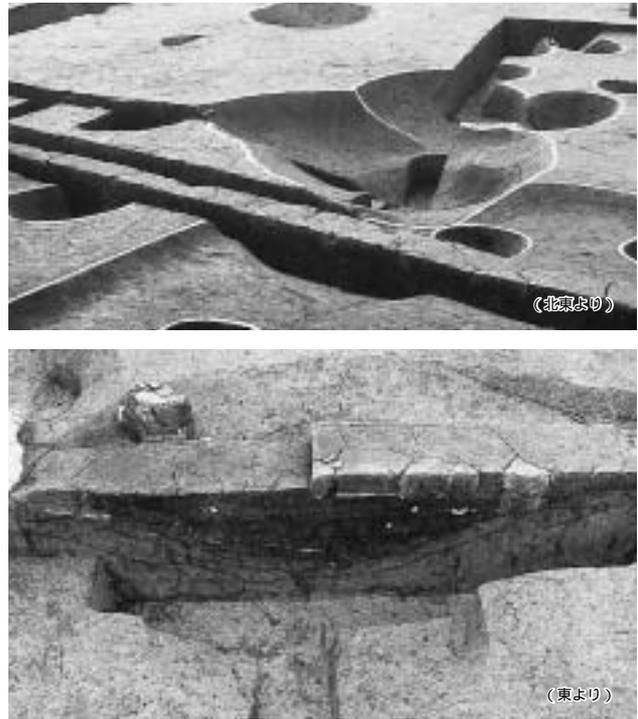


図46 土坑8

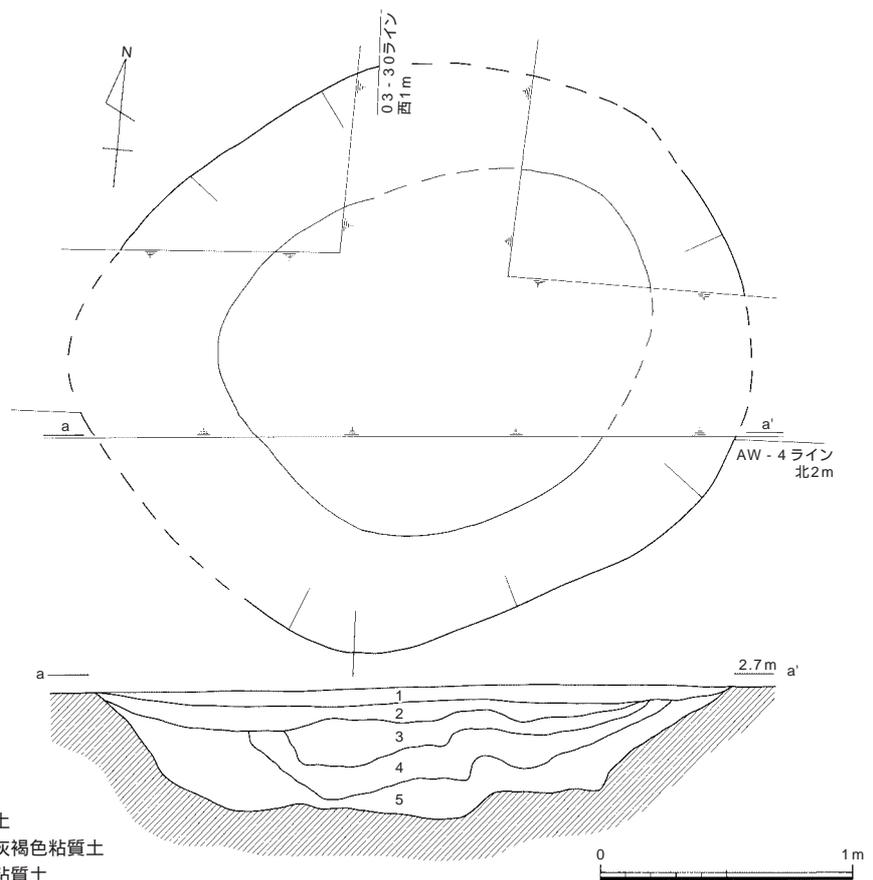
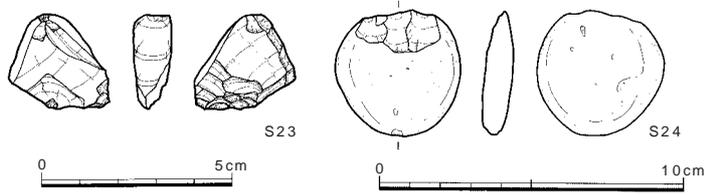


図47 土坑9（縮尺 1/30）



図48 土坑9断面



番号	器種	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	石材
S23	楔形石器	2.50	2.60	1.20	7.6	サヌカイト
S24	石錘	4.15	4.00	0.95	22.3	安山岩

特徴
 上下両端に相対する剥離。
 上端は片面のみの打ち欠き。下端はわずかに打ち欠く。

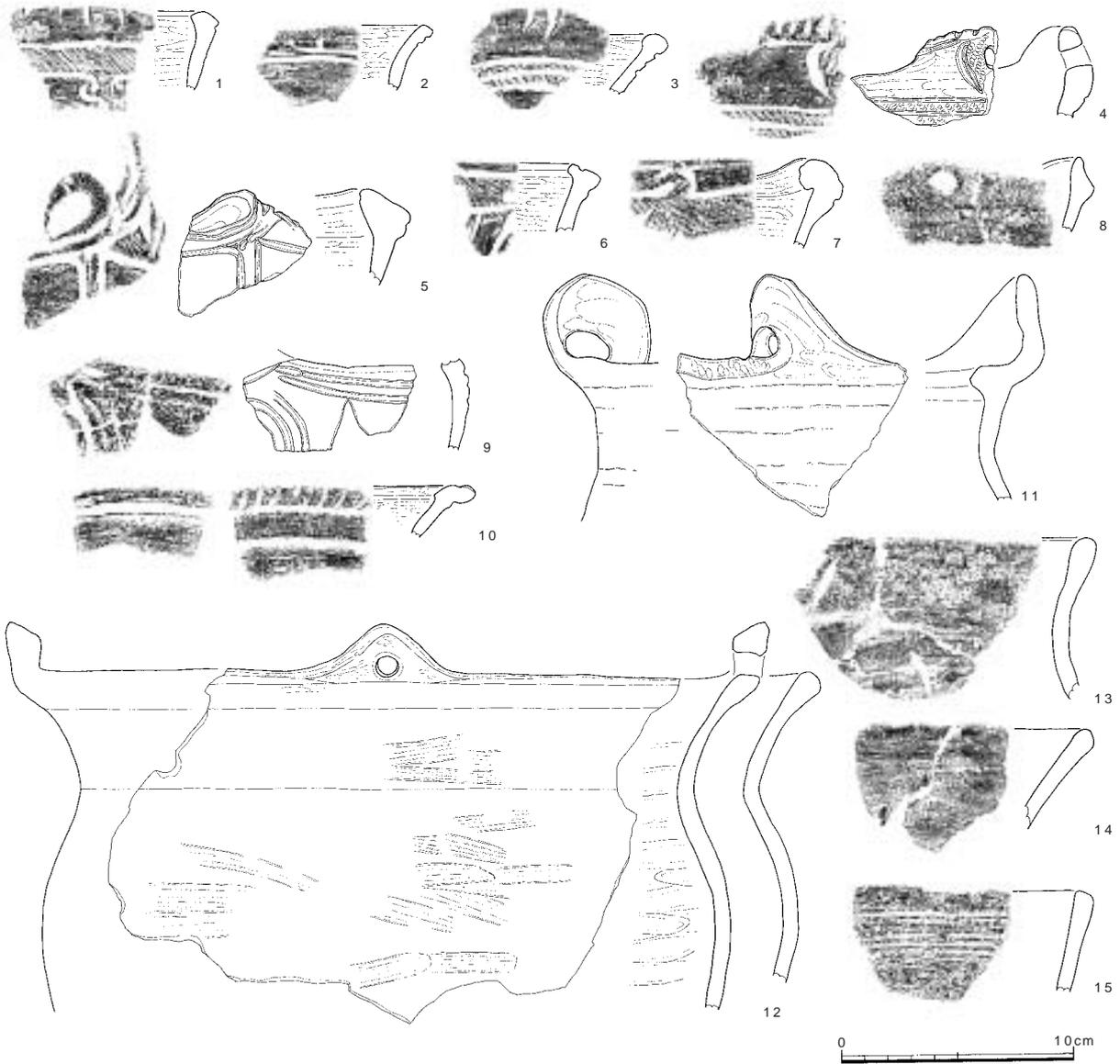
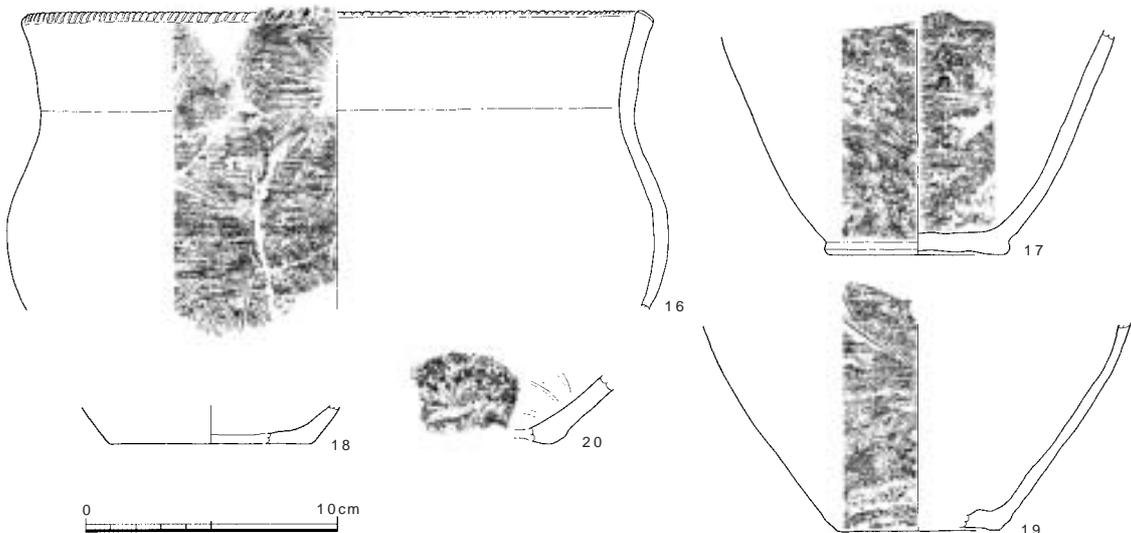


図49 土坑9出土遺物1 (縮尺 1/2・1/3・2/5)

調査の記録



番号	器種	器形の特徴：文様と調整（外/内）：法量	色調（外/内）	胎土
1	深鉢	平縁：2本沈線磨消縄文（RL）、ミガキ/ミガキ	淡橙褐/淡橙灰褐	精良、均質：細～粗砂、稀に細礫
2	深鉢	平縁：沈線文：ミガキ/ミガキ	淡黄/灰茶褐	精良、均質：細砂少
3	深鉢	平縁：3本沈線磨消縄文（RL）、ミガキ/ミガキ	淡灰茶褐/茶褐	精良、均質：粗砂、稀に細礫
4	深鉢	台形状突起、穿孔：突起上端刻み、3本沈線磨消縄文（RL）、ミガキ/ナデ	明黄茶褐/黄茶褐	精良、均質：細砂、細礫
5	深鉢	耳状突起：沈線文：ナデ/ミガキ	淡茶褐/淡橙白	精良、均質：細～粗砂、稀に細礫
6	深鉢	口唇部内外に肥厚：口唇部上下に沈線、磨消縄文（RL）ナデ/ミガキ	暗茶褐/橙褐	精良、均質：細～粗砂
7	深鉢	緩い波状口縁：入組文、沈線末端刺突、磨消縄文（RL）ミガキ/ミガキ	淡茶褐/灰～淡灰	精良、均質
8	深鉢	波状口縁、「く」字状口縁：波頂部に円形窪み、ミガキ/摩滅	暗褐/暗茶褐	精良、均質：稀に粗砂、細礫
9	深鉢	波状口縁：2本沈線磨消縄文？、摩滅/ミガキ	淡橙褐/暗茶褐	精良、均質：細砂、稀に細礫
10	浅鉢	平縁、内面肥厚、有段：口唇部に斜行沈線文+沈線、沈線、ミガキ/ミガキ	灰茶褐/橙褐～灰黄褐	精良、均質：稀に粗砂、細礫
11	深鉢	環状突起：口唇部縄文（RL）ナデ、条痕/ナデ、赤彩	茶褐/淡黄褐	精良、均質：稀に細礫
12	深鉢	山形突起、穿孔：ミガキ、条痕/ナデ：口径30.2cm、1/3残	灰茶褐/淡灰褐～灰褐	良、均質：細～粗砂
13	深鉢	平縁：条痕/ナデ	淡黄灰褐/淡黄灰褐～灰褐	粗、不均等：微～細砂多、細礫多
14	深鉢	平縁：条痕/条痕	橙褐/乳白	精良：細～粗砂
15	深鉢	平縁：条痕/ナデ	明灰茶褐/淡黄灰	やや粗：細～粗砂多、細礫
16	深鉢	平縁：口唇部斜め刻み、条痕/ナデ：口径24.0cm、1/3残	淡黄橙～茶褐/淡黄橙～茶褐	やや粗：細～粗砂、細礫
17	深鉢	高台状：条痕/条痕、指頭痕、粘土板の上に粘土細積み上げる：底径6.9cm、1/2残	淡灰白～灰褐/淡黄白	やや粗：細～粗砂多
18	深鉢	平状：条痕、ナデ/条痕、ナデ：底径6.4cm、1/3残	赤茶褐～茶褐/淡灰白～淡灰	精良、均質：微～細砂
19	深鉢	平底：摩滅/摩滅：底径8.0cm、1/4残	淡黄白/灰褐	粗：細～粗砂、細礫多
20	深鉢	高台状？：摩滅/ナデ	淡黄白/淡灰白	良：微～細砂

図50 土坑9出土遺物2（縮尺 1/3）

素による年代測定を実施している。埋土1・3層より採取したものであり、分析の結果、得られた年代は、補正年代で3890±40年BP、3850±40年BPであった（第5章参照）。

本土坑からは150点の縄文土器が出土し、20点を図化した（図49・50）。図49-1～9は有文深鉢、10は有文浅鉢、図49-11～15、図50-16～18は無文深鉢であり、19・20の底部は器種を特定しがたい。1～3は平縁、4・5には突起が付く。4は台形状の突起の上縁部に刻みを施し、中心にあたる部分には穿孔を行う。5は片流れ（耳たぶ状）突起であるが、大きく発達していない。6・7は内面に肥厚する口縁部を有するもので、口唇部にも縄文が施され、文様が展開する。8は肥厚した口縁部外面の波頂下に円文を浅い抉りで描く。10は肥厚させた口唇部内面に沈線と斜め方向の刻みを施す。口縁部外面にも沈線1条が巡る。11・12は突起を付す無文深鉢で、11は円環状、12は山形突起の中央に穿孔したものである。16は口唇部に刻みを施すものである。18～20の底部はいずれも平底もしくは小高台状を呈する。

石器は楔形石器と石錘を1点ずつ図化した（図49）。サヌカイト製楔形石器（S23）は、右側面に斜方向の剪断面、左側面に折れ面をもち、平面が三角形を呈する。下端に階段状剥離が認められる。

土坑10（図51～54 図版9・10）

AV03-36区で検出した。15層で検出したが、本遺構の1帯は特に遺構の切り合いが激しく、遺構検出が極めて困難であったことから、少しずつ14層を掘り下げて精査を行い、結果的に15層上面での検出となったもので、

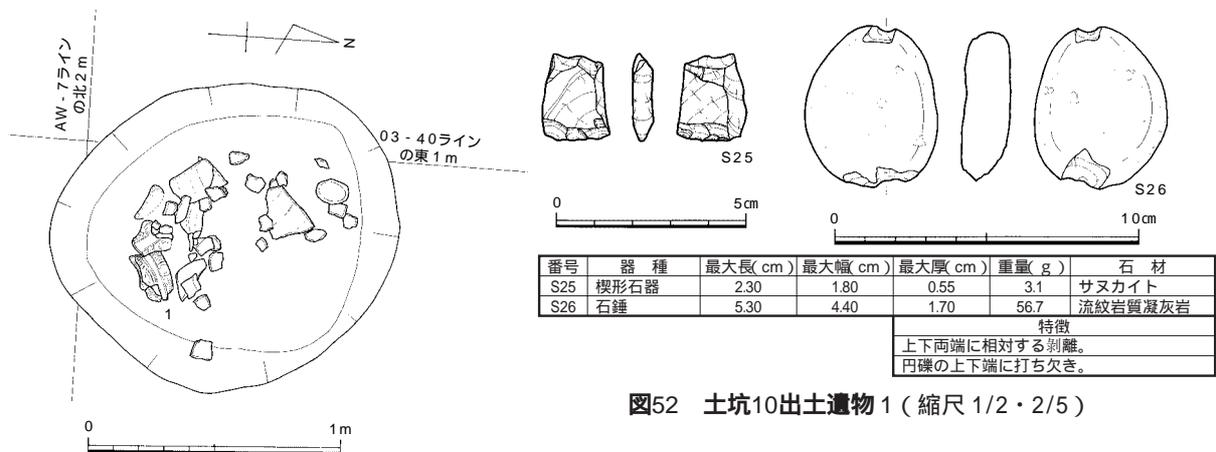


図52 土坑10出土遺物1 (縮尺 1/2・2/5)



図51 土坑10遺物出土状況 (縮尺 1/30)

本来14層上面で構築された可能性が高い。平面形は円形を呈し、東西1.38m、南北0.79m、深さ35cmである。埋土は暗灰褐色砂質土である。出土遺物の大半は底面から10cmほど高いレベルで検出した。

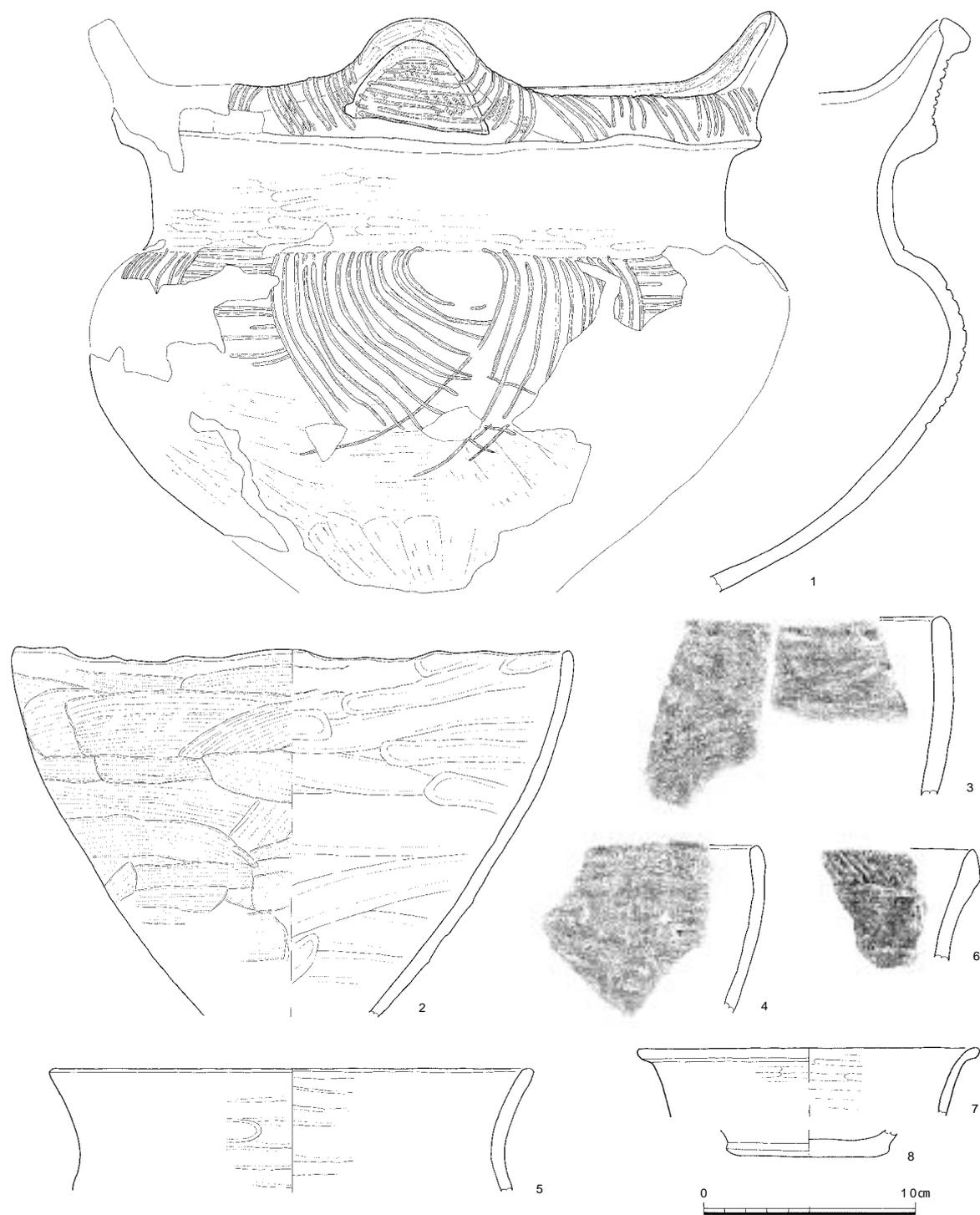
出土遺物の詳細は後述するが、遺物の内容も併せて、本遺構の時期は縄文時代後期中葉と考えられる。

本土坑からは縄文土器と石器が出土した。土器158点のうち9点、石器2点を図化している(図52~54)。

図53-1の有文深鉢は大きく肥厚した突起を有する口縁部と、無文の頸部、玉葱形に張った胴部を有する深鉢である。底部は遺存しておらず、形状は明らかでない。口縁部

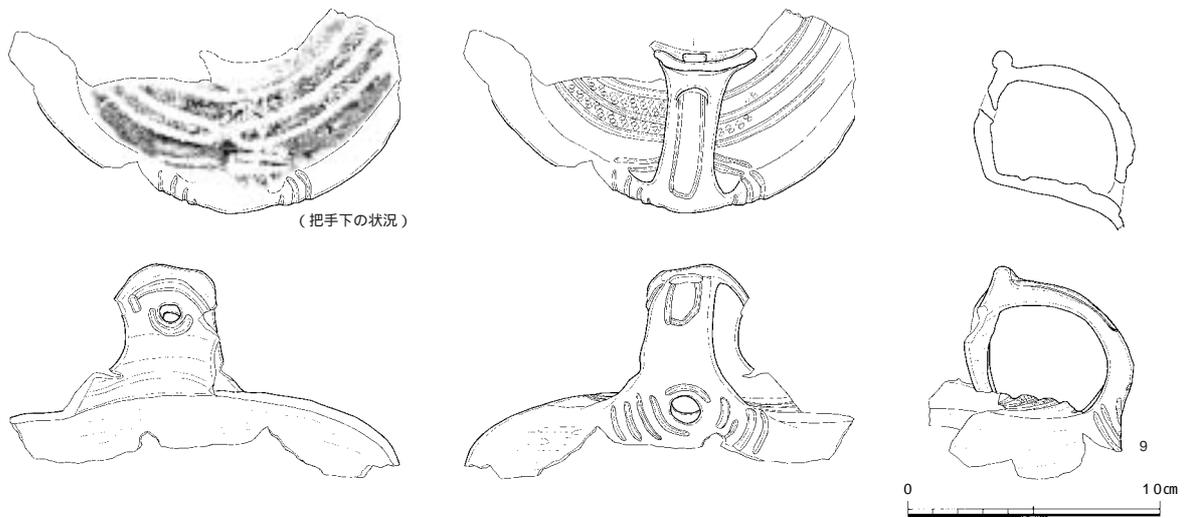
は四方に山形の突起を有し、その内部は周囲よりも窪ませ、横位の沈線と縄文を充填している。山形の突起間の口縁部文様帯には、山形の突起を挟む対向連弧文と4本が1単位となる鋸歯文が認められる。胴部には円形の無文部を挟んだ簾状の対向連弧文を引き、隣接する対向連弧文との間隙には横位の沈線文による梯子状の文様を引くことによって文様を連繫している。口縁部から頸部はミガキと縄文施文による調整を、胴部下半は摩滅が著しいが、条痕が認められる。2~7は無文深鉢である。2は小さな底部から口縁部に向かって大きく開く器形となるものである。器面の調整は粗い条痕とナデによる。3・4は内湾する口縁部、5・7は外反する口縁部である。6は外反する口縁を外側に肥厚して端面に縄文を施したもので、津島岡大遺跡第5次調査地点出土土器群の主体となる「後期第 群」土器に該当するものである。8は平底の底部である。図54-9は注口土器である。残存状態が悪く、器形については不明な点も多いが、平坦な上縁部から屈曲して算盤玉形の胴部を有する器形が想定される。また、内側では、把手接合部付近でわずかながら平坦な上縁部から屈曲して立ち上がる部分が残存している。把手は円環状を呈する。器面上縁部には把手下で閉じる2単位の区画文と1条の沈線があり、その間に縄文を施す。把手の接合部の外側では円孔を挟んで対向連弧文が、内側では上方に円孔を穿ち、その周囲を沈線で縁取る文様が描出される。出土土器群は、緑帯文土器成立段階を主体としわずかに 群段階のものを含む。

石器はサヌカイト製楔形石器と流紋岩質凝灰岩製石錘が1点ずつ出土した(図52)。楔形石器(S25)は左側面に剪断面があり、下端に刃部を持ち、階段状剥離が認められる。石錘(S26)は扁平な円盤を素材とし、上下端を打ち欠いている。



番号	器種	器形の特徴：文様と調整（外/内）：法量	色調（外/内）	胎土
1	深鉢	山形突起4：突起内に横位の多条沈線文、口縁部に対向連弧文+鋸歯文、胴部に対向連弧文+梯子状文、ミガキ、ケズリ、縄文(RL)ミガキ	暗赤茶褐/明橙褐～灰黄褐	良：細～粗砂多、細礫
2	深鉢	：条痕/ナデ：口径26.1cm、1/3残	淡灰褐～灰褐/乳白～淡灰褐	粗：粗砂～細礫多
3	深鉢	平縁：ナデ/条痕	橙褐～淡灰白/暗橙褐～暗褐	粗：細～粗砂、細礫
4	深鉢	平縁：ナデ/ナデ	灰黄褐～淡黄灰/淡黄灰	良：細～粗砂、細礫少
5	深鉢	平縁：ナデ/ナデ：口径22.2cm、1/4残	淡黄白～淡橙白/淡茶褐～茶褐	粗：細～粗砂多、細礫多
6	深鉢	口唇部外面に肥厚：肥厚部に縄文(RL) 条痕/ナデ	淡灰白～淡黄白/淡橙～淡黄白	やや粗：細～粗砂多、細礫多
7	深鉢	口唇部外反：ミガキ/ミガキ：口径15.4cm、1/6残	淡橙～橙/暗茶褐～褐	粗：細～粗砂、細礫多
8	深鉢	平底：摩滅/摩滅：底径6.2cm、1/1残	明茶褐/淡黄白	粗：細～粗砂多、細礫多

図53 土坑10出土遺物2（縮尺 1/3）



番号	器種	器形の特徴：文様と調整（外/内）	色調（外/内）	胎土
9	注口土器	環状把手：把手上に長方形区画文、基部に円孔、対向連弧文、胴部に沈線文、把手下で閉じる杵状区画文、縄文（RL）ナデ、ミガキ/ナデ	淡黄白～灰褐/灰黄褐～灰褐	やや粗：粗砂～細礫

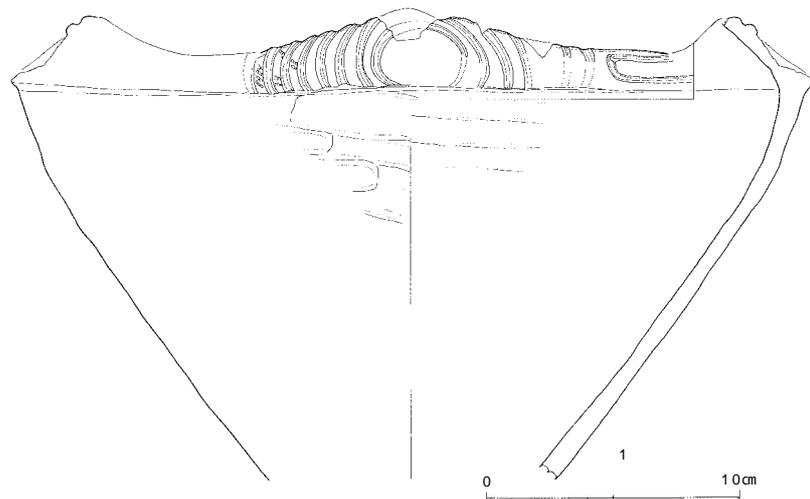
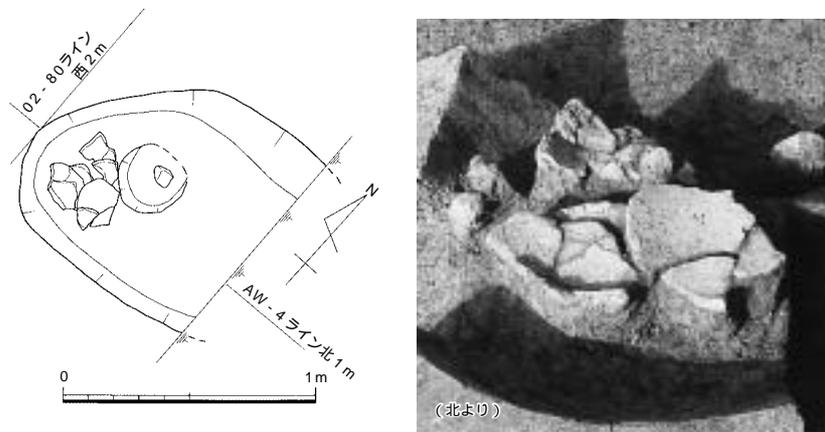
図54 土坑10出土遺物3（縮尺 1/3）

土坑11（図55 図版11）

AW02 - 83区に位置する。調査区東壁にかかっており、東半は調査区外へと続く。全体の約1/2程度を検出しているものと考えられる。東西0.95m、南北0.95m、深さ0.15mである。検出レベルは標高2.9m前後であり、14層上面で検出した。埋土は暗灰褐色砂質土である。

本土坑からは42点の縄文土器が出土した。1点を図化している（図55）。1は口縁部が「く」字状の有文深鉢で、口縁部に円文、対向連弧文、杵状区画からなる文様帯が集約される。津雲A式に該当する。

本土坑の時期は縄文時代後期前葉と考えられる。



番号	器種	器形の特徴：文様と調整（外/内）：分量	色調（外/内）	胎土
1	深鉢	波状口縁、頸状口縁：円文、対向連弧文、窓杵状区画、口縁部縄文（RL）ナデ/ナデ：口径25.2cm、1/4残	暗茶褐/暗灰褐～暗褐	やや粗：微砂多、細礫

図55 土坑11遺物出土状況・出土遺物（縮尺 1/30・1/3）

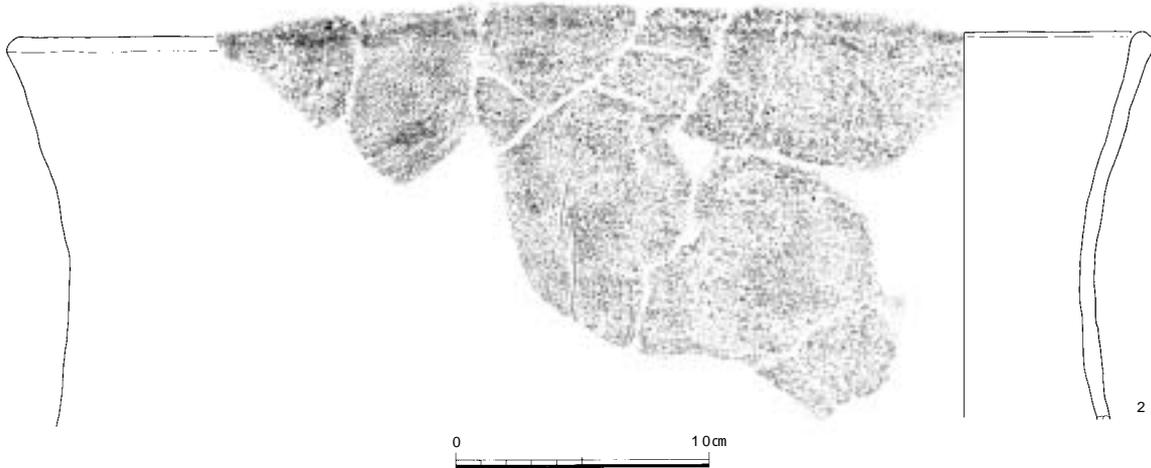
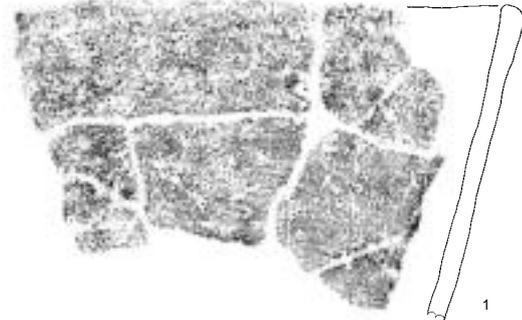
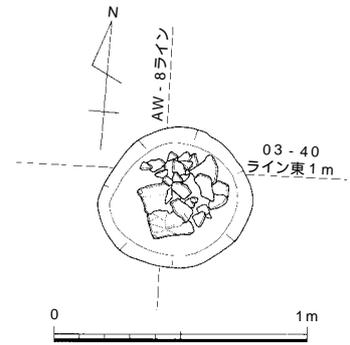
土坑12 (図56)

AW03 - 37区で検出した(図56)。15層上面での検出であるが、検出状況を考え併せると、14層上面に上がる可能性もある。

平面形は円形を呈し、径0.8m、深さ10cmである。埋土は淡黄褐色砂質土である。遺物は床面よりも10~20cm上位で出土している。

本土坑からは42点の縄文土器が出土した。そのうち2点を図化している(図56)、いずれも無文深鉢である。

本土坑の時期は縄文時代後期の範疇でとらえられる。



番号	器種	器形の特徴：文様と調整(外/内)：法量	色調(外/内)	胎土
1	深鉢	平縁：条痕/条痕	茶褐～暗褐/灰～暗灰褐	粗：微～粗砂多、細礫
2	深鉢	平縁：ナデ/ナデ：口径44.4cm、1/4残	明黄褐～灰褐/淡黄～灰	粗：粗砂多、細礫多

図56 土坑12遺物出土状況・出土遺物(縮尺 1/30・1/3)

土坑13(図57)：15層で検出した。径1.46m、深さ0.2mの楕円形を呈する。出土した130点の縄文土器のうち11点を図化している。1～4はいずれも2本沈線の磨消縄文土器である。1・2は口縁端部を内側に屈曲させるもので、2の口縁部文様帯では沈線間に刺突列点文を配する。上下に大小の渦巻文が展開する。沈線末端は入り組み、切り合わない。3・4はいずれも胴部上半にくびれを有する深鉢で、J字文を主文とする。2～4はいずれも沈線末端が切り合わない。福田K式でも古相に位置づけられる。5、6は刺突による円文を中心に文様が展開するモチーフのものであるが、5は内面に、6は外面に橋状突起が付く。特に5は刺突を多用するという特徴を有する。器壁外面には垂下する2条の平行沈線の左右に多段の短沈線を配した梯子状文が、内面の橋状突起には撥形

文が展開する。7～9は巻貝条痕により器面を調整するものである。10、11は平底の底部である。器壁の立ち上がりの角度から、いずれも深鉢底部であると判断される。

土坑14（図58 - 12～14）：15層で検出した。長径1.03m、短径0.78m、深さ0.66mの楕円形を呈する。出土した31点の縄文土器のうち3点を図化したものである。12・13は有文深鉢、14は無文深鉢の口縁部である。12は頸部にくびれをもつ器形を呈するもので、胴部上半部に文様帯を配する。主として2本沈線で文様帯を構成するが、3本沈線の部分もみうけられる。頸部には口縁部から垂下する区画文が胴部文様帯に連続する。沈線末端は鉤状に入り組み、切り合わない。器面の調整は内外面ともに丁寧なミガキによるが、口唇部のみ縄文が施される。13は文様帯が口縁部上面にまで延びるもので、文様帯は3本沈線で構成される。沈線内に刺突を施す。土坑14出土土器は福田K式でもやや新相を示すものである。

土坑15（図58 - 15・16）：15層で検出した。長径1.8m、短径1.51m、深さ0.35mで、ほぼ円形を呈する。出土した17点の縄文土器のうち2点を図化したものである。15は有文深鉢の胴部、16は平底の深鉢底部片である。

土坑16（図58 - 17～22）：15層で検出した。長径1.4m、短径1.0m、深さ0.3mの楕円形を呈する。出土した30点の縄文土器のうち6点を図化した。17～19は有文深鉢の口縁部、20・21は無文深鉢の口縁部、22は平底の深鉢底部片である。17は横走る多条の沈線文内に縄文を充填する。18・19は口縁部と胴部の境に段をもつ口縁部で、18は円文を挟んで対向連弧文を配し、沈線間には縄文を施す。19は平行して横走る沈線文である。20・21は肥厚した口縁部の外面に縄文を施す。中期末～後期中葉までの時期幅が認められる。

土坑17（図58 - 23・24）：15層で検出した。径1.2m、深さ0.3mの円形を呈する。出土した4点の縄文土器のうち2点を図化したものである。23は無文の鉢口縁部、24は平底の深鉢底部である。

土坑18（図58 - 25・26）：15層で検出した。長径2.3m、短径1.6m、深さ0.5mの楕円形を呈する。出土した58点の縄文土器のうち2点を図化したものである。25は有文鉢の頸部で、文様は3本沈線で構成される磨消縄文土器である。26は肥厚した口縁部の外面に縄文を施すものである。後期前葉～中葉までの幅をもつ。

土坑19（図61 - 58～61）：14層で検出した。長径1.6m、短径1.4m、深さ0.2mのほぼ円形を呈する。出土した21点の縄文土器のうち4点を図化したものである。58・59は波状口縁深鉢口縁部で、58は波頂部に円形の刺突を有する。60は沈線間にLRによる縄文を充填したものである。61は口縁部が内湾する球胴状の鉢である。これらはいずれも2本沈線によって文様帯が構成される。

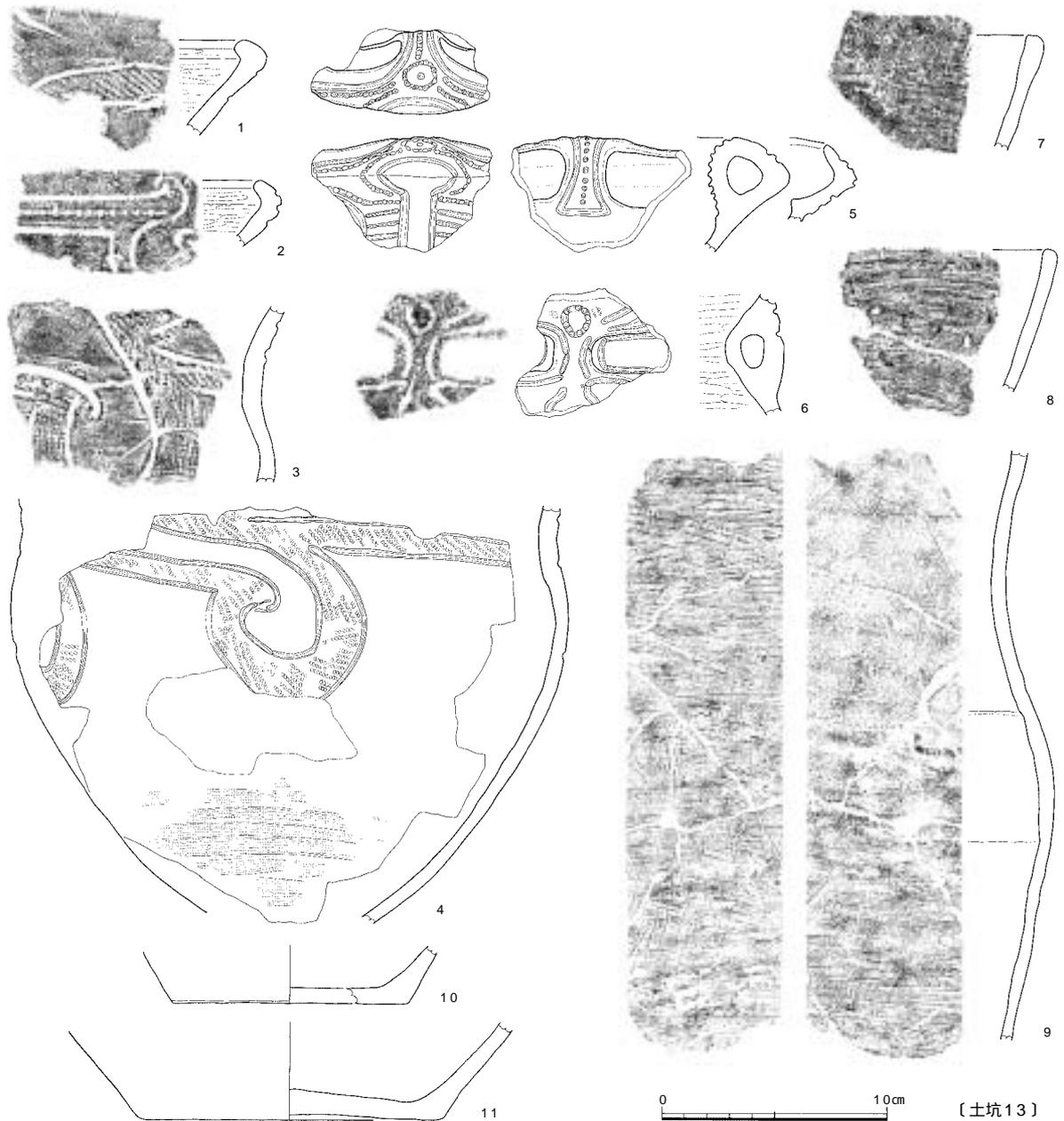
土坑20（図61 - 62～66）：14層で検出した。径0.8m、深さ0.4mの円形を呈する。出土した37点の縄文土器のうち5点を図化したものである。62・63は無文深鉢の口縁部、64は無文浅鉢口縁部、65・66は浅鉢底部である。62・63は口唇部に刻みを施す。65・66は平底である。

土坑21（図61 - 67～72）：14層で検出した。径1.4m、深さ0.15mの円形を呈する。出土した152点の縄文土器のうちの6点である。67・68は有文鉢、69・70は無文深鉢、71・72の底部の器種は特定しがたい。67・68はボウル形の鉢で、口縁部から垂下する沈線文、口縁部に沿って横走る沈線文、これらの交差部から描出される斜方向の沈線文が主文様となっており、直線的なモチーフとなっている。69は口唇部に棒状工具による幅広の刻みを施す。71・72はともに平底である。

土坑22（図62 - 73～81）：14層で検出した。径1.1m、深さ0.3mの円形を呈する。出土した194点の縄文土器のうちの9点である。73～76は有文深鉢口縁部、79～80は無文深鉢口縁部、81は浅鉢底部である。73・74は波状口縁で波頂部から口縁部文様帯が展開する。74は波頂部から多条の沈線が垂下して文様を構成する。75は3条以上の沈線束で構成される磨消縄文土器である。76は口唇部を外方に大きく肥厚する。77・78は口唇部に刻みを施した無文深鉢で、棒状工具で口唇部に直交して刻みを施す。81は低い高台を付す浅鉢底部である。

土坑23（図62の82～89）：14層で検出した。径1.2m、深さ0.2mで、円形を呈する。出土した152点の縄文土器のうちの9点である。82・84・85は有文深鉢、81は無文壺、86～89は無文深鉢、90は平底の深鉢底部である。82・

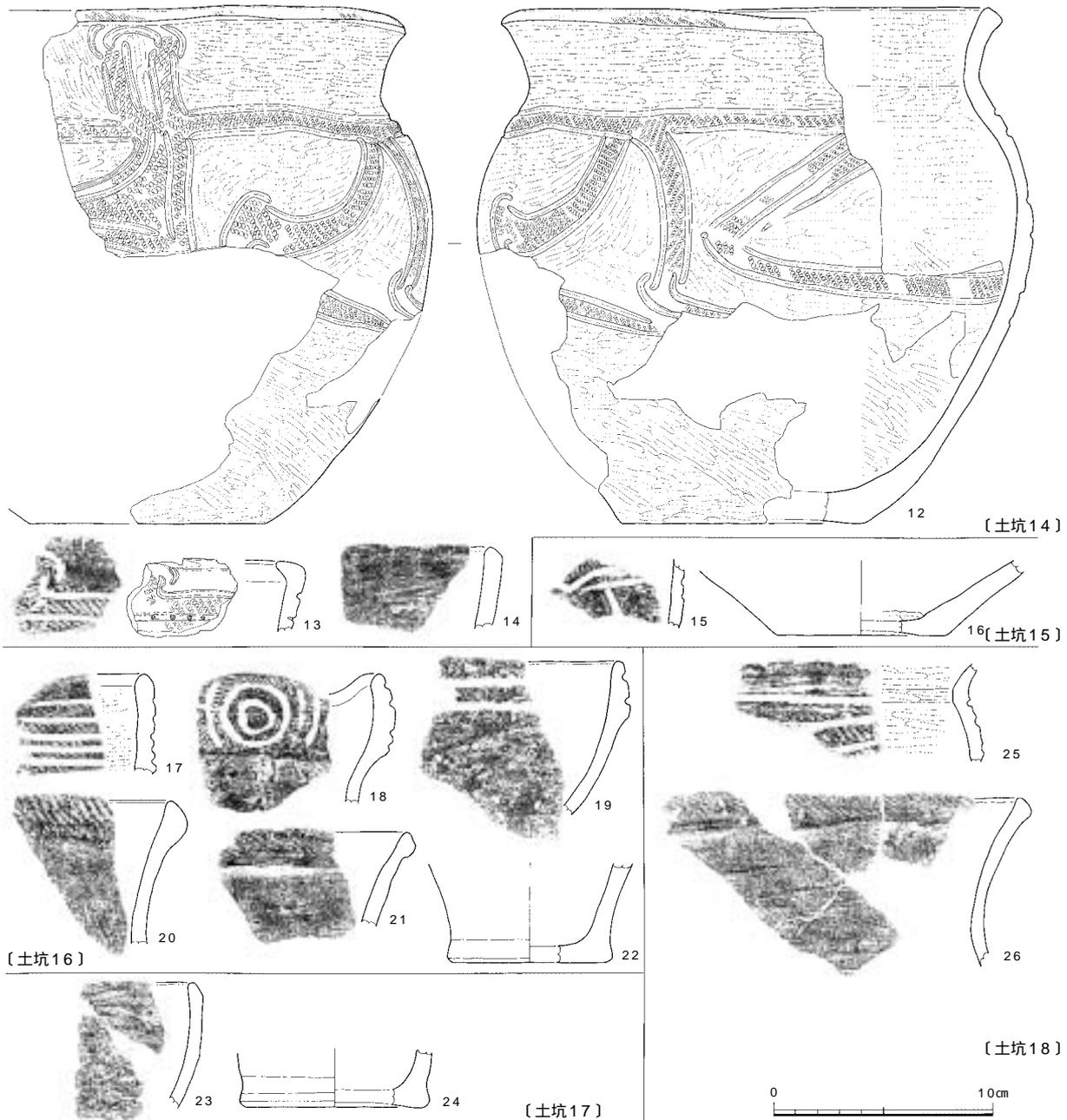
調査の記録



番号	調査次・区	遺構名	器種	器形の特徴：文様と調整（外/内）：法量	色調（外/内）	胎土
1	17-6	土坑13	深鉢	口唇部内面に肥厚：2本沈線磨消縄文（RL）ミガキ/ミガキ	暗褐/暗褐	良：微～細砂
2	17-6	土坑13	浅鉢？	平縁：2本沈線、刺突列、渦巻文、ナデ？/ミガキ	灰褐/暗灰褐	精良：微砂
3	17-6	土坑13	深鉢	：2本沈線磨消縄文（RL）J字文、ナデ/ナデ	淡灰黄褐/淡黄褐	良：微～粗砂
4	17-6	土坑13	深鉢	：2本沈線磨消縄文（RL）J字文、ナデ、条痕/ナデ：胴部径24.8cm、1/3残	淡～赤褐/淡灰褐	良～細～粗砂、稀に細礫
5	17-6	土坑13	深鉢	波状口縁、内面橋状突起：沈線内刺突、波頂部円文、波頂下垂する梯子状文、摩滅/ナデ、摩滅、撥形文	橙～茶褐/灰茶褐	やや粗：微～細砂多
6	17-6	土坑13	深鉢	橋状突起：突起上に円文、刺突、沈線文、縄文（RL）摩滅/ミガキ	淡橙/茶～暗茶褐	良：微～細砂、稀に粗砂
7	17-6	土坑13	深鉢	平縁：条痕/ナデ	淡灰茶褐/淡灰褐	粗：粗砂～細礫多
8	17-6	土坑13	深鉢	平縁：条痕/ナデ	明茶褐/暗茶褐	粗：微～粗砂多、細礫
9	17-6	土坑13	深鉢	：条痕/条痕	茶褐/淡灰褐	やや粗：細～粗砂、細礫
10	17-6	土坑13	深鉢	平底：ナデ/摩滅：底径10.4cm、1/4残	淡茶褐/茶褐	やや粗：粗砂～細礫多
11	17-6	土坑13	深鉢	平底：条痕/ナデ：底径13.4cm、2/3残	淡灰茶褐/灰茶褐	粗：微～粗砂、細礫

図57 土坑・ピット出土土器1（縮尺 1/3）

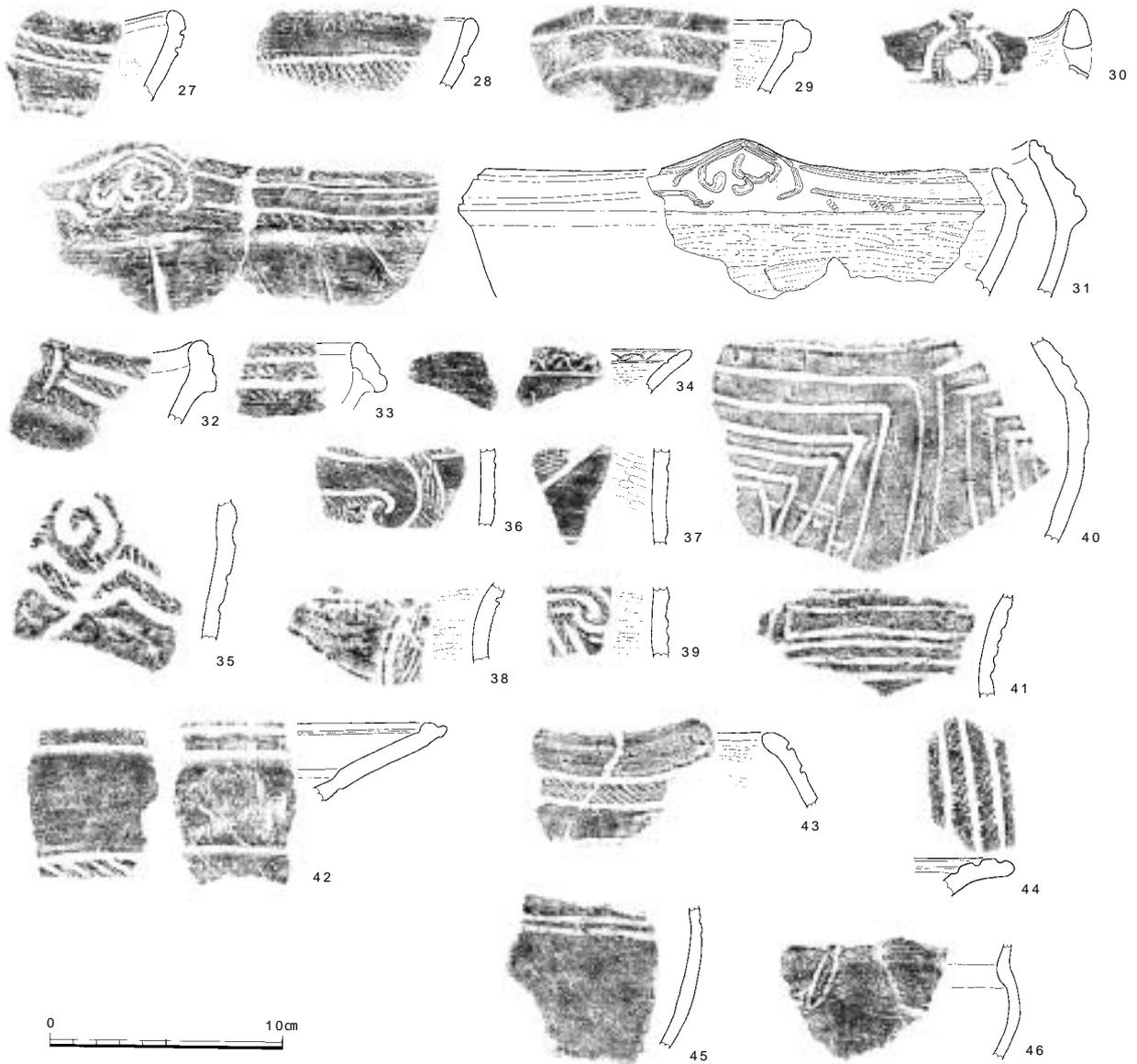
84・85はいずれも3本沈線磨消縄文帯によって文様が構成される。85はくびれを有さない植木鉢状の器形となる深鉢である。器面の文様は中心から放射状に沈線束が派生するヒトデ状の文様が横位に展開するもので、これを連繋する沈線束も描かれる。81は球状の胴部に直立した口縁部が付く有文壺で、円文の中にスベード状の文様が



番号	調査次-区	遺構名	器種	器形の特徴：文様と調整（外/内）：分量	色調（外/内）	胎土
12	17-4	土坑14	深鉢	平縁：2本沈線磨消縄文（RL）ミガキ/ミガキ；口径21.2cm、底径11.0cm、1/2残	明淡黄白/淡黄～明灰褐	精良：微～細砂
13	17-4	土坑14	深鉢	平縁、口唇部内面に肥厚；3本沈線磨消縄文（RL）沈線内刺突、ナデ/ナデ	淡灰褐/灰褐	精良：均質；細砂小
14	17-4	土坑14	深鉢	平縁：ミガキ/ナデ	暗灰茶褐/淡黄白	精良：微～細砂
15	17-4	土坑15	深鉢	：沈線文（磨消縄文？）、ナデ/摩滅	暗赤褐/淡灰褐	やや粗；細～粗砂多
16	17-4	土坑15	浅鉢？	平底：祭痕、摩滅/ナデ、指頭痕；底径7.6cm、1/6残	淡灰黄白/淡灰白	粗；細～粗砂多
17	17-4	土坑16	深鉢	平縁：多条沈線文、沈線間縄文（RL）ナデ/ナデ、ミガキ	黄褐/黄橙褐～暗灰	良；細砂、金雲母
18	17-4	土坑16	深鉢	波状口縁、頸状口縁；円文、対向連弧文、口縁部縄文（RL）頸部ナデ/ナデ、ケズリ？	暗茶褐/暗褐	良；細砂、稀に細礫
19	17-4	土坑16	鉢	平縁：平行沈線文、ナデ/ナデ	暗橙褐/暗褐	やや粗；粗砂～細礫多
20	17-4	土坑16	深鉢	平縁：口唇部縄文（RL）ナデ/ナデ	暗黄褐/黄褐	やや粗；粗砂～細礫多
21	17-4	土坑16	深鉢	口唇部外方に肥厚；口縁部縄文（RL）ナデ/ナデ	茶褐/暗茶褐	良；微～細砂
22	17-4	土坑16	深鉢	平底：ナデ/ナデ；底径6.8cm、1/6残	明橙褐/黒褐	やや粗；粗砂多、細礫
23	17-4	土坑17	深鉢	平縁：祭痕/祭痕	暗茶褐～暗褐/灰褐～暗褐	粗；細～粗砂多、細礫少
24	17-4	土坑17	深鉢	平底：ナデ/ナデ、煤付着；底径8.0cm、1/6残	淡橙褐～明橙/黒褐	粗；細～粗砂多、細礫
25	17-4	土坑18	深鉢	：3本沈線？磨消縄文（RL）、ナデ/ミガキ	暗茶褐/暗褐	やや粗；細～粗砂多、細礫
26	17-4	土坑18	深鉢	平縁：口唇部縄文（RL）ナデ/ナデ	茶褐/淡茶褐	精良、均質；微～細砂

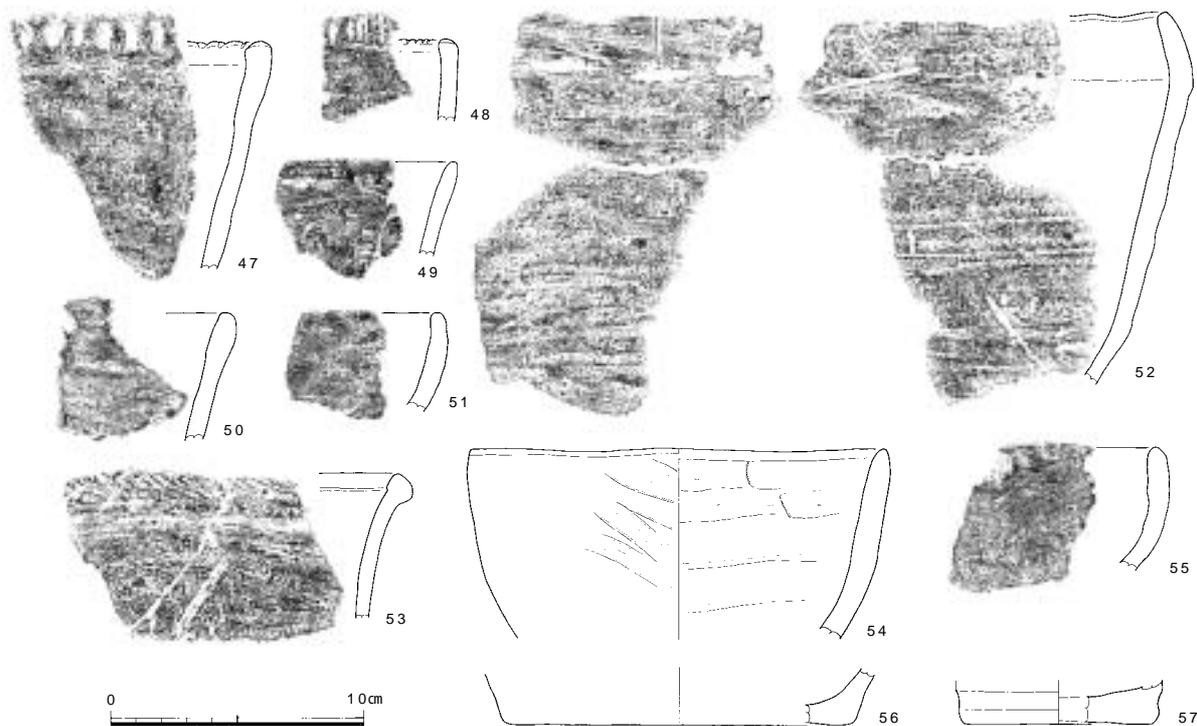
図58 土坑・ピット出土土器2（縮尺 1/3）

調査の記録



番号	調査次-区	遺構名	器種	器形の特徴：文様と調整（外/内）：法量	色調（外/内）	胎土
27	17-5	ビット97	深鉢	波状口縁：2本沈線磨消縄文(RL)ナデ	明橙褐/橙褐～淡灰白	精良：微～細砂少
28	17-4	ビット618	深鉢	平縁：幅広縄文帯、磨消縄文(RL)ナデ/ナデ	暗灰褐/茶褐	良：細～粗砂多
29	17-6	ビット37	深鉢	口唇部肥厚：口唇部上下に沈線、磨消縄文(RL)ミガキ?/ナデ、ミガキ	明茶褐/灰褐	良/微～細砂多
30	17-5	ビット63	深鉢	波状口縁、穿孔：磨消縄文(RL)ナデ/ナデ	淡灰～灰/淡灰	精良、均質：微～細砂
31	17-5	ビット57	深鉢	顎状口縁：円文?が崩れたモチ-フ、平行沈線文、縄文(RL)平行沈線間ナデ、頸部ミガキ/ミガキ：口径21.6cm	茶褐～暗茶褐/黄茶褐～暗茶褐	やや粗：細～粗砂多、細礫
32	17-4	ビット114	深鉢	波状口縁、顎状口縁：弧状文、平行沈線文、口唇部縄文(RL)頸部ナデ/ナデ	灰黄褐/灰黄褐	やや粗：細～粗砂
33	17-4	土坑39	深鉢	顎状口縁：平行沈線文、縄文(RL)ミガキ	暗灰茶褐/黄褐	精良：微～細砂、稀に粗砂
34	17-4	ビット196	深鉢	平縁：ミガキ/ミガキ、「S」字状?内文	暗褐/暗褐	やや粗：細～粗砂多
35	17-1	ビット11	深鉢	：渦巻文、平行連弧文、縄文(RL)摩滅	暗茶褐/暗褐	やや粗：粗砂～細礫多
36	17-5	ビット57	深鉢	：2本沈線磨消縄文(RL)J字文、ナデ/奈痕後ナデ	灰白～暗灰/淡灰茶褐	精良、均質：細～粗砂
37	17-6	ビット45	深鉢	：磨消縄文(RL)ミガキ/ミガキ	明黄茶褐/暗灰褐	やや粗：微～細砂、細礫
38	17-5	ビット97	深鉢	：2本沈線?磨消縄文(RL)条痕/ミガキ	明橙褐/橙褐～淡灰白	精良：微～細砂少
39	17-6	ビット45	深鉢	：3本沈線磨消縄文(RL)ナデ/ミガキ	黄褐/灰褐	良：微～細砂
40	17-1	ビット617	深鉢	：多重鉤形文、ナデ/ナデ	灰褐/淡黄褐	やや粗：微～粗砂、細礫少
41	17-3	ビット143	深鉢	：多重棒状区画文、摩滅/摩滅	淡灰褐/淡黄灰～茶褐	粗：細～粗砂、細礫多
42	17-1	ビット617	浅鉢	皿状、内面有段：口唇部縄文(RL)沈線、斜め刻み、ミガキ/ミガキ	暗茶褐/暗茶褐	良：微砂多、稀に細礫
43	17-5	ビット97	浅鉢	：2本沈線磨消縄文(RL)ミガキ/摩滅	明橙褐/橙褐～淡灰白	精良：微～細砂少
44	17-4	ビット114	深鉢	口縁部外反：ナデ/縄文(RL)ナデ、赤彩、沈線3条	橙茶褐/明橙褐	良：細～粗砂多
45	17-3	ビット143	深鉢	：2本沈線、摩滅/ナデ	淡灰茶褐/暗茶褐	粗：細～粗砂多、細礫多
46	17-5	土坑69	深鉢	：磨消縄文?、ミガキ/ナデ	暗赤褐/暗赤灰	やや粗：細～粗砂多

図59 土坑・ビット出土土器3（縮尺 1/3）



番号	調査次-区	遺構名	器種	器形の特徴：文様と調整（外/内）：法量	色調（外/内）	胎土
47	17-3	ビット143	深鉢	平縁：口唇部斜め刻み、ナデ/ナデ	暗茶褐/淡灰茶褐	粗：微-粗砂多、細礫
48	17-6	ビット45	深鉢	平縁：口唇部直交刻み、ナデ/ナデ	淡茶褐/淡茶褐	良：微-細砂
49	17-7	ビット243	深鉢	平縁：ナデ/ナデ	暗褐/暗褐	良：微-細砂
50	17-6	ビット42	深鉢	平縁：条痕/条痕	暗灰茶褐/暗褐	良：微-粗砂
51	17-5	ビット72	深鉢？ 鉢？	平縁：ナデ/ナデ	灰/淡赤褐	粗：微-細砂
52	17-5	ビット94	深鉢	平縁：条痕/条痕	茶褐/淡-明橙	粗：粗砂-細礫多
53	17-4	ビット74	深鉢	口唇部肥厚：口唇端部縄文(RL) 条痕/ナデ	灰茶褐-茶褐/暗茶褐	やや粗：細-粗砂多、細礫
54	17-4	ビット114	鉢	平縁：条痕後ナデ/条痕、ナデ：口径16.2cm、1/6残	暗赤褐-暗褐/灰茶褐	粗：細-粗砂多、細礫多
55	17-5	ビット72	深鉢？ 鉢？	平縁：ナデ/ナデ	灰/淡赤褐	粗：微-細砂多
56	17-1	ビット628	深鉢	平底？：ナデ/ナデ：底径13.4cm、1/4残	暗灰褐/暗黄灰褐	やや粗：微-粗砂多、細礫
57	17-4	土坑82	深鉢	平底：摩滅/摩滅：底径7.2cm	淡黄灰白/黒褐	粗：細-粗砂多、細礫多

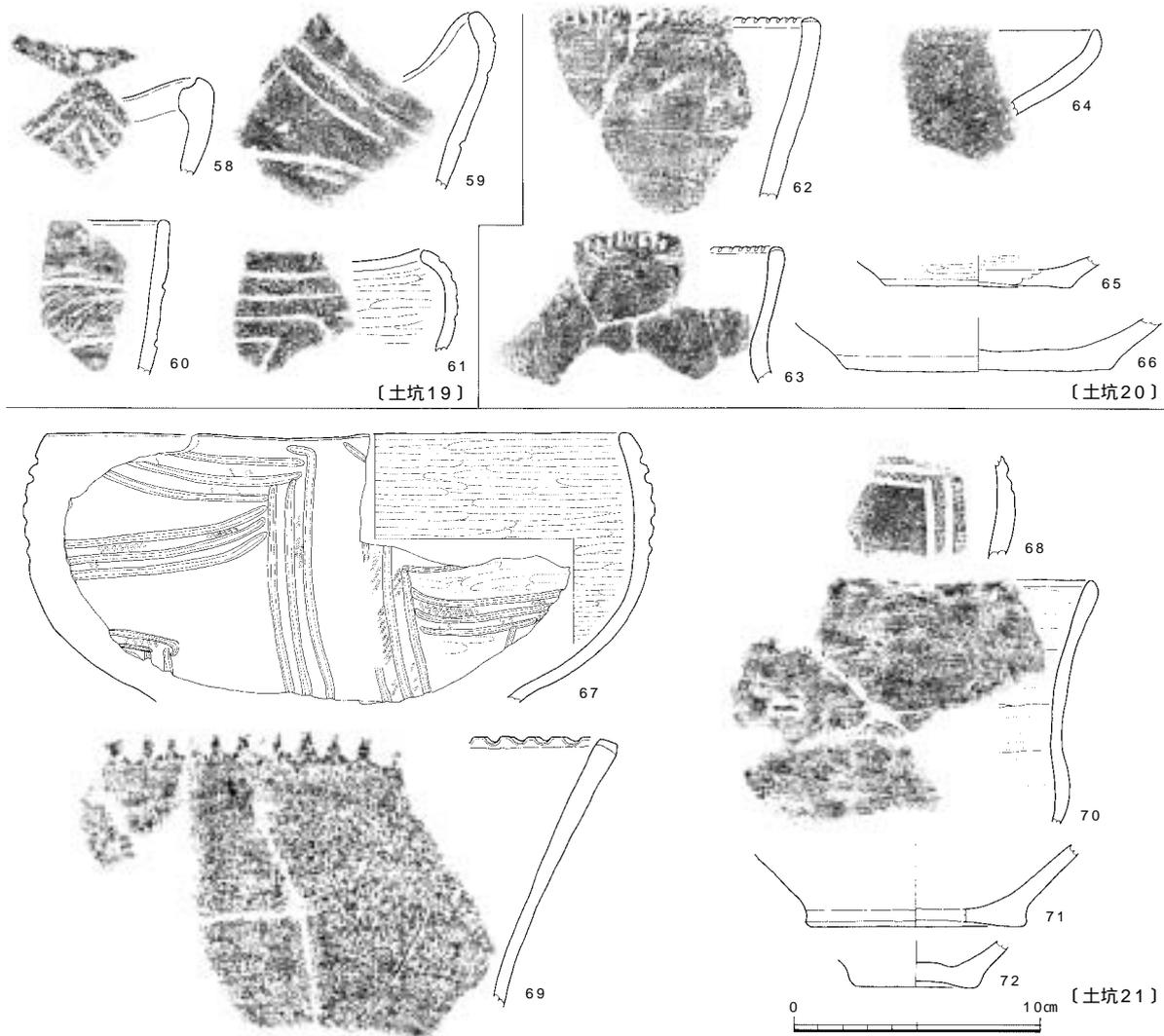
図60 土坑・ビット出土土器4（縮尺 1/3）

配される。器面は内外ともに丁寧なミガキによって調整される。

土坑24（図63-91～94）：14層で検出した。径1.0m、深さ0.36mの円形を呈する。出土した8点の縄文土器のうちの4点である。91・92は有文深鉢の口縁部で、91は口唇部に鋸歯状の刻みを施す。93は有文深鉢の突起で環状を呈する。口唇部に刻みを施し、器面には内部に刺突を有する多条の沈線を巡らせる。94は口唇部を大きく外面に肥厚させた深鉢口縁部である。波頂下に浅い窪み状の円文を有する。福田K 式～縁帯文成立段階にあたる土器群である。

土坑25（図63-97）：14層で検出した。径1.95m、深さ0.35mの円形を呈する。出土した13点の縄文土器のうちの3点である。97は内面に橋状突起を付す有文深鉢で、主文上に向かってやや高まる口縁部を有するものである。頂部に円形の穿孔を有し、周囲には内部に刺突を連続して施した沈線が巡る。頂部から左右、内外に文様帯が展開しており、外面の文様帯は頂部から垂下する2列の梯子状文、内面は中央に穿孔を有する沈線が通る撥形文となる。沈線内や沈線端部に刺突を多用する。95・96は無文の深鉢口縁部で、96は口唇部に細かい刻みを有する。97は縁帯文土器の成立段階にあたる。

土坑26（図63-98）：14層で検出した。長径1.0m、短径0.8mで、深さ0.12mの楕円形を呈する。出土した8点の縄文土器のうちの1点である。円環状の突起を有する有文深鉢で突起から沈線が垂下して文様帯に接続する。福田K 式～縁帯文成立段階の土器であろう。



番号	調査次-区	遺構名	器種	器形の特徴：文様と調整（外/内）：法量	色調（外/内）	胎土
58	17-6	土坑19	深鉢	波状口縁：波頂部に円形刺突、2本沈線磨消縄文？、摩滅/摩滅	乳白～淡橙/乳白	精良、均質：細～粗砂
59	17-6	土坑19	深鉢	波状口縁：2本沈線磨消縄文？、摩滅/摩滅	明橙褐/黄褐～灰褐	精良
60	17-6	土坑19	深鉢	平縁：2本沈線磨消縄文（RL）ナデ/ナデ	淡黄褐/淡黄褐	精良、均質：細砂、稀に細礫
61	17-6	土坑19	浅鉢	：2本沈線磨消縄文（RL）摩滅/ミガキ	淡黄灰～灰/灰～暗茶褐	精良、均質
62	17-6	土坑20	深鉢	平縁：口唇部直交刻み、条痕後ナデ/ナデ	淡黄茶褐/淡黄灰褐	良：細～粗砂、細礫少
63	17-6	土坑20	深鉢	平縁：口唇部直交刻み、ナデ/ナデ	茶褐/黄茶褐	粗：細～粗砂多
64	17-6	土坑20	浅鉢	平縁：摩滅/摩滅	淡黄茶褐/淡黄茶褐	やや粗：細砂多、細礫少
65	17-6	土坑20	浅鉢	平底：ミガキ？/ミガキ：底径7.0cm	暗黄茶褐/淡橙灰褐	粗：細～粗砂多、細礫多
66	17-6	土坑20	浅鉢	平底：ナデ/ナデ：底径11.2cm	淡黄灰茶褐/暗灰	粗：細～粗砂多、細礫多
67	17-6	土坑21	鉢	平縁：3本沈線磨消縄文（RL）ミガキ/ミガキ：底径22.8cm、1/5残	淡黄灰白/淡黄灰白～明赤橙	精良、均質：細～粗砂少
68	17-6	土坑21	鉢？	平縁：3本沈線磨消縄文（RL）ミガキ/ミガキ	淡黄灰白/淡黄灰白～明赤橙	精良、均質：細～粗砂少
69	17-6	土坑21	深鉢	平縁：口唇部直交刻み、摩滅/摩滅	淡灰褐～明橙褐/淡灰白	粗：細砂～細礫多
70	17-6	土坑21	深鉢	平縁：ナデ/条痕？	暗赤褐/明橙褐	粗：細～粗砂多、細礫
71	17-6	土坑21	深鉢	平底：摩滅/摩滅：底径8.4cm	淡灰～灰/淡灰褐	精良：稀に細礫
72	17-6	土坑21	深鉢	凹底：摩滅/摩滅：底径4.8cm	淡黄灰白/暗灰～暗灰褐	粗：細～粗砂

図61 土坑・ピット出土土器5（縮尺 1/3）

土坑27（図63 - 99）：14層で検出した。長径1.2m、短径0.6m、深さ0.34mの、楕円形を呈する。出土した24点の縄文土器のうちの1点である。有文深鉢で、縄文帯の幅が広い。福田K 式にあたる。

土坑28（図63 - 100）：14層で検出した。径0.8m、深さ0.4mの円形を呈する。出土した11点の縄文土器のうちの1点である。2本沈線で文様帯が描出される。沈線末端は鉤状に入り組み、端部どうしは切り合わない。磨消縄文土器と思われるが、摩滅が著しい。福田K 式でも古相に位置づけられる。

土坑29 (図63 - 101 ~ 103) : 14層で検出した。径0.7m、深さ0.4mの円形を呈する。出土した42点の縄文土器のうちの3点である。いずれも無文深鉢で、101は口唇部に刺突を施す。

土坑30 (図64 - 108) : 14層で検出した。径1.4m、深さ0.13mの円形を呈する。出土した2点の縄文土器のうち1点である。有文深鉢の口縁部で、外方に肥厚させる。肥厚させた口縁部上下端に沈線を1条ずつ巡らせる。器壁の摩滅が著しく、調整は確認できないが、福田K式～縁帯文成立段階にあたる。

土坑31 (図64 - 109 ~ 111) : 14層で検出した。径0.9m、深さ0.3mの、ほぼ円形を呈する。出土した77点の縄文土器のうち3点である。109は有文深鉢の口縁部、110・111は無文深鉢の口縁部である。109は口唇部を内面に屈曲させるが、肥厚はしていない。3本沈線、磨消縄文土器である。110は口唇部に刻みを、111は刺突を施すものである。109は福田K式にあたる。

土坑32 (図64 - 105) : 14層で検出した。長径1.2m、短径0.6m、深さ0.15mの楕円形を呈する。出土した18点の縄文土器のうちの2点である。口縁部内面を肥厚させる有文深鉢で、ともに肥厚させた口縁部上端に文様帯を配する。104は円文を挟み、横走る2本の沈線が展開する。いずれも彦崎K式にあたる。

土坑33 (図64 - 106) : 14層で検出した。長径1.3m、短径0.8m、深さ0.14mの楕円形を呈する。出土した17点の縄文土器のうちの1点である。低い高台状の深鉢底部である。

土坑34 (図64 - 107) : 14層で検出した。長径0.6m、短径0.4m、深さ0.16mの楕円形を呈する。出土した6点の縄文土器のうちの1点である。無文深鉢の口縁部である。

c . その他の土坑・ピット出土遺物 (図59・60・65～68)

上記以外の土坑・ピットについては、取り上げた遺物を土器・石器に大別し、さらに検出層位ごとに記述する。これらは1基あたりの出土点数が少ないため、検出層位ごとにまとめ、器種別に記述することでそれぞれの概要をつかむようにした。なお、14層の土坑・ピットの中には、前述したように13層の落ち込みと考えられるものも含んでいる。

1) 土器 (図59・60・65～68)

15層検出土坑・ピット (図59・60 図版1・4・10・11・15)

15層上面では土坑59基、ピット235基を検出した。これらから出土した土器は690点である。これらのうち、先述の土坑7基を除く土坑52基、ピット235基からは合計253点の縄文土器が出土した(図59・60 図版1・4・10・11・15)。そのうち31点をここに図化している。15層検出土坑・ピットから出土した土器の内容について、先述した資料を含めてみると、中期末～後期中葉のものがみられる。主体となるのは5割を占める福田K式に相当するものである。次いで縁帯文土器成立段階のもの2割(10点)、津雲A式1割(5点)である。

15層検出土坑・ピットの中には、明らかに14層の掘り込みと考えられるものも含まれていることから、出土土器群中に、少量ながら認められる中葉のものについては、混入した可能性が高いものとする。

有文深鉢 緩い波状口縁を呈するもの(27・30～32)と、平縁のもの(28・29・33・34)がある。また、口縁部と頸・胴部の境に段を有し、口縁部に文様帯を集約するもの(31～33)がある。文様は波頂部に穿孔を有するもの(30)、主文となる不整形な沈線文モチーフを有するもの(31)がある。27～30は、2本沈線磨消縄文の土器である。細い沈線でS字状の内文を描くものもある(34)。胴部では渦巻文と平行波状文を描くもの(35)、2本ないし3本沈線磨消縄文帯によってJ字文や渦巻文等の文様を描くもの(36～39)、多重の区画沈線文のもの(40・41)がある。

無文深鉢 口唇部に刻みを施すものがある。いずれも口唇部に対して直交する方向に刻むものである。棒状工具によるもの(47)とヘラ状工具によるもの(48)がある。そのほか、肥厚させた口縁部外面に狭い縄文帯を有するもの(53)がある。無文鉢は口縁部が内湾するものである(54)。

有文浅鉢・鉢 皿状の器形のもの(42)、口縁部が内湾するもの(43)、外反するもの(44)がある。42は口縁部内面を肥厚させた隆帯上に沈線を1条ひく。下半にも段を有する。外面は口縁部付近に縄文帯、下半には1条の沈線と斜めに刻みを施す文様帯を有する。43は2本沈線の磨消縄文、44は3本の沈線間に縄文を施すものである。45・46は球状の胴部を有する鉢である。46は球形の胴部が頸部で屈曲し、短い口縁部が付くものと思われる。

底部 いずれも平底の深鉢底部である(56・57)。

14層検出土坑・ピット(図65~68 図版2・5・6・10~12・15)

14層上面では土坑112基、ピット363基を検出した。これらから出土した土器は2,716点であり、そのうち115点を掲載した。これらのうち、先述の土坑22基を除く土坑90基、ピット363基からは1,464点の縄文土器が出土した。そのうち64点をここに図化した(図65~68 図版2・5・6・10~12・15)。112~134は有文深鉢口縁部、135~154は無文深鉢、155・156は有文深鉢の突起、157~162は有文深鉢の胴部、163~167は浅鉢・鉢、168~174は深鉢・浅鉢の底部である。14層検出土坑・ピット出土土器の内容について、先述した土器22基の資料を含めてみると、中期末~後期中葉のものがみられる。主体をなすのは福田K式75%(79点)であり、次いで縁帯文土器成立段階15%(15点)、津雲A式8%(8点)である。その他に中期末のもの3点、中津式3点、彦崎K式2点がみられる。遺物からみた14層の時期としては福田K式を中心とした後期前葉と考える。

有文深鉢の口縁部(図65) 緩い波状口縁を呈するもの、平縁のものがある。縄文地に沈線文を描くもの(112)、2本ないし3本沈線磨消縄文のもの(113~121・124~126・129)がある。口縁部に文様帯を集約するものには、口唇部外面を肥厚させるもの(128)、「く」字状・顎状口縁になるもの(130・133)がある。122・123は口縁部に鋸歯状の刻みを施すもので、口縁部には全体に縄文が施される。134は波頂下に小さい渦巻文、口縁端部に沈線を引くものである。器形を復元できた121は、口径が小さく、底部に向かってすぼまる細い植木鉢状を呈する。

無文深鉢(図66・67) 口唇部に刻みを施すもの、無文のものがある。刻みを施すものには、棒状工具によるもの(135~137・142)とヘラ状工具によるもの(138~141・143)があり、さらに口唇部に対して直交するもの(135~140・142・143)、斜行するもの(141)、鋸歯状に刻むもの(144)に分類できる。無文深鉢では、緩く膨らむ胴部が屈曲して外反する口縁部を有する器形となるものが主体である(145・148・152)。底部には明瞭な屈曲点をもたないもの(153)と、屈曲して平底になるもの(154)がある。

有文深鉢の突起部・胴部(図68) 突起には粘土紐が複雑に入り組むもの(155)、「C」字状を呈するもの(156)がある。有文深鉢胴部文様では、縄文地に縦位の平行沈線文を引くもの(157・158)、2本沈線磨消縄文帯で文様帯を描くもの(159~161)、刺突列点文によるもの(162)がある。158では沈線文が2段構成をとる。

浅鉢・鉢(図68) 頸部でくびれを有する鉢、皿状の器形を呈する浅鉢がある。163は3本沈線磨消縄文の鉢で、逆三角形の口縁部文様帯、円形の胴部文様帯の内部には簡略化された渦巻文が描かれる。164は口縁部を屈曲する皿状の浅鉢、165は内面に肥厚させた口唇部から垂下する隆帯が付く浅鉢である。166は沈線間に刺突列点文を配するものである。167は口唇端部と内面隆帯上に縄文施文する皿状の浅鉢である。

底部(図68) 平底のもの(168~171)、凹底のもの(172・173)、高台状のもの(174)がある。

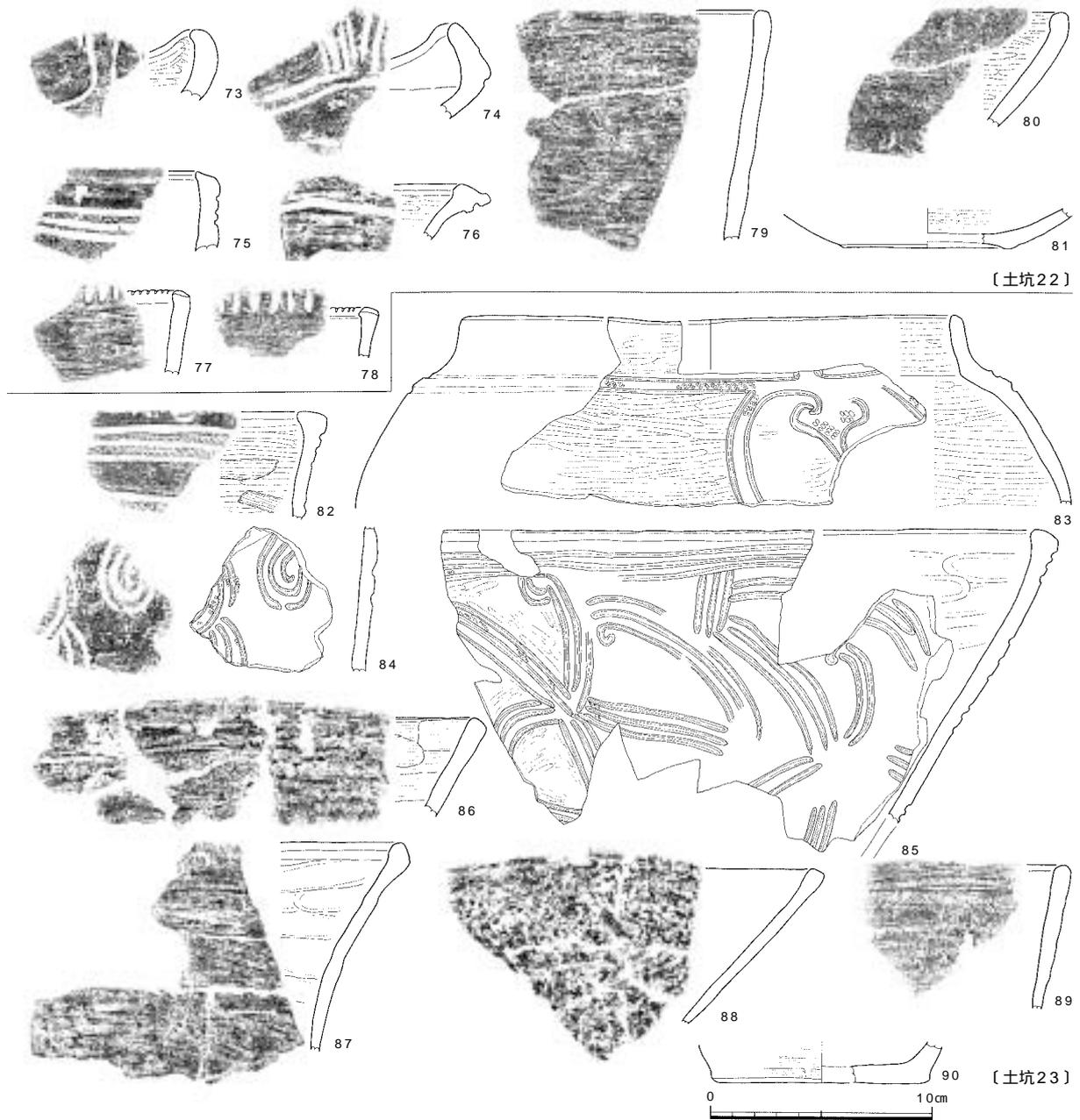
14層で検出したピットには中期末~後期中葉までの遺物が含まれる。

2) 石器

15・16層検出土坑・ピット(図69・70 図版23・28)

石鏃 サヌカイト製未成品が1点(S27)出土した。素材となる剥片に周縁から整形のために調整剥離を施した後、刃部をつくり出すことなく、放棄されている。

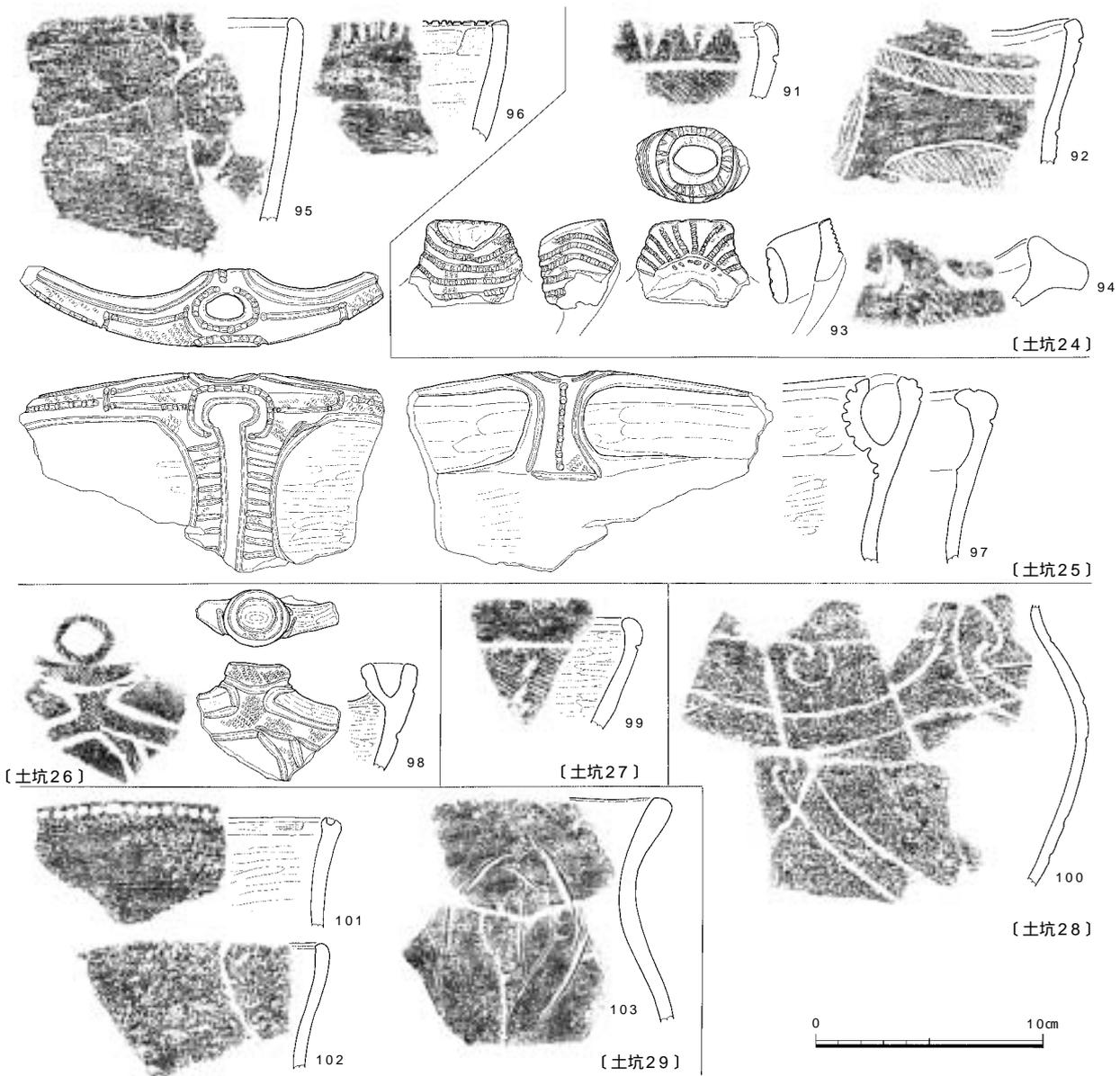
スクレイパー 2点出土した(S28・29)。いずれもサヌカイト製である。S28は背面に自然面を残す横長剥片の下縁に浅い角度で両面調整を施し、緩やかな弧状を呈する鋭い刃部をつくり出している。また、上縁には整形を



番号	調査次-区	遺構名	器種	器形の特徴：文様と調整（外/内）：法量	色調（外/内）	胎土
73	17-6	土坑22	深鉢	波状口縁：磨消縄文（RL）ミガキ/ミガキ	淡灰黄白/淡灰茶褐～茶褐	精良：細砂
74	17-6	土坑22	深鉢	波状口縁：波頂部から垂下する沈線文、ミガキ/ナデ	灰～暗灰/乳白	精良、均質：細～粗砂、細礫
75	17-6	土坑22	深鉢	平縁：3本沈線磨消縄文（RL）ナデ/ナデ	暗褐～黒/淡灰	やや粗：細～粗砂、細礫
76	17-6	土坑22	深鉢	口唇部外方に肥厚：口唇部下面に沈線文、口唇部外端に縄文（RL）ミガキ/ミガキ、ナデ	灰褐～暗灰茶褐/茶褐	精良、均質：細砂
77	17-6	土坑22	深鉢	平縁：口唇部直交刻み、条痕/条痕	茶褐/淡黄橙	良：細～粗砂、稀に細礫
78	17-6	土坑22	深鉢	平縁：口唇部斜め刻み（鋸歯状）条痕/ナデ	暗茶褐/淡灰	精良、均質：細～粗砂、稀に細礫
79	17-6	土坑22	深鉢	平縁：条痕/条痕	暗茶褐/淡灰茶褐	粗：細～粗砂、細礫多
80	17-6	土坑22	浅鉢	平縁：ミガキ/ミガキ、赤彩	乳白/乳白	精良、均質：細砂～粗砂
81	17-6	土坑22	浅鉢	高台状：ナデ？/ミガキ：底径7.6cm、1/6残	乳白/乳白	精良、均質：細～粗砂
82	17-6	土坑23	深鉢	平縁：3本沈線磨消縄文（RL）ミガキ/ミガキ、条痕	茶褐～暗茶褐/茶褐	精良、均質
83	17-6	土坑23	壺	平縁：2本沈線磨消縄文（RL）円文、スベド文、ミガキ/ミガキ：口径21.8cm、1/5残	暗褐～黒/黒	精良、均質：微～細砂
84	17-6	土坑23	深鉢	：3本沈線磨消縄文（RL）渦巻文、ナデ/ナデ	淡灰黄白～明橙/淡灰白	やや粗：細～粗砂多
85	17-6	土坑23	深鉢	平縁：3本沈線磨消縄文（RL）ミガキ/ナデ	橙褐～橙茶褐/淡灰褐～灰茶褐	やや粗：細～粗砂、稀に細礫
86	17-6	土坑23	深鉢	平縁：条痕/条痕？	黄茶褐/明黄褐	粗：細～粗砂多、細礫多
87	17-6	土坑23	深鉢	平縁：条痕/ナデ	淡黄灰褐/明黄橙～淡灰黄	精良、均質：細～粗砂、細礫
88	17-6	土坑23	鉢	平縁：摩滅/摩滅	明黄橙/明黄橙	粗：細～粗砂多、細礫多
89	17-6	土坑23	深鉢	平縁：条痕、ナデ/摩滅	淡灰茶褐/淡黄白	粗：細砂～細礫多
90	17-6	土坑23	深鉢	平底：ナデ、赤彩/摩滅：底径9.2cm、1/4残	淡灰黄白/淡黄白	粗：細砂～細礫多

図62 土坑・ピット出土土器6（縮尺 1/3）

調査の記録

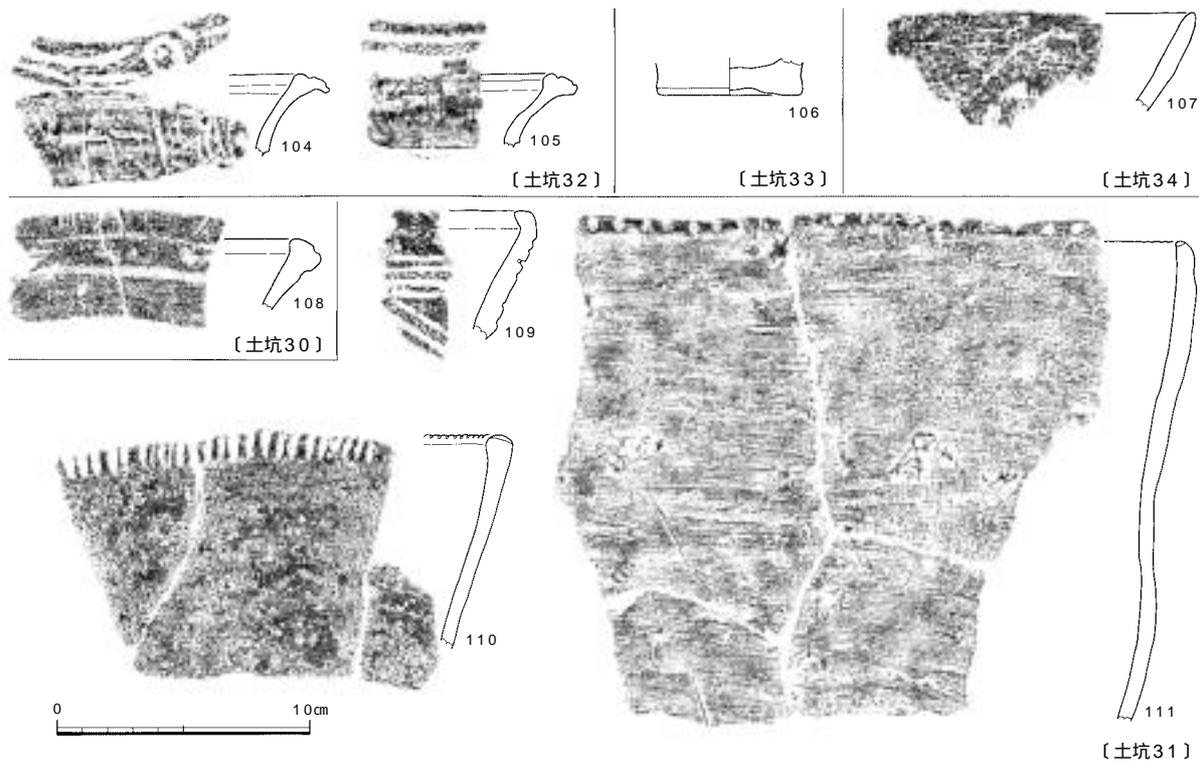


番号	調査次-区	遺構名	器種	器形の特徴：文様と調整（外/内）	色調（外/内）	胎土
91	17-6	土坑24	深鉢	平縁：口唇部鋸歯文、幅広縄文帯、磨消縄文(RL)/摩滅	灰茶褐/明黄茶褐	やや粗：細～粗砂、稀に細礫
92	17-6	土坑24	深鉢	波状口縁：2本沈線磨消縄文(RL)、幅広縄文帯、ナデ/ナデ	暗茶褐/暗茶褐	良、均質：細～粗砂
93	17-6	土坑24	深鉢	円環状突起：突起上端刻目、突起を巡る多重沈線文内部に刺突、沈線間縄文(RL)/ミガキ	淡黄褐/淡黄褐	精良、均質：稀に細礫
94	17-6	土坑24	深鉢	口唇部内外に肥厚：口唇部に文様集約、沈線文、口唇部縄文(RL)、ナデ/ナデ	橙褐～灰黄褐/淡黄白	粗：細～粗砂、細礫多
95	17-6	土坑25	深鉢	平縁：条痕後ナデ/ナデ	暗茶褐/淡橙灰茶褐	粗：細～粗砂多、細礫多
96	17-6	土坑25	深鉢	平縁：口唇部直交刻み、条痕/条痕	茶褐～暗茶褐/淡灰茶褐	やや粗：粗砂～細礫多
97	17-6	土坑25	深鉢	波状口縁、橋状突起：沈線内・沈線末端刺突、梯子状文、磨消縄文(RL)、ミガキ/ナデ、ミガキ	暗茶褐～暗褐/淡灰白	精良：細砂、稀に細礫
98	17-6	土坑26	深鉢	円環状突起、波状口縁：磨消縄文(RL)、ミガキ/ミガキ	暗茶褐/灰茶褐	精良、均質：細～粗砂
99	17-6	土坑27	深鉢	平縁：幅広縄文帯、磨消縄文(RL)、ミガキ/ミガキ	灰茶褐/黄茶褐～灰褐	粗：細砂～細礫多
100	17-6	土坑28	深鉢	：2本沈線磨消縄文、摩滅/摩滅	淡橙茶褐～茶褐/暗茶褐	精良：微～細砂
101	17-5	土坑29	深鉢	平縁：口唇部刺突、条痕/ミガキ	茶褐～暗灰茶褐/淡灰茶褐	やや粗：微砂多、細砂含む
102	17-5	土坑29	深鉢	平縁：ナデ/ナデ	淡黄茶褐/淡茶褐	粗：細礫多
103	17-5	土坑29	深鉢	平縁：ミガキ/ナデ	茶褐～暗茶褐/茶褐	やや粗：微砂多、細礫

図63 土坑・ピット出土土器7（縮尺 1/3）

意図した調整剥離が認められる。S29も自然面を一部に残す横長剥片を素材とする。上縁には整形を意図した調整剥離、下縁には細かい両面調整によって鋭い直線状の刃部をつくり出す。

加工痕のある剥片 サヌカイト製剥片1点が出土した。S30は翼状の横長剥片で自然面が一部残る、上端部に細かい両面調整を施している。スクレイパーとしての利用を考えたものであろう。



番号	調査次-区	遺構名	器種	器形の特徴：文様と調整（外/内）：法量	色調（外/内）	胎土
104	17-2	土坑32	深鉢	口唇部外方に肥厚：口唇部上面に沈線文、口唇部上縄文(RL)、条痕、ナデ/ナデ	暗灰茶褐/茶褐	やや粗：細～粗砂
105	17-2	土坑32	深鉢	口唇部外方に肥厚：口唇部上面に沈線2条、口唇部上縄文(RL)、ナデ/ナデ	暗茶褐/茶褐	やや粗：細～粗砂
106	17-2	土坑33	深鉢	高台状：ナデ、指頭痕/ナデ：底径5.4cm、1/2残	明黄褐～茶褐/灰茶褐	粗、不均等：細～粗砂、細礫多
107	17-7	土坑34	深鉢	平縁：条痕/条痕	茶褐～暗褐/茶褐	粗：細～粗砂多、細礫
108	17-3	土坑30	深鉢	口唇部肥厚：口唇部上下に沈線、摩滅/摩滅	橙茶褐/暗茶褐	精良：細～粗砂、稀に細礫
109	17-4	土坑31	深鉢	平縁：3本沈線磨消縄文(RL)、ミガキ/ナデ	灰褐/灰茶褐	やや粗：微砂多、細礫
110	17-4	土坑31	深鉢	平縁：口唇部斜め刻み、摩滅/摩滅	淡黄/淡黄茶褐	粗：細～粗砂多、細礫
111	17-4	土坑31	深鉢	平縁：口唇部刺突、条痕/ナデ	淡灰茶褐/淡黄	粗：細～粗砂多、細礫多

図64 土坑・ピット出土土器8（縮尺 1/3）

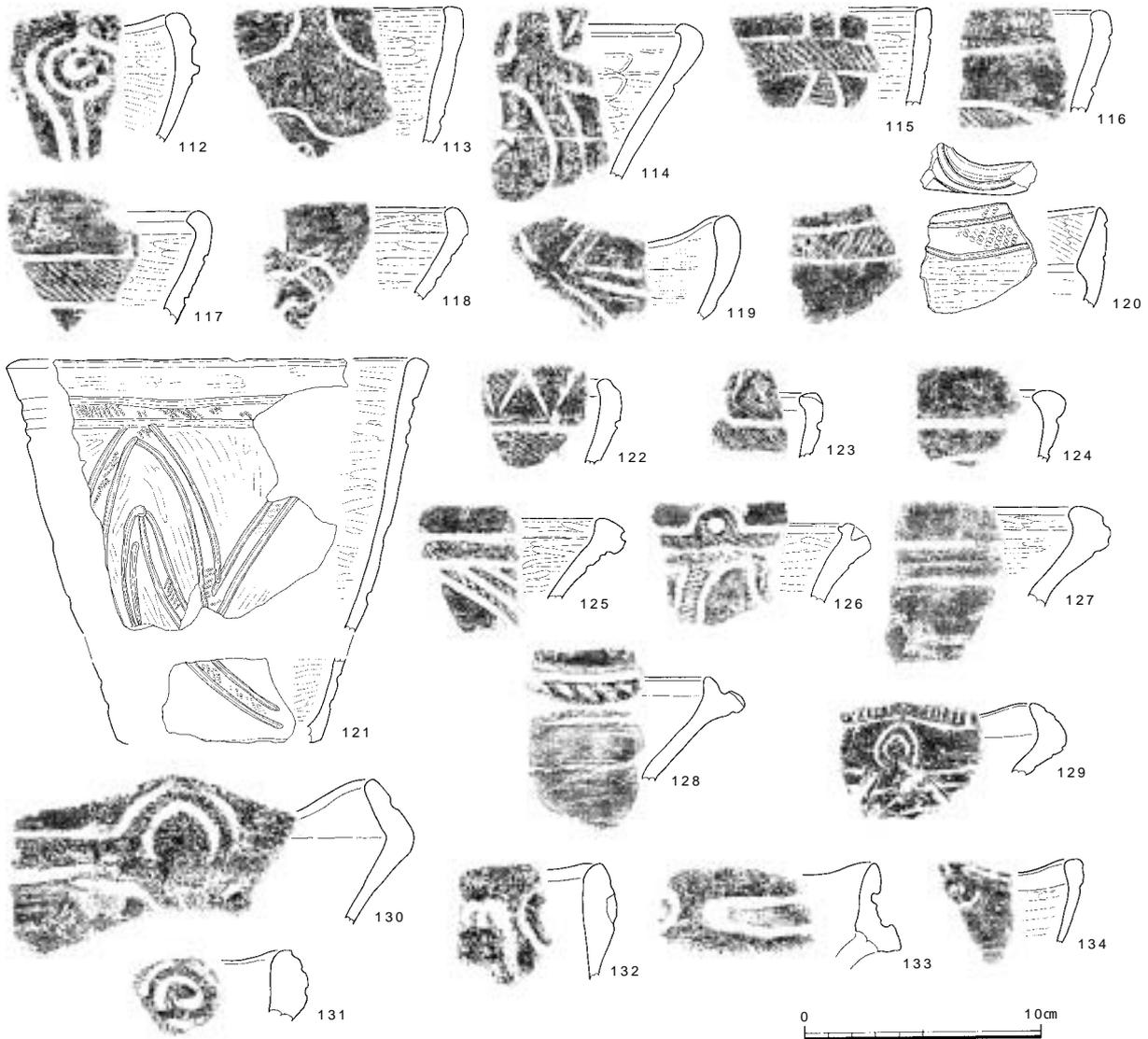
石皿 1点出土した。S39は花崗岩の扁平な大型角礫を利用している。表面の数ヶ所に敲打痕が認められる。両側面と下面は折れ面であるが、特に左側面とその周囲が薄ピンク色に変色しており、被熱した可能性が高い。

石錘 8点出土した（S31～38）。いずれも円礫、もしくは扁平な礫の上下端を打ち欠いて利用したものである。大きさによって3群ほどに分けることもできる。S35は大型品で右側縁に敲打痕も認められ、叩石としての使用も考えられる。

14層検出土坑・ピット（図71～73 図版22・25・26・28）

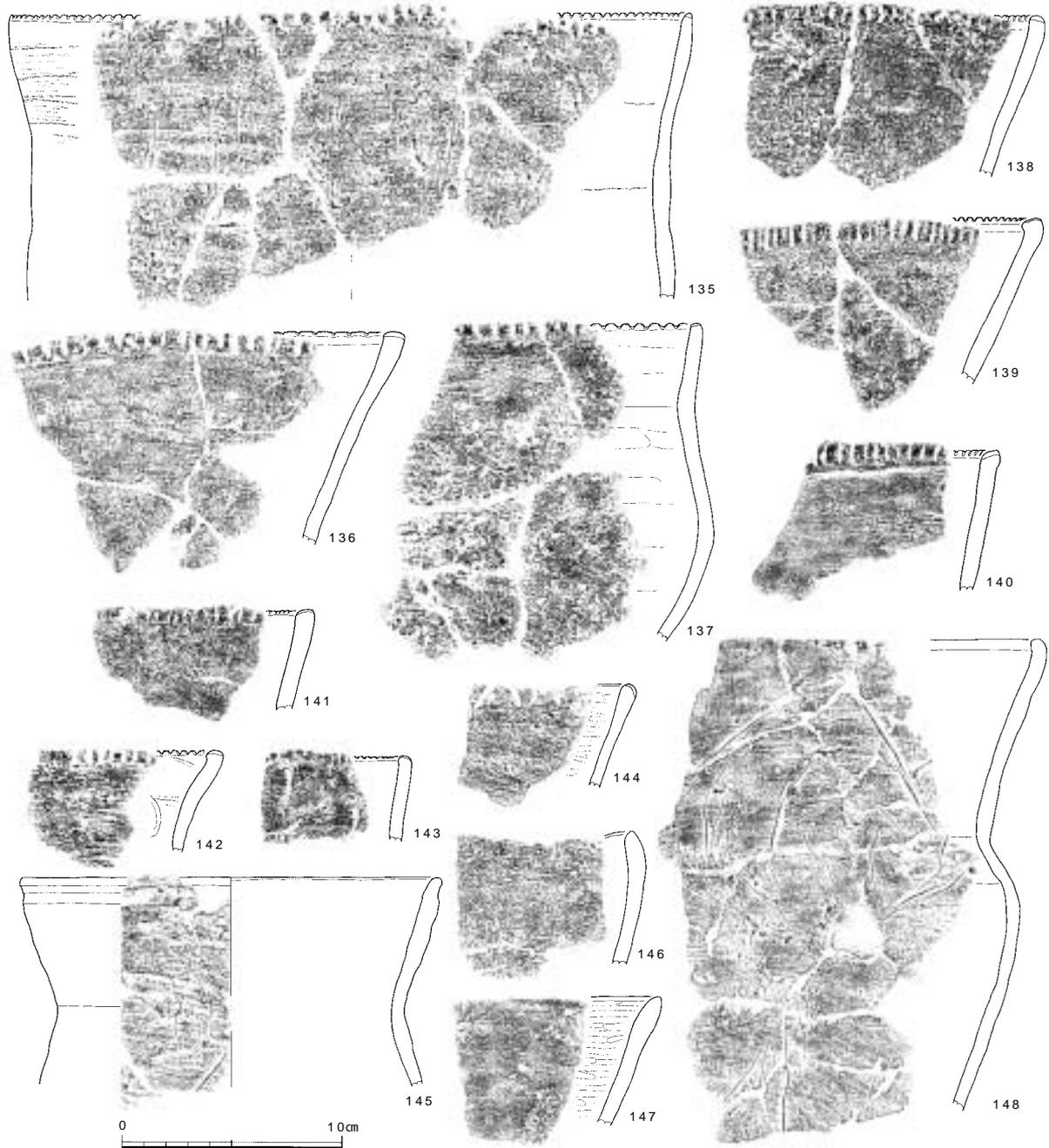
石鏃 3点出土した（S42～44）。すべてサヌカイト製である。S42は凹基式で抉りは明瞭、脚部は幅広である。S43は平基式であるが、素材面を残し、下縁が片面調整であることから未成品の可能性もある。S44は半損し、右側縁に細かい片面調整を施す。未成品であろう。

スクレイパー 2点出土した（S45・46）。S45はサヌカイト製で三角形の横長剥片を素材とし、下縁部に浅い角度で両面調整を施し、直線状の鋭い刃部をつくり出している。右側縁には両面から調整の他に、抉りを意図した剥離も認められるが、抉り自体は明瞭ではない。刃部には使用による摩滅部分が観察できる。S46は台形状の厚みのある横長剥片を素材とし、周縁から形状を整えるための調整剥離を何回か行った後、右側縁と下縁を中心に細かい両面調整を行なう。刃部は浅い角度での調整を重ねることで直線状に鋭くつくり出されるが、わずかに内湾する。刃部には使用による摩滅部位が広く認められる。



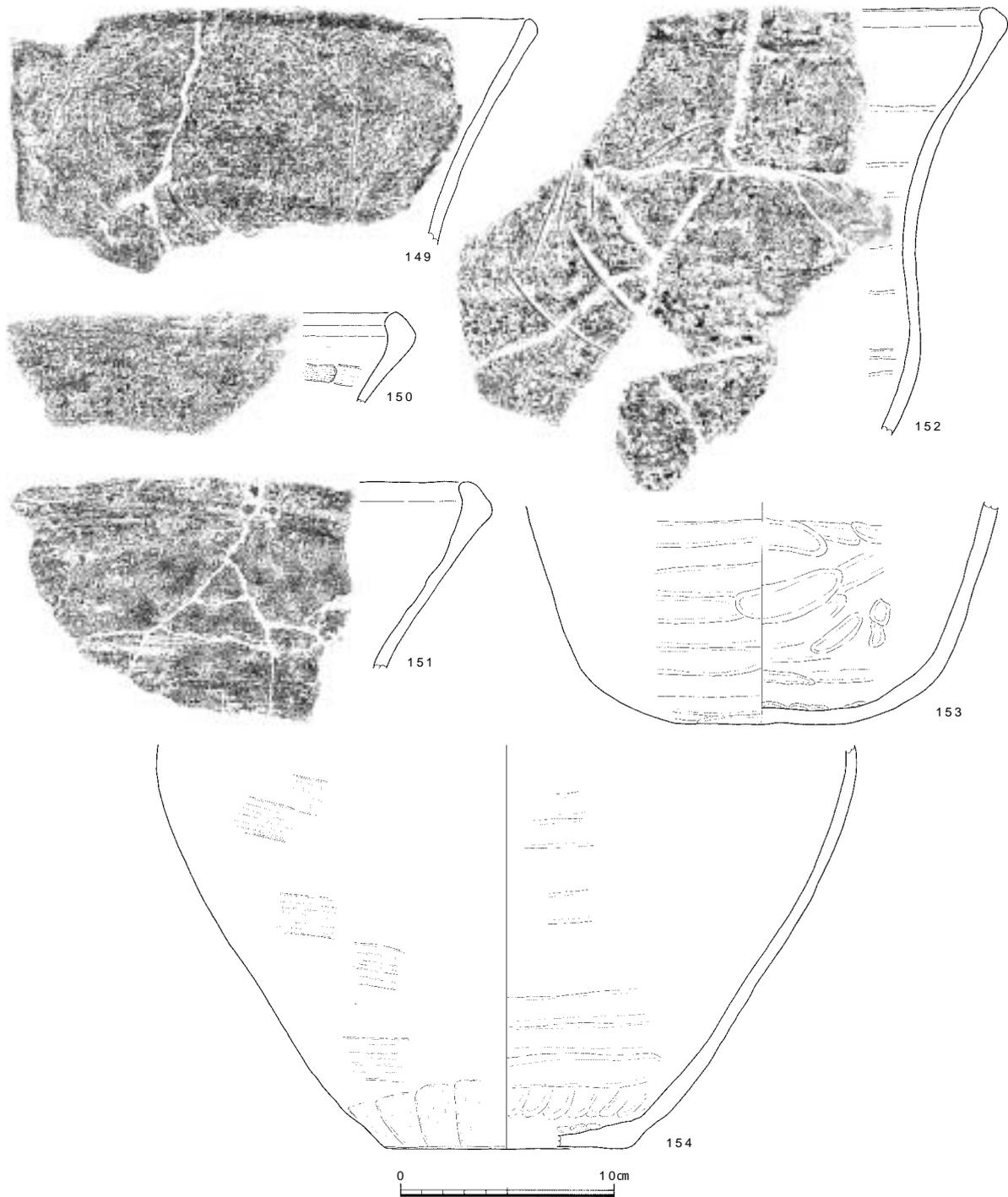
番号	調査次-区	遺構名	器種	器形の特徴：文様と調整（外/内）	色調（外/内）	胎土
112	17-1	土坑166	深鉢	ゆるい波状口縁：渦巻文、垂下する沈線文、ナデ、縄文(RL)ノミガキ	暗灰/淡橙-灰褐	やや粗：微砂多、細礫多
113	17-6	ビット619	深鉢	平縁：幅広の文様帯、2本沈線磨消縄文(RL)ノミガキ	淡黄灰/暗灰茶褐	精良、均質
114	17-6	ビット357	深鉢	平縁：J字文、口唇部縄文(RL)ノミガキ/ミガキ	淡灰黄/灰	精良、均質：微-細砂
115	17-6	ビット261	深鉢	平縁：2本沈線磨消縄文(RL)ノミガキ/ミガキ	明淡橙灰/淡灰白	精良、均質：稀に細礫
116	17-6	土坑115	深鉢	平縁：刺突文、幅広縄文帯、磨消縄文(RL)ノミガキ?	淡灰褐/茶褐	やや粗、不均等：細-粗砂、細礫
117	17-6	土坑116	深鉢	平縁：2本沈線磨消縄文(RL)ノミガキ/ミガキ、ナデ	灰茶褐/灰	やや粗：細-粗砂多、細礫
118	17-6	ビット345	深鉢	平縁：渦巻文、2本沈線磨消縄文(RL)ノミガキ	乳白/乳白	精良、均質：細砂、稀に粗砂
119	17-6	ビット255	深鉢	波状口縁：2本沈線磨消縄文、摩滅/糸痕	暗赤茶褐/暗灰茶褐	やや粗：細砂-粗砂、細礫多
120	17-6	ビット354	深鉢	「C」字状?突起：2本沈線磨消縄文(RL)ノミガキ/ミガキ、ナデ	暗灰茶褐/暗褐	良：微-細砂
121	17-5	土坑121	深鉢	平縁、植木鉢形：2本沈線磨消縄文、ミガキ/ミガキ：口径16.6cm、1/4残	灰茶褐/黒褐	良：微-細砂
122	17-4	土坑148	深鉢	平縁：口唇部鋸歯文、縄文(RL)ノミガキ	暗茶褐/明茶褐	精良：微砂、細礫
123	17-6	ビット357	深鉢	平縁：口唇部鋸歯文、縄文(RL)ノミガキ	淡灰黄/灰	精良、均質：微-細砂
124	17-7	土坑187	深鉢	口唇部肥厚：2本沈線、摩滅/摩滅	淡黄白/黄	精良、均質：稀に細礫
125	17-6	ビット619	深鉢	口唇部肥厚：3本沈線磨消縄文(RL)ノミガキ、ナデ/ミガキ	茶褐/暗茶褐	精良、均質：細砂
126	17-6	土坑105	深鉢	口唇部肥厚：口唇部上面に円錐状窪み、磨消縄文(RL)ノミガキ/ミガキ	暗褐/暗褐	精良
127	17-5	土坑120	深鉢	平縁、口唇部内外に肥厚：沈線(浅)ノミガキ/ミガキ	赤褐/暗赤褐	精良、均質：微砂
128	17-6	ビット285	深鉢	口唇部内外に肥厚：口唇部上面沈線+斜行刻目文、ミガキ/ミガキ	橙褐/暗橙褐	精良、均質：細砂
129	17-6	土坑116	深鉢	波状口縁：口唇部刻目、円文、磨消縄文(RL)ノミガキ/摩滅	明灰黄/淡灰茶褐	良、均質：細-粗砂、稀に細礫
130	17-6	ビット328	深鉢	波状口縁、「く」字状口縁：波頂部に円文、頸部に沈線文、縄文(RL)ノミガキ/摩滅/ナデ	明橙/明橙	やや粗：細砂-細礫
131	17-2	ビット265	深鉢	波頂部片：渦巻文、沈線間縄文(RL)ノミガキ	明橙/橙-淡黄灰	精良、均質：細砂、稀に細礫
132	17-5	土坑122	深鉢	ゆるい波状口縁：円形モチ-フ+窓枠状窪み、窪み内に連弧文/摩滅	明橙茶褐-茶褐/黄茶褐	粗：細礫多
133	17-2	ビット624	深鉢	ゆるい波状口縁、「く」字状口縁：円形モチ-フ+枠状区画、摩滅/ナデ	茶褐-暗茶褐/暗茶褐-黒褐	粗：細礫
134	17-1	ビット548	深鉢	ゆるい波状口縁：渦巻文、口唇部上端に枠状区画、ナデ/ナデ	淡灰白/淡灰茶褐	精良：稀に細礫

図65 土坑・ビット出土土器9（縮尺 1/3）



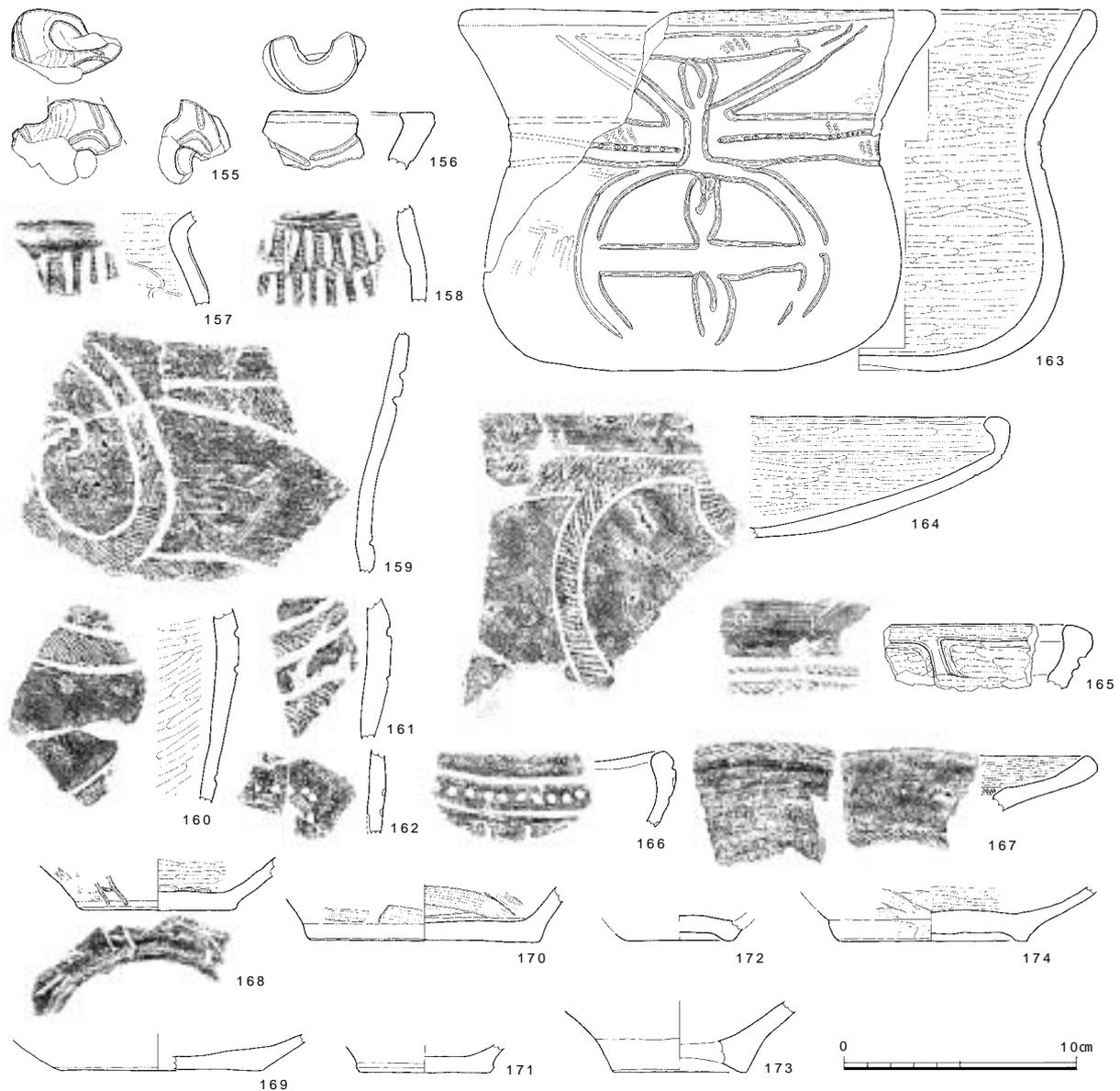
番号	調査次-区	遺構名	器種	器形の特徴：文様と調整（外/内）：法量	色調（外/内）	胎土
135	17-6	ビット625	深鉢	平縁：口唇部直交刻み、条痕/ナデ：口径30.8cm、1/3残	茶褐～暗茶褐/茶褐～暗褐	粗：細～粗砂多、細礫
136	17-6	ビット353	深鉢	平縁：口唇部直交刻み、条痕/ナデ	茶褐～暗茶褐/暗褐～黒	やや粗：細～粗砂多、細礫
137	17-6	ビット356	深鉢	平縁：口唇部直交刻み、条痕/ナデ	暗茶褐/暗灰褐～暗褐	粗：細～粗砂多、細礫
138	17-6	ビット342	深鉢	平縁：口唇部直交刻み、条痕後ナデ/ナデ	灰黄白/灰橙白	良：細砂～細礫
139	17-4	土坑31	深鉢	平縁：口唇部直交刻み、ナデ/摩滅	淡灰白/暗灰	やや粗：微砂多、細礫
140	17-6	ビット622	深鉢	平縁：口唇部直交刻み、ナデ/ナデ	乳白/乳白	精良、均質
141	17-6	ビット270	深鉢	平縁：口唇部直交刻み+斜め刻み、ナデ/ナデ	乳白/乳白	やや粗：細～粗砂、細礫多
142	17-6	ビット619	深鉢	平縁：口唇部直交刻み、条痕/ナデ	淡橙黄褐～淡灰/橙褐	粗：細砂～細礫多
143	17-2	ビット464	深鉢	平縁：口唇部直交刻み、ナデ/ナデ	淡黄灰白/淡黄白～明橙	やや粗：微砂多
144	17-6	ビット619	深鉢	平縁：口唇部鋸歯文、条痕/ミガキ	暗褐/灰黄褐	均質：細～粗砂多
145	17-6	ビット261	深鉢	平縁：条痕/条痕後ナデ：口径18.8cm、1/5残	黄橙茶褐/淡灰茶褐	粗：細～粗砂多、細礫
146	17-5	土坑135	深鉢	平縁、わずかに波打つ：ナデ/ナデ	淡黄白～淡茶褐/淡黄白～淡灰	粗：微砂多、細礫
147	17-6	ビット619	深鉢	平縁：条痕/ミガキ	茶褐/暗褐	精良、均質：細～粗砂、細礫
148	17-6	ビット342	深鉢	平縁：条痕/ナデ	淡黄灰/淡灰白	良：細砂、粗砂～細礫多

図66 土坑・ピット出土土器10（縮尺 1/3）



番号	調査次-区	遺構名	器種	器形の特徴：文様と調整(外/内)：法量	色調(外/内)	胎土
149	17-6	ビット318	深鉢	平縁：摩滅/摩滅	淡橙灰/淡橙	粗：細～粗砂、細礫多
150	17-6	ビット619	深鉢	平縁、口唇部内面に肥厚：摩滅/ナデ、糸痕	暗茶褐/淡灰茶褐	粗：細～粗砂多、細礫
151	17-6	ビット623	深鉢	平縁、口唇部内側に肥厚：糸痕/摩滅	暗茶褐/灰黄褐	やや粗：細～粗砂多、細礫
152	17-6	ビット340	深鉢	平縁、口唇部肥厚：ナデ/ナデ	茶褐～暗茶褐/淡黄茶褐	やや粗：細～粗砂多、細礫少
153	17-6	ビット356	深鉢？ 鉢？	丸底：ナデ/ナデ、指頭痕：底径7.8cm	明黄茶褐～明茶褐/灰茶褐	粗：細～粗砂多、細礫多
154	17-6	ビット261	深鉢	平底：ナデ/ナデ、指頭痕：底径11.4cm、1/3残	明橙茶褐/淡茶褐	粗：細～粗砂多、細礫多

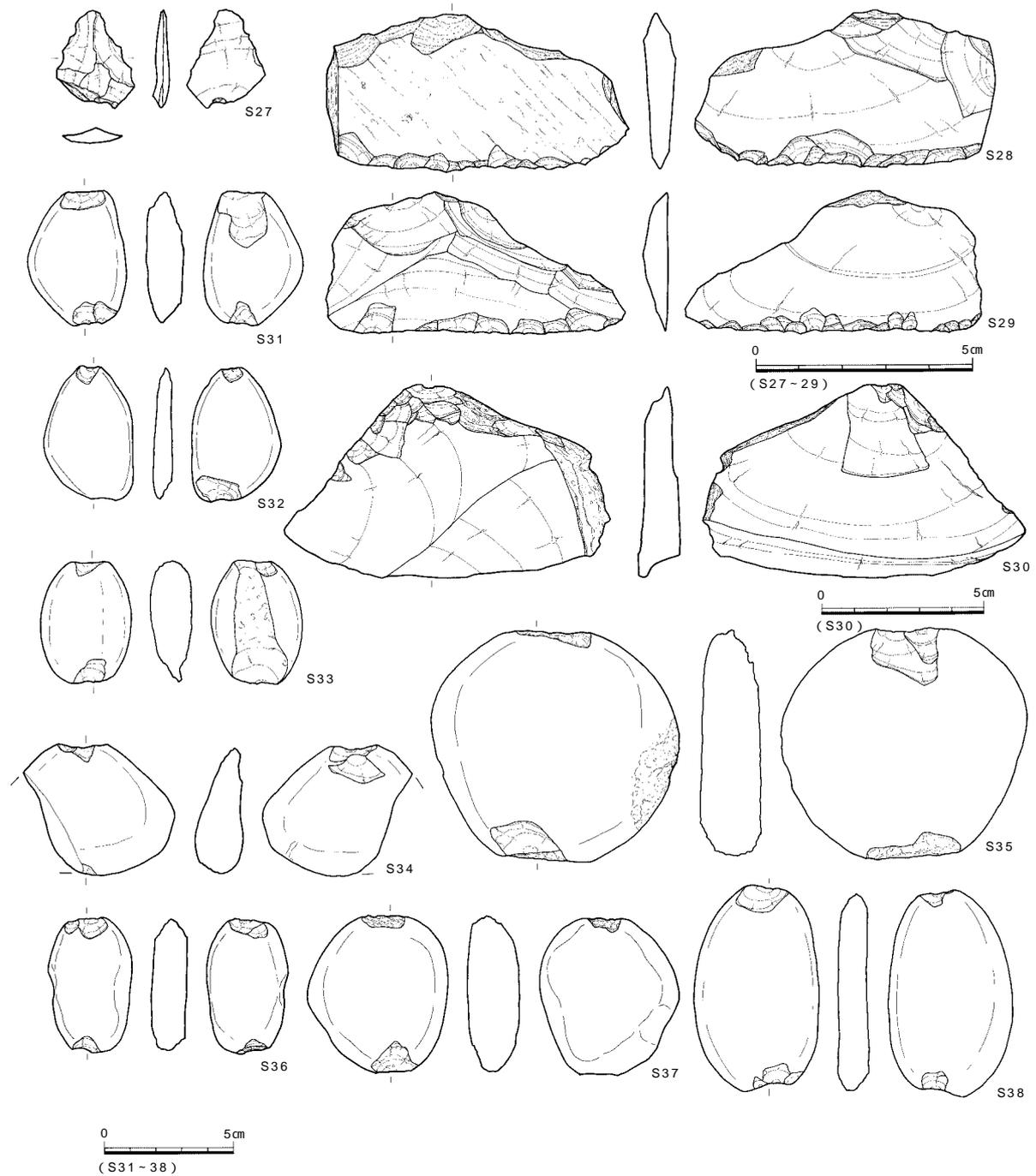
図67 土坑・ビット出土土器11(縮尺 1/3)



番号	調査次-区	遺構名	器種	器形の特徴：文様と調整（外/内）：法量	色調（外/内）	胎土
155	17-6	ビット619	深鉢	口縁突起部、穿孔：沈線、ミガキ/絞り目	暗赤茶褐/茶褐-暗茶褐	粗：細砂-細礫多
156	17-6	ビット261	深鉢	口縁突起部、「C」字状、上端平滑：突起巡る沈線文、摩滅/摩滅	灰黄茶褐/灰黄褐	やや粗：細-粗砂多、細礫多
157	17-6	ビット344	深鉢	：2段構成の縦位の沈線文、沈線間縄文（RL）/ミガキ、ナデ	淡黄白/淡灰白-暗褐	やや粗：細-粗砂多、細礫
158	17-6	ビット306	深鉢	：2段構成の縦位の沈線文、沈線間縄文（RL）/条痕、ナデ	乳白/暗灰褐	やや粗：細-粗砂
159	17-6	土坑116	深鉢	：J字文、2本沈線磨消縄文（RL）/条痕/ナデ	暗茶褐/淡黄茶褐-茶褐	やや粗：細-粗砂
160	17-6	ビット353	深鉢	：2本沈線磨消縄文（RL）/ミガキ/ミガキ	淡灰白/暗茶褐	精良、均質：細砂
161	17-6	ビット340	深鉢	：2本沈線磨消縄文（RL）/ナデ/ナデ	暗茶褐/茶褐	精良、均質：細砂
162	17-2	ビット626	深鉢	：沈線（浅）/刺突列、摩滅/ナデ	橙褐/暗灰褐	良：細砂
163	17-6	ビット625	鉢	平縁、凹底：沈線内刺突、円文、退化した渦巻文、3本沈線磨消縄文（RL）/ミガキ/ミガキ：口径19.6cm	淡黄茶褐/淡黄茶褐-茶褐	良：細-粗砂、稀に細礫
164	17-6	ビット354	浅鉢	平縁：2本沈線磨消縄文（RL）/ミガキ/ミガキ	暗茶褐-暗褐/暗灰褐-暗褐	精良
165	17-6	ビット620	鉢？	口唇部肥厚、垂下する隆帯：3本沈線磨消縄文（RL）/ミガキ/ミガキ	淡灰黄褐/淡黄灰	精良、均質
166	17-2	ビット626	深鉢？ 鉢？	緩い波状口縁：沈線、刺突列、ナデ/ナデ	暗茶褐/暗茶褐	精良：細-粗砂、稀に細礫
167	17-6	ビット340	浅鉢	平縁、内面隆帯：口唇部縄文（RL）/ミガキ/隆帯上面縄文（RL）/ミガキ	茶褐/暗茶褐	良：粗砂-細礫
168	17-6	ビット304	浅鉢	平底：沈線文、条痕後ナデ/ミガキ、指頭痕：底径6.4cm、1/1残	暗茶褐-明橙灰/暗灰褐-暗褐	精良、均質：細-粗砂
169	17-6	土坑118	浅鉢？ 鉢？	平底：ナデ、底面指頭痕/摩滅：底径8.4cm、1/3残	暗茶褐-暗褐/暗褐	精良、均質：微砂
170	17-6	ビット320	深鉢	平底：条痕、ナデ/条痕：底径9.8cm、1/3残	淡灰白-灰/淡黄灰	精良、均質：細-粗砂
171	17-6	ビット619	浅鉢	平底：ナデ/摩滅：底径5.6cm	淡黄灰褐/淡赤茶褐	やや粗：細-粗砂
172	17-6	ビット328	深鉢	凹底、平面楕円形：ナデ、指頭痕/ナデ：底径4.6cm、1/1残	暗橙褐/橙褐	精良：細砂少
173	17-2	ビット499	深鉢？ 鉢？	凹底：摩滅/摩滅：底径5.7cm、1/3残	明黄橙/暗褐	良、均質：細-粗砂多
174	17-6	ビット328	浅鉢？	高台状、平面楕円形：条痕、ナデ/ミガキ：底径8.1cm、1/1残	乳白/淡黄白-灰	良、均質：細-粗砂、細礫

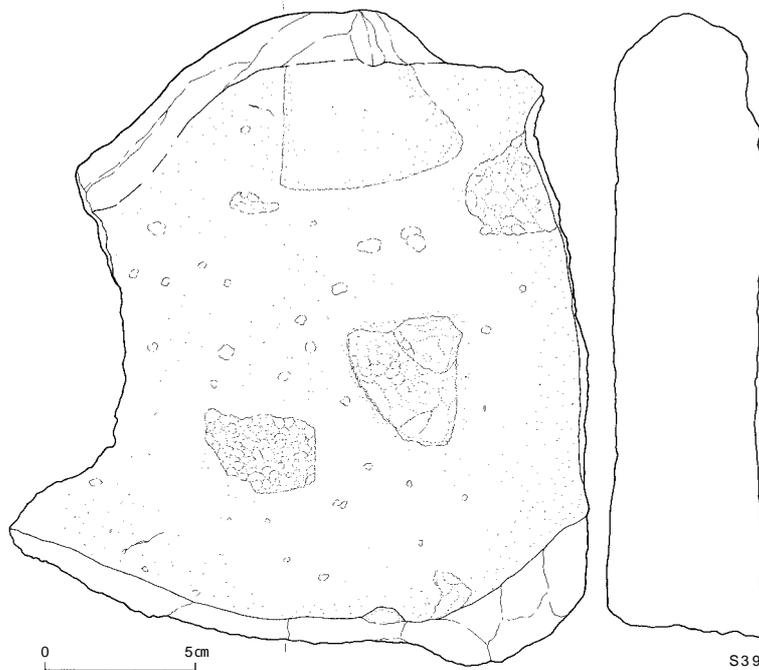
図68 土坑・ビット出土土器12（縮尺 1/3）

調査の記録



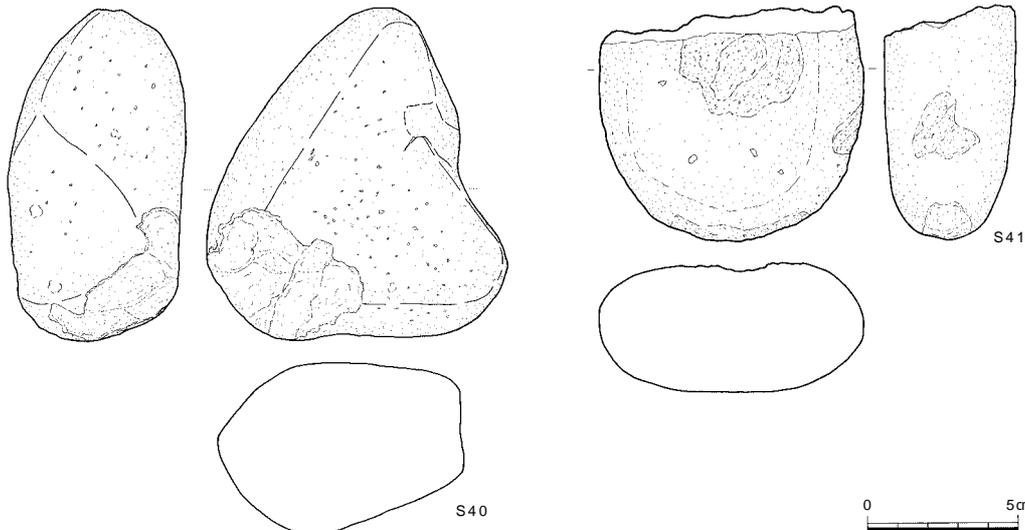
番号	調査次 - 区	遺構	器種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石材	特徴
S27	17-3	土坑36	石鏢未成品	2.29	1.81	0.31	1.0	サヌカイト	周縁からの粗い調整。
S28	17-6	ビット28	スクレイパー	3.60	6.90	0.75	21.8	サヌカイト	原礫面を大きく残す剥片を素材。
S29	17-1	ビット616	スクレイパー	3.20	6.80	0.87	12.3	サヌカイト	横長剥片を素材。下辺に両面調整。
S30	17-1	ビット616	加工痕のある剥片	6.00	10.0	1.30	83.4	サヌカイト	横長剥片の上端に両面調整。
S31	17-3	ビット143	石鏢	5.20	3.80	1.45	39.8	花崗閃緑岩	小型品。円礫の上下端に打ち欠き。
S32	17-6	土坑13	石鏢	5.20	3.40	0.71	18.6	流紋岩	扁平な礫の上下端に打ち欠き。
S33	17-3	ビット143	石鏢	4.80	3.50	1.65	37.2	流紋岩	小型品。円礫の上下端に打ち欠き。
S34	17-6	ビット37	石鏢	5.10	(5.80)	1.90	(67.7)	流紋岩	円礫の短軸両端に打ち欠き。
S35	17-1	ビット13	石鏢	9.00	9.50	2.38	327.2	石英安山岩	大型品。上下端に打ち欠き。側縁に敲打痕。
S36	17-3	ビット143	石鏢	5.25	3.20	1.40	34.6	石英安山岩	円礫の上下端に打ち欠き。側縁にも打ち欠き。
S37	17-3	ビット143	石鏢	6.05	5.35	2.01	91.2	流紋岩	円礫の上下端に打ち欠き。
S38	17-4	ビット114	石鏢	8.00	4.80	1.40	74.8	石英安山岩	円礫の上下端に打ち欠き。

図69 土坑・ビット出土石器1 (縮尺 2/3・1/2・2/5)



番号	調査次-区	遺構	器種	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	石材	特徴
S39	17-2	土坑37	石皿	21.70	19.00	5.00	3502.0	花崗岩	大型品。被熱の痕跡。

図70 土坑・ビット出土石器2 (縮尺 2/5)



番号	調査次-区	遺構	器種	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	石材	特徴
S40	17-2	ビット584	叩石	11.00	9.95	5.70	816.0	石英安山岩	下端に敲打痕。
S41	17-7	ビット589	凹石	(7.80)	8.70	4.30	(435.2)	花崗岩	表面に凹み。

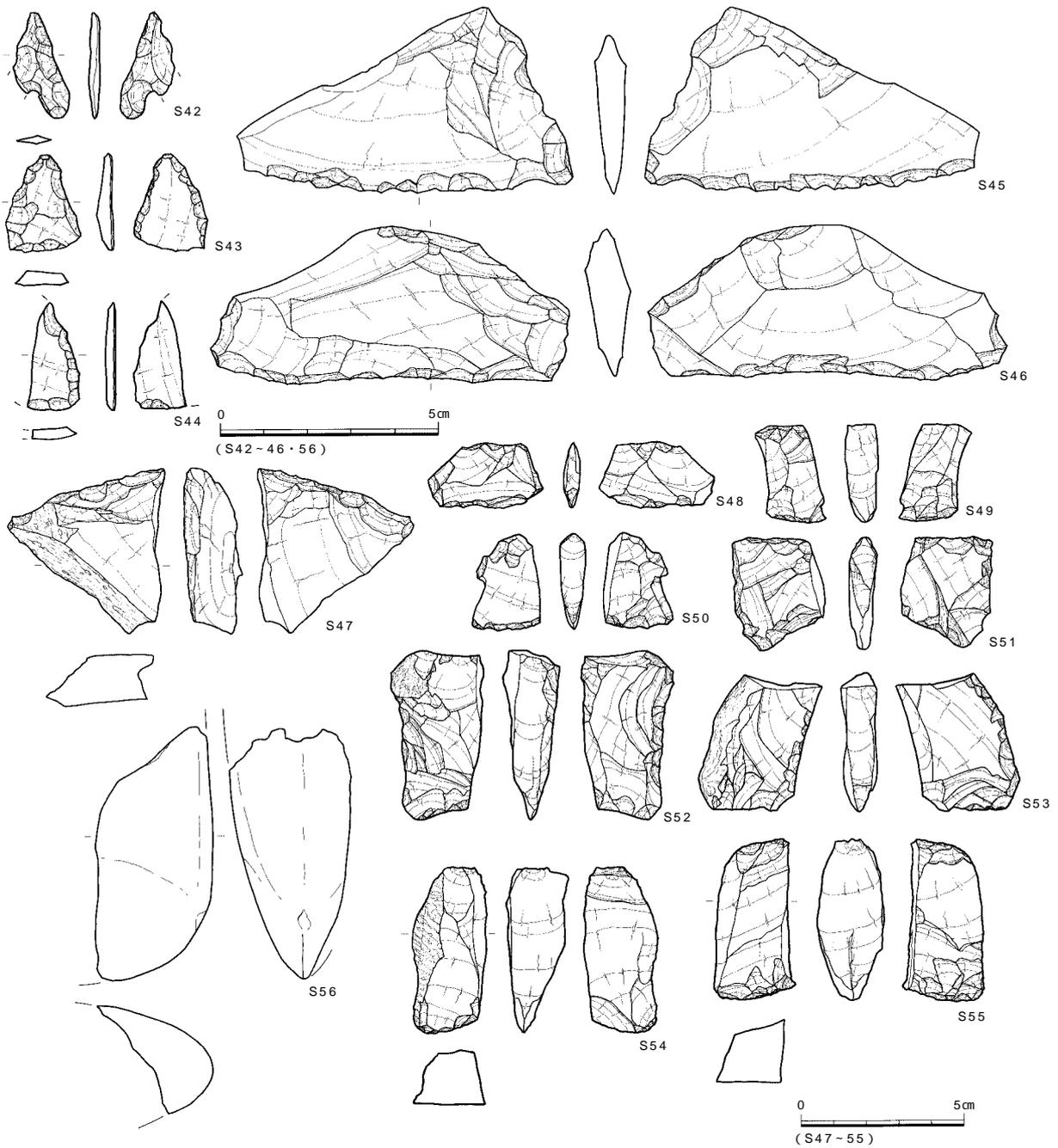
図71 土坑・ビット出土石器3 (縮尺 2/5)

石核 1点出土した。S47はサヌカイト製で、自然面を残す板状の素材を利用し、小剥片を剥離する。右側面には折れ面があり分割されたものと考えられる。

楔形石器 8点出土した (S48~55)。すべてサヌカイト製である。上下端に階段状のつぶれた剥離をもつもの、さらに一側面に剪断面を持つものをまとめている。S52は石核状の大型品で自然面を一部残す。S54は自然面を多く残すが右側面に剪断面が確認できる。S55も上下端に階段状のつぶれた剥離を有し、右側面に剪断面を持つ。

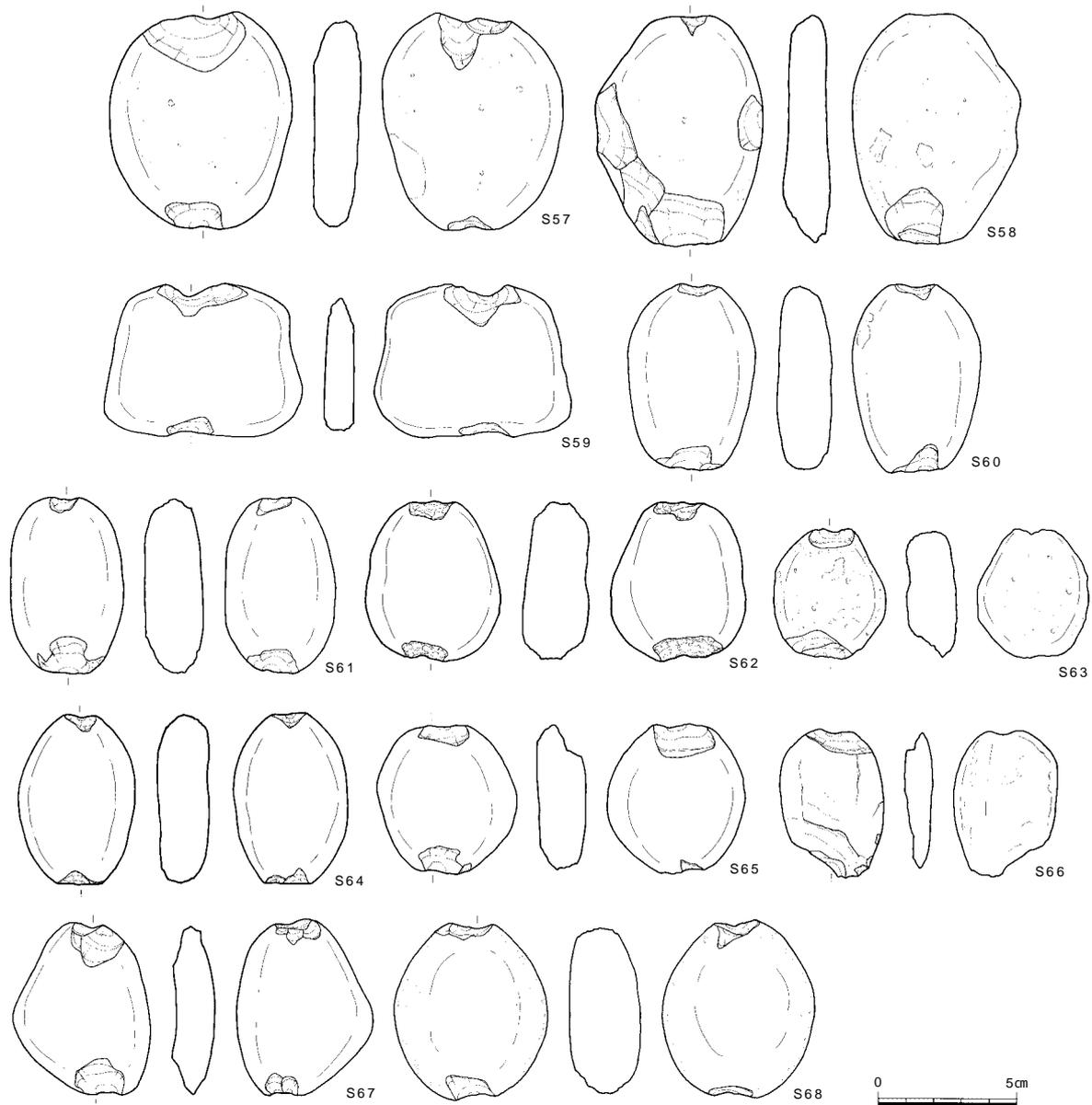
磨製石斧 刃部片が1点出土した。S56は玄武岩質凝灰岩製で、刃部先端の一部が残る。丁寧な研磨で仕上げ、

調査の記録



番号	調査次-区	遺構	器種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石材	特徴
S42	17-6	ビット360	石鏃	(2.45)	(1.30)	0.24	(0.5)	サヌカイト	凹基式。挟りは明瞭。脚部は幅広。
S43	17-3	ビット433	石鏃	2.21	1.70	0.39	1.5	サヌカイト	平基式。下辺は片面調整。未成品か？
S44	17-6	ビット334	石鏃未成品	(2.49)	(1.11)	(0.22)	(0.8)	サヌカイト	半分欠損。周縁に片面調整。
S45	17-6	土坑102	スクレイパー	4.30	7.70	0.72	18.7	安山岩	右側縁に挟りを意図した剥離。刃部に摩滅痕。
S46	17-7	ビット612	スクレイパー	3.60	7.20	1.02	31.1	サヌカイト	素材調整剥離。直線状の刃部に摩滅痕。
S47	17-6	ビット621	石核	5.10	4.80	1.60	32.8	サヌカイト	打面転位、再生。薄い小剥片を剥離。
S48	17-2	土坑115	楔形石器	2.00	3.50	0.53	4.3	サヌカイト	右側面に剪断面。上下端につぶれた剥離。
S49	17-6	土坑22	楔形石器	3.00	2.20	1.00	6.7	サヌカイト	上下端に階段状のつぶれた剥離。
S50	17-2	土坑115	楔形石器	2.95	2.10	0.78	5.5	サヌカイト	上下端に階段状剥離。
S51	17-5	土坑125	楔形石器	3.40	2.80	0.85	8.0	サヌカイト	右側面に剪断面。上下端に階段状剥離。
S52	17-6	土坑118	楔形石器	5.20	2.80	1.80	25.7	サヌカイト	石核状。上下端に階段状のつぶれた剥離。
S53	17-6	ビット318	楔形石器	4.20	3.75	1.17	17.2	サヌカイト	右側面に剪断面。下端に階段状剥離。
S54	17-6	ビット259	楔形石器	5.10	2.30	1.75	22.3	サヌカイト	上下端からの相対する剥離。剪断面。
S55	17-2	ビット467	楔形石器	4.95	2.50	2.05	29.2	サヌカイト	上下端に階段状のつぶれた剥離。剪断面。
S56	17-6	土坑22	磨製石斧	(5.80)	(2.70)	(2.8)	(35.9)	玄武岩質凝灰岩	乳棒状石斧の刃部片。

図72 土坑・ビット出土石器4 (縮尺 2/3・1/2)



番号	調査次-区	遺構	器種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石材	特徴
S57	17-4	土坑147	石錘	7.85	6.50	1.70	131.7	流紋岩質凝灰岩	円礫の上下端に打ち欠き。
S58	17-6	土坑118	石錘	8.30	6.00	1.70	111.0	安山岩	円礫の上下、両側面に打ち欠き。両側面は片面のみ。
S59	17-6	ビット330	石錘	5.50	7.10	1.13	71.4	流紋岩質凝灰岩	扁平で隅丸方形の礫の上下端(短軸)に打ち欠き。
S60	17-6	ビット318	石錘	6.80	5.60	1.95	100.4	流紋岩	円礫の上下端に打ち欠き。
S61	17-6	ビット255	石錘	6.30	4.00	1.55	80.7	流紋岩質凝灰岩	円礫の上下端に打ち欠き。
S62	17-3	ビット437	石錘	5.70	4.80	2.40	94.1	花崗岩	円礫の上下端に打ち欠き。
S63	17-6	土坑106	石錘	4.70	4.00	1.80	41.2	石英安山岩	円礫の上下端に片面のみ打ち欠き。
S64	17-6	ビット259	石錘	6.10	4.25	1.85	63.7	流紋岩質凝灰岩	円礫の上下端に打ち欠き。
S65	17-6	ビット253	石錘	5.30	4.95	1.74	68.6	閃緑岩	円礫の上下端に打ち欠き。
S66	17-6	ビット619	石錘	5.30	3.75	1.10	23.9	泥質片岩	片面欠損。上下端に打ち欠き。
S67	17-6	土坑22	石錘	6.30	4.90	1.63	39.7	流紋岩	扁平な礫の上下端に打ち欠き。
S68	17-6	土坑22	石錘	6.40	5.50	2.58	131.9	石英閃緑岩	円礫の上下端に打ち欠き。

図73 土坑・ビット出土石器5(縮尺 2/5)

弧状の両刃をつくり出す。使用時に欠損したものと思われる。

叩石 1点出土した。S40は石英安山岩の礫を利用する。握りやすい形状の礫を選択しており、下端に明瞭な敲打痕が残る。

凹石 1点出土した。S41は花崗岩の扁平な礫の中央に1ヶ所の凹みが確認できる。また、下端にも敲打痕が残

り、叩石としても利用されたようである。

石錘 12点出土した(S57~68)。いずれも円礫、もしくは扁平な礫の上下端を打ち欠いて利用している。大きさによって3群ほどに分けることができる。S58は大型品で両側縁にも打ち欠きが認められる。

d. 溝

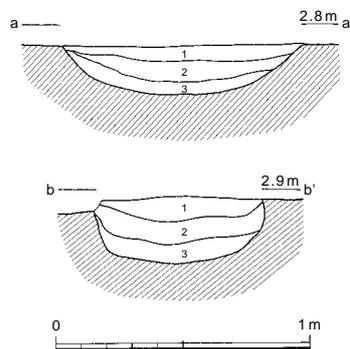
14層上面で2条の溝(溝1・2)を検出した。溝1・2は調査区内では重なる部分はなく、南壁においても壁が崩落したために切り合い関係を確認することができなかった。

溝1 (図12・74~76 図版2・25)

調査区の南側を北東~南西に走行する。標高2.75~3.03mで検出した。溝の幅は40~100cmで、南に向かうにつれ幅を増していく。底面は北東端で2.92m、南西端で2.52mと西流していることがわかる。深さは東端で26cm、西端で18cmであり、断面形はU字形に近い。南に向かうにつれ、幅広く浅くなると言える。

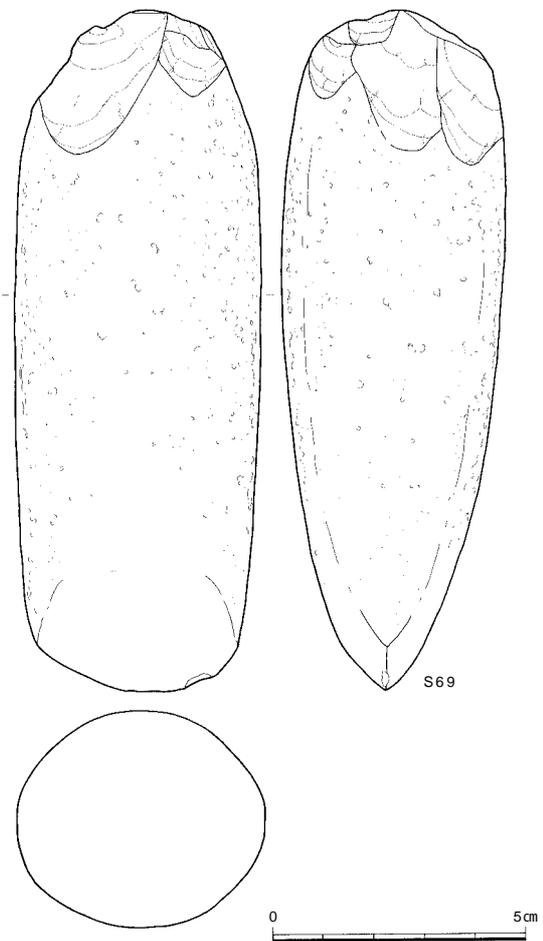
埋土は3枚に分けられ、暗灰色~暗褐色系のいずれも砂質土である。遺物の詳細は後述するが、本溝の時期は縄文後期前葉である。

溝1からは68点の縄文土器が出土し、14点を図化した(図76)。1~3は有文深鉢の口縁部、4~12は無文深鉢あるいは鉢の口縁部、13・14は深鉢底部である。1は幅広の山形波頂部をもつ波状口縁深鉢である。文様は太い沈線で区画した内部に縄文を施す磨消縄文土器で、中央に台形区画文、脇に三角形に近い渦巻文が描かれる。口縁部は口唇部を内面に大きく折り返したもので、端部に面を有する。2は波頂部が緩やかなカーブとなる波状口縁深鉢口縁部で、口縁部をめぐる縄文帯と、その下に曲線の区画文を描く。沈線は太く、深い。4は波状口縁、5は外面に粘土を貼り付けて口縁部を肥厚するもの、6は口縁部の上端に刻みを施すもの、7~12は無文だが、外反するもの、内湾するもの、口唇部を内外に肥厚させるタイプのものなど、バリエーションがある。13・14の底部は高台



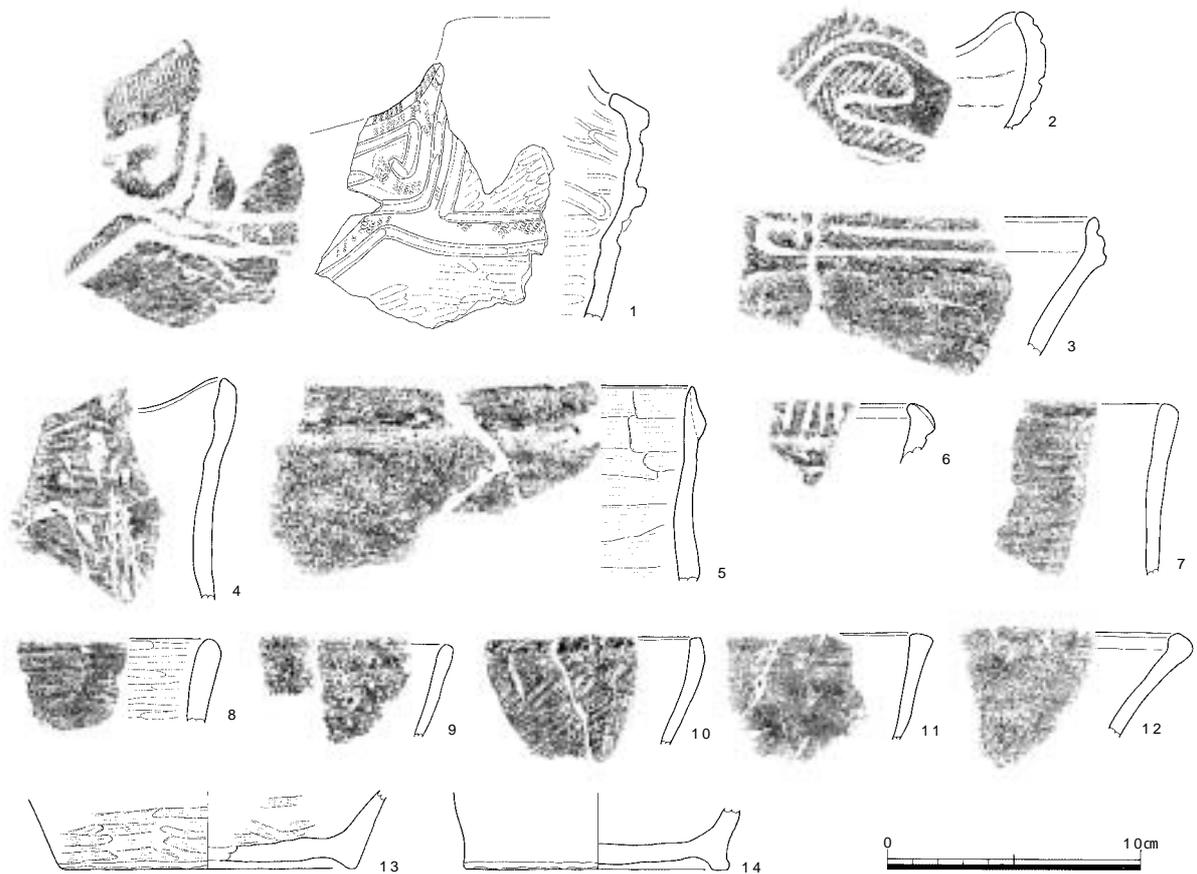
- 1. 暗灰色砂質土
- 2. 暗灰褐色砂質土
- 3. 灰褐色砂質土

図74 溝1 (縮尺 1/30)



番号	器種	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	石材
S69	磨製石斧	18.10	6.50	5.80	1000.4	流紋岩
特 徴						
乳棒状磨製石斧。欠損後に基部を整形し、再利用か？						

図75 溝1出土遺物1 (縮尺 2/3)



番号	器種	器形の特徴：文様と調整（外/内）：分量	色調（外/内）	胎土
1	深鉢	山形波状口縁、口唇部内面に屈曲：沈線（深・太）、磨消縄文（RL）、ミガキ/ナデ	淡灰～明灰/黄灰～灰～暗灰	良、均質：細～粗砂多、細礫
2	深鉢	波状口縁：沈線（深）、磨消縄文（RL）、ナデ/ナデ	茶褐～暗茶褐/明茶褐	精良：細砂
3	深鉢	平縁：杵状区画、ナデ/摩滅、一部に赤彩残る	茶褐～暗茶褐/灰黄橙褐	粗：細砂多、細礫
4	深鉢	波状口縁：条痕/条痕	暗灰茶褐/暗灰茶褐	粗：細礫
5	深鉢	平縁、隆帯状に粘土細貼り付け肥厚：ナデ/ケズリ	淡灰茶褐/明淡灰褐	粗：細砂多
6	深鉢？	平縁：口唇部斜め刻み、ナデ/ナデ	淡灰茶褐/淡黄灰	やや粗：細砂多
7	深鉢	平縁：ナデ/ナデ	灰茶褐/暗灰茶褐	やや粗：微砂多、細礫
8	鉢？深鉢？	平縁：ミガキ/ミガキ	暗褐/暗褐	精良、均質：微～細砂
9	深鉢	平縁：/摩滅	暗灰/暗灰	粗：細礫
10	鉢	平縁：ミガキ/ミガキ	茶褐～暗茶褐/明灰白	粗：細礫多
11	鉢？	平縁：ナデ？/ナデ、赤彩あり	淡灰/淡灰～暗灰	均質：細礫
12	深鉢？鉢？	平縁：/摩滅	灰茶褐～暗灰茶褐/灰黄茶褐～茶褐	粗：微砂～細砂多
13	深鉢	高台状：底部条痕、ナデ/条痕、指頭痕：底径11.5cm、1/3残	暗橙茶褐/淡橙褐	粗：細～粗砂多、細礫
14	深鉢	高台状：ナデ/ナデ：底径10.2cm、3/5残	淡黄白～淡黄灰/淡黄白～淡黄橙	やや粗：細～粗砂多、細礫多

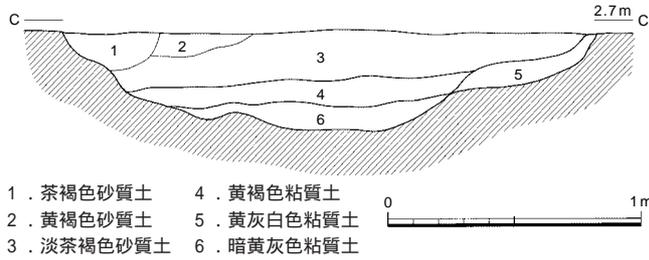
図76 溝1出土遺物2（縮尺 1/3）

状を呈する底部である。出土土器群の多くは中期末にあたるが、津雲A式を含む。

石器は流紋岩製の乳棒状石斧1点（S69）が出土した（図75 図版25）。敲打、研磨によって整った形態に仕上げているが、斧身には上半部を中心に敲打痕が残る。斧身の両側縁はほぼ平行であるが、刃部に近づくにつれて、ややすぼまる。刃部は両刃で、長軸に対して直交した方向を中心とした研磨によって丁寧に研ぎだしている。刃部は弧状を呈するが、右端に比べて左端が直線的に上がっており、縦斧として用いられ、左側面が使用者側を向いていたことがわかる。使用による線状痕は明瞭ではないが、刃部左端にやや残っている。また、刃こぼれの可能性もある細かい剝離痕がまばらに残っている。基部には、何回かの剝離が確認できるが、使用されていた時期のものと推定される。

溝2（図12・77・78）

調査区の南西部を北西～南東へ走行する。標高2.58～2.68mで検出した。溝の幅は一定ではなく、南端で1.1m、最も広いところでは5.4mである。底面高は標高2.45～2.55mで、深さは30cmである。僅かに南流していることが



- 1. 茶褐色砂質土
- 2. 黄褐色砂質土
- 3. 淡茶褐色砂質土
- 4. 黄褐色粘質土
- 5. 黄灰白色粘質土
- 6. 暗黄灰色粘質土

図77 溝2 (縮尺 1/30)

わかる。埋土は多いところでは、6枚に分けられるが、上層の3層は茶褐色～黄褐色系の砂質土、下層3枚は黄灰色系の粘質土と、大きくは二分される。本溝からはスクレイパー1点(S70)が出土した。本溝の時期は遺物からは決め難いが、出土層位なども考慮して縄文後期前葉と考えている。

e. 焼土遺構

焼土遺構8基をいずれも15層上面で検出した。8基のうち、わずかでも掘り込みを持つものは焼土遺構1・4の2基のみである。被熱痕跡が認められる焼土遺構2以外は、焼土塊があるものの、周囲に被熱痕は全く認められなかった。使用頻度や遺構の残存状況によつての相違点は予測されるが、いずれも何らかの加熱作業に伴う炉、あるいは炉の残骸である可能性が考えられる。

焼土遺構1 (図79・80)

AW02 - 75・76区で検出した。検出面の標高は2.5mである。平面形は長径0.95m、短径0.75mの楕円形を呈する。最も深いところで10cm程の浅い落ち込みであり、その中で20cm～30cm程度の焼土塊がまとまって検出された。しかし特に被熱痕跡は認められなかった。埋土は暗灰褐色砂質土層で、遺物の出土はなかった。

本遺構の所属時期は、周辺の状況から縄文時代後期と考えられる。

焼土遺構2 (図81)

AW02 - 88区で検出した。検出面の標高2.7mである。平面上で20×30cmの範囲に被熱痕跡が認められ、その上に20cm大の焼土塊が検出された。検出時には掘り込みは認められなかったが、本来掘り込みを伴っていなかったかどうかは不明である。被熱痕跡があることから、この場所で加熱作業が行われたと考えられる。

出土遺物は見られなかったが、周辺の状況も考慮して、遺構の所属時期は縄文時代後期と考えられる。

焼土遺構3 (図82)

AW02 - 98区で検出した。検出面の標高2.55mである。直径0.8mの範囲に5～15cm大の焼土塊がバラバラと散布している。その状況からは何らかの構成を読み取ることは困難であり、床面に被熱の痕跡は認められない。焼土散布地点の周辺にも被熱痕跡をもつ土坑・ピット等は認められない。以上のことから、何らかの加熱作業を行

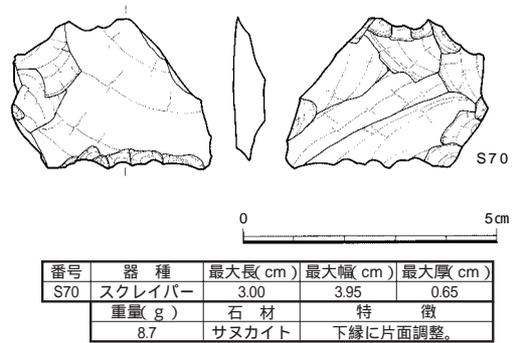


図78 溝2出土遺物 (縮尺 2/3)

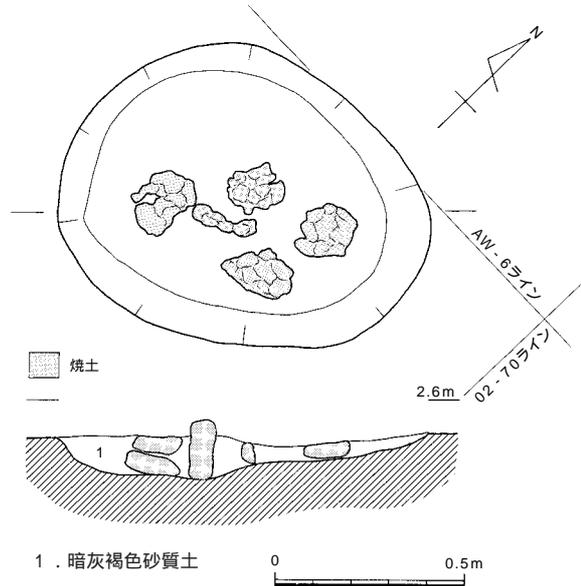


図79 焼土遺構1 (縮尺 1/20)

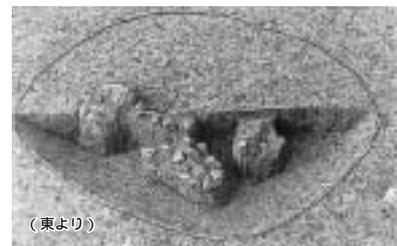


図80 焼土遺構1

ったであろうとの推定はされるが、その地点の特定はできず、すでに壊されたものとも考えられる。

出土遺物は認められず、周辺状況も考慮して、遺構の所属時期は縄文時代後期と考えられる。

焼土遺構 4 (図83)

AW03 - 27区で検出した。検出面の標高2.6mである。40×50cmの範囲に炭化物の散布と、僅かに赤化した面が認められ、その中央付近の20×20cmの範囲は特に被熱痕跡が顕著であり、赤変している。赤変部分の中に10cm大の焼土塊を検出した。この被熱部分は若干窪んでいるが、本来掘り込みがあったかどうかは不明である。この地点での何らかの加熱作業の推定は可能である。

出土遺物はなかったものの、周辺の状況を考慮して、遺構の時期は縄文時代後期と考えられる。

焼土遺構 5 (図84)

AW03 - 38区で検出した。検出面の標高2.6mである。本遺構も掘り込みはなく、80×50cmの範囲に5cm～20cm大の焼土塊の分布を検出した。焼土遺構 3と同様、その分布に何らかの構成を見いだすことは困難であった。また被熱痕跡も認めるとはできなかった。

出土遺物はなかったものの、周辺状況を考慮して、遺構の時期は縄文時代後期と考えられる。

焼土遺構 6 (図85)

AW03 - 36区で検出した。検出面の標高2.7mである。20×20cmの範囲に5cm大の焼土塊を検出した。掘り込みは見られなかった。南側に接してピットを検出しているが、このピットにも被熱痕跡は認められず、焼土遺構との関連はないと考えている。

出土遺物はなかったものの、周辺状況を考慮して、遺構の時期は縄文時代後期と考えられる。

焼土遺構 7 (図86)

AW03 - 46区で検出した。検出面の標高2.65mである。焼土遺構 6と同様、20×30cmの範囲に5～10cm大の焼土塊を検出した。被熱痕跡は認められず、周囲にもそのようなピット・土坑は存在しない。

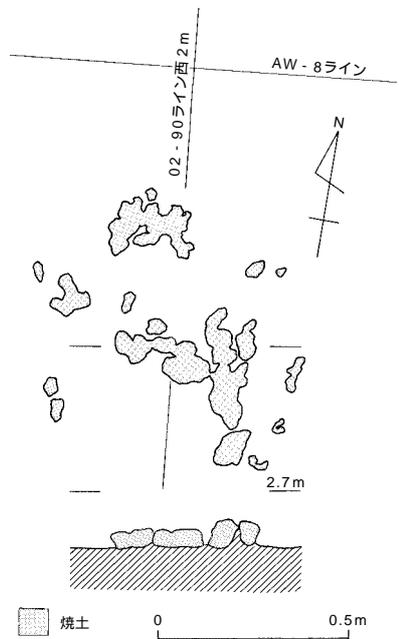


図82 焼土遺構 3 (縮尺 1/20)

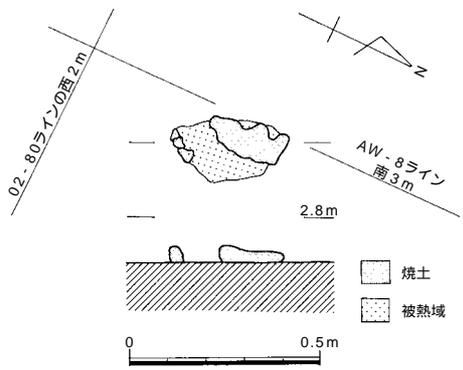


図81 焼土遺構 2 (縮尺 1/20)

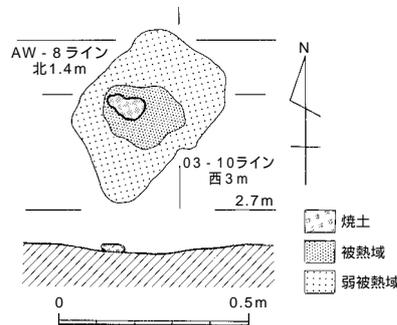


図83 焼土遺構 4 (縮尺 1/20)

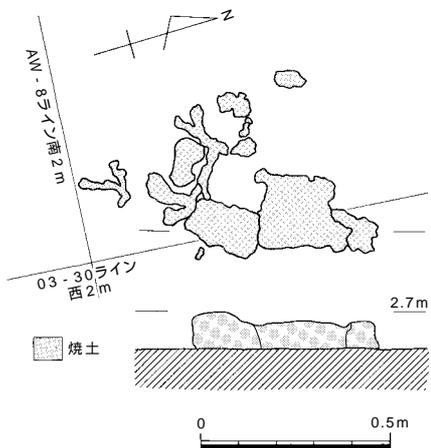


図84 焼土遺構 5 (縮尺 1/20)

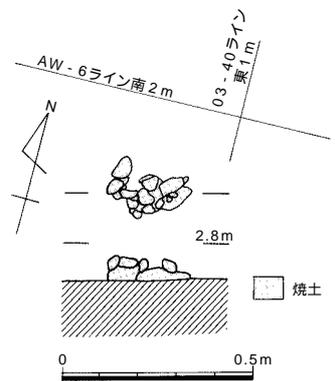


図85 焼土遺構 6 (縮尺 1/20)

周辺状況から遺構の時期は縄文時代後期と考えられる。

焼土遺構 8 (図87)

AW03 - 97区で検出した。検出面の標高2.65mである。焼土遺構6と同様、20×20cmの範囲に5cm大の焼土塊を検出した。掘り込みは見られなかった。被熱痕跡は認められず、周囲にも被熱痕のあるピット・土坑は存在しない。

周辺状況から遺構の時期は縄文時代後期と考えられる。

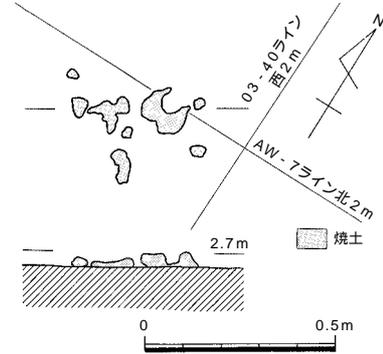


図86 焼土遺構 7 (縮尺 1/20)

f. 落ち込み

ここで取り上げた「落ち込み」は、調査時には「土坑」として扱ったものであるが、平面形が不整形である、埋土は黒褐色～暗褐色の粘土であり、遺物はほとんど含まない点、掘り方もいびつな形状を示している、といったことから、遺構ではなく、倒木や木の根等の自然要因によって形成されたものと判断した。これまでの調査においても、こういったいびつな形状の土坑が検出されており、「土坑」として報告しているものもあるが、後期の遺構としているものの中には、ここで示しているような自然要因による落ち込みがあることを提示して、今後の参考としておきたい。本調査地点では縄文時代後期の2基について、落ち込みとして報告する。

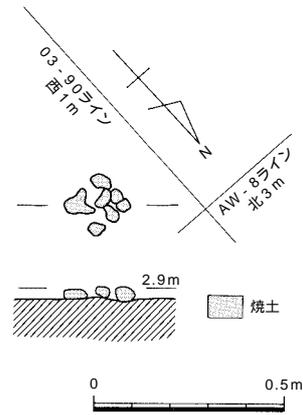


図87 焼土遺構 8 (縮尺 1/20)

落ち込み 1 (図40)

AW02 - 86区に位置する。前述の土坑6に切られる形で検出した(前出図40参照)。歪な楕円形状を呈しており、東西1.9m、南北3.1m、深さ0.8mである。埋土が極めて特徴的であり、暗褐色～暗黒褐色の粘質土を主体とする。底面となる部分も平坦面は少なく、凹凸のあるいびつな形状をなす。

落ち込み 2 (図88)

調査区北部、AW03 - 01区に位置する。南北に長いいびつな楕円形を呈する。長径1.87m、短径1.15m、深さ0.45mである。検出面の標高は2.75mで、15層上面で検出した。上面は古代の溝によって削平されている。埋土は黒灰色粘質土層と黒色粘質土層からなる。出土遺物は縄文土器の小・細片が10点程認められたが、図化できるものはなかった。本落ち込みの時期は出土遺物と検出層位から、縄文後期と考えられる。

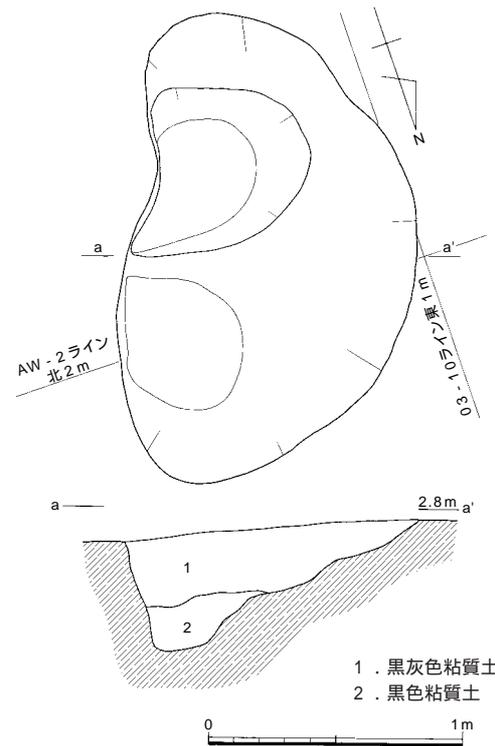


図88 落ち込み 2 (縮尺 1/30)

g. 包含層出土の遺物 (図89～133)

1) 土器

縄文時代後期の土器は13層～16層から出土した。その総数は7,709点で、そのうち図化したのは13～15層の土器427点であ

る。16層からは70余点が出土しているが、いずれも小片であった。これらは上層からの遺構の残りだと判断している。また、13層に関しては、前述したように前期末頃に「動かされた土層」と考えていることも確認しておいた上で、各層における器種構成の概要をまとめたい。複数層にまたがる取り上げ方をしたのものについては、土層ごとの特徴があいまいになるために、ここでは除外している。

15層出土の土器は、135点が出土し34点を図化した。その構成比は、矢部奥田式41%（9点）福田K式41%（9点）次いで縁帯文土器成立段階14%（3点）津雲A式4%（1点）である。さらに、福田K式について細分すると、古相段階が23%（5点）新相段階が18%（4点）に細分される。つまり、中期末～後期前葉のものが主体をなす状態である。

14層出土の土器は、795点が出土し107点を図化した。その構成は、福田K式50%（29点）縁帯文土器成立段階22%（13点）が主体をしめ、次いで津雲A式9%（5点）矢部奥田式7%（4点）中津式5%（3点）彦崎K式5%（3点）「津島岡大遺跡後期第群」（以下「群」とする）2%（1点）である。さらに、福田K式の細分については、古相段階が33%（19点）新相段階が17%（10点）である。こうした構成比には後期前葉の土器を主体とし、中期末～後期初頭が少量、そして後期中葉のものがごくわずかにみられる。

13層出土の土器は、4284点が出土し、119点を図化した。参考としてその構成を示すと、福田K式53%（37点）縁帯文成立段階30%（21点）矢部奥田式と津雲A式がそれぞれ6%（4点）「群」4%（3点）中期後半1%（1点）となる。福田K式の細分は古相が33%（23点）新相は20%（14点）である。

このように、14・15層はともに福田K式を主体とする後期前葉の土器が最も多く、土層の時期を反映していると考えられる。両層の時間的な差については、構成比率をみていくと、検討した遺物量が少量である点にやや問題を残すが、15層には矢部奥田式が多く、14層では縁帯文成立段階の土器のほか、津雲A式・彦崎K式といった新しい時期のものが増加する傾向が認められる点から、時間的な順序を追うことはできる。両層の土色・質ともに非常に類似しており、土質的な点から明確に分層することが困難であったことから、15・14層出土の土器は、土層の連続的・漸移的な形成に共通した実態を示していると言える。

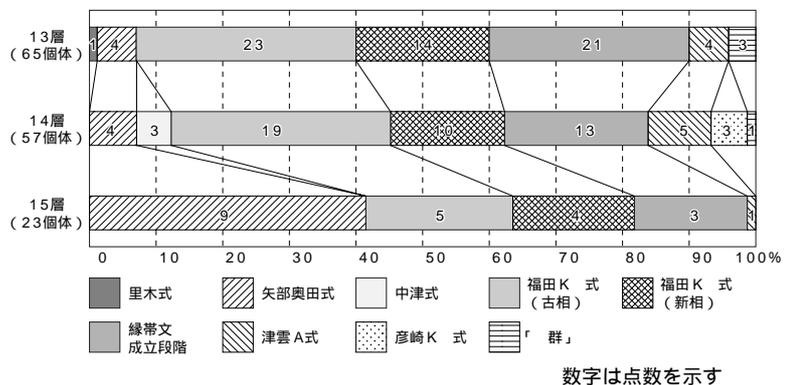
15層出土縄文土器（図89・90 図版1・2・15）

有文深鉢の口縁部（1～13・21～24）、有文浅鉢（14）、有文深鉢の胴部（15～19・25）、有文深鉢の突起の一部（20）、無文深鉢の口縁部（26・27）底部片（28～34）が出土している。

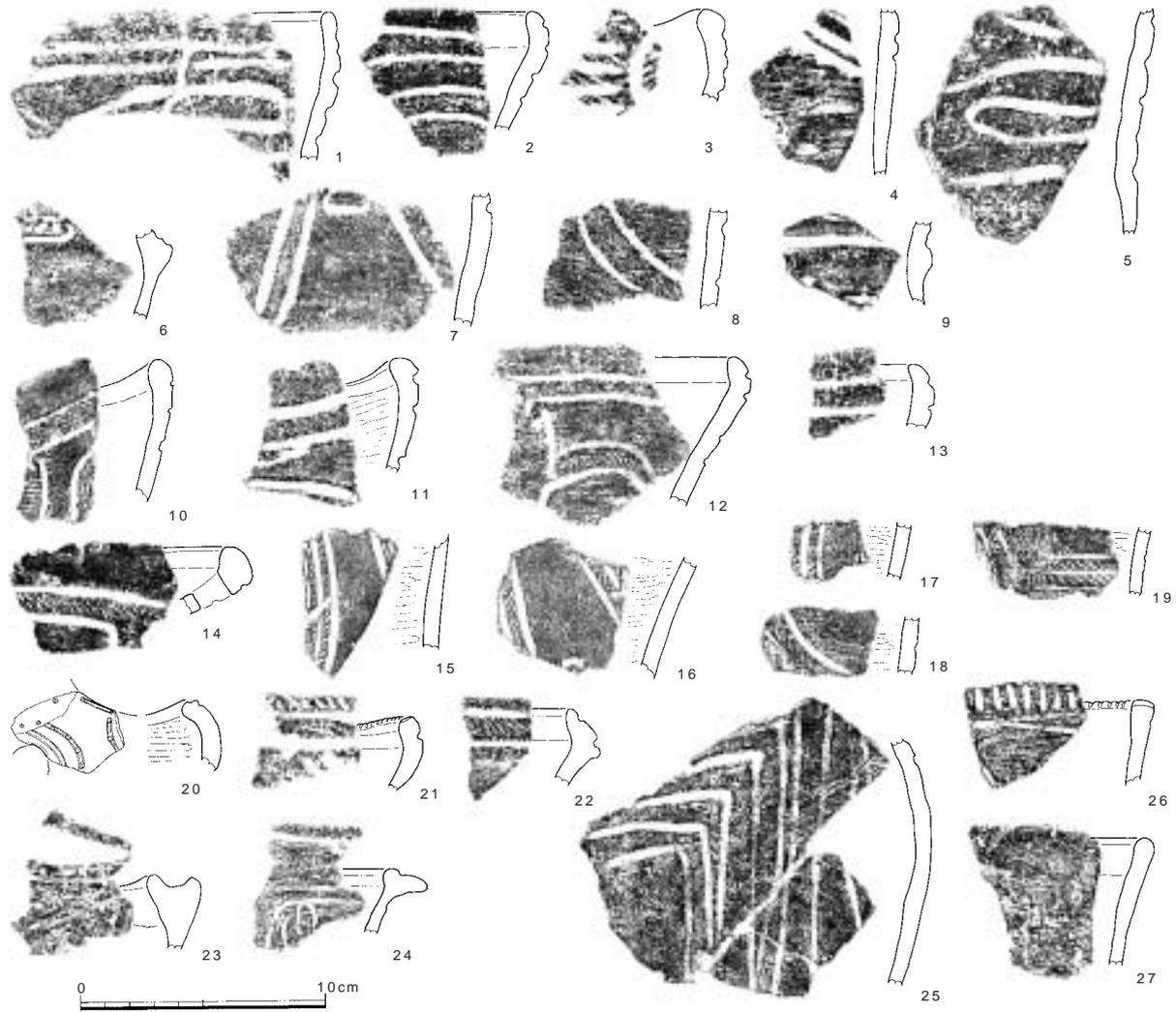
有文深鉢 いずれも小片のため、器形の全形を復元できる破片はない。口縁部の形状は、緩い波状口縁になるものと、平縁になるものに大別できる。口縁部の多くは直立もしくは緩く内湾する形態をとるが、その他に複雑に入り組む橋状突起の一部と思われる破片（20）内湾する口唇部に縄文を施文するもの（21）顎状口縁を呈するもの（22）耳状突起を有するもの（23）口唇部を外面に肥厚させるもの（24）などの特徴を有するものがみられる。このうち、21は小片で摩滅が著しいため、断定は難しいが、口唇端部に縄文施文が観察されるため、中期末に位置づけられる可能性もある。

文様は、沈線によって多段の不定形区画文を描くもの（1・2・4・5）沈線文のみのもの（7～9・13）、区画沈線文内に刺突を充填するもの（6）縄文地に沈線文で文様を描くもの（3）2本沈線ないし3本沈

14・15層出土縄文土器の構成

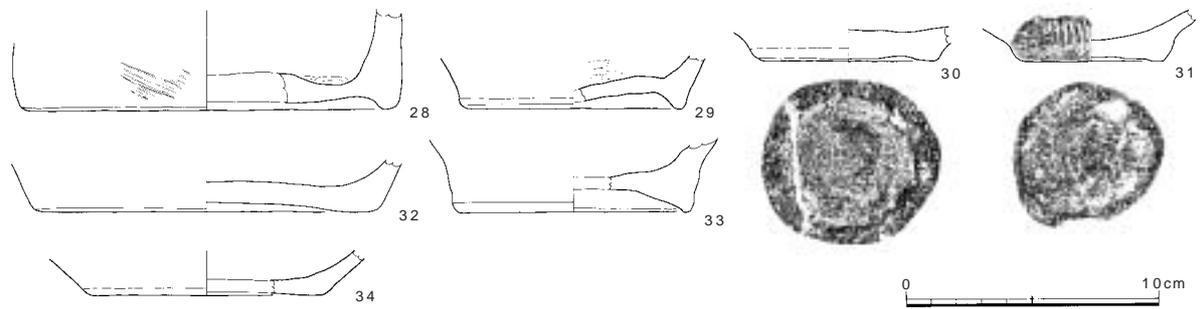


調査の記録



番号	調査次-区	器種	器形の特徴：文様と調整（外/内）	色調（外/内）	胎土
1	17-1	深鉢	：深く太い沈線文、杵多段、ナデ/ナデ	橙茶褐/淡黄灰褐	粗：細～粗砂多、細礫
2	17-6	深鉢	：太い多段の沈線文、ナデ/ナデ	茶褐/灰茶褐	粗：細～粗砂、細礫多
3	17-1	深鉢	：弧状文、横走沈線文、全面縄文 RL ヲナデ	淡黄灰白/淡黄灰白	良：細～粗砂
4	17-1	深鉢	：太く深い沈線文、条痕後ナデ/条痕後ナデ	淡灰茶褐/暗茶褐	良：微～細砂、稀に細礫
5	17-1	深鉢	：深く太い沈線、ナデ/ナデ	淡灰褐/淡黄灰褐	やや粗：細～粗砂多、細礫
6	17-6	深鉢	：杵状区画内刺突、ナデ?/ミガキ	暗茶褐/淡灰茶褐	細砂、細礫少
7	17-1	深鉢	：太く深い沈線、ナデ/ナデ	黄橙灰褐/暗茶褐	粗：細～粗砂多、細礫
8	17-6	深鉢	：2本沈線、条痕後ナデ/摩滅	橙茶褐/暗茶褐	良：細砂、細礫
9	17-6	深鉢	：太い沈線、ナデ/摩滅	淡黄橙茶褐/暗茶褐	細～粗砂多、細礫多
10	17-6	深鉢	波状口縁：2本沈線磨消縄文(RL)、ナデ、ミガキ/ナデ	淡橙茶褐/暗黄灰	良：微～細砂、細礫少
11	17-4	深鉢	波状口縁：2本沈線磨消縄文(RL)、太い沈線文、ナデ/ミガキ	淡黄灰/淡黄灰茶	細砂、細礫
12	17-6	深鉢	：2本沈線磨消縄文(RL)、ナデ/ナデ	暗黄茶褐/暗灰茶褐	細～粗砂多、細礫少
13	17-6	深鉢	：太い沈線文、ナデ/ナデ	暗茶褐/暗茶褐	粗：細～粗砂多、細礫多
14	17-4	浅鉢	穿孔：2本沈線磨消縄文(RL)、ミガキ/ミガキ	淡橙茶褐/淡黄灰	細砂
15	17-6	深鉢	：3本沈線磨消縄文(RL)、ナデ/ミガキ	暗橙茶褐/淡黄茶褐	細砂
16	17-6	深鉢	：3本沈線磨消縄文(RL)、ミガキ/ミガキ	橙茶褐/暗茶褐	精良：微～細砂少
17	17-6	深鉢	：3本沈線磨消縄文(RL)、ナデ/ミガキ	淡橙茶褐/暗茶褐	良：細砂、稀に細礫
18	17-6	深鉢	：3本沈線磨消縄文(RL)、ナデ/ミガキ	暗橙茶褐/暗灰褐	良：細砂、稀に細礫
19	17-6	深鉢	：3本沈線磨消縄文(RL)、ナデ/ミガキ	暗茶褐/淡黄灰褐	精良：細砂少
20	17-6	深鉢	波頂付近、穿孔：穿孔巡る沈線内に刺突、沈線末端刺突、摩滅/ミガキ	淡黄灰茶/暗黄灰茶	細砂多
21	17-6	深鉢	波状口縁：口唇部内面に斜め刻み状縄文(LR)、沈線文(太)、摩滅/ミガキ	黄橙茶褐/淡橙茶褐	細砂、細礫
22	17-1	深鉢	顎状口縁：平行沈線文、口縁部沈線間縄文(RL)、ナデ/ナデ	暗黄茶褐/暗黄茶褐	やや粗：細～粗砂、細礫多
23	17-6	深鉢	耳状突起：条痕/ナデ	淡黄灰/淡黄灰	細～粗砂多、細礫
24	17-1	深鉢	口唇部内外に肥厚：口唇部上面に沈線、細線の沈線文、ナデ/ナデ	黄橙茶褐/暗茶褐	良：細～粗砂多、細礫
25	17-4	深鉢	：多重鍵形文、ナデ/ナデ	淡黄灰/淡黄灰	細砂、細礫少
26	17-6	深鉢	：口唇部直交刻み、条痕後ナデ/ナデ	橙茶褐/淡橙灰	細～粗砂
27	17-6	深鉢	：条痕/ナデ	淡橙茶褐/明橙	細砂、細礫少

図89 15層出土土器 1 (縮尺 1/3)



番号	調査次-区	器種	器形の特徴：文様と調整（外/内）：法量	色調（外/内）	胎土
28	17-1	深鉢	高台状：条痕、ナデ/ナデ、指頭痕：底径14.0cm	淡黄茶褐/淡灰褐	やや粗：細～粗砂多、細礫少
29	17-1	深鉢	高台状：ナデ、指頭痕/条痕：底径8.2cm、1/4残	明橙褐/淡黄茶褐	やや粗：細礫多
30	17-4	浅鉢	高台状：ナデ/ナデ、指頭痕：底径6.8cm、1/1残	淡黄橙褐/暗茶褐	細～粗砂
31	17-4	浅鉢	高台状：縄文(RL)、ナデ/ナデ：底径5.6cm、1/1残	暗茶褐/暗黄茶褐	細砂
32	17-6	深鉢	凹底：ナデ/ナデ、指頭痕：底径12.8cm	淡黄灰白/暗茶褐	やや粗：細～粗砂多、細礫多
33	17-4	深鉢	高台状：条痕、ナデ/ナデ、指頭痕：底径8.8cm、1/3残	淡橙茶褐/淡黄茶褐	細～粗砂
34	17-4	浅鉢	平底：摩滅/摩滅：底径9.0cm	明橙/淡黄橙白	細砂、細礫

図90 15層出土土器 2（縮尺 1/3）

線磨消縄文帯で文様を構成するもの（10～12・14～19）、やや細い沈線で渦巻文を描くもの（24）、多重の鍵形区画沈線文を描くもの（25）がある。沈線文によって文様を描くものうち、1・5・7・9は太く、深い沈線で文様が描かれる。これらの土器はいずれも器壁が厚い。3は縄文地の器壁に弧線と横走る多重の平行沈線文が描かれるものである。本調査地点では、縄文地に文様を描くものは少ない。20では端部や穿孔を縁取る細い沈線内にはほぼ等間隔に施された刺突がみられる。顎状口縁を呈する22は、口縁部に文様が集約され、杵状区画文になるとみられる平行する2条の沈線内に縄文施文するものである。

無文深鉢 小片のため、全形を復原しえない。口唇部に刻みを施して加飾するもの（26）、無文のもの（27）がある。26は棒状工具により、直交の刻みが施される。

有文浅鉢 小片のため全形を復原することは困難であるが、14は皿状の器形になるものと考えられる。口縁部は内面に大きく肥厚する。文様は2本沈線磨消縄文帯によるものである。横走る口縁部文様帯から垂下するモチーフ内に穿孔が施される。

底部 高台状を呈するもの（28～31）、凹底のもの（32・33）、平底のもの（34）がある。高台状のものには、厚く粘土を貼り付けて高くするもの（28・29）と、底部外縁に薄く粘土を貼り付けたのみの低いもの（30・31）とがある。器壁の立ち上がりの角度から、深鉢（28・29・31～33）と浅鉢（30・34）に分類することができる。

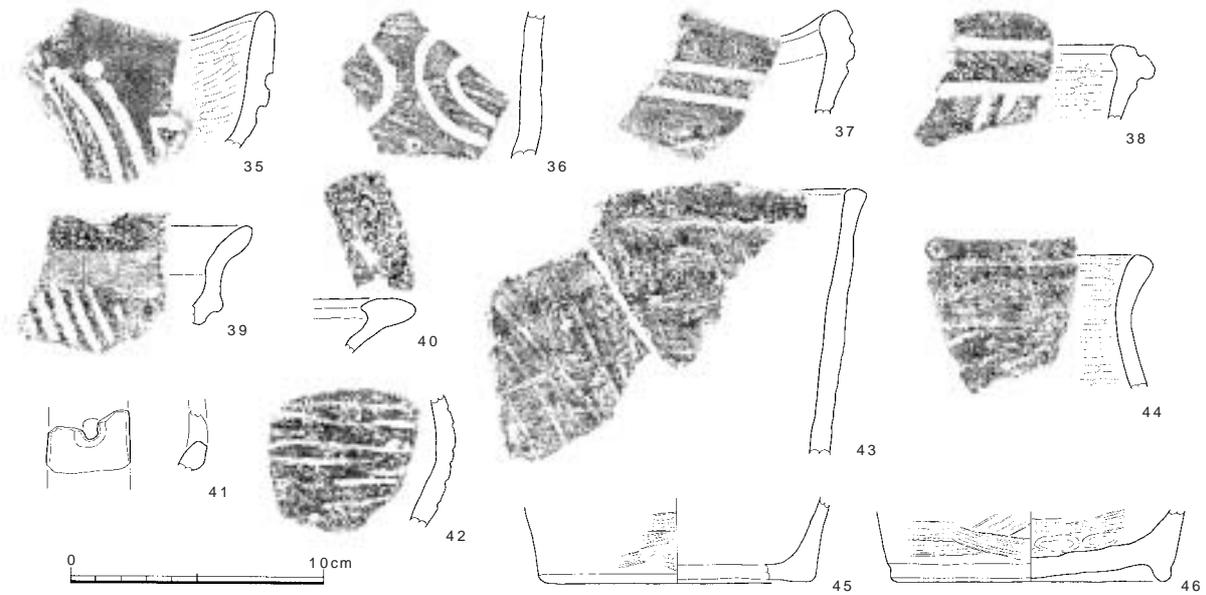
14・15層出土縄文土器（図91 図版1・15）

305点の縄文土器が出土し、12点を図化した。35～40・42は有文深鉢、41は橋状突起の一部、43・44は無文深鉢、45・46は深鉢底部である。14・15層出土遺物には中期末～後期中葉までのものが含まれている。

有文深鉢 小片であり、全形を復原することは困難である。口縁部の形状については、緩い波状口縁を呈するものと平縁のものに大別できる。これらの口縁部の中には、外反する口縁で、口縁部下の屈曲部に半円形の隆帯を付し、上面を斜めに刻むもの（39）、口縁部を外面に肥厚するもの（38）、口縁部を内面に肥厚するもの（40）などの特徴を有するものがある。橋状突起の一部と考えられる41は、内湾する器壁の中央に穿孔を有する。

文様は2本沈線磨消縄文帯によるもの（35・37・38）、沈線文によるもの（36・42）がある。35は深く、太い沈線により区画文と平行する沈線、沈線始点直近の刺突でモチーフが構成される磨消縄文土器である。36も太く、深い沈線で文様が描かれる。42は横走る多重沈線文であるが、細く不安定な描線であり、36とは明らかに異なる。38は肥厚した口唇部上下端に引いた沈線間に縄文を施文する。口縁部文様帯から磨消縄文帯が垂下する。40は摩滅が著しく文様を確認できないが、浅い沈線による文様が施されていた可能性も捨てきれない。

無文深鉢 口縁部が直立するもの（43）、外反するもの（44）がある。



番号	調査次-区	器種	器形の特徴：文様と調整（外/内）：法量	色調（外/内）	胎土
35	17-4	深鉢	波状口縁：太い沈線文、磨消縄文（RL）ミガキ/ミガキ	暗茶褐/淡黄灰茶褐	精良：微～細砂
36	17-1	深鉢	：2本沈線、太い沈線文、条痕後ナデ/ナデ	暗茶褐/淡黄橙	細～粗砂、細礫少
37	17-6	深鉢	波状口縁：2本沈線磨消縄文（RL？）摩滅、ナデ/摩滅	明橙褐/淡黄灰	良：細～粗砂
38	17-6	深鉢	口唇部内外に肥厚：口唇部上下に沈線、磨消縄文（RL）ナデ/ミガキ	淡黄橙褐/淡黄橙褐	良：細砂
39	17-6	深鉢？	頸部屈曲部に隆帯：隆帯上斜行沈線文、ナデ/ナデ	暗茶褐/淡黄茶褐	良、細砂多
40	17-3	深鉢	口唇部内外に肥厚：口唇上面に沈線、摩滅/摩滅	淡黄褐/淡黄褐～灰黄褐	良：細～粗砂多、細礫
41	17-3	不明	中央に穿孔：摩滅/摩滅	乳白/乳白	やや粗：細～粗砂多、細礫
42	17-4	浅鉢	：多条沈線文、摩滅/摩滅	明橙褐/淡黄灰	細～粗砂、細礫
43	17-1	深鉢	：条痕後ナデ/条痕後ナデ	淡灰茶褐/淡橙灰茶褐	粗：細～粗砂多、細礫
44	17-1	深鉢	：ナデ/ミガキ	黄茶褐/暗茶褐	細～粗砂、細礫
45	17-1	深鉢	平底：条痕後ナデ/ナデ、指頭痕：底径10.2cm	暗茶褐/暗茶褐	粗：細～粗砂多
46	17-1	深鉢	高台状：条痕後ナデ/条痕後ナデ、指頭痕：底径10.6cm、1/4残	橙茶褐/黄茶褐	粗：細～粗砂多、細礫

図91 14・15層出土土器（縮尺1/3）

底部 平底のもの（45）高台状を呈するもの（46）がある。器壁の立ち上がりの角度から、ともに深鉢の底部であると考えられる。

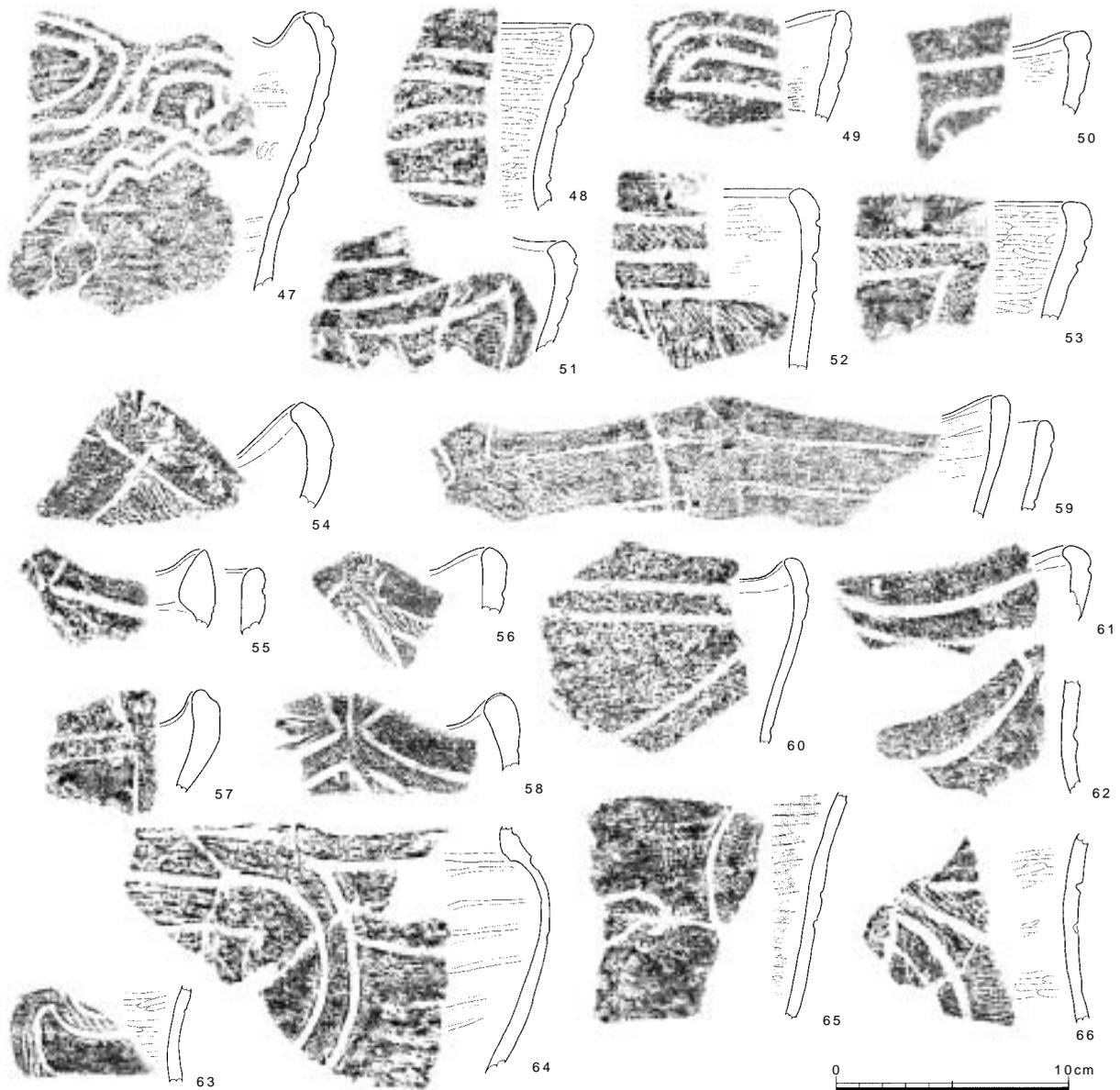
14層出土土器（図92～97 図版1・4・5・7・9・11・12・15・16・19）

有文深鉢（47～102）、無文深鉢（103～121）、浅鉢（122～133）、注口土器の把手（134）、底部片（135～153）が出土している。

有文深鉢 いずれも破片であり、全形を復元しうるものはない。口縁部の形態については、波状口縁を呈するものと平縁のものがある。さらに、波頂部を大きく肥厚させて中央に刺突を施すもの（81・82）、突起を付すもの（83～87・89）、橋状突起を付すもの（88・90）、口縁部外面を肥厚させるもの（91・92）、「く」字状あるいは頸状口縁を呈するもの（95～99）、口縁部内面を肥厚させるもの（100・101）がある。

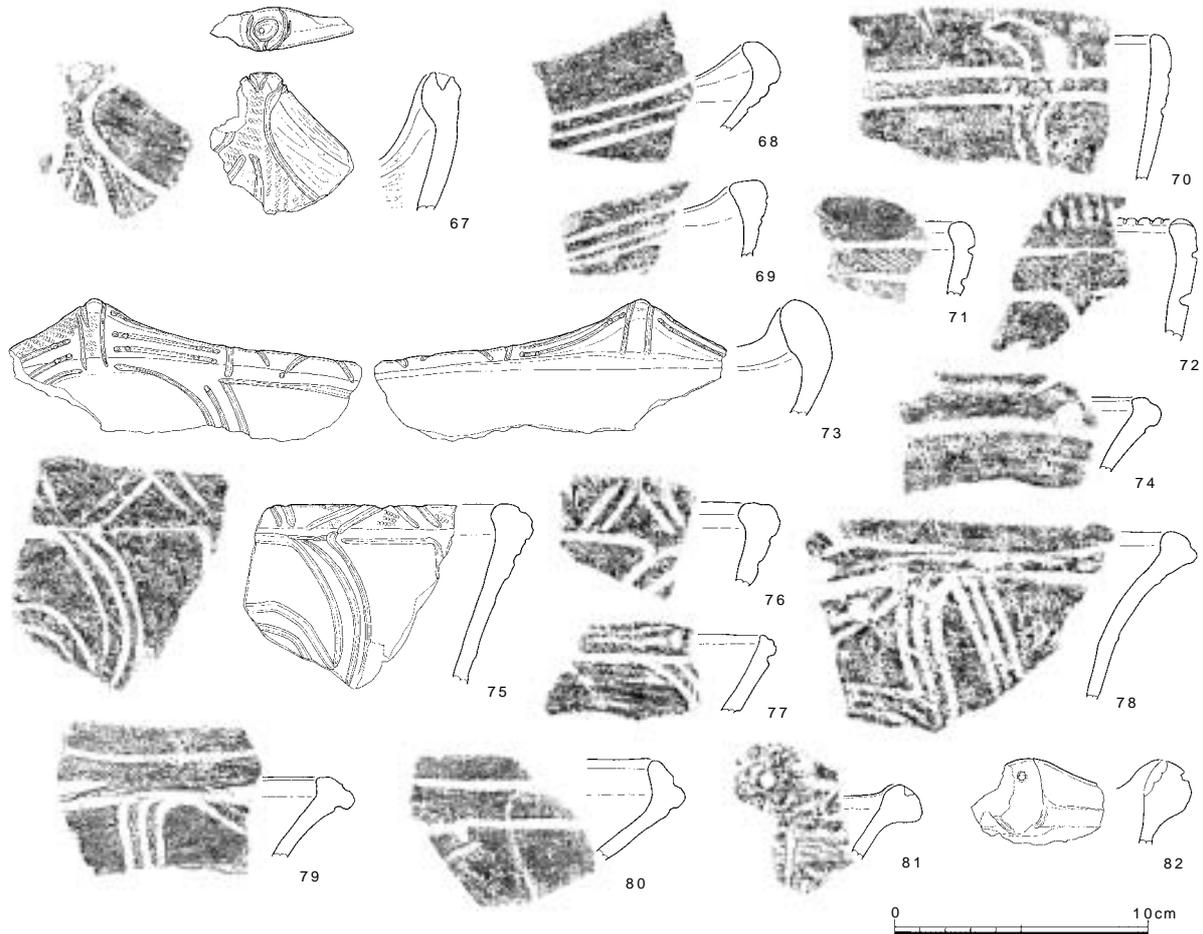
突起の形態は、山形突起の中央に円孔を穿つもの（83）、円環状を呈するもの（84）、台形状のもの（87）、耳状のもの（89）のように多様である。また器壁から口縁部へと接続する橋状突起には、外面に付くもの（90）と、内面に付くもの（88）がある。88・90の外面文様をみると、2本の垂下する沈線の脇に横走る多段の短沈線文が描かれる。特に88では短沈線文の外側を区切る区画沈線文が引かれているが、これは外面に付された橋状突起の外形に起因するものであることが推察される。このことから内面に橋状突起が付されるものは、外面に付されるものより後出的なものであると推測できる。85・86は粘土紐を複雑に入り組ませる立体的な橋状突起の一部と思われるが、小片のため原形を復元するには至らない。

文様は、口縁部に多重の楕円形区画文、その下位に平行波状文を配するもの（47・49）、多段の区画文を配するもの（48）、2本沈線ないし3本沈線磨消縄文帯によって文様帯を構成するもの（51～79・93）、「く」字状な



番号	調査次 - 区	器種	器形の特徴：文様と調整（外/内）	色調（外/内）	胎土
47	17-1	深鉢	波状口縁：多重楕円形区画文、平行波状文、ナデ/ナデ	暗橙～暗茶褐/暗褐	粗：粗砂～細礫多
48	17-6	深鉢	：太い2本沈線、糸痕/ミガキ	淡黄白/淡茶褐～灰茶褐	微～細砂、稀に細礫
49	17-3	深鉢	緩い波状口縁：太い沈線、杵状区画、摩滅/糸痕	淡黄灰茶褐/淡黄灰	粗：細～粗砂多、細礫多
50	17-4	深鉢	波状口縁：幅広文様帯、2本沈線磨消縄文？、摩滅/ミガキ	赤褐/赤褐	精良、均質：細砂
51	17-4	深鉢	緩い波状口縁：幅広縄文帯、2本沈線磨消縄文（RL）摩滅/摩滅	明茶褐/明茶褐	精良、均質：微～細砂
52	17-4	深鉢	：幅広縄文帯、2本沈線磨消縄文（RL）ミガキ/ミガキ	暗茶褐/茶褐	精良：微～細砂、稀に細礫
53	17-4	深鉢	：幅広縄文帯、2本沈線磨消縄文（RL）ミガキ/ミガキ	淡黄白/茶褐	良：細砂、稀に細礫
54	17-7	深鉢	波状口縁：幅広縄文帯、ナデ、縄文（RL）/ナデ？	暗茶褐/黄茶灰	細～粗砂多、細礫
55	17-3	深鉢	波状口縁：摩滅/摩滅	赤茶褐/灰茶褐	良：細～粗砂
56	17-6	深鉢	：波頂部から続く口縁部文様帯、J字文？、2本沈線磨消縄文（RL）/ナデ	淡灰黄茶/淡灰茶褐	精良：細砂、細礫少
57	17-4	深鉢	波状口縁：2本沈線磨消縄文（RL）摩滅/摩滅	淡黄灰/淡灰褐	精良、均質：細砂
58	17-4	深鉢	波状口縁：2本沈線磨消縄文（RL）摩滅/摩滅	淡灰茶褐/暗茶褐	細礫
59	17-4	深鉢	波状口縁：2本沈線磨消縄文（RL）摩滅/ナデ	淡灰褐～橙褐/淡黄白	良：細～粗砂
60	17-4	深鉢	波状口縁：2本沈線、摩滅/摩滅	明橙褐/暗灰褐	やや粗：微～細砂多、粗砂少
61	17-4	深鉢	波状口縁：幅広文様帯、2本沈線磨消縄文（RL）摩滅/摩滅	赤褐/赤褐	精良、均質：細砂
62	17-4	深鉢	：磨消縄文、擬縄文、摩滅/ナデ	明黄橙/淡橙	やや粗：細～粗砂、細礫多
63	17-6	深鉢	：2本沈線磨消縄文（RL）ミガキ/ミガキ	淡黄白/淡黄白	精良
64	17-2	鉢	：J字文、2本沈線磨消縄文、縄文帯、糸痕後ナデ/ナデ	暗灰褐/黄茶褐	粗：細～粗砂多、細礫多
65	17-4	深鉢	：幅広縄文帯、2本沈線磨消縄文（RL）ミガキ/糸痕	茶褐/暗茶褐	粗：細～粗砂多、細礫多
66	17-4	深鉢	：幅広縄文帯、2本沈線磨消縄文（RL）ミガキ/ミガキ	茶褐/明茶褐	精良：細砂

図92 14層出土土器 1（縮尺 1/3）



番号	調査次 - 区	器種	器形の特徴：文様と調整（外/内）	色調（外/内）	胎土
67	17-3	深鉢	波状口縁、波頂部に円錐形窪み：2本沈線磨消縄文、ミガキ/ミガキ	茶褐/灰茶褐	精良：微～細砂
68	17-1	深鉢	：3本沈線、縄文帯、摩滅/ナデ	黄灰白/灰白	精良：微～細砂
69	17-5	深鉢	口縁部肥厚：3本沈線磨消縄文？、摩滅/摩滅	淡黄灰/淡黄灰	精良：細砂
70	17-4	深鉢	：2本沈線磨消縄文（RL）、ミガキ/摩滅	暗褐/茶褐	良、均質：細砂多
71	17-4	深鉢	：3本沈線？磨消縄文（RL）、ミガキ/ナデ？	橙茶褐/橙茶褐	細～粗砂、細礫少
72	17-5	深鉢	：口唇部に直交刻み、幅広文様帯、2本沈線磨消縄文（RL）、ナデ/ナデ	暗灰茶/暗茶褐	細～粗砂多、細礫少
73	17-5	深鉢	波状口縁：波頂下に梯子状沈線文、口唇部に鋸歯文、磨消縄文（RL）、ミガキ/ミガキ？	橙茶褐/淡灰茶	良：細砂
74	17-2	深鉢	口唇部肥厚気味：口唇部に沈線、摩滅/摩滅	淡橙褐～灰/淡黄白	やや粗：粗砂、細礫
75	17-4	深鉢	口唇部肥厚：3本沈線、鋸歯文、渦巻文、摩滅/ナデ	淡灰白/淡灰白	粗砂多
76	17-3	深鉢	：口唇部鋸歯文、3本沈線磨消縄文（RL）/摩滅	淡灰～灰褐/灰白～灰褐	やや粗：粗砂多、細礫
77	17-6	深鉢	：3本沈線磨消縄文（RL）、ミガキ/摩滅	淡橙/淡黄褐	細砂
78	17-6	深鉢	口唇部肥厚：3本沈線、穿孔、摩滅/摩滅	暗灰褐/淡黄灰白	粗：細礫多
79	17-1	深鉢	口唇部内外に肥厚：口唇端部沈線1条、3本沈線磨消縄文（RL）、ミガキ/ナデ？	暗茶灰/淡茶灰	やや粗：細～粗砂多
80	17-5	深鉢	「く」字状口縁：口縁端部・口縁下に沈線、摩滅/摩滅	淡橙褐/淡黄灰～橙褐	良：微～細砂、稀に細礫
81	17-1	深鉢	口縁部肥厚、緩い波状口縁：波頂下に刺突、条痕/ナデ	黄橙茶褐/淡茶褐	細～粗砂、細礫
82	17-4	深鉢	波状口縁：波頂部に刺突、ナデ/ナデ	橙茶褐/暗茶褐	細礫多

図93 14層出土土器 2（縮尺 1/3）

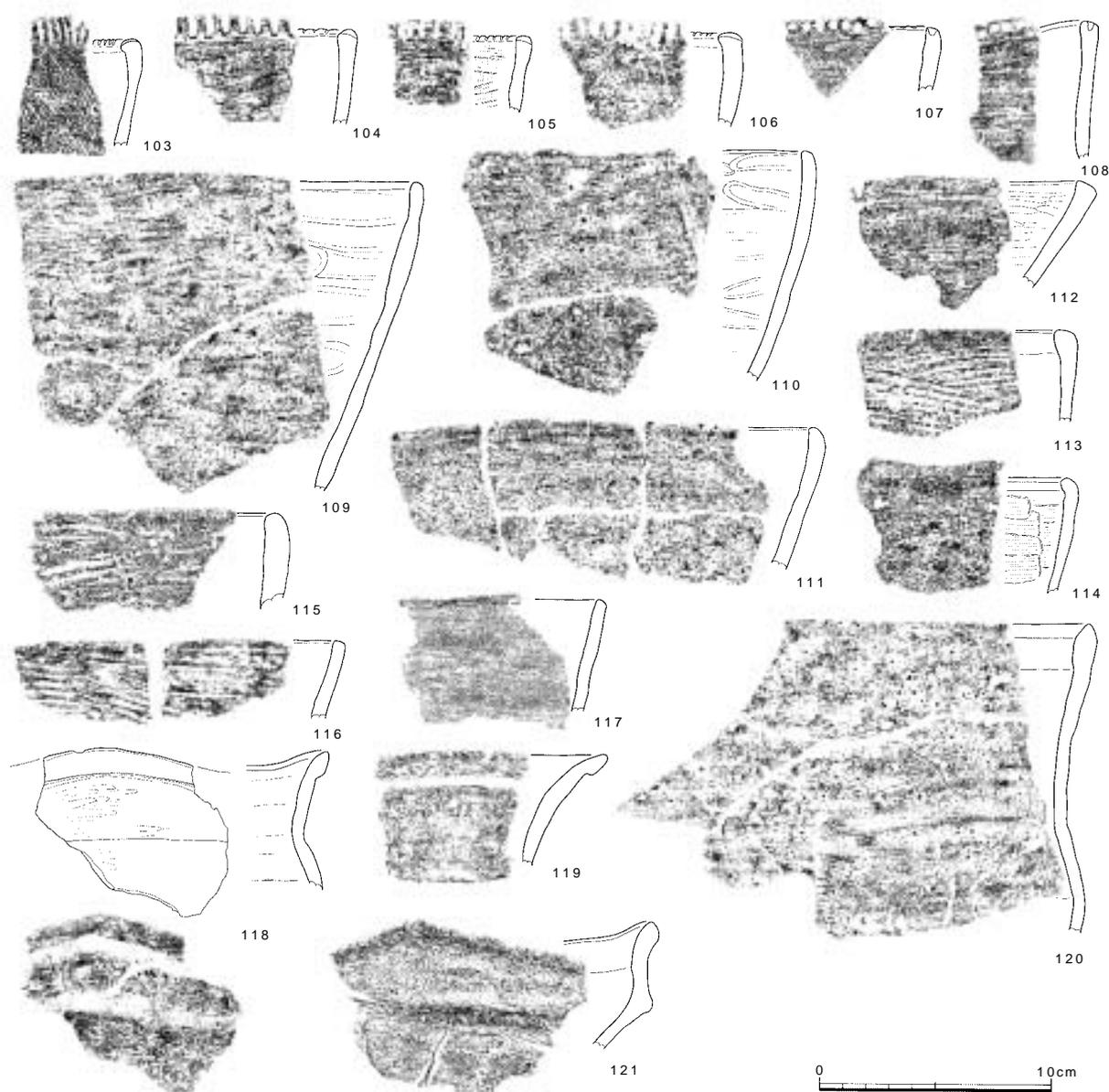
いし顎状口縁に文様を集約し、対向連弧文や棒状区画文を配するもの（95～99）、内面を肥厚させた口縁部上に直線的な描線で鋸歯文や区画文のような幾何学的な文様を描くもの（100・101）、口縁部に細い沈線による内文を描くもの（102）がある。2本沈線磨消縄文帯で構成される文様帯が展開するものでは、口縁部文様帯が波頂下で上方に屈曲し、波頂部を逆三角形や円形の区画で挟み込むものが目立つ（54～59・67）。3本沈線磨消縄文帯のものでは、縄文施文した口唇部に鋸歯文を描くもの（73・75・76）がある。鋸歯文を構成する沈線には、単線のもの（73）と、2本の沈線束によるもの（75・76）がある。そのうち、75は沈線末端に刺突を施す特徴がある。81は口唇部上まで文様帯が展開しており、小刺突と2条の細い沈線が観察される。胴部文様にはJ字文や渦巻文などの曲線的なモチーフのもの（63～66・93）がある。沈線末端が鉤状に入り組み、切り合わないもの（65）



番号	調査次-区	器種	器形の特徴：文様と調整（外/内）	色調（外/内）	胎土
83	17-3	深鉢	波状口縁、波頂部に円孔：内外面に円孔を巡る沈線、摩滅/摩滅	赤茶褐/茶～暗茶褐	良：細砂少
84	17-3	深鉢	発達した環状突起：沈線文、摩滅/摩滅	淡黄白/淡黄褐～灰褐	良：微～細砂
85	17-4	深鉢	穿孔：側縁にも沈線巡る、磨消縄文（RL）、ミガキ/ナデ	暗茶褐/灰褐	良、均質：細～粗砂
86	17-6	深鉢	：沈線内部刺突、磨消縄文（RL）、ナデ/ナデ	淡黄灰茶褐/淡黄褐	精良：微～細砂
87	17-1	深鉢	台形状の波頂部：波頂部端部に沈線1条、穿孔、ナデ/ナデ	淡茶褐/橙茶褐	やや粗：細～粗砂、細礫
88	17-3	深鉢	緩い波状口縁。内面に橋状突起：波頂部に重圏文、梯子状文、撥形文、摩滅/摩滅	淡灰茶褐/明茶褐	やや粗：細砂多、稀に細礫
89	17-2	深鉢	耳状突起：突起から垂下する2本沈線2単位、磨消縄文（RL）/摩滅	赤茶褐/淡黄白、暗茶褐	やや粗：細～粗砂、細礫多
90	17-3	深鉢	橋状突起：口唇部に渦巻文、把手部に梯子状沈線文、摩滅/ナデ	明黄橙/暗茶褐	良：微～細砂、細礫
91	17-4	深鉢	口縁部外面に肥厚：口唇上面に沈線、摩滅/摩滅	淡橙～橙/淡橙～淡黄白	粗：細～粗砂多、細礫多
92	17-4	深鉢	口唇部内外に肥厚：口唇部上面に沈線1条、口唇部外縁に縄文（RL）、頸部ミガキ/ミガキ	橙褐～茶褐/淡灰茶褐	やや粗：細～粗砂多、細礫多
93	17-6	深鉢	：3本沈線磨消縄文（RL）、ミガキ/ミガキ？	暗灰褐/暗褐	粗：粗砂多、細礫多
94	17-4	深鉢	：垂下する多重紡錘文、摩滅/ナデ	淡灰白/明茶褐	粗：粗砂多、細礫少
95	17-1	深鉢	平縁：平行沈線文、杵状区画文、縄文（RL）、ナデ/摩滅	暗橙茶褐/淡黄灰	細～粗砂
96	17-1	深鉢	波状口縁、「く」字状口縁：連弧文、平行沈線文、ミガキ、ナデ？/ナデ	暗茶褐/黄茶灰～暗茶褐	細～粗砂、細礫少
97	17-5	深鉢	平縁、顎状口縁：連弧文、杵状区画文、縄文（RL）、ナデ/ナデ	明橙茶褐/暗茶褐	細～粗砂多、細礫
98	17-1	深鉢	「く」字状口縁：平行沈線文、縄文（RL）、ミガキ/摩滅	茶褐/黄茶灰	細～粗砂多
99	17-3	深鉢	鐔状口縁：沈線、ナデ/ナデ	茶褐/明茶褐	粗：細～粗砂多、細礫多
100	17-2	深鉢	口唇部内外に肥厚：口唇部に杵状区画、鉤形の沈線文、ナデ/ナデ	淡灰茶褐/灰茶褐	粗：細～粗砂多、細礫
101	17-2	深鉢	口唇部内外に肥厚：口唇部上面に密な沈線で幾何学文、摩滅/摩滅	茶褐/灰褐～暗灰褐	やや粗：細～粗砂
102	17-1	深鉢	：口唇部縄文、摩滅/沈線1条、摩滅	暗茶褐/暗茶褐	細～粗砂多

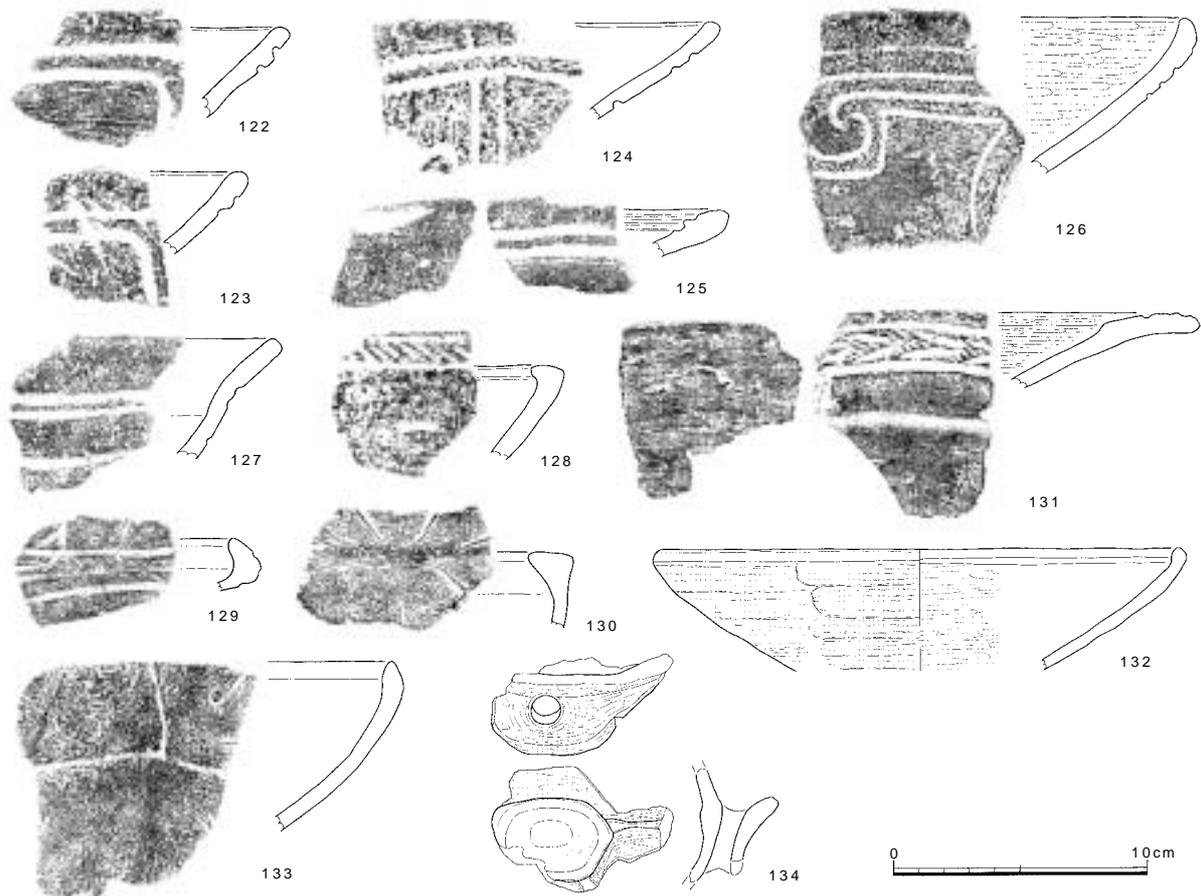
図94 14層出土土器3（縮尺1/3）

調査の記録



番号	調査次・区	器種	器形の特徴：文様と調整（外/内）	色調（外/内）	胎土
103	17-5	深鉢	: 口唇端部斜め刻み、縄文(RL)条痕	黄橙褐/淡黄灰	細～粗砂、細礫
104	17-6	深鉢	: 口唇部直交刻み、条痕/摩滅	淡黄茶褐/淡橙褐	精良: 細礫少
105	17-6	深鉢	: 口唇部直交刻み、条痕/条痕	赤茶褐/暗褐	粗: 細礫多
106	17-2	深鉢	: 口唇部に直交刻み、ナデ/ナデ	暗茶褐/淡茶褐	良: 細～粗砂、細礫少
107	17-5	深鉢	: 口唇端部に刺突、条痕/ナデ	黄橙茶褐/淡橙灰	細砂
108	17-4	深鉢	: 口唇部に刺突、条痕/ナデ	暗茶褐/淡灰白	精良: 細砂
109	17-5	深鉢	: 条痕/ナデ	茶褐/淡黄白	粗: 細～粗砂多、細礫多
110	17-3	深鉢	: ナデ/ナデ	明赤茶褐/灰茶褐	粗: 粗砂・細礫多
111	17-4	深鉢	: 条痕/摩滅	黄茶褐/淡黄白	やや粗: 細～粗砂多、細礫
112	17-6	鉢	: 条痕/ミガキ	暗灰褐/茶褐～暗茶褐	細～粗砂、稀に細礫
113	17-2	深鉢	: 条痕/ナデ	暗茶褐/淡黄橙灰褐	細砂
114	17-5	深鉢	: ナデ/条痕?	淡黄灰/暗茶褐	細～粗砂多、細礫
115	17-1	深鉢	: 条痕後ナデ/ナデ	淡黄茶灰/黒灰	粗: 細～粗砂多、細礫やや多
116	17-3	深鉢	: 条痕/条痕	暗茶褐/暗茶褐～黒褐	粗: 微～粗砂多、細礫多
117	17-1	深鉢	: 条痕後ナデ/ナデ	暗茶褐/淡黄茶灰	やや粗: 細～粗砂、細礫
118	17-4	鉢?	有段波状口縁: ミガキ/ナデ	暗茶褐/暗茶褐	やや粗: 細～粗砂多
119	17-3	深鉢	: ナデ、ミガキ/摩滅	淡黄白/淡黄橙白	粗: 細礫多
120	17-5	深鉢	: 条痕/ナデ	淡黄橙灰白/暗茶褐	細～粗砂、細礫少
121	17-5	深鉢	波状口縁: ナデ/ナデ	橙茶褐/橙茶褐	細～粗砂多、細礫多

図95 14層出土土器4（縮尺1/3）



番号	調査次-区	器種	器形の特徴：文様と調整（外/内）：法量	色調（外/内）	胎土
122	17-1	浅鉢	: 2本沈線(深・太) 口唇部縄文(LR) ナデ、条痕後ナデ/ナデ	淡黄灰褐/淡灰	細～粗砂、細礫
123	17-1	浅鉢	: 2本沈線(深・太) 口唇部縄文(LR) ナデ	灰茶褐/淡橙茶	細砂、細礫
124	17-4	浅鉢	: 2本沈線(深) 摩滅/摩滅	淡黄白/暗褐	粗: 細～粗砂多、細礫多
125	17-5	浅鉢	: 摩滅/2本沈線(深) 磨消縄文?、摩滅	暗灰/淡黄橙灰	細～粗砂、細礫少
126	17-4	浅鉢	: 渦巻文、2本沈線磨消縄文(LR) ミガキ/ミガキ	暗茶褐/暗茶褐	細砂多
127	17-1	鉢	: 平行沈線文、磨消縄文(LR) 摩滅	暗茶褐/淡黄灰	細～粗砂、細礫少
128	17-1	鉢?	口唇部内面に肥厚: 口唇部上面沈線1条、斜め方向の刻み?、条痕後ナデ?/ナデ	黄橙茶褐/暗茶褐	細～粗砂多、細礫
129	17-4	浅鉢	: 磨消縄文(LR) 摩滅/摩滅	暗灰/暗灰	細～粗砂、細礫
130	17-5	鉢	口唇部内面に肥厚: ナデ/ナデ	暗茶褐/暗茶褐	細～粗砂、細礫
131	17-6	浅鉢	口唇部大きく外反: 条痕後ミガキ/矢羽根状モチ-フ、縄文(LR) ミガキ	灰褐/灰褐	精良: 微～細砂
132	17-5	浅鉢	: 条痕/ミガキ: 口径20.5cm	黄橙茶褐/赤茶褐	細～粗砂多、細礫
133	17-4	鉢	: ナデ/ナデ	暗茶褐/暗茶褐	細～粗砂、細礫
134	17-1	双耳壺	上下の貫通孔: ナデ、ミガキ/ナデ	橙茶褐/橙茶褐	やや粗: 細～粗砂、細礫

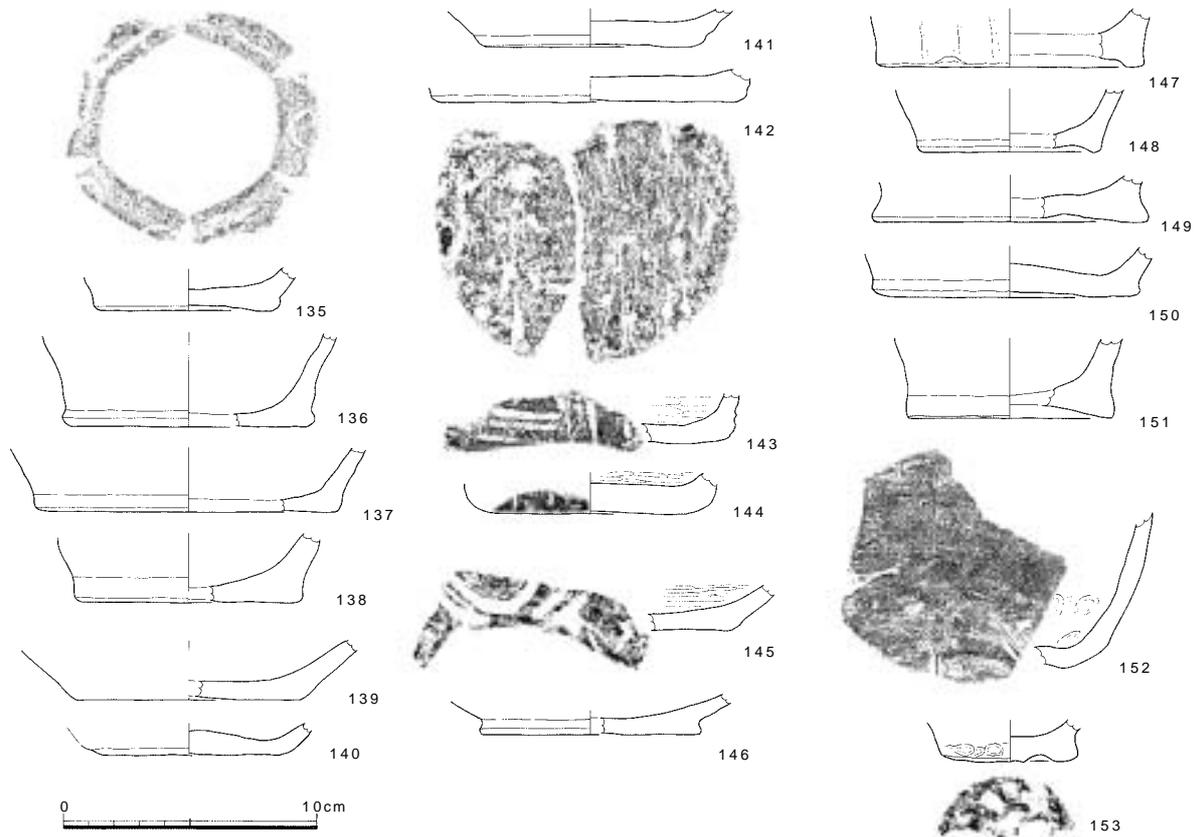
図96 14層出土土器 5 (縮尺 1/3)

もある。磨消縄文帯に施文される縄文はほとんどが単節の縄文原体、特にRLが多用されるが、擬縄文のもの(62)もある。口唇部を外面に肥厚させるものでは、口唇部上面に沈線1条を引く(74・78・79・91・92)。

無文深鉢 器形をうかがいしることができるものは少ないが、頸部のくびれ、胴部のふくらみを有さないもの(109) 頸部にくびれを有し胴部が緩くふくらむもの(118・120)がある。口縁部の形状については、平縁のものと波状口縁のものに大別できる。口縁部の形態については、多くが直立ないしやや内湾するものであるが、これに加えて口縁部外面を肥厚させ、段を形成するもの(118・119) 頸部で強く屈曲して立ち上がるもの(121)がある。口唇部への加飾という点では、刻みを施すもの(103～106) 刺突を施すもの(107・108)がある。口唇部の刻みには直交刻みタイプ(108～106) 斜め刻みタイプ(103)がある。刻みの施文具には、棒状工具によるもの(104～106)と、ヘラ状工具によるもの(103)がある。器面の調整は巻貝条痕によるものとナデによるものが主体で、そのほかに縄文によるもの(103)と二枚貝条痕によるもの(113、116)がある。

浅鉢 器形の全形をうかがいしることができるものでは、皿状のもの(125・131) 椀状のもの(126・133)が

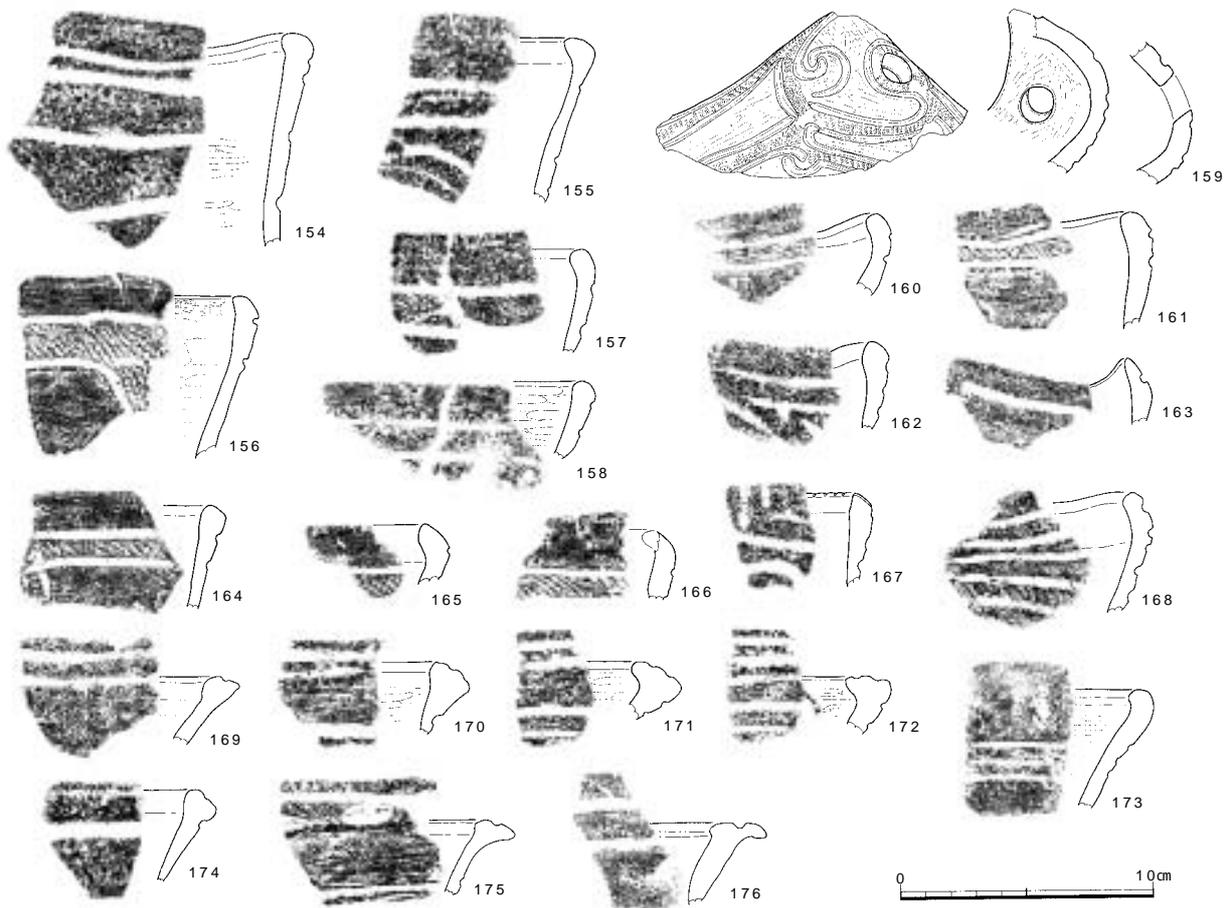
調査の記録



番号	調査次 - 区	器種	器形の特徴：文様と調整（外/内）：法量	色調（外/内）	胎土
135	17-5	深鉢	平底：沈線文、磨消縄文？、摩滅/ナデ：底径6.6cm、1/1残	明橙茶褐/淡灰茶褐	細～粗砂多、細礫
136	17-3	深鉢	平底：ナデ、指頭痕/ナデ：底径9.4cm、1/3残	淡黄灰/淡黄灰褐	粗：細～粗砂多、細礫
137	17-5	深鉢	平底：ナデ/ナデ：底径10.4cm	淡黄灰/淡黄灰	精良：微～細砂
138	17-4	深鉢	平底：ナデ/摩滅：底径8.4cm	淡黄灰～明淡橙/淡黄白	粗：細～粗砂多、細礫多
139	17-6	鉢？	平底：摩滅/摩滅：底径8.8cm、1/3残	淡黄～淡橙/灰褐	粗：粗砂、細礫
140	17-5	鉢？ 浅鉢？	平底：ナデ/ナデ：底径6.8cm	淡橙灰茶/淡灰茶	細～粗砂多、細礫
141	17-1	浅鉢	平底：ナデ/ナデ：底径8.2cm	橙茶褐/黄茶褐	粗：細～粗砂、細礫多
142	17-4	深鉢？	平底：ナデ、底部工具痕/摩滅：底径11.8cm、3/4残	淡黄白/明黄茶褐	精良：微～細砂
143	17-5	鉢？	平底：3本沈線磨消縄文（RL）/ミガキ	灰茶褐/暗灰茶褐	精良：細～粗砂、細礫少
144	17-3	深鉢？	平底：2本沈線、ナデ/ミガキ：底径7.6cm	淡灰茶褐/暗褐	良：微～粗砂
145	17-2	鉢	平底：2本沈線磨消縄文（RL？） 摩滅/ミガキ	灰褐/灰茶褐	粗：細～粗砂多、細礫
146	17-1	浅鉢	平底：ナデ/ナデ：底径8.6cm、1/2残	灰黄茶/黒茶褐	やや粗：細～粗砂、細礫
147	17-1	深鉢	高台状：ナデ/祭痕後ナデ：底径9.4cm	淡黄茶灰/暗茶褐	細～粗砂、細礫
148	17-1	深鉢	高台状：ナデ/ナデ：底径6.6cm、1/3残	暗茶褐/淡黄茶灰	細～粗砂、細礫
149	17-1	深鉢	高台状：ナデ/ナデ：底径10.8cm、1/3残	橙灰白/淡黄灰	良：均質、細～粗砂
150	17-4	深鉢	平底：ナデ/祭痕、指頭痕：底径9.6cm	淡黄白/淡黄白	良、均質、細砂
151	17-3	深鉢	凹底：ナデ/ナデ：底径7.8cm	淡黄褐/灰褐	良：微～細砂、稀に粗砂
152	17-1	鉢？	：祭痕後ナデ/ナデ、指頭痕	黄茶褐/淡黄灰	細～粗砂、細礫
153	17-2	深鉢？	平底：指頭痕（特に底部では顕著）/ナデ：底径4.2cm、1/2残	明黄橙/灰茶褐	良：細砂多

図97 14層出土土器6（縮尺 1/3）

ある。そのほか、本調査地点出土の縄文土器群の中でも特異なものとして、口縁端部を内面につまみだし、端面に面を有するもの（128・130）がある。施文部位についてみると、外面に文様を配するもの（122～124・126～129）と、内面に文様を配するもの（125・131）があり、皿状のものは内面施文、椀状のものは外面施文という傾向がある。文様は、沈線文によるものは、太くて深い沈線による区画文（122・123）、2本沈線磨消縄文によるものでは、口縁部文様帯から垂下するJ字文や渦巻文（124、126）がみられる。そのほか、口縁端部を内面につまみ出し面をもつ128は、端面に沈線を引き、その外側に縄文施文するものである。深鉢の口縁部において多くみられるような、口縁部を巡る沈線の外側に斜め方向の沈線を多数配するものと同様の意匠を意図したものかもしれない。131は大きく外開きになる口縁内面に2条の沈線で挟まれた矢羽根状の沈線文を配し、その内部に縄文を充填するものである。

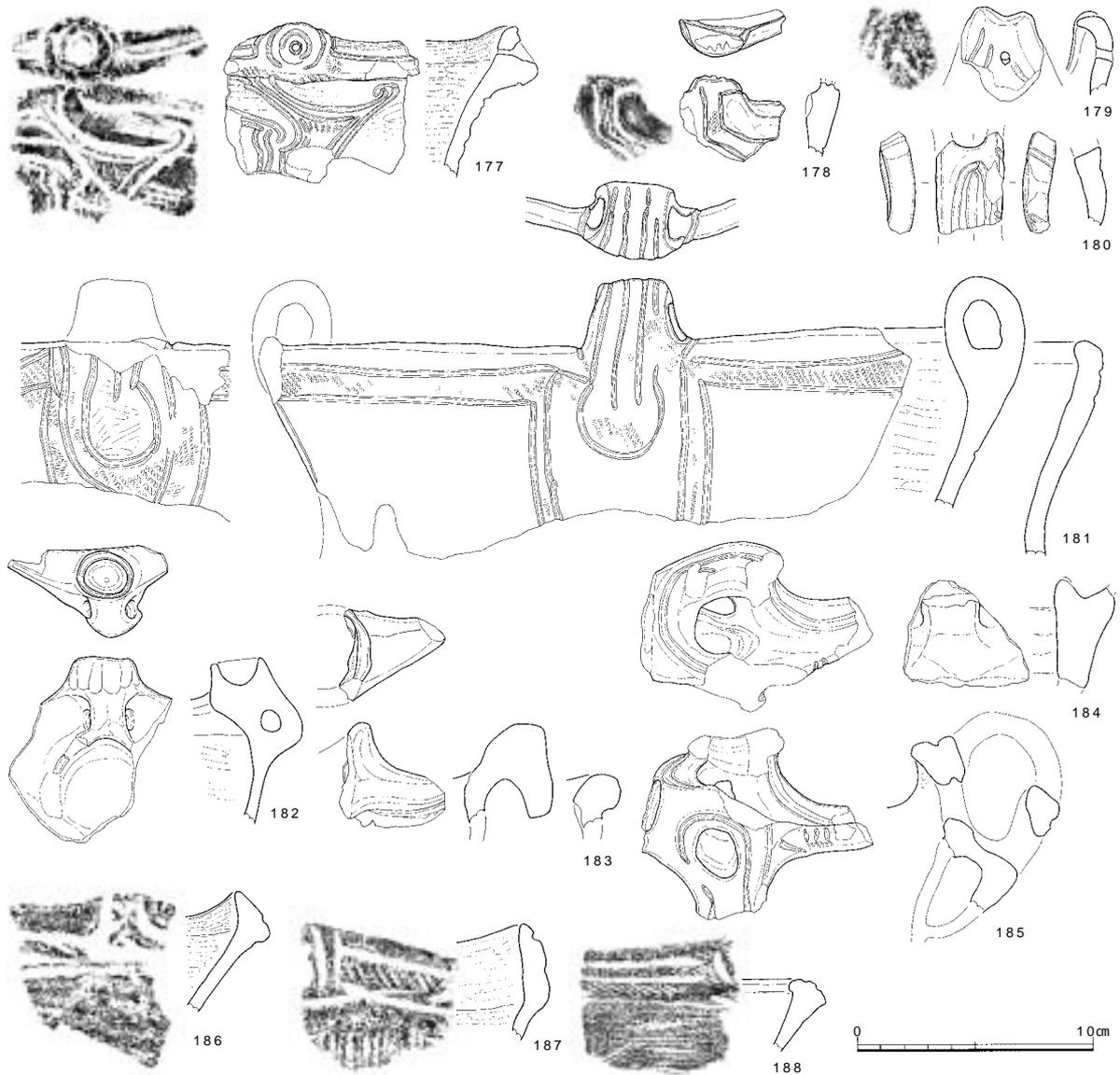


番号	調査次-区	器種	器形の特徴：文様と調整（外/内）	色調（外/内）	胎土
154	17-6	深鉢	: 2本沈線磨消縄文(RL)ミガキ	明黄白~灰褐/淡茶褐	良、均質：微~細砂、稀に細礫
155	17-6	深鉢	: 沈線文、摩滅/摩滅	灰褐/暗灰褐	やや粗：細~粗砂、稀に細礫
156	22	深鉢	: 幅広縄文帯、2本沈線磨消縄文(RL) ミガキ/茶痕後ナデ	暗灰褐/淡黄灰褐	精良：稀に細礫
157	17-6	深鉢	: 2本沈線、摩滅/摩滅	灰~灰褐/黄茶褐~灰茶褐	やや粗：細~粗砂、稀に細礫
158	17-5	深鉢	: 2本沈線磨消縄文(RL) ミガキ/ミガキ	明淡黄白/淡橙	良：細~粗砂
159	22	深鉢	波頂部発達、大きく内湾、穿孔：渦巻文、沈線末端切り合わない、磨消縄文(RL) ミガキ/ミガキ	暗灰茶褐/暗灰茶褐	精良：細砂
160	17-6	深鉢	: 2本沈線磨消縄文(RL) ミガキ/摩滅	暗赤茶褐/明橙茶褐	精良、均質：微~細砂
161	17-6	深鉢	波状口縁：2本沈線磨消縄文(RL) ミガキ/摩滅	黄茶褐/淡黄褐	良：微~細砂
162	17-5	深鉢	波状口縁：2本沈線、摩滅/摩滅	明灰茶褐/茶褐	やや粗細~粗砂多、細礫
163	22	深鉢	波状口縁：太い沈線文、ナデ/ナデ	暗茶褐/灰黄茶褐	細~粗砂
164	22	深鉢	: 2本沈線磨消縄文(RL) ミガキ/ナデ	淡黄灰茶褐/淡黄灰	精良：細砂
165	17-6	深鉢	平縁、口唇部内側に折れて肥厚：磨消縄文(RL) ミガキ/ミガキ、ナデ	淡灰黄/淡黄褐	精良：微砂、細礫
166	17-6	深鉢	: 2本沈線磨消縄文(RL) ミガキ/摩滅	灰黄褐/淡黄灰	精良、均質：微砂
167	17-6	深鉢	: 口唇部刻み、沈線文、摩滅/摩滅	淡黄/淡黄白	精良：細~粗砂
168	17-5	深鉢?	ゆるい波状口縁：太く深い沈線、摩滅/ていねいなナデ	淡黄褐/淡灰黄褐	精良、均質：微砂
169	17-5	深鉢	口唇部内面に肥厚：口唇部上面に沈線1条、摩滅/ナデ	暗灰褐/明茶褐	やや粗：細~粗砂
170	17-6	深鉢	口唇部肥厚：上端2本沈線、磨消縄文(RL) ミガキ/ミガキ	灰褐/明茶褐	良、均質：微~細砂
171	17-5	深鉢	口唇部内面に肥厚：口唇端部に2本沈線、2本沈線、摩滅/ミガキ	灰黄褐~灰褐/灰褐	やや粗：微~粗砂、細礫
172	17-5	深鉢	口唇部肥厚：口唇部上面に平行沈線、磨消縄文帯、摩滅/摩滅	茶褐~暗茶褐/暗灰褐	やや粗：細~粗砂、細礫
173	17-5	深鉢	: 3本沈線磨消縄文(RL)ミガキ	灰茶褐/茶褐~灰茶褐	良：微~細砂
174	17-5	深鉢	口唇部内外に肥厚：口唇端部と器壁外面に沈線各1条、摩滅/摩滅	暗茶褐/淡黄褐	良：微~細砂
175	17-5	深鉢	平縁、外面に大きく肥厚：口唇部上端に沈線1条、ナデ/ナデ	淡黄灰/淡灰茶褐	良：微砂
176	17-5	深鉢	平縁、外面に大きく肥厚：口唇部上端に沈線、ナデ/ナデ	淡灰褐/淡灰褐	精良、均質：微砂、稀に細礫

図98 13・14層出土土器1（縮尺1/3）

双耳壺 134は双耳壺のつまみ部分の破片である。器面との境に上下方向の貫通孔があげられる。つまみ部外面は緩く窪む。

底部 平底のもの（135~146）、高台状のもの（147~150）、凹底のもの（151）がある。器壁の立ち上がりの角度から、深鉢（135~138・141~144・147~152）と浅鉢（139・140・145・146）に分離できる。底部と器壁の境に明瞭な屈曲点をもつものが多いが、明瞭な屈曲点を有さず、緩やかに立ち上がるもの（140・143・152）もあ



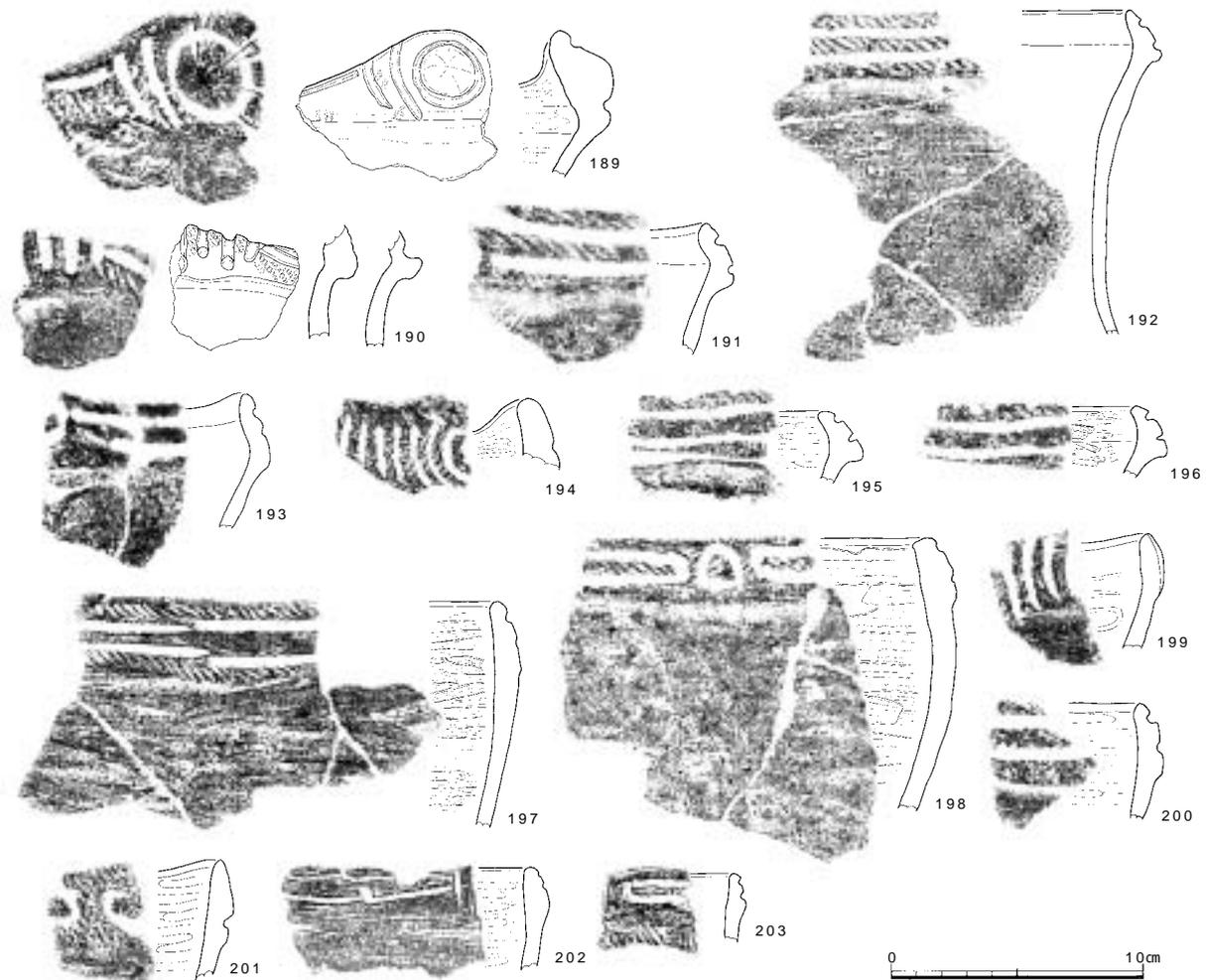
番号	調査次・区	器種	器形の特徴：文様と調整（外/内）：分量	色調（外/内）	胎土
177	17-5	深鉢	波状口縁、波頂部穿孔：口唇部に杵状区画、波頂部円孔巡る円文、3本沈線磨消縄文（RL）ミガキ	淡黄白～灰褐/暗茶褐	良：細～粗砂
178	17-6	深鉢	平縁、小突起：突起を巡る沈線、垂下する沈線、磨消縄文（RL）ミガキ	乳白～灰/淡黄灰	精良、均質：微砂、稀に細礫
179	17-5	深鉢	山形波頂部：波頂下に穿孔、2本沈線、摩滅/ナデ	淡黄白/淡黄白	良：微～細砂、稀に細礫
180	22	深鉢	穿孔：長方形区画文、側縁に刻み、摩滅/摩滅	淡黄白/淡黄白	精良：微～細砂
181	17-5	深鉢	4方に環状突起：突起に平行沈線4条、下部に円文、磨消縄文（RL）ナデ/ミガキ、：口径29.2cm、1/2残	淡黄/淡黄橙	精良：微～細砂
182	17-6	深鉢	円環状突起、円孔、橋状突起：ナデ/ミガキ	淡灰白～乳白/淡橙	精良、均質：細～粗砂、稀に細礫
183	17-4	深鉢	円環状突起：沈線文、摩滅/摩滅	黄橙～橙褐/橙褐	粗：微～粗砂、細礫
184	17-6	深鉢	：ナデ/ナデ	淡黄白/乳白	精良、均質：細～粗砂、細礫
185	17-2	深鉢	大きく湾曲、穿孔、口縁部肥厚：摩滅/ミガキ	灰茶褐/黄褐	やや粗：細礫
186	22	深鉢	「く」字状口縁：頂部から垂下、区画内斜格子沈線文、ミガキ?/ミガキ	乳白/乳白～淡橙白	精良：微砂
187	22	深鉢	波状口縁：連弧文、杵状区画文、区画内縄文（RL）条痕/条痕	淡黄白/淡灰白	精良：微～細砂、稀に細礫
188	22	深鉢	口唇部肥厚：口縁部に文様集約、乳状文、平行沈線文、文様帯全面に縄文（RL）条痕/ナデ、ミガキ	暗茶褐/灰黄橙褐	良：細砂

図99 13・14層出土土器2（縮尺 1/3）

る。また、底部付近まで文様が展開するものもある（135・143～145）。高台状の底部には、シャープに作り出すもの（147）と底部外縁に薄く粘土を貼り付けた低いもの（149・150）がある。153は平底の底部に指頭による深い窪みが多数観察される。ただし、残存する窪みに器壁を貫くものはなく、多孔底とは異なる。

13・14層出土土器（図98～104 図版1・3・7・10・13～16）

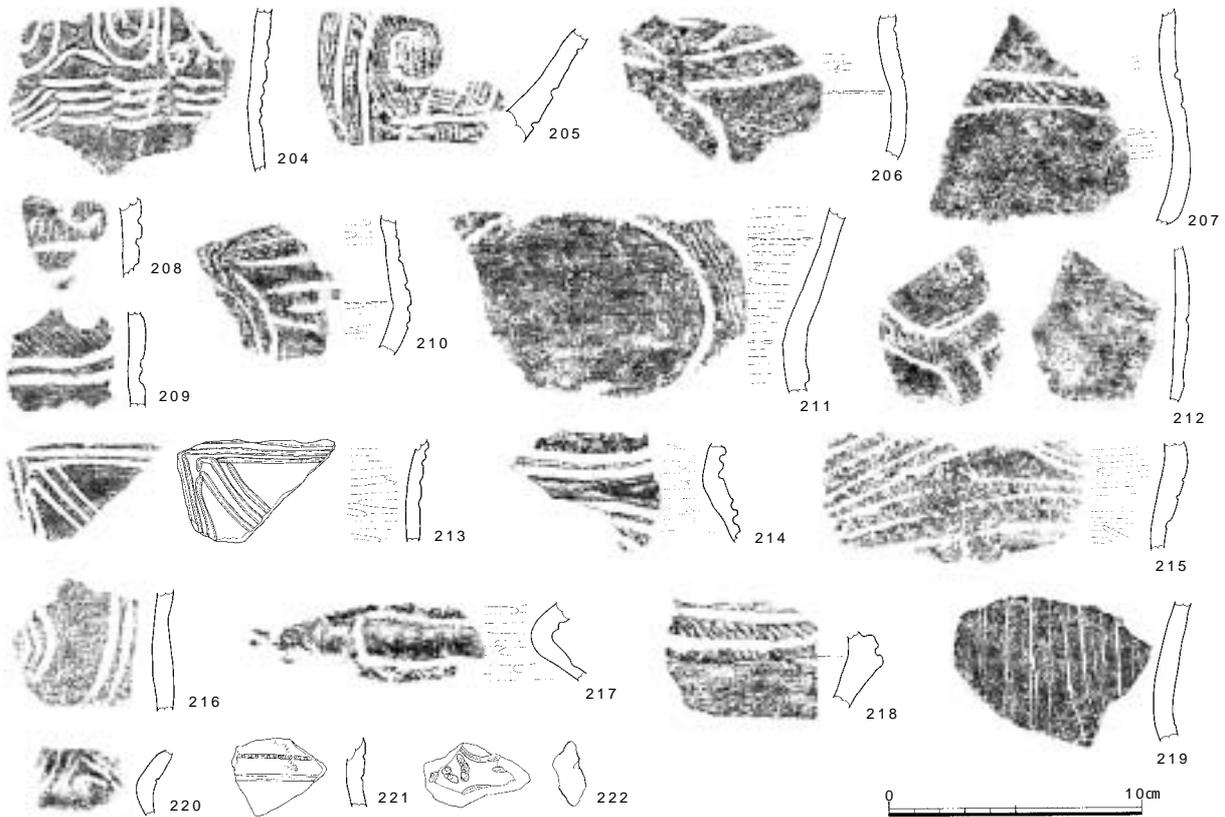
有文深鉢の口縁部・突起部片（154～203） 有文深鉢・鉢の胴部片（204～222） 無文深鉢の口縁部片（223～



番号	調査次 - 区	器種	器形の特徴：文様と調整（外/内）	色調（外/内）	胎土
189	22	深鉢	波状口縁、円文内大きく肥厚：円文、(対向)連弧文、縄文(RL)、ナデ/ミガキ	淡黄灰/淡黄灰茶褐	細～粗砂、細礫少
190	17-4	深鉢	顎状口縁：縄文(RL) / 摩滅/摩滅	暗茶褐/暗黒茶褐	精良、均質：微～細砂、細礫
191	17-4	深鉢	：口縁部文様集約、平行沈線文、縄文(RL) / 摩滅	暗茶褐～暗褐/明～暗茶褐	やや粗：細～粗砂、細礫
192	17-5	深鉢	平縁、顎状口縁：口縁部文様集約、平行沈線、口縁部全面縄文(RL)、ナデ/ナデ	明黄茶褐/灰褐	粗：粗砂、細礫多
193	17-3	深鉢	：口縁部文様集約、平行沈線文、摩滅/摩滅	淡黄白/淡黄灰白	やや粗：細～粗砂、細礫
194	22	深鉢	波状口縁：円文?、(対向)連弧文、口縁部全面縄文(RL)/ミガキ	明黄茶褐/明黄茶褐	良：細砂
195	17-5	深鉢	「く」字状口縁：ナデ、口唇端部縄文(RL)/ミガキ	赤橙褐～茶褐/淡灰黄褐	粗：細～粗砂
196	17-5	深鉢	：平行沈線文、縄文(RL) / ナデ/条痕	淡灰茶褐～橙褐/明灰褐	粗：細～粗砂、細礫
197	17-5	深鉢	平縁：口縁部に平行沈線2条、縄文(RL) / 条痕	明灰褐/淡灰黄褐	精良、均質：細～粗砂多
198	17-7	深鉢	顎状口縁：円文、杵状区画文、杵状区画内縄文(RL)、ナデ/条痕	淡茶褐/淡橙茶褐	良：細～粗砂多、細礫少
199	17-5	深鉢	：口縁部文様帯、連弧文、縄文(RL) / ナデ/ナデ	明茶褐色/明茶褐	良：微～細砂
200	17-6	深鉢	顎状口縁：太く深い平行沈線、ナデ、縄文?/ミガキ	黄褐～暗茶褐/淡黄褐	やや粗：微砂、細礫
201	17-6	深鉢	ゆるい波状口縁：杵状区画?、口縁部縄文(RL) / ナデ/ミガキ	暗茶褐/暗灰～暗褐	やや粗：微砂多、細礫
202	22	深鉢	：杵状区画文、条痕後ナデ/ミガキ	暗茶褐/黄茶褐	細～粗砂、細礫少
203	22	深鉢	：口縁部に杵状区画文、胴部に多条沈線文、ナデ/ナデ	暗茶褐/淡黄茶褐	細～粗砂、稀に細礫

図100 13・14層出土土器 3 (縮尺 1/3)

238) 浅鉢 (239～246) 双耳壺把手 (247) 注口土器管状注口部 (248) 底部片 (249～266) が出土している。
有文深鉢 胴部に緩いくびれをもつもの (181・192) くびれを有さないもの (197・198) がある。口縁部の形状は、波状口縁と平縁のものに大別される。波状口縁の中には振幅が大きく波頂部が深く内湾するもの (159) もある。口縁部形態は、口唇端部が直立あるいはやや内傾するもの (154・156～158・160～165) 口唇部を内面につまみ出すもの (155・166) 口縁部外面を肥厚し上端が面をなすもの (175・176) 口縁部の主文部を大きく隆起させ、つなぎ部に杵状のくぼみの内側に区画沈線文を引くもの (177) 口縁部を内外面に肥厚させるもの (170～172) 突起が付くもの (178・181～185) 「く」字状あるいは顎状口縁となるもの (186・187・189～196) 口縁部外面を肥厚させ胴部との境に段をもつもの (197～203) と多様である。

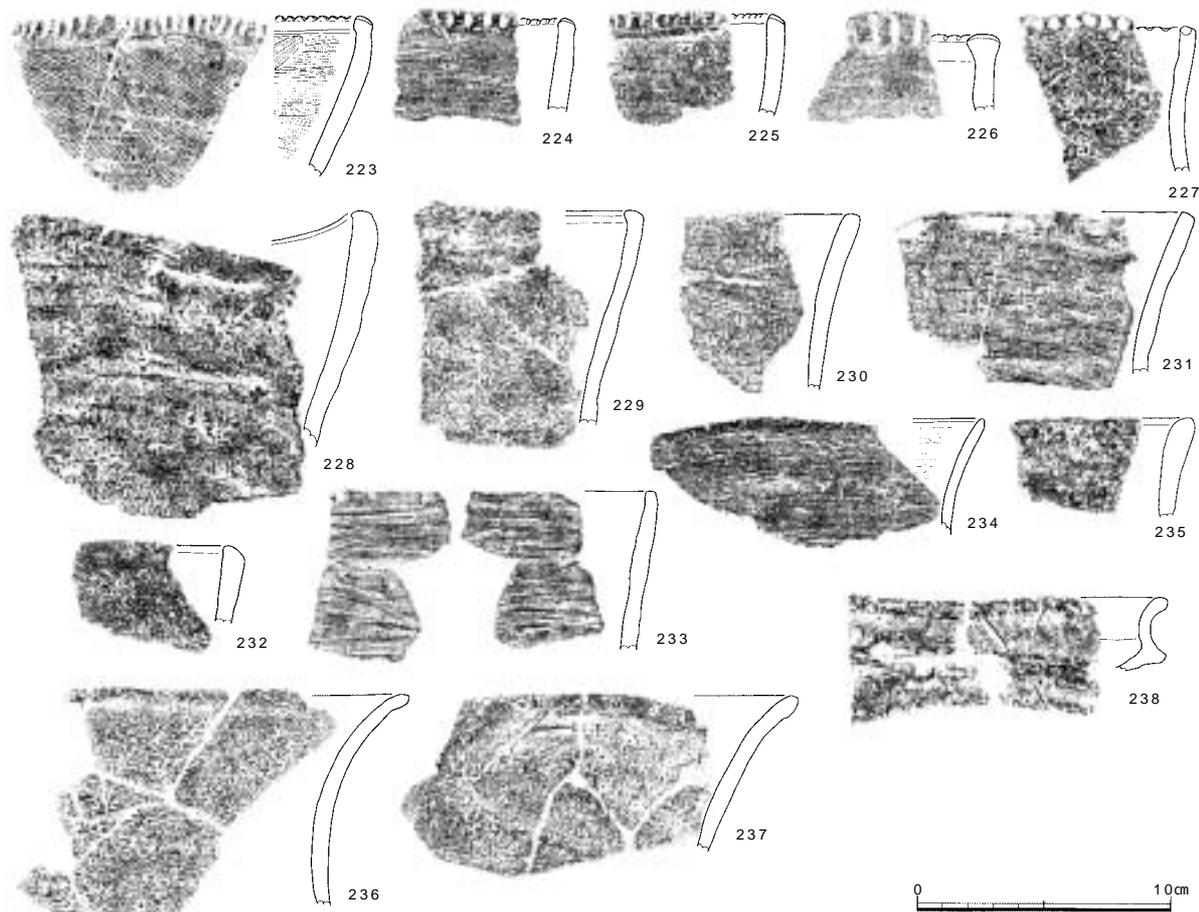


番号	調査次 - 区	器種	器形の特徴：文様と調整（外/内）	色調（外/内）	胎土
204	17-1	深鉢	: 垂下する多重区画文、多重連弧文、摩滅/ナデ	暗茶褐/茶褐	やや粗：粗砂～細礫多
205	17-6	深鉢	: 縄文地に沈線文（渦巻文、平行沈線文）縄文（RL）/ナデ?	黄茶褐/淡黄褐	良：微～細砂
206	17-6	深鉢	: 2本沈線、摩滅/ミガキ	淡灰白/淡黄灰白	良、均質：微～細砂、稀に細礫
207	17-6	深鉢	: 2本沈線、摩滅/ミガキ	淡灰黄白/淡黄灰	やや粗：細～粗砂、細礫
208	17-1	深鉢	: 渦巻文、2本沈線?、縄文（RL）、赤彩/ミガキ?	暗茶褐/黄褐～暗灰褐	粗：粗砂、細礫多
209	17-1	深鉢	: 2本沈線磨消縄文（RL）ナデ/条痕	暗茶褐/暗褐	粗：細～粗砂、細礫多
210	17-6	深鉢	: 3本沈線磨消縄文（RL）ミガキ/ミガキ	黄茶褐/暗灰茶褐	やや粗：細～粗砂
211	17-6	深鉢	: (2本沈線)、条痕、縄文（RL）/ミガキ	暗灰～暗灰褐/淡黄白	良：細～粗砂、稀に細礫
212	17-6	深鉢	: 2本沈線磨消縄文（RL）ミガキ/条痕	乳白/淡黄白	良：微～細砂
213	17-5	深鉢?	: 3本沈線磨消縄文（RL）沈線内部に赤彩/ミガキ	淡灰褐/灰褐	精良、均質：微砂
214	22	深鉢	: 3本沈線磨消縄文（RL）ミガキ/ミガキ	灰褐/灰黄茶褐	精良
215	17-5	鉢?	: 多条の平行沈線文、磨消縄文（RL）/ミガキ	茶褐～暗茶褐/暗褐	やや粗：細～粗砂、細礫
216	22	深鉢	: 多重弧状文、摩滅/条痕後ナデ	暗褐/淡黄白	粗：細～粗砂多、細礫多
217	17-6	深鉢	: 粹状区画沈線文、ミガキ、縄文（RL）/ミガキ	淡黄橙褐/淡橙褐～茶褐	精良、均質：細～粗砂
218	22	深鉢	「く」字状口縁：口縁部に文様集約、平行沈線文、文様帯全面に縄文（RL）、ナデ/ナデ	明橙褐/明橙褐	良：細砂
219	22	深鉢	: 縦位の細い多条条線、ナデ/ナデ	暗赤茶褐/淡橙茶褐	やや粗：細～粗砂多、細礫少
220	17-5	深鉢?	: 半円形モチーフを挟んで対向する平行沈線文、摩滅/摩滅	灰褐色/暗茶褐	やや粗：細～粗砂
221	22	深鉢?	: 細い沈線内に刺突列、ナデ/ナデ	黄橙茶褐/暗灰茶褐	細～粗砂、細礫
222	17-6	深鉢?	: 刺突による円文、沈線文、摩滅/摩滅	淡黄橙褐/暗茶褐	精良、均質、細～粗砂

図101 13・14層出土土器4（縮尺1/3）

突起を有するものでは、台形状の山形突起（178）、環状突起（181）、円環状突起（182・183）粘土紐を複雑に入り組ませる装飾性の高い突起（185）、橋状突起（180・184）がある。179は山形突起か、振幅の大きい波状口縁の波頂部の可能性があるが、小片のため位置づけが難しい。口唇部を内面に屈曲させ、中心には小穿孔を穿つ。181は四方に突起をもつ深鉢で、環状の突起上まで4本の沈線束で構成される文様が延びる。胴部文様については、J字文や渦巻文のような曲線を基調とするモチーフが退化して、口縁部文様帯から垂下する長楕円形文になったのであろう。182には頂部に円環状突起、頂部の突起からは垂下する小さい橋状突起が付される。182の円環状突起が窪み状であるのに対し、183の円環状突起は中空となっている。

文様については、多重沈線による縦長の楕円形文とその下に多重連弧文を描くもの（204）、縄文地に沈線で渦巻文を描くもの（205）、2本沈線ないし3本沈線磨消縄文帯によって文様帯を構成するもの（154～168・173・206～214）、細い沈線により文様を描くもの（219）などがある。2本沈線ないし3本沈線磨消縄文土器に

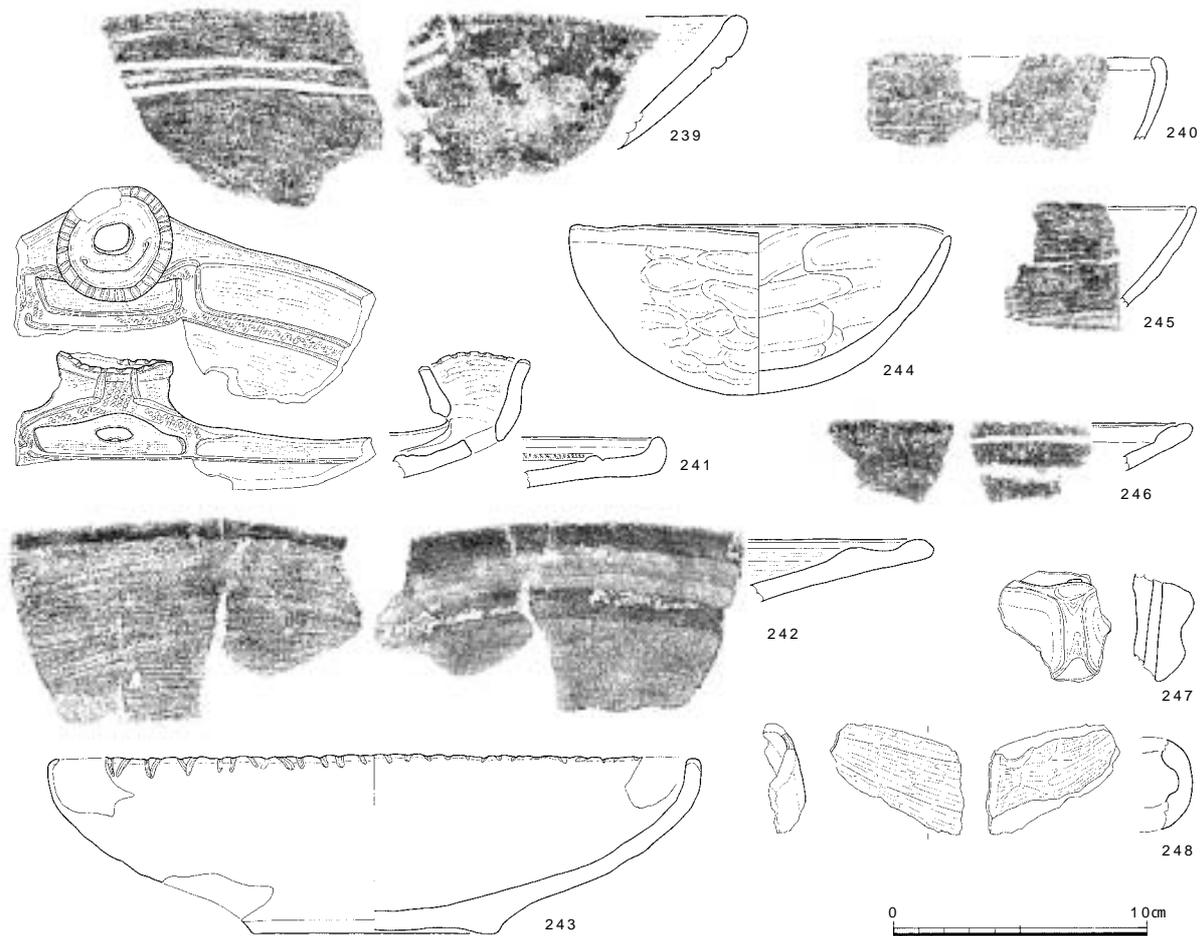


番号	調査次 - 区	器種	器形の特徴：文様と調整（外/内）	色調（外/内）	胎土
223	17 - 5	深鉢	平縁：口唇部直交刻み+斜め刻み、縄文(RL)条痕	淡黄褐/淡黄白	良：微砂
224	22	深鉢	：口唇部直交刻み、条痕/ナデ	淡黄橙灰茶褐/淡黄灰白	良：細～粗砂
225	17 - 6	深鉢	平縁：口唇部斜め刻み、ナデ/ナデ	淡黄灰/乳白	やや粗：細礫
226	17 - 6	深鉢	：口唇部直交刻み、ナデ/ナデ	茶褐/淡黄灰褐	細～粗
227	17 - 6	深鉢	：口唇端部刺突、摩滅/摩滅	淡黄灰白/淡黄灰	良：細～粗砂
228	17 - 5	深鉢	波状口縁：ナデ/ナデ	暗茶褐/淡灰茶褐	粗：細～粗砂、細礫
229	17 - 5	深鉢	平底：ナデ/ナデ	明茶褐/暗茶褐	粗：細～粗砂、細礫
230	17 - 6	深鉢	：ナデ/ナデ?	明淡橙褐/淡橙褐	やや粗：細砂、細礫
231	17 - 5	深鉢	平縁：条痕/条痕後ナデ	茶褐～暗茶褐/灰黄褐～暗茶褐	精良、均質：微砂多、稀に粗砂
232	22	深鉢	：摩滅/ナデ	橙褐/橙茶褐	細～粗砂
233	17 - 1	深鉢	平縁：条痕/条痕	暗灰褐/暗茶褐	良：粗砂～細礫
234	17 - 5	深鉢	：ナデ/ミガキ	暗茶褐/暗茶褐	粗：細～粗砂、細礫
235	17 - 3	深鉢	：ナデ/ナデ	暗茶褐～暗灰茶褐/暗茶褐～暗褐	粗：細～粗砂、細礫
236	17 - 5	深鉢	平縁：摩滅/摩滅	明黄褐/暗灰褐	粗：微砂多、細礫多
237	17 - 7	深鉢	：沈線文、摩滅/摩滅	明黄橙褐/暗茶褐	粗：細～粗砂、細礫
238	17 - 3	深鉢	有段口縁、大きく外反：ナデ?/ナデ	暗灰褐/暗灰褐	粗：細～粗砂

図102 13・14層出土土器 5 (縮尺 1/3)

については、文様の構成が明らかなものは少ないが、振幅が大きく深く内湾する装飾性の高い波状口縁を有する159では、横走る縄文帯とそれから垂下する小渦巻文で構成される単位文様が2段にわたって確認できる。また、上段の渦巻文に隣接する穿孔の周囲にも磨消縄文帯が巡る。文様を構成する沈線は、一部で鉤状に入り組むものであるが、沈線端部どうしの切り合いがみられる部分もある。磨消縄文帯による胴部文様帯では渦巻文あるいはJ字文のような曲線を基調とする文様が看取される(206・210・211)。

内外面に口縁部を大きく肥厚させるもの(170～172)は、口唇部上端に1ないし2本の沈線をめぐらせる。口縁部に文様を集約する一群(186～203)では、円文を挟む対向連弧文や杵状区画文が文様構成の基調となるが、186では波頂部から展開する文様の内部に斜格子や斜線の刻みを充填する。また、沈線が細くなるものや不安定な描線になるもの(202・203)もあり、これらの一群の中においては退化した印象を受ける。そのほか、頸部に



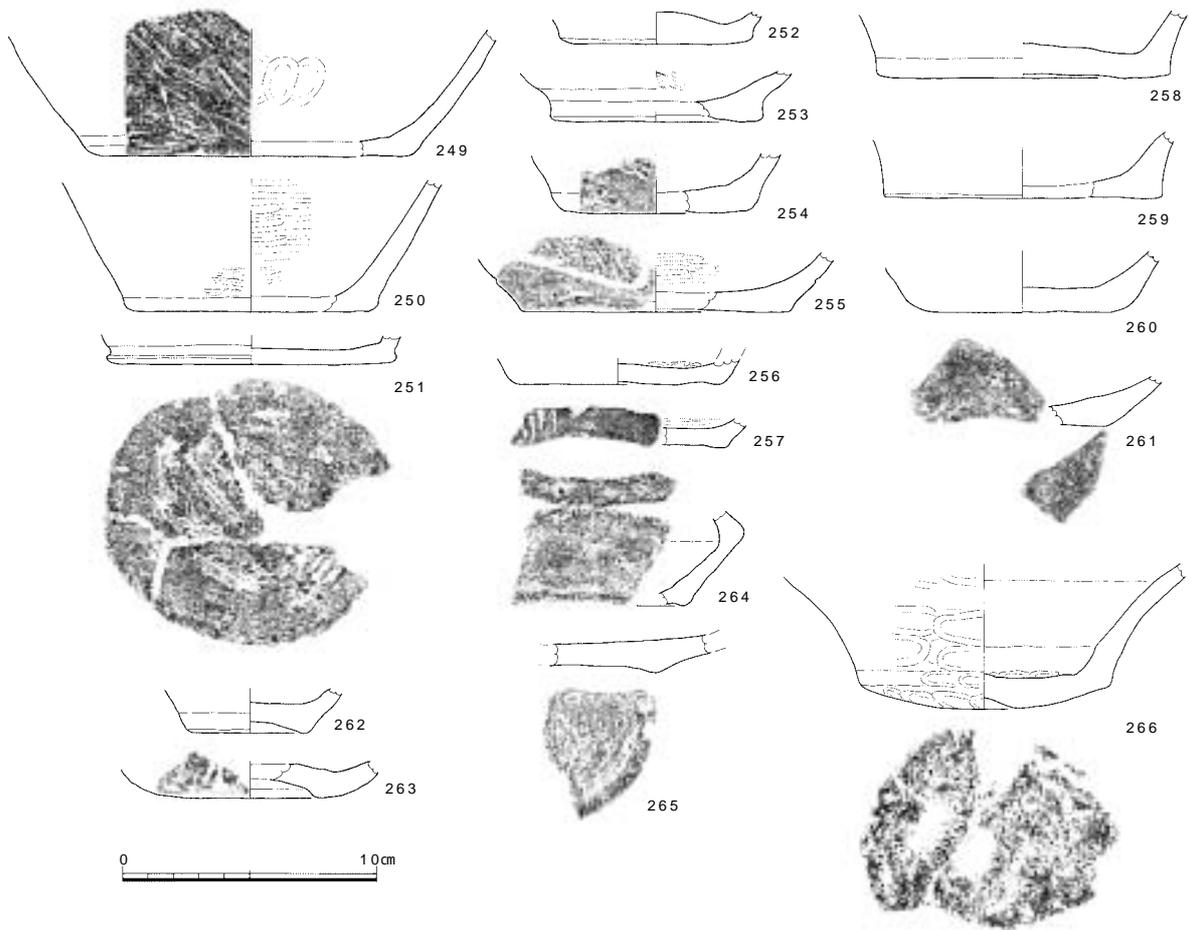
番号	調査次 - 区	器種	器形の特徴：文様と調整（外/内）：法量	色調（外/内）	胎土
239	17 - 5	浅鉢	椀形：2本沈線磨消縄文（RL）ミガキ/ミガキ	暗茶褐/淡 - 暗茶褐	良：細 - 粗砂、細礫
240	17 - 5	鉢	：条痕/ナデ	淡黄灰茶/淡黄灰茶	粗：細 - 粗砂、細礫
241	22	浅鉢	環状突起、穿孔、内面隆帯：突起上面刻み、条痕/隆帯上面縄文（RL）磨消縄文、ミガキ、隆帯沿いに沈線	暗灰褐 - 暗褐/暗灰褐	精良、均質：微 - 細砂、稀に粗砂
242	22	浅鉢	内面隆帯：条痕/ミガキ	淡黄灰茶褐/暗灰茶褐	精良：細砂、稀に細礫
243	17 - 5	浅鉢	平縁、平底：口唇部鋸歯文、ナデ/ナデ：口径24.8cm、底径9.6cm、1/4残	黄茶褐/淡灰茶褐	良：微 - 細砂、稀に細礫
244	17 - 5	手づくね椀	平縁：指頭痕/ヨコナデ：口径24.8cm、2/3残	茶褐 - 暗茶褐/淡黄灰 - 暗赤茶褐	不均等：細礫多
245	17 - 5	浅鉢	：条痕後ナデ/ナデ	暗茶褐/淡暗茶褐	粗：細 - 粗砂、細礫
246	17 - 5	浅鉢	平縁、口唇部内面に肥厚：内面に沈線、摩滅/摩滅	暗褐/暗褐	良：微砂、細礫
247	17 - 6	注口？ 双耳壺？	穿孔：ナデ？/ナデ？	淡黄灰白/暗灰	精良、均質：細 - 粗砂
248	22	注口土器	管状：ミガキ/ナデ	橙茶褐/淡黄灰茶褐	良：細 - 粗砂

図103 13・14層出土土器 6（縮尺 1/3）

平行沈線文を鋸歯状に引くもの（220）、細い沈線文の内部に刺突を充填するもの（221）、刺突による円文を描くもの（222）があるが、いずれも細片で摩滅が著しいため詳細は明らかではない。

無文深鉢 全形をうかがいしることができるものはないが、多くは頸部でくびれ胴部に緩いふくらみをもつ器形をとるものと推測される。口縁部の形状は、波状口縁のものと同平縁のものに大別される。これらの多くは直立もしくは緩く内湾ないし外反するものであるが、その他に強く外反するもの（236・237）や頸部で強く屈曲し外反するもの（238）がある。口縁部への加飾という点では、口縁部に刻みを施すもの（223～226）、刺突を施すもの（227）がある。刻みは口唇部に直交する直交刻み（224・226）、口唇部に斜交する斜め刻み（225）がみられ、223では両者がみられる。刻みの施文具には、棒状工具によるもの（223・224・226）、ヘラ状工具によるもの（225）がある。器面の調整はナデや巻貝条痕によるものが主体であるが、縄文を施すものもある（223）。

浅鉢 全形をうかがいしることができるものには、皿状のもの（241～243）と椀状のもの（244）がある。これ



番号	調査次 - 区	器種	器形の特徴：文様と調整（外/内）：法量	色調（外/内）	胎土
249	22	深鉢	平底：条痕/ナデ：底径12.2cm	淡黄灰/淡灰白	精良微～細砂、稀に細礫
250	17-6	深鉢	平底：条痕/ミガキ：底径9.4cm、1/5残	淡黄灰褐/淡黄灰褐	粗：微～粗砂、細礫
251	17-6	深鉢	平底：条痕、ナデ/条痕、ナデ：底径10.8cm、1/1残	淡灰茶褐/黄橙褐	微～粗砂、細礫
252	17-5	深鉢	平底：摩滅/摩滅：底径4.6cm	明橙/淡灰白	粗：細礫多
253	17-5	浅鉢	平底：ナデ、条痕/条痕：底径8.2cm	淡黄灰～橙褐/灰茶褐	やや粗：細～粗砂、細礫
254	17-6	深鉢	平底：条痕、ナデ/ナデ：底径7.2cm	淡黄褐/淡茶灰	やや粗：細～粗砂、細礫
255	22	深鉢	平底：幅広縄文帯、磨消縄文(RL)、ミガキ/ミガキ：底径10.4cm	淡黄灰褐/暗灰茶褐	精良：細砂、稀に細礫
256	17-6	深鉢	平底：ナデ/ナデ、指頭痕：底径7.9cm、1/2残	明橙褐/淡黄灰褐	微～粗砂
257	22	鉢?	低い高台状：3本沈線磨消縄文(RL)、ミガキ/ミガキ	淡黄橙灰/暗茶褐	精良：細砂少、細礫少
258	17-6	深鉢	平底：ナデ/ナデ：底径11.6cm	淡橙褐/淡黄茶褐	粗：微～粗砂、細礫
259	17-4	深鉢	：摩滅/摩滅：底径10.8cm、1/4残	淡黄灰白/黄褐～黄茶褐	やや粗：微～粗砂
260	17-5	鉢	平底：摩滅/摩滅：底径7.0cm	明黄橙/淡灰白	精良、均質：細砂、稀に細礫
261	17-5	浅鉢	平底：摩滅/摩滅	黄茶褐/黄橙茶褐	粗：細～粗砂、細礫
262	17-7	深鉢	：ナデ/ナデ：底径4.4cm	明橙茶褐/暗黒茶褐	細～粗砂、細礫
263	22	浅鉢?	凹底：磨消縄文(RL?)、ナデ/ナデ：底径6.2cm	橙茶褐/橙茶褐	やや粗：細～粗砂多、細礫多
264	17-6	鉢	：ミガキ/ナデ	明黄橙褐/暗茶褐	精良：微～細砂
265	17-6	浅鉢	高台状：ナデ/ナデ	暗灰茶褐/淡黄橙	精良：微～細砂
266	17-3	鉢?	：手づくね?、ナデ、指頭痕/ナデ、指頭痕：底径9.8cm、1/3残	淡橙灰褐/灰茶褐～淡茶褐	粗：粗砂、細礫

図104 13・14層出土土器7（縮尺1/3）

らの中には、内面に隆帯をもつもの（241・242）、口縁部内面を肥厚させるもの（246）、口唇部に鋸歯状の刻みを施すもの（243）などがある。239は内外面に2条の沈線による文様を有する。内面に隆帯を有するものうち、241は口縁部に大きな円筒状の突起を付し、その上端に刻みを施すものである。突起は接合部から上部に向かってやや開き気味の円筒状の形状である。この突起下から垂下する隆帯と内面を巡る隆帯が接続して長方形区画を形成し、隆帯の両側縁には区画沈線文が引かれる。隆帯上には縄文施文が認められ、突起下には穿孔があげられるなど装飾性に富んでいる。246は肥厚させた口縁部内面に沈線を巡らせる。

無文浅鉢では、内面に隆帯を付すもの（242）、口唇部に鋸歯状の刻みを施すもの（243）がある。243は単線の

沈線で口縁部に鋸歯文を刻むもので、棒状工具による施文である。244は外面に指頭痕やナデの痕跡が顕著に残る手づくね状の浅鉢である。その他、240・245は条痕調整による椀形の浅鉢であると思われる。

双耳壺・注口土器 いずれも小片であり、全形を復原するには至らない。247は双耳壺の把手であると思われる。上下方向の貫通孔が穿たれる。248は注口土器の管状注口部である。

底部 平底のもの(249~261)、凹底のもの(262~265)、丸底のもの(266)がある。本調査地点において、丸底底部はほとんど出土していない。これらの底部は、器壁の立ち上がりの角度により、深鉢底部(249~252・254・256~260・262)と浅鉢底部(253・255・260・265)に分離することが可能である。また、多くは無文であるが、一部、底部付近まで文様が施されるもの(255・257・263)が認められる。底部と器壁の境に明瞭な屈曲点をもつ器形のものが多いが、明瞭な屈曲点をもたず緩やかに立ち上がるもの(263)も散見される。

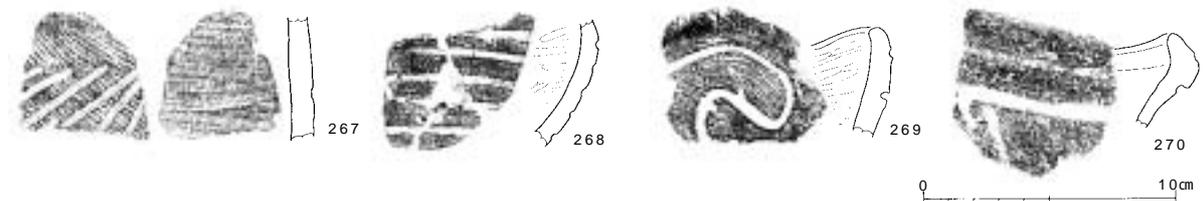
13層出土土器(図105~113 図版2~4・6~8・12・15・16・17・19)

有文深鉢(267~328)、無文深鉢(329~349)、浅鉢・鉢(350~363)、双耳壺つまみ(364)、注口土器(365・366)、底部片(367~385)が出土している。

有文深鉢 器形の全形を復原できるものはない。271・299などは、頸部でわずかにくびれ緩くふくらむ胴部をもつものと推測される。口縁部の形状は、波状口縁と平縁のものに大別できる。口縁部の形態は直立や緩く内湾するものが主体であるが、その他に、口縁部外面を肥厚し上端が面をなすもの(309・310)、口縁部外面を肥厚するもの(298)、突起が付くもの(301~306)、「く」字状あるいは顎状口縁となるもの(311~314・318~322)がある。外反する口縁部の端部に縄文を施すもの(324)、頸部に半円形の隆帯を巡らせ、その上端に斜め方向の沈線を多数引くもの(323)がある。波状口縁のものには、振幅が大きく波頂部部分を大きく内湾させるもの(272~275)がある。このうち、275については屈曲点が明瞭になり、硬直化した印象をうける。

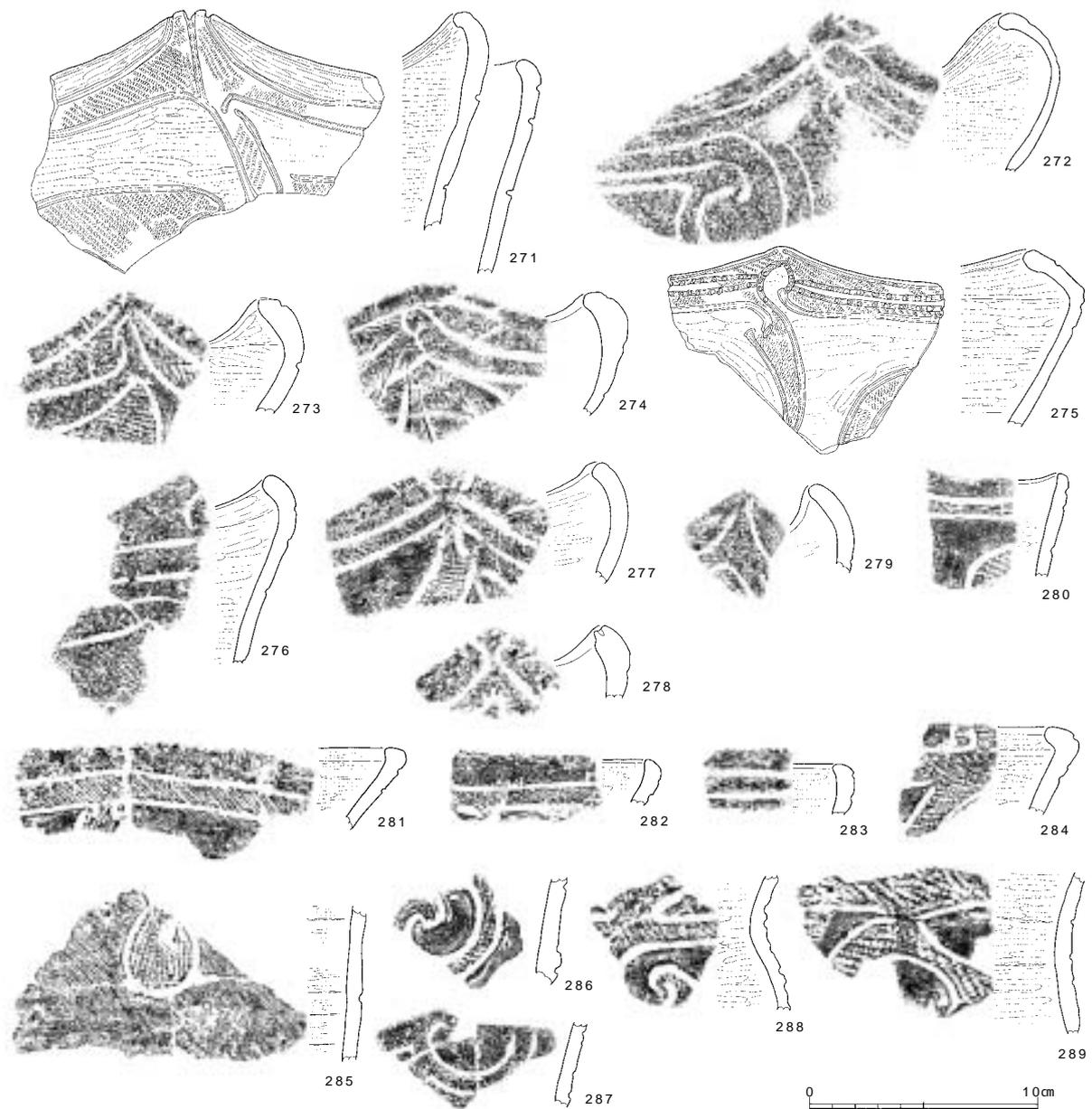
突起には耳状のもの(301・305)、台形状のもの(306)、波頂部が渦巻状の小突起になるもの(303・307・308)、橋状突起(315・316)がある。311は耳状の平面形で内部が中空となる筒状の突起で、上面に引いた沈線の内部には多数の刺突を充填する。沈線末端は鉤状に入り組む。302・303は突起部を肥厚させたものである。302は残存状態が悪いが、303は渦巻状の小突起の背後に捻りを加えた粘土紐を付すものである。305は側縁が破損しているため図108では穿孔状の表現となっているが、本来はこの部分にも器壁があり、口唇部に接続していたものと考えられる。突起の側面を多条の沈線が巡り、突起上面には刻みを加える。306は胴部の文様帯から連続する沈線が穿孔や頂部の周囲を渦巻状に巡る。

文様は多様であるが、主体を占めるのは、2本沈線ないし3本沈線磨消縄文帯で文様帯が構成されるものである。これらのうち、2本沈線磨消縄文帯で構成される文様帯が展開するものでは、口縁部文様帯が波頂下で屈曲し、波頂を逆三角形や円形の区画で挟み込むもの(272・273・277・278)が目立つ。275の円形のモチーフ部分はネガとポジが反転し縄文が施文されない。これらの一群では、沈線末端が鉤状に入り組み、端部どうしが切り合わないもの(272・277など)もある。胴部文様はJ字文や渦巻文など、曲線のモチーフを基調とする(272・



番号	調査次-区	器種	器形の特徴:文様と調整(外/内)	色調(外/内)	胎土
267	17-6	深鉢	: 平行斜線文(竹管?) 縄文(RL)条痕	明橙/淡灰白	精良: 微砂、稀に細礫
268	17-6	鉢	: 多条の横走沈線文、ナデ/ミガキ	橙茶褐/暗茶褐	良: 細~粗砂、細礫
269	17-6	深鉢	波状口縁: 深く太い沈線文、内部に擬縄文?、ミガキ/ミガキ	黄茶褐/淡黄茶褐	精良: 細砂
270	17-6	深鉢	波状口縁: 沈線文、端部鉤形、摩滅/摩滅	明橙/明橙	均質: 細~粗砂

図105 13層出土土器1(縮尺1/3)



番号	調査次 - 区	器種	器形の特徴：文様と調整（外/内）	色調（外/内）	胎土
271	17-6	深鉢	波状口縁：幅広縄文帯、沈線内刺突？、2本沈線磨消縄文(RL) ミガキ/ミガキ	暗茶褐～暗灰茶褐/茶褐	良：細～粗砂、稀に細礫
272	17-6	深鉢	波状口縁：2本沈線、J字文、ミガキ/ミガキ	淡茶褐～明橙/暗茶褐～暗褐	精良、均質
273	17-6	深鉢	波状口縁：幅広縄文帯、2本沈線磨消縄文(RL) ミガキ/ナデ、ミガキ	黄茶褐/茶褐	精良、均質：細礫
274	17-6	深鉢	波状口縁：2本沈線磨消縄文(RL) 摩滅/ナデ？	淡黄灰/灰	やや粗：粗砂
275	17-6	深鉢	波状口縁：沈線内に刺突、2本沈線磨消縄文(RL) ミガキ/ミガキ	明黄茶褐/暗茶褐	精良
276	17-6	深鉢	波状口縁：幅広縄文帯、2本沈線磨消縄文(RL) ナデ/ミガキ	淡黄橙茶褐/淡灰白	良：細砂
277	17-6	深鉢	波状口縁：2本沈線磨消縄文(RL) ミガキ/ミガキ	淡黄褐～淡茶褐/淡茶褐	精良、均質：細礫
278	17-6	深鉢	波状口縁：波頂部に刺突、2本沈線磨消縄文(RL) 摩滅/摩滅	橙～茶褐/茶褐	やや粗：細～粗砂多
279	17-6	深鉢	波状口縁：2本沈線磨消縄文(RL) ミガキ/ミガキ	赤橙～黄橙/淡黄橙	精良、均質
280	17-6	深鉢	：2本沈線磨消縄文(RL) ミガキ/ミガキ	淡黄橙褐/淡灰白	やや粗：細～粗砂多、稀に細礫
281	17-6	深鉢	：口縁部文様帯から垂下するモチーフ、2本沈線磨消縄文(RL) ミガキ/ミガキ	明橙/淡黄茶褐	やや粗：細～粗砂多、細礫
282	17-6	深鉢	：2本沈線磨消縄文(RL) ミガキ/ミガキ	淡黄茶褐/淡黄橙茶褐	良：細～粗砂、細礫
283	17-6	深鉢	：2本沈線磨消縄文(RL) ミガキ/ミガキ	茶褐/茶褐	良：細～粗砂
284	17-6	深鉢	：口唇上端で鈎状、2本沈線磨消縄文(RL) ミガキ/ミガキ	暗褐～黒/暗褐～黒	精良、均質：粗砂
285	17-6	深鉢	：渦巻文、2本沈線磨消縄文(RL) 糸痕/ミガキ	淡黄白/淡黄白	精良、均質：微～細砂
286	17-6	深鉢	：J字文、2本沈線磨消縄文(RL) ミガキ/摩滅	淡黄灰/灰褐	精良、均質
287	17-6	深鉢	：円文、2本沈線磨消縄文(RL) ミガキ/摩滅	橙茶褐/淡黄橙	良：細砂、細礫
288	17-6	深鉢	：渦巻文、2本沈線磨消縄文(RL) ミガキ/ミガキ	淡黄褐/淡灰白	精良、均質：微～細砂少
289	17-6	深鉢	：2本沈線磨消縄文(RL) ミガキ/ミガキ	暗灰褐/淡黄茶褐	精良、均質：細砂、稀に粗砂

図106 13層出土土器2（縮尺 1/3）



番号	調査次-区	器種	器形の特徴：文様と調整（外/内）：法量	色調（外/内）	胎土
290	17-6	深鉢	緩い波状口縁：波頂下に円文、渦巻文、3本沈線磨消縄文（RL）摩滅/ミガキ：口径24.8cm、1/4残	明灰白/灰茶褐	精良、均質：細砂多、稀に細礫
291	17-6	深鉢	：口唇部直交刻み、方形区画文、3本沈線磨消縄文（RL）ミガキ/ミガキ	淡灰茶褐/暗灰茶褐	良：細砂
292	17-6	深鉢	：3本沈線、口唇部鋸歯文、摩滅/摩滅	明淡黄白～明黄/淡灰黄白	やや粗：粗砂多、細礫多
293	17-6	深鉢	：口唇部鋸歯文、口唇部縄文（RL）ミガキ/摩滅	淡黄褐/淡灰黄褐	やや粗：細～粗砂多
294	17-6	深鉢	：3本沈線磨消縄文（RL）ミガキ/ミガキ	暗灰褐/茶褐	粗：細～粗砂多
295	17-6	深鉢	：3本沈線磨消縄文（RL）ミガキ/ミガキ	灰/暗褐	精良、均質：微～細砂
296	17-6	深鉢	：沈線文、ミガキ、縄文（RL）ミガキ	暗茶褐/灰～暗灰	良、均質：稀に細礫
297	17-6	深鉢	：口唇部に縄文帯縄文（RL）3本沈線磨消縄文、ミガキ/ミガキ	灰茶褐～暗灰褐/黄褐～灰茶褐	やや粗：細礫多
298	17-6	深鉢	口唇部内外に肥厚気味：口唇部上下端に沈線、沈線間縄文（RL）3本沈線磨消縄文（RL）ミガキ/ミガキ	黒褐/暗灰褐～黒褐	精良、均質：細～粗砂
299	17-6	深鉢	：J字文、3本沈線磨消縄文（RL）、条痕/ミガキ	茶褐～暗茶褐/灰茶褐～暗灰褐	精良：稀に細礫
300	17-6	深鉢	：3本沈線磨消縄文（RL）ミガキ/ミガキ、条痕	淡灰～灰褐/淡灰褐～灰褐	精良、均質：細～粗砂、稀に細礫

図107 13層出土土器3（縮尺 1/3）

275・277など）、その他、波頂部から垂下する沈線の内部に刺突が施されるもの（271）波頂に刺突を施すもの（278）口唇部上にも直線的な描線で渦巻文が描かれるもの（284）などが特徴的なものとして注意される。

3本沈線磨消縄文帯のものでは、口縁部下に3本沈線による方形の区画文を描くもの（290・291）があり、区画の下位に渦巻文が垂下する。口縁部を細かく刻むもの（291）もある。口唇部に加飾するものでは、2本の沈線束で鋸歯文を描くもの（292・293）があり、口唇部上には縄文が施される。

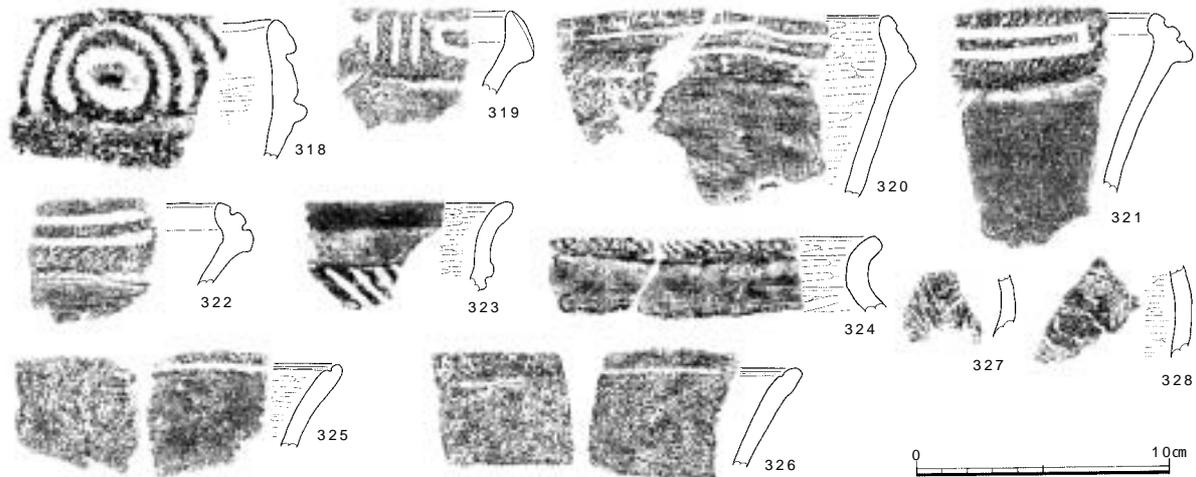
外面に肥厚した口縁部を有するものでは、上端に沈線をめぐらせ、その外側に斜めの刻みを施す（309・310）、このモチーフは「く」字状口縁のものにも引き継がれていく（313）。「く」字状口縁のものには、その他に波頂部に沈線による円文や渦巻文を巡らせるもの（311・312・314）がある。

顎状口縁の一群（318～322）は、口縁部に文様帯が集約され、円文、対向連弧文、枠状区画文が描かれる。口



番号	調査次-区	器種	器形の特徴：文様と調整（外/内）	色調（外/内）	胎土
301	17-6	深鉢	環状突起、口唇部肥厚：突起上縁沈線1条、沈線内刺突、ミガキ/ナデ	明橙/明橙	精良、均質
302	17-6	深鉢	口唇部肥厚：頸部に沈線文、ナデ、赤彩/	淡黄白/明黄褐	精良、均質：細～粗砂
303	17-6	深鉢	波頂の小突起背後に渦巻状の突起：渦巻文、3本沈線磨消縄文、ナデ、ミガキ、赤彩/ミガキ	明黄白/淡黄橙	精良、均質
304	17-6	深鉢	口縁屈曲部付近?：沈線文、ナデ/ナデ	灰～暗灰/灰	やや粗：粗砂、稀に細礫
305	17-6	深鉢	耳状突起、穿孔：平行沈線文、磨消縄文(RL)、ナデ/ミガキ	暗茶褐/茶褐	精良、均質：細～粗砂
306	17-6	深鉢	台形状突起、穿孔：突起を巡る渦巻文、突起下に矢羽根状文、3本沈線磨消縄文(RL)、ミガキ/ナデ、摩滅	暗茶褐/灰茶褐	やや粗：細～粗砂、稀に細
307	17-6	深鉢	波状口縁：波頂部渦巻文、波頂部から垂下する沈線文、磨消縄文(RL)、ミガキ/ミガキ	淡灰白/淡灰白	精良、均質：細～粗砂
308	17-6	深鉢	波状口縁：突起を巡る沈線、渦巻文、摩滅/ミガキ	明淡黄～明橙/明橙褐	精良、均質：細～粗砂多
309	17-6	深鉢	口唇部外方に肥厚：口唇部沈線、斜行沈線文、摩滅/摩滅	淡黄白/淡黄白	良：細～粗砂
310	17-6	浅鉢	口唇部内面に肥厚：沈線、口唇外縁に斜行沈線文、ミガキ/ナデ	橙茶褐/黄橙灰褐	精良、均質：稀に細礫
311	17-6	深鉢	波状口縁：波頂部渦巻文、3本沈線磨消縄文?、摩滅/摩滅	茶褐/淡灰茶褐	粗：細～粗砂多
312	17-6	深鉢	波状口縁、口縁部肥厚：波頂部を巡る沈線文、頸部屈曲部から垂下する沈線文、条痕、摩滅/ミガキ	灰褐～暗灰褐/茶褐	良：細～粗砂
313	17-6	深鉢	波状口縁：口唇部に円文、斜行沈線文、磨消縄文(RL)、ミガキ、条痕/ミガキ、条痕	淡黄橙/明橙	精良、均質：稀に細礫
314	17-6	深鉢	波状口縁、「く」字状口縁：波頂部刺突、重弧文、頸部以下波状口縁3本沈線の文様帯、摩滅/摩滅	明橙褐/淡茶褐～茶褐	精良
315	17-6	深鉢	突起の一部?：沈線文、縄文(RL)、ナデ/ナデ	淡黄橙/淡橙灰	良：細～粗砂
316	17-6	深鉢	: 3本沈線、側縁にも沈線文、ナデ?、赤彩/ナデ	淡黄橙/暗灰	やや粗：細砂、細礫
317	17-6	深鉢	: 梯子状文、3本沈線磨消縄文(RL)、ミガキ/ミガキ	淡黄茶褐/淡灰茶褐	良、均質：細砂、稀に粗砂

図108 13層出土土器4（縮尺1/3）



番号	調査次・区	器種	器形の特徴：文様と調整（外/内）	色調（外/内）	胎土
318	17-6	深鉢	頸状口縁？：円文、対向連弧文、摩滅/ミガキ	淡黄白/灰褐	良：細～粗砂多、稀に細礫
319	17-6	深鉢	「く」字状口縁：杵状区画文、沈線文、口縁部縄文(RL) ナデ/摩滅	橙茶褐/淡黄茶褐	細～粗砂多
320	17-6	深鉢	「く」字状口縁：2条の平行沈線文、ミガキ/ミガキ	暗灰茶褐/暗灰茶褐	良：微～細砂、稀に粗砂
321	17-6	深鉢	頸状口縁：杵状区画文、口唇部縄文(RL) ミガキ/ナデ	淡黄橙灰/淡黄灰	良：細～粗砂
322	17-6	深鉢	頸状口縁：(杵状区画文) 口唇部縄文(RL?) ミガキ/ナデ	淡黄灰/淡黄灰	良：細砂
323	17-6	鉢？	頸部屈曲部は隆帯状：隆帯上面斜行沈線文、ミガキ/ミガキ	暗茶褐/淡茶褐	やや粗：細～粗砂多
324	17-6	深鉢	：口唇部縄文(RL) ミガキ/ミガキ	淡黄白/淡黄白	粗：粗砂多、細礫多
325	17-6	深鉢	：内面沈線、摩滅/摩滅	暗茶褐/黄茶褐	細～粗砂多
326	17-6	深鉢	：内面沈線、摩滅/ミガキ	暗茶褐/暗茶褐	粗、細～粗砂多、細礫多
327	17-6	器種不明	：細い沈線、幾何学文？、摩滅/ナデ	灰白～灰/明灰褐	精良、均質：微～細砂
328	17-6	器種不明	：櫛歯状沈線、方形区画文、ナデ/ミガキ	黄茶褐/暗茶褐	均質：細砂

図109 13層出土土器 5 (縮尺 1/3)

緑部文様帯に縄文を施すもの(319・321)と施さないもの(320)がある。

その他、縄文地に竹管により平行する斜線を多数引くもの(267)、太い沈線文で横走る多段の沈線文を引くもの(268)、波頂下に太い沈線で変形区画文を描くもの(269)がある。267は小片のみの出土のため、位置づけが難しいが、中期末の可能性もある。269は区画内に擬縄文を充填する。

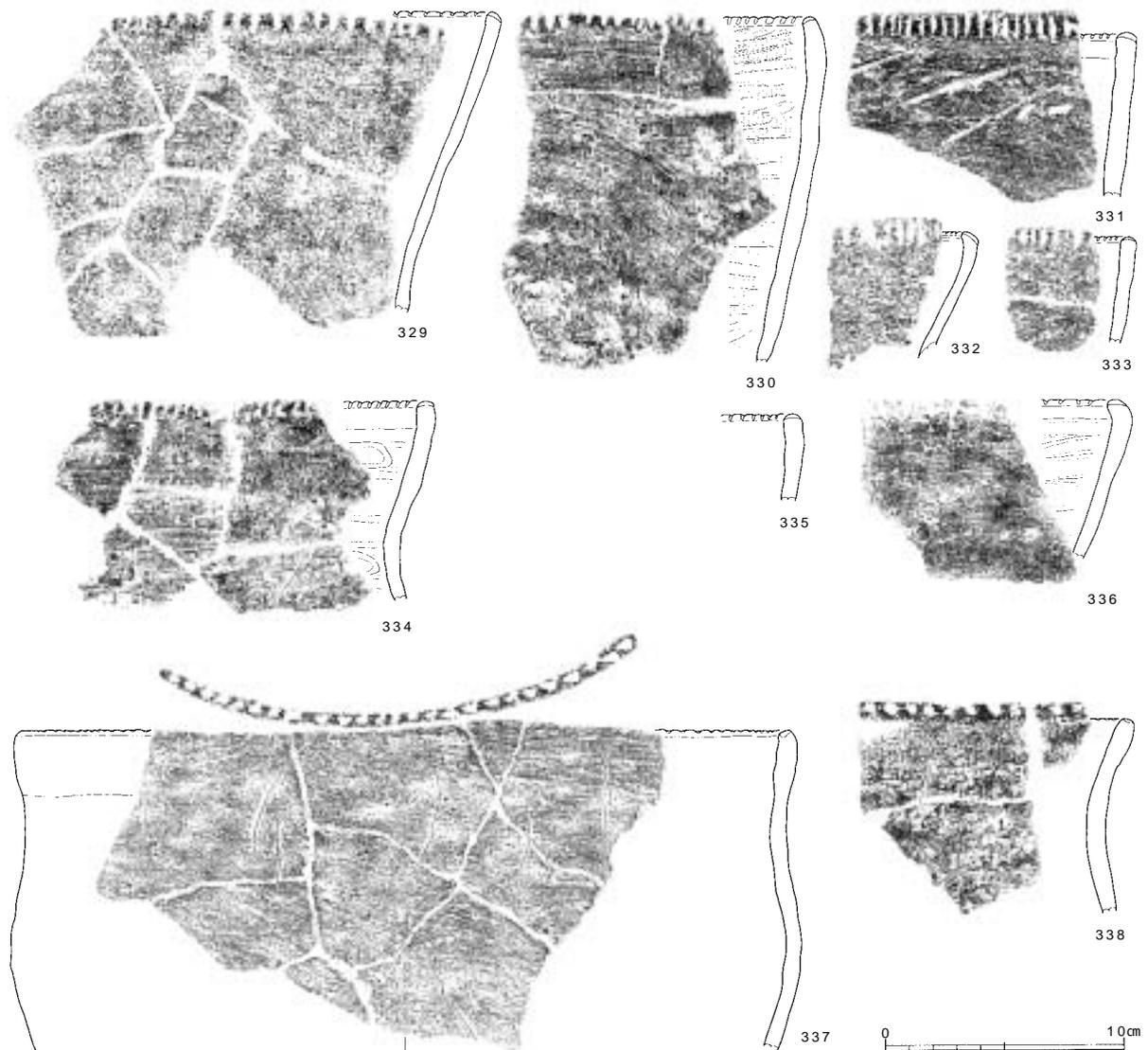
他地域の影響がみられるものとして、細い櫛歯状の工具で沈線を引いたもの(328)がある。加曽利B1式の影響がみられるものである。また、それ以外に平行する多条の沈線束でモチーフを描くものもある(327)が、小片で摩滅が著しいため詳細を明らかにしえない。

口縁部に細い沈線で内文を巡らせるもの(325・326)は、津島岡大遺跡第5次調査地点報告の「後期第 群」にあたり、彦崎 式に先行する土器群として位置づけられるもので、本調査地点出土縄文土器の中では新しい段階に位置づけられるものである。

無文深鉢 外反気味の口縁部がくびれ、胴部にわずかなふくらみを有するもの(337・338)がある。そのほか、頸部のくびれや胴部のふくらみを有さない深鉢が含まれている可能性もある。

口縁部への加飾という点では、刻みを施すもの(329～336)と刺突を施すもの(337・338)が認められる。口縁部に刻みを施すものには、棒状工具によって刻むもの(329・330・332～335)、ヘラ状工具によって刻むもの(331・336)がある。また、刻みには口唇部に直交して刻むもの(329～333・335)、斜行して刻むもの(334)、鋸歯状に刻むタイプ(336)とバリエーションがある。口縁部への加飾を行わないものでは、ナデや条痕による調整を行うのみのものが主体であるが、それ以外に口縁部外面を隆帯状に肥厚させ上面に縄文施文するもの(346) 器面を捺糸文で調整するもの(348)などが少量含まれている。

浅鉢・鉢 皿状のもの(357・358)、椀状のもの(362・363)、短い口縁部と屈曲点をもち胴部が球状にふくらむもの(359～361)がある。口縁部の形状では、内湾するもの(354)、内面に屈曲するもの(355)、内面を肥厚させるもの(353)がある。そのほか、内面に隆帯をもち隆帯上に縄文を施文するもの(352)がある。



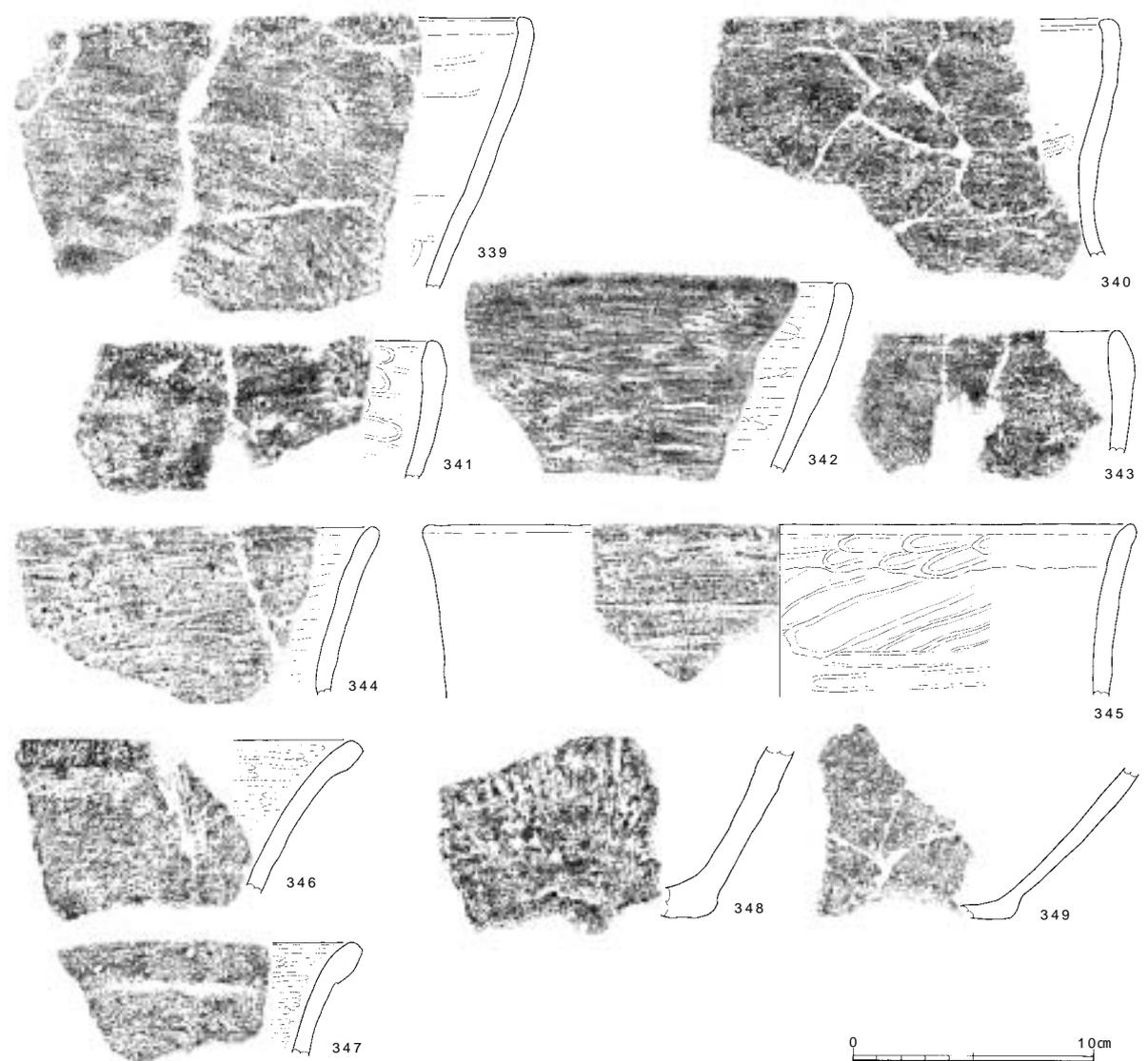
番号	調査次 - 区	器種	器形の特徴：文様と調整（外/内）：法量	色調（外/内）	胎土
329	17 - 6	深鉢	：口唇部直交刻み、糸痕/摩滅	明茶褐～淡黄白/灰白～灰褐	粗：細～粗砂多、稀に細礫
330	17 - 6	深鉢	：口唇部直交刻み、糸痕/糸痕、ナデ	淡灰黄白～明黄褐/淡灰黄白	精良、均質：細～粗砂多、細礫
331	17 - 6	深鉢	：口唇部直交刻み、糸痕後ナデ/糸痕後ナデ	淡黄茶褐/淡黄灰	良：細砂、細礫少
332	17 - 6	深鉢	：口唇部直交刻み、摩滅/摩滅	暗茶褐/暗茶褐	細～粗砂
333	17 - 6	深鉢	：口唇部直交刻み、糸痕/ナデ	淡灰茶/暗茶	粗砂～細礫多
334	17 - 6	深鉢	：口唇部斜め刻み、糸痕/ナデ	明茶褐/淡茶灰	やや粗：細～粗砂多、稀に細礫
335	17 - 6	深鉢	：口唇部直交刻み、糸痕/ナデ？	暗黄茶褐/淡黄茶褐	細～粗砂、細礫
336	17 - 6	深鉢	：口唇部鋸歯状刻み、糸痕/ミガキ	淡茶褐/淡灰	良、均質：細～粗砂多、稀に細
337	17 - 6	深鉢	：口唇部刺突、糸痕後ナデ/ミガキ、ナデ：口径32.0cm、1/5残	橙茶褐/明橙茶褐	粗：細～粗砂、細礫
338	17 - 6	深鉢	：口唇部刺突、摩滅/ナデ？	橙茶褐/橙茶褐	細～粗砂多、細礫

図110 13層出土土器6（縮尺1/3）

文様は2本沈線ないし3本沈線磨消縄文帯によるもの、刺突列点文による円文を描くもの（356）、沈線文によるもの（353）がある。文様の構成がわかるものでは、口縁部から垂下する渦巻文のもの（359・360）がある。磨消縄文帯が交差する部分では沈線どうしの切り合いがある。355は内面に大きく肥厚した口縁端部に3本沈線の磨消縄文帯が展開する。356には口縁部外面に刺突による円文がみられる。

器面の調整はミガキによるものが主体であるが、縄文施文（361）とナデ（362・363）がある。

双耳壺 364はつまみ状の突起で、上下方向の貫通孔を穿つ。器面には2本沈線磨消縄文帯で構成される文様が描かれ、沈線の末端は鈎状に入り組む。



番号	調査次-区	器種	器形の特徴：文様と調整(外/内)：法量	色調(外/内)	胎土
339	17-6	深鉢	： 糸痕後ナデ/ナデ	明茶褐/淡黄灰	やや粗：細～粗砂多、細礫
340	17-6	深鉢	： 糸痕後ナデ/糸痕	淡黄茶灰/淡黄茶灰	細～粗砂、細礫多
341	17-6	深鉢	： ナデ/ナデ	明淡橙褐/淡黄白	やや粗：細～粗砂多、稀に細礫
342	17-6	深鉢	： 糸痕/糸痕	赤茶褐～淡灰茶褐/淡灰茶褐	良、均質：微～細砂多、粗砂
343	17-6	深鉢	： 糸痕、ナデ/ナデ	橙茶褐/淡黄灰褐	やや粗：細～粗砂多、細礫
344	17-6	深鉢	： 粗い糸痕/ミガキ	灰茶褐～暗茶褐/灰黄褐～灰褐	やや粗：細～粗砂多、細礫多
345	17-6	深鉢	： 糸痕/ナデ：口径29.0cm、1/4残	茶褐～暗茶褐/淡灰黄～灰褐	やや粗：細～粗砂多、細礫多
346	17-6	深鉢	： 摩滅/ミガキ	暗茶褐/暗茶褐	細～粗砂多、細礫
347	17-6	深鉢	： ナデ?/ミガキ	暗茶褐/暗茶褐	細～粗砂多、細礫多
348	17-6	深鉢	平底： 擦糸文/ナデ	淡茶褐/暗茶褐	細～粗砂、細礫
349	17-6	深鉢	平底?： ナデ/ナデ、指頭痕	淡橙茶褐/淡黄灰	良、均質：細砂、細礫少

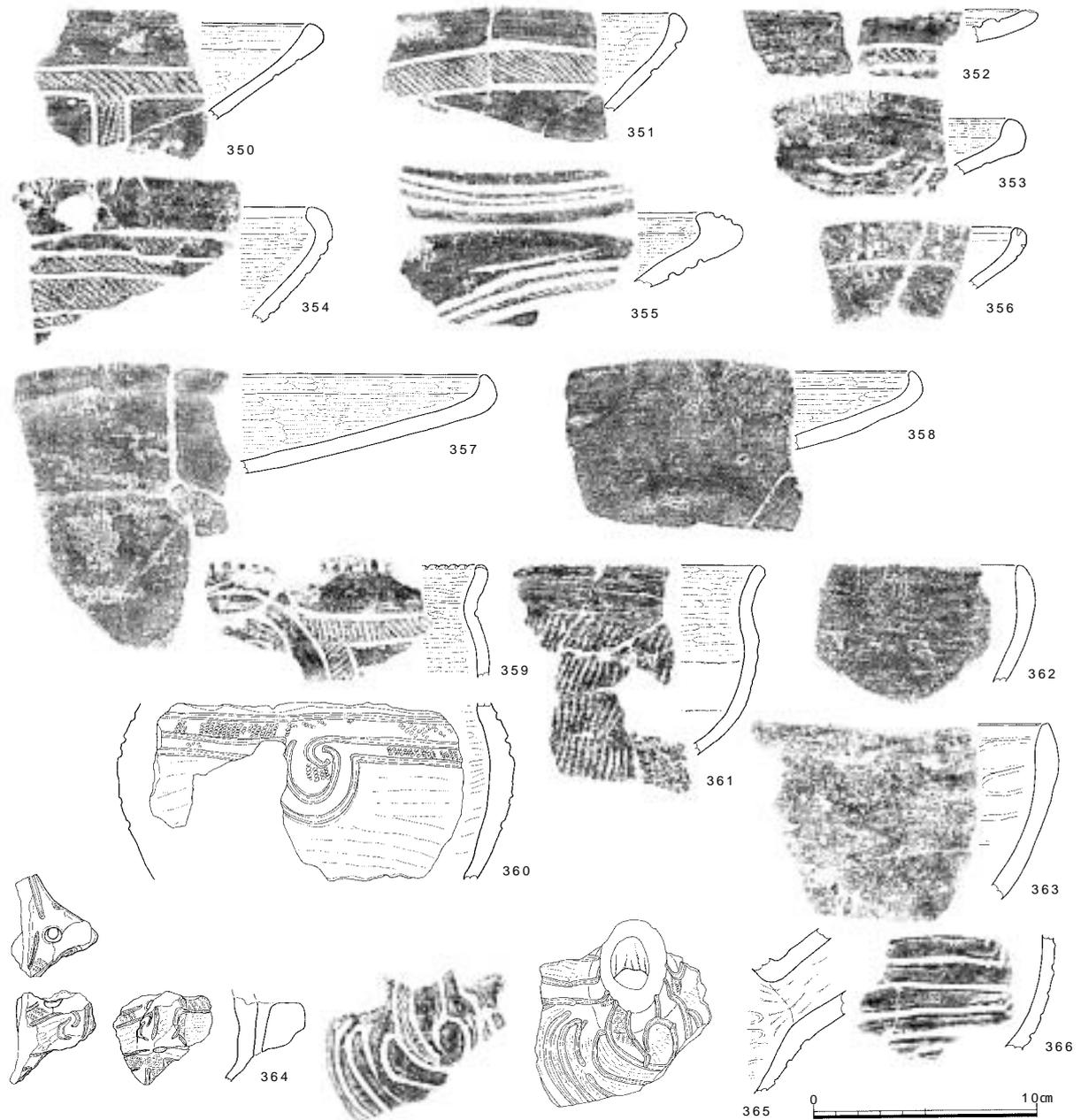
図111 13層出土土器7(縮尺1/3)

注口土器 365・366は管状の注口部が付く注口土器である。器面には多重多段の不整形な変形区画文が配される。区画文の内部に縄文を充填する部分もみられる。

底部 平底のもの(367～373)、凹底のもの(374～379)、高台状のもの(380～385)がある。器壁の立ち上がりの角度から器種を判断できるものには、深鉢底部(367～370・374～384)と浅鉢底部(371～373・385)がある。凹底のうち、底径が小さい一群(374～376)は後期中葉のもので、この土器群の中では新相に位置づけられる。

13～16層出土土器(図114～117 図版2・3・10～13・15)

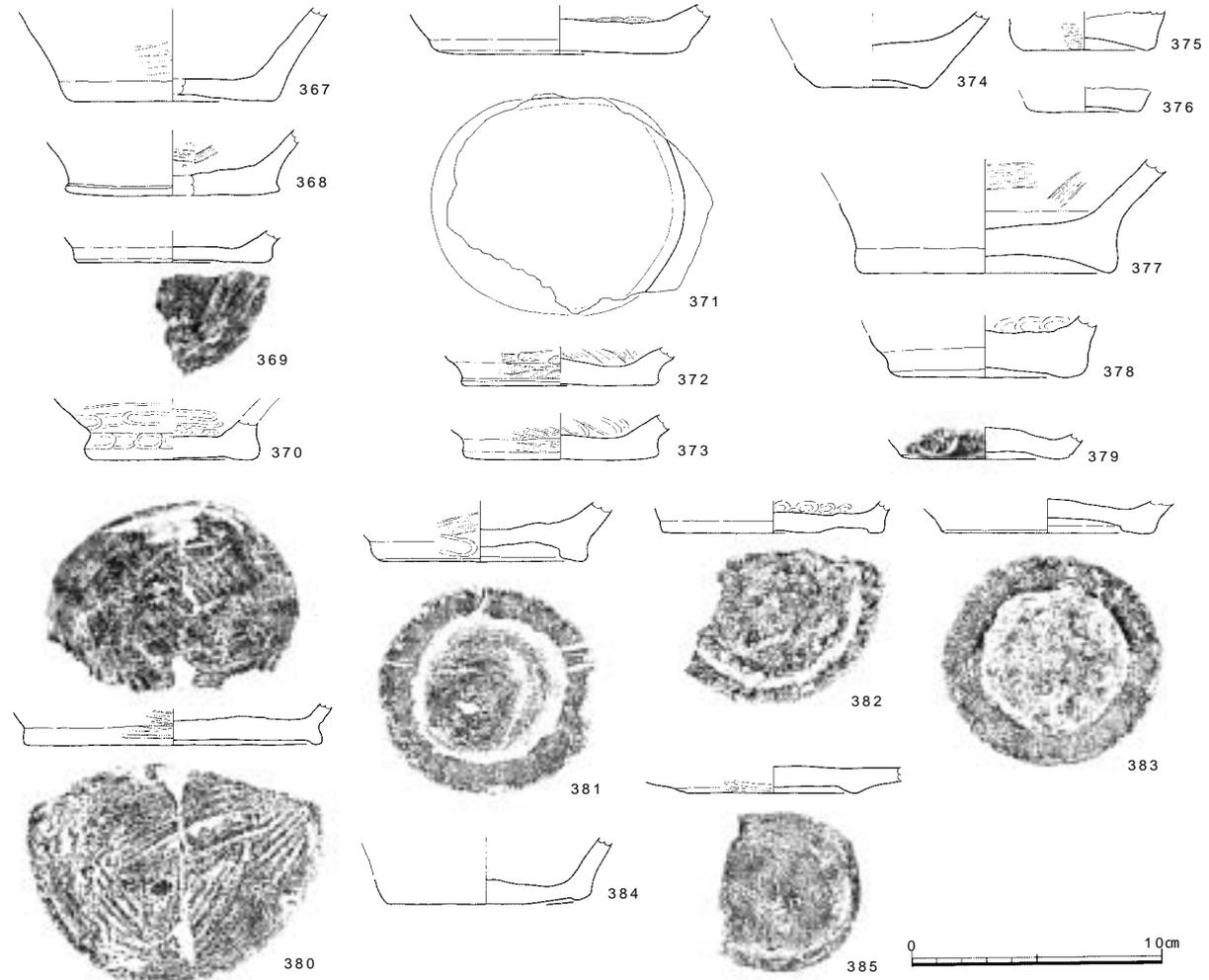
縄文時代後期の遺物を包含する13層以下の側溝等の掘削において、2～3層にまたがって掘削した際に出土し



番号	調査次-区	器種	器形の特徴：文様と調整(外/内)：法量	色調(外/内)	胎土
350	17-6	浅鉢	: 2本沈線磨消縄文(RL) ミガキ/ミガキ	灰~暗灰/淡黄灰	精良、均質: 細~粗砂
351	17-6	浅鉢	: 2本沈線磨消縄文(RL) ミガキ/ミガキ	茶褐~暗茶褐/灰茶褐	精良、均質: 稀に細礫
352	17-6	浅鉢	: ミガキ/2本沈線磨消縄文(RL) ナデ	暗茶褐/暗茶褐	均質、細~粗砂、細礫
353	17-6	浅鉢	□唇部肥厚: 弧状文、ミガキ/ミガキ	暗橙茶褐/橙茶褐	良: 細砂少
354	17-6	浅鉢	: 多条沈線、磨消縄文(RL) ミガキ/ミガキ	淡茶褐/淡灰茶褐	精良、均質: 微~細砂多、稀に金雲母
355	17-6	浅鉢	□唇部内面に肥厚: 3本沈線磨消縄文(RL) ミガキ/ミガキ	暗茶褐/暗褐	精良: 細~粗砂
356	17-6	浅鉢	: □唇部刺突文、沈線文、摩滅/摩滅	淡茶灰/淡灰	やや粗: 細~粗砂、細礫
357	17-6	浅鉢	: ミガキ/ミガキ	暗茶褐/暗茶褐	精良: 細砂
358	17-6	浅鉢	: ミガキ/ミガキ	暗茶褐/暗茶褐	精良: 細砂
359	17-6	鉢?	: □唇部直交刻み、2本沈線磨消縄文(RL) ミガキ/ミガキ	茶褐~灰褐/暗褐	やや粗: 細~粗砂多、細礫
360	17-6	鉢	: 渦巻文、3本沈線磨消縄文(RL) ナデ/ミガキ、ナデ: 胴部径17.8cm、1/3残	淡橙灰~灰/淡灰~灰	精良: 細~粗砂、稀に細礫
361	17-6	浅鉢	: 糸痕、縄文(RL) ミガキ、ナデ	暗橙茶褐/暗橙茶褐	良: 細砂
362	17-6	浅鉢	: 糸痕、ナデ/ナデ	橙茶褐/暗茶褐	やや粗: 細~粗砂、細礫
363	17-6	鉢	: 摩滅/ナデ	赤茶褐/明茶褐	やや粗: 細~粗砂多、細礫
364	17-6	双耳壺	上下の貫通孔: 鈎状の沈線文、ミガキ/ナデ	暗茶褐/暗茶褐	良: 細~粗砂、細礫
365	17-6	注口土器	: 多条の沈線文、磨消縄文(RL) ミガキ/ナデ	暗茶褐~暗褐/灰茶褐	やや粗: 細~粗砂、稀に細礫
366	17-6	注口土器	: 多条の沈線文、ミガキ/ナデ	暗茶褐~暗褐/灰茶褐	やや粗: 細~粗砂、稀に細礫

図112 13層出土土器8(縮尺1/3)

調査の記録

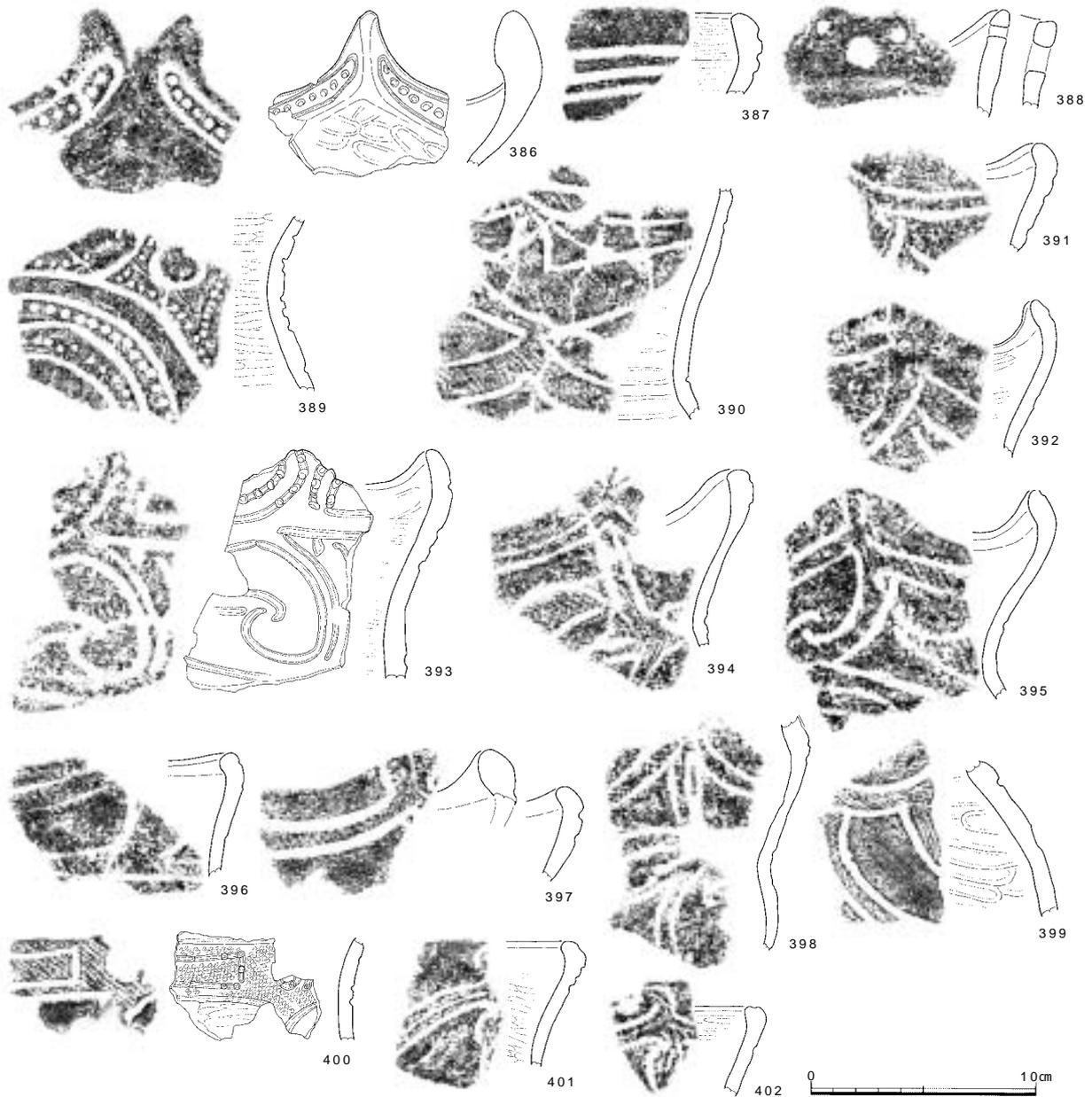


番号	調査次 - 区	器種	器形の特徴：文様と調整（外/内）：法量	色調（外/内）	胎土
367	17 - 6	深鉢	平底：糸痕/ナデ：底径8.0cm	明橙褐/明橙褐	粗：細～粗砂、細礫多
368	17 - 6	深鉢	平底：ナデ/糸痕後ナデ：底径7.0cm、1/5残	橙茶褐/明茶褐	細砂、細礫少
369	17 - 6	深鉢	平底：ナデ/ナデ、指頭痕	暗橙褐/淡灰橙	良：細～粗砂
370	17 - 6	深鉢	平底：ナデ、指頭痕/ナデ、指頭痕：底径6.4cm	淡赤褐/淡黄褐	やや粗：細礫
371	17 - 6	深鉢	平底、楕円形：摩滅/指頭痕：底径9.0cm、3/4残	淡黄白/灰	粗：細～粗砂、細礫多
372	17 - 6	浅鉢？	平底：糸痕、ナデ/糸痕：底径7.6cm	淡黄灰/淡灰白	良：微～細砂
373	17 - 6	浅鉢	1/4残：糸痕、ナデ/ナデ：底径7.6cm、1/4残	淡灰白/淡灰白	良、均質：微～細砂、稀に細礫
374	17 - 6	深鉢	凹底：ナデ/ナデ：底径4.3cm	明橙褐/暗茶褐	細～粗砂、細礫多
375	17 - 6	深鉢	凹底：ナデ/：底径4.9cm、1/1残	橙茶褐/茶褐	細～粗砂多
376	17 - 6	深鉢	凹底：ナデ/：底径4.0cm、1/1残	明橙茶褐/茶褐	細～粗砂多、細礫多
377	17 - 6	深鉢	凹底：ナデ/ナデ：底径10.0cm、1/1残	暗茶褐/暗茶褐	良：細～粗砂、細礫
378	17 - 6	深鉢	凹底：ナデ/ナデ、指頭痕：底径6.6cm	明橙茶褐/暗黄茶褐	やや粗：細～粗砂、細礫
379	17 - 6	鉢？	凹底：沈線文、磨消縄文（RL）/ナデ/ナデ、指頭痕：底径6.2cm	淡黄灰/淡橙灰	良：細～粗砂
380	17 - 6	深鉢	高台状：糸痕/糸痕：底径11.4cm、2/3残	淡黄橙褐/暗灰褐	細～粗砂、細礫
381	17 - 6	鉢？	高台状：糸痕後ナデ/ナデ、指頭痕：底径8.0cm、1/1残	淡黄橙/淡灰茶褐	良：細～粗砂
382	17 - 6	深鉢	高台状：ナデ/ナデ、指頭痕：底径8.8cm、1/3残	橙褐/淡黄灰褐	細～粗砂
383	17 - 6	深鉢	高台状：ナデ/ナデ：底径8.0cm、1/1残	暗茶褐/淡茶褐	粗：細～粗砂多、細礫多
384	17 - 6	深鉢	高台状：ナデ/ナデ、指頭痕：底径7.5cm	明橙褐/暗茶褐	細～粗砂多、細礫
385	17 - 6	浅鉢	高台状：底部ミガキ、糸痕/ミガキ：底径6.6cm	茶褐/淡灰茶褐	良：細～粗砂、細礫

図113 13層出土土器9（縮尺1/3）

たことにより、本来の包含層の帰属が曖昧になったものがある。これらの中には大型の破片や型式学的な分析に有意な破片が含まれていたため、全体で1,420点出土したもののうち42点を図化している。386～409は有文深鉢、410～415は無文深鉢、416～420は底部片、421～426は浅鉢・鉢、427は双耳壺の把手である。

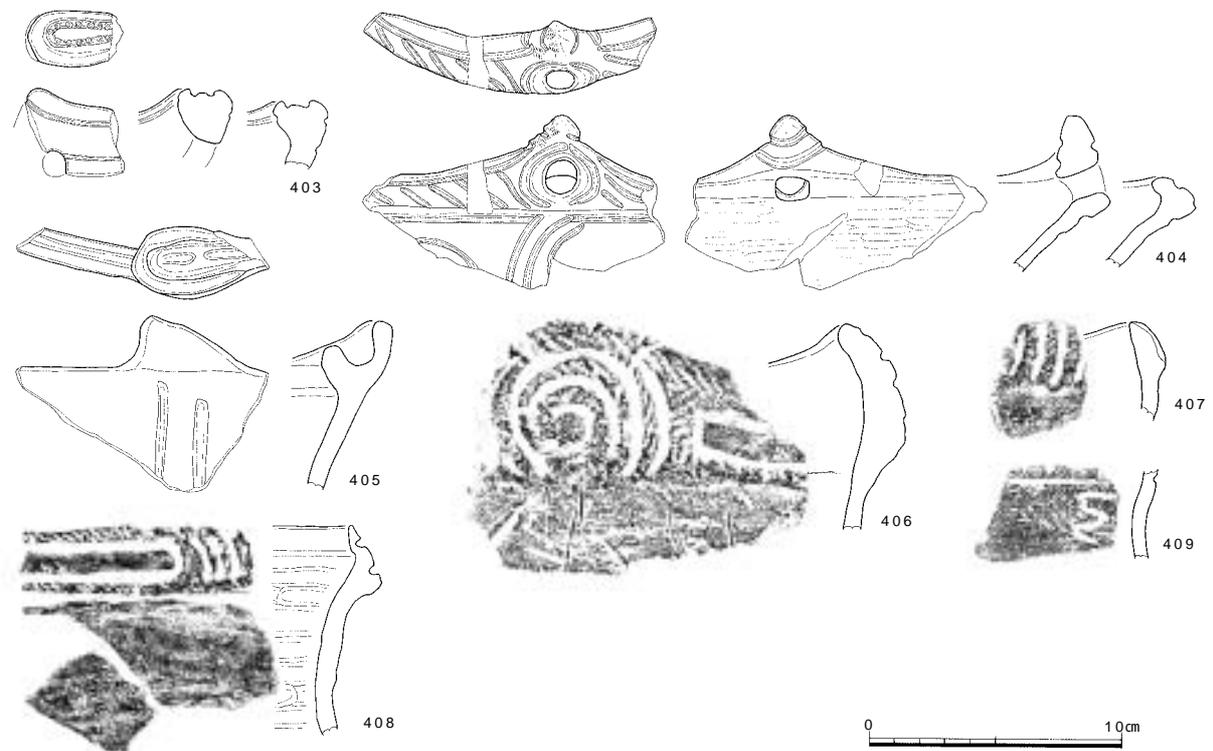
有文深鉢 全形をうかがいしることができるものはないが、393～395などから、波状口縁で頸部がくびれ胴部にふくらみを有する器形を復原できる。口縁部の形状は、波状口縁を呈するもの、平縁のものに大別できる。



番号	調査次 - 区	器種	器形の特徴：文様と調整（外/内）	色調（外/内）	胎土
386	17-1	深鉢	波状口縁：杵状区画内に刺突文、ナデ/ナデ	茶褐/暗茶褐	良、均質：細砂多、稀に細礫
387	22	深鉢	：太い沈線文、沈線間縄文帯縄文(RL)、磨消縄文、ナデ/ミガキ	淡黄灰/淡橙茶褐	精良：微 - 細砂、稀に細礫
388	17-4	深鉢?	波状口縁、穿孔 3：口唇上縁縄文(RL)、ナデ/摩滅	赤橙褐/橙褐 - 黄褐	やや粗：細 - 粗砂多、細礫
389	17-2	深鉢	：円文、幅広連弧文、刺突文、ナデ/ミガキ	暗茶褐/暗茶褐 - 暗褐	精良、均質：微 - 細砂、稀に細礫
390	17-5	深鉢	：2本沈線磨消縄文(RL)、ナデ?/ナデ	淡茶褐 - 茶橙/暗灰褐	やや粗：細砂多
391	17-6	深鉢	波状口縁：2本沈線、摩滅/ミガキ	淡橙灰褐/灰褐	粗：粗砂多、細礫多
392	17-6	深鉢	波状口縁：2本沈線、摩滅/ミガキ	明橙褐/灰黄褐	粗：細 - 粗砂多、細礫多
393	17-5	深鉢	波状口縁：2本沈線、J字文、沈線内刺突、磨消縄文?、摩滅/条痕後ナデ	乳白 - 淡橙白/明橙褐	良、均質：細 - 粗砂、細礫
394	17-5	深鉢	波状口縁：2本沈線磨消縄文(RL)、ミガキ?、摩滅/摩滅	暗赤褐 - 暗茶褐/暗褐	粗：粗砂多、細礫多
395	17-6	深鉢	波状口縁：J字文、2本沈線磨消縄文(RL)、ミガキ/摩滅	淡橙褐 - 灰褐/淡灰褐 - 茶褐	粗：粗砂多、細礫多
396	17-6	深鉢	波状口縁：2本沈線磨消縄文(RL)、ミガキ/摩滅	明橙褐/灰褐	粗：粗砂多、細礫
397	17-5?	深鉢	波状口縁：2本沈線磨消縄文?、摩滅、条痕/摩滅	淡黄白 - 暗灰褐/淡黄白 - 灰 - 暗灰	やや粗：細 - 粗砂多、稀に細礫
398	17-5	深鉢	：2本沈線磨消縄文(RL)?、摩滅/摩滅	赤褐 - 暗茶褐/暗茶褐 - 暗褐	粗：粗砂多
399	17-4	深鉢	：2本沈線磨消縄文(RL)、ミガキ/ナデ	淡黄橙白/暗灰褐	良、均質：細砂多
400	17-5	深鉢	：幅広縄文帯内に杵状区画、磨消縄文(RL)、ミガキ/摩滅	黒褐/淡灰白	精良、均質：微 - 細砂
401	17-6	深鉢	：3本沈線磨消縄文(RL)、ミガキ、摩滅/ミガキ	淡灰褐/灰褐	精良、均質：微 - 細砂、稀に細礫
402	17-6	深鉢	：3本沈線磨消縄文(RL)?、摩滅/ミガキ	淡灰褐/暗灰茶褐	精良、均質：微 - 細砂、稀に細礫

図114 13~16層出土土器 1 (縮尺 1/3)

調査の記録

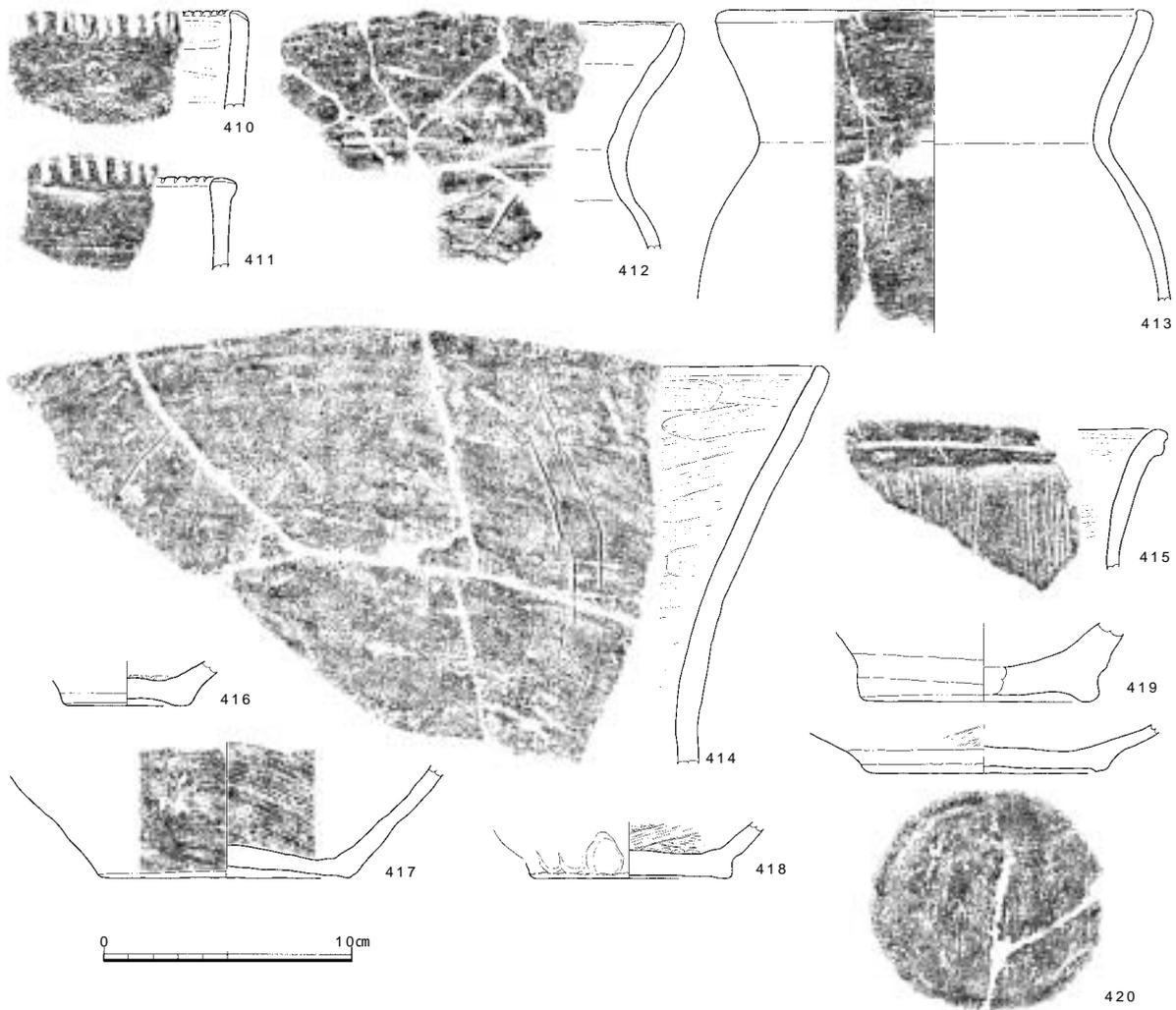


番号	調査次-区	器種	器形の特徴：文様と調整（外/内）	色調（外/内）	胎土
403	17-4	深鉢	耳状突起、穿孔：突起内に刺突伴う沈線、摩滅/摩滅	茶褐/暗褐	粗：細～粗砂多、細礫多
404	17-2	深鉢	波状口縁、小突起、波頂下円孔：3本沈線、円文、斜行沈線文、磨消縄文？、摩滅、縄文（RL）ミガキ	橙褐/橙褐～暗橙褐	精良、均質：稀に粗砂
405	17-1	深鉢	耳状突起：口唇端部に沈線、突起から垂下する沈線文、摩滅/ナデ	淡黄白～茶褐/灰茶褐～暗褐	やや粗：粗砂～細礫多
406	22	深鉢	波状口縁、顎状口縁：円文、連弧文、杵状区画文、口縁部全面縄文（RL）、ナデ/ナデ	淡黄橙灰/明橙茶褐	やや粗：細～粗砂多、細礫多
407	22	深鉢	顎状口縁：（対向）連弧文、口縁部全体に縄文（RL）、ナデ/摩滅	暗橙茶褐/暗灰茶褐	細～粗砂、稀に細礫
408	17-5	深鉢	顎状口縁：連弧文、杵状区画、口縁部上縁・下端に縄文（RL）、杵状区画内ナデ、外面ナデ/ナデ	淡黄白～暗灰/淡黄白～暗灰	精良、均質：微～細砂、稀に粗砂
409	22	深鉢	：縦位に蛇行する沈線文、摩滅/摩滅	暗茶褐/暗灰	細～粗砂、細礫

図115 13～16層出土土器2（縮尺1/3）

386は細い山形の波頂部である。両脇は面をなし、刺突を充填した方形区画文を配する。389は湾曲する胴部片である。最もくびれる部分に円文を配し、それを囲む内反りの菱形区画文と刺突列、さらに外側に多重の曲線文と沈線間を充填する刺突列を配するものである。386・388はモチーフや色調、胎土が類似しているうえ、出土地点も近接しており、同一個体と考えられる。388は台形状の波頂部片で、角に当たる部分はやや高まり小穿孔を施し、中央にも穿孔を施す。口唇端部には縄文を施す。391～395は波状口縁深鉢の口縁部で、いずれも波頂下に2本沈線磨消縄文帯で構成されるJ字文を配す。393は器表面の摩滅で縄文を確認できないが、2本沈線による磨消縄文土器で、波頂から展開する口縁部文様帯の沈線には刺突が加えられる。J字文を構成する沈線の末端のみ鉤状に入り組み、交差する部分での切り合いはみられない。400は2本沈線で縁取られた磨消縄文帯の内部に杵状区画文を描く。沈線の端部や中間点に刺突を加える。磨消縄文帯の縄文はほとんどがRLである。

口縁部に突起を有するもの（403～405）では、耳状突起を有するもの（403・405）、波頂部に先端が尖る小突起がつくもの（404）がある。403は耳状突起の内部の窪みを縁取る区画沈線文内に刺突を加える。405も耳状突起で突起下に垂下する2条の平行沈線文を描く。404は突起下に穿孔を有するもので、穿孔の周囲は隆帯状に器壁が盛り上がり、その外縁に区画沈線文が引かれる。口縁部の文様帯は口唇部を巡る1条の沈線と屈曲点との間に斜線を充填しており、口唇部に斜め方向の刻みを施す有文土器の文様が変化したものと考えられる。顎部には3本沈線による沈線文帯が確認される。「く」字状あるいは顎状口縁の一群（406～408）は口縁部に文様が集約され、円文や対向連弧文、杵状区画文が描かれる。409は横走する沈線下に縦位に蛇行する沈線文を描く。



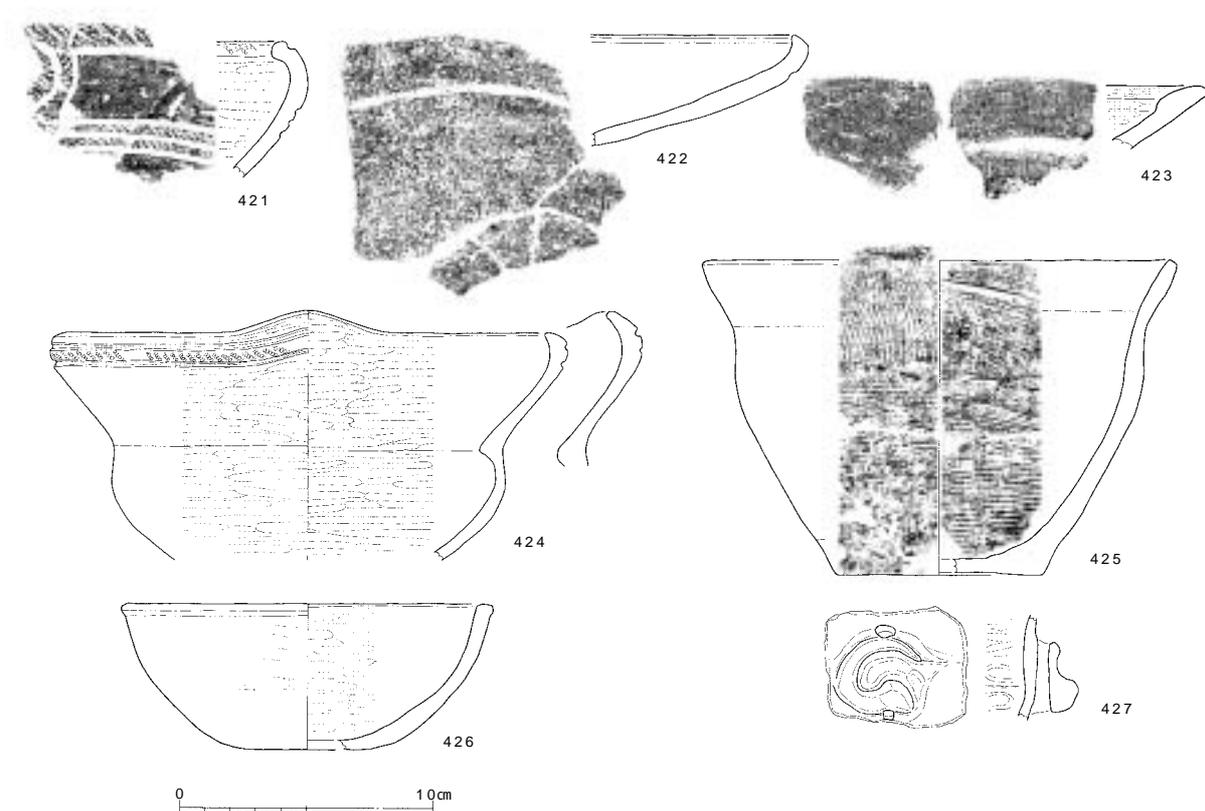
番号	調査次 - 区	器種	器形の特徴：文様と調整（外/内）：法量	色調（外/内）	胎土
410	17 - 6	深鉢	：口唇部斜め刻み、ナデ/ナデ	黄橙～淡黄橙/明黄橙～淡黄白	粗：細～粗砂多、細礫多
411	22	深鉢	：口唇部斜め刻み、ナデ/ナデ	暗灰茶褐/淡灰白	良：細～粗砂
412	17 - 5	深鉢	：ナデ/ナデ	暗褐～明茶褐/茶褐～暗茶褐	やや粗：粗砂多、細礫多
413	17 - 6	深鉢	：条痕/ナデ：口径16.4cm、1/3残	淡黄橙褐/淡黄灰白	細～粗砂、細礫少
414	17	深鉢	：条痕/条痕	淡黄灰～灰/明黄褐	粗：細～粗砂多、細礫
415	22 - S	深鉢	口唇部外方に肥厚：口唇端部に沈線、条痕/ミガキ	淡黄灰茶褐/淡黄灰茶褐	良：細砂
416	22 - S	深鉢	凹底：ナデ/ナデ、指頭痕：底径4.8cm	灰橙茶褐/赤灰茶褐	細砂、稀に細礫
417	17 - 5	深鉢	平底：条痕/条痕：底径10.0cm	淡灰白/黄褐	良：細砂
418	17 - 4	深鉢	平底：指頭痕、ナデ/ナデ、条痕：底径7.8cm	暗橙褐/暗茶褐	やや粗：細～粗砂多、細礫
419	17 - 2	深鉢	高台状：ナデ/ナデ：底径8.6cm	淡黄橙褐/明黄褐	粗：細～粗砂多、細礫多
420	17 - 6	浅鉢	高台状：ナデ、条痕/ナデ：底径8.8cm、1/1残	黄橙褐/暗茶褐	やや粗：細～粗砂多、細礫

図116 13～16層出土土器3（縮尺1/3）

無文深鉢 外反する口縁から頸部にむかってくびれ、緩くふくらむ胴部をもつ深鉢（412・413）がある。口縁部への加飾では、口縁部に刻みを施すもの（410・411）がある。それらはいずれも、棒状工具による刻みで、口唇部に直交して刻む直刻タイプである。その他、外折した口縁端面に沈線を巡らせるもの（415）がある。

底部 凹底のもの（416・417）、平底のもの（418）、高台状のもの（419、420）がある。器壁の立ち上がりの角度から、深鉢底部（417～419）、浅鉢底部（416・420）に分離することができる。

浅鉢・鉢 口縁部が内湾するもの（421）、皿状のもの（422）、短い口縁部にくびれをもつもの（425）、頸部内面に段をもつもの（424）、口縁部内面を肥厚するもの（423）がある。421は3本沈線磨消縄文帯の文様帯を有する磨消縄文土器である。口唇部には外面の沈線から内面の屈曲点の間に縄文を施す。424は口縁部に低い山形の隆



番号	調査次 - 区	器種	器形の特徴：文様と調整(外/内)：法量	色調(外/内)	胎土
421	17 - 6	浅鉢	：円文、3本沈線磨消縄文(RL) ミガキ/ミガキ	暗褐/暗褐 - 黒褐	精良、均質：細 - 粗砂、稀に細礫
422	17 - 2	浅鉢	：沈線文、摩滅/摩滅	明橙褐/暗茶褐	粗：細 - 粗砂多
423	22	浅鉢	口唇部内面に肥厚、有段：ナデ?/ミガキ	淡黄灰茶褐/淡黄灰	細 - 粗砂
424	17 - 6	浅鉢	内面屈曲部肥厚：2本沈線磨消縄文(RL) ミガキ/ミガキ ：口径19.0cm、1/3残	茶褐 - 暗褐/暗茶褐 - 暗褐	精良、均質：微 - 細砂、金雲母、稀に細礫
425	17 - 4	鉢	平底：糸痕、ナデ/糸痕：口径19.0cm、底径、8.2cm、1/4残	淡黄白/淡灰白 - 灰	粗：粗砂多、細礫
426	22	浅鉢	：糸痕後ナデ/ミガキ：口径14.0cm	暗茶褐/暗茶褐	細 - 粗砂、細礫
427	17 - 4	双耳壺?	つまみ状突起、上下の貫通孔：ナデ/ナデ、ミガキ	赤褐/赤褐	精良、均質：微 - 細砂、稀に細礫

図117 13～16層出土土器4(縮尺1/3)

起がみられるもので、口縁部を巡る2本の沈線文間に縄文を充填する。器面は内外面とも丁寧なミガキによって仕上げられる。425は器面を粗い糸痕で調整する。

双耳壺 427はつまみ状の把手である。渦巻形に粘土紐を巻き上げており、把手の上方より下方の方が大きく隆起する。上下方向の貫通孔がある。

2) 石器(図118～133 図版22～28)

石器は13～15層から合計177点が出土した。層毎の内訳は15層9点、14・15層8点、14層75点、13・14層36点、13層49点である。

15層出土石器(図118 図版23・27・28)

スクレイパー 1点出土した。S71はサヌカイト製で、自然面の残る横長剥片を素材とし、下縁に浅い角度で丁寧な両面調整を施し、鋭利な直刃をつくり出している。刃部には使用によると思われる摩滅部分が観察できる。左側縁には抉りを意図した剥離調整が確認できる。

楔形石器 1点出土した。S72はサヌカイト製の大型品である。上縁に階段状の剥離が認められる。また、右側縁には細かい両面調整が認められることから、スクレイパーからの転用であるかもしれない。

石皿 1点出土した。S73は流紋岩の扁平な礫を打ち欠いて形を整えて利用している。両面中央に敲打痕、線状痕がそれぞれ認められ、台石としての用途が主であったようである。

石錘 5点出土した(S74~78)。いずれも円礫の両端を打ち欠くものである。S75は礫の短軸両端を打ち欠く。

石棒? 1点出土した(S79)。玄武岩質緑色片岩製で、表面に面取りを意識した加工痕が残る。

14・15層出土石器(図119 図版23・26・28)

スクレイパー 1点出土した。S80はサヌカイト製で横長剥片を素材とし、側縁からの剥離で整形した後下縁に両面調整を施し、直刃をつくり出している。

砥石 1点出土した。S81は粘板岩製で、主面と側面に研磨による線状痕が観察できる。

叩石 1点出土した。S82は石英安山岩製で、扁平な礫を半裁して利用する。下端に敲打痕が明瞭に残る。

石錘 5点出土した(S83~87)。すべて円礫の両端を打ち欠いたものであるが、長軸両端を打ち欠くもの(S83~85)と短軸両端を打ち欠くもの(S86・87)がある。

14層出土石器(図120~126 図版22~28)

石鏃 サヌカイト製石鏃が11点出土した(S88~98)。内、1点は未成品(S98)、1点は先端部のみ残存する(S97)。形状の判明するものはすべて凹基式である。大型で脚部が幅広のもの(S88・92)、小型で脚部が幅広のもの(S89~91・93・96)、小型で脚部が尖り細長のもの(S94・95)などに大別することができる。S98は素材面を多く残し、裏面の側縁に調整を施しているが、形状が不定形で未成品と判断される。

石錐 2点出土した(S100・101)。いずれもサヌカイト製である。S100は側縁に両面から細かい調整を行い整形し錐部分のつくり出しを行なっている。握り部分は扁平である。S101は素材となる剥片剥離時の縁辺を利用しつつ右側縁下端に調整を施し、錐部分をつくり出している。握り部分は扁平である。

石匙 未成品が1点出土した。S99は上下2ヶ所に抉りを有するが、下縁に自然面が残る点や右側面の折れ面から判断して、製作途中で放棄された未成品の可能性が高い。

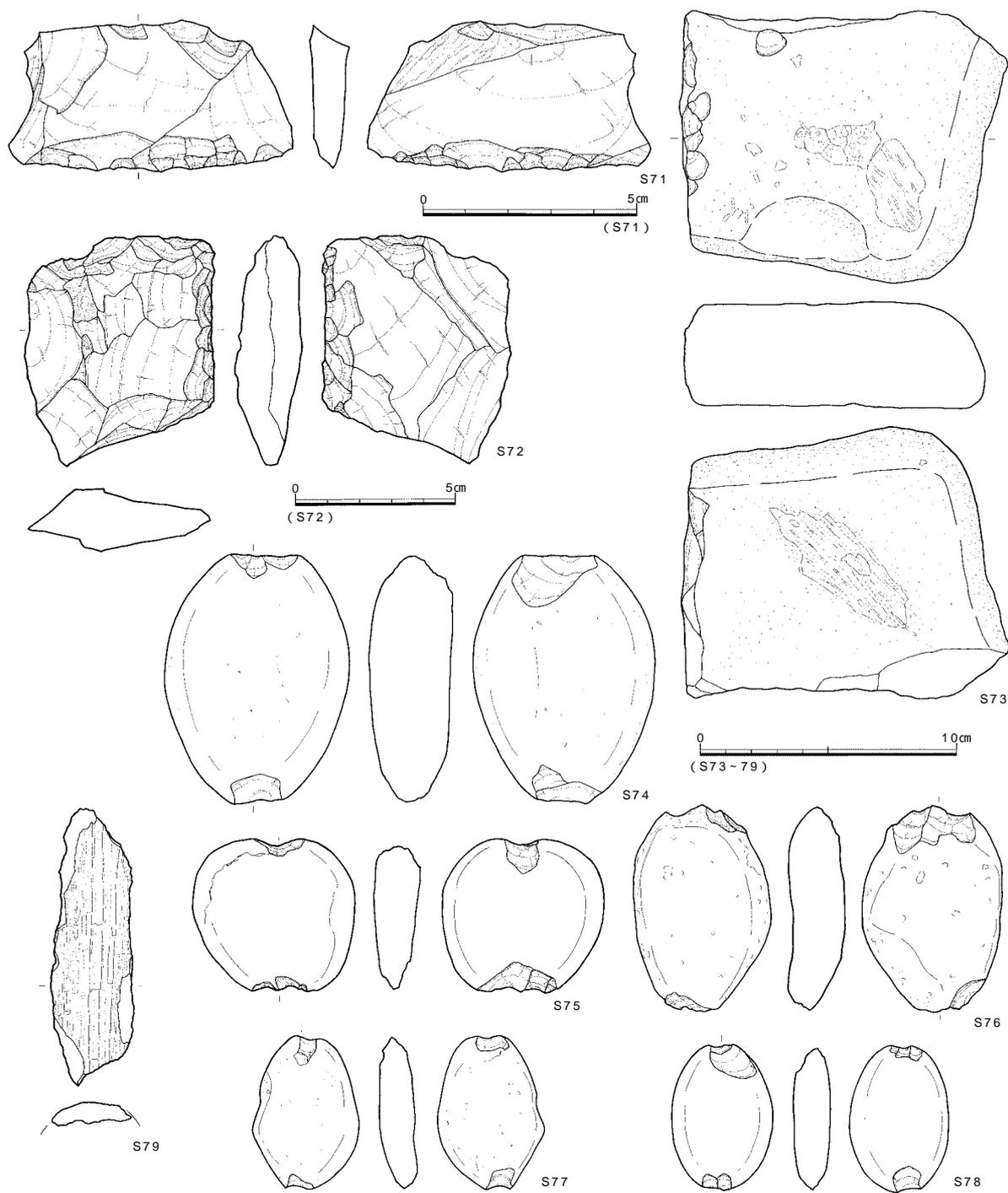
石鋏 2点が出土した(S102・109)。S102は細粒砂岩製で、扁平な円礫を素材とし、その周縁を調整するが非常に粗く不規則である。一部、素材面を利用しつつ弧状の両刃をつくり出す。一方、S109はサヌカイト製で、形の整った石鋏である。板状素材に周縁部から連続的に剥離し形状を整えた後に、周縁に両面から丁寧な調整を行い仕上げている。弧状の両刃で、下端には使用による摩滅が認められる。基部側の両側縁には不明瞭ながら抉りが認められ、柄と結合する部位と考えられる。ただ、緊縛痕などは認められない。

スクレイパー 6点出土した(S103~108)。サヌカイト製5点、細粒砂岩製1点である。自然面を残すものが多く、石理にそって剥離した薄い剥片を素材としたものが主である。S103・106は横長剥片を素材とし、下縁に浅い角度で両面調整を行い鋭い刃部をつくり出している。S103は直刃でS106は弧状の刃部である。S106は上端にも調整を加えている。いずれも刃部に摩滅部分が観察でき、使用によるものと判断される。一方、S104・105・107は不定形な剥片を利用し、その下縁に両面調整を行う。いずれも素材面を残す。

加工痕のある剥片 2点出土した(S110・111)。いずれもサヌカイト製である。

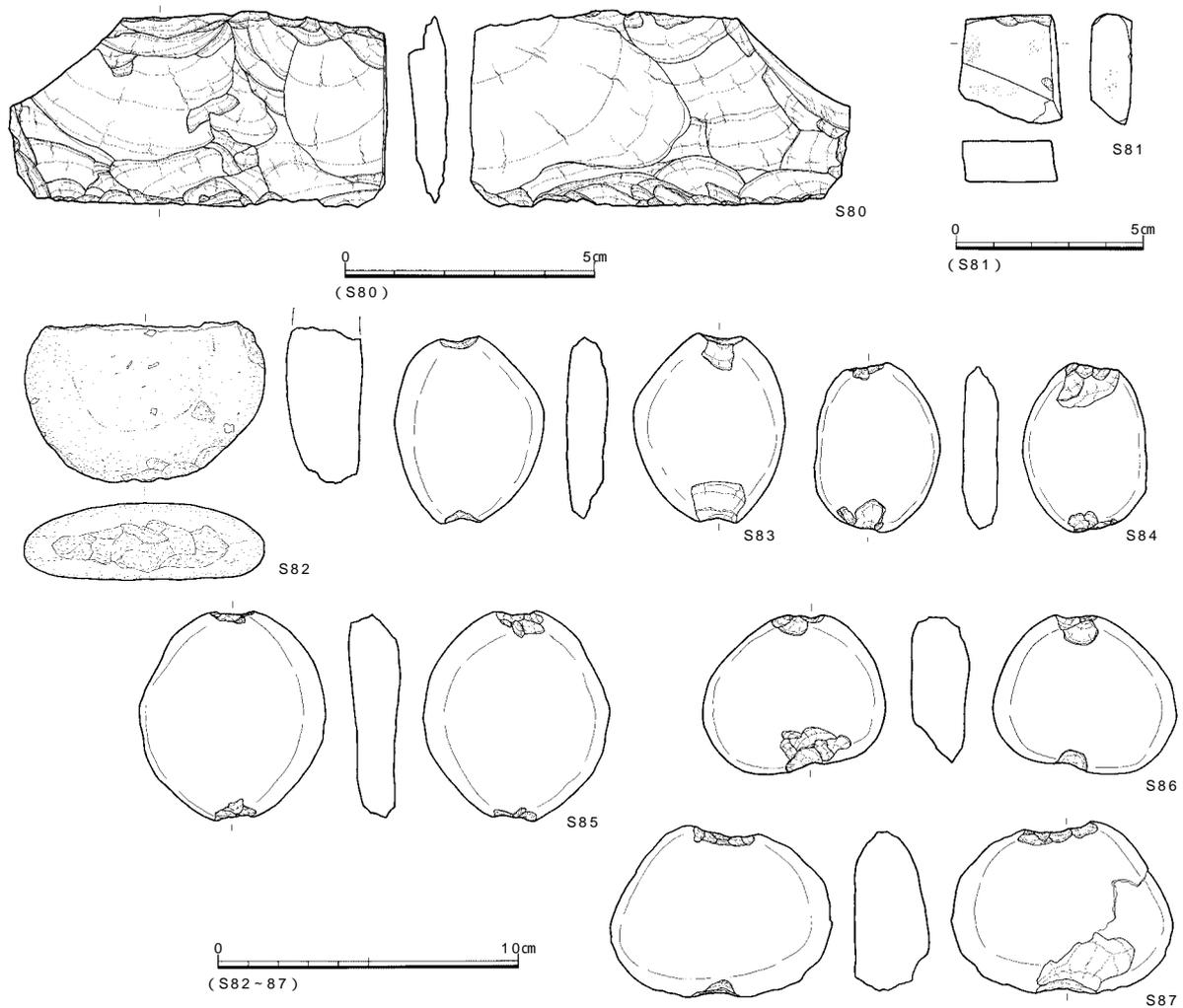
楔形石器 9点出土した(S112~120)。いずれもサヌカイト製である。小型品と石核状で大型品に大別可能である。いずれも、上下縁もしくは下縁に階段状の剥離を有する点が特徴である。S113は右側面に剪断面があり、上下縁は平行する。S119は大型品で石核として利用された可能性があり、S120も同様である。ただ、いずれも上下縁に段階状の剥離が認められ、断面が薄い凸レンズ形である。

石核 10点出土した(S121~130)。いずれもサヌカイト製である。大きく、立方体状の角礫を素材とするもの(S124・127・128)と厚みのある板状の素材を利用するもの(S122・123・125・126・129・130)にわけることができる。S124は自然面を多く残し、角礫に打面を設け剥片を剥離する。S129は厚みのある剥片を素材とし、打面を転位しつつ小剥片を連続的に剥離している。剥離面が曲面を呈するものも多い。S126・130は板状剥片を素材とし、厚みのある縦長剥片や薄い不定形の剥片などを取っている。板状素材を利用するものは長さ7~8cm以下のものが多く、かなり小さくなるまで利用されていたようである。S125は下縁から右側縁にかけて微細な



番号	調査次 - 区	器種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石材	特徴
S71	17 - 5	スクレイパー	3.55	6.60	1.05	25.5	サヌカイト	自然面が一部残る。下辺に丁寧な両面調整。
S72	17 - 4	楔形石器	7.20	5.90	1.93	84.8	サヌカイト	大型品。右側縁に両面調整。
S73	17 - 4	石皿	12.80	12.65	4.20	984.7	流紋岩	両面中央に敲打痕と線状痕。
S74	17 - 4	石錘	9.80	7.20	3.15	315.5	流紋岩	大型品。円盤の上下端に打ち欠き。
S75	17 - 4	石錘	6.00	6.30	1.79	94.0	流紋岩	円盤の上下端に打ち欠き。
S76	17 - 4	石錘	8.10	5.40	2.20	120.7	流紋岩	円盤の上下端に打ち欠き。
S77	17 - 4	石錘	6.00	4.20	1.50	45.9	流紋岩	小型品。円盤の上下端に打ち欠き。
S78	17 - 4	石錘	5.70	3.90	1.50	47.4	流紋岩	円盤の上下端に打ち欠き。
S79	17 - 1	石棒片?	(10.90)	(3.25)	(0.90)	(46.2)	緑色片岩	表面に面取りをしたような加工痕。

図118 15層出土石器 (縮尺 2/3・1/2・2/5)



番号	調査次-区	器種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石材	特徴
S80	22-1	スクレイパー	3.83	7.56	6.15	28.9	サヌカイト	下縁に両面調整。
S81	17-6	砥石	2.90	2.60	1.10	12.3	粘板岩	主面と側面に研磨による線状痕。
S82	17-2	叩石	(5.40)	8.00	2.60	(167.5)	石英安山岩	下端に明瞭な敲打痕。
S83	17-3	石錘	6.30	5.05	1.50	71.6	流紋岩質凝灰岩	円礫の上下端に打ち欠き。
S84	17-3	石錘	5.66	4.20	1.19	40.2	流紋岩	円礫の上下端に打ち欠き。
S85	17-4	石錘	7.03	6.18	1.83	99.9	流紋岩(風化進行)	円礫の上下端に打ち欠き。
S86	17-1	石錘	5.45	6.03	1.99	89.3	石英閃緑岩	円礫短軸の上下端(短軸)に打ち欠き。
S87	17-1	石錘	5.76	7.37	2.64	137.1	花崗岩	円礫の上下端(短軸)に打ち欠き。

図119 14・15層出土石器(縮尺2/3・1/2・2/5)

剥離があり、スクレイパーへの転用が図られた可能性もある。S121は3面に折れ面を持つ。

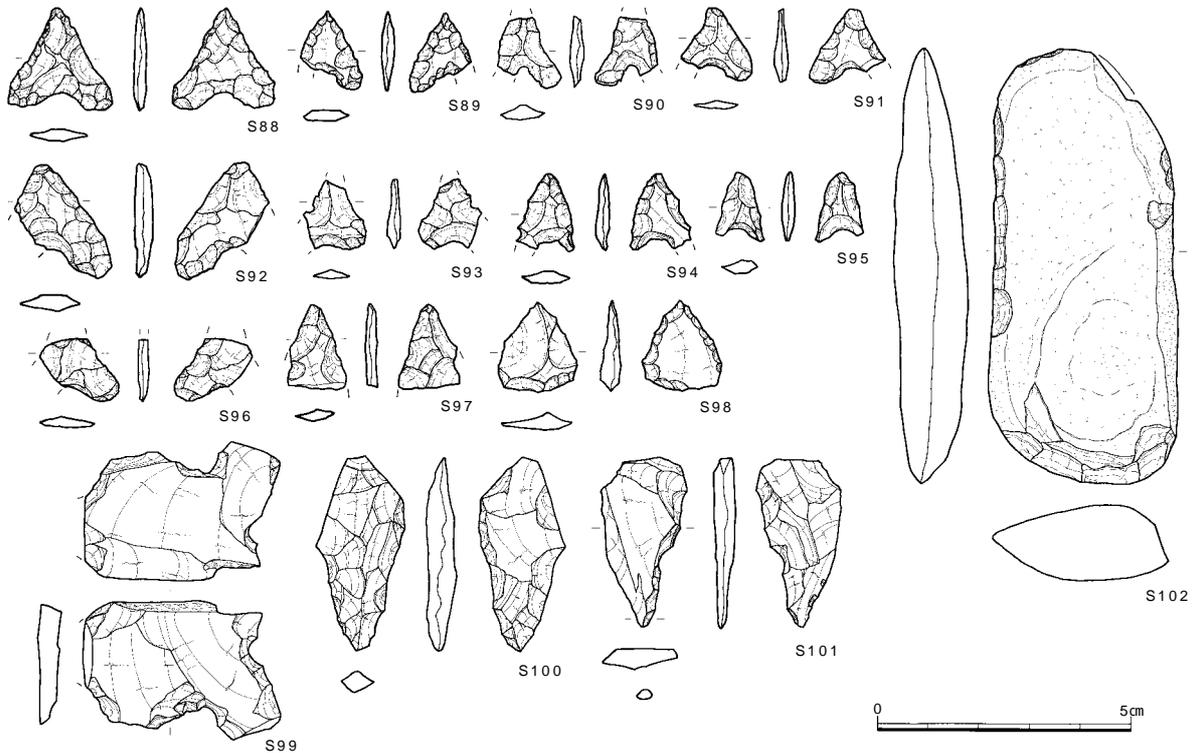
磨製石斧 閃緑岩製の乳棒状石斧の基部片が1点出土した(S131)。全面に敲打痕が残るが、特に基部先端に顕著である。柄との結合部位付近から折れており、使用時の折損の可能性はある。

叩石 3点出土した(S134~136)。S134は流紋岩質凝灰岩製で、下端部に敲打痕が残るが、欠損する。S135は砂粒花崗岩の礫を打ち割って、使用部位が尖るように整形している。そこに明瞭な敲打痕が残る。S136は石英安山岩質凝灰岩製で杵状の礫の上下端に敲打痕が認められる。打ち叩く作業に適した形状、重さである。

磨石 1点出土した。S133は流紋岩の円礫を利用し、表面中央に線状痕が明瞭に残る。

凹石 2点出土した(S132・137)。いずれも閃緑岩の円礫を利用し、片面もしくは両面の中央に敲打痕が残る。

石錘 26点出土した(S138~163)。円礫もしくは扁平な礫の長軸両端を打ち欠くものが大部分で、大きさによって3群程度に分けることができる。S142は小型で円礫の両端を打ち欠く。S163は大型品で、隅丸方形の礫の両



番号	調査次・区	器種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石材	特徴
S88	17-4	石鏃	2.01	2.01	0.23	0.7	サヌカイト	凹基式。挟りは明瞭で脚部は幅広。長幅比は小さい。
S89	17-5	石鏃	1.55	(1.20)	0.25	(0.3)	サヌカイト	凹基式。脚部は幅広。長幅比は小さい。
S90	17-4	石鏃	(1.40)	(1.30)	(0.30)	(0.3)	サヌカイト	凹基式。挟りは明瞭。先端部、脚の一部欠損。
S91	17-4	石鏃	1.42	(1.43)	0.27	(0.4)	サヌカイト	凹基式。挟りは明瞭で脚部は幅広。長幅比は小さい。
S92	17-7	石鏃	2.25	(1.90)	0.40	(1.2)	サヌカイト	凹基式。挟りは明瞭。脚の一部欠損。長幅比は小さい。
S93	17-5	石鏃	(1.40)	(1.25)	(0.25)	(0.3)	サヌカイト	凹基式。挟りは明瞭。脚の一部欠損。長幅比は小さい。
S94	17-4	石鏃	1.51	1.10	0.23	0.3	サヌカイト	凹基式。挟りは明瞭。脚部は尖る。長幅比は大きい。
S95	17-5	石鏃	1.35	0.95	0.25	0.3	サヌカイト	凹基式。挟りは明瞭。脚部は尖る。長幅比は大きい。
S96	17-4	石鏃	(1.20)	(1.50)	(0.20)	(0.4)	サヌカイト	凹基式。挟りは明瞭。先端部、脚の一部欠損。
S97	17-2	石鏃	(1.70)	(1.18)	0.21	(0.4)	サヌカイト	先端部のみ残存。
S98	17-4	石鏃未成品	1.81	1.58	0.34	0.9	サヌカイト	素材面を大きく残す。側縁に片面調整。
S99	17-4	石鏃未成品	2.70	3.90	0.55	6.6	サヌカイト	上下2ヶ所の挟り。下辺部に自然面。右側縁が折損。
S100	17-3	石鏃	3.80	1.70	0.60	3.2	サヌカイト	周縁に両面から調整し、下端に錐部分をつくり出す。
S101	17-5	石鏃	3.35	1.70	0.41	2.2	サヌカイト	右側縁下部に調整し、錐部分をつくり出す。
S102	17-5	石鏃	8.60	3.70	1.50	65.3	細粒砂岩	扁平な円礫の側縁を両面から粗く調整。

図120 14層出土石器1(縮尺2/3)

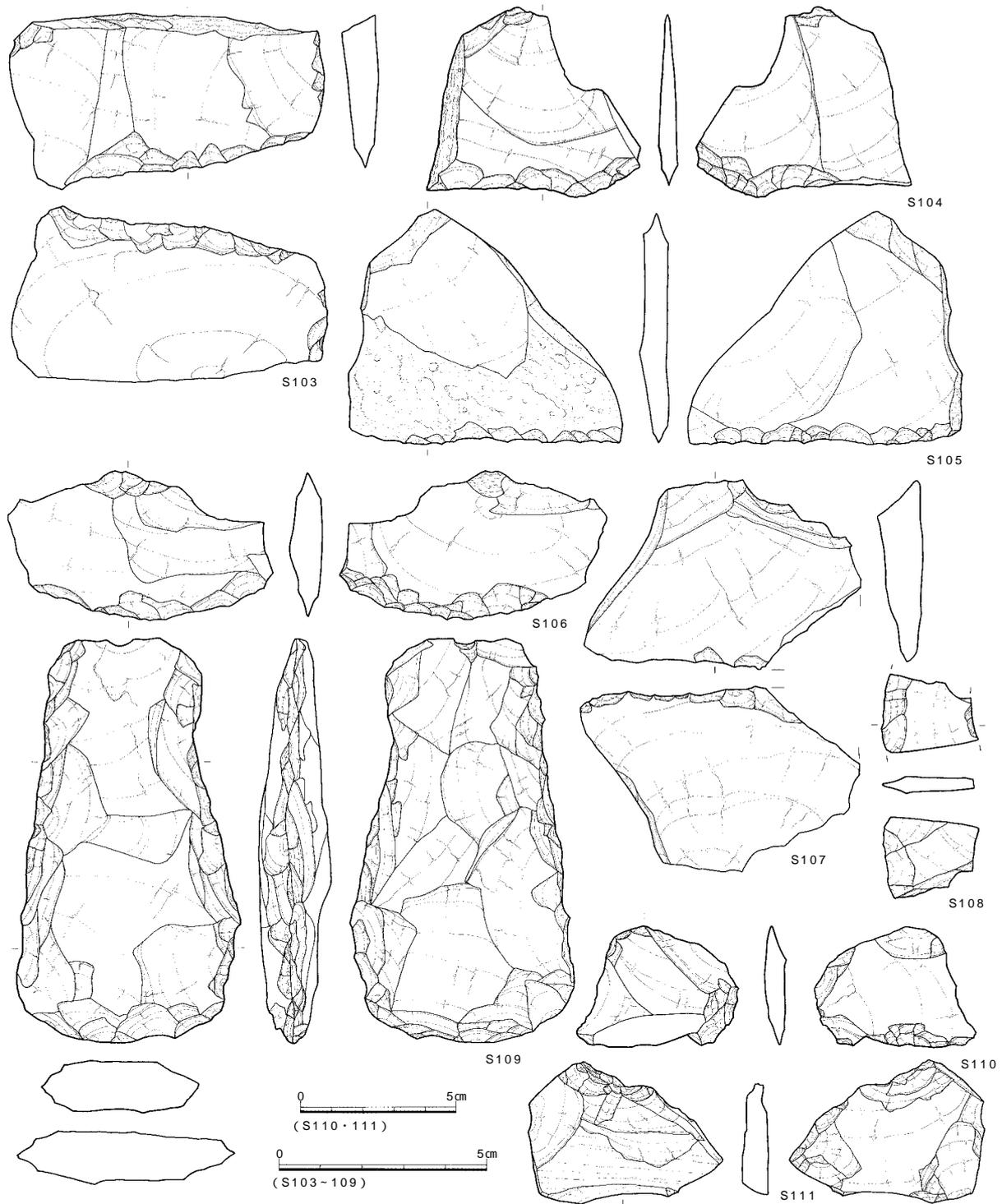
端を打ち欠いたものだが、上半部を欠損している。

13・14層出土石器(図127~129 図版22~28)

石鏃 3点出土し(S164~166)内2点は未成品である。すべてサヌカイト製である。S164は凹基式で基部の挟りは明瞭である。脚部は幅広で、側縁に両面から細かい調整を施し、整形する。S165は素材面を大きく残し、側縁部に細かい調整を施す。S166は、整形のための粗い調整段階で放棄された未成品である。

石鏃 1点出土した。S167はサヌカイト製で完形品である。自然面を残した横長剥片を素材とする下縁に丁寧な両面調整を行い、直線状の鋭い刃部をつくり出す。2カ所の挟りも明瞭で、両面からの数回の剥離によってつくり出されている。

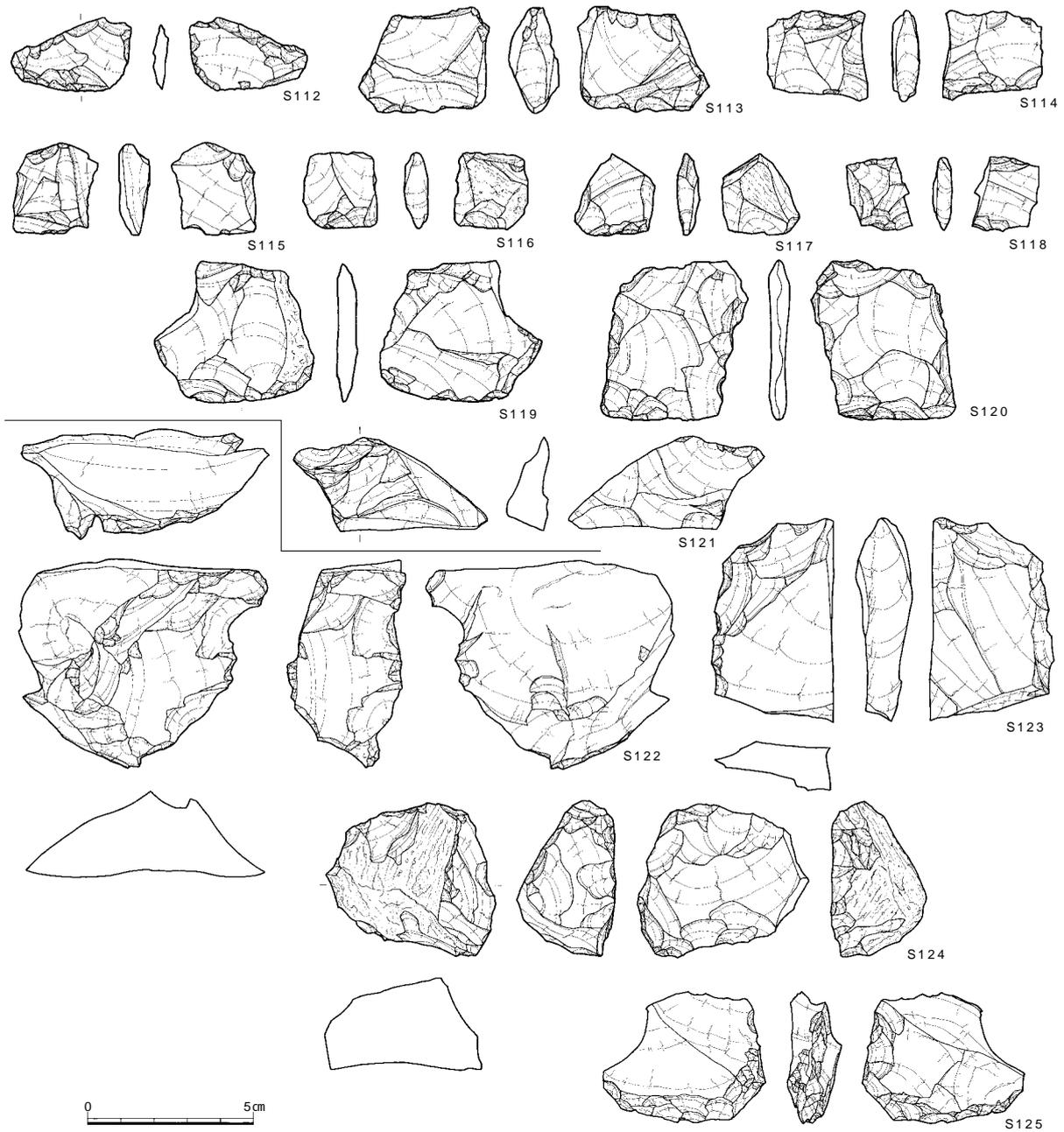
スクレイパー 2点出土した(S168・169)。いずれもサヌカイト製である。S168は大型品で、楕円形状の板状剥片を素材とする。側縁からの剥離を重ねて全体の形状を整えた後、下縁から右側縁にかけて浅い角度で丁寧な両面調整を行い、鋭い弧状の刃部をつくり出している。また上縁にも全体的に片面調整を施している。左側縁は当時の折損である可能性が高い。S169は下縁部と上縁部に両面調整を施し、刃部をつくり出すが、やや粗い調整である。断面が厚みのある凸レンズ状を呈し、石鏃片の可能性も否定できない。



番号	調査次-区	器種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石材	特徴
S103	17-7	スクレイパー	4.30	7.60	0.90	31.6	サヌカイト	横長剥片素材の下辺に両面調整。一部自然面が残る。
S104	17-3	スクレイパー	4.60	5.20	0.85	(17.6)	サヌカイト	下縁に両面調整。一部自然面が残る。
S105	17-1	スクレイパー	5.60	6.60	0.80	29.3	サヌカイト	下縁に両面調整。自然面が大きく残る。
S106	17-1	スクレイパー	3.50	6.40	0.80	17.7	サヌカイト	横長剥片素材の下縁に両面調整。一部自然面が残る。
S107	17-4	スクレイパー	4.60	6.70	1.10	32.1	細粒砂岩	横長剥片素材の下縁に両面調整。一部欠損。
S108	17-6	スクレイパー	2.30	1.90	0.46	2.5	サヌカイト	下縁に両面調整。両側面に折断面。欠損品
S109	17-3	石鋸	9.80	5.40	1.70	94.6	サヌカイト	丁寧な調整による整形。上部に柄との緊縛を意図した決り。
S110	17-3	加工痕ある剥片	4.95	5.20	0.75	16.7	サヌカイト	不定形な剥片の上下縁に調整。
S111	17-1	加工痕ある剥片	4.50	6.20	0.85	30.6	サヌカイト	不定形な剥片の上下縁に調整。

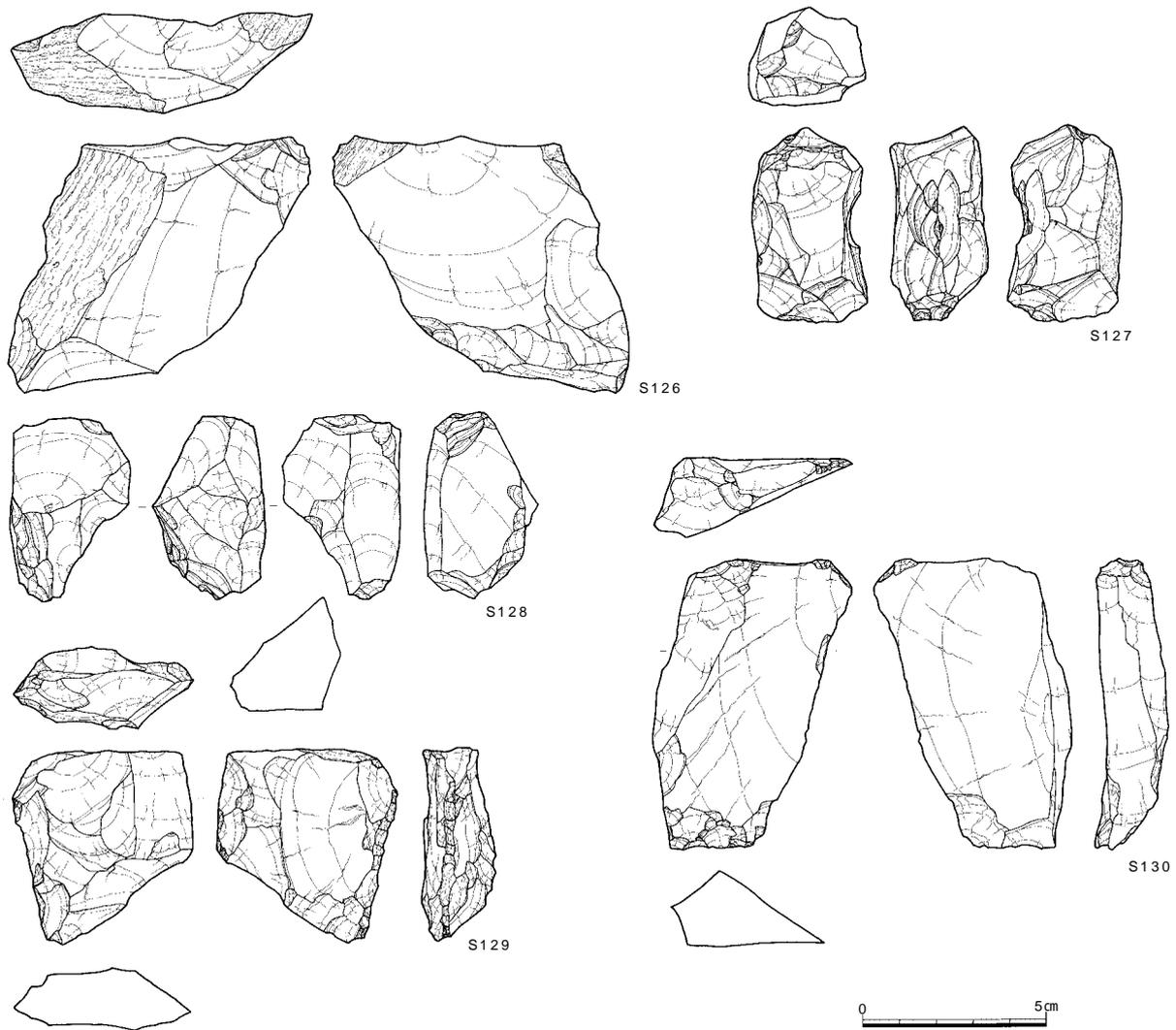
図121 14層出土石器2 (縮尺 1/2・2/3)

調査の記録



番号	調査次-区	器種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石材	特徴
S112	17-2	楔形石器	2.20	3.60	0.57	3.9	サヌカイト	小型品。上下端に階段状剥離。他、側面に微細な調整。
S113	17-5	楔形石器	3.95	3.15	1.35	17.6	サヌカイト	右側縁に剪断面。上下辺に剥離。
S114	17-4	楔形石器	2.70	3.00	0.80	7.0	サヌカイト	上下縁に階段状のつぶれた剥離。
S115	17-5	楔形石器	2.75	2.55	0.98	6.5	サヌカイト	小型品。上下端に階段状剥離。
S116	17-5	楔形石器	2.30	2.20	0.75	4.5	サヌカイト	小型品。上下端に階段状の剥離。一部自然面が残る。
S117	17-4	楔形石器	2.50	2.40	0.69	3.8	サヌカイト	小型品。右側面に剪断面。下端に階段状の剥離。
S118	17-1	楔形石器	2.20	2.00	0.50	2.8	サヌカイト	小型品。下端に階段状の剥離。
S119	17-5	楔形石器	4.30	4.90	0.75	16.2	サヌカイト	大型品。上下端に階段状の剥離。一部自然面が残る。
S120	17-4	楔形石器	4.80	4.40	0.60	13.8	サヌカイト	大型品。石核状。上下辺に階段状の剥離。
S121	17-4	石核	2.80	5.90	1.35	21.2	サヌカイト	三面に折断面。剥片剥離後に分割か？
S122	17-4	石核	6.33	7.47	3.14	129.2	サヌカイト	厚みをもつ剥片を素材とする。上面と側面に打面を持つ。
S123	17-1	石核	6.10	3.70	1.70	36.9	サヌカイト	板状の素材。下面と右側面に折断面。
S124	17-5	石核	4.70	5.10	2.85	72.3	サヌカイト	角礫を素材とする。小剥片を剥離。一側縁に調整。
S125	17-1	石核	3.93	4.83	1.34	23.3	サヌカイト	板状の素材。下縁と右側縁に両面からの調整。

図122 14層出土石器3(縮尺1/2)



番号	調査次 - 区	器種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石材	特徴
S126	17 - 2	石核	7.00	8.20	2.70	125.9	サヌカイト	板状剥片素材。自然面が大きく残る。
S127	17 - 1	石核	5.30	3.10	2.60	51.5	サヌカイト	右側縁や下面に打点。角礫状の素材。
S128	17 - 5	石核	5.00	3.10	3.21	44.1	サヌカイト	小剥片を連続的に剥離。
S129	17 - 3	石核	5.27	4.98	1.97	49.1	サヌカイト	板状の素材。打面を転位。左側縁に片面調整。
S130	17 - 4	石核	7.93	5.38	1.63	65.6	サヌカイト	板状剥片素材。下辺に階段状剥離。

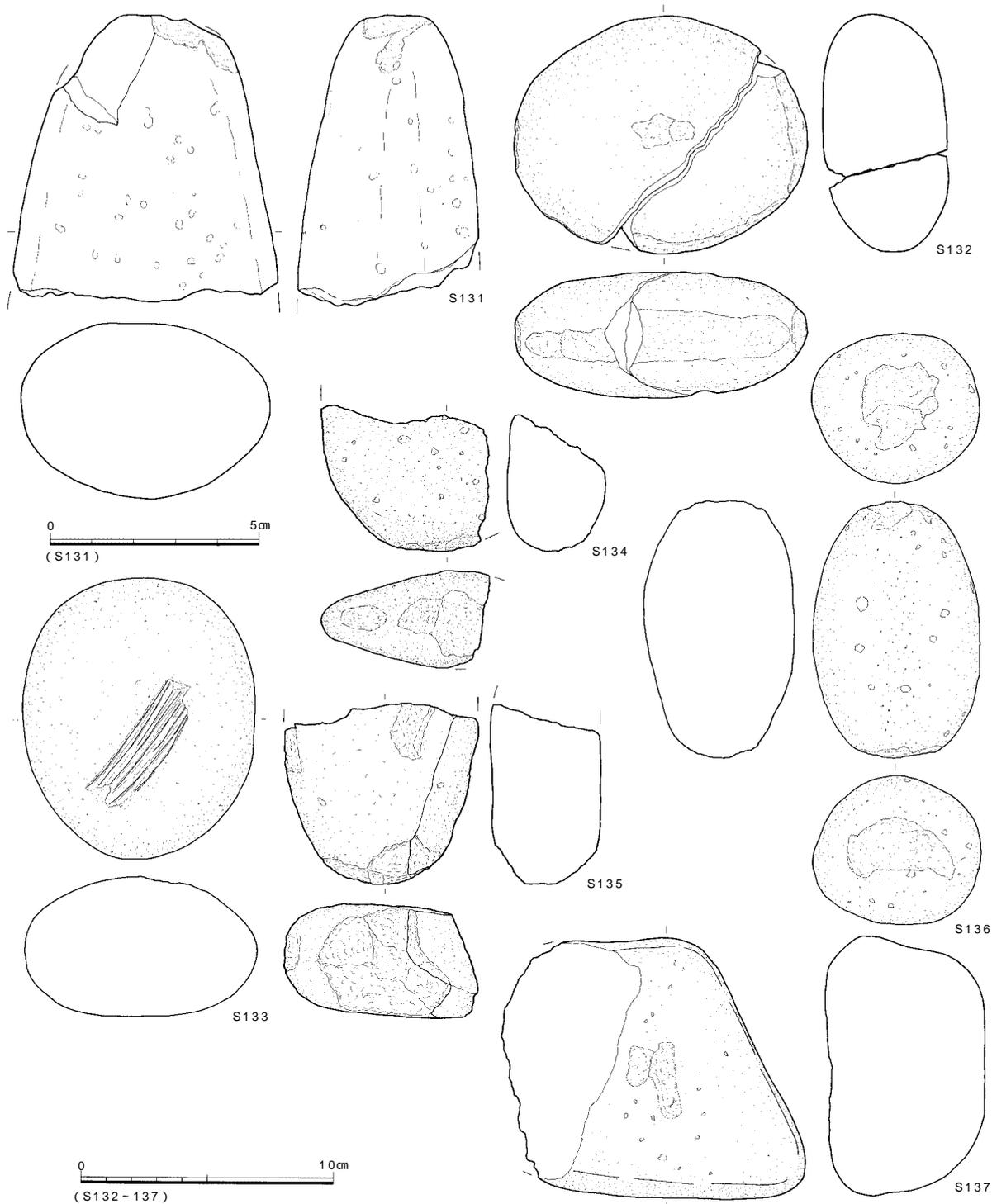
図123 14層出土石器4(縮尺1/2)

石核 5点出土した(S170~174)。サヌカイト製4点、赤色チャート製1点である。S171は大型品で原礫面を大きく残す。立方体状の原礫を素材として剥片を剥離したものと思われるが、石核として使い込まれた状況ではない。横長剥片を剥離した面が観察できる一方で、側縁から密に細かい剥離を行なう面もある。S170は板状のもので、上面と右側面を打面として利用する。S173は角柱状の素材に打面を形成している。いずれも自然面を残さない。石鏃や楔形石器に利用された小剥片を取っていたものと思われる。S174は赤色チャート製で、小礫を素材として小剥片を取っている。遺跡付近では採取できない石材である。

楔形石器 5点出土した(S175~179)。いずれもサヌカイト製である。下縁に階段状のつぶれた剥離を有するものが多く、相対する辺に細かい剥離が認められ、両極打法によるものと思われる。

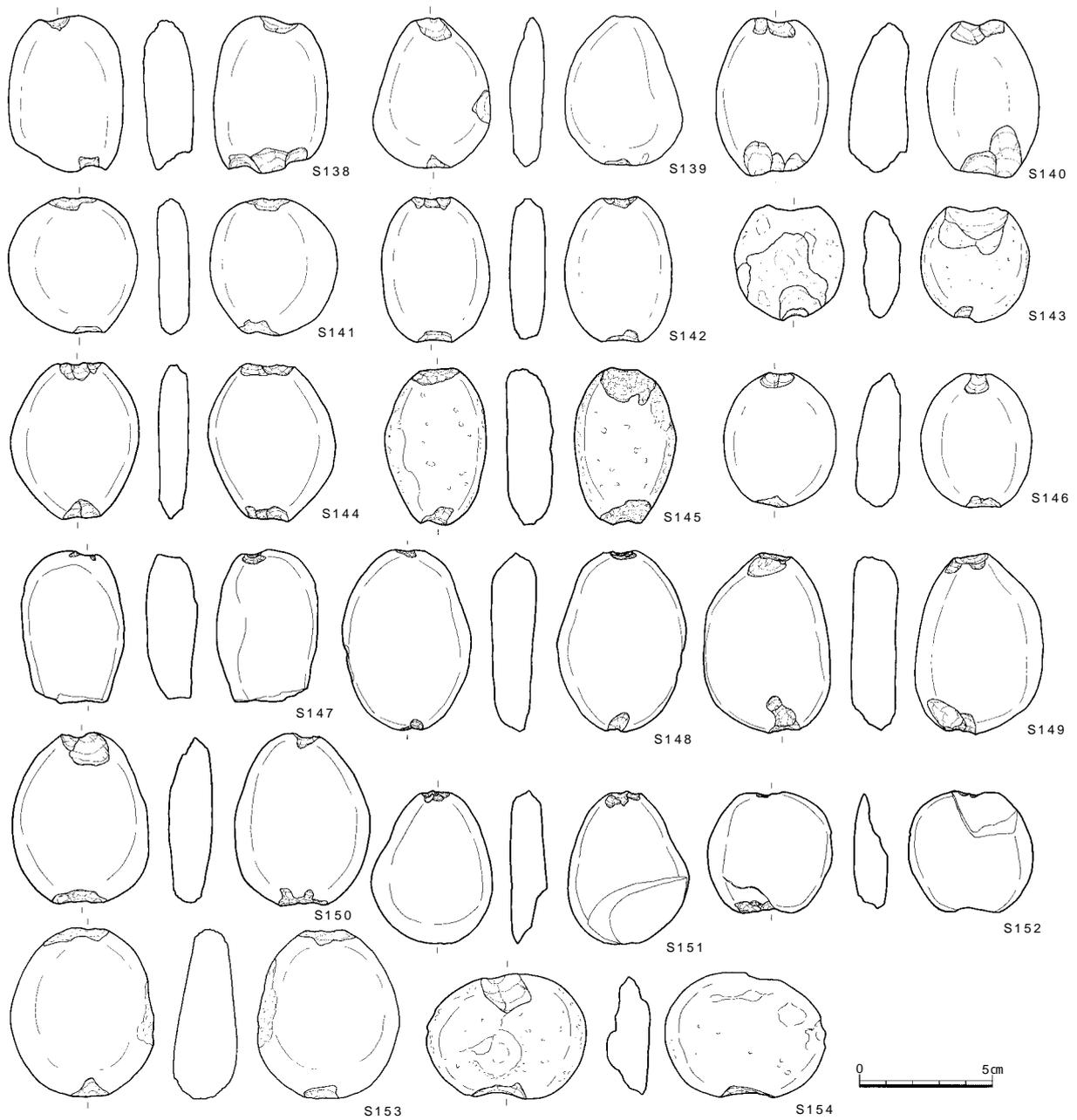
加工痕のある剥片 サヌカイト製1点が出土した(S180)。一部に自然面を残す剥片の上下縁に調整を施す。剥片断面は下縁にいくにつれて厚さを減じ、スクレイパーとしての利用を考えて加工を施したと考えられる。

石鏃 2点出土した(S181・182)。S181は細粒砂岩製である。扁平な礫を素材としており素材面を多く残す。



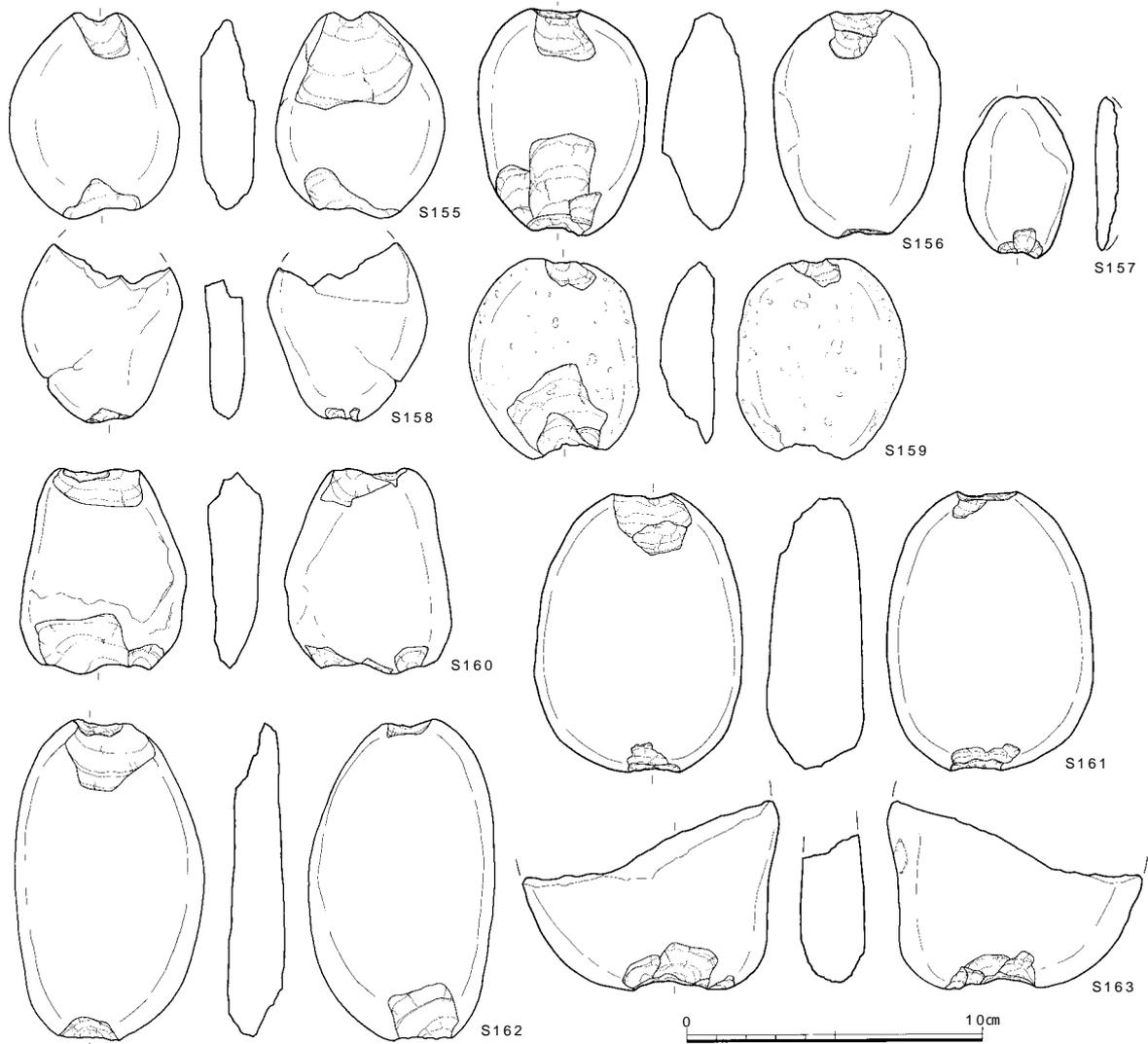
番号	調査次 - 区	器種	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	石材	特徴
S131	17 - 1	磨製石斧	(6.90)	(6.30)	(4.20)	(242.2)	閃緑岩	乳棒状石斧の基部のみ残存。
S132	17 - 1	凹石	9.60	11.70	4.90	810.9	閃緑岩	両面中央にわずかな敲打痕。
S133	17 - 2	磨石	11.30	9.30	5.60	896.9	流紋岩	表面中央に線状痕。
S134	17 - 1	叩石	(6.00)	(6.70)	(3.90)	(174.5)	流紋岩質凝灰岩	下端に明瞭な敲打痕。
S135	17 - 2	叩石	(7.20)	7.70	4.40	(339.7)	細粒花崗岩	円礫を打ち欠いて整形。下端部に敲打痕。
S136	17 - 1	叩石	10.30	6.70	6.00	599.4	石英安山岩質凝灰岩	杵状の礫を素材。上下端に明瞭な敲打痕。
S137	17 - 4	凹石	10.55	12.10	6.40	973.3	閃緑岩	表面中央に敲打痕。

図124 14層出土石器5 (縮尺 2/3・2/5)



番号	調査次 - 区	器種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石材	特徴
S138	17 - 7	石錘	6.00	4.35	1.90	70.4	石英安山岩	円礫の上下端に打ち欠き。
S139	17 - 2	石錘	5.70	4.40	1.50	45.9	石英安山岩	円礫の上下端に打ち欠き。一側縁に打ち欠き。
S140	17 - 4	石錘	6.00	4.20	2.30	73.6	流紋岩	円礫の上下端に打ち欠き。
S141	17 - 4	石錘	5.20	4.90	5.66	55.9	安山岩	円礫の上下端に打ち欠き。
S142	17 - 5	石錘	5.50	4.05	1.30	50.3	閃緑岩	小型品。円礫の上下端に打ち欠き。
S143	17 - 5	石錘	4.35	4.10	1.41	29.3	石英安山岩	小型品。円礫の上下端に打ち欠き。
S144	17 - 2	石錘	5.95	4.80	1.30	54.5	流紋岩	円礫の上下端に打ち欠き。
S145	17 - 5	石錘	6.00	3.80	1.76	55.5	花崗岩	円礫の上下端に打ち欠き。
S146	17 - 3	石錘	5.10	3.20	1.70	55.3	閃緑岩	小型品。円礫の上下端に打ち欠き。
S147	17 - 1	石錘	(5.84)	3.82	1.93	61.6	石英安山岩	下部欠損
S148	17 - 2	石錘	6.82	4.84	1.69	72.9	流紋岩	円礫の上下端に打ち欠き。
S149	17 - 7	石錘	6.86	4.79	1.83	91.6	流紋岩	円礫の上下端に打ち欠き。
S150	17 - 5	石錘	6.50	5.10	1.70	84.2	流紋岩質凝灰岩	円礫の上下端に打ち欠き。
S151	17 - 5	石錘	5.83	4.62	1.44	54.6	石英安山岩	円礫の上下端に打ち欠き。
S152	17 - 3	石錘	4.61	4.64	1.33	38.1	泥岩	円礫の上下端に打ち欠き。一端の打ち欠きは片面のみ。
S153	17 - 3	石錘	6.40	5.40	2.40	120.7	花崗岩	側縁中央に敲打痕。
S154	17 - 5	石錘	4.80	6.00	1.58	51.4	流紋岩質凝灰岩	扁平な礫の短軸両端に打ち欠き。

図125 14層出土石器6 (縮尺2/5)

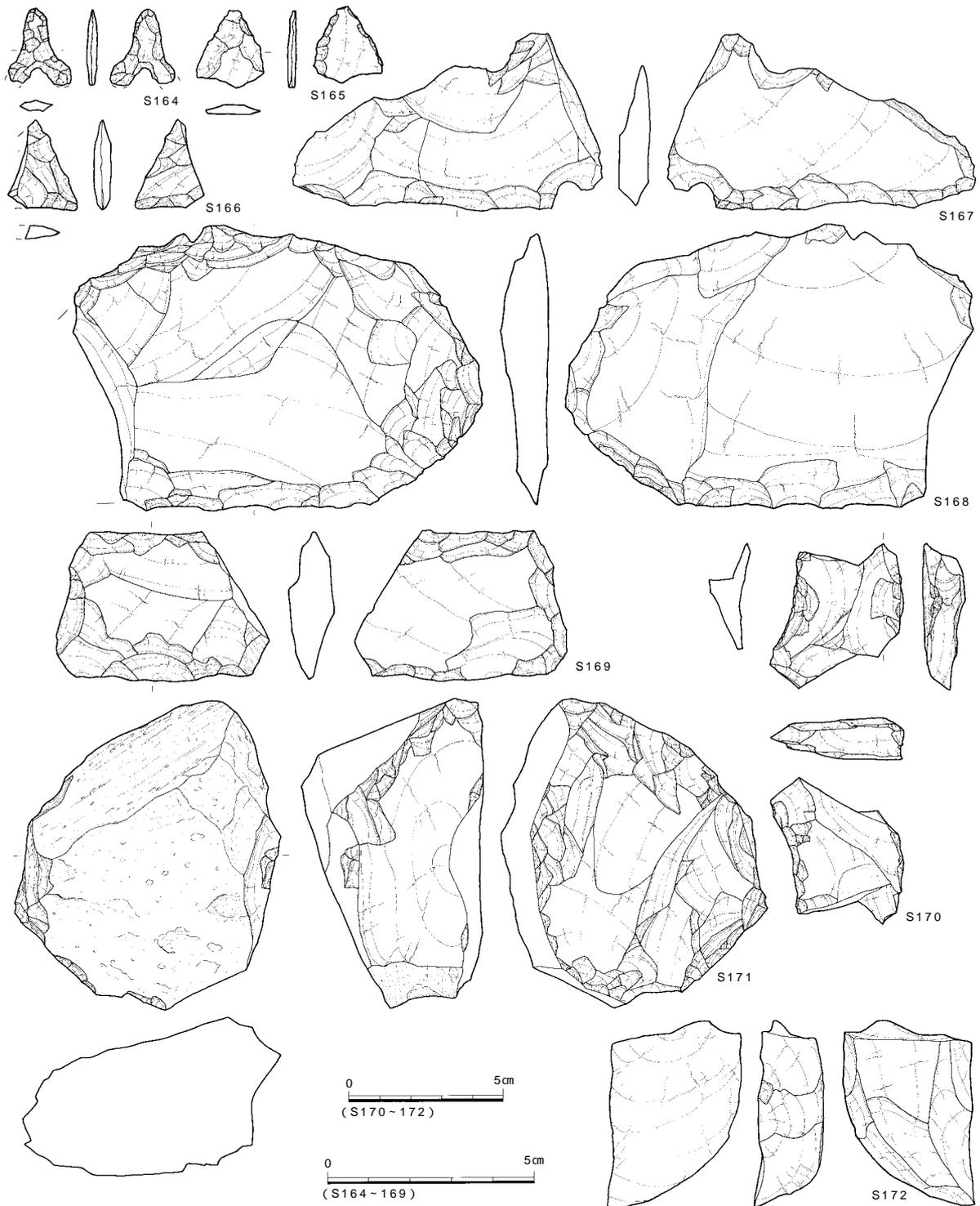


番号	調査次・区	器種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石材	特徴
S155	17-1	石錘	7.00	5.70	1.80	94.8	流紋岩	円礫の上下端に打ち欠き。
S156	17-5	石錘	7.70	5.70	2.46	156.0	流紋岩質凝灰岩	上端は片面のみ大きく打ち欠く。
S157	17-4	石錘	5.50	3.70	0.80	18.7	流紋岩質凝灰岩	裏面は欠失。
S158	17-4	石錘	6.10	5.40	1.55	56.4	流紋岩質凝灰岩	上部欠損。
S159	17-4	石錘	6.80	5.70	1.80	95.4	流紋岩	円礫の上下端に打ち欠き。一端の打ち欠きは片面のみ。
S160	17-6	石錘	7.00	5.60	1.90	110.0	花崗岩	隅丸方形の円礫の上下端に打ち欠き。
S161	17-5	石錘	9.53	7.06	32.80	327.1	閃緑岩	大型品。円礫の上下端に打ち欠き。
S162	17-4	石錘	12.90	6.40	1.90	190.4	石英閃緑岩	円礫の上下端に打ち欠き。
S163	17-5	石錘	(6.40)	(8.60)	2.20	(151.1)	石英閃緑岩	1/2程度残存。大型品。

図126 14層出土石器7(縮尺2/5)

下縁と両側縁に両面調整を行なうが、両側縁の調整は粗い。下縁は弧状の両刃をつくり出す。明瞭な使用痕などは確認できない。S182は玄武岩質凝灰岩製で、やはり扁平な礫を素材とし、剝離によって整形したものと考えられる。下縁に比較的丁寧な両面調整を行い、弧状の両刃をつくり出している。明瞭な使用痕は確認できない。

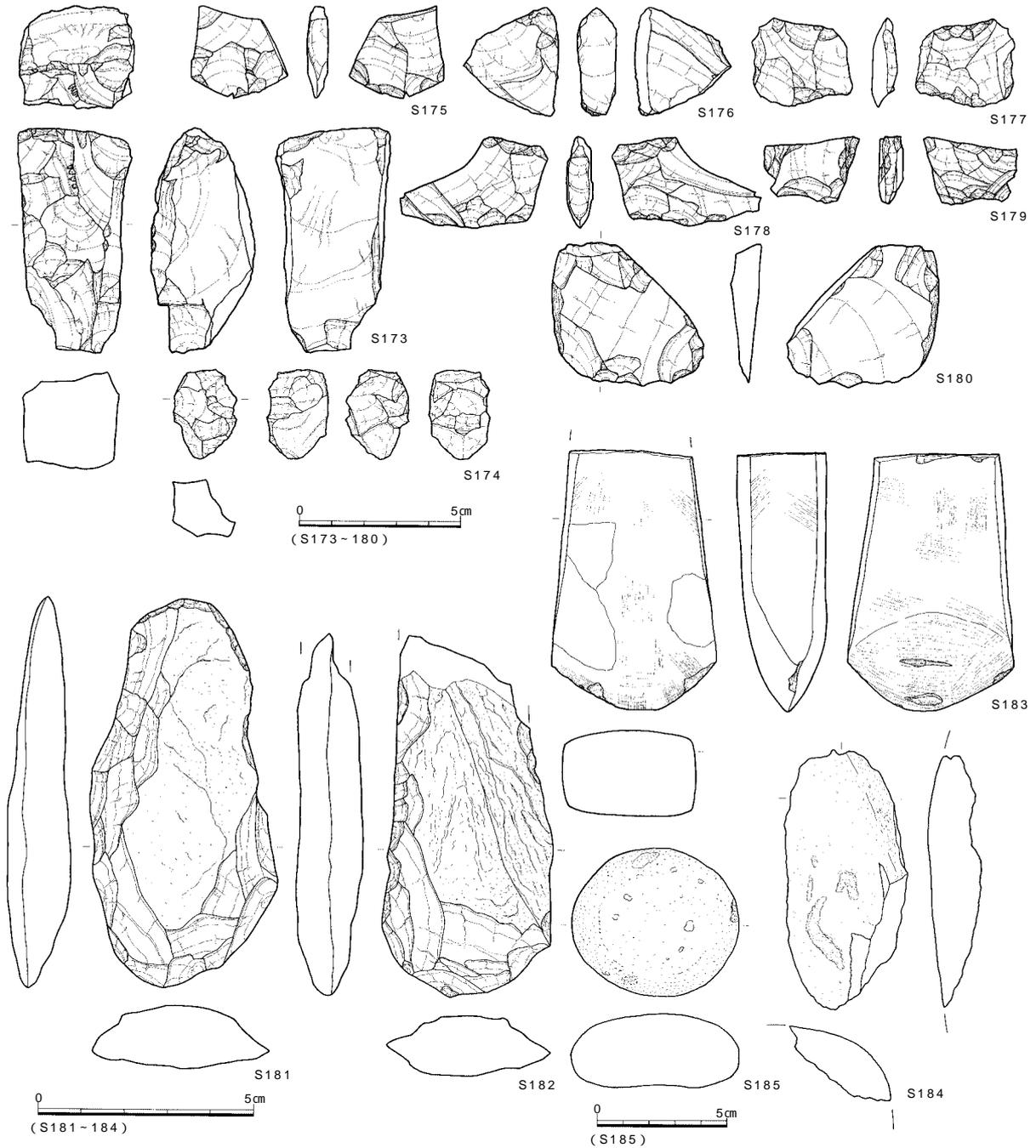
磨製石斧 2点出土した(S183・184)。S183は粘板岩製の定角式石斧である。全体を丁寧に研磨して斧主面と側面に明瞭な稜をつくりだしている。ただ、主面には敲打痕もわずかに残る。刃部は弧状の両刃で、主に刃部端に沿った横方向の研磨によって丁寧に磨きだしている。先端付近には使用による刃こぼれや剝離が認められる。上面は折れ面であるが、使用によって折損したものなのか、形状を整えるために折断したものかは不明である。S184は玄武岩質凝灰岩製で表面に敲打痕が残り、刃部付近の磨製石斧片と考えられる。



番号	調査次-区	器種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石材	特徴
S164	22-1	石鏃	1.85	(1.55)	0.25	(0.4)	サヌカイト	抉りは明瞭で脚部は幅広。
S165	17-6	石鏃未成品	1.86	1.68	0.21	0.6	サヌカイト	素材面を大きく残す。
S166	17-2	石鏃未成品	2.20	(1.70)	0.43	(1.1)	サヌカイト	側縁に両面からの剥離。
S167	17-6	石匙	4.30	7.50	0.80	24.9	サヌカイト	自然面が残る。下辺に丁寧な両面調整。抉りは明瞭。
S168	17-2	スクレイパー	6.90	(9.80)	1.20	(89.7)	サヌカイト	大型品。下辺から左側辺に丁寧な両面調整。
S169	22-1	スクレイパー	3.65	5.10	1.18	29.0	サヌカイト	上下辺に両面調整。石鏃の可能性もある。
S170	17-5	石核	4.24	4.79	1.28	22.9	サヌカイト	板状の素材。打面転位。
S171	17-3	石核	10.00	8.60	5.90	474.5	サヌカイト	自然面を大きく残す。横長剥片剥離。
S172	17-7	石核	6.00	4.30	2.20	59.5	サヌカイト	上面、側面を打面として利用。剥片剥離後に分割?

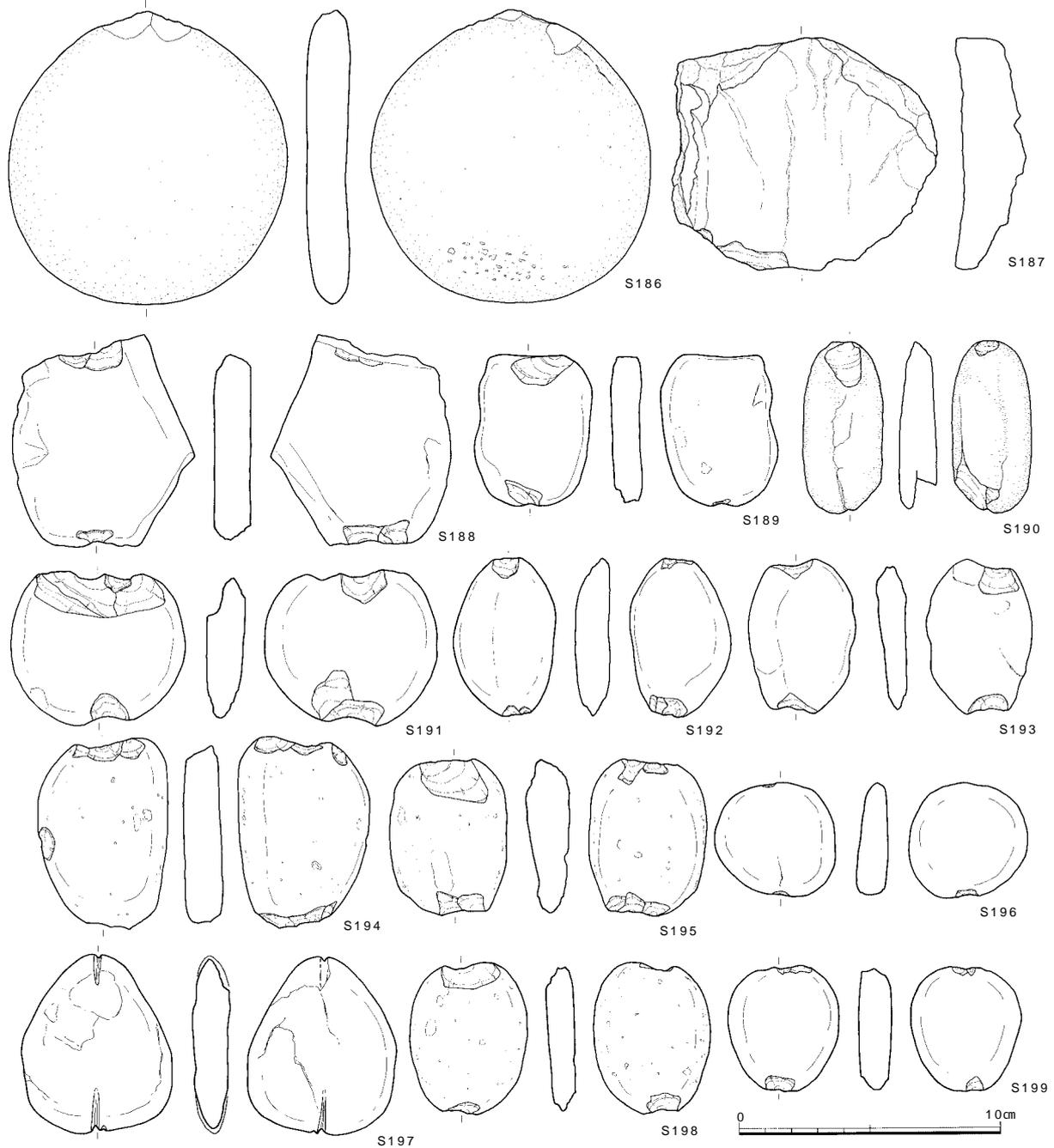
図127 13・14層出土石器1 (縮尺 1/2・2/3)

調査の記録



番号	調査次・区	器種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石材	特徴
S173	22-3	石核	7.00	3.60	3.00	95.7	サヌカイト	上面からの剥離。裏面に剪断面。
S174	17-5・6	石核	2.77	1.97	1.80	12.0	赤色チャート	小剥片を剥離。周辺では採取されない石材。
S175	17-3	楔形石器	2.85	2.90	0.64	6.0	サヌカイト	小型品。上下端に剥離。
S176	17	楔形石器	3.35	2.95	1.25	11.7	サヌカイト	右側面に剪断面。下端に階段状剥離。
S177	17-6	楔形石器	2.70	3.10	0.80	6.3	サヌカイト	一部に自然面。下段に階段状のつづれた剥離。
S178	17-5・6	楔形石器	3.80	4.60	0.85	9.1	サヌカイト	上下端に階段状の剥離。
S179	17-5	楔形石器	2.05	2.90	0.71	5.2	サヌカイト	上下端に階段状の剥離。
S180	17-6	加工痕ある剥片	4.40	4.70	0.90	19.4	サヌカイト	上下縁の一部に調整。
S181	17-7	石鏃	9.10	4.40	1.55	66.8	細粒砂岩	扁平な礫を素材。下端に弧状の両刃。上部欠損。
S182	17-5	石鏃	8.40	3.95	1.57	64.8	玄武岩質凝灰岩	扁平な礫を素材。下端に弧状の両刃。
S183	17-6	磨製石斧	(6.10)	3.90	(2.00)	(77.0)	粘板岩	定角式石斧。丁寧な研磨。刃部に刃こぼれ。
S184	17-6	磨製片	(6.05)	(2.90)	(1.25)	(25.5)	玄武岩質凝灰岩	表面に敲打痕。刃部付近の破片。
S185	17-4	磨石	5.80	6.50	2.85	162.3	流紋岩	片面中央が摩滅しわずかに凹む。

図128 13・14層出土石器2 (縮尺 1/2・2/3・2/5)



番号	調査次-区	器種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石材	特徴
S186	17-5	石皿	11.35	10.75	1.65	371.5	流紋岩	両面が全体に摩滅し、平滑。
S187	22-2	石皿	10.20	9.00	2.70	301.5	流紋岩質凝灰岩	表面が全体的に摩滅。
S188	17-1	石錘	8.15	6.90	1.50	122.5	細粒砂岩	扁平な角礫の上下端に打ち欠き。
S189	17-1	石錘	5.80	4.50	1.20	54.2	流紋岩質凝灰岩	隅丸方形の円礫の上下端に打ち欠き。
S190	22-1	石錘	6.62	3.10	1.40	35.7	流紋岩	細長い円礫の上下端に打ち欠き。
S191	17-6	石錘	6.00	6.60	1.50	84.2	流紋岩	円礫の上下端を大きく打ち欠く。
S192	17-7	石錘	6.15	3.90	1.30	45.7	石英安山岩質凝灰岩	円礫の上下端に打ち欠き。
S193	17-5・6	石錘	6.00	4.10	1.25	36.3	細粒砂岩	円礫の上下端に打ち欠き。
S194	22-3	石錘	7.40	5.00	1.75	90.8	流紋岩	円礫の上下端、右側縁に打ち欠き。
S195	17-1	石錘	5.10	4.50	1.64	65.4	流紋岩	小型品。円礫の上下端に打ち欠き。
S196	17-3	石錘	4.40	4.60	1.32	40.9	流紋岩質凝灰岩	小型品。円礫の上下端に打ち欠き。
S197	17-7	石錘	6.90	5.70	1.60	80.1	泥岩	円礫の上下端に擦切りによる溝。下端は2ヶ所の溝。
S198	17-4	石錘	5.90	4.50	1.14	42.0	流紋岩	円礫の上下端に打ち欠き。
S199	17-6	石錘	4.80	4.25	1.28	39.7	流紋岩	小型品。円礫の上下端をわずかに打ち欠き。

図129 13・14層出土石器3 (縮尺2/5)

磨石 1点出土した。S185は流紋岩製で、円礫の片面中央が摩滅する。握るのに適当な大きさ、形状である。

石皿 2点出土した（S186・187）。S186は流紋岩製で円盤状の礫を素材としている。両面が全体的に摩滅し平滑であり緩やかに凹む。またかすかに線状痕も確認できる。裏面下端には敲打痕が確認できるが、整形時のものかもしれない。S187は流紋岩質凝灰岩製である。表面は平滑ではないが全体的に摩滅している。

石錘 12点出土した（S188～199）。円礫の長軸両端の両側を打ち欠いたものが主であるが、側縁も打ち欠くもの、研磨による溝をもうけたものなどもある。S189は隅丸方形の流紋岩質凝灰岩の礫を素材とし、その両端を打ち欠く。S194は左側縁も打ち欠いている。S197は泥岩製で、円礫の上下端に研磨によって溝をもうけている。下端には2ヶ所の溝がある。

13層出土石器（図130～133 図版22～26・28）

石鏃 12点出土し、すべてサヌカイト製である。内訳は、凹基式5点（S200・201・204・208・209）、平基式5点（S202・203・205・206・210）、未成品1点（S207）、欠損品1点（S211）となる。凹基式は基部の挟りの形態や脚部端の仕上げ方（尖るもの、幅広のもの）などで差異がみられ、形態が多様である。S200は基部に明瞭な挟り部をもち、周縁に両面から細かい調整を施す。脚部端は幅広で長幅比は小さい。一方、S201は基部の挟り部が広く、周縁に両面から剥離を施し形状を整えている。脚部端は尖り長幅比は大きい。平基式は概して大型品が多いが、S210のような小型品も確認できる。S203・205は周縁からの剥離によって形状を整えており、厚さも一定である。一方、S202は周縁両面に細かい調整を施しているものの、下半部に厚みを持つ。S207は未成品で、裏面に素材面を大きく残し、細かい調整も認められない。

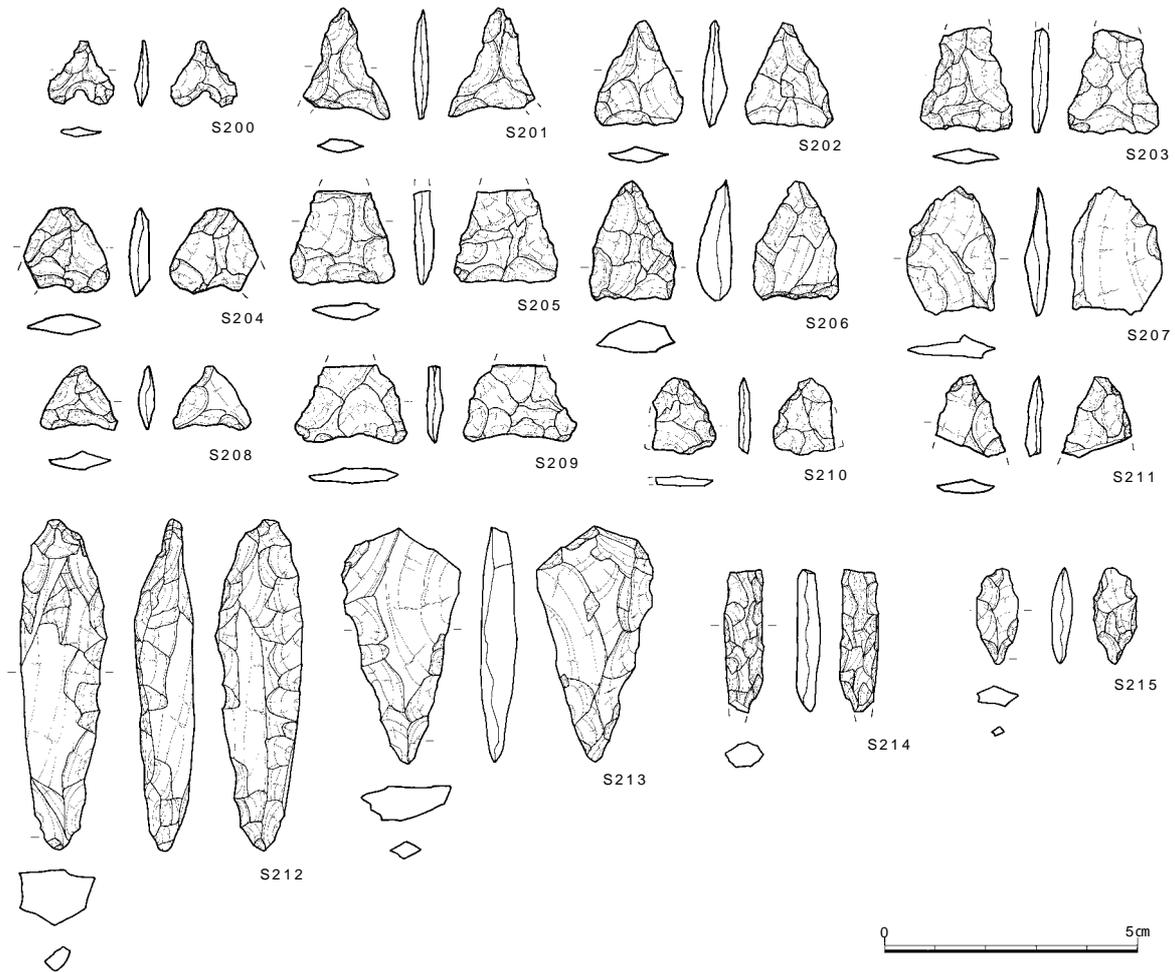
石錐 4点出土し、すべてサヌカイト製である（S212～215）。S212は厚みのある横長剥片の周縁に両面から調整を施し形状を整え、錐部分をつくり出す。握り部分は肉厚である。S213は幅広の横長剥片を素材とし、調整を加えることで、上半部が幅広で錐部分に向かって両側縁が収束する形状をつくり出す。握り部分は扁平である。S214・215は錐部分のみ残存したものであるが、S214が全体的に細かい調整を施し、細長で角柱状の錐部分をつくり出しているのに対し、S215は扁平で先端部のみ尖る錐部分をつくり出す。

スクレイパー 4点出土し、すべてサヌカイト製である（S216～219）。S216・217は素材の下縁部に両面から浅い角度で調整を行い、刃部をつくりだす。S216は弧状の刃部、S217は直刃である。いずれも原礫面の残る横長剥片を素材としており、石理に沿って剥離した厚みが一定の剥片を選択していたことがうかがえる。また、S217の右側面には折れ面が残る。S218も原礫面の残る縦長剥片を素材とし、下縁部に若干の片面調整を加えている。S219は小型品で周縁全体に細かい調整を施す。

加工痕のある剥片 1点出土した（S222）。サヌカイト製で、剥片の下縁部を中心に不規則に調整をほどこすが、断面形状から判断して、刃部をつくり出そうと意図した調整と考えられる。

石核 4点出土した。大きく板状のもの（S220・221）と立方体状の原形であったと思われるもの（S223・224）に区別可能である。S220は薄い小剥片を剥離し、下面と右側面にそれぞれ剪断面が確認でき、下縁部には細かい片面調整が施されている。剥片剥離後に石核分割し、その1つをスクレイパーや楔形石器に転用しようとした可能性もある。S223は原礫面を残す厚みのある石核で、打面を数回転位しつつ5 cmほどの不定形な剥片を取っている。剥離面が曲面を呈す箇所もあり、石鏃や楔形石器などに用いられる剥片を取ったと考えられる。S224も打面を数回転位しつつ不定形な剥片を取っており、原礫面が全く確認されない程に利用されている。

楔形石器 13点出土した（S225～237）。すべてサヌカイト製である。上下縁がほぼ併行し上下方向の相対する剥離や剪断面が認められるもの、平面が不定形で上下方向の相対する剥離が認められるものなどがある。S229は右側面に剪断面をもち、上下端に相対する階段状のつづれた剥離痕が認められる。S233・234は自然面を残すが、上下縁がほぼ併行し、下端部に階段状のつづれた剥離痕が認められる。S237は大型品で自然面を残すが、上下端部に階段状の剥離が認められる。ただ、左側縁に細かい片面調整が認められることや、右側面の折れ面な



番号	調査次-区	器種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石材	特徴
S200	17-4	石鏃	1.34	1.32	0.25	0.3	サヌカイト	凹基式。基部の挟りが明瞭。
S201	17-2	石鏃	(2.20)	(1.58)	0.28	(0.7)	サヌカイト	凹基式。基部の挟りの幅が広く、脚部先端が尖る。
S202	17-2	石鏃	2.10	1.70	0.50	1.1	サヌカイト	平基式。
S203	17-6	石鏃	(2.05)	1.80	0.30	(1.1)	サヌカイト	平基式。
S204	17-6	石鏃	1.70	(1.70)	0.40	(1.3)	サヌカイト	幅広な脚部。長幅比が小さい。
S205	17-6	石鏃	(1.85)	2.05	0.40	(1.5)	サヌカイト	先端部欠損。
S206	17-1	石鏃	2.38	1.69	0.67	2.6	サヌカイト	平基式。
S207	17-4	石鏃未成品	2.60	1.70	0.50	1.6	サヌカイト	裏面に素材面を大きく残す。
S208	17-3	石鏃	1.27	1.50	0.31	0.4	サヌカイト	凹基式。小型品。挟りが不明瞭。脚部が尖る。
S209	17-6	石鏃	(1.50)	2.20	0.30	(1.1)	サヌカイト	凹基式。
S210	17-4	石鏃	(1.35)	1.55	0.20	(0.4)	サヌカイト	平基式。
S211	17-4	石鏃	(1.60)	(1.40)	0.30	(0.4)	サヌカイト	先端部のみ残存。
S212	17-4	石鏃	7.55	1.70	1.20	14.1	サヌカイト	扁平で幅広の横長剥片に調整。平面は逆三角形。
S213	17-6	石鏃	4.65	2.30	0.71	6.7	サヌカイト	厚身をもち幅狭の横長剥片に調整。握り部分は肉厚。
S214	17-1	石鏃	2.80	0.80	0.50	1.3	サヌカイト	周縁に両面から調整し、角柱状の錐部分をつくりだす。
S215	17-4	石鏃	1.90	0.80	0.40	0.6	サヌカイト	先端部のみ調整を施し、扁平な錐部分をつくりだす。

図130 13層出土石器 1 (縮尺 2/3)

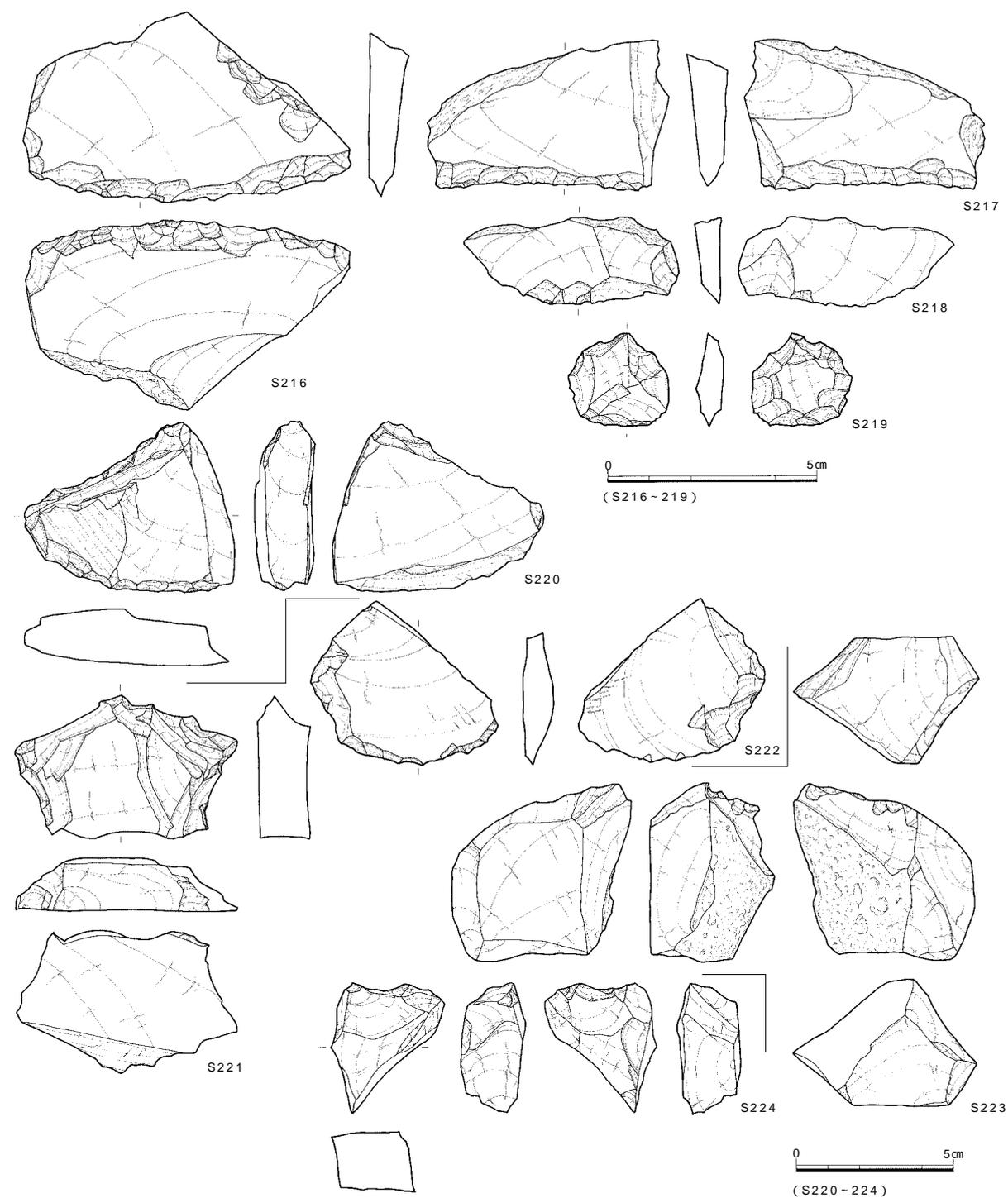
だから、スクレイパーや石鏃からの転用である可能性もある。

磨製石斧 2点出土した(S238・239)。S238は細粒砂岩製で、定角式石斧である。石斧主面と両側面との間に緩やかな稜がつくり出している。表面は石理による剥落が著しく、研磨、敲打痕などは確認しにくい。両刃で弧状の刃部を呈する。S239は流紋岩製で、乳棒状石斧の一部のみ残存する。敲打痕が全体的に観察できる。

凹石 1点出土した。S247は流紋岩質凝灰岩製で、礫の両面に明瞭な敲打痕が認められる。

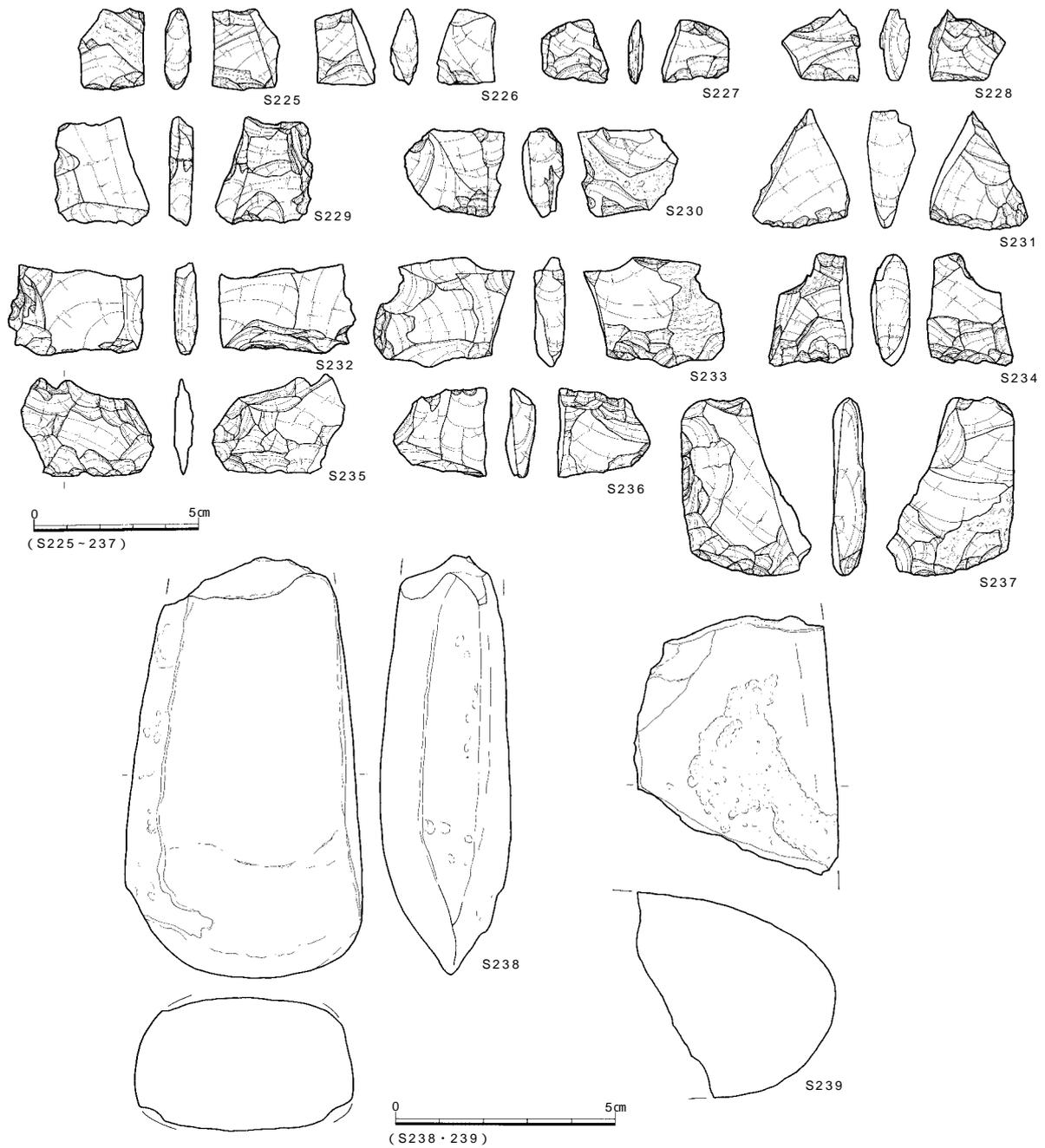
叩石 1点出土した。S248は流紋岩製で、円礫表面の中央に敲打痕が認められる。

石鏃 7点出土した(S240~246)。石材は多様で、いずれも円礫の上下端を打ち欠いたものである。S246は安



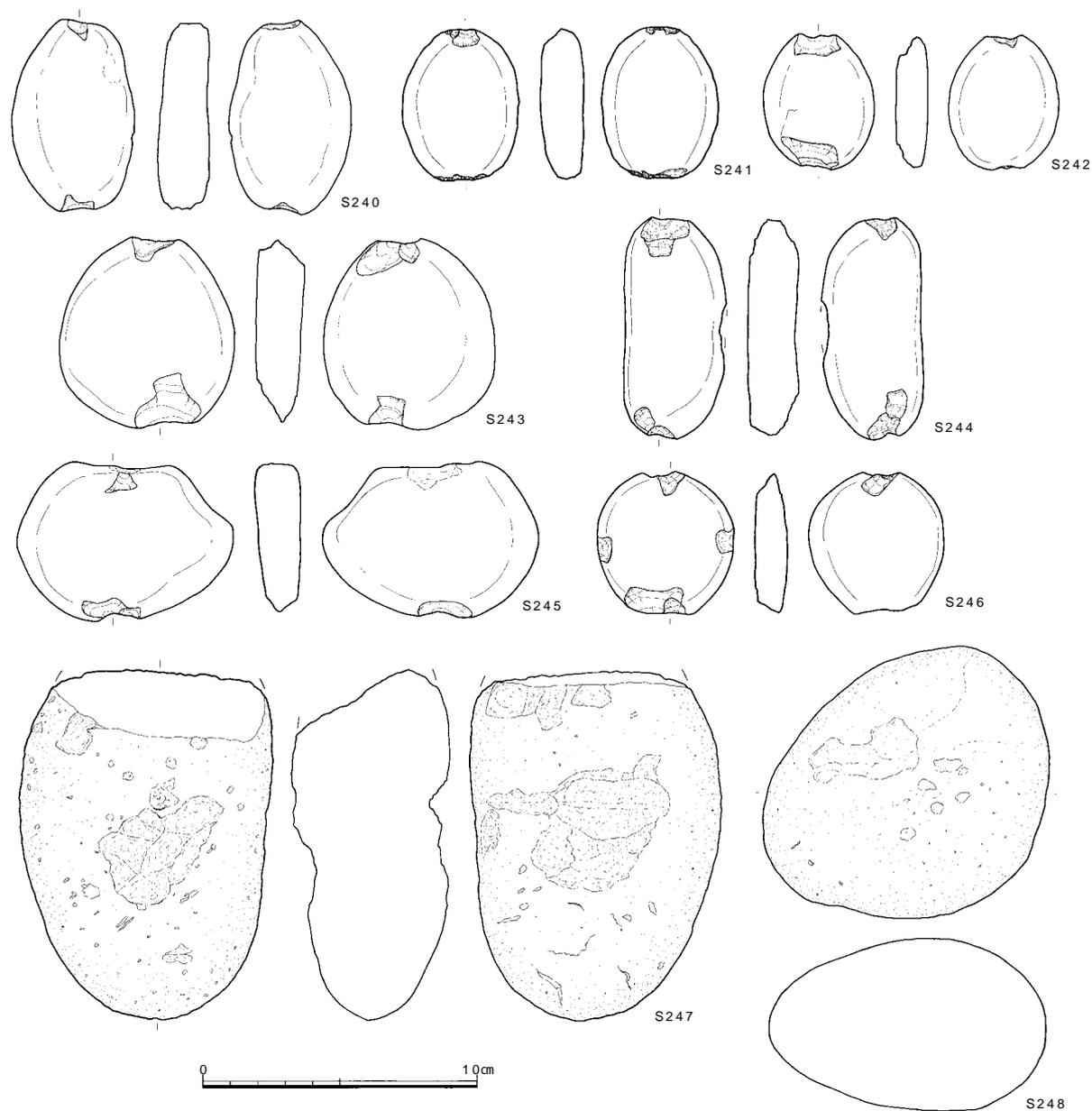
番号	調査次 - 区	器種	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	石材	特徴
S216	17 - 6	スクレイパー	4.50	7.80	1.10	36.5	サヌカイト	一部に自然面。下端部に両面調整。
S217	17 - 1	スクレイパー	3.60	(5.75)	1.15	(26.1)	サヌカイト	一部に自然面。下端部に両面調整。
S218	17 - 6	スクレイパー	2.10	5.10	0.70	8.2	サヌカイト	一部に自然面。下端部に片面調整。
S219	17 - 2	スクレイパー	2.20	2.40	0.71	4.0	サヌカイト	周縁全体に細かい調整。
S220	17 - 6	石核	5.45	6.70	1.75	65.8	サヌカイト	下縁に片面調整。右側面と下面に接断面。
S221	17 - 6	石核	7.00	4.10	1.70	61.6	サヌカイト	打面転位。立方体状の礫を利用。
S222	17 - 6	加工痕ある剥片	5.20	6.00	1.80	35.6	サヌカイト	下端部に不規則な調整。
S223	17 - 6	石核	6.70	5.75	4.05	132.6	サヌカイト	立方体状の礫を素材とする。自然面を大きく残す。
S224	17 - 6	石核	4.10	3.60	1.95	26.1	サヌカイト	上辺に階段状剥離。

図131 13層出土石器2 (縮尺 2/3・1/2)



番号	調査次 - 区	器種	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	石材	特徴
S225	17 - 1	楔形石器	2.50	2.05	0.79	4.4	サヌカイト	小型品。自然面を残す。下端に階段状の剥離。
S226	17 - 6	楔形石器	2.30	1.80	0.85	3.1	サヌカイト	小型品。
S227	17 - 1	楔形石器	1.90	2.00	0.40	1.8	サヌカイト	上端に階段状の剥離。
S228	17 - 1	楔形石器	2.20	2.30	0.90	3.9	サヌカイト	小型品。下端に階段状のつぶれた剥離。
S229	17 - 6	楔形石器	3.30	2.90	0.70	7.7	サヌカイト	右側面に剪断面。上下端に階段状の剥離痕。
S230	17 - 6	楔形石器	2.70	3.05	1.00	8.5	サヌカイト	自然面を残す。下端に階段状の剥離。
S231	17 - 6	楔形石器	3.60	3.00	1.50	12.5	サヌカイト	平面三角形。上下端に階段状の剥離。
S232	17 - 2	楔形石器	2.75	4.10	0.71	10.2	サヌカイト	下端に階段状のつぶれた剥離。
S233	17 - 6	楔形石器	3.35	4.30	0.95	15.1	サヌカイト	自然面を残す。下端に階段状の剥離。
S234	17 - 6	楔形石器	(3.40)	(2.60)	1.15	(11.5)	サヌカイト	自然面を残す。下端に階段状の剥離。
S235	17 - 6	楔形石器	3.00	4.00	1.20	11.1	サヌカイト	上下端に剥離。
S236	17 - 6	楔形石器	2.70	2.80	0.85	7.1	サヌカイト	上下端に剥離。
S237	17 - 6	楔形石器	4.40	3.90	1.00	22.7	サヌカイト	大型品。左側縁に片面調整。
S238	17 - 6	磨製石斧	(9.70)	5.40	(3.00)	(238.9)	細粒砂岩	定角式石斧。表面の剥落が著しい。弧状の両刃。
S239	17 - 5	磨製石斧	(5.90)	(4.50)	(4.90)	(177.6)	流紋岩	乳棒状石斧。敲打痕が残る。

図132 13層出土石器3 (縮尺 1/2・2/3)



番号	調査次-区	器種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石材	特徴
S240	17-6	石錘	7.10	4.50	1.90	78.9	石英安山岩	円礫の上下端に打ち欠き。
S241	17-6	石錘	5.55	3.25	1.60	58.3	流紋岩	円礫の上下端に打ち欠き。
S242	17-6	石錘	4.90	4.05	1.13	33.9	流紋岩	円礫の上下端に打ち欠き。
S243	17-2	石錘	7.00	6.30	1.75	79.0	石英安山岩	円礫の上下端に打ち欠き。
S244	17-5	石錘	8.20	3.65	1.90	83.7	石英閃緑岩	円礫の上下端に打ち欠き。
S245	17-6	石錘	7.90	5.80	1.70	110.8	石英安山岩質凝灰岩	円礫短軸上下端に打ち欠き。
S246	17-6	石錘	5.20	4.95	1.24	46.3	安山岩	円礫上下端と両側面に打ち欠き。
S247	17-6	凹石	12.90	9.25	5.90	909.8	流紋岩質凝灰岩	両面に明瞭な敲打痕。
S248	17-7	叩石	10.05	10.50	6.35	835.9	サヌカイト	礫表面の中央に敲打痕。

図133 13層出土石器4(縮尺2/5)

第4節 弥生時代の遺構・遺物

弥生時代の遺構は早期の土坑1基、前期の溝2条・畦畔2面、中期の溝1条、前期～後期の溝10条である。

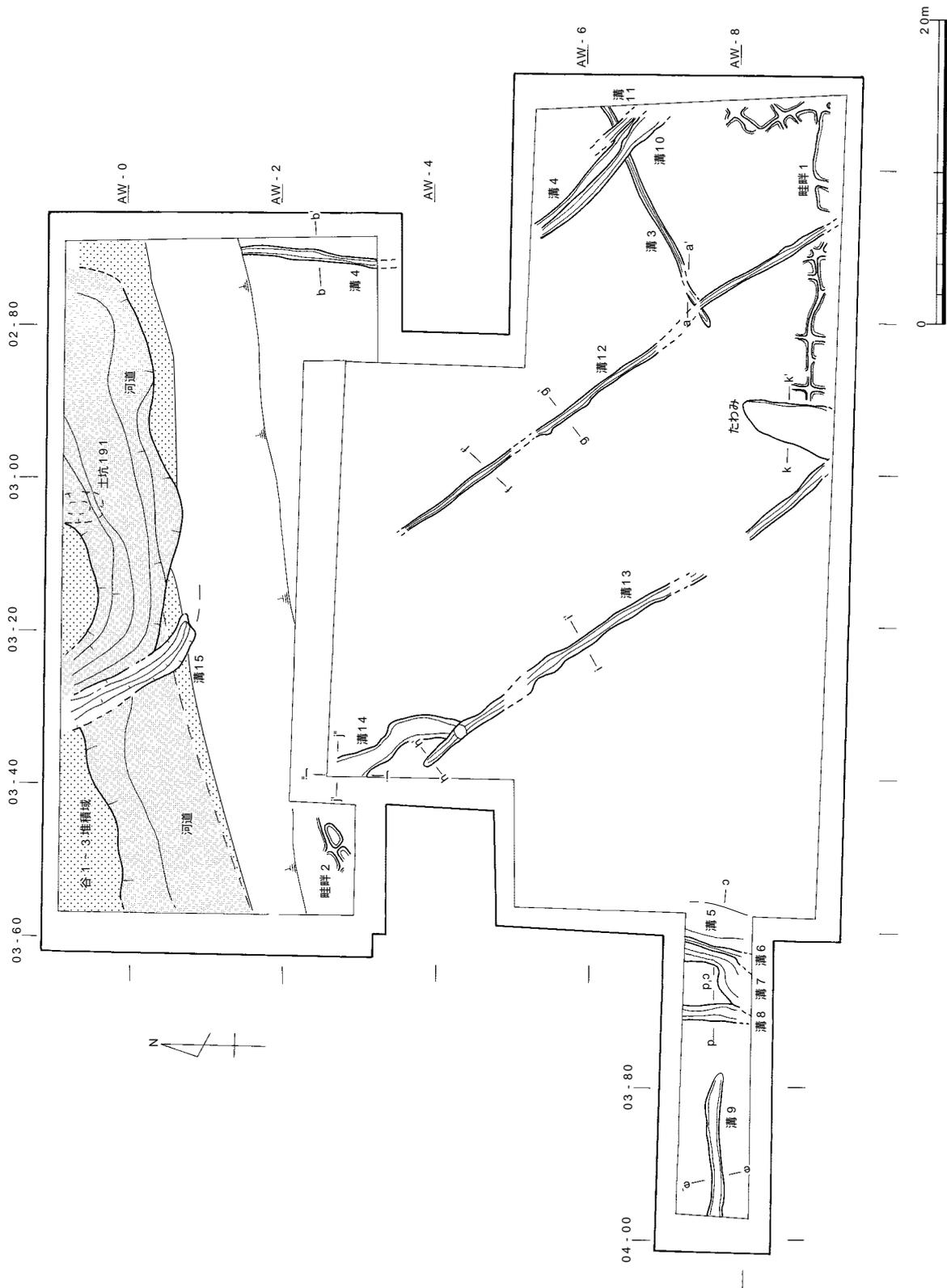


図134 弥生時代遺構全体図（縮尺1/400）

弥生時代の地形は、前期では縄文時代後期と同様、調査地点の中央、AW - 2 ~ 6 ライン間が最も高く、標高3.2m程の微高地がひろがり、そこから北西方向に下がる谷部へと続く。微高地部と谷部との境は後世の遺構による破壊を受けて分断されている上、両地域では状況が異なっているため、以下、両者を分けて記述する。

微高地部では、弥生時代対応面にあたる標高2.8~3.2mの13層上面で、溝12条・畦畔1面を検出した。13層上には古墳時代層(10層)が堆積し、上面はカットされているが、微高地の北西端はやや傾斜面をなしているため、12層が残っており、12層上面で畦畔1面を検出した。これらの遺構を時期の古いものから整理すると、畦畔は畦畔1、畦畔2の順となり、いずれも前期のものである。溝については断面形状・埋土・所属時期・設置場所によって断面形が逆台形を呈する溝4、断面形が皿形~U字形を呈する溝3・5~11、皿形で小規模な溝12・13、形状が不定形な溝14、の4群に分類される。溝の位置からもこれらの分類はある程度まとまりをみせており、機能を考える上で参考となろう。溝の機能の特定は困難であるが、¹については水路の可能性が考えられる。一方、²については2条が平行した走行方向を示し、近似した規模・埋土の特徴は他とは異なる。溝群の中では新しい一群である点も区別される。水路とするには小規模である、この溝12・13の2条の溝については、こうした点から畦畔の脇溝であると考え、溝間の距離約13mが水田区画を示す可能性を指摘しておこう。

一方、谷部では土坑1基、溝1条の他に河道を検出した。早期で確認された遺構は土坑1基のみである。弥生~古代の溝等の破壊によって周辺の状況は不明であるが、基盤層及び埋土のいずれも粘性が強いことから、早期にも谷地形を呈していたと考えられる。その谷部は、弥生時代前期~中期に、小規模な河道の出現をはさみつつ、埋没する。その過程をまとめよう。谷地形を埋めていく土層を下層から「谷1層」・「谷2層」・「谷3層」と大別する。「谷1層」と「谷2層」は前期末までに堆積した土層である。谷部の基盤層は最も低いところで標高2.05mであり、「谷1層」上面で標高2.3m、「谷2層」上面で標高2.4mを測る。「谷2層」の堆積後に小規模な河道が流れる時期がある。河道の一部には水路として利用した部分が認められ、その部分に沿った形で溝15が続いて掘削される。河道・溝15とも比較的短期間に埋没し、最終的に「谷3層」が堆積することによって谷地形はほぼ完全に解消される。これが中期後半である。「谷3層」の上面の標高は2.85mである。他の層に比べて、粗砂の割合が大きい砂質である埋土の特徴と、層厚が45cmと厚いことから、短期間に一気に堆積したことが窺える。その結果、後期には微高地部とほぼ揃った平坦化した地形がひろがったものと考えられる。

なお13層について、縄文時代後期遺物を大量に含んで堆積する箇所については、弥生時代前期に「動かされた」土層という認識を既述しているが、谷1層についても、後述する土器構成などから、それに対応する土層と判断され、その形成時期は前期末となる。

微高地部と谷部との遺構の対応関係は、早期は谷部の土坑のみで不明であるが、前期末には、微高地部で畦畔がつくられている段階に、谷部では河道が流れ、一部水路として利用したことが想定される。こうした状況は中期前半までに埋没する溝15にまで継続している。後期には谷地形は埋没しており、微高地部では溝12・13から想定されるような整然とした畦畔による耕地が営まれていたと考えられる。

(1) 微高地部

a . 溝

溝3 (図134・135)

14層上面、標高3.15mで検出した。幅0.3~0.5m、深さ10cmである。底面のレベルは西端3.05m、東端2.7mである。調査区東壁から南西方向へ向けて浅くなるため、02 - 80ライン付近以西では検出できない。埋土は黄褐色粘質土で黒褐色粘土ブロックを含む。東端では溝4に切られる。出土遺物はポリ袋1/2袋ほどの小片が認められたが、図化できるものはなかった。埋土の状況から、時期としては弥生時代前期



図135 溝3 (縮尺 1/30)

と考えている。

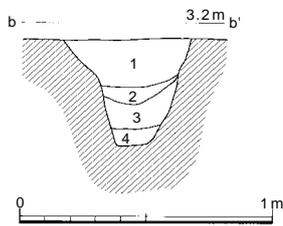
溝4 (図134・136・137)

第17次調査地点内では14層上面で、第22次調査地点内では16層上面で検出した溝である。検出レベルは3.0m～3.15mであり、底面の標高は南端で2.7m、北端で2.55mを測る。全体として南から北へと走行している。幅50～65cm前後で、深さ40cmである。断面の形状は下部(2～4層)は逆台形に近く、1層はU字形に近い。埋土は2～4層は灰褐～暗灰色系の粘質土で、2・4層には黒色土(13層)ブロックを含む。1層は暗褐色土であり、1層と下層土とで平面上でズレが生じている箇所が南半部において確認されることから1度は掘り換えているものと考えられる。

出土遺物は土器の小片がポリ袋2袋ほど出土しているが、図化できるものはなく、遺物から時期決定は困難であった。その他にサヌカイト製石鏃が1点出土した(図137 - S249)。素材面を多く残す未成品で、右側縁に片面調整を施す。本溝の時期は埋土に13層を含んでいることから弥生時代前期と考えられる。

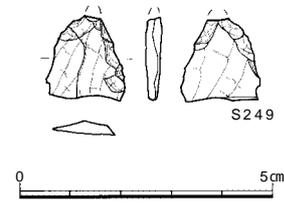
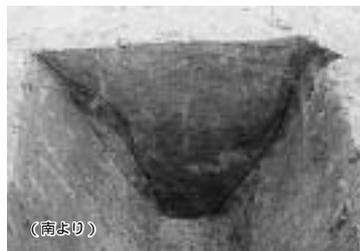
溝5 (図134・138)

13層上面、共同溝部分のAW03 - 57区で検出した。検出レベルは標高3.05m、底面レベルは2.7mである。わずかに南へ傾斜する。残存幅2.0m、深さ35cmを測る。断面の形状はU字形を呈する。埋土は上層(1～3層)に暗褐色系の粘質土、下層(4～14層)に暗灰褐色～灰黄褐色系の砂質土が堆積する。出土遺物は僅かにポリ袋2



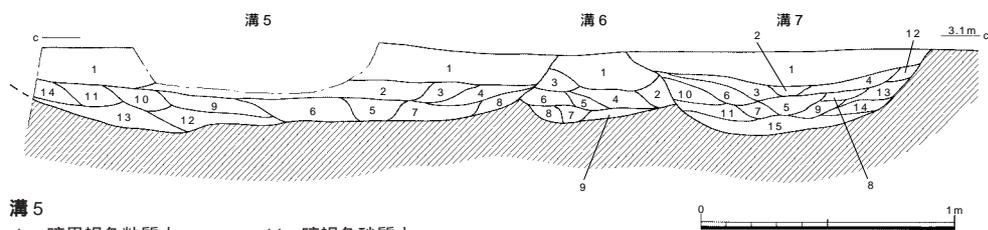
- 1. 暗褐色土
- 2. 暗灰褐色粘質土 (黒褐色土ブロック)
- 3. 灰褐色粘質土 (黄褐色土ブロック)
- 4. 暗灰褐色粘質土 (黒色土ブロック)

図136 溝4 (縮尺1/30)



番号	器種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石材
S249	石鏃未成品	1.65	1.55	0.29	0.7	サヌカイト
特 徴						
素材面を多く残す。右側縁に片面調整。						

図137 溝4出土遺物 (縮尺2/3)



溝5

- 1. 暗黒褐色粘質土
- 2. 暗灰褐色粘質土
- 3. 灰褐色弱粘質土
- 4. 灰黄褐色砂質土
- 5. 暗灰褐色砂質土
- 6. 黄褐色砂質土
- 7. 暗灰黄褐色砂質土
- 8. 暗褐色砂質土
- 9. 暗灰黄褐色弱粘質土
- 10. 暗灰褐色砂質土
- 11. 暗灰褐色砂質土
- 12. 灰黄褐色砂質土
- 13. 暗灰黄褐色砂質土

14. 暗褐色砂質土

溝6

- 1. 暗黒褐色弱粘質土
- 2. 暗灰褐色砂質土
- 3. 暗灰褐色砂質土 (黄褐色土ブロック)
- 4. 灰褐色砂質土
- 5. 灰黄褐色砂質土
- 6. 暗灰黄褐色砂質土
- 7. 暗黄褐色砂質土
- 8. 暗灰褐色砂質土
- 9. 暗灰黄褐色砂質土

溝7

- 1. 暗黒褐色弱粘質土
- 2. 暗褐色砂質土
- 3. 暗灰褐色粘質土
- 4. 暗灰褐色粘質土 (炭化物)
- 5. 暗灰黄褐色砂質土
- 6. 灰褐色弱粘質土

- 7. 灰褐色砂質土
- 8. 暗灰褐色砂質土
- 9. 灰褐色砂質土
- 10. 暗灰褐色砂質土
- 11. 暗灰黄褐色砂質土
- 12. 暗褐色砂質土
- 13. 暗黄褐色砂質土
- 14. 灰黄褐色砂質土
- 15. 淡黄褐色砂質土



図138 溝5～7 (縮尺1/30)

袋の土器片が認められたが図化できるものはなかった。本溝の時期は弥生時代前期～後期と考えている。

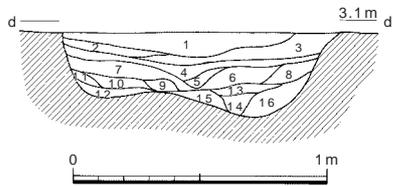
溝6 (図134・138)

13層上面、AW03 - 57・67区 (共同溝部分) で検出した。検出面のレベルは標高3.05m、底面のレベルは2.8mである。幅0.6m、深さ25cmが残存する。東西両端とも溝5、溝7によって切られているため、本来の規模は不明である。断面の形状はU字形を呈する。埋土は9枚に分けているが、暗褐色～灰褐色系の砂質土が主体で、最上層に暗褐色粘質土が堆積する。出土遺物は僅かに土器片数点が認められたが、図化できるものはなかった。

本溝の時期は遺物からは判断し難く、検出層位を考えあわせて弥生時代前期～後期の範疇と考えている。

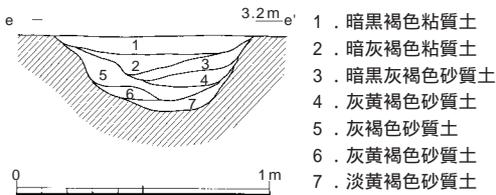
溝7 (図134・138)

13層上面、AW03 - 67区 (共同溝部分) で検出したが、検出面のレベルは標高3.05m、底面のレベルは2.7mである。わずかに南へ傾斜している。北端では幅0.7m、南端で1.4mと、AW - 8ラインあたりから幅がひろがる。深さは35cmを測る。北端では溝6の東側を削平している。断面の形状はU字形を呈している。埋土は15枚に分けられるが主体となるのは灰褐色系の砂質土であり、最上層に黒褐色粘質土が堆積している。出土遺物は20点足らずの土器小片が認められたが、ほとんどは縄文後期のものであり、遺物からは時期決定は困難であるが、検出層位から本溝の時期は弥生時代前期～後期の範疇と考えている。



- 1. 暗黒褐色砂質土
- 2. 暗褐色砂質土
- 3. 暗褐色砂質土
- 4. 暗灰褐色砂質土
- 5. 灰黄褐色砂質土
- 6. 灰褐色砂質土
- 7. 明灰褐色砂質土
- 8. 暗灰黄褐色砂質土
- 9. 明黄褐色砂質土
- 10. 淡黄灰褐色砂質土 (灰白色粘土ブロック)
- 11. 灰黄褐色砂質土
- 12. 淡黄白色砂質土
- 13. 灰黄褐色砂質土
- 14. 暗褐色砂質土
- 15. 黄灰色砂質土
- 16. 黄褐色砂質土

図139 溝8 (縮尺1/30)



- 1. 暗黒褐色粘質土
- 2. 暗灰褐色粘質土
- 3. 暗黒灰褐色砂質土
- 4. 灰黄褐色砂質土
- 5. 灰褐色砂質土
- 6. 灰黄褐色砂質土
- 7. 淡黄褐色砂質土

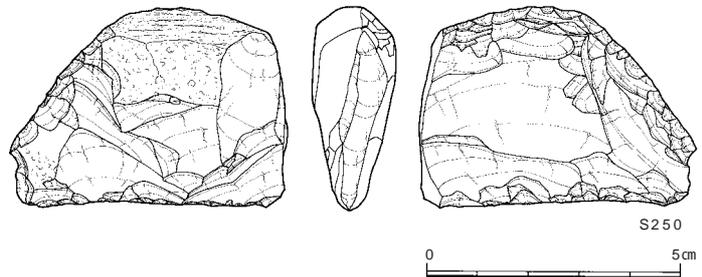


溝8 (図134・139)

13層上面、AW03 - 77区 (共同溝部分) で検出した。検出面のレベル標高3.05m、底面のレベルは標高2.7mである。わずかに南へ傾斜している。幅1.1m、深さ35cmを測る。断面形状は中央部が若干ふくらむ皿状を呈している。埋土は細かく分けることもできるが、主体となるのは灰黄褐色系の砂質土である。出土遺物は30点ほどの土器片、ポリ袋に1袋が認められたが、ほとんどは縄文後期のものであり、遺物からは時期決定は困難である。本溝の時期としては弥生時代前期～後期の中で考えている。

溝9 (図134・140 図版27)

13層上面、AW03 - 87・97区 (共同溝部分) で検出した。同時に検出した、前述の溝5～8が南北方向であるのに対し、本溝は東西方向の約4mを確認した。しかし03 - 80ラインより以東では検出することができず、溝8の西側で収束するものとみられる。検出面のレベルは標高3.05m、底面のレベルは標高2.75mである。幅0.8m、深さ30cmを測る。埋土は7枚に分けられ、主体



番号	器種	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	石材	特徴
S250	石核	5.30	7.30	2.20	90.9	サヌカイト	一部自然面を残す。右側面に剪断面。

図140 溝9・出土遺物 (縮尺1/30・2/3)

となるのは暗灰褐色～灰黄褐色を呈する砂質土である。最上層に暗黒褐色粘質土が堆積する。出土遺物は土器片45点、ポリ袋で2袋分と石器1点が認められたが、土器には図化できるものはなかった。図140 - S250はサヌカイト製の石核である。板状の素材から、石鏃などに用いられる薄い小剥片を剥離している。一部に自然面を残し、右側面には剪断面が確認できる。また、下縁と左側縁には、比較的丁寧な両面調整が施されている。剥片剥離後に分割を行い、スクレイパーなどへの転用が図られたのかもしれない。本溝の時期は弥生時代前期～後期の中で考えている。

溝10 (図134・141)

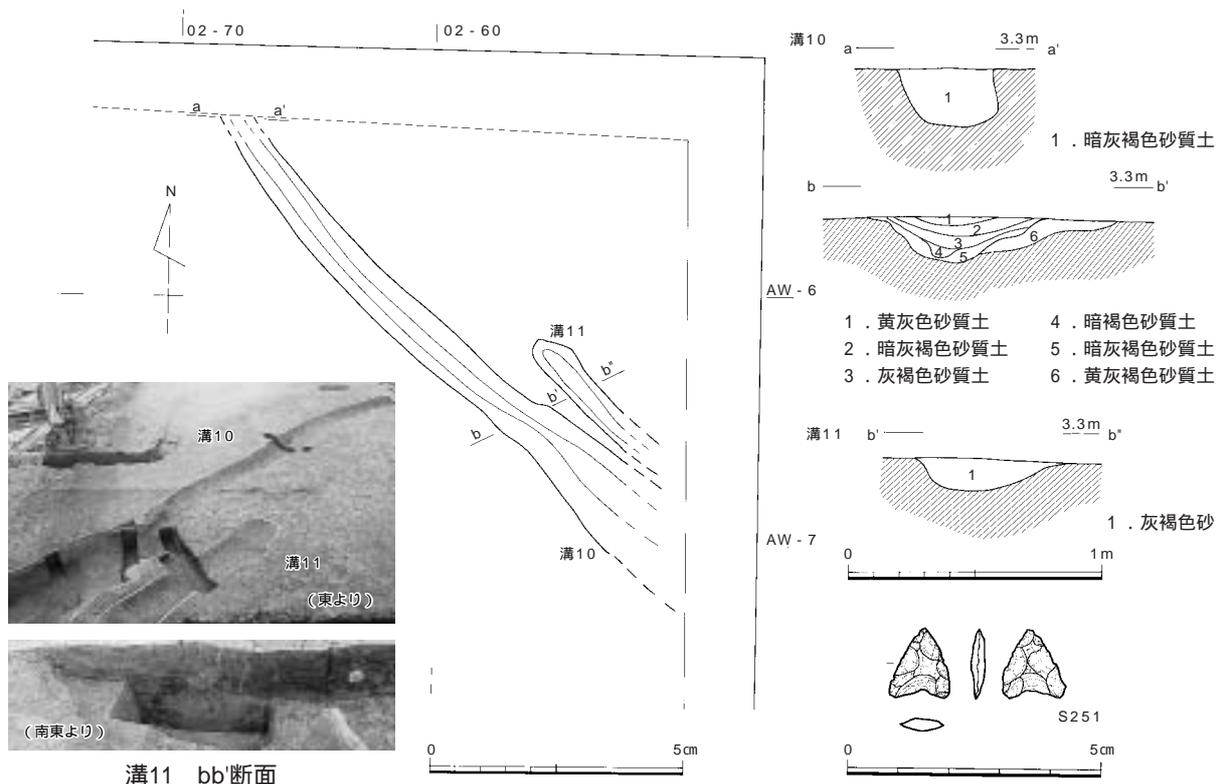
溝10は調査区の南東部を南東～北西へと走行する。検出面の標高3.18～3.20mである。底面の標高は南端で2.97m、北端で2.18mで、深さ17～23cmである。幅は北端で0.4m、南端で1.2mである。この幅の違いはAW - 6・7ラインの間において、bb'断面にみられるように上層(1～5層)と下層(6層)の流路がずれていることによる。また本溝は、前期の溝4に一部重複している。埋土は灰褐色～暗褐色系の砂質土を主体としている。

出土遺物は土器片が70点余、ポリ袋で1袋が出土し、図化できるものはなかったが突帯文土器の胴部小片、縄文後期の土器小片が見られる。その他にS251はサヌカイト製で凹基式石鏃である(図141)。挟りは浅く、脚部はやや尖る。側縁に両面から調整を施すが、その単位は比較的粗い。

本溝の時期は弥生時代前期～後期である。

溝11 (図134・141)

13層で検出した。溝10の東側に沿って走行するが、AW - 6ライン以南で収束している。検出面のレベルは標高3.18m、底面のレベルは標高3.1mである。幅1.0m、深さ10cm程が残る。また本溝は前期の溝4の東側を切っ作られている。埋土は灰褐色砂層である。出土遺物は、土器片20点が認められたが、図化できるものはなかつ



番号	器種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石材	特徴
S251	石鏃	1.40	1.20	0.25	0.4	サヌカイト	凹基式。挟りは浅く、脚部はやや尖る。

図141 溝10・11・溝10出土遺物(縮尺1/150・1/30・2/3)

た。縄文後期～弥生時代早期のものが見られるが、本溝の時期は、弥生時代前期～後期と考えている。

溝12 (図134・142)

13層上面で検出した。調査区の中央部を南東から北西へ走行する。検出レベルは標高3.06～3.17mで、幅60cm、深さ10cm程度の浅い溝である。底面のレベルは南端3.06m、北端で3.12mである。調査区の北半、AW-4ライン以北では検出することはできなかった。埋土は灰褐色粘質土である。出土遺物は土器片がわずかに認められたが、図化できるものはなかった。本溝の時期は弥生時代前期～後期の範疇と考えている。

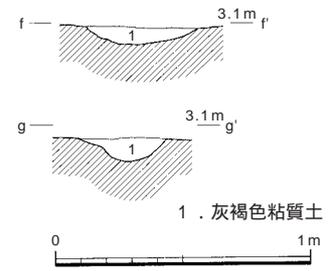


図142 溝12 (縮尺1/30)

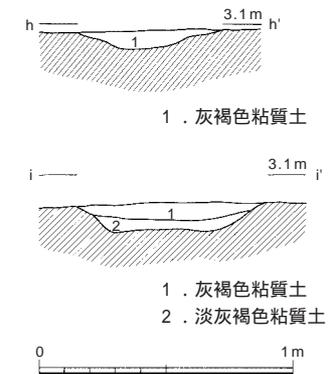
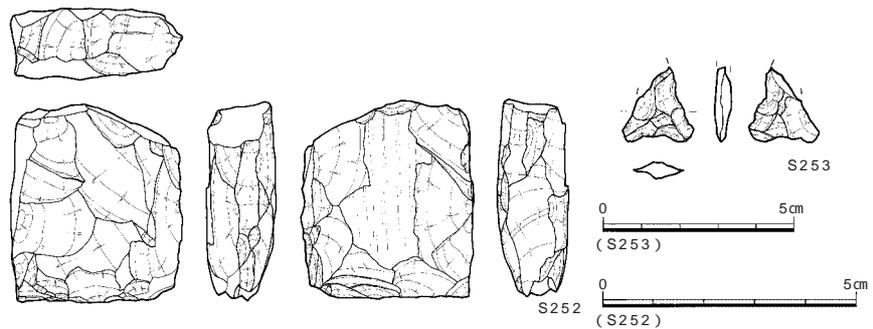


図143 溝13 (縮尺1/30)

溝13 (図134・143・144 図版27)

13層上面で検出した。調査区の西半を南東から北西へ走行する。前述の溝12と平行している。検出レベルは標高3.04～3.08m、底面のレベルは2.96～2.98mである。幅約60cm、深さ10cm程度で、埋土は灰褐～淡灰褐色粘質土である。規模、走行方向、埋土の特徴が溝12と極めて相似している。出土遺物は土器片と石器が見られ、石器2点を掲載した(図144)。S252は石核で上面や両側面を打面として、石鏃などに用いられたであろう薄い小剥片を連続的に剥離している。上面には打面再生のための剥離が確認でき、また左側面に剪断面も確認できる。この剪断の後に、その面を打面として剥離を行っている状況が確認でき、これも打面を再生するための剪断であった可能性が高い。下辺部には階段状のつぶれた剥離がある。S253は凹基式石鏃で、先端部を欠損している。挟りは浅く、脚部端は丸く収束する。ただ、側縁調整の単位が粗く、未成品の可能性もあろう。本溝の所属時期は弥生時代前期～後期の範疇と考えている。



番号	器種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石材	特徴
S252	石核	5.25	4.65	1.90	63.0	サヌカイト	板状の素材。左側面に剪断面。
S253	石鏃	(1.50)	1.40	0.30	(0.5)	サヌカイト	凹基式。挟りは浅く、脚部は幅広。

図144 溝13出土遺物 (縮尺1/30・2/3・1/2)

溝14 (図134・145)

13層上面で調査区の中央西よりで検出した。南端は溝14に切られ、第17次調査区の北西角へ抜けている。検出面のレベルは標高2.90～2.96m、底面のレベルは標高2.82～2.91mである。僅かに北側が低い。幅は南端で1.2m、最も広いところで1.6mで、深さ18cmである。埋土は北端では2枚に分けられ、上層は暗灰褐色砂質土、下層は暗淡褐色砂質土である。平面の形状がやや歪であり、氾濫した際の流路の痕跡と考えられる。出土遺物は見られ

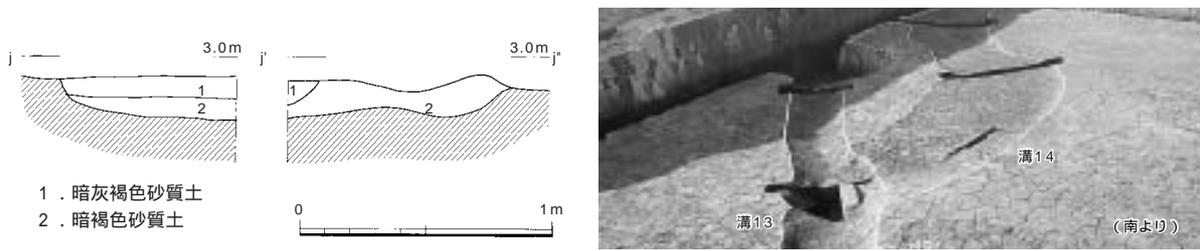


図145 溝14 (縮尺1/30)

なかった。本溝の時期も弥生時代前期～後期の範疇と考えられる。

b. 畦畔

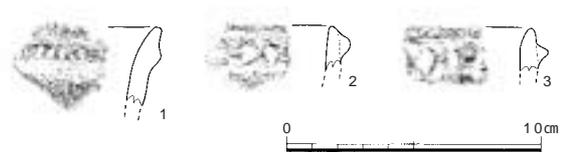
13層上面で1面(畦畔1)、12層上面で1面(畦畔2)を検出した。

畦畔1 (図134・146・147)

13層上面で、調査区の南東部分、AW02 - 57・59・69・79・89区において、小区画の畦畔を検出した。検出面は標高2.8mであり、全体の地形として南東に向かってわずかに下がっていく部分にあたるため、後世の削平をかるうじて免れたものである。畦畔の幅は30～40cm、高さ3～5cmである。13層を削り出してつくられている。調査区南壁に沿うように東西方向の畦畔をおよそ12m程、また調査区の東壁に沿うように南北方向の畦畔を5m検出している。全体として残りが悪く、いびつな形をなす部分があることから不確定なところもある。いずれもごく一部であり、一筆の区画全形がわかるところはない。一辺1～2.5mの小区画であることは伺える。この畦畔に伴う出土遺物としてごくわずかに土器の小片が認められ、その中には突帯文土器の深鉢片が含まれている(図146)。畦畔1の状況は津島岡大遺跡では広範囲に確認されている黒色土上面に形成された畦畔と同様である。このことから本畦畔の所属時期は弥生時代前期と考えられる。

畦畔2 (図134・148)

調査区の北西部AW03 - 42・43・52・53区で一部を検出した。12層は13層を覆う黄灰色砂質土層であり、調査区の中央付近、AW - 4ライン付近からAW - 1ライン間でのみ堆積が認められる土層である。



番号	器種	形態・手法ほか	色調(外/内)	胎土
1	深鉢	(外)ローリング顕著、貼り付け突帯上にヘラ状工具による刺突、(内)ローリング顕著	淡茶褐	細砂。粗砂混じる
2	深鉢	(外)ナデ、貼り付け突帯上にD字形刻み、(内)ローリング顕著	褐灰	細砂～粗砂
3	深鉢	(外)ナデ、貼り付け突帯上にD字形刻み、(内)ローリング顕著	黄灰褐/褐	細砂～粗砂

図146 13層出土土器(縮尺1/3)



図147 畦畔1



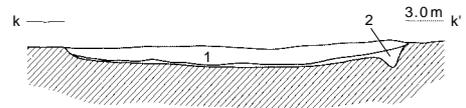
図148 畦畔2

畦畔2は全体として残りが悪く、1m×1.5mで構成される一筆分の区画をかるうじて確認することができ、ここで検出した畦畔も小区画であることが伺える。畦畔の幅は30cm程、高さは5cmで、黄灰褐色砂に覆われていた。この畦畔に伴う出土遺物はない。層位関係と、畦畔の形状・方向が前述の畦畔1に近似することから、本畦畔の所属時期についても前期と考えている。

c. たわみ

たわみ1 (図134・149)

調査区の南端、AW08 - 98・AW09 - 99区で検出した。13層上面での検出である。東西1.8m×南北3.0m、深さ15cm程の浅いたわみであり、埋土は灰白色の砂質土層である。出土遺物は認められなかった。断面形は浅い皿状であり、人為的な成因よりは、自然に生じたものと考えられる。



1. 灰白色砂質土
2. 暗灰色砂質土

図149 たわみ1 (縮尺1/30)

(2) 谷部

a. 土坑

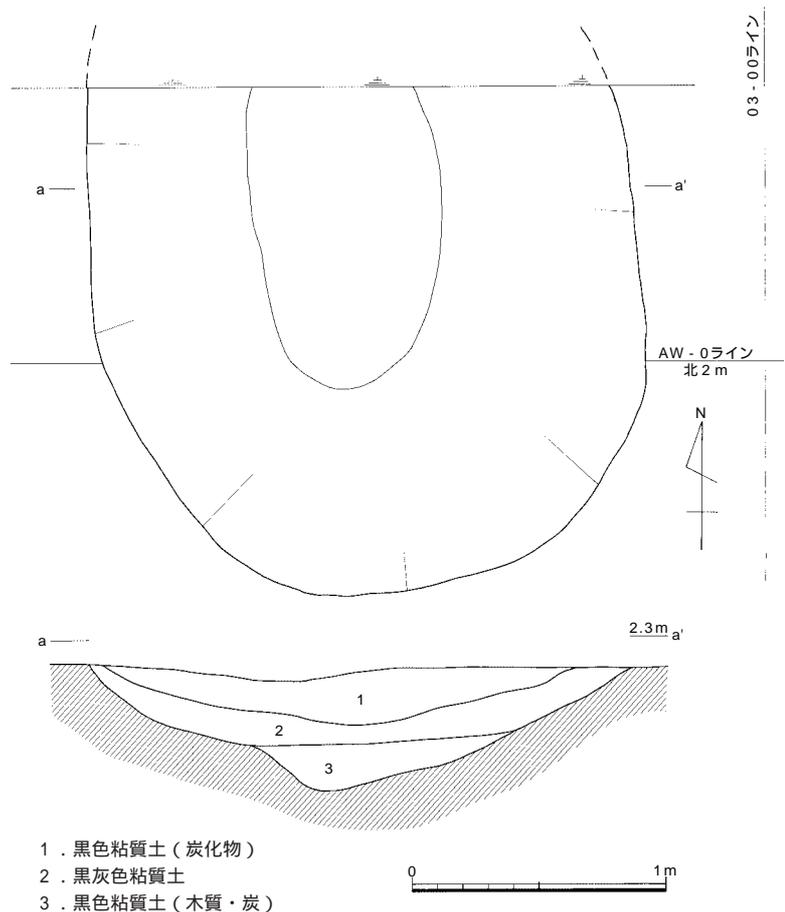
土坑191 (図150・151)

調査区の北端、AV03 - 09区で検出した。検出レベルは標高2.2mである。16層上面で検出されたものであるが、本土坑の上面は河道によって削平を受けており、本来の掘削面は高いものと考えられる。深さは0.45m、底面の標高は1.77mである。

北半は調査区外に延びるため不明であるが、全体の約2/3程が残存しており、平面形は長楕円形になるものと思われる。残存長は、東西2.15m、南北2.05mである。埋土は基本的には黒色を呈する粘質土であるが、炭化物や木質分の多寡により、3枚に分層される。いずれも湿地性を示す土質である。

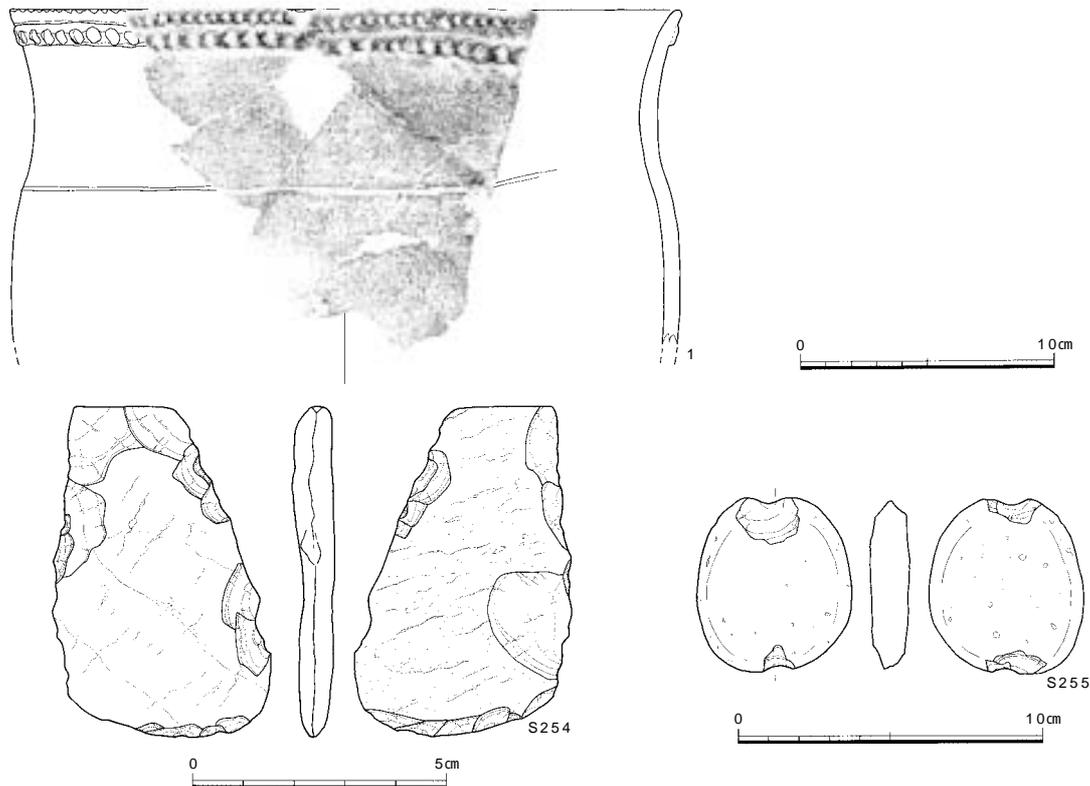
遺物の内容から、本遺構の時期は弥生時代早期と考えられる。

出土遺物には土器片20点・石器2点が認められ、そのうち土器1点・石器2点を掲載した(図151)。土器(1)は刻み目突帯文を有する深鉢である。石鍬(S254)は細粒砂岩製で、扁平で薄い素材の周縁を調整し整形するが、調整の単位は粗い。下縁に浅い角度で両面調整を施し、弧状の刃部をつくり出す。石錘(S255)は石英安山岩の円礫の上下端を打ち欠き利用している。



1. 黒色粘質土(炭化物)
2. 黒灰色粘質土
3. 黒色粘質土(木質・炭)

図150 土坑191 (縮尺1/30)



番号	器種	形態・手法の特徴				色調(外/内)	胎土
1	深鉢	(外)ナデ、胴部に横位沈線1条、貼付突帯上にD形刺突、口唇に刺突(内)ナデ+工具ナデ、復元口径26.4cm				黒褐/暗茶褐	細-微砂
番号	器種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石材	特徴
S254	石鎌	6.6	4.3	0.82	24.4	細粒砂岩	断面が薄い。素材周縁に両面調整。
S255	石錘	5.8	5.1	1.31	63.1	石英安山岩	扁平な碟の上下端に打ち欠き。

図151 土坑191出土遺物(縮尺1/3・2/3・2/5)

b. 河道と溝

河道(図134・152~157)

第22次調査地点の北半、AW-1ライン以北で検出した。検出レベルは標高2.7m、底面のレベルは東半で標高2.0m前後、西半で標高2.2m前後を測る。幅約4m、深さ0.45mが残存するが、bb'断面の状況からは、幅5m、深さ0.8mと復元される。埋土は灰白~暗灰白色を呈する粘質土である。

03-30ライン付近で北に向かって深みが伸びる部分がある。その部分は、北壁で幅約5m、深さ0.5m、底面のレベルは標高2.0mである。この北流する箇所については、河道底面の幅が3.2mから0.9mにまで狭まっており、自然流路に手を加え、水路状とした可能性を考えている。この後に述べる溝15の形状と走行方向が、この北流箇所と近似する点もその理由として挙げられる。

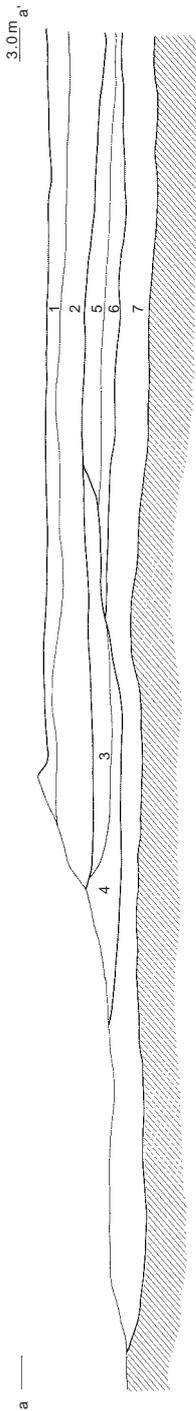
河道からの出土遺物はコンテナ(約28リットル)4箱、点数では土器片3,539点、石器35点と豊富であった。出土遺物には縄文時代後期~弥生時代中期前半のものが含まれる。図153-12・14~16・25は前期の土器である。14・15・21は前期前半、20は前期末に位置づけられる。17の壺は中期前半に位置づけられる。その他に縄文時代後期前葉の土器(1~5)・中葉に位置づけられるもの(6~8)・突帯文土器(10・11)がある。

河道の埋没時期としては、弥生時代中期前半と考えられる。

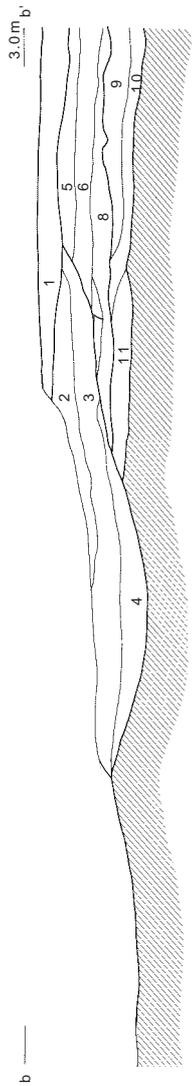
石器は石鎌・石錘・石鎌・石錘など35点が出土した(図154~157 図版22・24・25)。

石鎌は5点出土した(S256~260)。いずれもサヌカイト製で、凹基式4点、平基1点である。凹基式は、長

- aa 断面
1. 暗黄褐色砂 谷 3
 2. 淡黄褐色砂 谷 3
 3. 淡灰白色粘質土 河道
 4. 暗灰白色粘質土 河道
 5. 暗緑褐色砂 谷 2
 6. 暗黄灰色粘質土 谷 2
 7. 暗黑灰色粘質土 谷 1



- bb' 断面
1. 暗黄褐色砂 谷 3
 2. 淡緑灰色粘質土 河道
 3. 淡灰白色粘質土 河道
 4. 暗灰白色粘質土 河道
 5. 淡緑褐色砂 谷 2
 6. 暗緑褐色砂 谷 2
 7. 暗黄灰色粘質土 谷 2
 8. 淡黄灰色粘質土 谷 2
 9. 暗黑灰色粘質土 谷 1
 10. 淡黑灰色粘質土 谷 1
 11. 暗黄灰色粘質土 谷 1



- cc 断面
1. 暗黄灰色粘質土 谷 3
 2. 暗灰色粘質土 谷 2
 3. 淡灰色粘質土 谷 2
 4. 黑褐色粘質土 谷 1

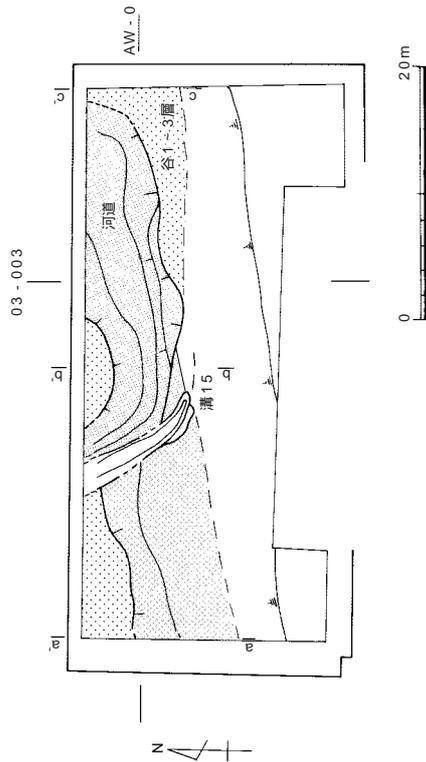
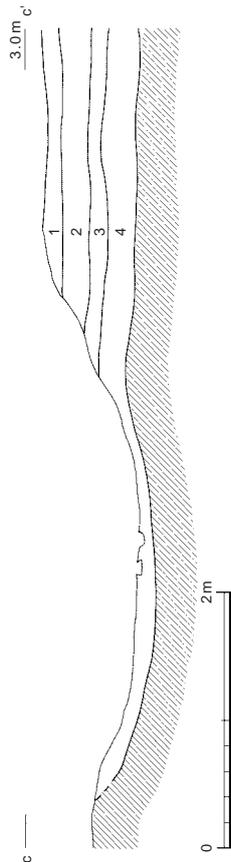
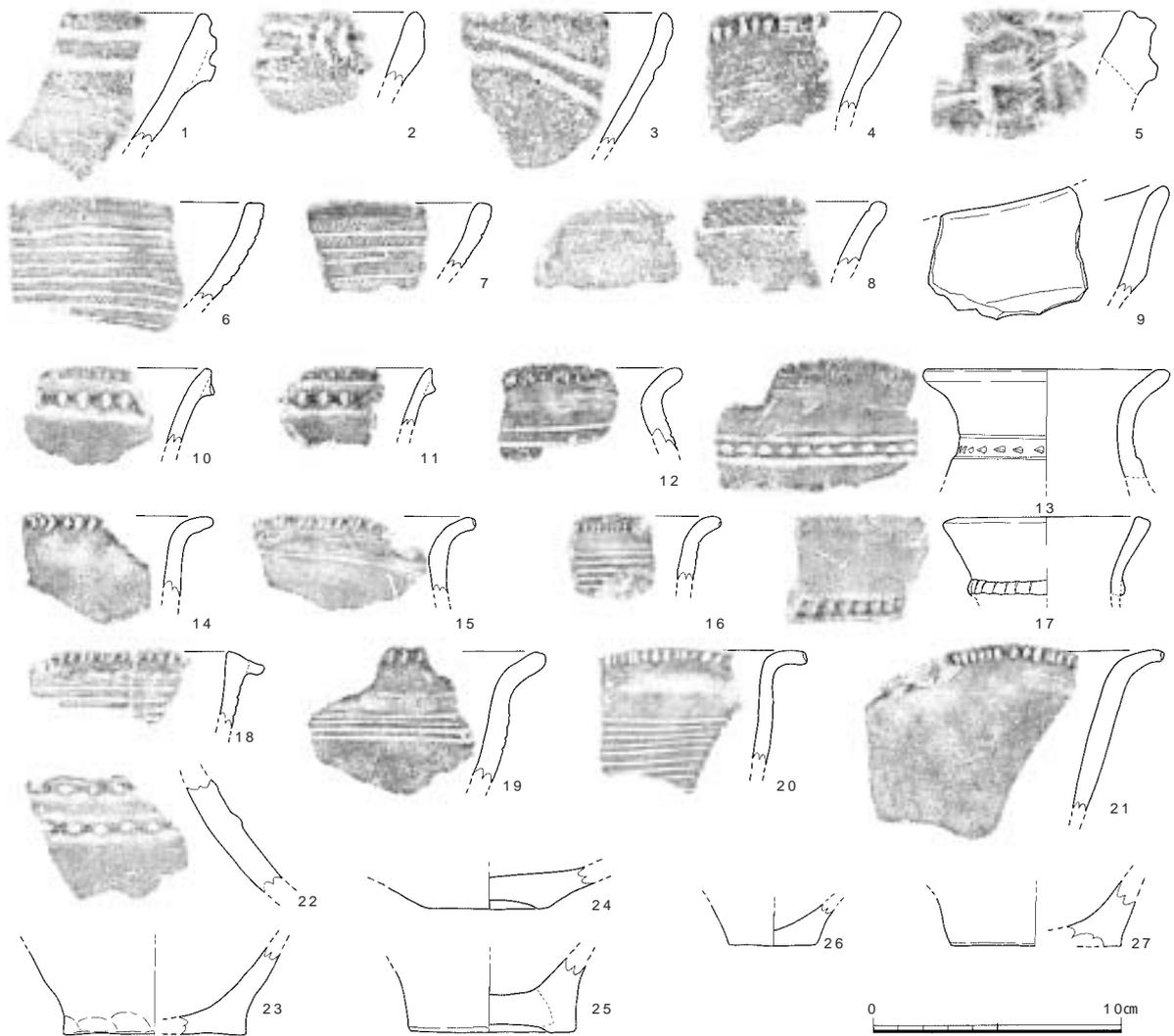
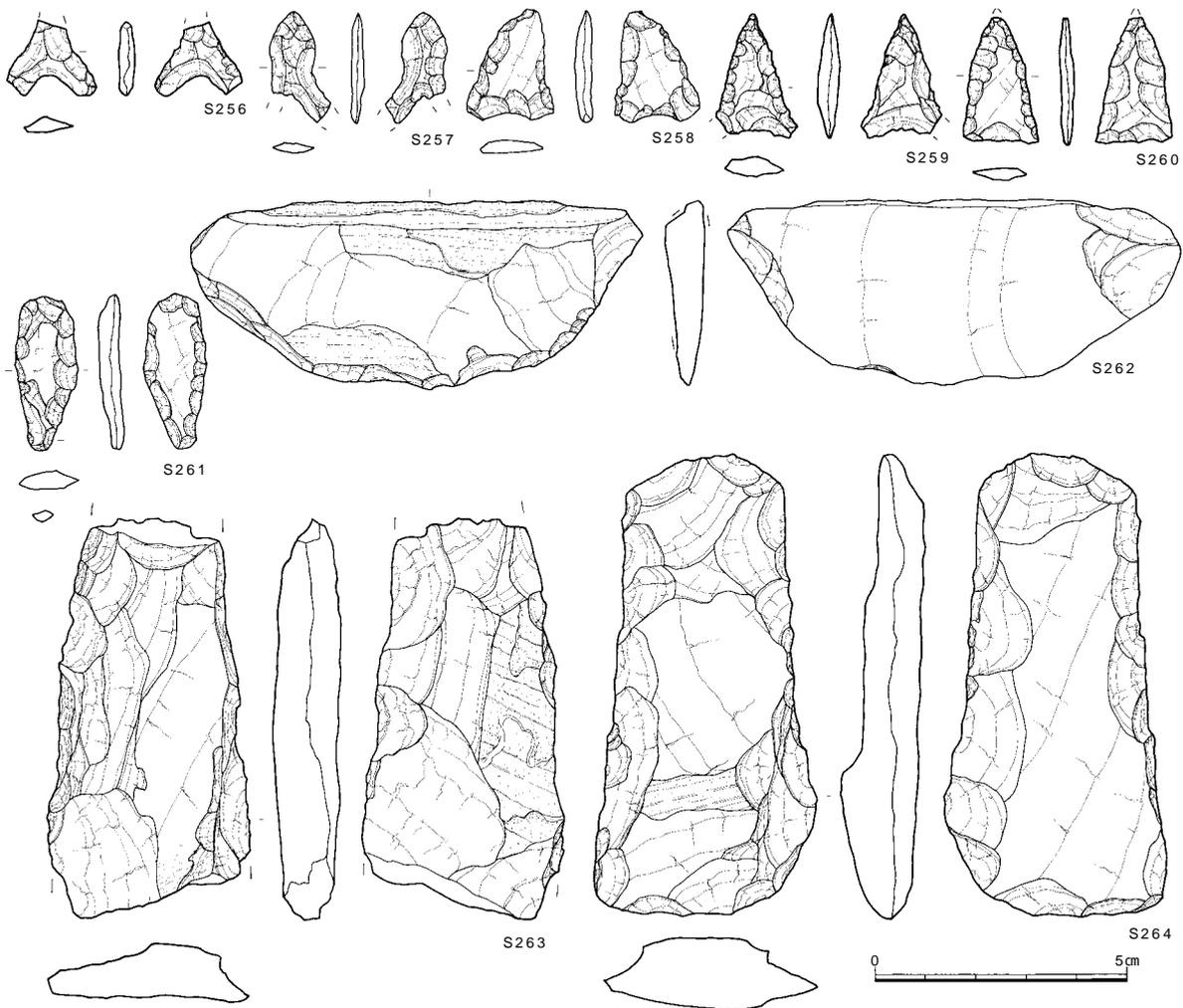


図152 河道・谷 1 ~ 3 (縮尺 1/60・1/600)



番号	器種	形態・手法ほか	色調(外/内)	胎土
1	深鉢	(外)ナデ、口縁部縄文、横位凹線2条(内)ナデ	淡黄褐	細砂
2	深鉢	(外)ナデ、口縁部に凹線文、(内)ナデ	暗褐/淡褐白	微-細砂
3	深鉢	(外)ナデ+凹線文、(内)丁寧なナデ	淡黄褐/淡灰褐	細砂
4	深鉢	(外)(内)ナデ、口唇部に刺突文	灰褐	粗砂
5	深鉢	把手、(外)ナデ+沈線文(内)ナデ	淡褐灰/暗灰	微-細砂
6	浅鉢	(外)縄文(RL)+横位沈線文(内)磨きに近いナデ	淡褐/暗褐	細砂
7	浅鉢	(外)縄文+横位沈線文(内)ナデ、6と同一個体か	淡茶褐	細砂
8	浅鉢	(外)ナデ、(内)口縁に縄文(RL)、ナデ+横位沈線1条	淡褐/灰褐	微-細砂
9	鉢	(外)ナデ(内)横ナデ	暗褐	微砂
10	深鉢	(外)ナデ、貼付突帯断面 + 形刺突、(内)ナデ、口唇に刻み	淡橙褐/淡褐	微-細砂
11	深鉢	(外)(内)ナデ、貼付突帯、断面、刺突D形、口唇に刻み	淡褐	微砂
12	甕	(外)ナデ、横位沈線、口縁に刺突(内)ナデ	淡橙	細砂
13	甕	(外)ナデ、頸部に横位沈線2条、その間に刺突文(内)ナデ	淡灰褐-暗灰	微砂
14	甕	(外)ナデ、口縁に刺突(内)ナデ	淡橙	細砂
15	甕	(外)ナデ、横位の沈線1条、口唇に刻目(内)押圧+ナデ	淡黄褐	細砂
16	甕	(外)ナデ+横位沈線文、口唇に刺突(内)ナデ	淡褐-暗褐	細砂
17	甕	(外)横ナデ、頸部に貼付突帯。突帯上に刺突文(内)横ナデ	暗茶褐/暗灰褐	微砂
18	甕	(外)ナデ、押圧+横位沈線文、口唇に刺突(内)ナデ	黒褐/淡橙	細砂
19	甕	(外)ナデ、横位沈線4条、口縁に刺突(内)ナデ	淡白褐	微-細砂
20	甕	(外)ナデ+横位沈線文、口唇に刺突(内)ナデ	淡橙/一部橙	微砂
21	甕	(外)ナデ、口唇に刻目、(内)押圧+ナデ	淡橙-淡灰褐	細砂
22	甕	(外)横ナデ、頸部付近に二条突帯。突帯上に刺突文、(内)横ナデ	黄褐	微砂
23	甕?	(外)(内)押圧+ナデ、1/3残、復元底径7.4cm	茶褐-橙褐/褐白	微砂
24	鉢	(外)(内)押圧+ナデ、7/8残、復元底径4.4cm	暗褐/暗褐-黒	細-粗砂
25	甕	(外)(内)押圧+ナデ、内面煤付着、1/2残、復元底径6.6cm	橙-暗橙/黒褐	粗砂
26	甕?	(外)(内)丁寧なナデ、3/5残、復元底径3.6cm	橙褐/暗灰褐	微砂
27	甕	(外)(内)押圧+ナデ、1/4残、復元底径7.0cm	暗灰褐/淡橙	細砂

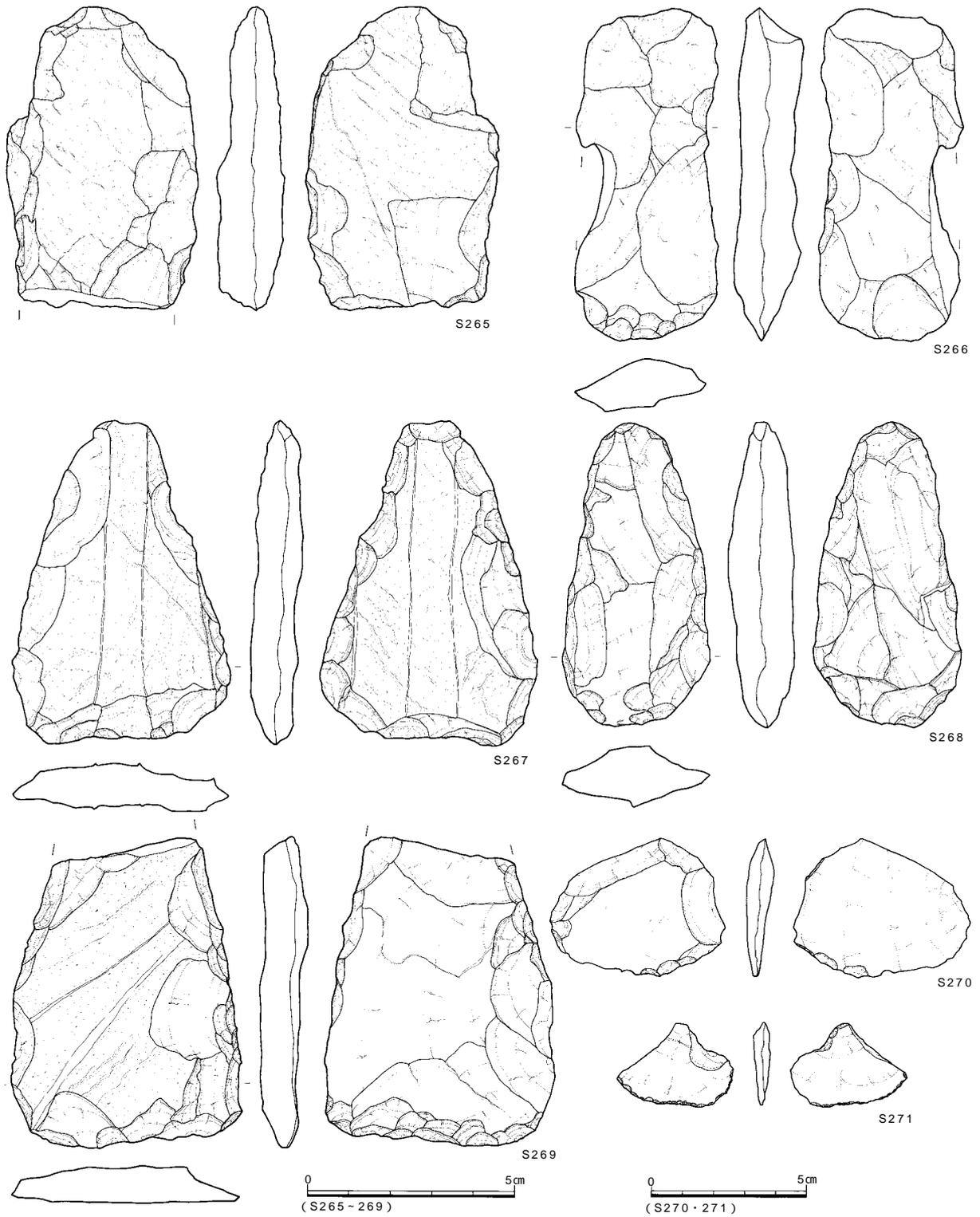
图153 河道出土土器(縮尺1/3)



番号	器種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石材	特徴
S256	石鏃	(1.55)	(1.80)	0.30	(0.6)	サヌカイト	凹基式。挟りは明瞭。脚部は幅広。
S257	石鏃	(2.20)	(1.20)	0.25	(0.4)	サヌカイト	凹基式。挟りは明瞭。脚部欠損。
S258	石鏃	2.20	1.70	0.25	1.4	サヌカイト	凹基式。素材面を大きく残す。未成品か？
S259	石鏃	2.50	(1.65)	0.40	1.1	サヌカイト	凹基式。脚部を欠損。
S260	石鏃	(2.55)	1.55	0.25	0.9	サヌカイト	平基式。長幅比は大きい。
S261	石鏃	3.10	1.25	0.45	1.9	サヌカイト	横長小剥片の周縁に両面調整。
S262	スクレイパー	3.75	8.90	0.80	86.4	細粒砂岩	扁平素材の下辺縁に片面調整。
S263	石鏃	(8.00)	4.00	1.65	(50.8)	粘板岩	刃部欠損。両側縁に粗い調整。
S264	石鏃	9.25	4.45	1.55	61.4	細粒砂岩	扁平素材の周縁に両面調整。

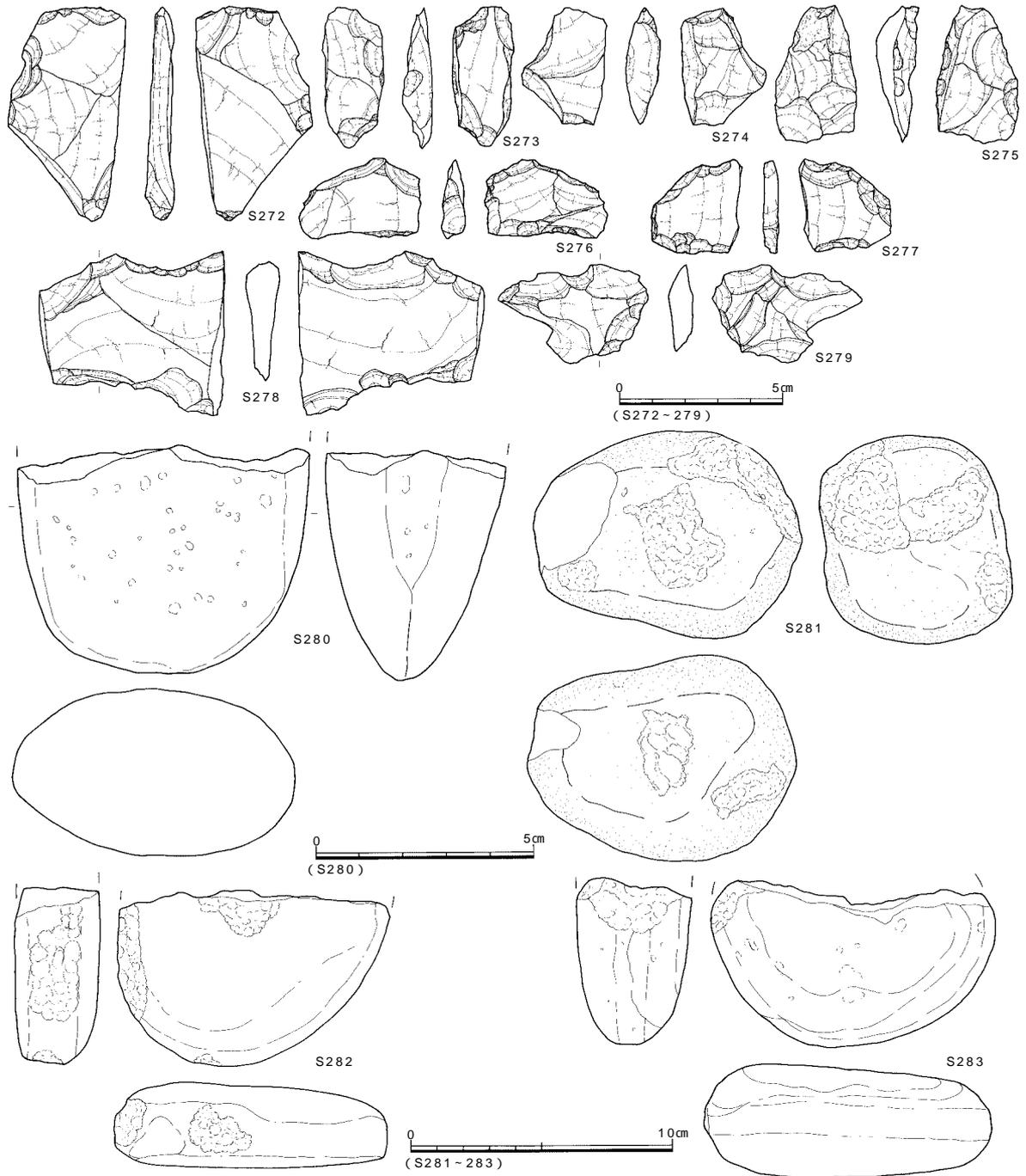
図154 河道出土石器1(縮尺2/3)

幅比や脚部形態などに差異がある。S256は挟りが明瞭で脚部は幅広である。先端部から脚部へ向かう側縁が中央付近で屈曲する。S259は細長で側縁が直線状にのびる。S258は素材面を大きく残しており、未成品かもしれない。S260は大型の平基式で先端部付近の側縁がわずかに屈曲し、平面が五角形状になる。石鏃は1点出土した。S261はサヌカイト製で、横長小剥片を素材とし、周縁に細かい両面調整を施す。下半部にははやや広めの調整を重ね、素材の幅を減じて鏃部分をつくり出している。握り部分は扁平である。スクレイパー(S262)は砂粒砂岩製で扁平な素材の下縁に浅い角度で片面調整を加え、鋭利な刃部をつくり出し、石包丁状に仕上げている。ただ下縁の調整は、それほど密とはいえず、また上縁には素材面がそのまま残ることから、素材自体が石包丁状の形状であったようである。石鏃は7点出土した(S263~269)。細粒砂岩製と粘板岩製のものがある。いずれも遺跡付近で採取可能な石材である。両側縁がバチ状に大きく開き基部先端が尖るもの(S267、268)とそ



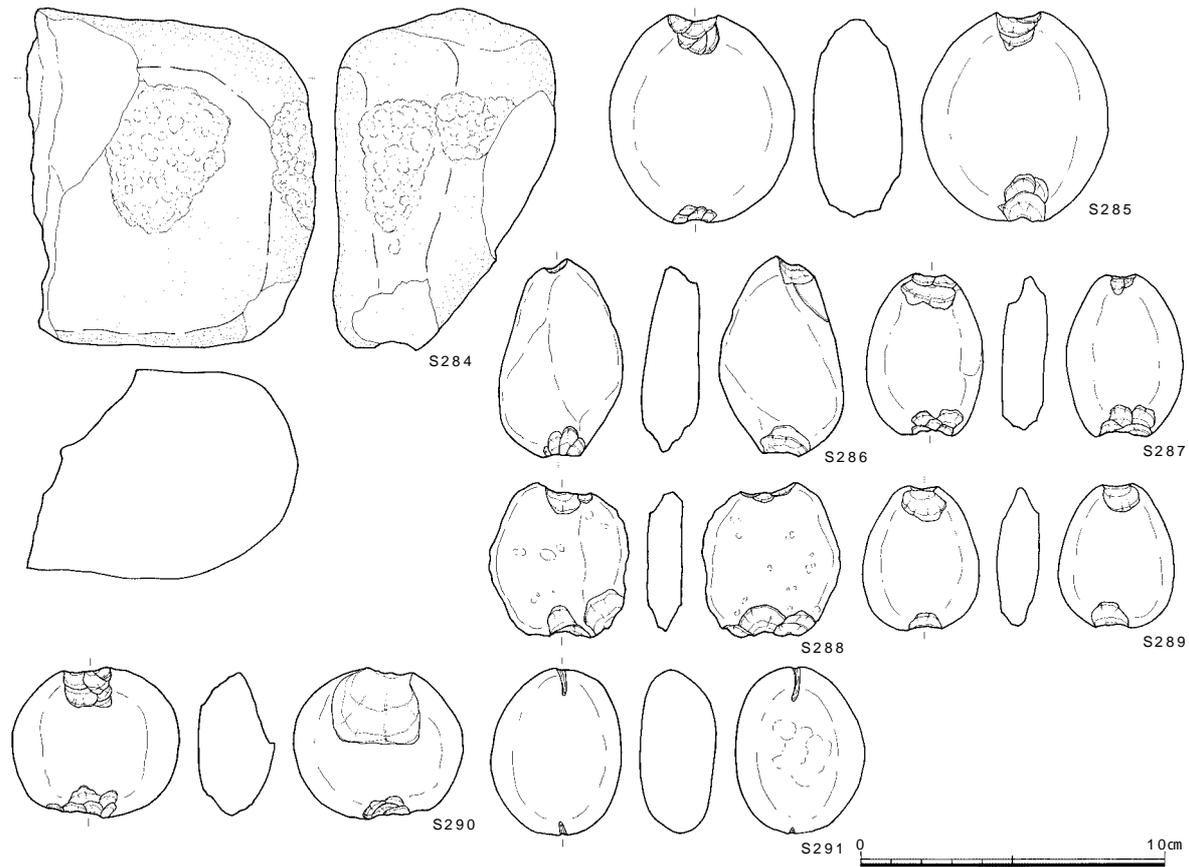
番号	器種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石材	特徴
S265	石鎌	(7.40)	4.60	1.80	62.7	細粒砂岩	刃部欠損。周縁に粗い調整。
S266	石鎌	(8.10)	(3.90)	1.65	(49.7)	細粒砂岩	粗い調整。未成品か？
S267	石鎌	8.90	5.25	1.15	56.0	細粒砂岩	側縁に抉りを意図した剥離。直刃。
S268	石鎌	7.40	3.55	1.60	41.3	粘板岩	小型品。刃部付近に摩滅部分と擦痕。
S269	石鎌	7.55	5.60	1.00	60.0	粘板岩	基部欠損。直線状の刃部。
S270	加工剥片	4.50	5.60	0.80	16.6	サヌカイト	下辺部の一部に両面調整。
S271	微細剥片	2.75	3.70	0.55	3.7	サヌカイト	下辺部に微細な剥離痕。

図155 河道出土石器2 (縮尺2/3・1/2)



番号	器種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石材	特徴
S272	楔形石器	6.60	3.60	0.90	20.2	サヌカイト	石核状。上下端に階段状のつづれた剥離。
S273	楔形石器	3.60	2.50	1.10	9.8	サヌカイト	下端に階段状のつづれた剥離。
S274	楔形石器	4.30	1.90	0.95	7.7	サヌカイト	上下端に階段状のつづれた剥離。
S275	楔形石器	4.20	2.50	1.20	10.5	サヌカイト	一部に自然面。
S276	楔形石器	2.40	4.75	0.70	8.5	サヌカイト	上下端に相対する剥離。
S277	楔形石器	2.85	2.80	0.50	5.0	サヌカイト	右側面に剪断面。上下端に階段状剥離。
S278	石核	5.00	4.70	1.00	33.1	サヌカイト	上下端に両面調整。両側面に折断面。
S279	石核	3.05	4.6	0.75	8.6	サヌカイト	打面転位しつつ、小剥片を剥離。
S280	磨製石斧	(5.30)	(6.70)	(4.10)	(193.5)	安山岩	刃部のみ残存。使用による刃潰れ部位。
S281	叩石	10.30	8.00	7.10	767.5	石英安山岩	円盤の3面に敲打痕。
S282	叩石	(6.80)	10.35	3.30	(347.7)	花崗閃緑岩	下端、側縁に明瞭な敲打痕。
S283	敲打石	(6.40)	10.9	(4.40)	(402.3)	流紋岩質凝灰岩	下端、側縁に明瞭な敲打痕。

図156 河道出土石器3 (縮尺1/2・2/3・2/5)



番号	器種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石材	特徴
S284	凹石	11.30	(9.50)	7.30	1028.2	石英安山岩質凝灰岩	片面中央に敲打、線条痕。
S285	石錘	6.90	6.20	2.90	168.6	流紋岩	円礫の上下端に打ち欠き。
S286	石錘	6.60	4.05	1.95	63.2	泥岩	円礫の上下端に打ち欠き。
S287	石錘	5.35	3.85	1.30	38.3	流紋岩	扁平な円礫の上下端に打ち欠き。
S288	石錘	5.15	4.60	1.55	37.0	流紋岩質凝灰岩	扁平な礫の上下端に打ち欠き。
S289	石錘	4.80	3.80	1.30	36.7	石英安山岩	小型品。扁平な礫の上下端に打ち欠き。
S290	石錘	4.90	5.50	2.55	89.7	流紋岩	円礫の短軸両端に大きく打ち欠き。
S291	石錘	5.55	4.30	2.40	70.3	流紋岩	円礫の上下端に打ち欠き。

図157 河道出土石器4(縮尺2/5)

れほど開かないもの(S263~266・S269)がある。多くは扁平な素材の周縁に調整を施して整形し、下縁部に両面調整によって弧状もしくは直線状の刃部をつくり出す。ただ、個体ごとに調整には粗密がある。また、基部側と刃部側で折断されたものが多く、使用時に欠損した可能性が高い。S264は両側縁があまり開かない平面形で、素材面を残すが、比較的丁寧な両面調整を周縁に施す。刃部は緩やかな弧状で厚く、全体の重心が刃部側に寄る。S268は小型の完形品で周縁からの比較的広い剥離によって、全体的な形状を整えた後に、周縁に細かい調整を施す。横断面は比較的整った凸レンズ状である。刃部は厚みのある弧状のもので、基部から刃部にかけて徐々に厚みを増す。刃部付近には両面に使用による摩滅部分と擦痕が残る。

加工痕のある剥片(S270)は剥片の下縁部の一部に両面調整が認められる。微細な剥離痕のある剥片(S271)は扇形の剥片の下縁部全体に微細な剥離痕がある。非常に微細であり、使用痕の可能性が高い。右側縁には調整が認められる。楔形石器は6点が出土した(S272~277)。すべてサヌカイト製である。上下端に階段状のつぶれた剥離を持つものを含めた。S272は石核状の大型品で、上端と下端に狭い範囲ながら階段状の剥離が認められる。S277は明瞭な剪断面を持つものである。石核は2点出土した(S278・279)。S278は板状のもので、小剥片を剥離した後に、上下縁を粗く両面調整している。また両側面に折断面がある。S279は、周縁から無作為

的に小片を剥離したもので、石鏃などに利用する剥片を剥離したと考えられる。

磨製石斧（S280）は安山岩製で、乳棒状石斧の刃部のみ残存する。丁寧な研磨によって、表面は平滑であるが、わずかに敲打痕も残る。刃部は弧状の両刃で、刃の縁辺に沿った部分は両面ともにU字形に特に入念に研磨され、刃が研ぎだされている。使用による刃潰れ部分も下端に確認できる。使用時に欠損したものであろう。

叩石は3点出土した（S281～283）。S281は礫の3面中央に敲打痕が残る。S282は花崗閃緑岩の扁平な礫を折断して利用しており、下端、側縁に敲打痕が残る。凹石（S284）は礫の表面に敲打、線条痕が残る。石錘は7点出土した（S285～291）。円礫の両端を打ち欠くものと摺り切りによって溝をもうけるものがある。

溝15（図158・159）

調査区の北端AW93・20・30、AW03・10～30、AW13・20・30にかけて検出した。本溝は弥生時代中期前半の河道の脇にちょうど沿った形であり、河道の流路を意識して掘削されたものと考えられる。検出時の標高は2.2～2.56m、底面のレベルは標高1.68～2.36mである。

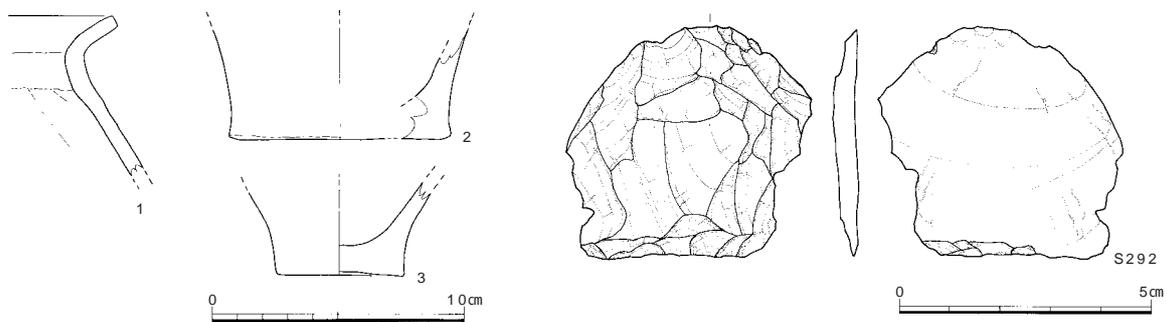
AW-1ラインから北壁に向かってわずかに深くなっており、北西方向へ向けて走行したのと考えられる。AW-1ライン付近で東へ屈曲して、検出部分の最東端では底面のレベルは標高2.36mで、最深部よりも約40cm程浅く、東端において急に浅くなる。検出できたのは03・20ライン付近までで、以東については削平されている。

aa'断面とbb'断面とは断面形態や埋土の状況が大きく異なる。bb'断面では、6・7層がaa'断面に対応するもので断面の形状もaa'断面に似た緩やかな傾斜である。それに対して、これを切って、断面四角形状に4・5層が堆積していることから、AW-0ライン以南の部分は掘り直しを行っているものと考えられる。cc'断面はbb'断面との共通性を強く示している。

溝15はaa'断面にみられるような傾斜の緩やかな皿状である中で、一部をbb'断面にみられるしっかりとした形状の溝へと改修したものである。また前述した河道の水路部分に沿っていることから、当初自然河道の一部を利用した水路であったものを、若干位置をずらして溝として整備し、管理したものと考えられる。

遺物は土器片120片余・石器が出土した。図158-1・2・3は器形・胎土の特徴から中期前半のもの判断した。石器はサヌカイト製スクレイパーが1点出土した（図158-S292）。寸胴な剥片下辺に両面から浅い角度で調整を行い、鋭い刃部をつくり出している。

出土遺物から本遺構の時期は弥生時代中期前半に埋没したものと考えている。



番号	器種	形態・手法ほか	色調（外/内）	胎土
1	甕	（外）ナデ+縦八ケ目（内）押圧+ナデ	淡茶褐/淡褐	微～細砂
2	甕	（外）（内）ナデ+押圧、1/4残、復元底径8.8cm	淡橙褐/淡褐	粗砂
3	甕	（外）（内）押圧+丁寧なナデ、底部完存、底径4.9cm	淡橙～淡灰褐/褐灰	細砂

番号	器種	最大長（cm）	最大幅（cm）	最大厚（cm）	重量（g）	石材	特徴
S292	スクレイパー	4.60	4.80	0.52	12.5	サヌカイト	不安定な剥片の下縁に両面調整。

図158 溝15出土遺物（縮尺1/3・2/3）

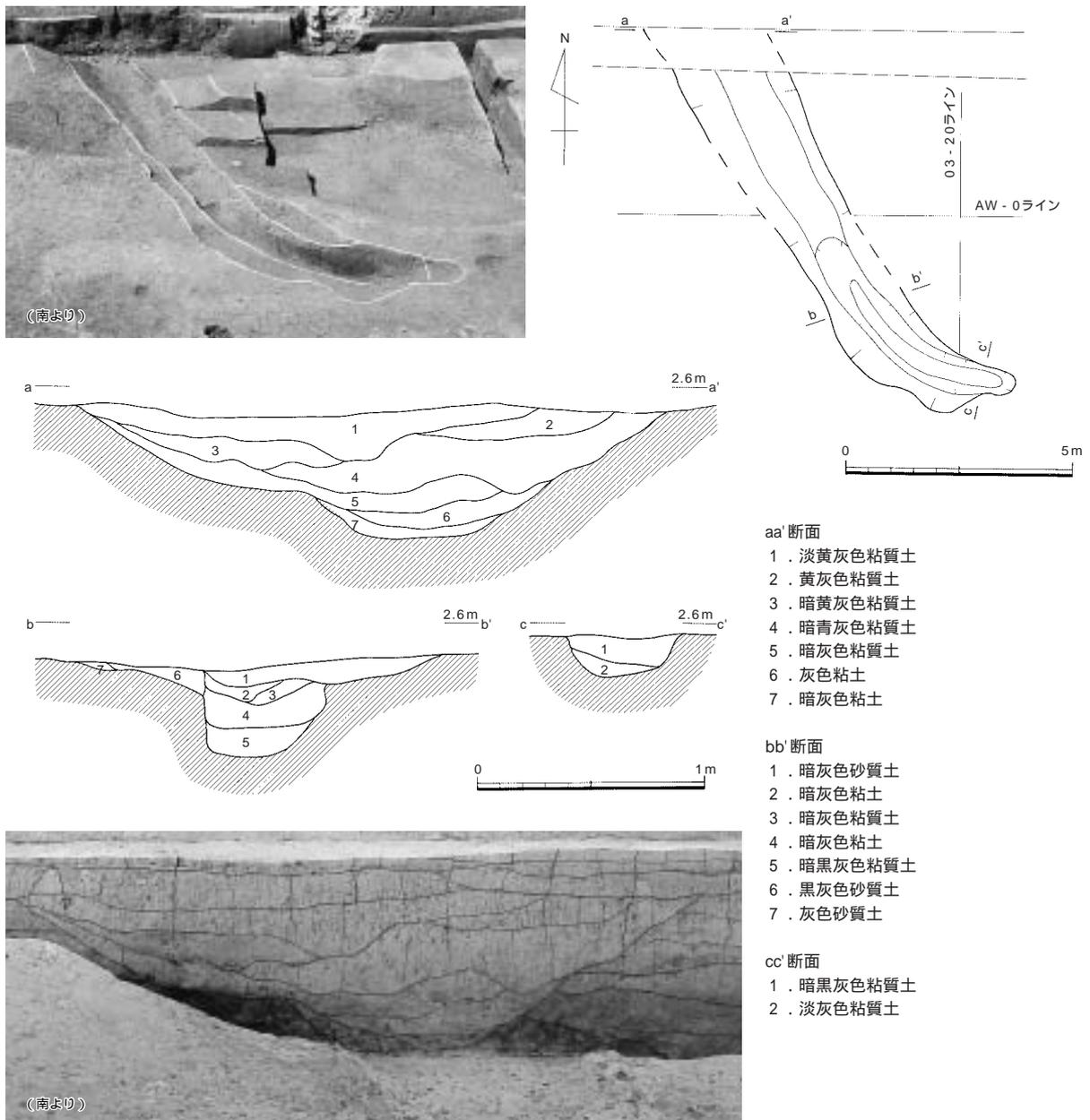
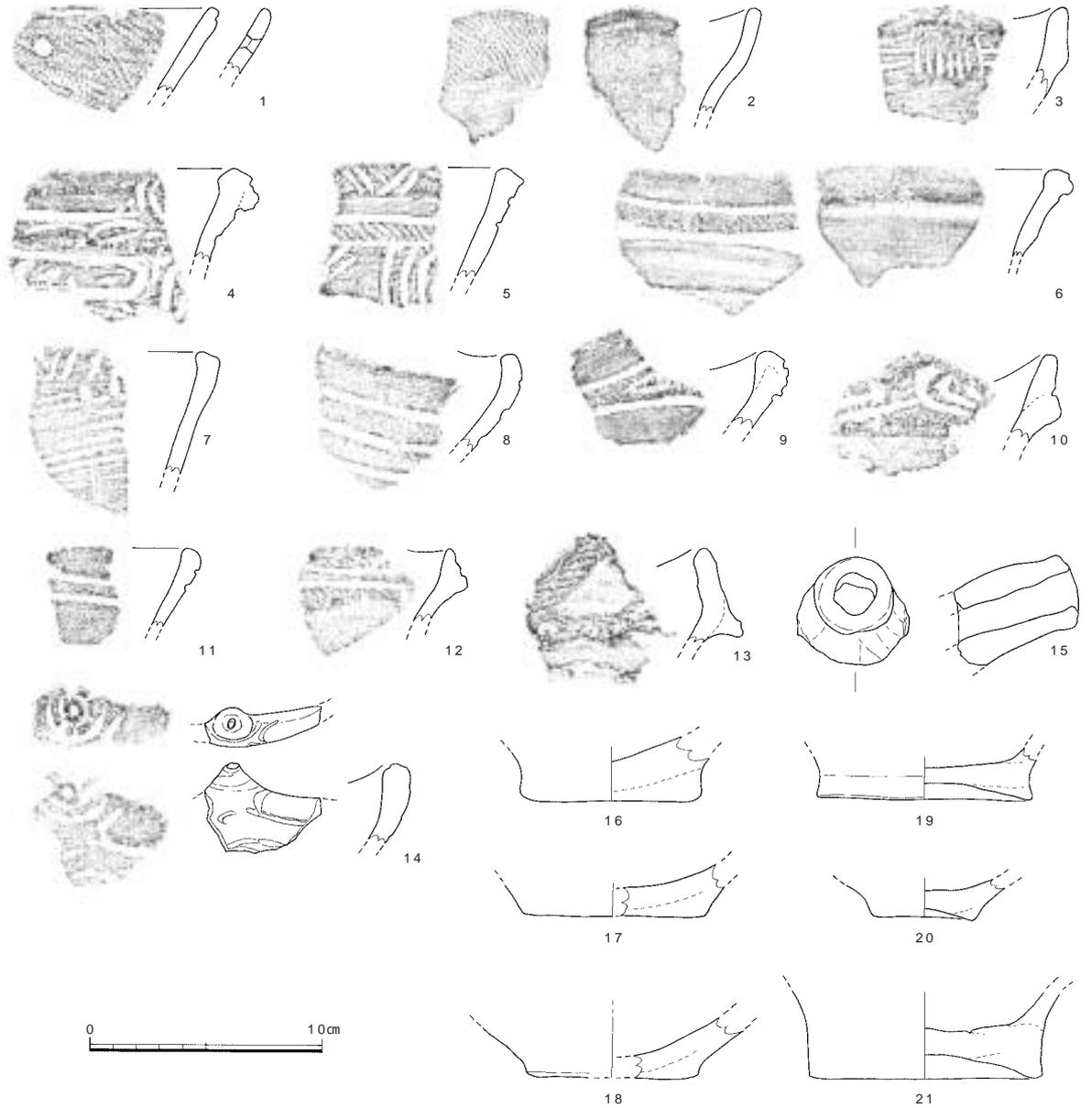


図159 溝15 (縮尺1/150・1/3)

c. 谷部出土遺物

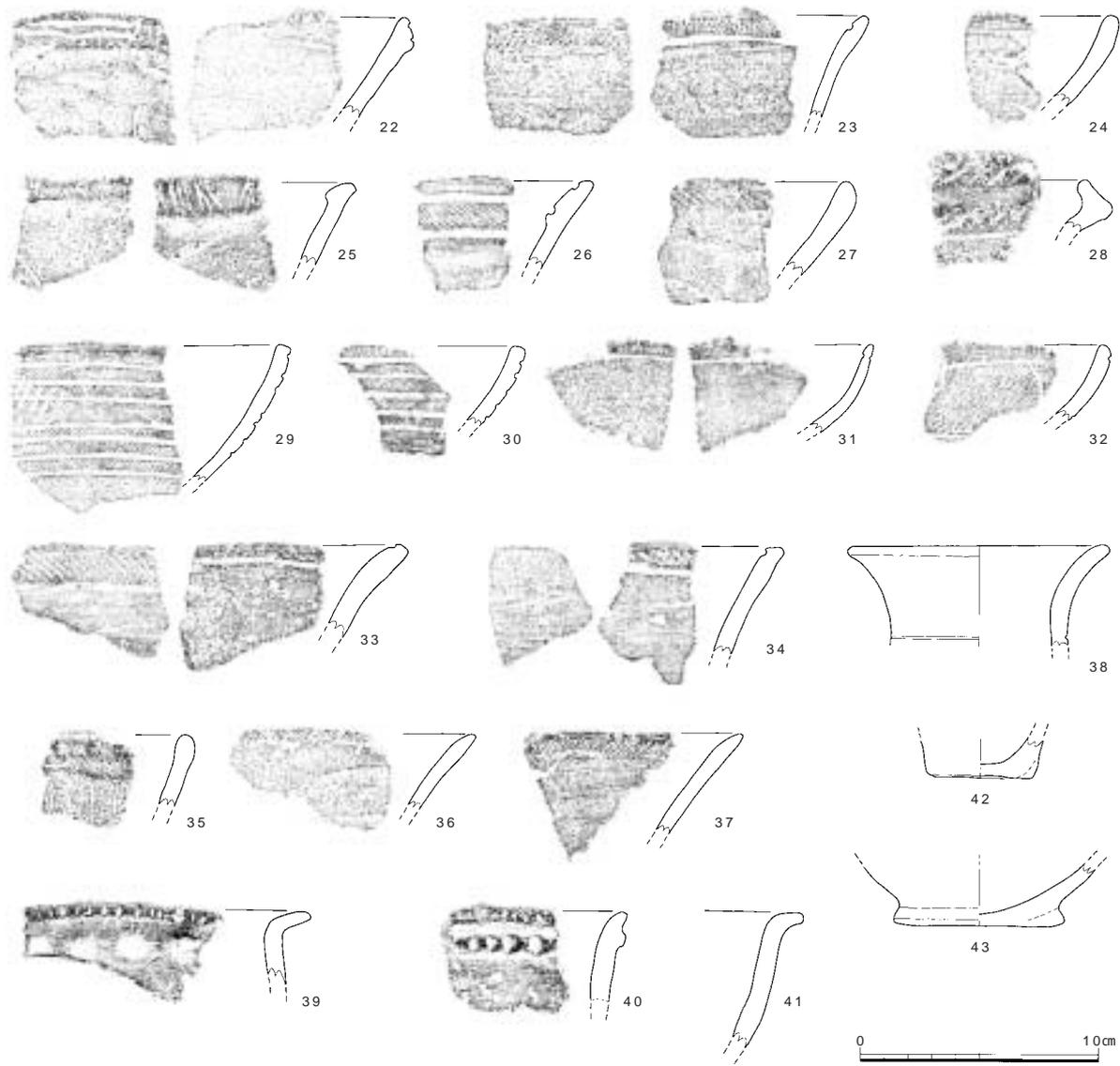
谷1～3層からは、合計でコンテナ(約28リットル)3/4箱、1300点余の遺物が出土した。その8割は谷1層からの出土であり、これらには弥生時代前期～前期末の遺物の他に、多量の縄文時代後期遺物が含まれている点特徴的である。谷1層はこの特徴と土質の点から、微高地部に堆積する13層に対応する可能性が高いと考えているが、直接関係する部分は削平を受けているため不明である。前述したように第17次調査地点の5・6区付近に堆積する「13層」については、弥生時代前期に縄文土層を伴って動かされた土層と考えており、谷1層との関係を考えた場合、「動かされた」時期は弥生時代前期末といえることができる。同じく前期末に比定される谷2層の遺物出土量はコンテナ1/4箱、200点足らずであり、この点でも谷1層が特異な状況にあることを示している。以下に個々の土層出土遺物についてみていこう。

調査の記録



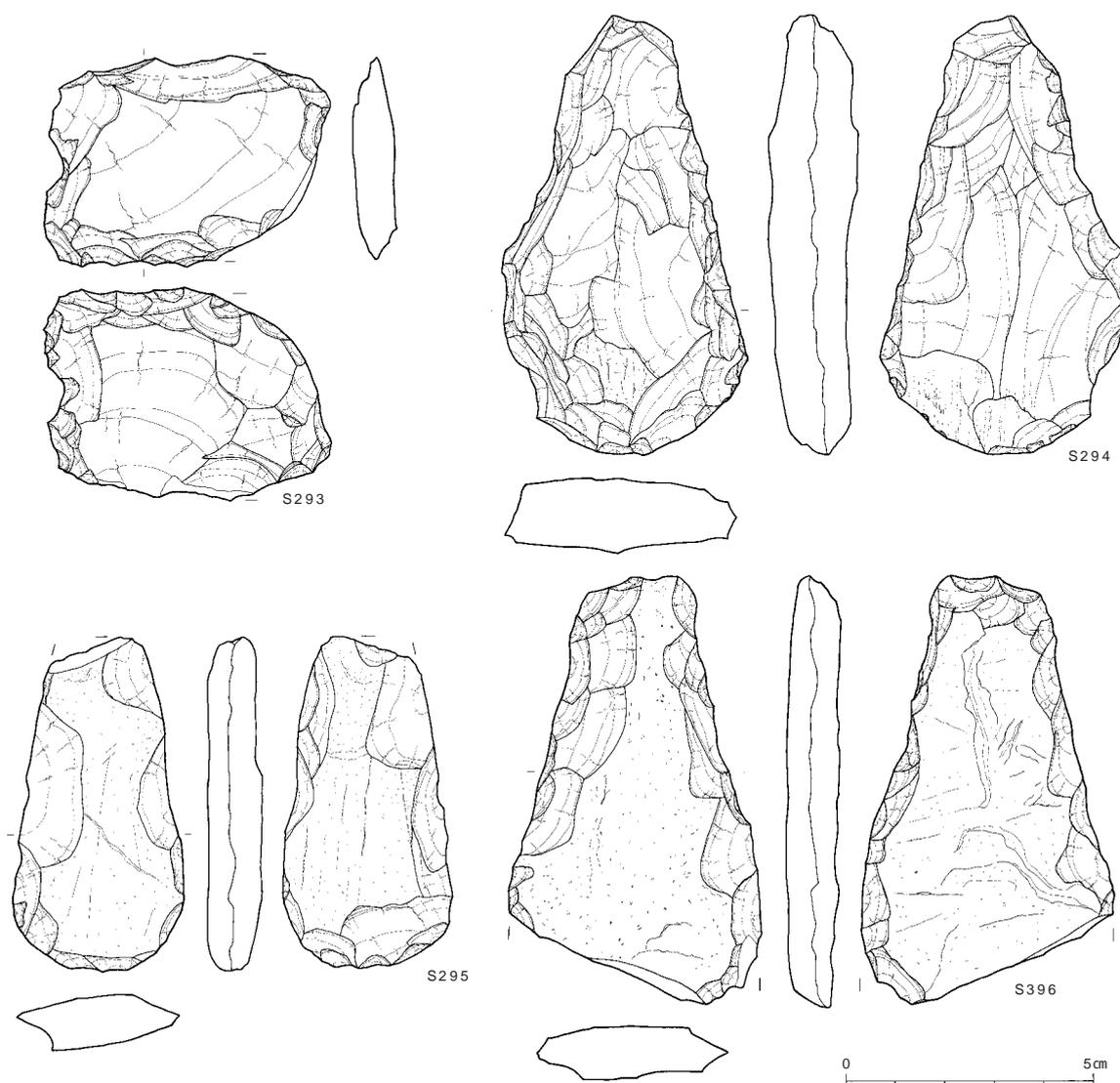
番号	器種	形態・手法ほか	色調(外/内)	胎土
1	鉢	(外)沈線文1条、縄文(RL)、(内)磨き、焼成後穿孔(径0.8mm)	暗灰	細-粗砂
2	浅鉢	波状口縁、(外)縄文(RL)、磨き、(内)押圧+磨き	淡灰茶褐	細砂
3	深鉢	口縁帯僅かに肥厚(外)縦位7条+横位2条、糸痕+ナデ、(内)磨き、波状口縁	暗黄灰-暗茶灰	微-細砂
4	深鉢	(外)口縁肥厚、広めの凹線文、ナデ、一部に縄文残す、(内)ナデ+押圧	淡黄褐	細-粗砂
5	深鉢	(外)口唇部凹線文、横位沈線2条+その間に縄文(RL)、沈線文+磨消、(内)ナデ	暗橙褐-茶褐	細砂
6	深鉢	(外)ナデ、肥厚部の上下に横位凹線+縄文、(内)磨き	茶褐	微-細砂
7	深鉢	(外)横-斜め糸痕、口唇部へラ刺突(内)ナデ+押圧	淡茶褐/淡橙-黄褐	微-細砂
8	深鉢	(外)磨消縄文+凹線文、(内)ナデ+押圧、波状口縁	淡黄褐白/暗灰褐	細砂
9	深鉢	(外)縄文+沈線文、磨消縄文、(内)ナデ、波状口縁	黄橙褐/灰褐	細砂
10	深鉢	(外)縄文+沈線文、磨消、ナデ、(内)ナデ、波状口縁	淡灰褐	細砂
11	鉢	(外)ナデ、沈線文2条、(内)押圧+ナデ	暗茶褐/暗灰褐	細砂
12	深鉢	(外)沈線文+縄文(RL)、ナデ、(内)ナデ	淡灰褐	細-粗砂
13	深鉢	(外)縄文(RL)+押圧、ナデ、(内)押圧+ナデ、波状口縁	淡橙褐	細砂
14	深鉢	(外)縄文(RL)+凹線文、(内)磨き、ナデ、波状口縁	茶褐	微-細砂
15	注口土器	接合部付近に沈線1条巡る、工具ナデ+押圧	淡黄褐	細砂
16	深鉢	(外)(内)ナデ、1/4残、復元底径7.6cm	褐灰	細砂
17	深鉢	(外)(内)ナデ+押圧、1/4残、復元底径7.9cm	淡橙	細砂
18	深鉢	(外)粗いナデ(内)ナデ+押圧、1/4残、復元底径7.4cm	淡黄褐/黒	細砂
19	深鉢	(外)ナデ(内)ナデ+押圧、1/4残、復元底径9.3cm	淡黄褐	細砂
20	鉢	(外)ナデ、ローリングにより荒れ(内)ナデ+押圧、4/5残、復元底径4.3cm	淡橙/黒褐	細砂
21	深鉢	(外)ナデ+押圧、(内)ナデ、完存、底径10.1cm	暗褐白/淡橙	細砂

図160 谷1層出土土器1(縮尺1/3)



番号	器種	形態・手法ほか	色調(外/内)	胎土
22	深鉢	(外)口縁肥厚部に2条横位沈線+縦位2条、押圧+ナデ、(内)押圧+ナデ	淡橙褐/淡灰押褐	精良、細砂
23	深鉢	(外)縄文+磨消縄文+磨き、(内)磨き、口縁に沈線1条	黒	精良、細-粗砂
24	鉢	(外)(内)ナデ・条痕	黄褐	精良、微-細砂
25	深鉢	(外)ナデ+沈線文、(内)口縁ヘラ沈線文、ナデ	黄褐	精良、微砂
26	深鉢	(外)ナデ、(内)凹線2条、縄文(RL)+ナデ	淡褐-暗褐	精良、細砂
27	浅鉢	(外)縄文(RL)、ナデ、(内)押圧、ナデ、口縁縄文	淡灰褐	精良、細砂
28	深鉢	(外)ナデ、刻み+横位沈線、口唇部付近縄文(RL)(内)押圧+ナデ	淡押褐灰	精良、細砂
29	浅鉢	(外)沈線文7条、縄文(RL)、一部磨消(内)磨き	暗茶褐-暗灰褐	精良、細砂
30	浅鉢	(外)沈線文4条、縄文(RL)、一部磨消、(内)磨き、1と同一個体が	暗茶灰/暗黒灰	精良、細砂
31	浅鉢	(外)口縁縄文、ナデ、(内)磨きに近いナデ、口縁縄文	淡茶褐	精良、微-細砂
32	鉢	(外)沈線文2条、縄文(RL)、(内)ナデ	淡灰褐/淡灰褐-暗灰	精良、細砂
33	深鉢	(外)工具ナデ+口縁部縄文(RL)、口縁やや肥厚、(内)ナデ、口縁に沈線1条	暗茶褐	精良、細砂
34	深鉢	(外)ナデ、(内)工具ナデ、口縁に沈線1条、口縁に縄文(RL)	淡灰褐/暗灰黒	精良、細砂
35	深鉢	(外)口縁部斜位沈線+下位は縦位沈線(4条一組)、(内)条痕	淡橙	精良、細砂
36	浅鉢	(外)口縁縄文、粗めのナデ、(内)磨き	淡褐/暗灰褐	精良、細砂
37	浅鉢	(外)口縁縄文+磨き、(内)磨きに近いナデ	暗灰褐	精良、細砂
38	壺	(外)(内)ていねいなナデ、頸部外面に沈線一条、1/6残、復元口径10.6cm	淡橙	精良、微砂
39	甕	(外)ナデ+押圧、口縁部刻目、(内)丁寧なナデ+一部押圧	淡褐-灰褐/暗灰褐	精良、微-細砂
40	深鉢	(外)ナデ、貼付突帯上に刺突(形、やや深め)、口縁にも刻目、(内)ナデ	暗褐灰	精良、微-細砂
41	甕	(外)(内)ナデ	淡橙白/淡橙	精良、細砂
42	鉢	(外)ナデ+押圧(内)ナデ+押圧、1/2残、復元口径4.2cm	黒/淡褐白	微-細砂
43	深鉢	(外)やや粗いナデ(内)ナデ、2/5残、復元口径6.8cm	暗灰褐	微-細砂

図161 谷1層出土土器2(縮尺1/3)



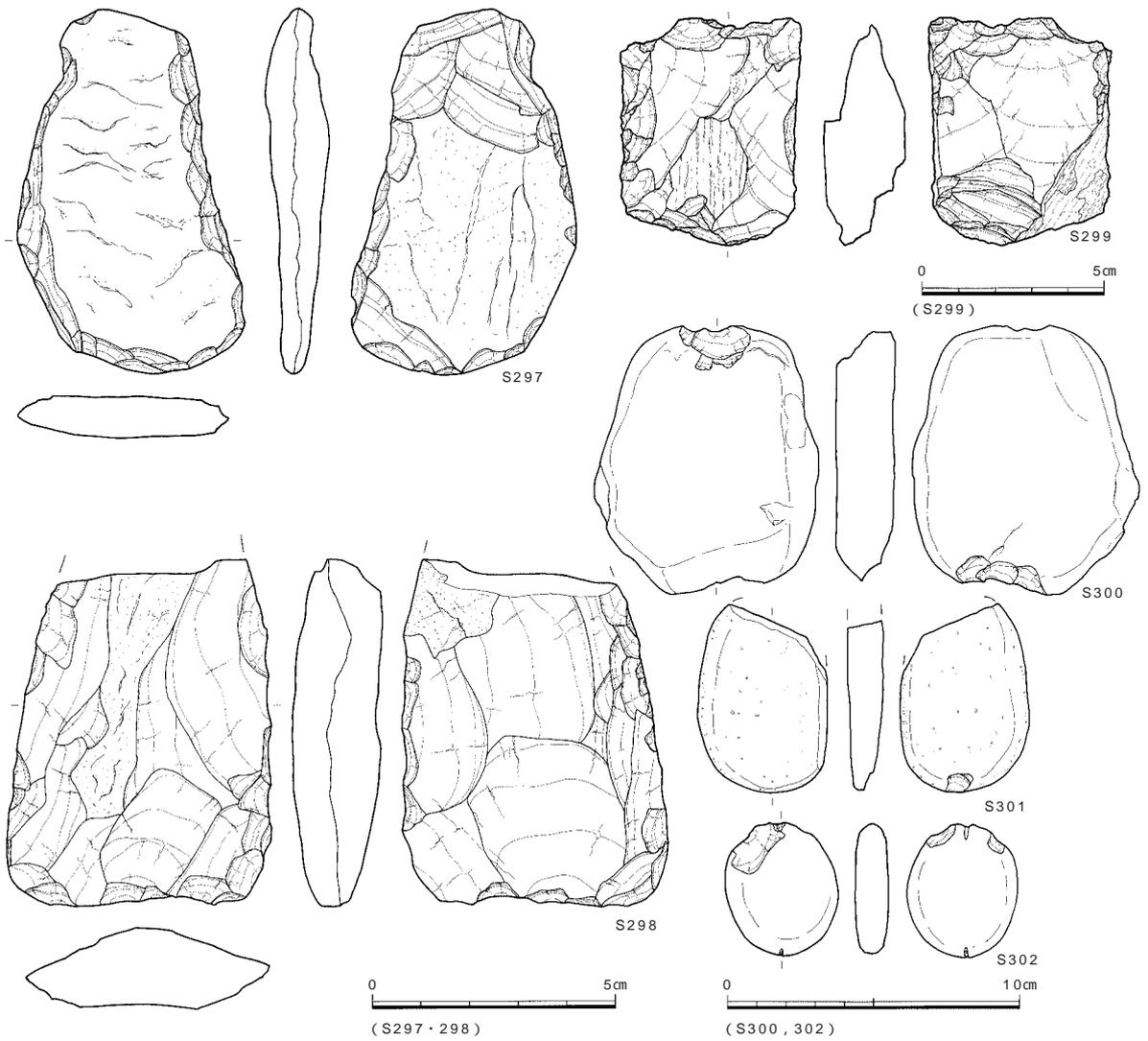
番号	器種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石材	特徴
S293	スクレイパー	4.30	5.80	0.90	27.7	サヌカイト	挟り入り。欠損の後加工か？
S294	石鏃	8.90	4.90	1.80	79.6	粘板岩	刃部に資料による摩滅と線状痕。
S295	石鏃	(6.80)	3.40	1.10	34.5	粘板岩	小型品。扁平素材の周縁に両面調整。
S296	石鏃	(8.70)	(5.10)	(1.10)	(56.9)	粘板岩	刃部欠損。両側縁に両面調整。

図162 谷1層出土石器1(縮尺2/3)

谷1層(図152・160~163)

本層からはコンテナ(約28リットル)1/2箱、約1000点の遺物が出土した。このうち土器43点、石器10点を図160~163に掲載した。出土遺物には縄文時代中期末~弥生時代前期末のものが含まれる。谷1層の埋没時期は弥生時代前期末である。

出土土器のうち主体をなすのは、縄文時代後期前葉の遺物であり、次いで後期中葉に入るものが目立つ。微高地部の13層に比べて、中葉のものが目立つ点を注意しておきたい。1~3は縄文時代中期末の特徴をもつ。中津式~福田K式、津雲A式といった後期前葉のものとして、4~14がある。4~10・12~14は深鉢である。22~34は、後期中葉のものである。16~21は胎土・調整等の特徴から縄文時代後期のものとした。40は刻み目突帯文を有する深鉢である。弥生時代前期の土器には、38・39・41があり、38の壺は前期中頃に、39・41の甕は前期前



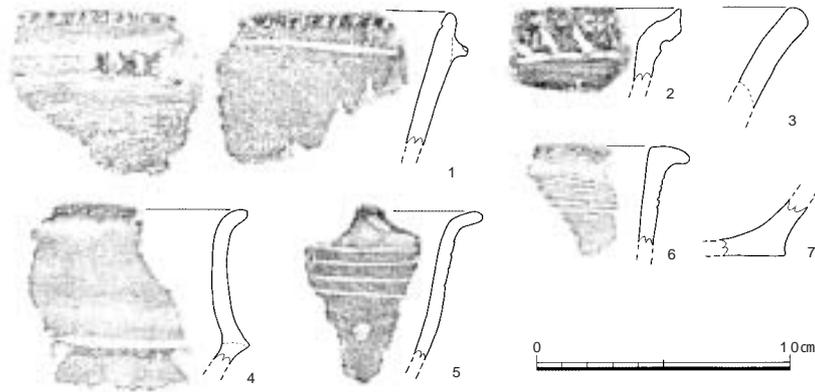
番号	器種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石材	特徴
S297	石鋬	7.6	4.6	1.3	46.7	細粒砂岩	基部付近に抉りを意図した剥離。
S298	石鋬	(7.2)	5.4	1.8	(95.5)	粘板岩	基部欠損。直線状の刃部。
S299	石核	6.25	5.00	2.20	79.7	サヌカイト	両極打法による剥離。
S300	石錘	9.3	7.7	2.1	228.1	流紋岩質凝灰岩	扁平な礫の上下端に打ち欠き。
S301	石錘	(6.5)	4.4	1.3	(51.4)	流紋岩	上部を欠損。下端部にわずかに打ち欠き。
S302	石錘	4.6	3.8	1.2	30.7	石英安山岩	小型品。円礫の上下端に摺切による溝。

図163 谷1層出土石器2(縮尺1/2・2/3・2/5)

半と位置づけられる。

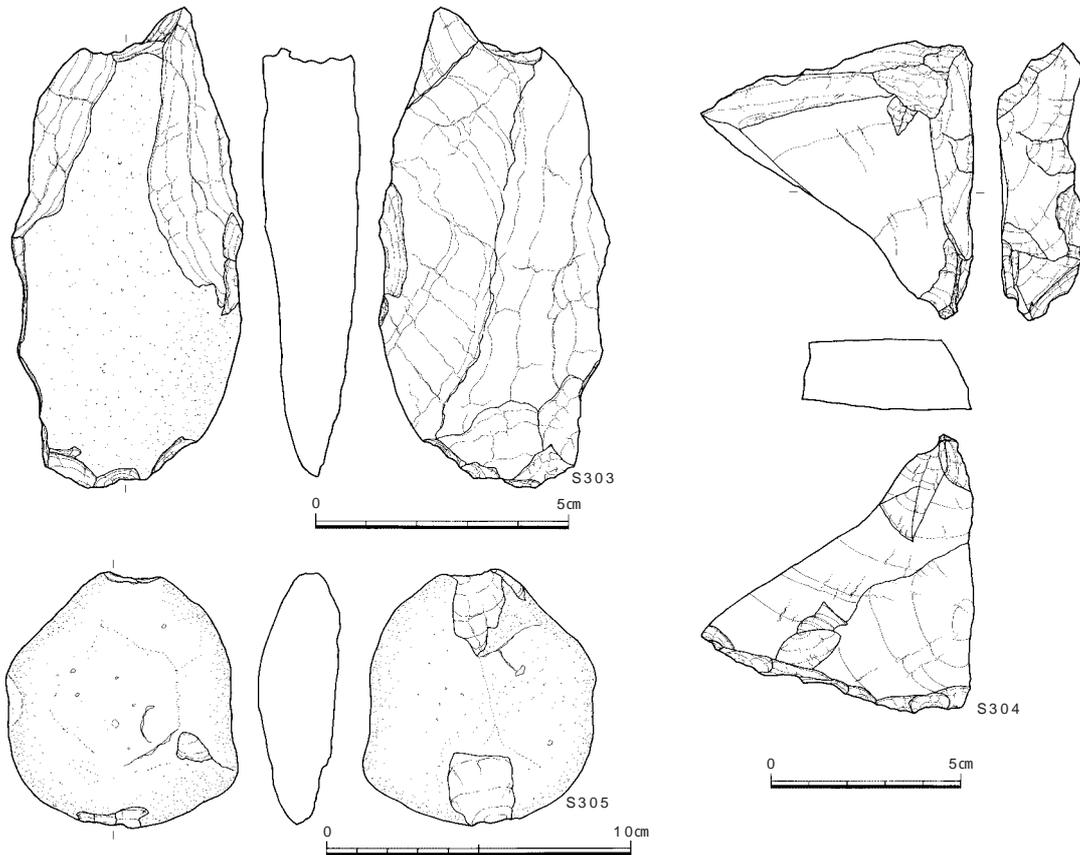
石器はスクレイパー・石鋬・石核・石錘が出土している(図162・163 図版22・24・25)。

図162 - S293はサヌカイト製スクレイパーである。下縁に両面調整によって厚みのある刃部をつくりだす。左側縁には両面からの細かい調整によって抉り部がつくり出されている。右側縁は折損するが、その面から細かい調整を施しており、再加工した可能性が高い。刃部には使用による摩滅部位が認められる。S294~298はいずれも粘板岩製石鋬である。S294は基部が尖り、基部から刃部にかけて両側縁が大きく開くバチ状の平面形である。素材の周縁から整形を意図した調整剥離を重ね整形した後に、周縁全体に両面から調整を細かく施して仕上げている。下縁部には厚みのある弧状の刃部がつくり出される。両側縁の上部付近には、抉りを意識した調整が認められるが、ここが木柄との緊縛に用いられた可能性がある。刃部には使用による摩滅と線条痕が認められる。特



番号	器種	形態・手法ほか	色調	胎土
1	深鉢	(外)横ナデ、貼付突帯、断面三角、刻みD形、口唇に刻み(内)ナデ、沈線1条	暗茶褐/黒	細～粗砂
2	深鉢	(外)ナデ、口縁帯に沈線文、帯下に横位沈線1条(内)ナデ	暗茶褐/茶褐～黒褐	細～粗砂
3	壺	(外)(内)やや粗いナデ	淡橙褐～淡黄褐	細～粗砂
4	鉢	(外)丁寧なナデ+凹線+下位は磨きに使いなデ(内)押圧+ナデ	黒褐～茶褐/暗灰黒	細砂
5	甕	(外)ナデ、横位沈線4条、(内)押圧+ナデ	淡黄褐～茶褐	細砂
6	甕	(外)(内)丁寧なナデ、外面、5条一組の横位沈線	茶褐～赤茶褐/黒～淡黄褐	微～細砂
7	深鉢	(外)ナデ(内)磨きに近いナデ	暗黄褐/黒	細砂

図164 谷2層出土土器(縮尺1/3)



番号	器種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石材	特徴
S303	石鋏	9.55	4.6	1.92	111.2	玄武岩質凝灰岩	下辺に粗い調整。
S304	石核	7.2	7.38	1.85	97.5	サヌカイト	板状の素材。自然面を残す。
S305	石錘	8.5	7.65	2.7	220.4	流紋岩	大型品。扁平な礫の上下端に打ち欠き。

図165 谷2層出土石器(縮尺2/3・2/5・1/2)

に裏面が大きく摩滅する。S295は小型品で下端に両面調整によって厚みのある弧状の刃部をつくり出す。S296は素材面を大きく残し、周縁部に両面調整を施す。刃部が欠損する。S297も扁平な素材に簡略に両面調整を施したものであるが、左側縁の上部に抉りを意図したような調整が認められる。S298は扁平な素材に周縁から整形を意図した調整剥離を施し厚みを一定した後に、両側縁と下縁を両面調整して仕上げる。横断面は整った凸レンズ形である。刃部は直線状だが、わずかに内湾する。基部を欠損する。S299はサヌカイト製石核で自然面が大きく残ることから、扁平な角礫を素材としたと考えられる。上下縁は縁辺部となり、階段状のつぶれた剥離がそれぞれ認められ、上下縁を結ぶような方向で薄い小剥片が剥離した面が数枚確認できる。おそらく、両極打法によって、石鏃などに用いる剥片をとっていた石核と判断される。ただ、大型の楔形石器とみることも可能かもしれない。石錘は3点出土した（S300～302）。S300は大型品である。上下端に片面から打ち欠き利用している。S302は上端に磨り切りによる溝と打ち欠きが認められる一方で、下端は溝のみが観察される。

谷2層（図134・152・164・165）

谷2層の出土遺物には土器片187点（28リットルコンテナ1/4箱）と石器3点があり、図164・165に掲載した。詳細は後述するが出土遺物も併せ、時期は弥生時代前期末と考えられる。

前期の遺物は3・5～7である。甕のうち6は前期末、5は前期前半と位置づけられる。その他に突帯文土器深鉢（1）・縄文後期の深鉢（4）がある。

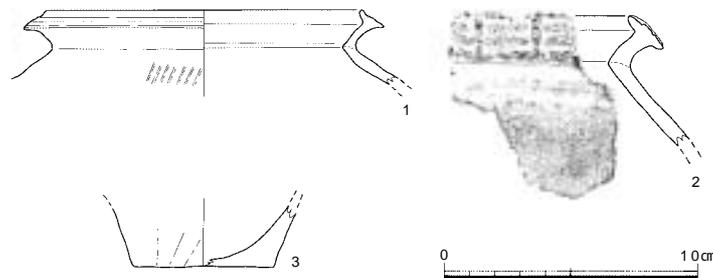
石器は石鏃・石核・石錘が出土している（図165）。S303は玄武岩質凝灰岩製の石鏃で、円礫を裁断し素材として利用する。両側縁上部に整形を目的とした剥離を行なうが、全体的に不定形である。刃部調整も粗く、未成品の可能性もあろう。S304はサヌカイト製石核で板状の素材に打面をつくり、小剥片を剥離する。自然面が一部残る。一側縁には片面調整も認められる。S305は流紋岩の円礫を利用した大型石錘で、上下端を打ち欠く。

谷3層（図152・166）

第22次調査地点の谷状地形を最終的に埋めることとなる土層である。溝21・22（古代溝）よりも北側では、調査区全域で谷3層の堆積が認められ、ほぼ水平堆積である。

遺物は弥生土器片84点が出土し、そのうち3点を掲載した（図166）。1・2は甕口縁部片、3は甕底部である。いずれも中期の遺物であるが、1・2の存在から谷3層は中期後半～末の時期が考えられる。

弥生時代中期前半に溝15が埋没した後、短期間に谷3層が埋没したのと考えられ、その結果後期には平坦化した地形を呈してと考えられる。



番号	器種	形態・手法ほか	色調（外/内）	胎土
1	甕	（外）横ナデ+縦八ヶ、端面に凹線一条（内）横ナデ、1/6残、復元口径12.6cm	淡褐	細砂
2	甕	（外）端面に凹線3条+棒状浮文2カ所、丹塗り?、横ナデ、縦八ヶ（内）横ナデ	淡黄橙、淡黄褐	精良、微砂
3	甕	（外）ミガキカ、底部外面はナデ（内）押圧+ナデ、1/2残、復元底径5.6cm	淡茶褐/淡灰褐	微-細砂

図166 谷3層出土土器（縮尺1/3）

第5節 古墳時代の遺構・遺物

古墳時代の遺構は13層・11層・10b層の各層の上面で検出した(図167)。

第17次調査地点では、弥生時代前期にあたる13層上面で、前期の溝1条(溝16)及び後期と考えられる溝1条(溝17)柱穴列1条を検出した。また第22次調査地点では、調査区中央部が古代溝によって削平されているが、その両脇においては、11層上面で前期の溝1条、10層上面で後期の溝2条(溝18・19)と畦畔をそれぞれ検出した。

a. 溝

溝は合計4条を検出した。時期としては古墳時代前期のもの(溝16)と、後期のもの(溝17~19)とがある。

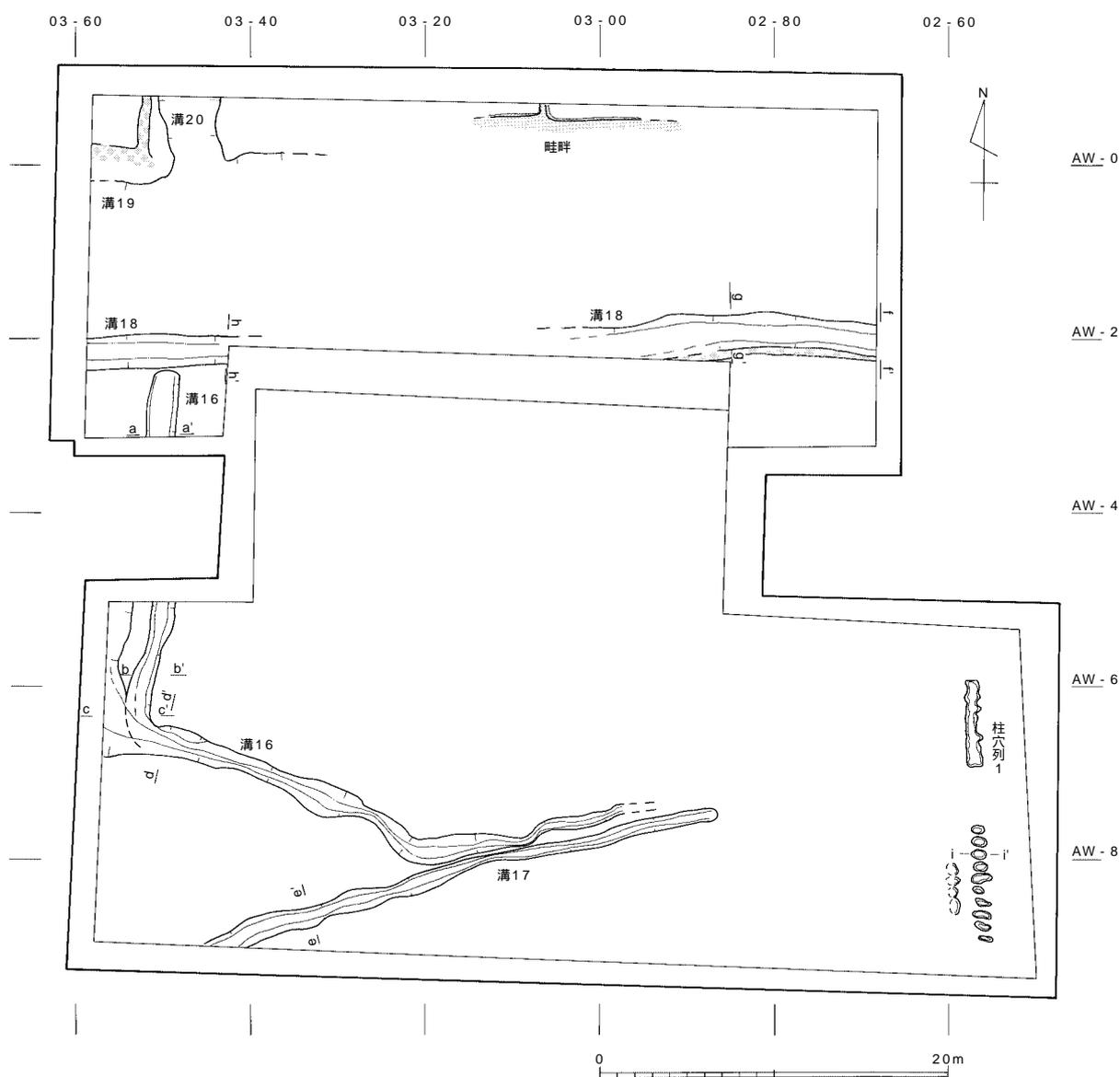
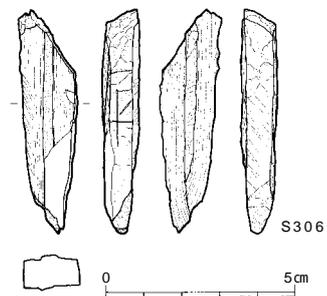
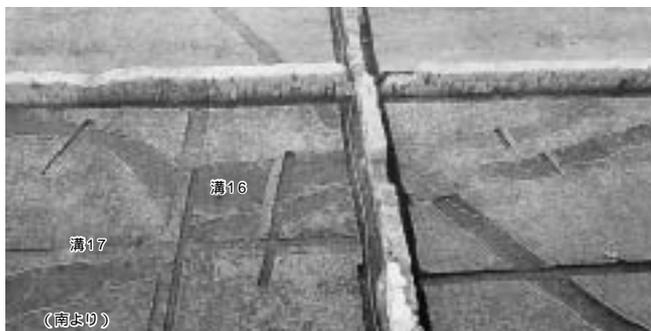
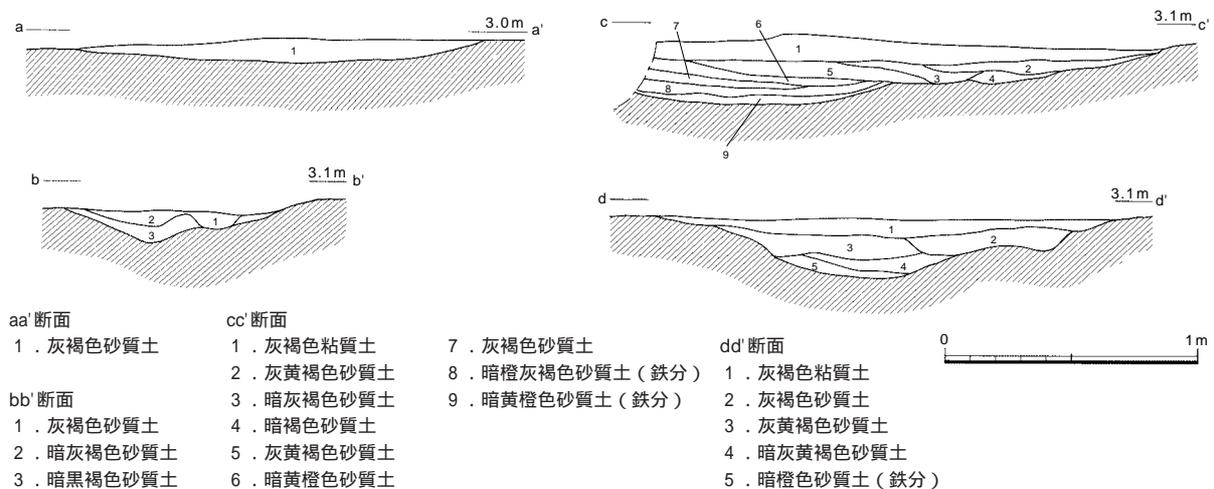


図167 古墳時代遺構全体図(縮尺 1/400)

溝16 (図167・168 図版28)

AW03 - 88区より西南方向に走行し、03 - 20ライン付近で北西に向きを変えて、調査区西端部でほぼ直角に北流する。途中AW - 6ラインあたりで2本に別れ、西側は調査区西壁より外へ、東側の溝はAW - 2ライン付近で収束する。検出面は第17次調査地点では13層上面であるが、第22次調査地点では11層上面であることから本来は11層上面の遺構である。検出レベルは、第22次調査地点で標高2.95m、第17次調査地点の西半で標高3.0m前後、溝の東端では標高3.1mである。底面のレベルは西半で標高2.8m、東端で3.07mで、東に向けて浅くなり、03 - 00ライン以東では検出できなかった。溝の幅は最小で0.6m、最大で2.0mと、場所によって不揃いであり、これは新旧二つの流路が重複しているためと考えられる。上述したように溝16はcc'断面の北から2本に分かれるが、このうち東側溝が新段階、西側が旧段階にあたる。埋土をみるとcc'断面では1層(灰褐色粘質土)は最終の流入土、2~5層が新段階、6~9層が旧段階の流路である。新段階の埋土は灰褐色~灰黄褐色系の砂質土であり、aa'断面1層、bb'断面1~3層、dd'断面2層がこれに対応する。旧段階の埋土は灰黄褐色~暗橙色系砂質土で、下層(cc'断面8~9層、dd'断面5層)には鉄分の沈着が目立つ。

遺物は、土師器甕の小片のほか、石器1点が出土している(図168 - S306)。S306は良質な粘板岩製で、両面にはそれぞれ両側縁からの擦り切り痕が明瞭に認められ、その中央には折り取られた部分が残る。また右側面には擦り切る位置を割り付けしたような十字の刻線も確認できる。おそらく、板状素材に擦り切る位置を刻線で割り付け後に、素材の両面から順次擦り切り、最後に折り取ったものの破片と判断できる。良質な石材であり、玉



番号	器種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石材	特徴
S306	玉素材	5.95	1.60	0.90	11.0	粘板岩	両側面からの擦り切り痕。右側面に割付用の刻線。

図168 溝16・出土遺物 (縮尺1/30・2/3)

造り素材の可能性もあろう。

出土遺物と層位から、本溝の時期は古墳時代前期と考えている。

溝17 (図167・169)

13層上面で検出したが、本来は10層上面の遺構と考えられる。検出レベルは標高3.1m、底面のレベルは標高3.0mである。溝の幅は0.9~1.1m、深さ10cm前後で、北東~南西方向に伸びる溝である。02-90ライン以東では検出できなかった。底面のレベルからは流路の方向は不明であるが、南西に向けて若干傾斜のある地形を考慮すると南西方向へ流れている可能性がある。埋土は灰褐色粘質土で、黒褐色土(13層)のブロックを含んでいる。出土遺物には須恵器片を含む土器小片約20点があり、土器は図化できるものはなかった。

本溝の時期は出土遺物と層位関係より、古墳時代後期と考えられる。

溝18 (図167・170)

AW-2ラインに沿うように、東西方向に走行する溝である。10b層上面で検出した。03-00ラインから03-40ライン間は古代の溝等によって削平を受けている。検出レベルは標高3.1~3.3m、底面のレベルは標高2.8~2.9mで、深さは0.4m前後である。溝の幅は2m前後を測る。断面の形状はU字形を呈している。

埋土は黄灰色系の砂質土を主体とするff'断面1層、gg'断面2層中には黒褐色土ブロック(13層)を含む。また下方(ff'断面5層、gg'断面4・5層)では粗砂の割合が多い。

遺物のごくわずかに土器数片が出土し、古墳時代前半の土師器高杯片があるが、溝の時期は検出層位から古墳時代後期である。

本溝は、本調査地点の西約20mに位置する第9次調査地点の溝21、さらに第6次調査地点の溝11と同一遺構である可能性が高い。

溝19 (図167・171)

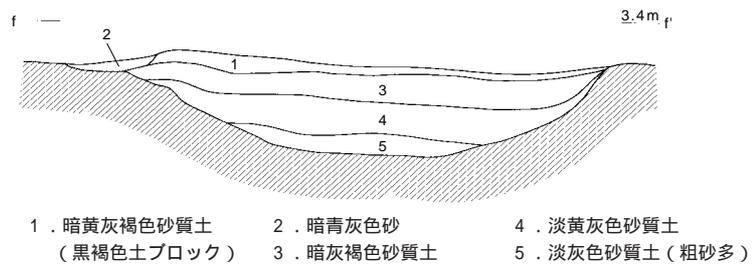
調査区の北端部に位置する。10b層上面で検出した。検出レベルは標高2.9mである。03-40ラインから調査区西端部までの間で確認した東西方向に走行する非常に浅い溝であるが、



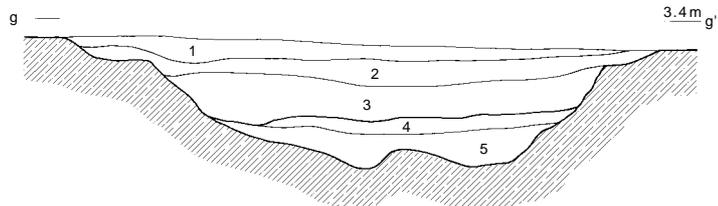
図169 溝17 (縮尺1/30)



溝18 ff'断面



- 1. 暗黄灰褐色砂質土 (黒褐色土ブロック)
- 2. 暗青灰色砂
- 3. 暗灰褐色砂質土
- 4. 淡黄灰色砂質土
- 5. 淡灰色砂質土 (粗砂多)



- 1. 灰黄褐色砂質土
- 2. 黄灰色砂質土 (黒褐色土ブロック)
- 3. 淡褐色砂質土
- 4. 褐色砂質土 (粗砂多)
- 5. 灰色砂質土 (粗砂多)

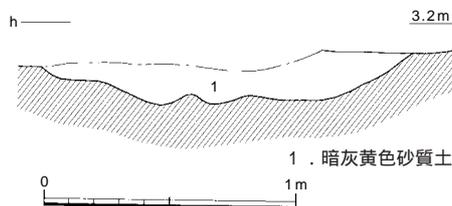


図170 溝18 (縮尺1/30)

大半は古代の溝によって削平されている。

埋土は10a層に近似する灰白色砂質土層であり、後述する畦畔とともに10a層の堆積時に埋没したものと考えられる。本溝から遺物の出土は認められなかったが、10a層中より7世紀代の須恵器片が出土しており、遺構の時期も古墳時代後期と考えている。

本溝は、位置関係と時期から、第9次調査地点溝20、第6次調査地点溝8、さらに第7次調査地点溝3に対応する可能性がある。その場合既調査地点の状況から、本溝は、溝18と平行して流れるものと考えられる。

溝20 (図167・171)

調査区の北西端に位置し、溝19に直交するように取り付くことが推測される。検出レベルは標高2.9mである。溝の幅2.8～3.5m、深さは南から北に向かって徐々に深くなるが、最大で15cm程度の浅い溝である。底面は凹凸が顕著で、2ヶ所でたわみ状を呈する。埋土は10a層に近似する灰白色砂である。また本溝に伴うものと考えられる杭あるいは杭の痕跡25本を検出した。東側の肩から底面付近を中心に打ち込まれたもので、いずれも直径10cm前後である。配列からは具体的な用途の推定は難しい。前述した溝19に直交するようにつく形状から、第6次調査地点の溝8に取りつく溝9・溝10との共通性が認められる。

本溝からはわずかに出土した遺物として7世紀前半代の須恵器片があり、本遺構の時期としては7世紀前半と考えている。

b. 畦畔

10b層上面で、ほぼ東西南北の方向に合致する畦畔を検出した(図167)。いずれも最長でも9mほどが残り、古代溝等による破壊により、残存状況は悪い。溝19の北側では同溝肩部に沿って東西にのびる畦畔と、これに直交して北にのびる2ヶ所の畦畔を検出した。南北方向の畦畔の間隔は約23mである。検出レベルは標高2.9～3.0mである。溝沿いにある東西方向の畦畔は、幅0.7m前後であるに対し、北側へののびる部分は幅0.3m程度と狭く、違い



溝19・20と畦畔

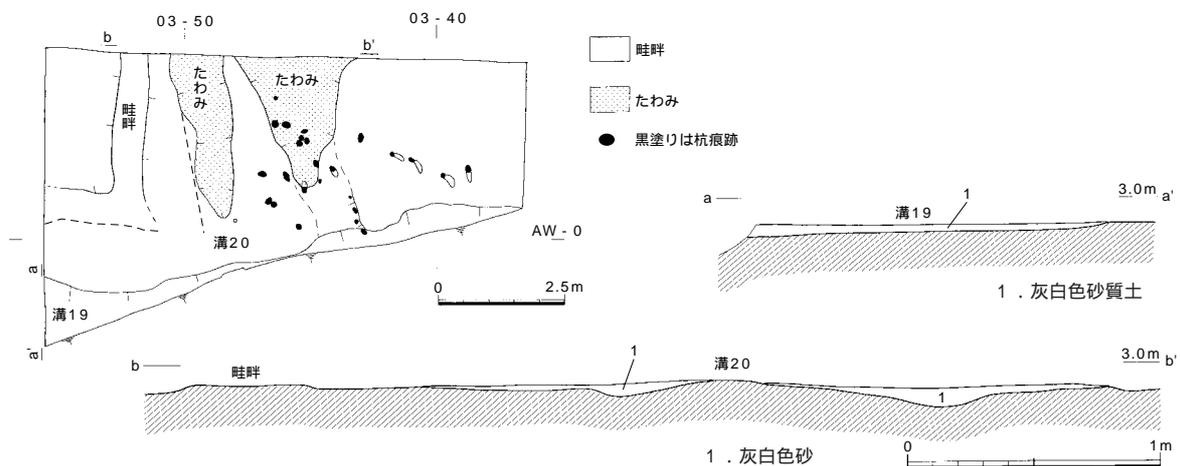


図171 溝19・20、畦畔(縮尺 1/150・1/30)

を示す。畦畔の高さは1.5～3cm前後である。一方、溝18の南側では同溝の縁に東西に走る。検出レベルは標高3.15～3.2mである。幅0.3m、高さ1.5～2cmである。

これらの畦畔は前述の溝18～20と併存していたものと考えられる。出土遺物は見られないが、上面を覆う10a層、検出面である10b層から須恵器片が出土していることから、本遺構の時期は古墳時代後期と考えられる。

c. 柱穴列

柱穴列 1

13層上面において、調査区南東部の02 - 60ライン付近で検出した(図167・172)。検出レベルは標高3.1～3.2mである。長径60～115cm、短径20～50cm、深さ10cm前後の平面楕円形を呈する掘りこみを、南北方向に連続して検出した。底面レベルは標高3.05～3.1mである。南側では長さ7m中に10個の掘り込みが、間隔10～15cm前後と、ほぼ等間隔に、密接して掘削されている。一方、この並びの3m程北側では長さ5m、幅0.8mほどの溝状の掘り込みが認められる。この長条形の掘り込みには、南側にみられる不整形掘り込みを複数と一緒に掘ったものである。深さ10cm程である。本来、少なくとも2列は存在していたようであるが、西側の一列は土層観察用の側溝掘削のために列の大半を確認することができなかった。東西の列の間隔は0.6～1.0mである。柱穴の断面の形状はいびつな皿状を呈している。埋土は白灰色粘質土で、10層と近似している。遺物は出土していないが、土層の状況から少なくとも古墳時代後期には埋没したことが伺える。

遺構の性格については判断する材料に欠けているが、同様の遺構は百間川沢田遺跡の柱穴列、窪木遺跡の柵列状遺構などが挙げられる。津島岡大遺跡第26次調査地点でも類例が認められ、道の下部構造の可能性が指摘されている⁽¹⁾。本柱穴列1についても、同様の可能性を考えておきたい。その場合道の規模としては柱穴列の両端をとると幅3mと考えられる。

註

(1) 光本順2005「古墳時代後期から中世における遺構群の変遷」『津島岡大遺跡15』(岡山大学構内遺跡発掘調査報告第20冊)

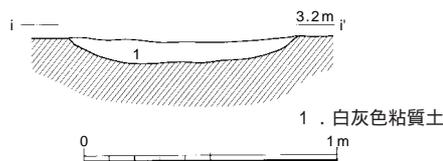


図172 柱穴列 1 (縮尺1/30)

第6節 古代の遺構・遺物

古代の遺構は溝3条(溝21～23)と畦畔である(図173)。8b層では谷部では溝21上層溝と微高地部で畦畔が検出されている。畦畔は微高地部分(第17次調査地点)のほぼ全域に、東西南北の正方位に近い方向でひろがる。9層では谷部(第22次調査地点)において、溝21下層溝・溝22・23に加えて、溝22に伴う畦畔と、溝23に伴う畦畔を検出した。畦畔と溝23、溝21下層溝との先後関係は、土層堆積状況から併存する可能性が強いことから、溝21内の杭群の存在も含め、主要な用水路と支流となる水路などの有機的関係を考えさせられる。

古代の遺構は古いものから、溝22と畦畔 溝21下層・溝23と畦畔 溝21上層と微高地部畦畔と整理される。

a. 溝

溝21 (図173~184 図版20~26・28~30)

調査区の北半、AW-0~2ライン間をほぼ東西方向に走行する溝である。溝21には大きく二つの段階が想定され、上層溝は8b層、下層溝は9層に帰属する。検出面のレベルは、場所によって若干の差異があるが9層上面で3.1~3.3m、8b層上面で3.2~3.4mである。埋土は堆積状況と土質から5群のまとまりに分類することができる(図175)。1群は暗灰褐~暗橙褐色砂、2群は灰色系の粘質土、3群は灰色系砂を主体とし、部分的に淡灰色粘質土がみられる。4群は灰褐色系砂が主で、西半部では暗灰色系の粘質土が下位に堆積する。また5群は灰褐色系の粘質土を主体とし、部分的に暗灰色系砂が下位にみられる。このうち、4群の最上層が9層上面の溝23埋土と一体化していることから、1~3群を溝21上層溝、4・5群を溝21

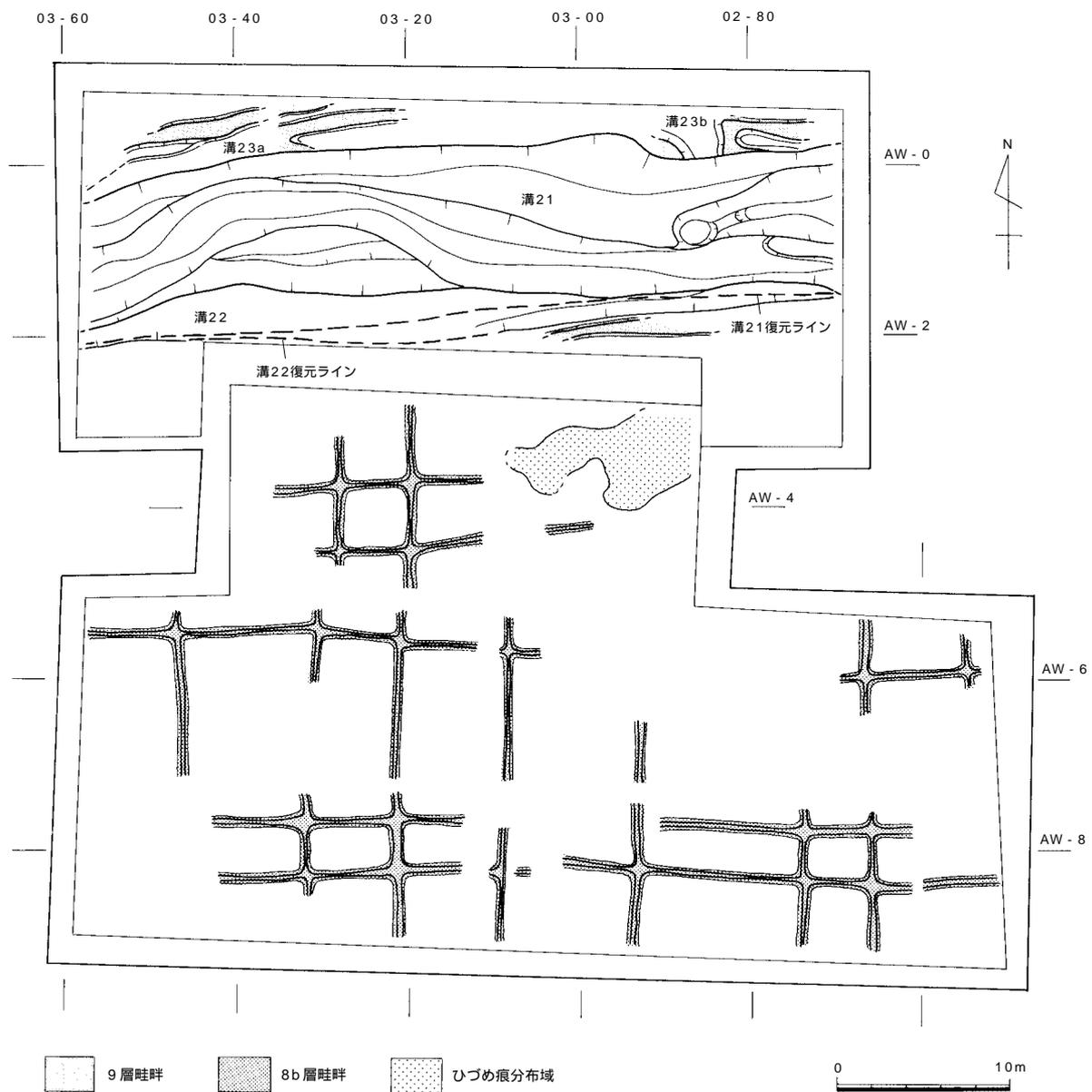


図173 古代遺構全体図(縮尺1/400)

下層溝と区別できる。さらに下層溝はaa'・cc'断面から 4 群と 5 群の2段階に細分される。

上層溝は中世溝等による削平を受けているが、形状や流路をうかがえる。溝の残存幅は東端で7.0m、西端で8.8m、底面のレベルは標高2.5mを測る。深さは0.5mが残る。断面の形状はU字形を呈している。上層溝は東端からやや南寄りに西流し、03 - 10ライン付近で北に蛇行する。さらに03 - 40ライン付近で南に振れる。西に向かうにつれ、底面がフラットに近くなり、幅がひろがる。

下層溝は大半が上層溝と重複しているため、全形は不明である。前述したように2段階の流路に区別でき、4 5 群では流路が若干異なる。新段階(4 群)は上層溝とほぼ同様の形状・流路を示している。溝の残存幅は東端で8.8m、西端で10.2m、底面のレベルは標高2.5mを測る。深さは0.35~0.5mが残る。

古段階(5 群)の底部は、dd'断面ではU字形を呈し、残存幅7.3m、深さ0.4mである。底面のレベルは東端で標高2.3m、西端で2.14mである。走行方向は北東~南西方向にやや振れているが、大きく蛇行していたかどうかは不明である。

溝21からは多くの杭を検出した。このうち原位置で確認できた60本余について図174に位置を示した。また03 - 20~30ライン間では溝21の南側斜面で杭・横木がまとまって検出され、これを「堰状遺構」として記述する。まず杭については、まとめて検出されたのは、溝の東端部分(a~c群)と西端部(d群)である。東端部では溝の北岸側の傾斜面が段状を呈しており、一段目に約30本がまとまっているc群の中では北側の肩に

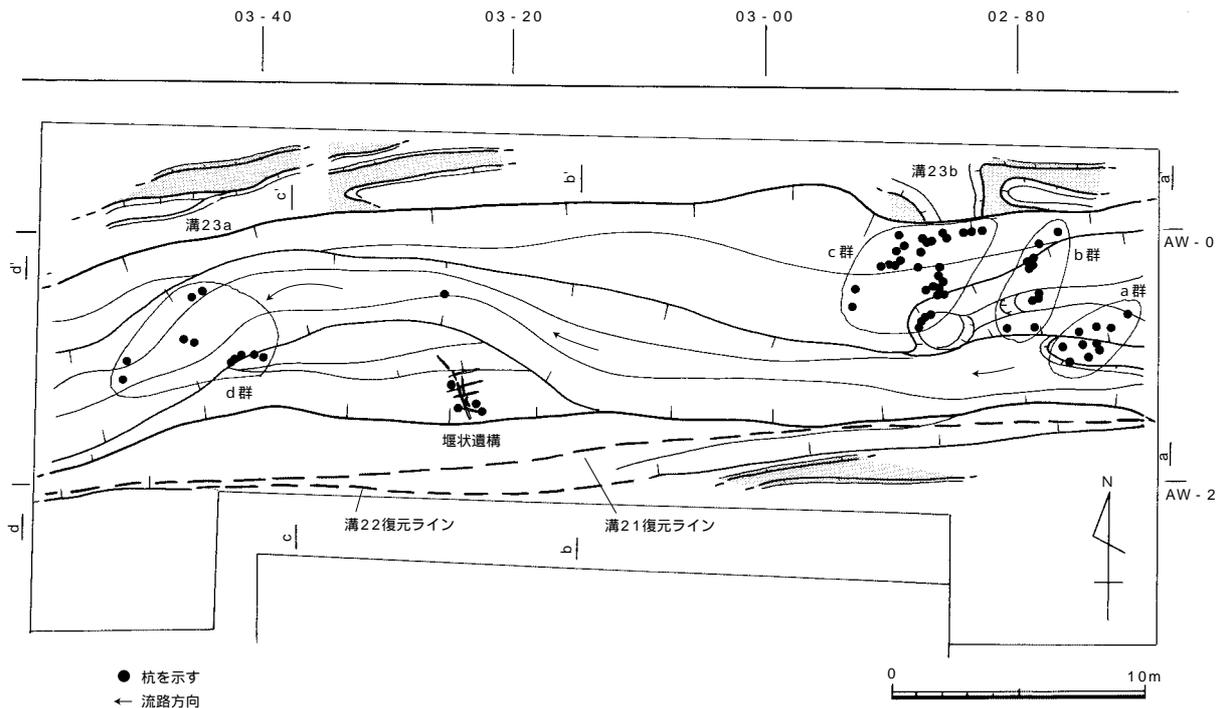


図174 溝21杭出土状況(縮尺1/300)

群	aa'	bb'	cc'	dd'
溝21上層	1 砂 1-3	1	-	-
	2 粘 4-5	2-4	1-3	1-2
	3 砂 6-9	5-7	4-6	-
溝21下層	4 砂 10-13	9-14	8-9	3-5
	5 粘 14-16	15-17	12-15	7
溝22	-	18	-	8-10
	-	19-20	16-17	11

溝22

bb'断面

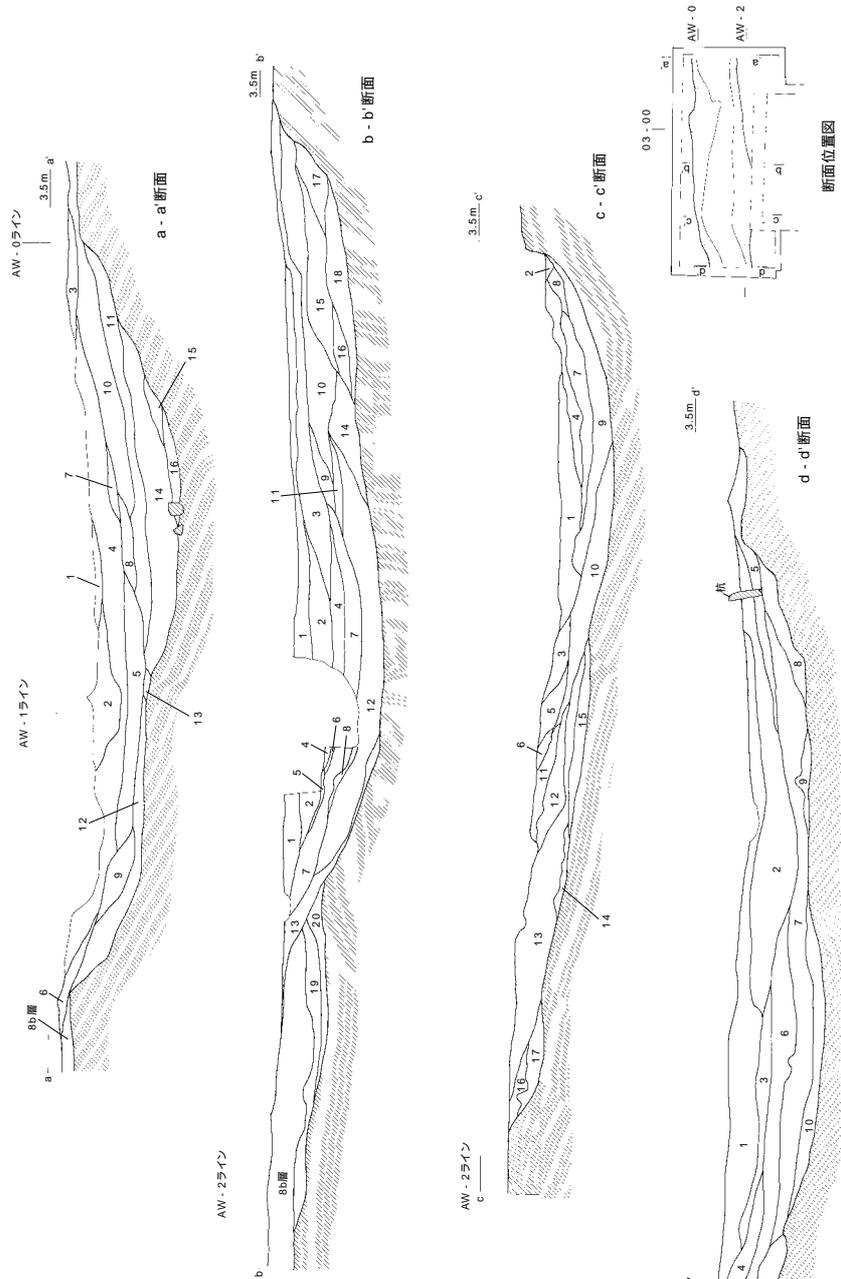
- 19. 緑灰白色粘質土
- 20. 淡緑灰色粘質土

cc'断面

- 16. 淡青灰色砂
- 17. 青灰色砂質土
- 18. 淡橙灰色砂
- 19. 淡青灰色砂
- 20. 黄灰色砂質土

dd'断面

- 11. 淡灰褐色砂



溝21

aa'断面

- 1. 暗橙褐色砂
- 2. 淡黄灰色砂
- 3. 暗黄灰色砂
- 4. 暗緑灰色粘質土
- 5. 淡青灰色粘質土
- 6. 暗橙灰色砂
- 7. 暗黄灰色砂
- 8. 淡灰色砂
- 9. 淡灰白色砂
- 10. 淡灰褐色砂
- 11. 淡褐色砂
- 12. 淡黄灰褐色砂
- 13. 淡灰褐色砂
- 14. 淡青灰色砂
- 15. 灰白色砂
- 16. 暗黄灰色砂

bb'断面

- 1. 暗灰褐色砂
- 2. 暗青灰色粘質土
- 3. 灰色粘質土
- 4. 淡青灰色粘質土
- 5. 淡青灰色砂
- 6. 暗青灰色砂
- 7. 暗緑灰色砂
- 8. 淡灰色粘質土
- 9. 暗灰白色砂
- 10. 淡灰黄白色砂
- 11. 黄灰色細砂
- 12. 暗灰色粗砂
- 13. 暗緑灰色砂
- 14. 青灰色砂
- 15. 暗灰褐色粘質土
- 16. 暗灰褐色粘質土
- 17. 暗灰色弱粘質土
- 18. 暗灰色砂

cc'断面

- 1. 暗緑灰色粘質土
- 2. 暗青灰色粘質土
- 3. 淡灰色粘質土
- 4. 暗灰色砂
- 5. 淡青灰色砂
- 6. 淡青灰色砂
- 7. 緑灰色粘質土
- 8. 青灰色砂
- 9. 暗灰褐色砂
- 10. 暗灰色粘質土
- 11. 暗青灰色粘質土
- 12. 淡灰白色粘質土
- 13. 淡灰白色粘質土
- 14. 淡灰色粘質土
- 15. 暗灰色粘質土

dd'断面

- 1. 暗灰色粘質土
- 2. 暗灰褐色粘質土
- 3. 淡灰白色砂
- 4. 淡灰色砂
- 5. 灰色砂
- 6. 暗灰色粘質土
- 7. 灰褐色粘質土
- 8. 灰色砂
- 9. 灰色砂
- 10. 暗灰色砂

図175 溝21・22 (縮尺1/80)

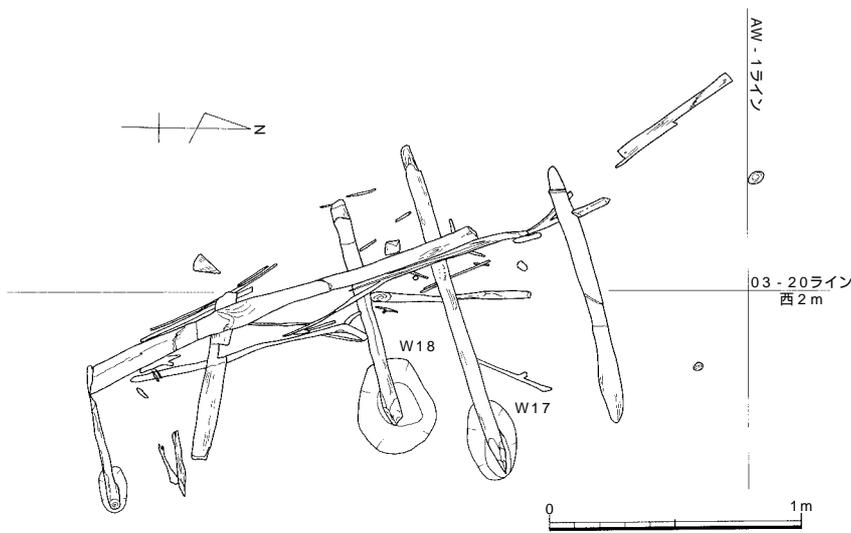


図176 堰状遺構 (縮尺1/30)

沿うように東西方向の杭列が認められ溝23bとの関係も考えられる。また底が一部たわみのように深まる部分の北側に南北方向の杭群がある。b群も流れに直交する配列であり、a群と一連で東からの流れを堰き止めるとの可能性がある。西端部では10点余の杭が検出された(d群)。数が少なく列のまとまりを見いだすのは困難であったが、南側の傾斜面に、東西方向のまとまりを認めることができる。これらの杭の下端のレベルは標高1.0~2.4mとばらつきがあるが、杭群の位置は断面の観察から4・5群の堆積域に合致していることから、下層溝に伴う可能性が高いと考えられる。ただし杭の性格上確定は難しく、上層溝の段階にも機能していたことも推測される。

また03-20ライン~03-30ライン間にあたる下層溝の南側斜面で杭・木材を組み合わせた堰状遺構を検出した(図176)。5群の底面にあたる検出レベルは標高2.3m、底面の標高は2.9mである。南北方向に並ぶ杭に横木をかけるという構造で、杭の数は現存5本と痕跡3本が確認されている。東からの流れによって倒れた状態で検出された。使用段階の状態を保っているものと考

え、杭を立て、横木のかかる位置を復元すると、標高3.2mにあたる。この高さまでは水流があった時期もあるものと考えられる。古代面で検出されている水田面のレベルは標高3.15~3.2mである。横木をかけて、隙間を木材や枝等で充填していたものと考えられ、検出時には木葉や細かい雑木も認められた。堰状遺構の位置は、フラットに近い緩斜面にあたり、常に水流のある地点とは考えにくいことから、機能としては、堰とは別の用途を考える必要がある。

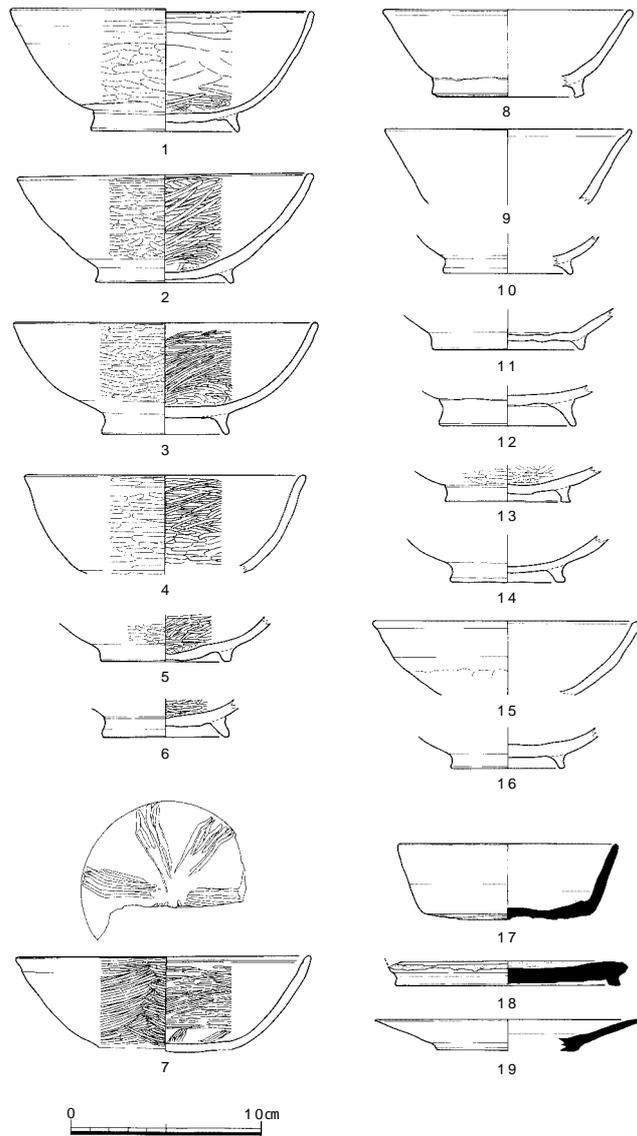
本溝からは土器類がコンテナ3箱分出土した。その他に石器・土製品・木製品・鉄滓も出土している。以下に、種類ごとの概要を述べることにする。本溝の機能していた時期は平安時代、10世紀後半~末と考えられる。

土器(図177・178 図版20)

土器の出土量は28リットルコンテナで3箱分、3,400点余であった。その内訳は全体の80%強を土師質土器が

占め、次いで弥生土器 8%、須恵質土器 6%、縄文土器 6% という構成であった。これらのうち、明らかに遊離している遺物を除き、本溝の時期に関わる遺物について45点の土器を図177・178に図示した。

黒色土器（1～7）は、いずれも均質で細かい胎土を使用した椀である。1～6は黒色土器A類（いわゆる「内黒」）である。外面の色調は、白色系（1・3～5）と褐色系（2・6）とが認められる。特に1では、外面が見事な白色に発色している。また、器壁が非常に薄く均質である点や内外面の磨きの幅は広く、特に内面は平滑であり、黒銀色に光沢を放つ状態に仕上げられている点などに、他とは明瞭に区別される良質な仕上がりを示す。ただし、見込み部分の磨きの幅は狭く、磨き残し部分も認められる。器形は、大振りであり深い椀形態を示し、高台も径が大きく強く引き出されて形成されている。2は褐色系の色調を示す。やや軟質感があり、外面の凹凸を残す傾向がやや強い椀である。やはり、見込み部分の磨きは希薄でその多くが磨き残されている。3は、その外面がやや黄色かった白色を呈する椀である。磨きと焼き上がり感から硬質な印象が強く、高台は強く引き出されるなどの特徴を見せる。口径

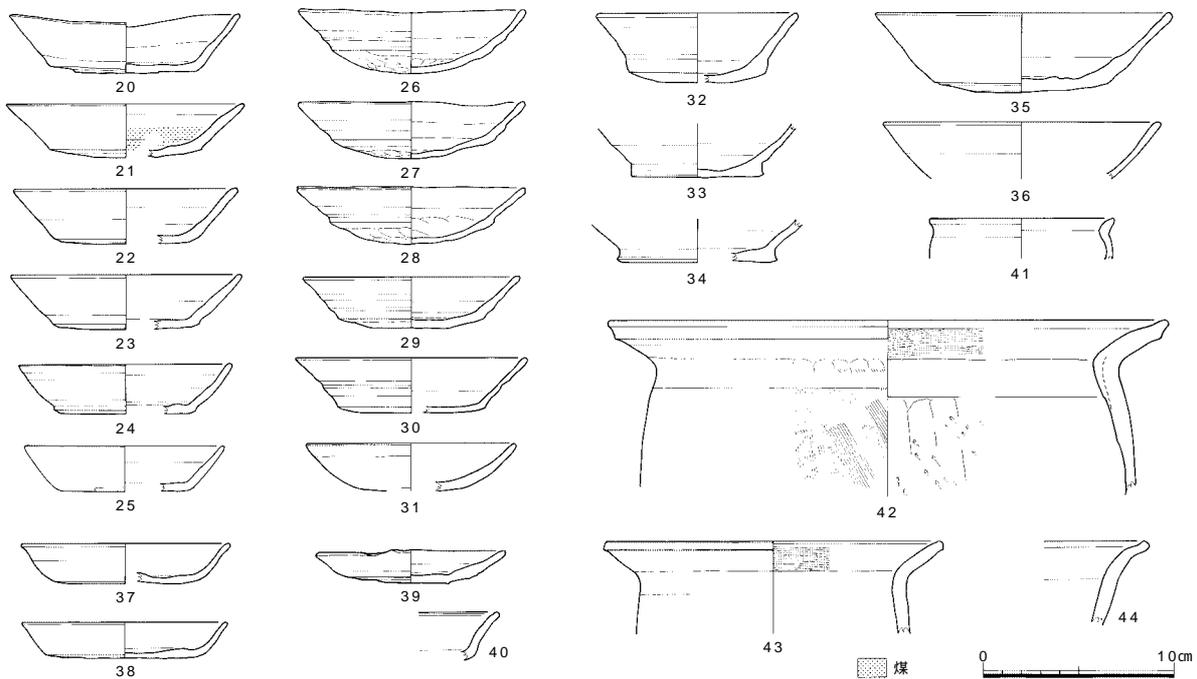


番号	器種	法量 (cm)			形態・手法ほか	色調 (外/内)	胎土
		口径	底径	器高			
1	黒色土器・椀	16.3	7.8	6.3 - 6.5	薄手で全体に浅い磨き。(外)下半に凹凸少し・底部ナデ。(内)光沢・一部に磨き残し。2/3残存	白/黒	微砂、精良・均質
2	黒色土器・椀	15.6	7.3	5.5 - 5.8	やや厚手。内外面磨き密。軟質感あり。(外)凹凸残す・底部ナデ。(内)少し光沢有り。1/3残存	黄褐/黒	微砂、均質・細かい
3	黒色土器・椀	16.0	6.7	5.9	丁寧な仕上げで表面は硬質感。見込み部の磨きは隙間多い。(外)凹凸少し・底部ナデ。1/3残存	淡黄白/黒	微砂、均質・細かい
4	黒色土器・椀	14.8			内外面磨き。外面磨きはやや浅く幅広め・磨き残しもあり。1/5残存	淡茶白/黒	微砂、均質・細かい
5	黒色土器・椀		6.9		内外面磨き。見込み部は磨き残し多い。(外)高台部内押圧+ナデ。1/2残存	淡灰/黒	微砂、均質・細かい
6	黒色土器・椀		6.8		(外)底部未調整的な凹凸残る。(内)浅い磨き	淡黄褐/黒	微砂、均質・細かい
7	黒色土器・椀	15.6			(体部)磨き密・光沢。(口)沈線残存。見込み部にナデ後放射状磨き6ヶ所。底部外面はナデ。2/3残存	黒/黒	微砂、均質・細かい
8	土師器・椀	13.2	8.0	4.6	横ナデ。内面～高台外面まで赤色顔料残存し、明橙褐色を呈する。1/6～1/10残存	淡灰白	微砂、粗砂少
9	土師器・椀	13.0			横ナデ。1/6残存	淡黄茶白	水漉粘土、均質
10	土師器・椀		6.9		丁寧なナデ(磨きの可能性残る)内面に赤色顔料若干残存。1/3残存	暗灰褐/明黄灰褐	水漉粘土、均質
11	土師器・椀		8.0		丁寧なナデ。底部中央は押圧。内面に赤色顔料(明赤褐色化)。1/3残存	淡黄灰白/黄褐	微砂、均質、角閃石
12	土師器・椀		7.2		ナデ。3/4残存	赤褐	微・粗砂
13	土師質土器・椀		6.7		(体部)内外面磨き・密。(底部)磨き後ナデ、硬質感、1/4残存	白/淡灰白	微砂少
14	土師質土器・椀		6.0		ナデ(外面摩擦進行)。軟質感。1/3残存	白	微砂、細かい
15	土師質土器・椀	14.2			ナデ。体部下半は押圧痕少し。軟質。1/2残存	白	微砂、粗砂少、細
16	土師質土器・椀		6.0		摩擦。1/3 + 1/2残存。軟質	白	微砂、粗砂少、細
17	須恵器・杯	11.6	8.8	4.0	横ナデ。底部磨き。1/3～1/8残存。内面の一部に墨?の痕跡	淡灰	微・細砂
18	須恵器・硯		11.9		高台付杯を打ち欠いた転用硯。(底)磨き後ナデ・墨書残る。(内)ナデ・薄く墨	淡灰/淡黒灰	微砂少
19	須恵器・硯	14.0	7.4	1.7	転用硯。ナデ。内面に墨付着。1/4残存	淡青灰	緻密

図177 溝21出土遺物1 (縮尺1/4)

の大きさの割に椀部はやや浅い。4は褐色かかった白色を呈し、若干小形の口径を示す。7は内外面黒色の黒色土器B類である。口縁部には浅い沈線がかすかに残存する。非常に細かい篋磨きが内外面に施され光沢をもつ。見込み部分には、篋磨きの集積によって構成された幅1.5cm程度の暗文状の文様帯が6カ所、放射状に配される。外面の磨きは3分割されて施されている可能性が考えられる。高台部は剝離している。全体の特徴から楠葉窯の黒色土器と評価される。

内外面が白色の色調を呈する一群である土師質土器椀(13~16)は、本地域では、中世的な土器様相の代表的な椀として報告される。15・16に関しては、その形態や特徴から13世紀初頭~前半代の時期が想定される。しかし、13・14については、高台の断面形態が方形を示しており定型化以前の可能性を有する点、さらに13では内外面に篋磨きが密に施され、硬質感が強く窺われる点から、少なくとも13は黒色土器と併せてもさほど矛盾はな



番号	器種	法量(cm)			形態・手法ほか	色調(外/内)	胎土
		口径	底径	器高			
20	土師器・杯	12.1	7.8	3.1	横ナデ。底部外面篋切り・押圧。ロク口回転左。赤色顔料全面塗布(赤橙色化)	黄褐	微砂、細砂少、細
21	土師器・杯	12.5	8.0	2.9	強い横ナデ。底部篋切り。内面下半に墨付着。1/5残存	明橙	微砂
22	土師器・杯	11.8	7.4	2.9	横ナデ。底部篋切り後ナデ。内面赤色化の可能性有り。1/4残存	黄灰褐~淡橙褐	微砂、角閃石多
23	土師器・杯	12.2	7.7	2.9	強い横ナデ。底部篋切り後ナデ。内面赤色化。1/4残存	淡橙~淡黄灰褐	微砂
24	土師器・杯	11.2	7.4	2.6	横ナデ。底部篋切り。内面一部に煤付着。1/6残存	暗灰褐~淡灰褐	微砂、角閃石少
25	土師器・杯	10.5	6.6	2.4	横ナデ。底部ナデ。1/4残存	橙~淡黄灰白	微砂、金雲母
26	土師器・杯	12.0	8.5	3.4	(体)強い横ナデ(底)外面篋切り後押圧・内面押圧。煤内外面に点在。硬質感。3/4残存。歪み	淡明橙~淡黄白	微砂、細砂少
27	土師器・杯	12.0	8.7	3.0	強い横ナデ。底部外面は篋切り後押圧+押圧。口縁内面に煤付着。硬質感。3/4残。歪み	淡黄白橙~淡橙白	微砂、細砂少
28	土師器・杯	12.0	8.6	3.0	(体)強い横ナデ(底)篋切り後? 押圧・ナデ。内外面に煤点在。硬質感。1/4残存。歪み	明橙褐	微砂、細砂少
29	土師器・杯	11.4	7.7	2.7	(体)強い横ナデ(底)外面篋切り後ナデ+中央内外押圧・ナデ。内面に煤点在。1/6残存	橙褐	微砂、細砂少
30	土師器・杯	12.1	7.8	2.9	(体)強い横ナデ(底)篋切り。内面~体部外面に赤色顔料。1/3残存	(底外)淡灰白(他)明橙	微砂
31	土師器・杯	11	5.3	2.5	口縁~内面横ナデ。外面押圧後ナデ。底部ナデ。	淡黄灰褐	微砂、細かい
32	土師器・杯	10.6	7.3	3.7	横ナデ。底部篋切り。ロク口回転左?。内面一部に煤。1/2~1/8残存	灰褐~橙灰褐	微~細砂
33	土師器・杯		7.0		外面横ナデ。底部篋切り。内面横ナデ後押圧・ナデ。ロク口回転左?	淡橙褐	微砂
34	土師器・杯		8.4		横ナデ。底部篋切り・板目痕。1/4残存	淡黄灰褐	微砂
35	土師器・杯	15~15.6	9.0	4~4.3	強い横ナデ。底部篋切り・板目痕。底部内面仕上げナデ。ロク口回転左。1/4残存	明赤橙	細砂、細礫、赤色粒
36	土師器・杯	14.6			横ナデ。1/3残存	淡明橙	微砂、赤色粒少
37	土師器・皿	10.8	8.2	1.9	横ナデ。底部篋切り。ロク口回転左。硬質感。1/3残存	淡黄灰白~淡橙	微~細砂、赤色粒
38	土師器・皿	11.0	7.5	2.0	横ナデ。底部篋切り後ナデ。内面仕上げナデ。1/3残存	淡黄灰褐	微砂、均質
39	土師器・皿	9.6~10	6.8	1.8	強い横ナデ。底部篋切り。内面仕上げナデ。口縁1ヶ所摺み痕。ロク口回転左	淡黄橙灰白	細砂
40	土師器・皿				横ナデ。底部は篋切り後ナデ。内面の沈線は不明瞭。全面に赤色顔料残存し橙色化	淡灰白	微砂、均質、細かい
41	土師器・鉢	9.7			横ナデ。1/4残存	明褐	微砂、均質
42	土師器・甕	30.0			(外)体部刷毛・頸部押圧・口縁横ナデ。(内)口縁刷毛・体部削り後ナデ。1/4残存。外面煤付着	暗茶褐色	細砂、細礫僅少
43	土師器・甕	17.7			(外)体部被熱剝離・口縁横ナデ。(内)口縁刷毛目・体部丁寧なナデ。1/5残存。外面被熱頭著	赤橙褐/暗橙褐	細~粗砂・角閃石多
44	土師器・鉢				ナデ	明黄褐	細砂、赤色粒

図178 溝21出土遺物2(縮尺1/4)

いように思われる。

土師器は、椀（8～12）・杯（20～36）・皿（37～40）・鉢（41・44）・甕（42・43）があげられる。ここでの皿の区分は器高が2cm以下を基準としている。

椀は、そのほとんどが小片で数も少ない。口径が計測可能なものはわずかであるが、黒色土器よりは小振りな椀部形態が復元される。ただし、高台径では違いを見せない。調整は丁寧なナデを基本とし、須恵器の形態を模した特徴を示すもの（8・9）を含む。胎土は、水漉し粘土のように細かいもの（9・10）、角閃石を含むもの（11）、粗砂を含むもの（12）などが確認される。9・10は白っぽい褐色系の色調を示す点でも他とは異なっている。11では内面に赤色顔料の塗布が確認される。この中で、8は胎土・色調・赤色顔料の状況などが皿（40）と共通しており、高台形態などからも、他の遺物よりは古い時期（9世紀後半代）が想定される。

杯は、その法量から2タイプに大別される。点数が多く出土土器の中で中心を占める口径10cm前後～12cm前後の小形のもの（20～34）と、数は少量であるが口径が15cm前後を測る大形のもの（35・36）である。さらに、小形の杯は、底部の成形状況から、20～30と32～34とに大別される。

20～30は体部ラインが直線的で器壁はやや厚手のタイプ（20～25）と体部ラインが横ナデによって強く波打つ状態を示し器壁の厚さが非常に薄いタイプ（26～30）とに細分が可能である。前者では、底部は篋切りと軽いナデ仕上げにより平坦に形成されている。20・23では赤色顔料が確実に塗布されている。煤の付着は決して多くはないが、21には内部下半に広く残存し、24でも底部内面である。後者は、底部径が比較的大きく、底部が篋切り後の押圧によって丸く押し出された形態が特徴となっている（26～28）。そのため、篋切りが中心に及んでいたかどうかは確認できない。29は底部の押圧が不十分な状態を見せる。そのため、器壁もやや厚さを残しているが、基本的には他と同じと考えられる。いずれも、口縁部周辺の内外面に煤がタール状となって付着する。点在する部分も多い。30は、底部の押圧による丸底を示さない点で異なる。底部は中心まで達した篋切りの上を軽く平らな平坦な形態を作り出している。また、赤色顔料の塗布が底部外面以外に施される。このように、前者の一群とは多くの点で違いを指摘することができる。また、時期差か工人差かはさておき、同タイプに含めたなかでもさらに細分されることが窺われる。

一方、32～34は、底部の成形が円盤高台状を呈する点で他と区別される。底部は篋切りが中心まで及ぶ。体部は直線的ラインを見せ、器壁の厚さはやや厚めである。32では底部内面に煤が付着する。褐色系の胎土で、赤色顔料は確認されない。こうした特徴からは、赤色顔料の点以外では20などの一群と共通点が多いことが読み取れる。24の底部付近を観察すると、非常に小さいものではあるが、円盤高台状の立ち上がりを看取することができる点も注意しておきたい。

その他に、これらに属さないものとして31がある。底部はナデによって丸みを持った形状に成形されている。底部はかすかに確認される程度で、口縁部にいたるプローションは他とは明瞭な違いを示す。また、大形の杯（35）では、底部は篋切りで成形され、赤色顔料は確認されない。この形態は中世の杯に近似しており、時期の確定に躊躇するが、全体の中で新しい傾向を有するものとして評価しておきたい。皿（37～39）は、いずれも底部篋切りで赤色顔料は確認されない。その形状から37・38と39に分類される。前者は小形の杯と共通した形態を示すが、胎土や色調には明瞭な違いを示す。後者については、口径が10cmを、底部径も7cmを切るなど、他よりは明確に小形化している。体部ラインも大きく開くなど、中世の小皿の形態に近似しており、新しい傾向を認めることができる。その他に、40は土師器椀（8）と共通した胎土・色調を示し、赤色顔料も内外面に塗布される。口縁部内面には沈線がわずかに確認され、その形態からも同様に古い所属時期が想定される。

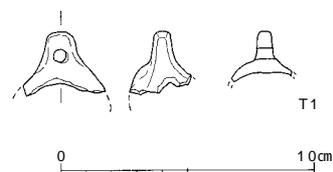
須恵器では、転用碗の出土が目目される。転用碗（18）は、高台付き杯の体部を打ち欠いたものである。内面には墨が薄く残存し、使用痕が確認される。高台内には墨書状の痕跡とわずかに磨り跡が残る。19は皿の転用である。非常に緻密な胎土が使用されている。内面には墨が付着する。

これらの遺物の所属時期は、それぞれの特徴からは、全体としては平安時代後半、10世紀後半～11世紀初頭に属する土器群と判断される。また、土師器あるいは黒色土器の生産に関しては、複数の工人の存在を窺うことができる点を指摘しておきたい。

その他に、須恵器杯(17)については、前述した土師器椀(8)あるいは土師器皿(37)と共に平安時代前半に属すると考えられる。同時期の遺物が、小片ではあるが様々な器種にわたって含まれていることから、溝の使用時期を、同時期にまで遡らせることもできるかもしれない。また、13世紀に属する土師質土器の存在は、本溝が最終的に埋没した時期を示す可能性が高い。

土製品(図179 図版21)

T1は土鈴の一部である。上部に穿孔があり、体部の下半は欠失している。残存部の形状から中空になっていることがわかる。つくりは丁寧である。



番号	器種	法量(cm)			形態・手法ほか	胎土・色調
		長さ	幅	厚さ		
T1	土鈴	2.0	3.2	2.2	丁寧なナデ、つまみ部の穿孔径0.5cm	細砂・淡褐灰/暗灰

図179 溝21出土遺物3 土製品(縮尺1/3)

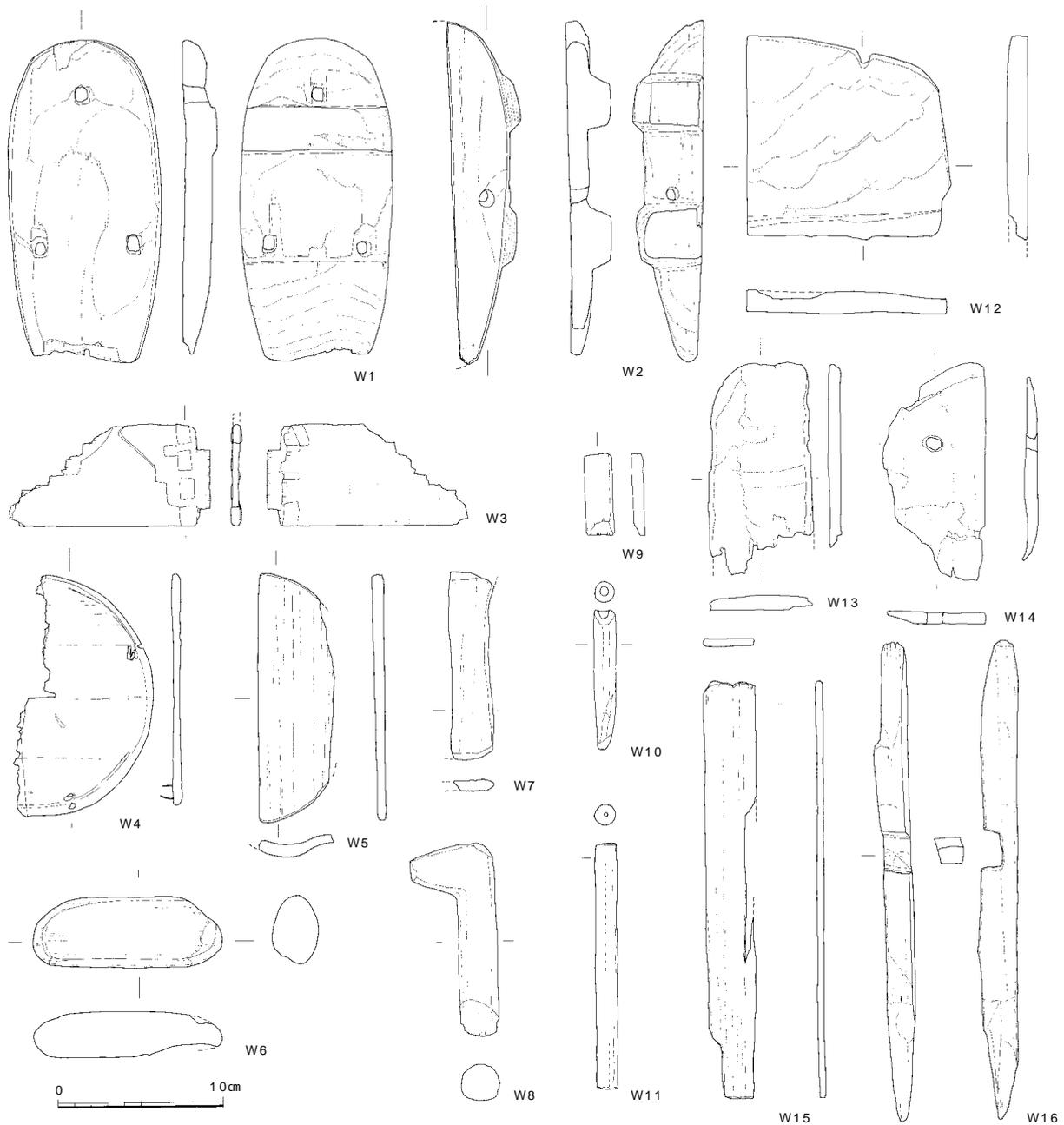
木製品(図180～182 図版29・30)

本溝から出土した木製品は総計220点余に及んだ。明らかな加工痕を確認できたものが102点である。その内訳は下駄・曲げ物といった製品を特定出来たものが7点、杭69点、部材・板材といったように加工痕は明らかであるが、明確な用途の特定には至らないものが29点である。このうち33点を掲載した。

W1・2は下駄である。W1は図の下端が欠損しているが、ほぼ全形がわかる。ヒノキ製である。表面は摩耗した部分から左足用であることがわかる。また歯もかなり摩耗しており、前側が1cm程残るのみで、後ろ側はほとんど原形をとどめていない。W2は右半分1/3程の破片であり、鼻緒の穴は1カ所認められる。スギ製である。歯は残りが良く、前後とも6～7cm程の高さで残っている。W1・2ともに長さは20cm前後であった。W3～5は曲げ物の一部である。W3は側板で綴じ部が残っている。スギ製である。W4・5は底板である。W4は約1/2が残っており、2カ所に側板と接合するための綴じ部が認められる。W5は約1/3が残っているが、歪んでいる。ヒノキを利用している。杭(W17・24・27・28・32)はほとんどが先端のみを加工し、その他は自然木のままとしているものである。先端加工は五面(W17)・八面(W18)・四面(W20)と比較的丁寧にカットしている。掲載したもののうちW18のみが、先端以外の部分にも若干の加工を施すものである。杭にはアカマツ、モミ属、ツガ属、コナラ属アカガシ垂属、マツ属、サカキの各種が利用されている。加工材としては、W12～14のように方形を呈する板状のもの、薄い短冊状のもの(W15・25・26・29～31)、角材状のもの(W33)等がある。このうちW12～14はその形状から鋤先などの農具の一部とも考えられる。短冊状のものうちW25は樹皮を利用したもので、図の上端に2カ所の綴じ部が認められる。曲げ物等によく見られるように樹皮を用いて、他の部材と綴じていたようであるが、全形・用途については不明である。その他にW6は平面楕円形状を呈し、浮子とも考えられるが、紐擦れ痕等は認められず、断定はできない。W7は柄の一部、8は把手の一部ではないかと考えられる。W10・11はいずれも穿孔のある管状を呈するが、用途・機能は不明である。W16は角材の先端を杭のようにカットし、中央部に方形の割り込み部を施している。割り込み部分の加工は大変丁寧である。用途・機能は不明である。元は何らかの部材であったものを、杭として再利用した可能性も考えられる。

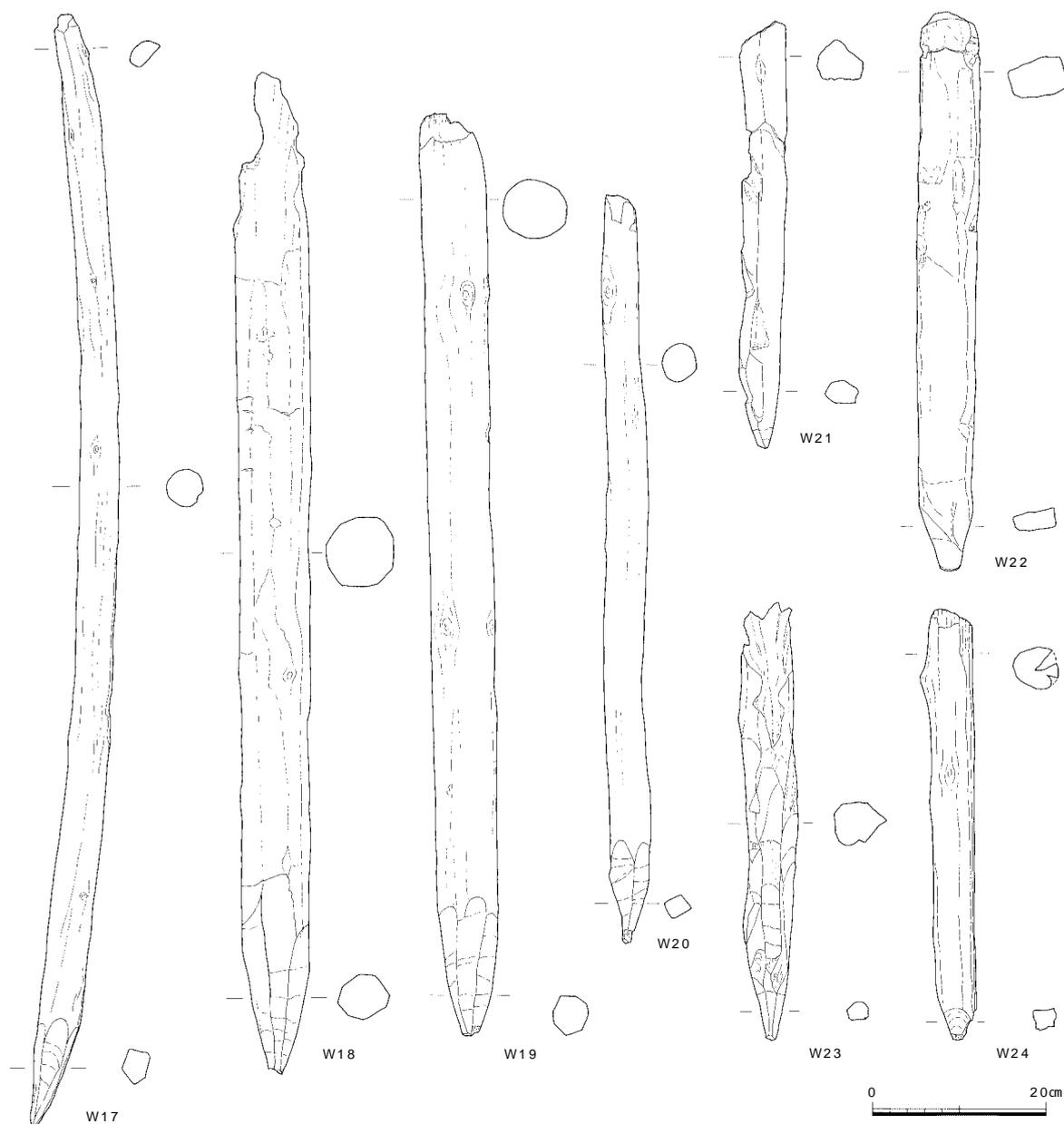
石器(図183・184 図版22～26・28)

石器は15点が出土した(図183、184)。石鏃(S307)はサヌカイト製で、先端部を欠損する。素材面を多く残す。左右の側縁で調整の単位が異なり、下縁も抉りを意図した剝離を両面から行なうが、抉りをつくり出せていない。平面形も左右非対称であり、製作途中で放棄された未成品である可能性が高い。スクレイパー(S308)



番号	器種	法量(cm)			形態・手法ほか	樹種
		長さ	幅	厚さ		
W1	下駄	19.6	9.3	1.9	丁寧な加工。使用による摩耗が顕著。後ろ側を欠損。	ヒノキ
W2	下駄	20.7	4.0	2.6	全形の1/3程の破片。図の下の方の歯は磨滅顕著。穿孔径0.7cm、丁寧	スギ
W3	曲げ物	6.2	12.2	0.2	曲げ物の合わせ目部。樹皮で縫じ合わせている。	スギ
W4	曲げ物	7.9	2.1	0.6	周縁の加工は丁寧。	
W5	曲げ物	15.7	4.2	0.7	周縁の加工は丁寧。面取りも丁寧。横断面では湾曲。	ヒノキ
W6	加工木	11.5	4.3	2.8	用途不明。加工は丁寧。使用痕等は認められない。	ケヤキ
W7	柄	11.5	2.5	0.7	図の下端は炭化。全体に丁寧な加工。	ヒノキ
W8	加工木	11.8	5.1	2.4	把手状。全体に丁寧な加工。	カキノキ属
W9	加工木	4.9	1.7	0.7	小札状。欠損により全形不明	ヒノキ
W10	加工木	8.5	1.3	1.3	管状。径0.3~0.6cmの孔が貫通する。	ウツギ属
W11	加工木	14.9	1.3	1.3	管状。径0.2cmの孔が貫通する。	
W12	農具?	12.1	12.5	1.6	図の上端に丸みをつける。使用痕あり。農具の一部か。	ツガ属
W13	加工板	13.3	6.2	0.7	0.75×1.0cmの方形穿孔あり。	ヒノキ
W14	加工板	12.9	6.2	0.8	図の上端、左側に加工。表面には炭化した部分あり。	
W15	板材	25.4	3.1	0.5	丁寧な加工。薄札状であるが、用途不明	ツガ属
W16	加工木	29.2	2.0	2.4	角材状。中央に2.5×1.9cmの挟りあり。	モミ属

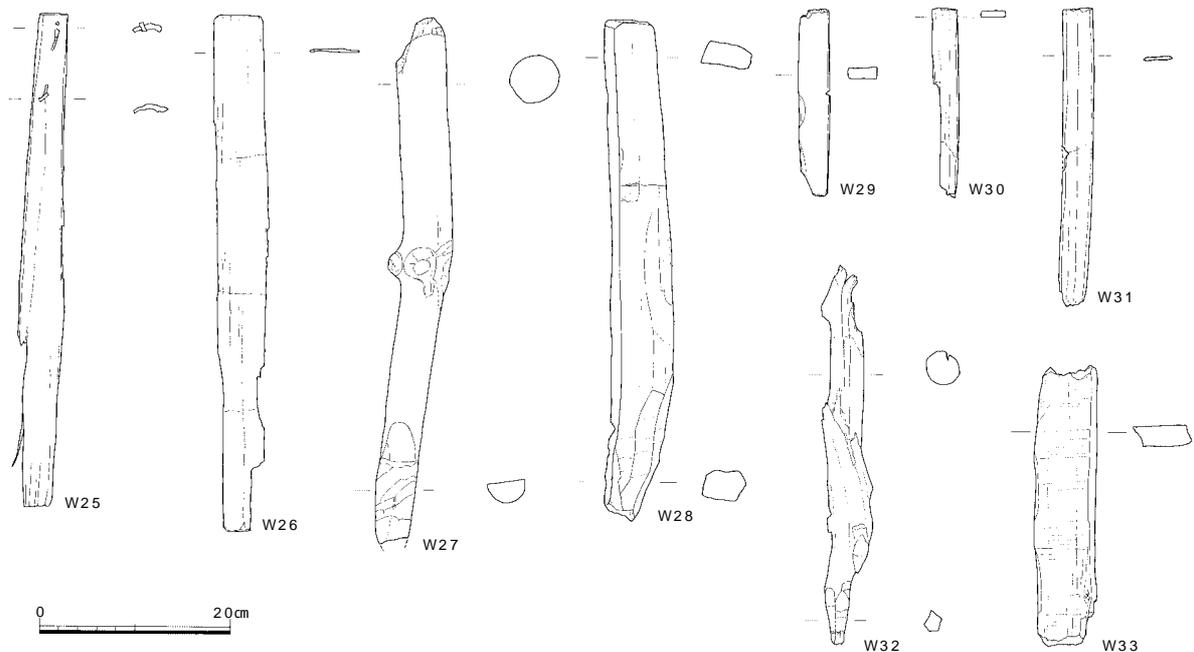
図180 溝21出土遺物4 木器(縮尺1/4)



番号	器種	法量 (cm)			形態・手法ほか	樹種
		長さ	幅	厚さ		
W17	杭	130.0	4.5	-	下端部以外は未加工。下端断面は5面体	アカマツ
W18	杭	117.0	8.5	8.5	下端は断面8~9面体。全体に加工痕あり、断面11~12面体	モミ属
W19	杭	117.8	7.2	-	下端部以外は未加工。下端断面は7面体	モミ属
W20	杭	87.7	4.8	-	下端部以外は未加工。下端断面は4面体	ツガ属
W21	杭	51.6	5.1	4.6	芯持ち材の下端を加工。下端の断面は6面体	コナラ属アカガシ亜属
W22	杭	64.2	6.8	4.6	角材の下端に加工。先端は欠損。図の上端両側縁にわずかな抉りあり。	コナラ属アカガシ亜属
W23	杭	51.1	5.7	5.0	一部に樹皮残すが、全体に加工。下端は6面体。	マツ属複雑管束亜属
W24	杭	50.1	6.1	4.7	芯持ち材の下端のみ加工。	サカキ

図181 溝21出土遺物5 木器 (縮尺1/8)

は細粒砂岩製で扁平な素材の周縁全体に両面調整を施し、石包丁状に整形している。手になじむ形状となっており、下縁には内湾する弧状の厚い刃部をつくり出す。刃部に使用による摩滅などは認められない。先端部を一部欠損する。石鋏は4点出土した (S309・310・314・315)、いずれも細粒砂岩製である。S309は細長く厚みのある素材の周縁に調整を施す。両側縁は下辺に行くに従い直線状に開きながら刃部に続き、下縁は厚みのある弧状



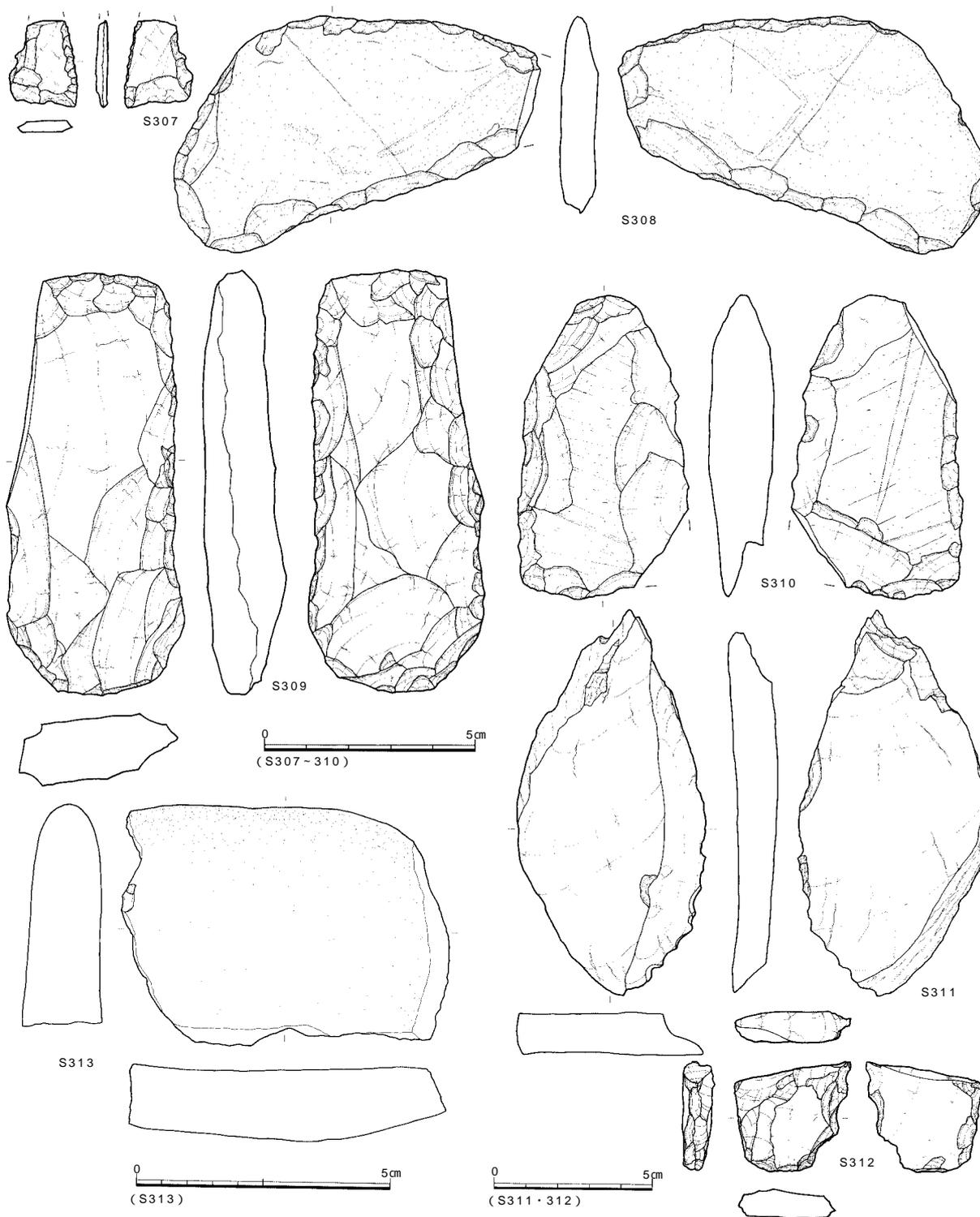
番号	器種	法量 (cm)			形態・手法ほか	樹種
		長さ	幅	厚さ		
W25	加工木	52.1	4.8	0.7	長条形の樹皮に二カ所に綴じ部。いずれも樹皮が残る。用途不明	
W26	板材	54.5	5.2	0.4	側縁の加工が特に丁寧。用途不明	
W27	杭	55.6	5.2	5.1	芯持ち材の下端のみ加工。	マツ属複雑管束亜属
W28	杭	53.2	6.6	3.2	角材の下端に加工。先端は欠損。	コナラ属アカガシ亜属
W29	加工木	20.0	3.1	1.2	加工丁寧。全形不明	スギ
W30	加工木	10.2	2.6	0.7	厚めの板状。全形・用途不明	樹皮
W31	板材	31.5	3.1	0.4	側縁の加工が特に丁寧。用途不明	
W32	杭	40.0	4.8	3.5	芯持ち材の下端のみ加工。	モミ属
W33	板材	29.6	6.3	2.4	厚手の板材と考えられるが、欠損部多く、全形不明	スギ

図182 溝21出土遺物 6 木器 (縮尺1/8)

の刃部がつくり出され、全体の重心は刃部側にある。上縁にも両面調整を施す。S310は小型品で、周縁を粗く両面調整を施す。S314は基部側1/2程度のみ残存するが、扁平な素材の両側縁に鈍く両面調整を施す。両側縁は下辺に行くにつれて直線状に開く。刃部は使用時に欠損した可能性もある。楔形石器 (S312) はサヌカイト製で、上下縁に階段状のつぶれた剥離を確認できる。一方で、左側縁付近には使用によると思われる摩滅部分と線条痕が残る。石鍬片を楔形石器として転用した可能性も考えられる。S311はサヌカイト製の縦長剥片である。右側面には自然面が残る。原礫から剥離された後にほとんど加工されていない。石皿 (S313) は流紋岩の扁平な礫を利用し、表面が全体的に摩滅し、その部分が緩やかに凹む。下縁と右側縁は折損するが、上縁付近は摩滅範囲が及んでおらず、整形のための折り面の可能性が高い。叩石 (S316) は泥岩製である。拳大の円礫を利用する。打ち叩く作業に適した形状、重さで、両主面や下端に敲打痕や線状痕が明瞭に残る。凹石 (S317) は風化の進んだ流紋岩の円礫を利用し、両面中央に1ヵ所ずつ凹みを有する。また下縁や側縁に敲打痕が広い範囲で観察できる。磨石は1点出土した (S318)。周縁を中心に全体的に摩滅する。石錘は3点出土した (S319~321)。いずれも円礫の長軸両端を両面から打ち欠いている。S320は大型品で左側縁の一部に敲打痕が残る。

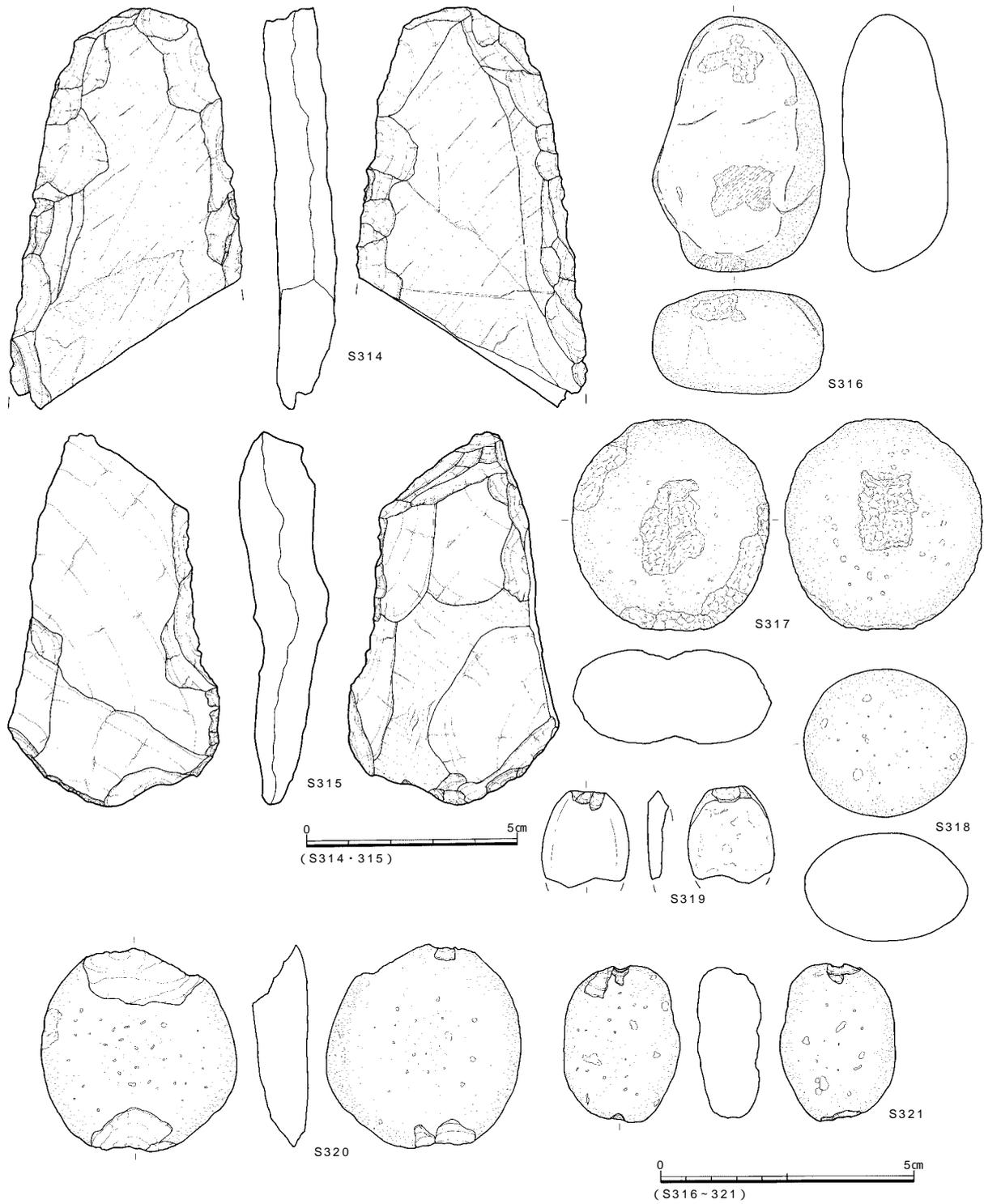
溝22 (図173~175)

溝22は9層上面からの溝で、溝21に北側の大半を削平されており、調査区内では平面形状の確認ができなかった。bb'断面の観察ではAW-2ライン付近を中心とする幅4m程の規模に復元できる。溝21の南肩に沿う方向で、残存部分の幅3.5m、深さ0.5mを測る。bb'断面19・20層、cc'断面16・17層、dd'断面11層部分が対応する。出土遺物はみられなかった。本溝の時期は確定が難しいが、溝21との関係から平安時代と考えられる。



番号	器種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石材	特徴
S307	石鏃未成品	(2.10)	1.65	0.30	(1.0)	サヌカイト	素材面を多く残す。右側縁に両面調整。
S308	スクレイパー	5.65	8.70	0.95	67.2	細粒砂岩	扁平素材の周縁に両面調整。石包丁状。
S309	石鏃	10.10	4.20	1.90	96.9	細粒砂岩	扁平素材の周縁に両面調整。
S310	石鏃	7.25	(4.05)	1.55	(59.2)	細粒砂岩	小型品。刃部一部を折損。
S311	剥片	12.30	5.98	1.65	118.5	サヌカイト	縦長剥片。原礫面を残す。
S312	楔形石器	3.50	3.65	0.95	13.7	サヌカイト	表面に摩滅範囲と線状痕。石鏃片の転用か？
S313	石皿	15.05	9.65	3.15	615.7	流紋岩	表面全体に摩滅範囲が観察できる。

図183 溝21出土遺物7 石器 (縮尺2/3・1/2・2/5)



番号	器種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石材	特徴
S314	石鋸	(9.60)	5.50	1.30	(89.8)	細粒砂岩	基部のみ残存。素材の周縁に両面調整。
S315	石鋸	8.95	5.00	2.15	82.4	細粒砂岩	扁平素材の周縁に両面調整。
S316	叩石	10.40	6.80	4.20	437.2	泥岩	拳大の円礫。表面と下端部に敲打痕。
S317	凹石	7.80	8.50	3.75	357.1	流紋岩	円礫両面中央に凹み。
S318	磨石	6.40	5.92	4.35	926.3	石英安山岩質凝灰岩	全体的に摩滅。
S319	石錘	(3.90)	(3.50)	(0.90)	(12.9)	流紋岩	裏面を欠損。上端に打ち欠き。
S320	石錘	8.20	7.70	2.15	188.2	流紋岩	扁平な礫の上下端に打ち欠き。
S321	石錘	6.30	4.60	2.50	97.3	流紋岩	円礫の上下端に打ち欠き。

図184 溝21出土遺物 8 石器 (縮尺2/3・2/5)

溝23 (図173)

調査区の北端部で部分的に検出した溝で、西側を溝23a、東側を溝23bとして記述する。東側では9層上面、両側では9b層上面にあたり、検出レベルは標高3.2mである。埋土は前述の溝21下層溝の4群中の砂層と同じで、両者が併存していた可能性は高い。溝23aは03 - 20 ~ 60ライン間で溝21の北肩に沿って長さ約8m、幅1.8mを確認した。深さは9 ~ 19cmを測る。この溝の北東部に幅0.5m、深さ6cmの小溝がとりついており、東西方向の長さ4m程を検出している。底面レベルは、小溝の東端で3.18m、溝22の西端で2.94mを測り、東から西へ流れている。近似する状況は溝23b(02 - 70 ~ 90ライン間)でも認められ、東西方向部分(残存幅0.3m、長さ9m)と、その西側から南へ向かう幅広の溝(幅2.0 ~ 4.2m、長さ約2m)を確認している。この部分での底面レベルは東端で3.0m、南端で2.88mを測る。また02 - 80ラインと03 - 10ライン付近ではそれぞれで、西側が収束する溝状のくぼみ(幅0.8 ~ 1.5m、残存深度5cm程度)が認められる。これらも溝23と関連するものと考えられるが、全形は不明で確定はできない。また溝23aと溝21の杭d群、溝23bと杭c群という位置関係を考えると、溝23側から溝21への水流を制御する機能を想定でき、この点からも溝21・23の併存の可能性が高いと言える。出土遺物はなかったが、層位から平安時代と考えている。

b . 畦畔 (図173)

微高地部の畦畔は、8b層で検出したもので、標高3.3m前後を測る、約20面を確認し、畦畔の幅20 ~ 30cm、高さ3 ~ 5cmを測る。不確定な部分もあることから一区画は東西3.8 ~ 9.0m、南北2.4 ~ 9.6m、面積8.16 ~ 22.0m²とばらつきがある。谷部では溝21の南北で、畦畔を検出している。検出レベルは標高3.2m前後、9層上面にあたる。北側の畦畔は前述の溝23aに伴い、この一画では9b層上面にあたる。03 - 30 ~ 50ライン間で幅0.3m、高さ2cmの畦畔を長さ3.5m程を検出した。これを切る形で03 - 20 ~ 30ライン間で幅0.9m、高さ3cmの畦畔を確認したが、この畦畔の西端は、前述の溝23のくぼみを取り巻くように南側に屈曲するようである。02 - 70 ~ 90ライン間でも幅0.5 ~ 1.0mの畦畔を検出し、ここでも溝状くぼみを取り巻くように西側で南に向けて屈曲している。また南側の、溝22に伴う東西方向の畦畔は長さ約8m、幅0.5m、高さ2cm程を検出した。

なお第17次調査地点の北東の一画(AW03 - 60・AW03 - 61区)では畦畔は認められなかった。この部分では、東西10m、南北5m程の範囲が若干たわんでおり、馬あるいは牛の蹄痕が多数認められた。このたわみも畦畔と同様、8a層の洪水砂で覆われている。ずぶずぶとした湿地状を呈したことを示すものと考えられる。

第7節 中世の遺構・遺物

中世の遺構は耕作に伴うものが大半である。7層上面では溝1条(溝24)とたわみ2を検出した。6層上面では溝1条(溝25)と溝25に伴う水口2カ所および畦畔と、調査区のほぼ全域に及ぶ耕作痕を検出した。

溝24は、それ以前の古代の溝21を踏襲していたものであり、中世後半、おおよそ14世紀代のうちに埋没する。その後に溝25が掘削されるが、これは位置を南にずらし、AW - 2ライン付近を走行するものである。溝25の掘削以降、近代まで、この位置の溝が坪境の溝として機能していくこととなる。中世末頃に、土地の区画整理を大規模に行ったことの傍証となるものであろう。同様の状況は、本遺跡第12次調査地点でも確認されており、溝25に対応する溝として溝32、溝24に対応するものとして溝31との関係が認められる。

a . 溝**溝24 (図185・186)**

AW - 1ライン付近を東西方向に走行し、8b層検出の古代の溝(溝21)を踏襲する形で構築されている。検出

面のレベルは標高3.2～3.4mで、7層上面にあたる。溝の残存幅は2.4～3.2mで、深さは最深部で45cmである。底面のレベルは東端で標高3.05m、西で2.9mであり、東から西へ流れている。

埋土は東側ではaa'断面にみられるように砂質が強いが、bb'断面以西では粘質を強める。bb'断面では暗灰～灰褐色系の粘質土を主体としている。このうち7層（淡灰褐色土）の堆積部分は幅0.4m、深さ約15cmの断面丸底を呈する小溝状を呈している。平面形では、03-20ラインの東から03-50ラインの西側までの間に長さ17m程の小溝として確認された。この小溝の機能については不確定であり、本溝に伴うかどうか確定はできないが、走行方向は一致していることから、本溝に伴う可能性がある。

遺物はコンテナ（約28リットル）1/2箱の土器・陶磁器片が出土した。中世後半のものと考えられる須恵器甕等の破片が認められるが、図化できるものはなかった。本溝の時期は中世後半と考えられる。

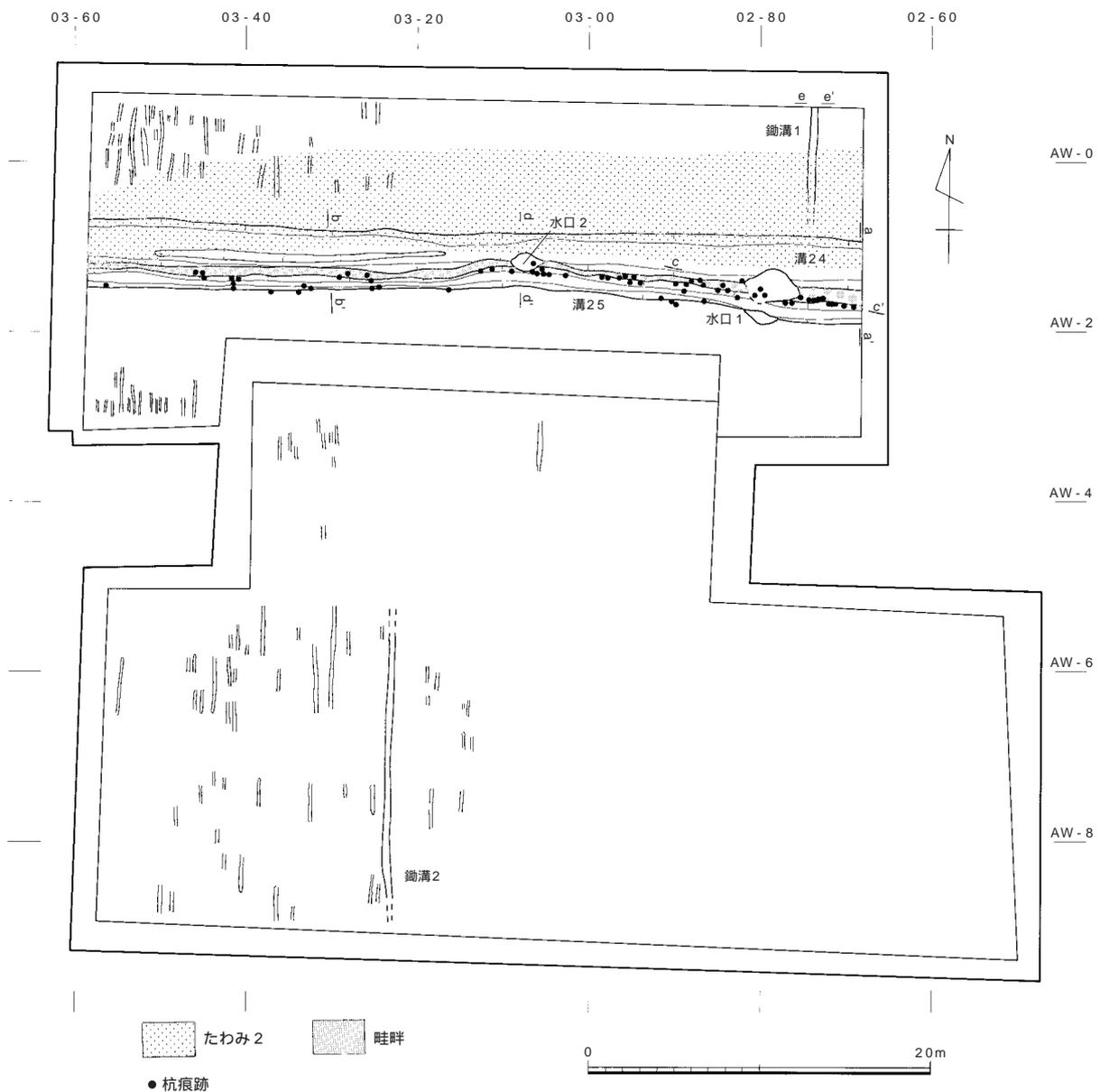


図185 中世遺構全体図（縮尺1/400）

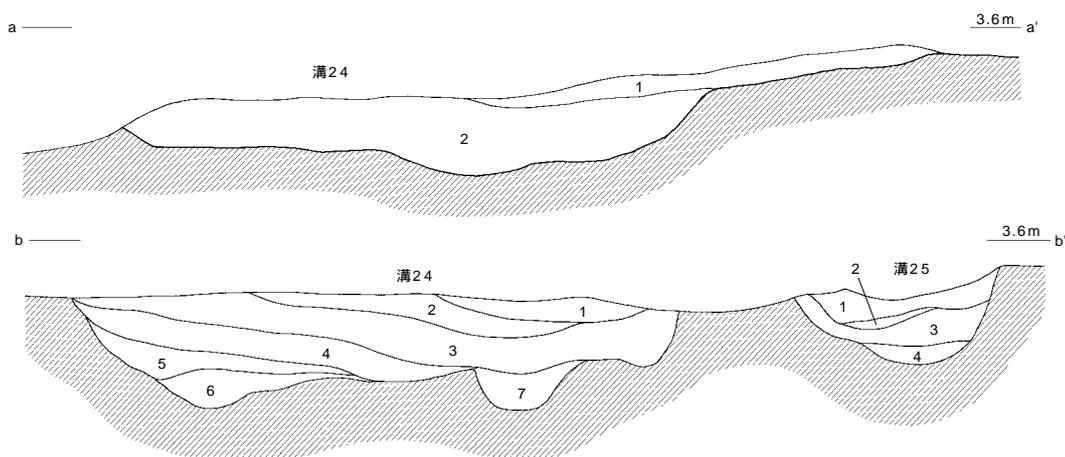
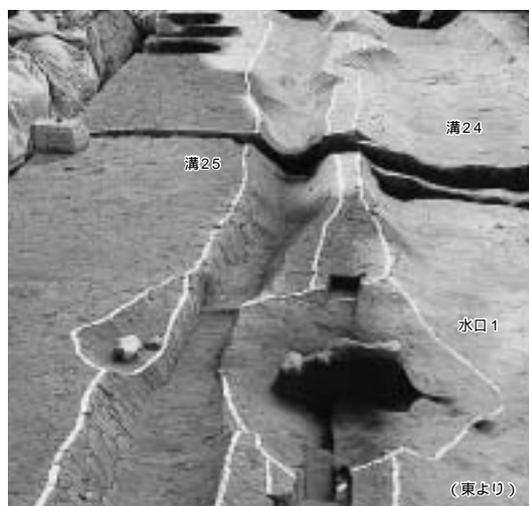
溝25 (図185 ~ 188)

溝24の南に位置し、AW - 2 ラインに沿って東西方向に走行するが、西に向かうにつれ、次第に北へ振れていく。検出面のレベルは標高3.4 ~ 3.5mで、6層上面にあたる。近世の溝 (溝26) ・ 近代の溝 (溝27) が本溝を踏襲した形で重複しているため、上面はかなり削平を受けている。調査区東壁断面の観察から、本来は15cm程度は高かったことが窺える。検出できた部分で幅0.8 ~ 1.0m、深さ35 ~ 40cmを測る。底面のレベルは標高3.1m前後である。わずかに東高西低となっている。断面形は丸底に近い。埋土は灰色から灰褐色の砂質土が主体である。また底面では杭および杭の痕跡を確認した。検出位置からは溝の護岸的な用途が推測される。杭の性格上、本溝に確実に伴うものかどうかは不明確である。その位置が溝25の両脇に集中していることから、本溝との関係を考えてい。

出土遺物は少なく、陶器片、土師質土器椀等が見られる。時期としては中世後半と考えている。そのほかに石器1点が出土した (図188)。S322は砂岩 (シルト岩) 製砥石である。四面全てが摩滅し、中央面には線状痕が明瞭に残る。

本溝には2ヵ所に水口を確認している。水口1はAW02 - 82区で、水口2はAW03 - 21区で検出した。

水口1 溝の南北2個で一対になっている。検出レベルは標高3.3 ~ 3.4mで、6層上面にあたる。北側では、長径3.0m、短径1.8mの不整形を呈し、最深部の深さ40cmを測る。底面のレベルは標高3.0mを測る。南側では長径2.0m、短径0.6mの不整楕円形を呈し、最深部の深さは18cmである。底面のレベルは標高3.2mを測る。溝25底と比べると南側は10cm程高く、北側は10cm程低くなっていることから北側に向けて取水したことが伺える。埋土は、細礫や粗砂を多く包含する粘質土を下層に、上層に緑灰色砂質土が堆積する。また最上層の1層中には最大径約30cm ~ 拳大の礫が認められたが、これは水口を塞ぐために据えられた可能



溝24

- aa' 断面
 1. 黄緑灰色砂質土
 2. 淡橙褐色砂質土

bb' 断面

1. 暗緑灰褐色土
 2. 暗灰褐色土
 3. 淡灰褐色土
 4. 暗灰色粘質土
 5. 淡灰褐色土
 6. 暗灰色土
 7. 淡灰褐色土

溝25

1. 暗灰褐色土
 2. 暗緑灰褐色砂質土
 3. 灰褐色砂質土
 4. 暗灰褐色砂質土

図186 溝24・25 (縮尺1/30)

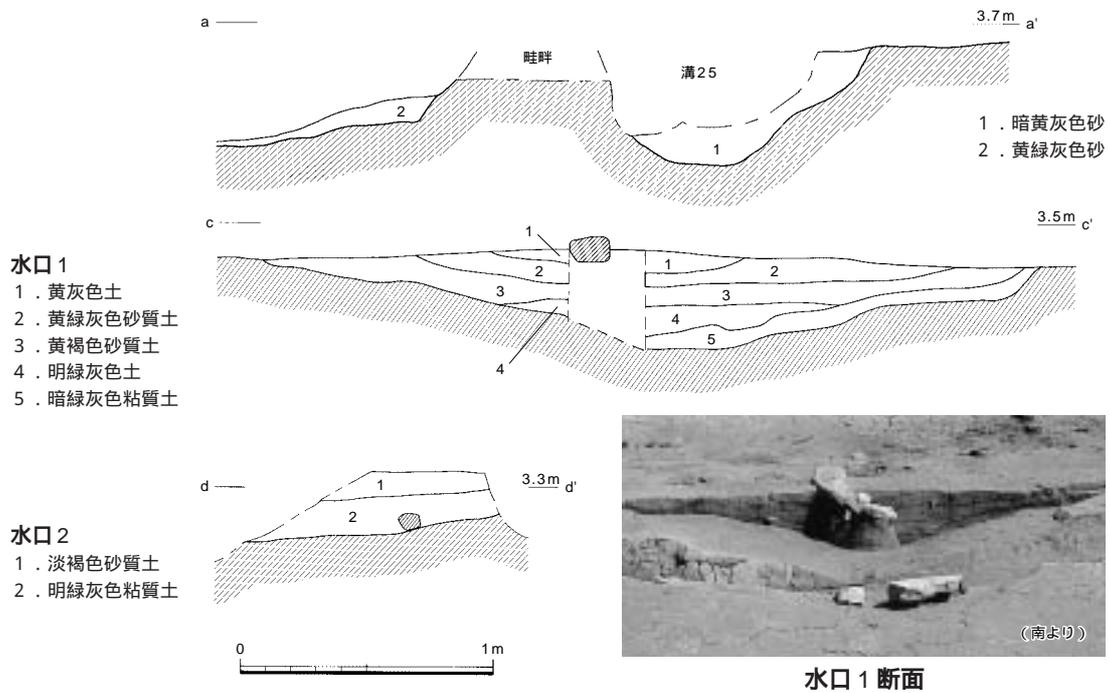
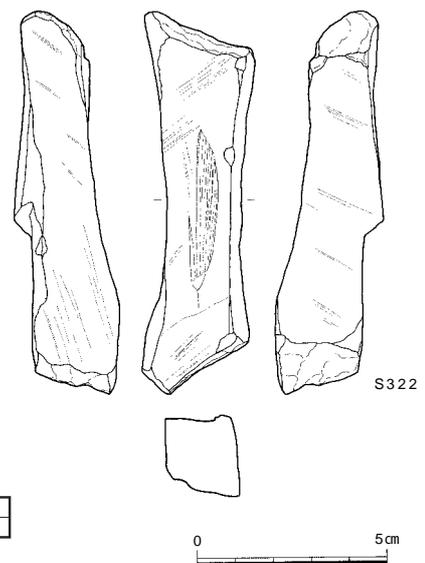


図187 溝25・畦畔、水口1・2 (縮尺1/30)

性も考えられる。

本来は溝25の両側に、東西方向の畦畔が存在していたものと想定されるため、この水口は溝25から水田面へ直接水を取り入れるための設備と考えられる。遺物はわずかに土師質土器の小片が認められた。

水口2 水口1に比べても格段に残存状況が悪かった。検出レベルは標高3.35mである。長径1.8m、短径1.0mで、深さ25cmを測る。底面のレベルは北端で標高3.0mで、溝25底よりも10cm程低い。埋土は上層が褐色砂層、下層が緑灰色粘質土層の2枚からなる。機能としては水口1と同様の設備と考えられる。出土遺物は僅かに土器の小片が認められた。



番号	器種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石材	特徴
S322	砥石	10.15	2.90	2.15	88.1	泥岩(シルト岩)	四面全て使用。

図188 溝25出土遺物 (縮尺1/2)

b. たわみ

たわみ2 (図185・189)

7層上面で検出した。検出面の標高は東端で3.35m、西端で3.3m、底面の標高は東端で3.0m、西端で2.9mを測る。幅は東端約7m、西端で5m、深さは40cm前後である。古代溝(溝21)の上位にあたり、ほぼ東西方向である。埋土は淡橙褐色粘質土である。aa断面にみられるように緩やかな皿状を呈しており、その点で溝24と共通する。ここではたわみとして記述したが、溝24と同様の形状の溝である可能性も考えられ、その場合、溝24との位置関係を考慮して、第12次調査地点の溝32に対応する可能性がある。

調査の記録

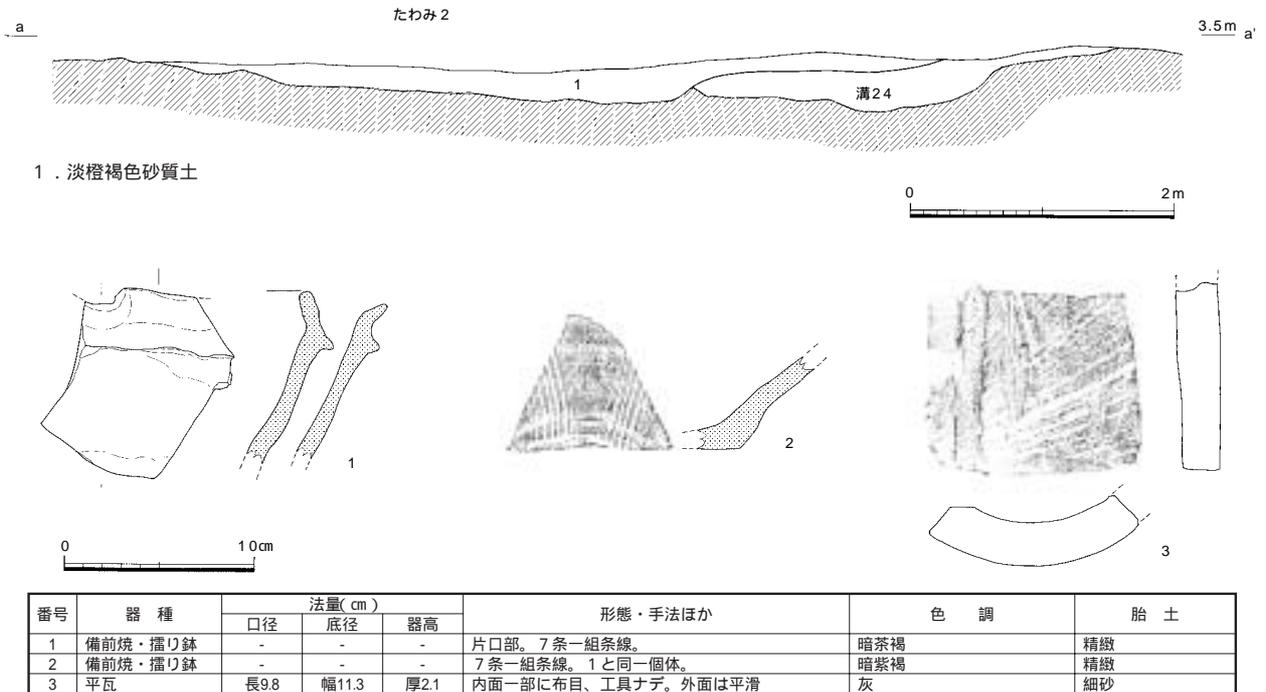


図189 たわみ2・出土遺物 (縮尺1/60・1/4)

たわみ2の出土遺物を図189に掲載した。1・2は備前焼の搦り鉢である。3は平瓦であり傷みが多い。これらの遺物からたわみ2の埋没時期は14世紀代と考えられる。

c. 畦畔

溝25の北側に沿うように東西方向の畦畔を検出した(図185)。検出レベルは標高3.3mで、6層上面にあたる。畦畔の幅は0.4~0.6m、高さ10~15cmである。調査区東壁断面(図187)にみられるように、本畦畔に伴う耕作土と考えられる6層上面のレベルは畦畔の南北で比高差が認められ、南側では標高3.6m、北側では3.4m前後である。畦畔と溝25を境として南北で耕地に段差があったと考えられる。また本来は溝25の南側にも畦畔があったことは推測されるが、近世段階の耕作により削平されているものと考えられる。

d. 耕作痕 (図185・190)

第17次・第22次調査地点とも、西半分で南北方向の小溝群を検出している(図185)。検出レベルは北側で標高3.4m前後、南側では3.6m前後である。6層上面の検出である。幅10~20cm、長さは短いものでは20cm程度、長いもの(鋤溝1・2)で6~15mである。深さは2~5cmと浅い。これらの小溝群は耕作痕であり、鋤痕と考えられる。

鋤溝1(図190)は第22次調査地点の北東端部で検出した。南北方向の溝を調査区北壁から溝23の北側まで約6m確認した。6層上面で検出したもので、検出レベルは標高3.4m、底面の標高は3.32m前後で北側がわずかに低い。幅0.5m、深さ8~10cmである。溝24との切り合い関係は確認できなかった。出土遺物は見られなかったが、検出面の時期から本溝の時期は中世後半と考えられる。第17次調査地点の鋤溝2も同様の形状であった。

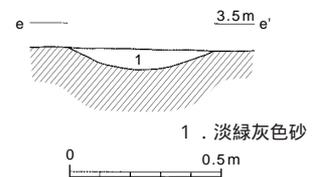


図190 鋤溝1 (縮尺1/30)

第8節 近世・近代の遺構・遺物

1. 近世

近世の遺構は、7層上面で土坑3基、5層上面で溝1条（溝26）・集石遺構・柱穴列と耕作痕、3層上面で土坑7基を検出した（図191）。このうち土坑については、検出面は中世層である7層を含む複数層に及んだが、いずれも本来は3層の遺構と評価される。溝26と集石遺構に関しても土層の状況から、3層の遺構であると判断される。ただし溝については前段階からの経緯や出土遺物の内容を含めて、5層段階にも溝が存在し機能していた可能性は高いものと考えている。

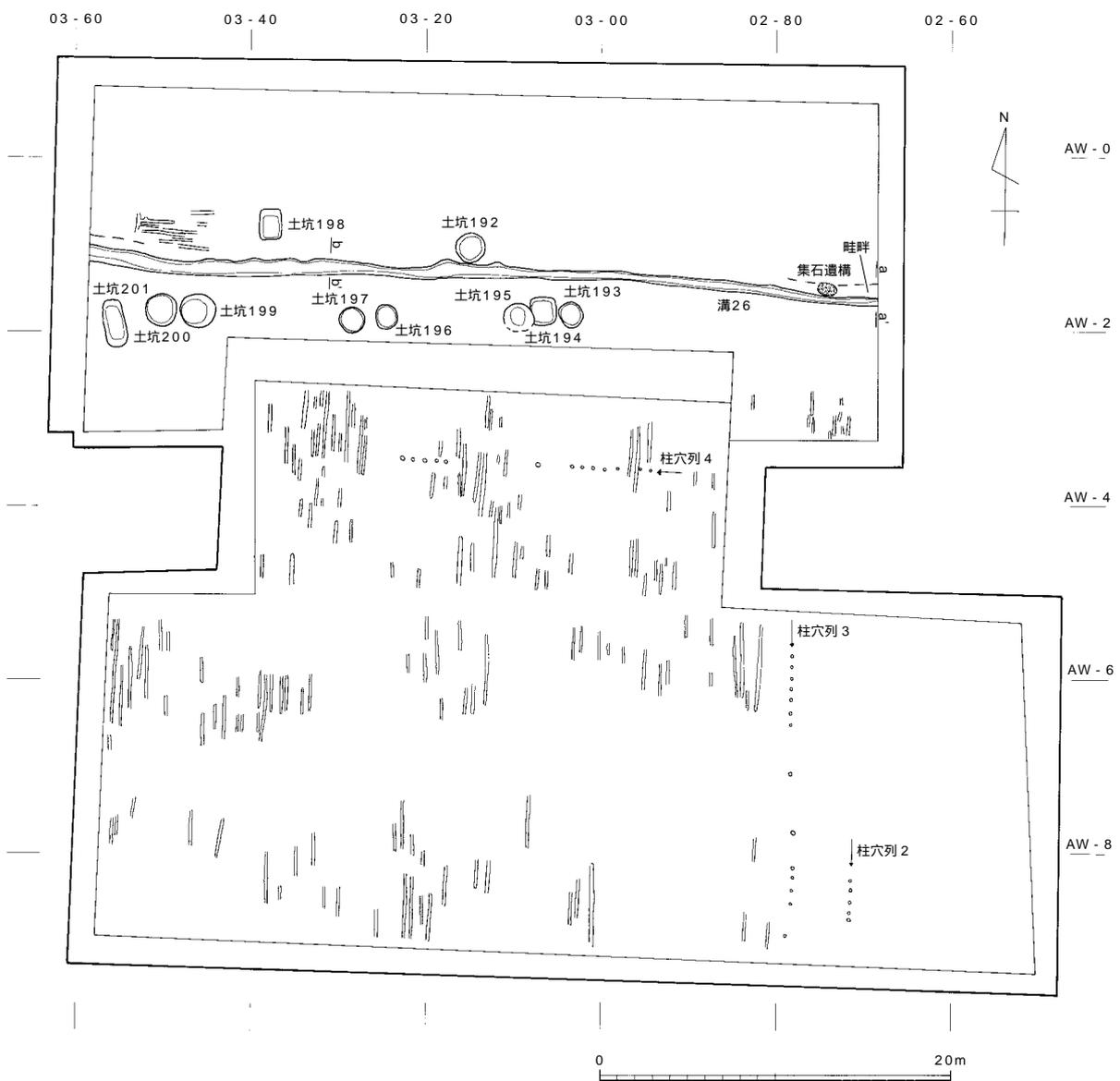


図191 近世遺構全体図（縮尺1/400）

このようにみえてくるとまず、5層段階に属する遺構である耕作痕は、溝より北側では東西方向、南側では南北方向の耕作痕としてとらえられる。検出面の標高は北側で3.55m、南側で3.7m前後である。これらの耕作痕は幅10cm程、深さ2～5cmの浅い小溝状であり、長さは0.5～4mとまちまちである。この形状は南北のいずれでも同様であることから、方向の違いは、耕作方法ではなく、区画の違いを示しているものと考えられる。また溝の南北で検出面のレベルに差異があることから、この溝を境として、中世段階と同様に耕地面に段があることが窺える。

次に3層段階の遺構は、東西方向の溝1条（溝26）と畦畔および集石遺構、溝に沿ってつくられる土坑10基、柱穴列である。土坑については、位置と形状から3群に分類できる。また3層上面の標高は、北側が標高3.6m、南側が標高3.8m前後と、溝を境とした南北の段差が、この段階でも認められる。

a. 土坑

土坑は10基を検出した。土坑192・195・197・199・200は3層上面で、土坑196・198・201は中世層である7層上面での検出である。平面形では円形のもの（土坑192・193・195～197・199・200）と方形に近いもの（土坑194・198・201）に分類される。位置では、溝26の北側に2基（土坑192・198）、南側に8基（土坑193～197・199～201）がつくられており、北側はAW-1ライン、南側はAW-2ライン上に並ぶ。南側の並びは溝26からほぼ1.5mの間隔を持っており、この部分が畦畔にあたるのであろう。北側については土坑198は同じく1.2m程の間隔を持つ。しかし土坑192は溝の北肩に接しており、土坑群の中では新しい時期の可能性が考えられる。

南側につくられる土坑のうち円形のもは2基ずつ対になった配置と認められる。東より土坑193・195、その約6m西に土坑196・197、その約7m西に土坑199・200と並ぶ。このことから6～7m毎の南北方向の区画が想定できる。対とはならない方形を呈する2基についても、土坑北側のラインは一致していることから、同様の意図で構築されたことが窺えるが、形状の差は時期差を示している可能性がある。同じく方形の土坑194が円形の土坑195に切られていることから、方形のものが古い一群と考えられる。

以上のことから、土坑群については、古いものから土坑194・198・201（方形）土坑193・195・196・197・199・200（円形で2基一対）土坑192という3群に分類される。これらの土坑の多くは野壺であったと考えられるが、土坑198・201に関しては特徴の違いから、別の機能が想定される。

土坑192（図191・192）

溝26の北側、AW03-11区に位置している。検出面は3層である。検出面の標高3.55m、底面は2.68mを測る。

平面形は円形で、直径1.55～1.63mを測る。底面は周縁が若干くぼみ、直径1.30mの円形を呈する。検出面からの深さは83cmである。掘り方の断面ではほぼ垂直に掘削される。

埋土は灰色粘質土が主体である。3層中からは木枠の側板が、4層中からは底板とみられる木片が出土した。他の調査地点で検出している木枠の据えられた土坑では、枠の外側を充填する埋土が確認されているが、本土坑では認められないことから、本来設置されていた木枠は廃棄時にとり外されていると想定される。

遺物は陶磁器・瓦片等が出土している。本土坑の時期は近世と考えられる。溝26北肩に接し、畦畔を切る位置にあたることから、土坑群のなかでも新しい時期の可能性もある。

土坑193（図191・193）

溝26の南側、AW03-11区に位置する。3層上面で検出し、検出面の標高3.75mである。

平面形は円形で、直径1.2～1.35mである。標高2.92mまで掘削された底面は、径1.1～1.2mの円形を呈し、縁辺部が若干くぼむ。掘り方断面はほぼ垂直に掘削されたことを示しており、土坑192と共通する。埋土は1・2層が灰色粘質土、最下層の3層は淡灰色粘質土である。

遺物は近世の陶磁器小片がごく僅かに認められた。本土坑の時期は近世と考えられる。

土坑194 (図191・194)

AW03 - 01区に位置している。土坑195に接しており、西側の肩部を破壊されている。7層上面で検出したもので、検出レベルは標高3.4m、底面のレベルは標高3.0mである。平面形は一辺1.5mの隅丸方形を呈し、残存部の長径1.92m、短径1.58mである。残存深度は40cmである。底面は概ね平坦で、掘り方の形状は、ほぼ垂直に立ち上がる。

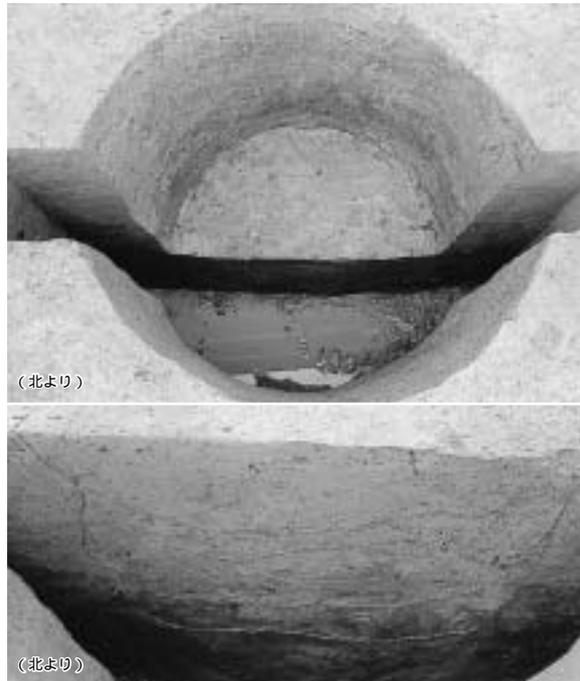
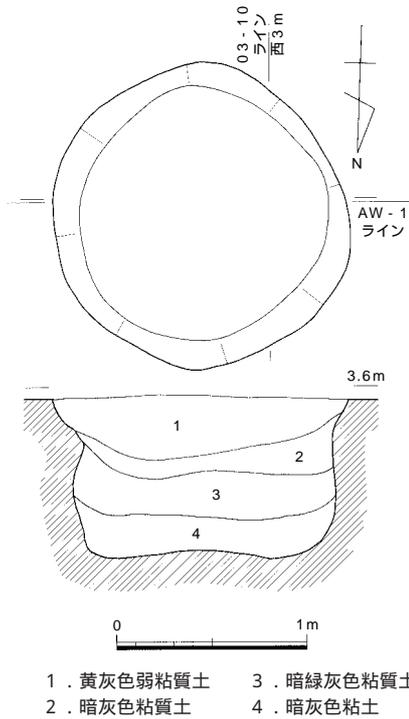


図192 土坑192 (縮尺1/40)

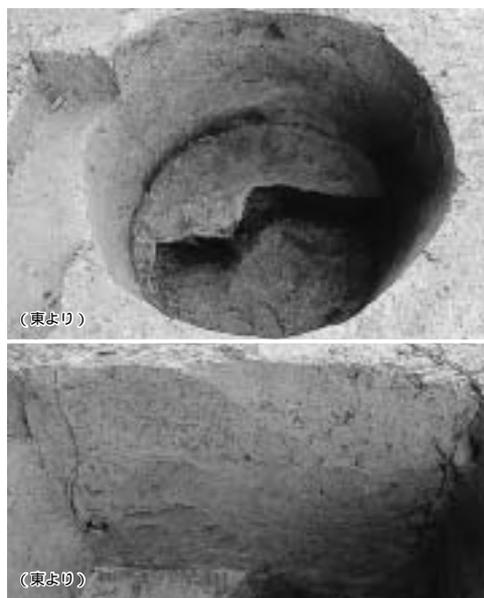
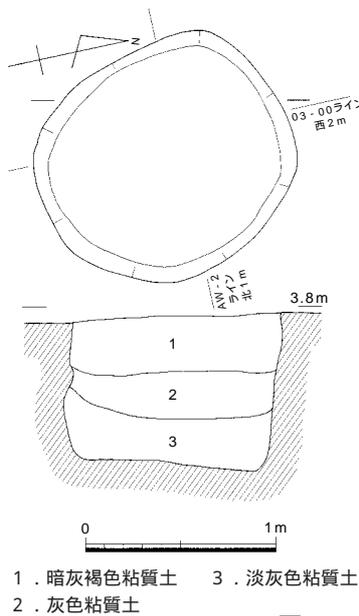


図193 土坑193 (縮尺1/40)

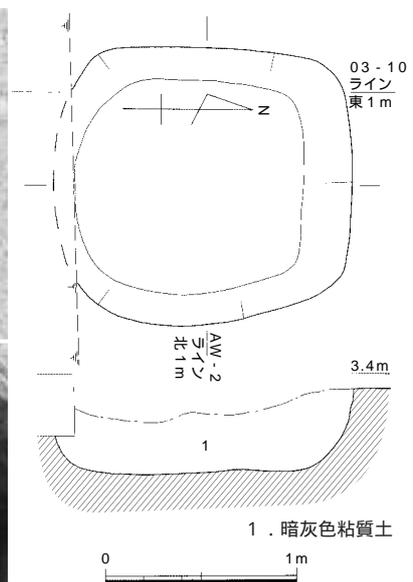


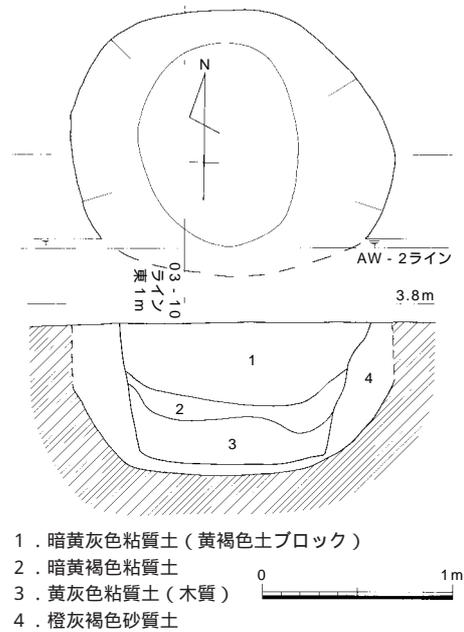
図194 土坑194 (縮尺1/40)

埋土は灰色粘質土である。遺物はみられなかった。検出面は異なるが、埋土の状況や底面のレベルが一致することから、本土坑の時期は近世と考えられる。

土坑195 (図191・195)

溝26の南側で、AW03 - 01区とAW03 - 11区にまたがり、南側は側溝によって削平される。土坑194と接しており、その西側の肩を壊している。

検出面は3層でレベルは3.7mを測る。平面形は円形で、長径1.7m、短径は推定で1.4mである。標高2.9mまで掘削された底面は平坦に近く、径0.8~1.1mの楕円形状を呈する。掘り方の断面形は、丸みのある逆台形を示す。土層の堆積状況から、本土坑には木枠が据えられていたと想定できる。木枠内の土層は有機物や粘質土のブロックを含むのが特徴的である。4層は木枠の外側を埋めた土層で、砂質であり、内側の埋土とは明瞭な違いを示す。遺物はポリ袋で6袋の陶磁器片、瓦片が出土している。いずれも近世のものであるが、図化できるものはなかった。本土坑の時期は近世である。



- 1. 暗黄灰色粘質土 (黄褐色土ブロック)
- 2. 暗黄褐色粘質土
- 3. 黄灰色粘質土 (木質)
- 4. 橙灰褐色砂質土

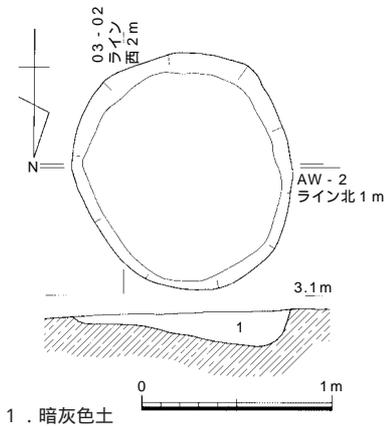
図195 土坑195 (縮尺1/40)

土坑196 (191・196)

7層上面で検出した。溝26の南側、AW03 - 21区に位置する。検出レベルは標高3.0m、底面のレベルは標高2.85~2.95mである。

平面形は円形を呈し、直径1.13~1.26mを測る。残存部深さは15cmを測る。7層での検出であるが底面のレベル、配置が溝26の南側の土坑群と一致することから、これらと同じく3層の遺構と判断した。

出土遺物はわずかに陶器片が認められたが、図化できるものはなかった。本土坑の時期は、近世と考えられる。



- 1. 暗灰色土

図196 土坑196 (縮尺1/40)

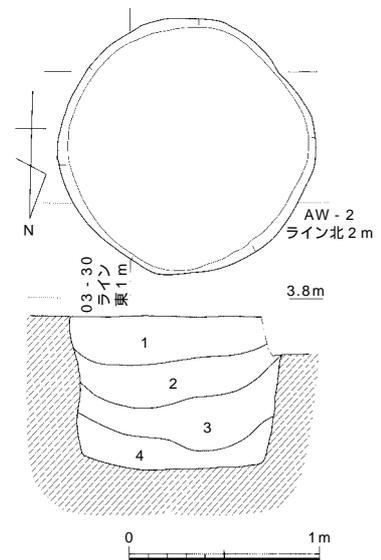
土坑197 (図191・197)

AW03 - 21区とAW03 - 22区にまたがった地点に位置する。北側には溝26が、東隣に土坑196が存在する。

平面の形状はほぼ正円形を呈し、長径1.35mである。3層上面で検出し、検出面のレベルは標高3.7m、底面のレベルは標高2.9mである。検出面からの深さ82cmを測る。底面は円形で、直径は1.28mであり、掘り方断面からもほぼ垂直に掘り込まれたことがわかる。機能時には木枠を入れていたものであろう。

埋土は全体として灰色系の粘土であるが、最下層4層は暗黄緑灰色粘質土に黄灰色細砂が混じり、使用時の流入土と考えられる。

遺物はわずかに陶磁器片が認められ、備前焼播り鉢の破片などが含まれる。本土坑の時期は近世と考えられる。



- 1. 灰褐色砂質土
- 2. 黄灰色粘質土
- 3. 黄緑灰色粘質土
- 4. 暗黄緑灰色粘質土

図197 土坑197 (縮尺1/40)

土坑198 (図191・198)

調査区北寄りのAW03 - 30区に位置する。溝26の北側にあたる。検出面は7層で、検出レベルは標高3.35m、底面のレベルは標高3.05mであ

る。

平面形は長方形を呈し、規模は長辺1.65m、短辺1.17mである。残存深度は30cmを測る。底面の形状は、平面長方形を呈し、長辺1.2m、短辺0.9mを測る。掘り方の断面は、南側が急峻に立ち上がるのに対し、北側の傾斜は緩やかである。平面形の点で他とは異なるが、底面のレベルと溝の北肩の畦畔を意識した配置の点は共通する。

出土遺物はごくわずかに陶器小片が認められた。本土坑の時期は近世と考えられる。

土坑199 (図191・199)

AW03 - 41区に位置する。溝26の南側で、土坑197の7 m西に位置する。

検出面は3層上面、検出レベルは標高3.55mであり、底面は標高2.85mにある。平面形は円形を呈し、直径1.90~1.95mである。深さは約80cmである。底面の形状は直径1.45~1.50mの円形を呈する。掘り方断面はほぼ垂直に掘り込まれている。

埋土は1~4層が灰色系の粘土・砂質土で、これらは木枠内の埋土である。5~7層は砂質土であり、枠外の堆積土である。出土遺物はわずかに染付片等の陶磁器類が認められる。本土坑の時期は近世と考えられる。

土坑200 (図191・200)

AW03 - 41・51区に位置する。

溝26の南側で、土坑199の西に隣接する。3層上面で検出した。検出面のレベルは標高3.5m、底面の標高2.7~2.85mである。平面形は円形で、直径1.65~1.8m、最深部の深さは0.8mである。底面は直径1.4~1.55mの円形を呈しており、掘り方の断面はほぼ垂直である。

土坑内の埋土から木枠が据えられていたことが想定される。1~5層は木枠内の埋土にあたり、1~4層は灰色系の粘土層、5層は粗砂と粘土が互層となって堆積する。6・7層は木枠の外側を埋める土層である。

遺物は陶磁器片・瓦片等ポリ袋で3袋程度が出土している。本土坑の時期は、近世と考えられる。

土坑201 (図191・201)

AW03 - 51区とAW03 - 52区にまたがる地点にある。溝26の南側で東1.2mには土坑200が位置する。7層上面で検出した。検出レベルは標高3.3m、底面のレベルは2.65mを測る。

平面の形状は隅丸長方形を呈し、長辺2.26m、短辺0.95mを測る。深さ50cmが残存する。断面形は逆台形を呈する。埋土は暗黄灰色~青灰色粘質土である。

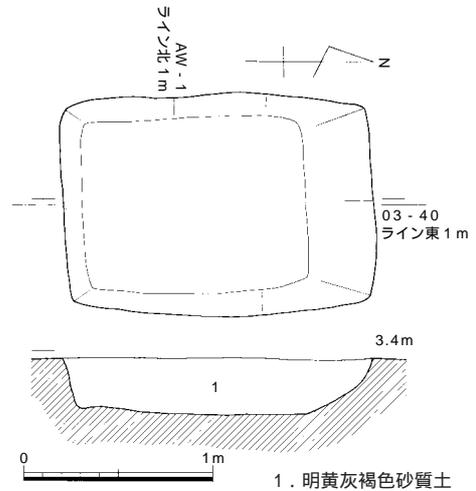


図198 土坑198 (縮尺1/40)

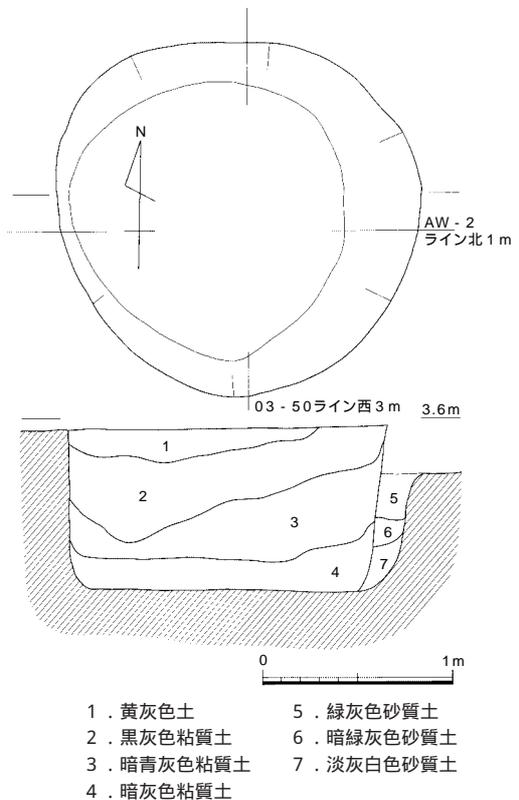


図199 土坑199 (縮尺1/40)



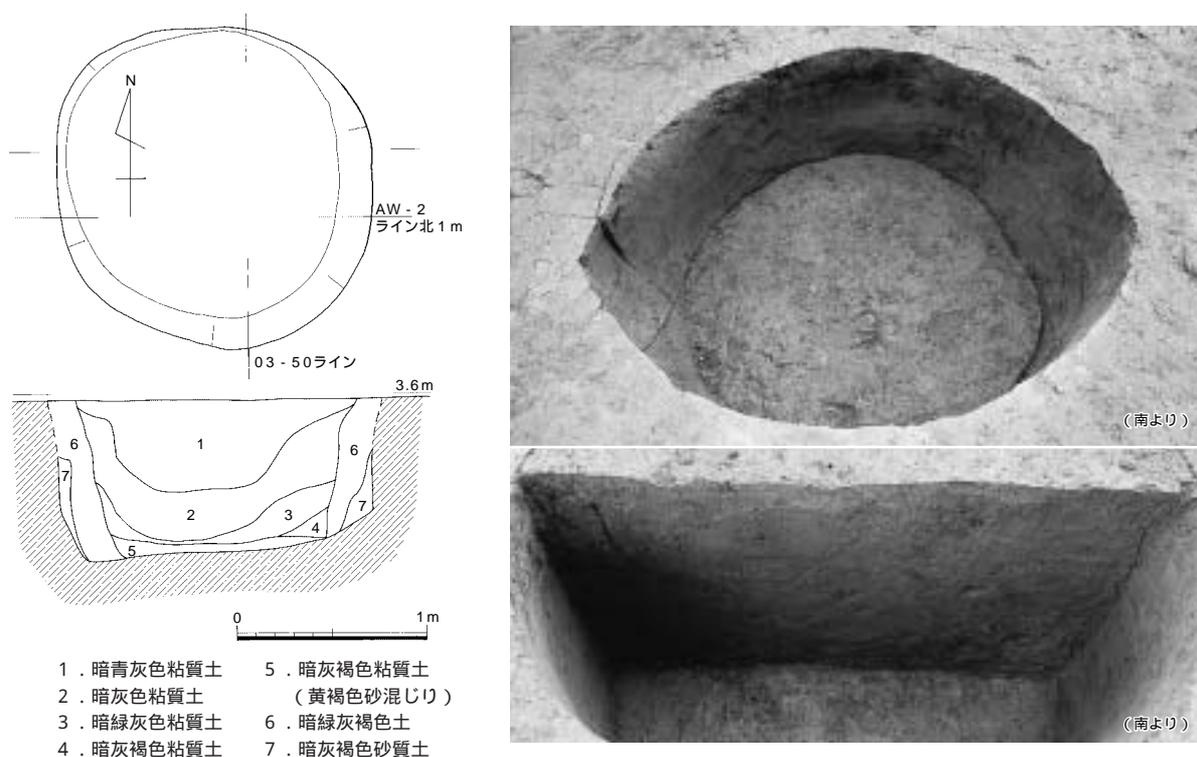


図200 土坑200 (縮尺1/40)

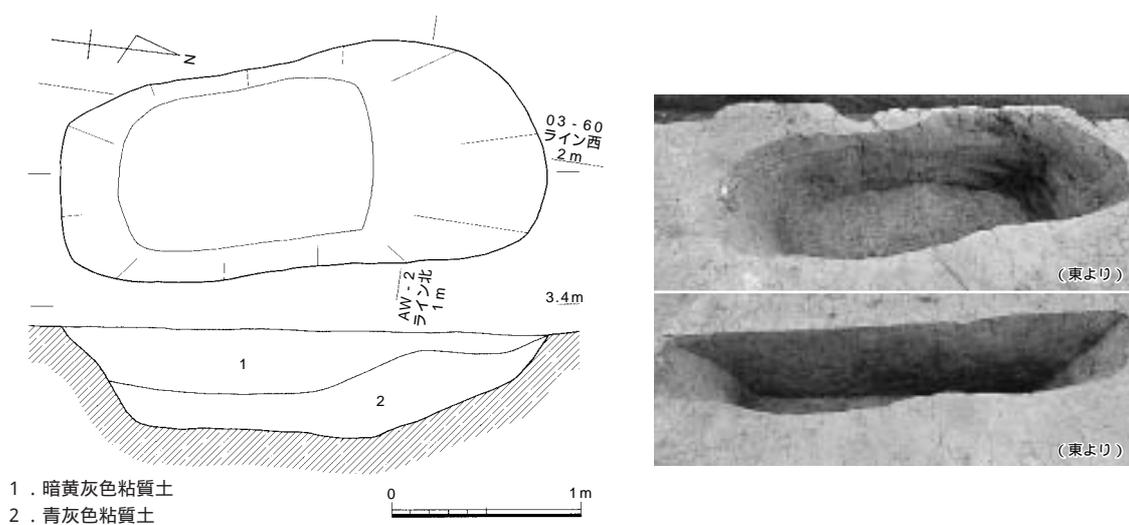


図201 土坑201 (縮尺1/40)

出土遺物は認められなかった。7層の検出であるが、底面のレベルや埋土が他の土坑と共通することから、本土坑の時期は、近世と考えられる。

b. 溝

溝26 (図191・202~204)

5層上面で検出した。検出レベルは標高3.4mを測る。aa' (東壁) 断面の観察により、本来は3層上面の遺構と判断した。AW-2ラインの北約2mの位置を東西に走行する。近代の溝(溝27)がほぼ同じ位置に重複する

ため、本溝の南側の肩の上半はかなり破壊されている。

溝の残存幅は60cm、深さは30cm前後である。底面のレベルは標高3.35mである。

溝26からは、コンテナ1/2箱程の遺物の出土があった。瓦片、陶磁器片、土器片が認められ、時期としては16世紀末～19世紀代のもので、幅があるが、主体となるのは、17世紀後半～18世紀にかけての時期である。図203に掲載したもののうち1は関西系播り鉢の口縁部片、2は備前焼盤の口縁部片である。3は中国産青花碗の高台部片である。明の景德鎮窯のもので、16世紀中葉に比定される。4・5は肥前磁器染付である。4は筒茶碗、5は碗である。いずれも17世紀代のものである。

石器は5点出土した(図204)。石核(S323)はサヌカイト製で、板状の素材の周縁から薄い小剥片を剥離する。下縁には両面調整も認められる。砥石は4点が出土した(S324～327)。いずれも砂岩製であるが形状は多



溝26

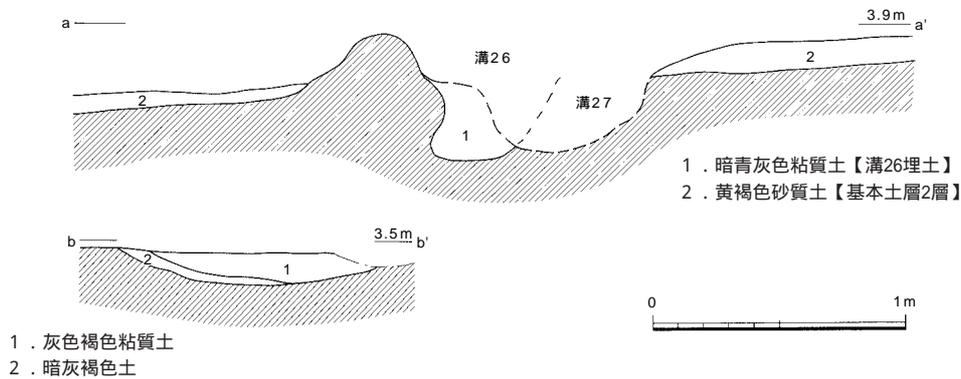
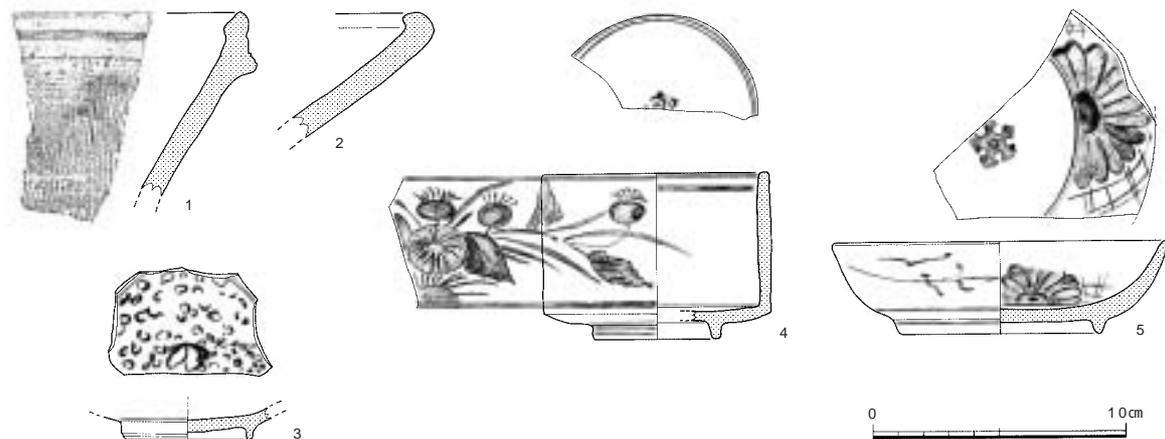
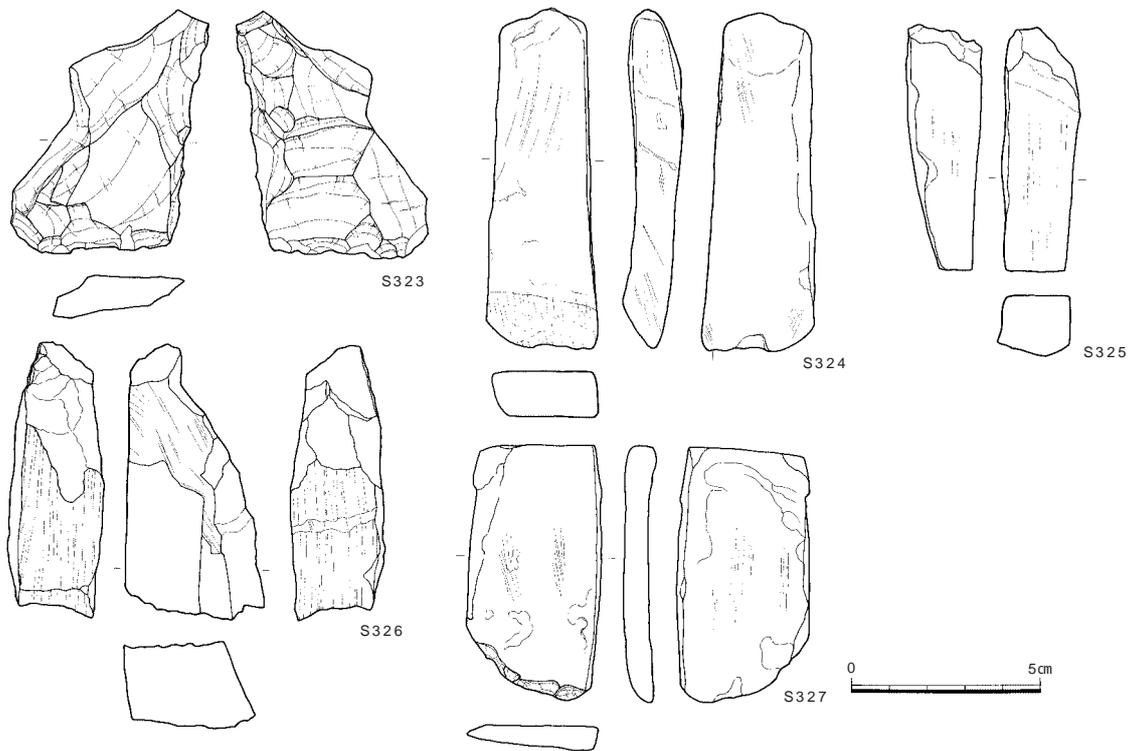


図202 溝26 (縮尺1/30)



番号	器種	法量(cm)			形態・手法ほか	色調	胎土
		口径	底径	器高			
1	関西系・播り鉢				堺産? 糸線の単位は不明	暗紫褐、胎:灰	堅緻
2	備前焼・盤				回転横ナデ	暗茶褐～暗紫褐、胎:茶褐	堅緻
3	中国製染付・碗		5.0		明染付、景德鎮窯。施釉丁寧。	釉:透明、胎:灰白	精緻
4	肥前磁器・筒茶碗	9.0	5.0	6.7	呉須	釉:透明、胎:白	精緻
5	肥前磁器・碗	13.2	8.0	3.7	呉須	釉:透明、胎:白	精緻

図203 溝26出土遺物1 (縮尺1/3)



番号	器種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石材	特徴
S323	石核	6.50	5.10	1.21	39.8	サヌカイト	側縁から小剥片を剥離。
S324	砥石	8.00	3.00	1.33	60.8	泥岩	板状。表裏面が使用により摩滅し湾曲した形状。持ち砥石か？
S325	砥石	6.45	2.05	2.00	38.7	泥岩(シルト岩)	上部欠損。角錐状。主面と側面に使用による線状痕。
S326	砥石	7.25	3.72	2.30	82.9	泥岩	剥落が著しい。各面に使用による線状痕が確認できる。
S327	砥石	6.80	3.50	0.75	28.8	泥岩	板状。表裏面が使用により摩滅。持ち砥石か？

図204 溝26出土遺物2 石器 (縮尺1/2)

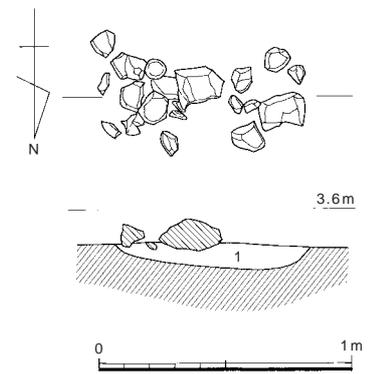
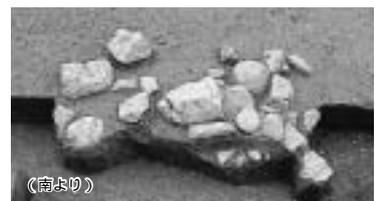
様である。摩滅が著しい。形状や出土状況から近世のものと考えられる。

本溝はその大半が溝27と重複しており、遺物の取り上げに混同がある可能性も否めないが、ほぼ16世紀末頃から使用され、19世紀代まで継続する溝である。本溝は中世末段階の溝25が掘削された位置をほぼ踏襲していることから、やはり「坪境の溝」にあたるものと考えられる。

なお、面的に確認することはできなかったが、東壁断面観察(図202aa'断面)では本溝の両脇に畦畔が存在していたことがわかる。

c. 集石遺構

AW02 - 71区において集石を検出した(図205)。底面のレベルは標高3.45 mであり、東壁で確認される3層対応畦畔のライン上で畦畔盛り土内に入る高さである。東西1 m、南北0.5mの範囲に、深さ10cm程の溝状のくぼみがあり、人頭大～拳大の石が15個検出された。配置には規則性は認められず、出土遺物は石に混じって須恵質土器の甕片が1点出土したのみである。集石の性格・用途については判断する材料に乏しく不明であるが、溝状のくぼみがある点は第27次調査地点でみられた畦畔の下部構造と共通する。



1. 灰茶褐色砂質土

図205 集石遺構 (縮尺1/30)

d. 柱穴列 (図191)

調査区南半、5層上面において、柱穴列を確認した。検出レベルは標高3.7m、底面レベルは標高3.65m前後である。南北方向の2列(柱穴列2・3)と、東西方向の1列(柱穴列4)が確認できた。南北方向の柱穴列2としては、02-80ラインの3m東に柱穴5基を確認した。柱穴列3としては02-80ライン上に位置し、合計14基の柱穴を検出している。柱穴列4はAW-0ラインの北1mに位置し、13基の柱穴を検出している。柱穴列2～4の状況は同じである。柱穴はいずれも直径15～20cmで、深さ10～20cm程度が残る。ほぼ70cm前後で等間隔に並ぶが、一部では間隔が飛んでいる。

これらの柱穴については、「柵列」あるいは「道路」といった機能が想定される。道路と考えた場合、柱穴列2・3についてはその間の3mの部分が道路にあたる可能性がある。また柱穴列4については対になる列は確認されていない。

2. 近代

近代の遺構は第22次調査地点で検出した溝1条(溝27)である。第17次調査地点では、ほぼ全域において、南北方向の畝を確認している(図206上)。

溝27 (図206～208)

溝27は、近世の溝26の南側に重複する東西方向の溝である。3層上面で検出された。検出レベルは標高3.75～3.8mで、断面観察では3.8～4.0mに復元される。底面のレベルは3.35～3.4mである。幅0.7～1.0m、検出面からの深さ20～30cmを測る。埋土は暗青灰色粘質土であるが、最終的には造成土で埋められており、陸軍による造成の直前まで機能していたことが窺える。断面からは2回の使用面がうかがえ、旧段階の



南北方向の畝

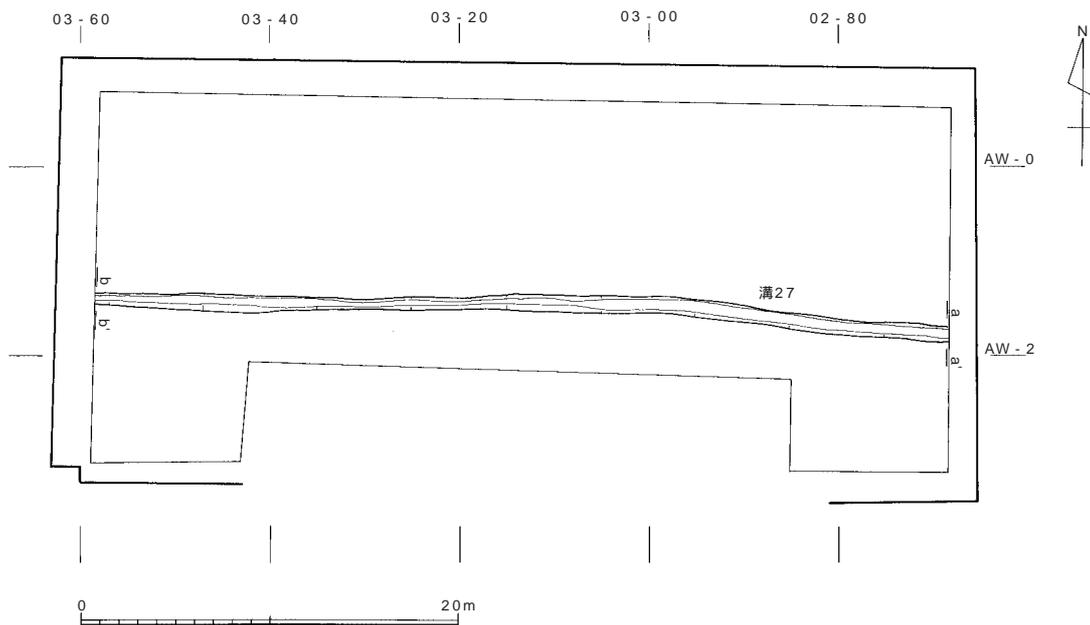


図206 近代遺構平面図 (縮尺1/30)

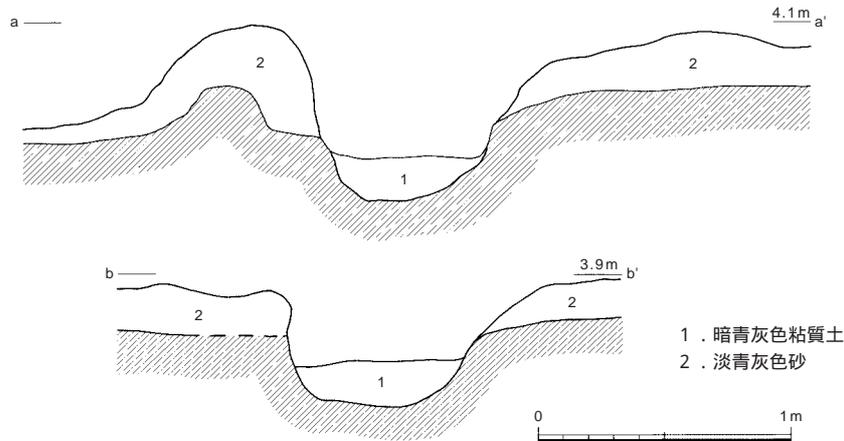
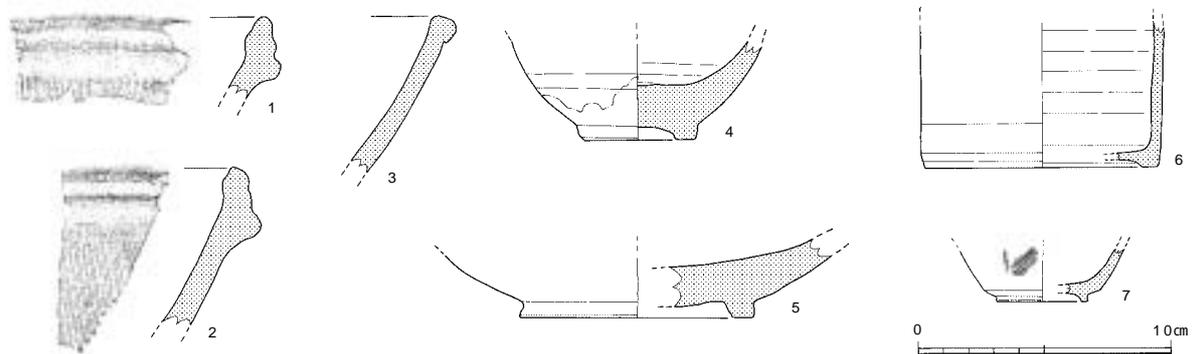


図207 溝27 (縮尺1/3)



番号	器種	法量(cm)			形態・手法ほか	色調	胎土
		口径	底径	器高			
1	備前焼・擂り鉢				6条一組の条線	暗茶/淡紫灰茶	細砂
2	備前焼・擂り鉢				条線の単位は不明	暗紫褐/淡茶褐	微砂
3	肥前陶器・鉢				口縁部は玉縁状。	釉：淡茶～暗茶、胎：暗灰	微砂、精緻
4	肥前陶器・碗		4.6	(3.9)	唐津。高台部は一部露胎。底部完存。	釉：淡茶褐～淡灰、胎：灰	精緻
5	肥前陶器・鉢		9.2	(3.1)	唐津。見込みは露胎。高台部1/3残。	釉：淡茶～淡褐白、胎：灰	精緻
6	京焼系陶器		9.2	(5.7)	信楽。高台内部は露胎。1/3残	暗茶褐	微砂
7	肥前磁器・くい呑		3.6	(2.0)	高台部1/6残。	釉：白灰、胎：灰	精緻

図208 溝27出土遺物 (縮尺1/30)

底面が標高3.4m前後、造成土で埋設する直前までの底面は標高3.6m前後である。

出土遺物はコンテナ(約28リットル)1箱で、陶磁器・瓦片等274点が出土している。時期としては17世紀初頭～明治時代までのものが含まれる。主体となるのは18・19世紀代であるが、染付類の中にはコバルト染料を用いるものや型紙焼きのもの(図版21)が含まれている。これらは明治期に入ってから技法である。図208には7点を掲載した。1・2は備前焼擂り鉢、3は肥前陶器鉢の口縁部片である。17世紀代のものである。4・5は肥前陶器である。4は唐津焼の碗高台部片、5は唐津焼の鉢高台部片である。6は京焼系陶器である信楽焼の胴部～底部片である。4～6は17世紀後半～18世紀のものである。7は肥前磁器のくい呑み底部片である。18世紀～19世紀のものと思われる。遺物からも溝27の時期としては1906～1907年の造成によって埋没したという点と合致する。

平面的には、造成土除去の際に削平され、不明であるが、溝26と同様、溝27の両側には畦畔の高まりが断面観察で確認される(図207)。

第9節 包含層出土遺物

(1) 陶磁器 (図209 図版21)

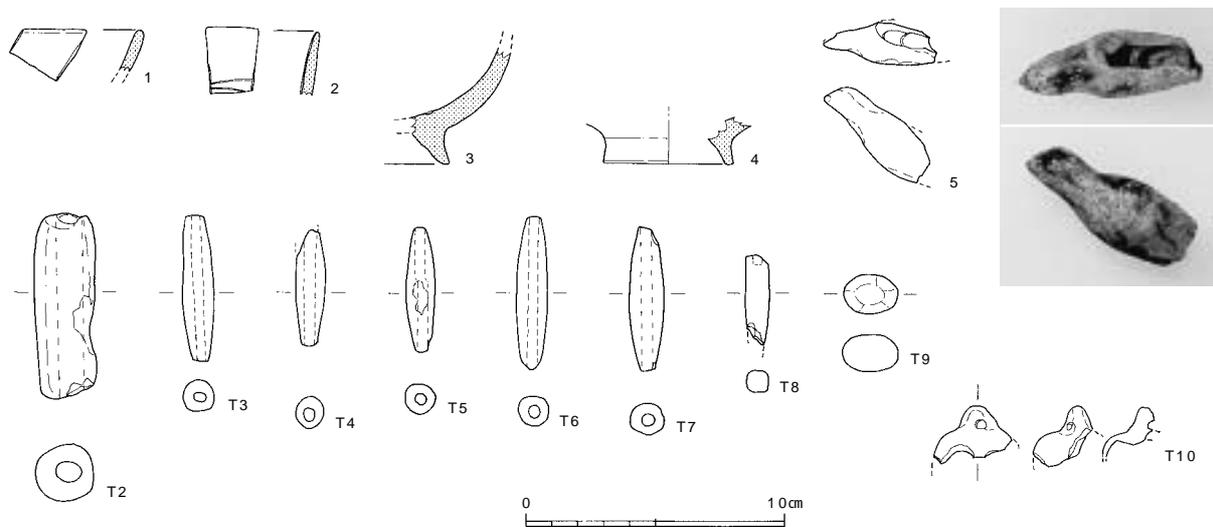
5点を図示した。1・2は青磁碗の口縁部片である。3・4は白磁碗の高台部である。3は白磁碗類、4は白磁碗類である。1～4は13世紀代のもと考えられる。5は三彩の破片である。鳥形を呈している中空のものであり、水注等の装飾の一部ではないかと考えられる。欠損のため頭部のつくりが判然としないが、あまり丁寧なつくりとは言えない。頭部～背部にかけて三彩釉が施されている。

(2) 土製品 (図209 図版21)

土錘7点、土玉1点、土鈴1点を図示した。土錘はT2一点が大型のものである。T3～T7は長さ・径が近似している。T8は土錘の未製品と考えられ、孔は未貫通のままである。

T9は玉状に加工した土製品である。球体ではなく、面をつくりだしてあり、ややいびつな楕円形状である。用途は不明である。

T10は土鈴の一部である。溝21からも類似品1点が出土している(図197T1)。上部につまみ部分があり、体部は中空となる形状であろう。つまみ部分の穿孔は未貫通である。



番号	器種	法量(cm)		形態・手法ほか	色調	胎土	調査次	層位
		底径	器高					
1	青磁・碗			施釉は均質、丁寧だが薄い	釉：淡緑灰、胎：淡灰	精緻	17	5～7層
2	青磁・碗			龍泉窯系、施釉は丁寧。内面に文様あり	釉：オリーブ灰、胎：淡灰	精緻	17	8層
3	白磁・碗		(4.5)	白磁碗類。施釉は丁寧、厚め。見込みの一部は露胎	釉：透明、胎：白	微砂混じる	22	5～6層
4	白磁・碗	5.0	(1.9)	白磁類。施釉は丁寧、厚め。見込みは露胎	釉：透明、胎：白	精緻	17	側溝
5	三彩・水注?			鳥形。中空。頭部～背にかけて施釉	釉：黄緑～暗黄、胎：灰褐	精緻	17	側溝

番号	器種	法量(cm)			形態・手法ほか	色調(外/内)	胎土	出土地区	層位
		長さ	幅	厚さ					
T2	土錘	7.2	2.3	-	孔径0.9cm、重量40.9g。丁寧なナデ、一部欠損	淡黄橙	微砂	17	
T3	土錘	5.7	1.3	-	孔径0.3cm、重量7.3g。丁寧なナデ	淡橙	微粗	22	7層
T4	土錘	4.5	1.3	-	孔径0.5cm、重量4.8g。丁寧なナデ	淡茶褐	微砂	17	5～7層
T5	土錘	4.8	1.2	-	孔径0.4cm、重量4.5g。丁寧なナデ、穿孔は途中でずれがある。	橙	微砂	17	2～14層
T6	土錘	5.9	1.1	-	孔径0.3cm、重量6.3g。丁寧なナデ	淡橙	微砂	22	5層
T7	土錘	5.6	1.2	-	孔径0.4cm、重量7.8g。丁寧なナデ	淡橙	微砂	17	
T8	土錘	3.3	0.9	-	孔径0.3cm、重量2.9g。未製品。孔は未貫通。ナデ	淡橙	微砂	17	
T9	土玉	1.9	1.5	1.3	やや面取りしたように面をつくっている。ナデ。重量4.4g	黄灰	微砂	17	2～4層
T10	土鈴	2.0	2.8	1.4	全体にナデ。やや焼成が甘い。つまみ部の穿孔は未貫通	淡褐/淡褐白	微砂	22	3・4層

図209 包含層出土陶磁器・土製品 (縮尺1/3)

(3) 石器 (図210~213 図版22・24・25~28)

弥生~近代の包含層出土石器を調査地点毎に掲載した。また、縄文の包含層から出土した石器についても、13~16層のいずれに属するか不明なものはここに掲載した。観察表には出土層位を記している。以下に器種毎に記述する。

a. 第17次調査地点出土石器 (図210~212 図版22・25~28)

石鏃 15点出土した (S328~342)。全てサヌカイト製である。凹基式7点 (S328~333、S335)、平基式4点 (S334、S337~339)、未成品3点 (S340~342) である。凹基式は、長さ、長幅比、脚部の形状などで多様である。S333は厚みを持つ大型品で両側縁が中ほどで屈曲する特徴を示す。平基式も形態が多様である。S337は平面正三角形の小型品で、周縁に細かい両面調整を施す。S338は厚みを持つ大型品で、両側縁が中ほどで屈曲し、平面が五角形状を呈する。S341は未成品で、素材面を多く残し、周縁に両面調整を行うが、平面は不定形である。

石錐 3点出土した (S343~345)。いずれもサヌカイト製である。S343は自然面を大きく残す横長剥片の両側縁に交互に片面調整を行い整形し、錐部分をつくり出している。握り部分は扁平である。先端は使用による摩滅部分が若干観察できる。S344は細長の縦長剥片を素材とし、両側縁に片面調整を行うが右側縁は錐部分周辺のみ調整である。錐部分先端は両面から細かく調整する。S345は小型品で細長小剥片の両側縁を調整し、錐部分をつくり出している。

石鏃 2点出土した (S346、347)。S346は、サヌカイト製の破片で下端に調整が施され、摩滅部分と擦痕が明瞭に観察できる。S347は玄武岩質凝灰岩製で、表面の一部に摩滅部分と擦痕が明瞭に観察できる。いずれも使用時に欠損した破片の可能性はある。

スクレイパー 2点出土した (S348、349)。S348は細粒砂岩製で、扁平な素材を利用し、その下縁に浅い角度で粗く調整を施し、弧状の刃部をつくり出している。S349はサヌカイト製で、一部に自然面が残る。石理にそって剥離した薄い剥片を利用し、その下縁に細かい片面調整を施し、緩い弧状の刃部をつくり出している。ただ、刃部は下縁全体にわたるのではなく、左端には大きな剥離が行なわれている。上縁の一部にも調整を行う。

楔形石器 8点出土した (S350~359)。いずれも上下縁に階段状のつぶれた剥離を有する。S353は相対する上下縁がほぼ併行し、右側面に剪断面を有する。S357も自然面を多く残すが、上下縁に階段状剥離が観察でき、右側面に剪断面を有する。

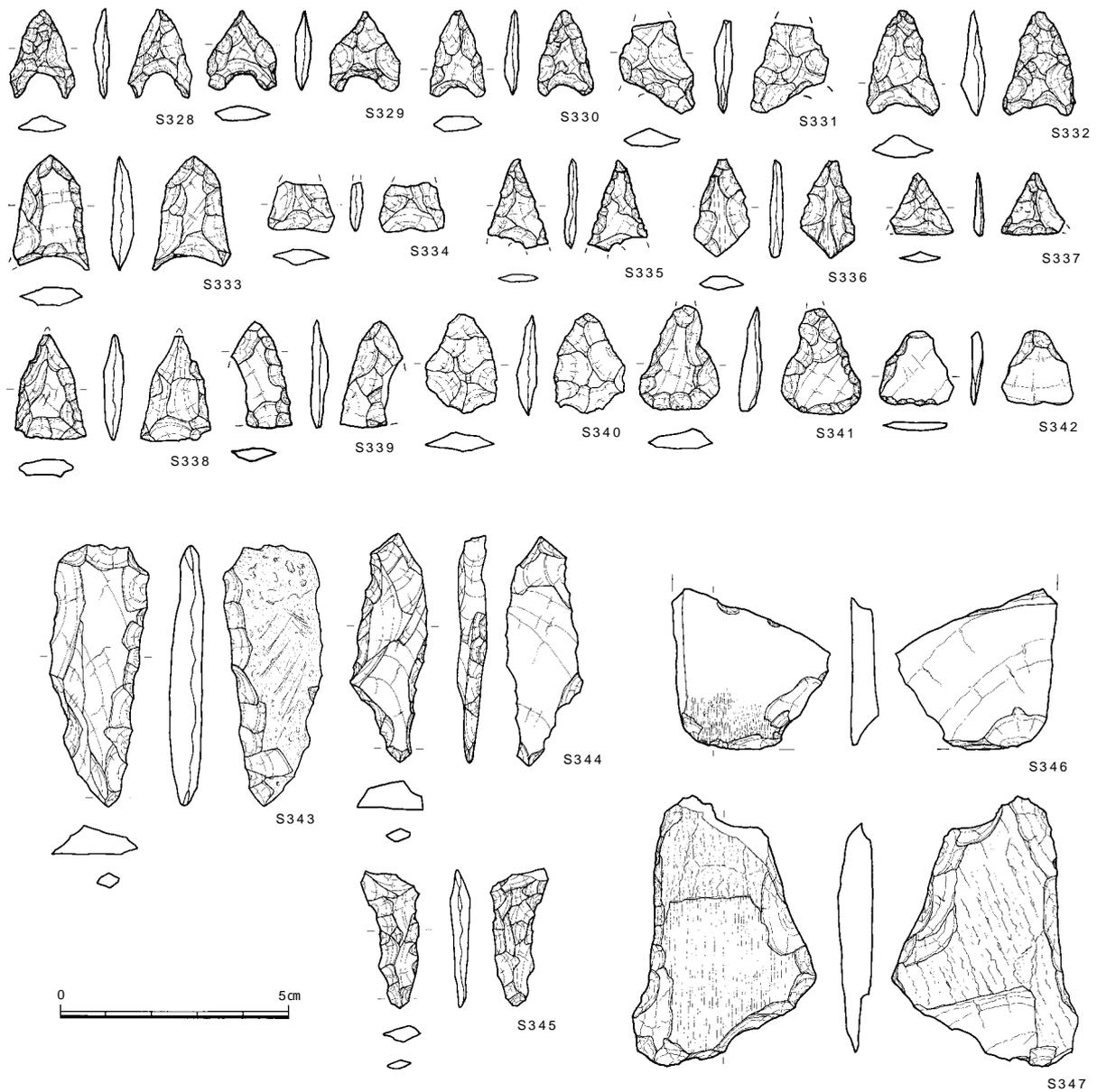
石核 3点出土した (S358~360)。いずれもサヌカイト製である。S359は拳大の原礫を素材としたもので、上面に打面を形成して小剥片を剥離している。下面には剪断面が確認できる。石錐などに用いる厚みのある細長の剥片を剥離していた可能性もあるが、自然面が多く残っており、石核として使い込まれたものではない。S360は角柱状の原形であったと思われるが、打面から細長の小剥片を剥離している。また、打面を転位して、側縁からの剥離も試みている。S358も小剥片を剥離した石核と考えられるが、2カ所の折れ面が認められ、剥片剥離後に分割された可能性が高い。

磨製石斧 乳棒状石斧の基部片1点が出土した。S361は閃緑岩製で基部先端が尖る。全体的に丁寧に研磨されており、表面に敲打痕はあまり観察されない。柄との結合部位付近で欠損している。

磨石 1点出土した。S362は流紋岩の円礫を用いており、両面に敲打痕と線状痕が確認できる。

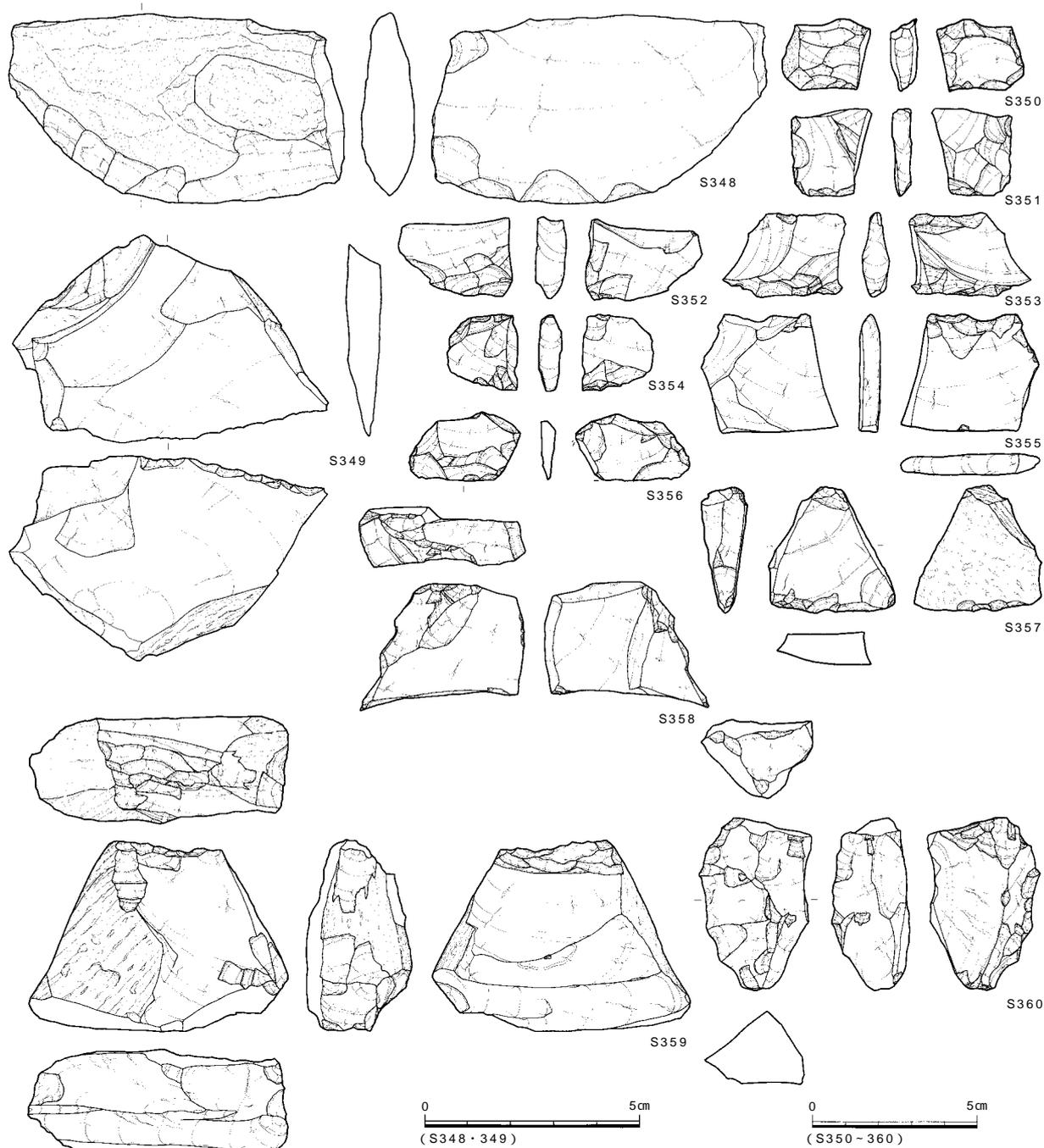
石棒? 1点出土した。S370は玄武岩質緑色片岩製で、表面に面取りを試みたような加工痕を観察できる。15層で出土したS79と同様に遺跡付近で採取できる石材ではない。

石錘 7点出土した (S363~369)。円礫の両端を打ち欠いたものが主であるが、S369は擦り切りによって両端に溝をつくり出している。S363、S368は大型品で扁平な礫の短軸両端を打ち欠いているのが特徴である。



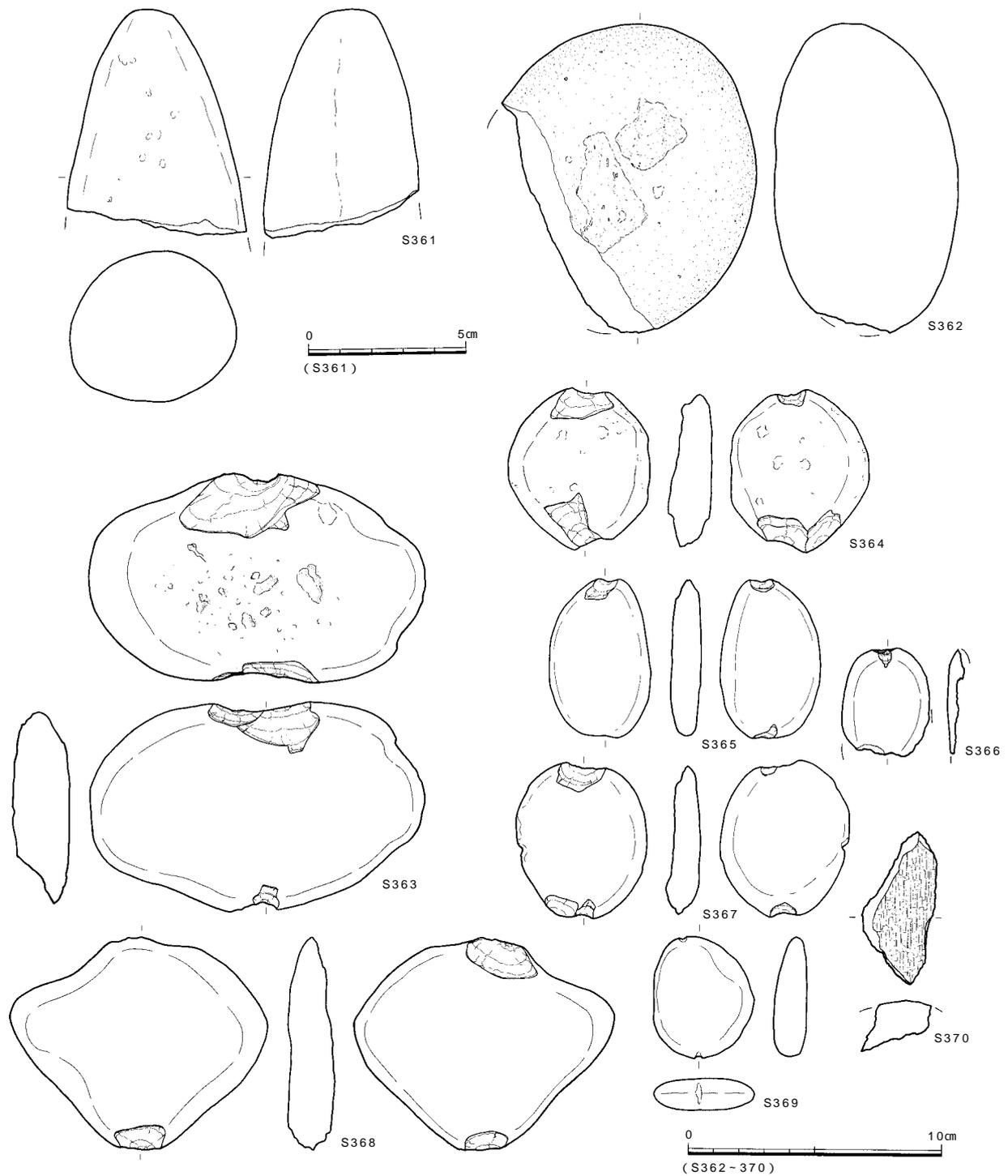
番号	器種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石材	特徴	調査次-区	層位
S328	石鏃	1.95	1.40	0.35	0.6	サヌカイト	凹基式。挟り部は明瞭。脚部は尖る。	17	12・13層
S329	石鏃	1.72	(1.51)	0.34	0.7	サヌカイト	凹基式。挟り部は明瞭。脚部はやや尖る。	17-3	12・13層
S330	石鏃	1.28	1.23	0.35	0.7	サヌカイト	凹基式。挟り部は明瞭。脚部はやや尖る。	17-1	12・13層
S331	石鏃	(2.00)	(1.60)	0.40	(0.9)	サヌカイト	凹基式。脚部を一部欠損。脚部は幅広。	17-6	12層
S332	石鏃	2.27	1.56	0.48	1.1	サヌカイト	凹基式。挟り部は明瞭。脚部は尖る。	17-2	13-15層
S333	石鏃	(2.50)	(1.70)	0.50	(1.9)	サヌカイト	凹基式。挟り部は幅広。脚部は尖る。五角形鏃。	17-4	12・13層
S334	石鏃	(1.10)	1.40	0.30	(0.5)	サヌカイト	平基式。先端部欠損。	17	12層
S335	石鏃	(1.90)	(1.30)	0.20	(0.5)	サヌカイト	凹基式。脚部を欠損。	17	11層
S336	石鏃	(2.15)	(1.20)	(0.30)	(0.6)	サヌカイト	先端のみ残存。	17-2	12・13層
S337	石鏃	1.39	(1.26)	1.90	(0.3)	サヌカイト	平基式。小型品。	17-4	12・13層
S338	石鏃	(2.30)	1.60	0.40	1.08	サヌカイト	平基式。大型で厚い。五角形鏃。	17-6	12・13層
S339	石鏃	2.40	(1.30)	(0.30)	(0.8)	サヌカイト	平基式。一部欠損。	17-1	12・13層
S340	石鏃未成品	2.21	1.57	0.41	1.1	サヌカイト	周縁からの粗い調整。	17-6	12層
S341	石鏃未成品	(2.84)	1.75	0.44	1.6	サヌカイト	周縁からの調整。素材面を多く残す。	17-2	12・13層
S342	石鏃未成品	1.65	1.60	0.25	0.5	サヌカイト	素材面が多く残り、下縁部に片面調整。	17-4	11・12層
S343	石鏃	5.80	2.20	0.75	8.6	サヌカイト	自然面を大きく残す。両側縁に片面調整。	17-5	13・14層?
S344	石鏃	6.00	1.65	0.64	5.4	サヌカイト	両側縁を片面調整。	17-2	13層?
S345	石鏃	(3.00)	(1.25)	0.45	(1.2)	サヌカイト	小型品。両側縁を細かく調整。	17-4	13層?
S346	石鏃片	(3.55)	(3.50)	0.60	(7.4)	サヌカイト	刃部下端が摩滅し、擦痕が観察できる。	17-4	12・13層
S347	石鏃片	(5.95)	4.05	0.75	(21.7)	玄武岩質凝灰岩	表面の一部に摩滅範囲と擦痕が観察できる。	17-6	13層?

図210 包含層出土石器1(縮尺2/3)



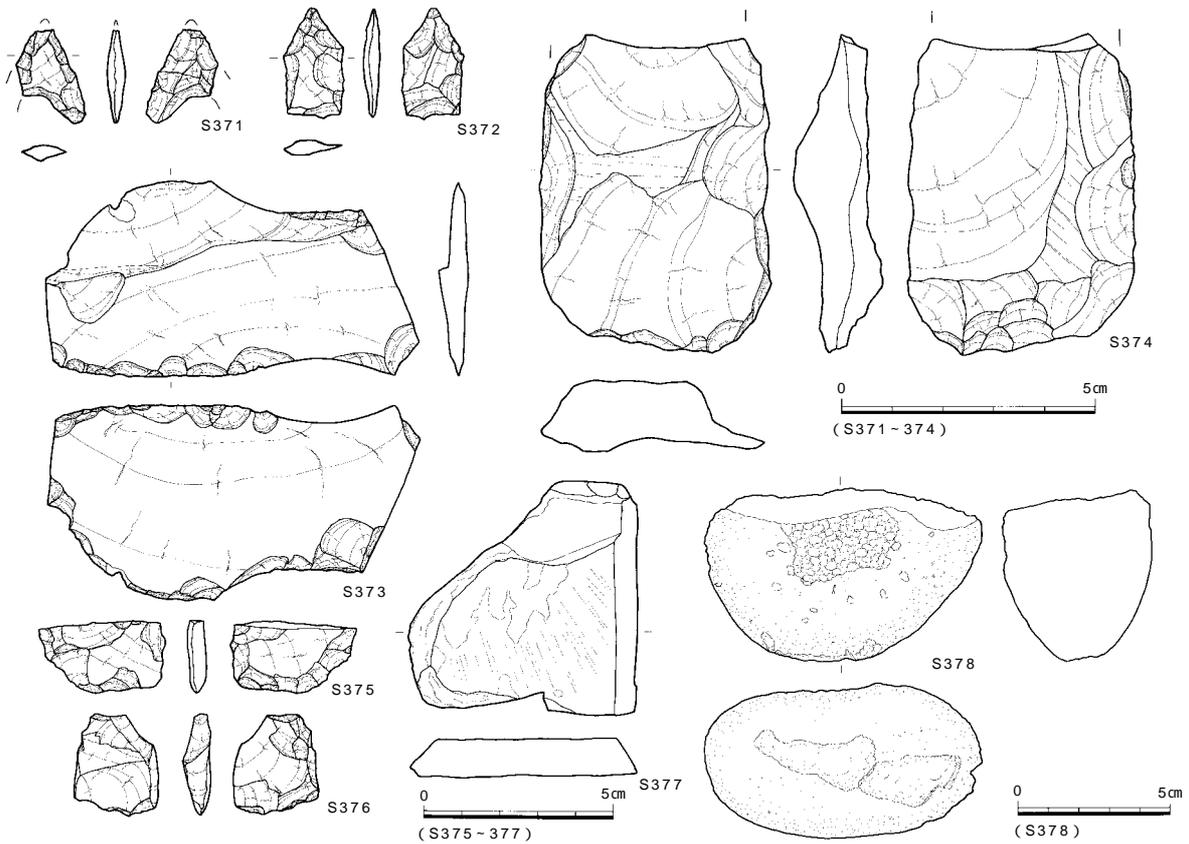
番号	器種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石材	特徴	調査次-区	層位
S348	スクレイパー	4.30	7.60	1.20	65.1	細粒砂岩	扁平な素材の下端に粗い片面調整。	17-5	11・12層
S349	スクレイパー	4.70	7.10	0.80	26.6	サヌカイト	下縁に細かい片面調整。上縁の一部にも調整。	17	15層?
S350	楔形石器	2.20	2.70	0.88	6.0	サヌカイト	自然面を残す。下端に階段状の剥離。	17-2	側溝
S351	楔形石器	2.70	2.40	0.70	5.2	サヌカイト	下端に階段状剥離。	17-4	11・13層
S352	楔形石器	2.05	3.40	0.60	4.2	サヌカイト	上下端に階段状の剥離。	17-2	12層
S353	楔形石器	2.55	3.70	0.80	5.0	サヌカイト	上下端に階段状の剥離。	17-5	13層?
S354	楔形石器	2.35	2.10	0.70	3.3	サヌカイト	上下端に階段状の剥離。	17-6	12・13層
S355	楔形石器	3.60	4.20	0.65	11.9	サヌカイト	上端に階段状の剥離。	17-2	9層
S356	楔形石器	2.50	3.50	0.90	7.9	サヌカイト	下端に階段状のつぶれた剥離。	17-5・6	13・14層?
S357	楔形石器	3.85	3.82	1.28	16.4	サヌカイト	自然面を多く残す。左側面に剪断面。	17-5	11・12層
S358	石核	5.03	2.85	1.75	36.7	サヌカイト	二側面に折れ面。	17-1	12・13層
S359	石核	5.90	7.82	3.20	170.3	サヌカイト	拳大の礫を素材として使用。下面に剪断面。	17-3	側溝
S360	石核	5.30	3.45	2.40	41.3	サヌカイト	角柱状の素材。打面を転位しつつ、小剥片を剥離。	17-5	11・12層

図211 包含層出土石器2 (縮尺2/3・1/2)



番号	器種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石材	特徴	調査次-区	層位
S361	磨製石斧	(5.40)	(4.20)	(3.70)	(106.4)	閃緑岩	乳棒状石斧の基部のみ残存。	17-2	側溝
S362	磨石	(10.10)	(12.40)	7.25	1214.9	流紋岩	円礫の両面に敲打痕、線状痕。	17-2	側溝
S363	石錘	8.40	13.30	2.35	392.7	流紋岩質凝灰岩	大型品。扁平な礫の短軸両端に打ち欠き。	17	15層?
S364	石錘	6.50	5.50	1.70	79.5	流紋岩	円礫の上下端3ヶ所に打ち欠き。	17-7	12層
S365	石錘	6.40	4.00	1.20	47.5	流紋岩質凝灰岩	円礫の上下端に打ち欠き。	17-4	側溝
S366	石錘	(4.33)	(3.45)	(0.65)	13.0	流紋岩	1/2程度残存。上下端に打ち欠き。	17-5	13・14層?
S367	石錘	6.30	5.20	1.40	58.5	石英安山岩質凝灰岩	円礫の上下端に打ち欠き。	17-4	側溝
S368	石錘	8.50	10.20	1.74	201.3	閃緑岩	大型品。扁平な礫の上下端に打ち欠き。	17	15層?
S369	石錘	4.90	4.00	1.32	39.5	流紋岩	小型品。上下端にわずかに溝を確認できる。	17-7	12層
S370	石棒?	(6.10)	(2.95)	(2.05)	32.3	緑色片岩	表面に加工痕。	17-1	12・13層

図212 包含層出土石器3 (縮尺2/3、2/5)



番号	器種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石材	特徴	調査次 - 区	層位
S371	石鏃	(1.85)	(1.40)	0.32	(0.6)	サヌカイト	凹基式。挟りは明瞭。脚部は幅広。	22	
S372	石鏃	2.20	1.20	0.30	0.8	サヌカイト	平基式。長幅比は大きい。五角形鏃。	22	
S373	スクレイパー	3.84	7.30	0.67	21.6	サヌカイト	横長剥片を素材。鋭利な刃部。	22 - 3・4	
S374	石鏃	(6.30)	4.60	(1.45)	(43.6)	細粒砂岩	基部欠損。周辺に粗い調整。	22	
S375	楔形石器	1.90	3.30	0.50	4.1	サヌカイト	下端に階段状の剥離。	22	
S376	楔形石器	2.70	2.20	0.70	4.7	サヌカイト	上下端につぶれた階段状の剥離。	22	
S377	砥石	6.20	6.00	1.00	52.0	泥岩	表面全体に研磨による線状痕。	22	
S378	叩石	9.15	(5.75)	4.90	(320.0)	花崗岩	下端部に明瞭な敲打痕。	22 - 3・4	

図213 包含層出土石器4 (縮尺2/3・1/2・2/5)

b. 第22次調査地点出土石器 (図213 図版22・24)

石鏃 2点出土した (S371、372)。いずれもサヌカイト製である。S371は凹基式で、脚部端は幅広である。S372は平基式で両側縁が中ほどで屈曲し、平面が五角形状を呈する。

スクレイパー 1点出土した。S373はサヌカイト製で、薄い横長剥片の下縁に両面調整を施し刃部をつくり出す。その調整は粗い。左右側縁には折れ面が認められる。

石鏃 1点出土した。S374は細粒砂岩製で基部を欠損する。素材に周縁から比較的広い剥離を施し、厚みを一定にしようと試みているが、中央部に素材面が残ってしまっており、結果的に凹凸をもつ不定形な側面形になっている。右側縁から下縁にかけて粗く両面調整を施し、弧状の刃部をつくり出す。

楔形石器 2点出土した (S375、376)。いずれもサヌカイト製で、上下辺に相対するつぶれた階段状の剥離が認められる。また、S376は右側面に剪断面が観察できる。

砥石 1点出土した。S377は泥岩製で、表裏面に研磨による擦痕が確認できる。

叩石 1点出土した。S378は花崗岩の円礫の側縁部に明瞭な敲打痕が残る。また、片面にも敲打痕が残るため、凹石としても利用されたと考えられる。

第4章 考 察

1. 津島岡大遺跡第17・22次調査出土縄文土器の型式学的検討

はじめに

津島岡大遺跡の所在する中部瀬戸内北岸の地域は、貝塚等から出土した縄文土器を中心に古くから型式学的な検討がなされ、縄文時代の土器編年の一端を担ってきた地域である。しかし、型式設定の基準となった資料が不明瞭なことや、層位的に良好な状態に恵まれる資料が少ないなどの問題のため、その内容や、編年的な位置づけをめぐる議論は現在も続いている¹⁾。

ところで、津島岡大遺跡第17・22次調査地点では、縄文時代中期末～後期に属する遺構が多数検出され、これらの遺構や、包含層から多量の縄文土器が出土していることは事実報告として記載した。これらの縄文土器は質、量ともに優れた内容をもつものであり、今後、西日本の縄文時代後期の土器研究に寄与することが予測される。しかし、残念ながらこれらの土器群も層位的には良好な出土状況にはなかつた。そこで小論では型式学的方法によって本調査地点出土土器群についての検討をすることとしたい。

(1) 津島岡大遺跡第17・22次調査出土土器の概要

1) 出土縄文土器と既存の型式との対応

まず出土した土器群を既存の型式を参照して分類することにする²⁾。それは本調査地点から出土した土器群を既存の型式の指標に照らし合わせたところ、それぞれに複雑な特徴を有してはいるが、ほぼ既存の型式内容に沿ったものであったからである。その結果、これらには縄文時代中期後半の里木 式から後期中葉の「津島岡大遺跡後期第 群」までの型式のものが認められた。

さて、出土した土器群を各型式の内容に照らし合わせたものの内訳を示しておきたい³⁾。里木 式⁴⁾(1点)、矢部奥田式⁵⁾に相当する一群(42点)、中津式⁶⁾(10点)、福田 K 式⁷⁾(213点)、縁帯文土器の成立段階⁸⁾にあたるもの(77点)、津雲 A 式⁹⁾(45点)、彦崎 K 式¹⁰⁾(6点)、「津島岡大遺跡後期第 群」¹¹⁾(7点)、加曾利 B 式の影響を受けたとみられる土器¹²⁾(1点)となる。このうち、出土量が多い福田 K 式については、磨消縄文帯を構成する沈線束の本数を指標に古相(2本の沈線束によって文様帯が構成されるもの、139点)/新相(3本の沈線束によって文様帯が構成されるもの、74点)とした。ここで分類した資料については、表7において事実記載掲載資料番号と所属する型式との対応関係を示した。

このように、既存の型式を参考に津島岡大遺跡第17・22次調査地点出土土器群を分類したところ、その主体をなすのは福田 K 式であり、縁帯文土器の成立段階に相当するものが約2割、津雲 A 式に該当するものが約1割で、これらを合わせると出土土器群の約8割を占めていることが明らかとなった。また、矢部奥田式に相当する中期末の一群は全体の約1割を占めるが、それに後続する後期初頭の中津式の出土は僅少であり、本調査地点出土土器群の中で主体的な位置を占める福田 K 式との間には隔たりを生じることになる。そこで小論では、これら中期末に相当する一群については検討の対象とせず、福田 K 式以降に位置づけられる縄文時代後期の土器群を対象に検討を加えていくこととしたい。なお、今回の出土資料では後期中葉に位置づけられる「津島岡大遺跡後期第 群」に相当する資料の出土も少量であった。しかし、これについては、本調査地点の南東約200mに位置する津島岡大遺跡第5次調査地点においてこの段階の土器群が層位的にまとまって出土しており、これを参照することによって補うこととしたい。

表7 型式分類と事実報告掲載資料との対応

型式	該当資料番号 ()内は点数
里木	図111 - 348 (1)
矢部奥田 相当	図31 - 1~9、図33 - 1~8、図59 - 35、図68 - 157,158,166、図76 - 2、図89 - 1~9、図92 - 47~50、図101 - 204,205、図105 - 268、図114 - 386~389 (42)
中津	図65 - 113~115、図91 - 36、図92 - 51~53、図98 - 154,155、図114 - 390 (10)
福田K (古相)	図21 - 1~3、図22 - 11,12、図24 - 23,24、図25 - 1~4、図27 - 8~14,19,25、図31 - 11、図35 - 1~6、図45 - 1,4,5、 図49 - 1,2、図57 - 1~4、図58 - 25、図59 - 27,28,36~38,43、図61 - 58,59,61、図62 - 73,83、図63 - 91,92,99,100、 図65 - 116~124、図68 - 159~161,164、図89 - 10~14、図91 - 37、図92 - 54~67、70~72、図96 - 124,126、 図98 - 156~164,167、図101 - 206~209,211,212、図106 - 271~289、図112 - 350~352,359、図114 - 391~399 (139)
福田K (新相)	図16 - 12~14、図21 - 5~7、図25 - 5、図27 - 16~18,20、図45 - 2,3、図49 - 3,4,6,7、図58 - 12,13、図59 - 39、 図61 - 67,68、図62 - 82,85、図64 - 108,109、図65 - 125,127、図68 - 163,165、図89 - 15~19、図93 - 68,69,73~ 79、図94 - 93、図98 - 169~176、図101 - 210,213,214、図107 - 290~300、図112 - 354,355,360、図114 - 400~ 402、図117 - 421 (74)
縁帯文成立 段階	図15 - 1、図16 - 4,7,9,15、図21 - 9、図22 - 14、図24 - 25、図27 - 21~24、図35 - 7~9、図53 - 1、図57 - 5,6、 図59 - 40,41、図63 - 97、図65 - 128,129、図68 - 155,156、図89 - 20,23,25、図91 - 41、図93 - 81,82、図94 - 83 ~92,94、図99 - 178,180~188、図101 - 215,216、図108 - 301~317、図112 - 353,365,366、図115 - 403~405 (77)
津雲A	図17 - 17、図18 - 3、図21 - 10、図31 - 10、図49 - 8、図55 - 1、図58 - 18,19、図59 - 31~33、図65 - 130~133、 図76 - 3、図89 - 22、図94 - 95 - 99、図100 - 189~203、図101 - 217、図109 - 318~321、図115 - 406~408 (45)
彦崎K	図59 - 44、図64 - 104,105、図94 - 100,101、図96 - 131 (6)
「第 群」	図53 - 7、図58 - 20,21,26、図94 - 102、図109 - 325,326 (7)
加曾利B?	図109 - 328 (1)

2) 縄文土器の器種 (図214)

本調査地点で出土した縄文土器の器種は、ほとんどが深鉢、鉢、浅鉢で、これに少量の壺や注口土器をともなって構成されるものであった。このうち、深鉢、鉢、浅鉢、壺については、器形によってそれぞれをいくつかの種類に分類し、深鉢については文様の位置によってさらに細分した。それぞれの分類の基準を以下に記しておきたい。

深 鉢 深鉢 A 類：頸部がくびれ、胴部にふくらみを有するもの。文様の有無や文様帯の位置で6類に細分する。

深鉢 A 1 類：口縁部文様帯を有するもの。波状口縁と平縁のものがある。

深鉢 A 2 類：口縁部文様帯を有さないもの。

深鉢 A 3 類：頸部が無文帯として独立し、口縁部文様帯と胴部文様帯が分離しているもの。口縁部の形状には、突起を有するもの、振幅の小さい波状口縁のもの、平縁のものがある。

深鉢 A 4 類：胴部文様帯をほとんど有さず、口縁部文様帯のみのもの。

深鉢 A 5 類：胴部に縄文が施文され、口縁部内面に沈線による内文を描くものや、口縁部に狭い縄文帯を配するものがある。

深鉢 A 6 類：文様を有さないもの。長頸のものと短頸のものがある。

深鉢 B 類：底部から口縁部までにくびれを有さず、直線的に開くもの。

鉢 鉢 A 類：底部から口縁部までくびれを有さず、直線的に開いて、植木鉢状の器形を有するもの。

鉢 B 類：頸部がくびれ、胴部にふくらみを有するもの。有文と無文がある。

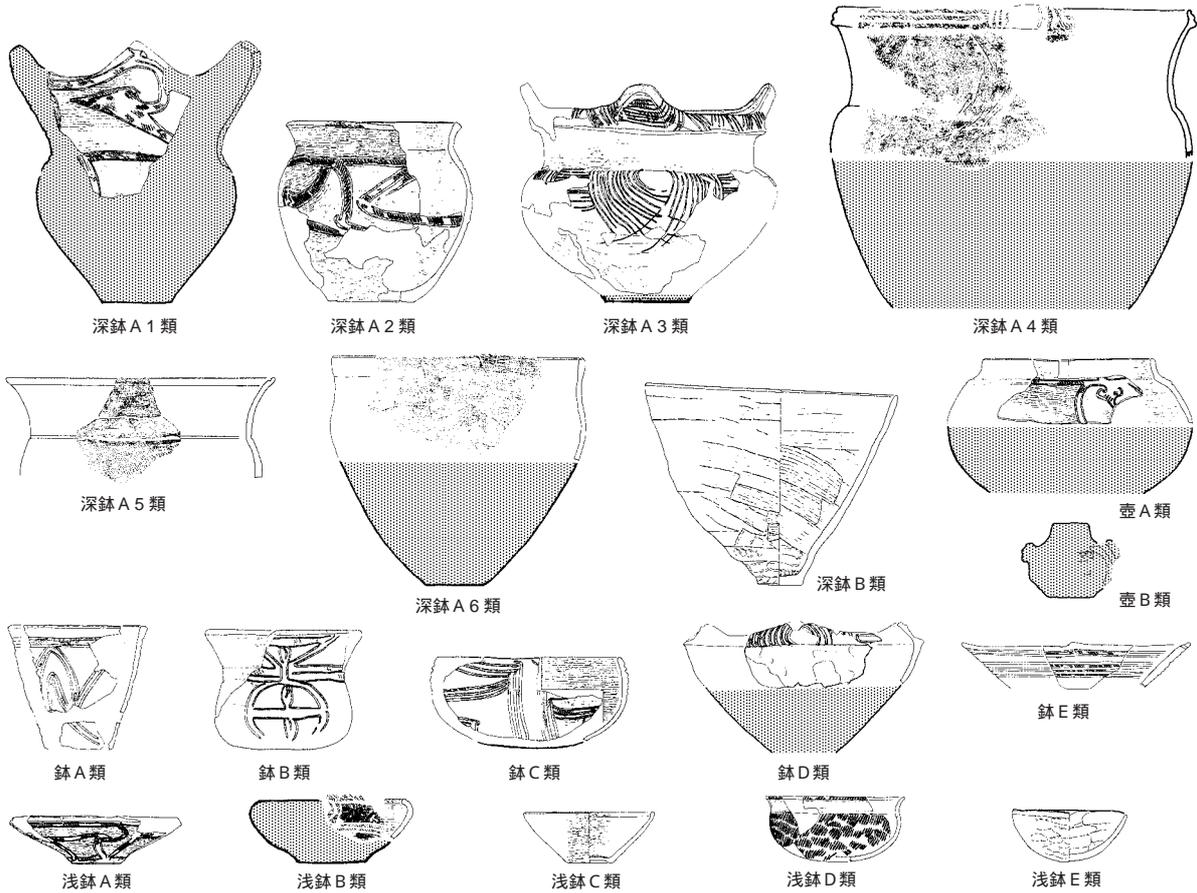


図214 津島岡大遺跡第17・22次調査地点出土縄文土器の器種と分類 (は『津島岡大遺跡4』より引用)

鉢 C 類：ポウル状の器形を有するもの。有文と無文がある。

鉢 D 類：すり鉢状の器形で、内方に屈曲する口縁部を有するもの。

鉢 E 類：すり鉢状の器形を有するもの。有文と無文がある。

浅鉢

浅鉢 A 類：皿状の器形をもつもの。有文と無文がある。

浅鉢 B 類：浅い椀形の器形で、口唇部を内湾させるもの。

浅鉢 C 類：椀形の器形を有するもので、直口縁のもの。

浅鉢 D 類：頸部がくびれ、胴部がふくらむ器形のもの。口縁部と胴部に縄文施文し、頸部は無文となる。

浅鉢 E 類：小型の丸底の浅鉢。

壺

壺 A 類：把手を有さないもの。

壺 B 類：肩部につまみ状の把手を有するもの。双耳壺。

注口土器：管状の注口部、片口状の注口部を有するもの、環状の把手を有するものがある。

3) 各型式の器種組成 (表8)

上記の分類によって、それぞれの器種を細分した種類がどの型式にみとめられるかを示したものが表8である。それぞれの器種がどの型式に属するかの判断は、有文のものについては文様によって行ったが、無文のものについては判断材料が少ないため、帰属不明なものが多い結果となった¹³⁾。また、縁帯文土器成立段階、津雲A式に

表 8 各型式の器種組成

器 種 型 式	深 鉢						鉢					浅 鉢					壺		注 口		
	深鉢 A 類						深鉢 B 類	鉢 A 類	鉢 B 類	鉢 C 類	鉢 D 類	鉢 E 類	浅鉢 A 類	浅鉢 B 類	浅鉢 C 類	浅鉢 D 類	浅鉢 E 類	壺 A 類		壺 B 類	
	A 1 類	A 2 類	A 3 類	A 4 類	A 5 類	A 6 類															
福田 K 式						?	?										?				
縁帯文成立段階																					
津雲 A 式						?	?														?
「後期第 群」																					

- ...10個以上、... 5 個以上、... 5 個未満 存在が推定されるものには「？」を記入した。
- 器形復原が困難な破片や小片はすべて除いた。
- 「後期第 群」については、第 5 次調査地点第 27 b 層の成果を参考に存在するものを示した。

については、福田 K 式に比べて出土量が少なかったこともあり、この表に示したものがこれらの時期における器種の組み合わせを反映しているものとは考えてはいない。これらに関しては良好な資料の発見を待たねばならず、ここでは現時点で器形をうかがいしることができる資料を掲げている。

このような状況を念頭において表 8 をみてみたい。福田 K 式段階には、深鉢 2 種類以上、鉢 3 種類、浅鉢 3 種類以上、壺 2 種類がみられる。福田 K 式については、器形を復原することが可能な良好な個体や大型破片が多かったこともあり、それぞれの器種のうちでもいくつかの種類を復原することが可能であった。福田 K 式については、本来の器種組成に近いものとみることができるであろう。

これに対して、縁帯文土器成立段階、津雲 A 式では復原できた器種が少ないため、本調査地点出土資料では、前段階までに認められていた器種が失われているか否かを判断する材料に欠ける。このような器種の消長は、量的に安定した時点で分析することが望ましいことはいうまでもない。ただし、鉢 A 類については、これまでに福田 K 式に特有の器種であることが指摘されており（千葉 1989 など）、縁帯文土器成立段階にはすでに失われていると考えられる。

また、それぞれの器種について、時期別の変遷をみてみると、深鉢の中でも有文のものでは、型式ごとに主体となる種類が異なる傾向にあり、変化が顕著である。一方、浅鉢や鉢は不明な点が多いものの、有文の深鉢のような顕著な変化を見出しがたい様相を示しているともみることができるかもしれない。

(2) 有文深鉢の分析

津島岡大遺跡第 17・22 次調査地点から出土した縄文土器には中期末から後期中葉にいたるまでのものが含まれていることが既存の型式を参考にした大別分類で判明したが、そのうちの約 8 割は福田 K 式から津雲 A 式に相当するものであった。これは福田 K 式以降、縁帯文土器が成立し、展開していく段階にあたる。そこで、ここでは文様によって所属する型式をとらえやすく、器形や文様の変化が大きい有文深鉢をとりあげ、福田 K 式から津雲 A 式について、口縁部形態、口縁部の肥厚手法、文様の変遷についての分析を行い、その関係性を示しながら、土器群の位置づけを行っていきたい。

1) 口縁部形態の変遷

a . 口縁部形態の分類

福田 K 式から彦崎 K 式までの口縁部形態の変遷については、千葉豊の論考（千葉 1989）があり、小論でもその分類にしたがって出土縄文土器

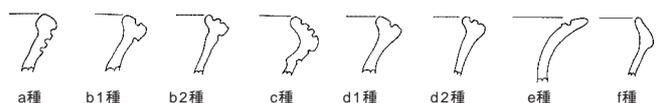


図 215 口縁部形態の分類

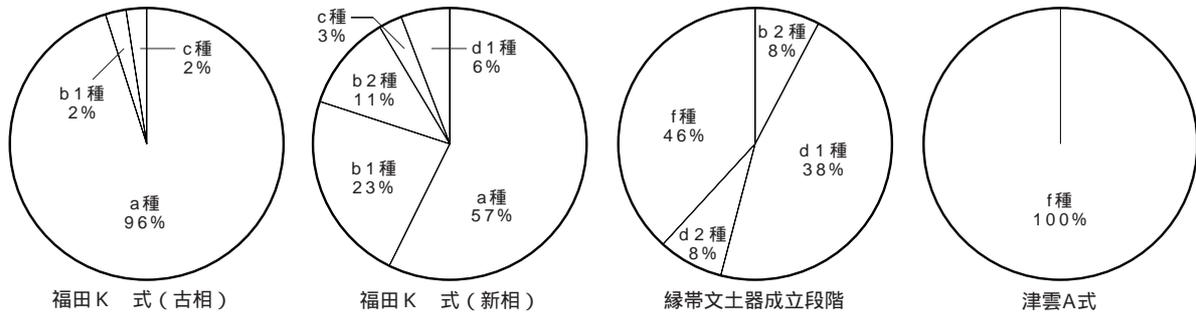


図216 口縁部形態の比率

の口縁部を分類してみたい(図215)。

- a種...口縁部がやや肥厚し、通常三本の沈線と縄文で構成される口縁部文様帯は口唇下の位置を占めるもの。
- b種...口縁上面施文型であり、口唇の内側に粘土を貼付けて口縁端部を丸みをもたせて内外に肥厚させ、口縁部文様帯を構成する沈線の一部が口唇上をめくり、口唇下に一～三条の沈線をめぐらせるもの。
- b1種...口唇上をめぐる沈線が一本のもの。口唇上と口唇下の沈線間に縄文を施すのが通有。
- b2種...口唇上をめぐる沈線が複数本のもの。口唇上の沈線間に縄文を施す例が多い。
- c種¹⁴⁾...口縁外面施文型であり、上方へ逆く字形に口縁部を拡張し、二～四条の沈線を口唇上へ施すものである。
- d種...口唇部が肥厚し口唇上に一、二本の沈線をめぐらしながらも口唇下の横走沈線が消失しているもの。
- d1種...口唇上をめぐる沈線が1本のもの。
- d2種...口唇上をめぐる沈線が複数本のもの。
- e種...口縁の内側を肥厚させ、内縁に刻みを多用させた文様をもつ口縁内面施文型。
- f種...口縁前面に粘土をはりつけ、肥厚させるタイプ。

千葉が分類した口縁部形態の時間的な関係については、a種 b種・c種(b・c種は平行関係) b1種 d1種、b2種 d2種(先後関係) d種 e種 f種の順に出現すると整理される。

b. 各型式内での口縁部形態の出現比(図216)

このように分類した口縁部形態は、分類した型式ごとにもた場合、どのように現れるだろうか。先の型式分類における各型式の中での比率を示したのが図216である。まず福田K式(古相)の段階では、口縁部のほとんどがa種で占められ、b、c種はわずかである。福田K式(新相)の段階には、a種の比率が減り、全体的には口縁部形態のバリエーションが増加する。縁帯文土器成立段階の段階にはa種はみられなくなり、b種、d種が主体となるが、f種が出現することは注意される。津雲A式の段階にはf種の口縁部に斉一化される。また、千葉の指摘する口縁部形態の時間的な関係も、この分類を本調査区出土縄文土器にあてはめて得られた出現比にほぼ反映されているとみてよいと思われる。

2) 口縁部肥厚手法の変遷

a. 口縁部肥厚手法の分類(図217)

縁帯文土器は肥厚した口縁部に文様を施文することを一つの特徴としている。そこで、口縁部の肥厚がどのように行われているか、口縁部の破片の接合痕を観察し¹⁵⁾、これをA～E種に5大別した。さらに細分可能なものについてはそれを細分している。

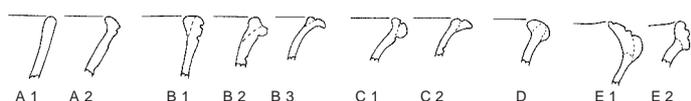


図217 口縁部肥厚手法の分類

A種...口縁部を肥厚しないもの。

A 1種...粘土紐を積み上げたもので、直口縁のもの。

A 2種...口唇部を内側に屈曲させるもの。

B種...内面を肥厚するもの。

B 1種...直立する口縁部の内面を肥厚させたもの。

B 2種...外反する口縁部の内面を肥厚させたもの。

B 3種...外反して大きく外方に伸張する口縁部の内面を肥厚させたもの。

C種...外面を肥厚するもの。

C 1種...直立ないし内湾する口縁部の外面を肥厚させたもの。

C 2種...外面を肥厚させるもので、大きく外方に伸張させるもの。

D種...内外面に肥厚するもの。

E種...「く」字状口縁 / 顎状口縁を形成・肥厚するもの。

E 1種...外面を肥厚させたもの。

E 2種...屈曲部で擬口縁を形成し、そこから上方に口縁部を伸張させるもの。

E種については、津雲A式に特徴的な、外面を肥厚する口縁部と認識していたが、今回の出土資料を整理したところ、外面を肥厚するものと、屈曲部に当たる部分が擬口縁となり、その上方に粘土帯をのせるように貼付して口縁部文様帯を作り出すものがあることがわかった。そこで前者をE 1種(図218)、後者をE 2種(図219)とした。E 2種に相当するものには、屈曲部で剥落した口縁部文様帯の資料が複数認められているが、いずれも剥落部は本来その下部に接合していたであろう器壁の形状をネガティブな状態の痕跡で写しとっている。それらはいずれも滑らかに内湾するカーブを持っており、この部分に接合していた部分は擬口縁状になっていたことを推測させる。



図218 E1種接合状況



図219 E2種接合状況

b. 各型式内での口縁部肥厚手法の出現比(図220)

図220は福田K 式(古相)から津雲A式までの口縁部肥厚手法の比率を示したものである。なお肥厚手法は細分が可能だが、ここでは変化の大勢を示すため、大別種の数値でグラフを作成した。

福田K 式(古相)では、A種、B種が確認でき、A種が大半を占める。福田K 式(新相)では、A、B、C、D種が確認でき、B、D種が主体的な手法となる。縁帯文土器成立段階ではB、C、E種が確認でき、E種がやや多いものの、ほぼ等しい割合となる。津雲A式ではE種のみ確認される。

福田K 式(古相)、津雲A式では、口縁部を作出する手法は斉一的であるのに対して、福田K 式(新相)

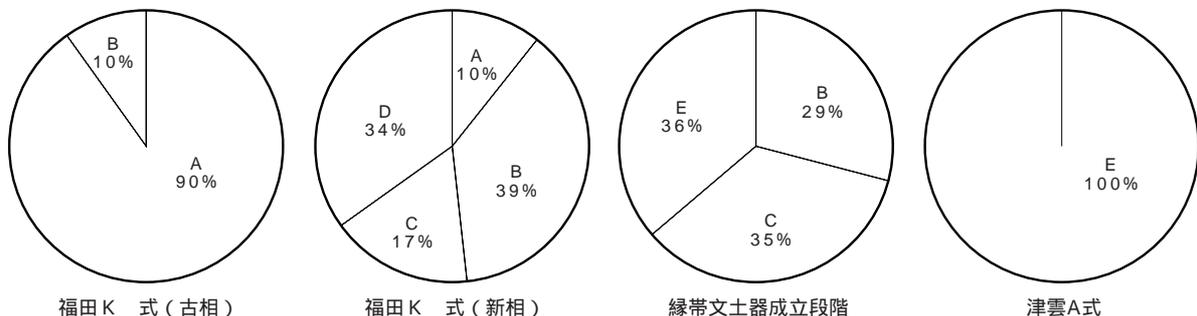


図220 口縁部肥厚手法の比率

縁帯文土器成立段階では口縁部を作出する手法が多様であることが指摘できる。また、ここで注意されるのは、B種とC種の形態的な類似である。肥厚前の口縁の形状や、内面/外面のいずれを肥厚するか、の違いはあっても、肥厚した後の形状は類似しているのである。B、C種が確認される福田K式(新相)縁帯文土器成立段階の段階には、口縁部形態も多様な状況にあることを前項で示した。このような口縁部形態と口縁部肥厚手法の多様化はそれまでの土器製作には存在していたであろう、一つの規範の崩壊した状況を示していると考えられる。

3) 文様の変遷(図221)

本調査区で出土した縄文土器に描かれる文様は多様なものである。ここでそのすべてについて触れることは到底できない内容をもっている。ところで、前項までに福田K式から津雲A式までの有文土器の口縁部形態、口縁部の肥厚手法について検討を加えてきたが、新出の要素には次の段階までまたがって現れるものもあり、その変化は漸移的であることが分かった。そこで、文様に関しても、福田K式から津雲A式までの有文土器のうち、型式の枠を超えて描出される文様を抽出して、その変化を検討することにしよう。このような資料を分析すれば、型式の枠を超えた、具体的な系統の系を型式学的にたどることができるし、また、前項でみた口縁部の形状と口縁部肥厚手法との関係性の中において、文様の変化を理解できるかどうかを検討することが可能となると考えるからである¹⁶⁾。そこで、以下ではこれらの点に注意を払いながら、文様の変化をみていきたい。なお、図221では同じ文様系統にあるものを垂線で結び、異なる文様系統を結びつける要素が認められる場合は、これを枠で囲んでいる。

a. 口縁部鋸歯文

口縁部に棒状の工具による沈線で鋸歯文を施すものである。福田K式(古相)から縁帯文土器成立段階にみられる。福田K式(古相)では、鋸歯文は単線の沈線で描出されるが、福田K式(新相)になると単線のもの、沈線が複線化して2条の沈線束によって構成されるものがある。さらに沈線束が多重化することが、3本の沈線束で鋸歯文が構成される津島岡大遺跡第15次調査地点出土資料からうかがえる¹⁷⁾。縁帯文土器成立段階の口縁部文様帯と胴部文様帯が完全に分離した資料になると、4条の沈線束で鋸歯文を構成するようになっている。

b. 口縁部と胴部文様帯の連繋文

口縁部と胴部文様帯をつなぐ連繋文は、福田K式(新相)縁帯文土器成立段階でみられる。これは口縁部文様帯が上方に移動し、口縁部文様帯と胴部文様帯の分離が進むことにより、頸部に連繋文が描出されるようになったものと考えられる。図221-6は、福田K式(新相)では口縁部下端の半円形区画文の下位から2本の沈線束で構成される磨消縄文帯が垂下し、胴部の主文の上で左右に折れて横走するモチーフとなっている。ここでは垂下する連繋文の中央、すなわち2条の磨消縄文帯に挟まれた部分に縄文施文がなされていないことに注意しておきたい。縁帯文土器成立段階の深鉢では、モチーフを構成する沈線束の中に縄文が充填されなくなっている。縁帯文土器成立段階にみられる、口縁部から垂下した4条の沈線束で構成されるこのモチーフは、口縁部と胴部文様帯を連繋する磨消縄文帯から、縄文施文を省略することによって出現したことが考えられる¹⁸⁾。また、この文様は、口縁直下に描出されていた文様が口縁部に移動して口縁部文様帯となって、口縁部と頸部、胴部という区分が明瞭になったことに伴い出現した、分帯化した文様帯を連繋する文様であり、器形の変化との関わりも考慮する必要がある。

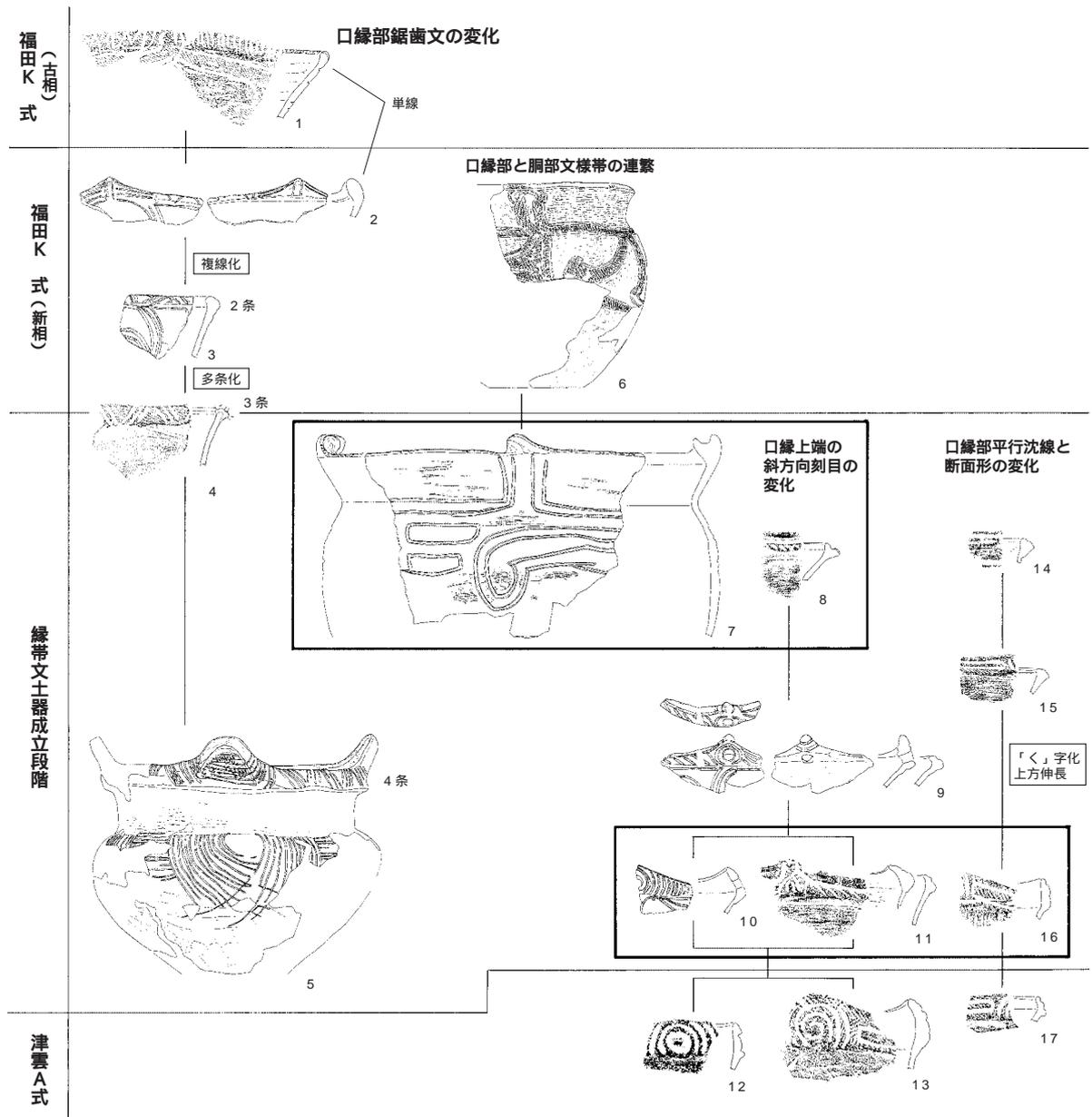
c. 口縁上端の斜め方向刻目文¹⁹⁾

縁帯文土器成立段階では、肥厚した口縁部の上端内面側に1条の横走沈線を引き、その外側に斜め方向の刻目状の短沈線を施すものがみられるようになる。図221-8~11は沈線と斜め方向の刻みで構成される口縁部文様帯をもつものを掲げた。これらは先に分類したd種口縁からf種口縁へと変遷する口縁部の形状にあわせて配列している。これをみると、口縁部の肥厚部が「く」字状になることで、内側の横走沈線は上位の沈線に、斜め方

向の刻み目は斜め方向の沈線文へと変化する。9の資料にみるように、主文の左右で斜め方向の沈線文が対称とならず、同じ方向を向いていることがその証左となろう。これに後続する口縁部の肥厚が進んだ段階になると、主文の円形孔の円弧に沿った（対向？）連弧文が描出される10の資料がみられるが、これも口縁部上端に横走る一条の沈線文が残る。このことから円形のモチーフに沿う、対向連弧文は四ツ池式に顕著な斜め刻みが変化したものとみることができる。この文様の変化は、形態の変化と密接に関係していることをうかがいすることができる例といえる。

d . 口縁部上端平行沈線文

口縁部の肥厚化に伴い、口縁部上端に平行する沈線が引かれる個体が見られる。図221では図示していないが、福田K式（新相）でもみられ（図93 - 77）、縁帯文土器成立段階、津雲A式に多くみられる。これも口縁部の



津島岡大遺跡第15次調査出土

図221 複数の型式で共有される文様の変遷

形状の変化と連動した文様の変化を説明することができる。すなわち、口縁部の「く」字化、上方への伸長に伴ってこの部分が文様帯となり、ここに引かれていた平行沈線文が枠状の区画文になっていくことが推測されるのである。

以上の検討から以下の点を指摘できる。

鋸歯文の変遷から、津島岡大遺跡には福田K式（古相）から縁帯文土器成立段階までを貫いたかたちで型式変化の過程をたどることができるモチーフが存在することがわかる。

口縁部と胴部文様帯との連繫文は、器形の変化に対応した文様の変化を示すものである。

津雲A式に特徴的な、肥厚した口縁部上に描かれる対向連弧文や枠状区画文は、縁帯文土器成立段階にみられる斜め方向の刻みに系譜を持つこと。これは口縁部形態の変遷過程とも対応する。続く津雲A式では主文の円文、対向連弧文、枠状区画文がモチーフとして固定的になる。

4) 口縁部形態・肥厚手法・文様の関係性

a. 口縁部形態・口縁部の肥厚手法・文様の変化

上記の有文深鉢の分析から得られた、それぞれの属性の変化を整理しておこう。まず、福田K式（古相）から津雲A式までの口縁部形態を分類し、それぞれの形態が各型式に占める比率を調べた。その結果、福田K式（古相）、津雲A式は斉一的な状況を示す一方、これらの間に位置づけられる福田K式（新相）、縁帯文土器成立段階では多様な形態をとる。同様に、口縁部の肥厚手法を観察して分類し、それぞれの手法が各型式に占める割合を調べたところ、福田K式（古相）、津雲A式では斉一的な状況を示すが、福田K式（新相）、縁帯文土器成立段階においては肥厚手法に多様性がみられた。文様については、福田K式（古相）の文様は、福田K式（新相）、縁帯文土器成立段階を通して変化し、津雲A式で固定的になる。そこで次にこれらの属性がどのような関係をもつものか検討し、これらの土器群の位置づけを行うこととしたい。

b. 口縁部の形態、肥厚手法と文様の関係

先に示した、a～f種の口縁部形態の分類は、分類基準のなかに文様の施文状態を含むものであるから、福田K式（新相）段階における口縁部形態の多様化は、すなわち文様の多様化という面をも内包していることになる。また、縁帯文土器成立段階から津雲A式における文様の変化が口縁部形態の変化と密接な関係をもつことは具体的な事例の検討で指摘した。次に掲げるのは口縁部形態と肥厚手法の関係である。分析の対象としたこの福田K式から津雲A式のうち、縁帯文土器成立段階、津雲A式の土器に特徴的な属性は、口縁部を肥厚させるということである。そこでその特徴が最も鋭敏に反映されていると考えられる口縁部の肥厚の手法を観察した結果、福田K式（新相）段階には多様な手法で口縁部が肥厚されるが、それとともに口縁部形態も多様化していることを確認した。当然のことながら、口縁部の形態は、文様を描出する以前の形態も反映している。この結果は、口縁部形態の変異が、どのような手法によって口縁部が作出されているかということとも関係していることを示している。

そこで、文様、形態、製作手法の三者を斉一性、多様性という別の観点でみてみよう。すると、それぞれの属性が斉一的である福田K式（古相）段階、多様性を帯びる段階（福田K式（新相）、縁帯文土器成立段階）再び斉一的になる段階（津雲A式）が一致する。このこともこれらの属性が相互に関係性を有していることを示唆する。斉一的な段階は土器型式の内容が安定した段階、多様な段階は土器型式の内容が不安定な段階とみられるから、この関係性に土器製作の規範が反映されているとするならば、斉一的な段階は「土器製作における規範が強く働いた段階」、多様性を帯びる段階は、「土器製作における規範が緩んだ段階」ととらえることもできるかもしれない。多様性がみられる福田K式（新相）段階と、続く段階の主流となる要素が出現する縁帯文土器成立段階の段階を、「古い規範の崩壊と新たな規範の形成段階」として位置づけることも可能であろう。

このような土器の形態の変化が機能的な要請によって起こるものと仮定すれば、口縁部の形態変化が手法や文様の変化を引き起こしたと考えることもできる。ただし、口縁部を肥厚させる型式変化の要因がどのような事象によるものかを明らかにするには至っておらず、今後の検討が必要である。ここでは、分析のために取り出した、形態、製作の手法、文様という三つの属性には、一個の土器の個体のなかでも、あるいは一まとまりの型式のなかでも、それぞれの属性をつらぬいて、それぞれを結びつける有機的な関係が存在しているということを指摘しておく。

5) 器種間の関係

ここまでは、有文深鉢の属性に基づいて分析を行ってきた。このような関係がそれぞれの型式に属する他の器種において認められるであろうか。縁帯文土器成立段階や津雲A式段階では鉢や浅鉢の破片数は少なく、どの種類のものが伴うのか不明な点も残すが、型式全体にこれらの属性の諸関係が認められるかどうかの傾向を知ることとはできるであろう。

まず福田K式(古相)では、鉢や浅鉢に口縁部の顕著な肥厚はみられない。文様は2本沈線束の磨消縄文帯で構成される。ここで注目できるのは、口縁部の鋸歯文であり、浅鉢A類のうち、口縁部文様帯や胴部文様帯を有さないもの(図103-243)にもこの種の口縁部への加飾が認められるのである。福田K式(新相)や、縁帯文土器成立段階の一群では、このような破片がみられず、本調査地点出土資料から器種間の関係を明らかにすることはできないが、続く津雲A式では深鉢A4類、鉢D類の口縁部文様帯に描かれるモチーフはいずれも主文となる円形モチーフの両脇に対向連弧文や枠状区画文を描くものとなっている。また、口縁部の作出手法はE種によるものであり、モチーフや土器製作の手法は器種間で共有されている。

このように、各型式の内部ではそれぞれの器種間においても口縁部の形態や製作の手法、モチーフが共有されていることから、異なる器種の間においても土器製作における共通の関係が存在していることがうかがえるのである。

(3) 津島岡大遺跡第17・22次調査地点出土縄文土器の特質

1) 津島岡大遺跡第17・22次調査地点出土土器の特徵

以上までの検討で得られた次の2点は、西日本の縄文時代後期の土器を考えるうえで重要である。

出土した縄文土器は中期末～後期中葉のもので、特に福田K式に相当する後期前葉の資料の出土が多く、器種組成を復原できた。この時期の一遺跡の資料で器種組成を復原できたことは重要である。

福田K式から、津雲A式までの土器群についての分析を行い、これらが型的に連続していることを示した。津島岡大遺跡第5次調査出土遺物の検討では「津雲A式と津島岡大遺跡後期第 群土器の系統的、年代的な序列は近位的であり、系統として構造的な連絡をもつこと」(阿部1994a)が指摘されている²⁹⁾。この指摘と今回の検討をあわせて考えれば、津島岡大遺跡から出土した後期の縄文土器のうち、福田K式から「後期第 群」までの推移をそれぞれの関係性の中でとらえられるようになった。後期前葉から中葉までの型式の推移を一遺跡でとらえることが可能な点でも、これらの資料は縄文時代後期の西日本の土器群を考えるうえで重要なものと位置づけられよう。

2) 津島岡大遺跡第17・22次調査地点出土の縄文後期土器群からみた縁帯文土器成立段階の構造的特質

縁帯文土器の成立と展開については、器形や文様の系統の整理を基軸に、東日本との関係が指摘されてきた(千葉1989)。今回の検討では他地域との比較検討を果たすことはできなかったため、このような問題については触れることができない。そこでここでは津島岡大遺跡第17・22次調査地点出土資料に内包された土器群の構造を

図式化してとらえ、その動態から縁帯文土器の成立について触れてみたい。

小論では福田K 式から津雲A式までの有文土器にみられるさまざまな属性のうち、口縁部形態、口縁部肥厚手法、文様という属性を取り出して、それぞれが相互に密な関係を有していることを示した。これらの関係は縄文土器の個体、あるいは土器の型式に反映されるものである。この関係にひとたび変動が起きれば、それが土器の器形や型式、あるいはモチーフの変化につながることは先の有文土器の分析で示した。そこでこれらの土器製作における属性間の諸関係を構造的なものととらえることとしたい。

また、これらの属性を斉一性/多様性という観点でみることにより、それぞれの属性が斉一的な段階、多様な段階を抽出し、これらが斉一的あるいは多様になる段階が相互に一致することを整理した。このこともまた、これらの属性が相互に関係を有して構造的であることを示すとともに、多様性を帯びる段階は土器製作構造の変動を示唆するものと理解することができよう。この段階を既存の土器型式に相当させて考えるならば、福田K 式(新相)段階から構造変動がはじまり、縁帯文土器の成立段階にもそれは不安定な状態にあるとみられる。ただし、後続する津雲A式に引き継がれる属性の諸関係がこの段階に成立し、津雲A式段階には再び安定した土器製作の構造をとるようになると整理することができるのである。すなわち、縁帯文土器成立段階の構造的な特質は、福田K 式の段階から始まる構造変動による不安定な構造と、その中から、津雲A式の土器製作構造を生み出したところにある。「西日本における縁帯文土器の成立に主導的役割を果たしたのは、瀬戸内～近畿を分布の主体とする福田K 2式の系統である」(山崎2003)という指摘は、福田K 式段階から始まる構造変動を、器形や文様に表れた属性からとらえたものといえよう。ところで、このような構造変動が何に起因するのか、という問題に、本調査地点出土資料の分析のみから迫ることは難しい。今後、時間的・空間的に比較検討対象を広げながらこの問題を解明していきたい。

おわりに

本論の目的は、津島岡大遺跡第17・22次調査地点から出土した土器群について基礎的な整理を行うことにあった。分析の結果、福田K 式から津雲A式への変化を一地点の土器群から連続的にたどることができた。また、それぞれの型式内容を図式化し、福田K 式(新相)から津雲A式への変化を整理した。しかし、小論での分析は本調査地点出土土器群を主体に行い、津島岡大遺跡第5次調査地点出土資料を用いたが、補足的なものにとどまっている。したがって、本論の検討結果は、さしあたり本調査地点、あるいは津島岡大遺跡のうちにおける成果であり、この成果がどの程度敷衍できるのか、ということは、時間的・空間的に比較・分析対象を広げて検証していかなければならない。それとともに、津島岡大遺跡出土土器群の時間的・空間的位置、すなわち、編年的な位置と、他地域との平行関係についても今後検討を加えていかなければならない。

註

- (1) これについては、千葉豊の整理がある(千葉1992)。
- (2) したがって、この分類には時間的な先後関係も包括されていることになる。
- (3) 複数の型式にまたがる可能性があって、いずれに含めるかを決しがたいものや、いずれの型式に属するかが不明な資料は除外しており、本調査地点から出土した全ての資料の分類を行っていないことを断っておく。
- (4) 泉 拓良 1989「船元・里木式土器様式」『縄文土器大観』4, pp.307 - 310
- (5) 泉 拓良 1985「中期末縄文土器の分析」『京都大学埋蔵文化財調査報告』, pp.163 - 181、矢野健一 1994b「北白川C式併行期の瀬戸内地方の土器」『古代吉備』第16集, pp.1 - 15
- (6) 玉田芳英 1989「中津・福田K 2式土器様式」『縄文土器大観』4, pp.262 - 265
- (7) 註(6)文献
- (8) 福田K 式に後続し、津雲A式に先行する土器群。中部瀬戸内北岸では未命名の土器群である。周辺地域では、近畿の四ツ池式(泉・玉田1986)、広瀬土壙40段階(千葉1989)、四国の松ノ木式(出原1992)などに併行する。これらよりも時期的には後出となるが、香川のなつめの木式(渡部1994)も含まれる。
- (9) 千葉 豊 1992「西日本縄文後期土器の二三の問題 瀬戸内地方を中心とした研究の現状と課題」『古代吉備』第14集, pp.27 - 50
- (10) 前掲註(9)文献
- (11) 阿部芳郎編 1994『津島岡大遺跡4』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第7冊

考 察

- (12) 西田泰民 1989「堀之内・加曾利B式土器様式」『縄文土器大観』4, pp.281 - 286
- (13) ただし、縁帯文土器成立段階の深鉢A6類、深鉢B類については、住居址1の炉や床面付近で縁帯文土器成立段階の深鉢A3類と出土していることから、その存在を推定している。
- (14) 千葉はc種口縁については、鉢A類に特徴的な口縁部とみており(千葉1989,p.108,II.13 - 16) 今回の分析においても福田K式でのみ確認されている。
- (15) 接合痕の観察は遺物の実測時に行っているが、観察者によって判断が異ったり、不明瞭なものを接合痕として認定している可能性もあり、事実報告に掲載した図には接合痕を記入していない。小論での観察に対する責任は全て筆者が負うものである。
- (16) 文様の変化は、当然ながらさまざまな要素に他地域の影響を考慮する必要がある。しかし、ここでは一遺跡内での文様の型式変化がたどれるものに限定した。ただし、新たに出現してくる要素(例えば四ツ池式の影響をうけた口縁部の斜め刻みなど)もあるので、今後の作業として系譜関係をきちんと整理する必要がある。
- (17) この資料については、福田K式(新相)縁帯文土器成立段階のいずれに含めるか、判断が難しいが、頸部が無文化していることや、口縁部下端の横走沈線が消失していることから、縁帯文土器成立段階に含まれる可能性が高い。
- (18) 本書図99-181は、口縁部に環状の突起が付されるものであるが、この資料では突起上に4条の沈線束が確認される。連繫文がさらに上方まで展開したものと考えられる。
- (19) これは四ツ池式の指標とされる属性であり、津島岡大遺跡にもこれらの地域からの影響があることは間違いのないであろう。しかし、小論では他地域との比較までは射程に含めていないため、これらの検討はひとまずおいておき、機会を改めて論じることとしたい。
- (20) 阿部芳郎は、「ここで指摘した津島岡大遺跡後期第 群と津雲A式との関係を否定するためには、以上に指摘した型式内における器種間の関係、それらの細別型式間における連続というタテ・ヨコの構造を否定しなければならないが、これを彦崎K式の介入により説明することは無理が多い。」とも指摘しており、津雲A式と彦崎K式との関係について言及している。

参考文献

- 阿部芳郎 1994a「後期第 群土器の型式学的検討」『津島岡大遺跡4』a, pp.261 - 277
阿部芳郎 1994b「後期第 群土器の製作技術と機能」『津島岡大遺跡4』a, pp.291 - 311
阿部芳郎編 1994『津島岡大遺跡4』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第7冊
泉 拓良 1985「中期末縄文土器の分析」『京都大学埋蔵文化財調査報告』、pp.163 - 181
泉 拓良 1989「縁帯文土器様式」『縄文土器大観』4, pp.273 - 276
泉 拓良 1989「船元・里木式土器様式」『縄文土器大観』4, pp.307 - 310
泉 拓良・玉田芳英 1986「文様系統論 縁帯文土器」『季刊考古学』第17号
泉 拓良・松井 章 1989『福田貝塚資料 山内清男考古資料2』奈良国立文化財研究所史料第32冊
玉田芳英 1989「中津・福田K式土器様式」『縄文土器大観』4, pp.262 - 265
千葉 豊 1989「縁帯文系土器群の成立と展開」『史林』第72巻第6号, pp.102 - 146
千葉 豊 1992「西日本縄文後期土器の二三の問題 瀬戸内地方を中心とした研究の現状と課題」『古代吉備』第14集, pp.27 - 50
出原恵三 1992「松ノ木式土器の提唱とその意義」『松ノ木遺跡』本山町教育委員会
西田泰民 1989「堀之内・加曾利B式土器様式」『縄文土器大観』4, pp.281-286
西脇対名夫 1990「伊木力遺跡出土縄文時代後期土器の検討」『伊木力遺跡』a, pp.513 - 551
橋本雄一 1994「彦崎K式に先行する土器群について」『津島岡大遺跡4』a, pp.278 - 29
柳沢清一 1997「西日本における縄紋時代後期中葉編年の検討 津雲A式・彦崎K式から小池原上層式・鐘崎式・平城式へ」『古代』第103号, pp.1 - 50
矢野健一 1994a「縄文後期における土器の器種構成の変化」『江口貝塚』a, pp.155 - 168
矢野健一 1994b「北白川C式併行期の瀬戸内地方の土器」『古代吉備』第16集, pp.1 - 15
山崎真治 2003「縁帯文土器の編年的研究」『東京大学考古学研究室紀要』第18号, pp.35 - 109
渡部明夫 1994「観音寺市なつめの木貝塚出土の縄文時代後期土器(なつめの木式)について」『香川県埋蔵文化財調査センター研究紀要』、pp.1 - 28

(2) サヌカイトの搬入量

次に注目できるのは、サヌカイト製石核、楔形石器の出土量の多さである。13～14層出土石器の1/3弱（55点/160点、石核28点、楔形石器27点）を占める。これまで、津島岡大遺跡の縄文時代後期石器群の特徴として石核が総じて少ない点が指摘され、サヌカイト搬入量の遺跡間での格差という問題が論議されてきた⁽¹⁾。ただ、本調査地点に関しては、S126やS130のような板状剥片を素材として利用した石核の他に、S171のような原礫面を多く残す大型の塊状石核、S129やS299のような薄い小剥片を剥離した小型石核など、その形状は多様で出土点数も確保されている。おそらく、他の遺跡で一般的な板状剥片という原材形態以外に、拳大のサヌカイト塊も原材として搬入していた可能性が高い。

また、本調査地点で出土したサヌカイトの量も豊富である。本地点で出土したサヌカイトの総重量は9606.2gであるが、その中で石核、楔形石器、剥片、石屑の総重量は8785gと9割近くを占めている。さらに、13層～14層出土のサヌカイトは4973.5g、各縄文遺構（13～15層）出土のサヌカイトは1748.8gに達している。

このような状況をみる限り、それほど搬入石材たるサヌカイトが枯渇していたというわけではなさそうである。これは、本調査地点が、津島岡大遺跡の縄文時代後期における中心的な位置にある点と関連するのであろう。第15次調査土坑1で確認された大型板状剥片とあわせて考える時⁽²⁾、本遺跡の住居址を伴う集落の中心域においては、日常的な石器製作に十分な量、もしくはそれ以上の豊富なサヌカイトを搬入していた可能性は高く、それを用いて石鏃、石匙、スクレイパー、錐などの打製石器を製作していたと考えられる。

(3) サヌカイト以外の石材利用

ただ、そのように豊富なサヌカイトを入手し得たにもかかわらず、石鏃の製作には在地の石材を多く利用している点も特徴的である。13～14層で出土した石鏃4点の内サヌカイト製は1点で、今回の調査で出土した石鏃の総点数25点の内、サヌカイト製は2点（1点は破片）のみである。利用される石材は細粒砂岩、粘板岩、玄武岩質凝灰岩など、遺跡周辺で採取可能な石材である。本調査地点では、細粒砂岩の粗割礫も多く確認されており、良質なものを選択、利用していた可能性が高い。石材の利用状況がサヌカイトを利用する他の打製石器とは明らかに異なり、縄文時代後期におけるサヌカイト以外の石材を利用した石鏃の比率の高さを明瞭に示す状況である⁽³⁾。

また、本調査地点の石器群をみると、石鏃以外の打製石器にはほぼ100%近くサヌカイトを利用しているのに対して、磨製石斧や敲石などには流紋岩、花崗岩、石英安山岩、閃緑岩など、半田山付近や旭川河岸などの遺跡周辺で採取可能な石材を利用している。用途にあった石材の使い分けが明瞭である。

一方で、サヌカイト以外でも遠隔地から運ばれてきた可能性のある石材も少量ながら存在する。まず、S79やS370などの石棒に利用された玄武岩質緑色片岩や泥質片岩（雲母片岩）である。これらの石材は、三波川帯に分布する結晶片岩の可能性もある。また、S21やS174などの赤色チャート（ジャスパー）も岡山県地域では採取しにくい石材である。図示はしなかったが、土坑2より赤色チャートの原礫も出土している。

以上のように、本調査地点で確認された縄文時代後期の石器群は、当時の石器組成をよく反映する良好な資料であり、サヌカイトや在地石材の利用実態を解明する上でも重要な資料と判断できる。

表10 出土したサヌカイトの総量

遺構・層位	製品		石核・楔		剥片・石屑		総重量(g)
	点数	重量(g)	点数	重量(g)	点数	重量(g)	
縄文遺構	15	134	12	166.7	255	1,448.1	1,748.8
15層	1	25.5	1	84.8	12	116.6	226.9
14・15層	1	28.9	0	0	17	147.9	176.8
14層	21	242.9	19	695.2	323	1,615.0	2,553.1
13・14層	6	145.7	9	690.9	64	272.2	1,108.8
13層	20	110	17	405.7	192	795.9	1,311.6
弥生～近世	35	134.2	28	923.5	130	625.2	1,682.9
帰属不明					138	797.3	797.3
計	99	821.2	86	2,966.8	1,131	5,818.2	9,606.2

註

- (1) 富樫孝志 1994「津島岡大遺跡第5次調査出土の縄文時代後期石器群の技術構造」『津島岡大遺跡5』岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第7冊 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター p.312 - 330
- (2) 山本悦世編 2004『津島岡大遺跡14』岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第19冊 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター p.26 - 29
- (3) 竹広文明 2003「縄文時代におけるサヌカイト利用と石器製作」『サヌカイトと先史社会』漢水社 p.178

3. 中部瀬戸内地域の縄文時代における収穫具について 津島岡大遺跡出土の石器を中心に

はじめに

近年、縄文時代の遺跡においてイネの存在を示す資料が出土し、あらためて縄文時代における稲作に関する議論が活発となっている。そうした議論の中で、縄文時代において弥生時代の石包丁と類似する石器が取り上げられることも多い。津島岡大遺跡においても、今回の調査で出土した資料を含め、縄文時代後期に属する石器の中に弥生時代の打製石包丁と形態的に類似するものや打製石包丁と非常に似た使用痕をもつ石器など、重要な資料が出土している。このような石器については、弥生時代の石包丁との類似性から稲作との関連が注目されることが多い一方で、弥生時代の石包丁とどのような点が類似しているのか、さらにどの点が異なっているかといったような基礎的な比較研究は意外と少ないように思われる。そこで、本論では津島岡大遺跡出土資料を中心に縄文時代中部瀬戸内地域の打製石包丁と類似する石器について、弥生時代の石包丁と形態、大きさ、使用痕、製作方法などに関して比較を行い、両者の類似点や相違点を検討していきたい。

(1) 弥生時代打製石包丁の特徴

石包丁と類似した縄文時代の石器について検討する前に、まず中部瀬戸内地域における弥生時代の石包丁の特徴についてみておきたい。岡山県南部地域では弥生時代前期まで、磨製石包丁の出土が打製石包丁を上回るものの、中期以降金山産サヌカイトを用

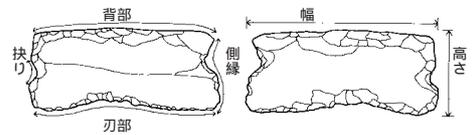
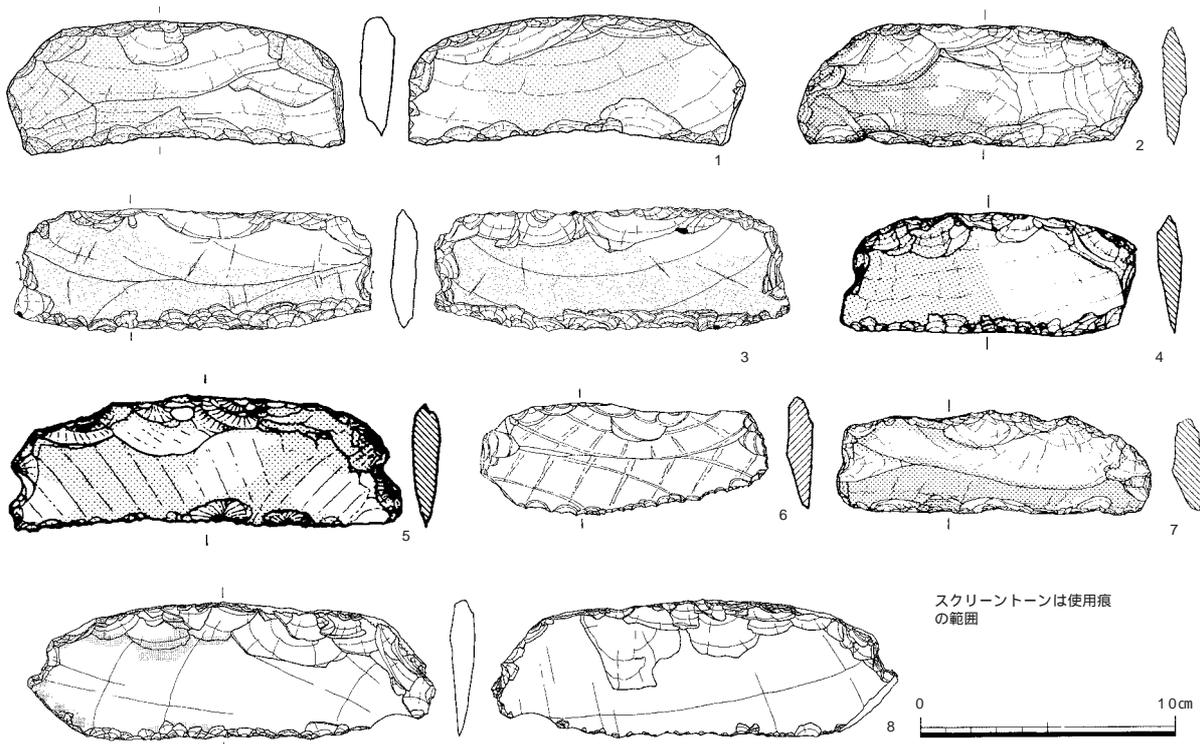


図222 各部位の名称



1. 南方(済生会) 2・7. 加茂政所 3. 池の奥 4. 百間川兼基 5. 百間川今谷 6. 用木山 8. 多肥松林

図223 弥生時代中期の打製石包丁

いた打製石包丁が主体となる（平井1988）。香川県では岡山県南部に比べると前期においてもサヌカイト製打製石包丁の占める割合が高いが、磨製石包丁が一定量みられ、おおむね類似した傾向を示しているといえよう。

中期以降に普及する典型的な打製石包丁については、形態の上で側縁に挟りをもつものともたないものの大きく2つに分けることができる（図223）。縄文時代の石器で打製石包丁との類似性が指摘される場合、これらの内、挟りをもつ打製石包丁との類似性から述べられことが多いが、弥生時代中期の打製石包丁は必ずしも両側縁に挟りがあるわけではない。数量的にも、津島岡大遺跡で出土している弥生時代中期の打製石包丁⁽¹⁾は挟りをもたないものであるし、中期の打製石包丁が多量に出土している岡山市南方（済生会）遺跡などでも、むしろ中心は挟りをもたないものである。

また弥生時代の典型的な打製石包丁の特徴の1つは、石包丁を強く握った際に手を傷つけないようにするための工夫と考えられる、刃潰しの加工が背部に施されていることである。両側縁に挟りをもたない打製石包丁であっても、この特徴によってスクレイパーなどの刃器と容易に区別することができる。さらに、大きさについてもスクレイパーなどの刃器は幅4～11cm、高さ2～7cmほどが中心であるのに対して、打製石包丁は幅が5～18cm、高さが3～7cmほどあり（図224 - 1・2）、大型の横長剥片が素材とされていることがわかる。また、打製石包丁はその製作方法においても特別で、図223 - 3・6・7などの石包丁の背面に残る先行剥離面をみれば分かるように、石包丁の素材となる大型の横長剥片が連続して剥離されている。他の石器の製作においてはこのような規則性はなく、打製石包丁を製作するための比較的高度な技術が用いられており、このような点からも打製石包丁の特異性がわかる⁽²⁾。

さらに、このような技術的な違いに起因して、スクレイパーなどの刃器では不定形なかたちのものが多いのに対して、打製石包丁は長方形や半月形に近い比較的整った形態につくられているなどの相違点もある。弥生時代の打製石包丁は、背部の刃潰し、大きさ、形態などの点からスクレイパーなど他の刃器と比較的明瞭なつくり分けがなされており、石器群の中で独立した器種として確立されているといえる。

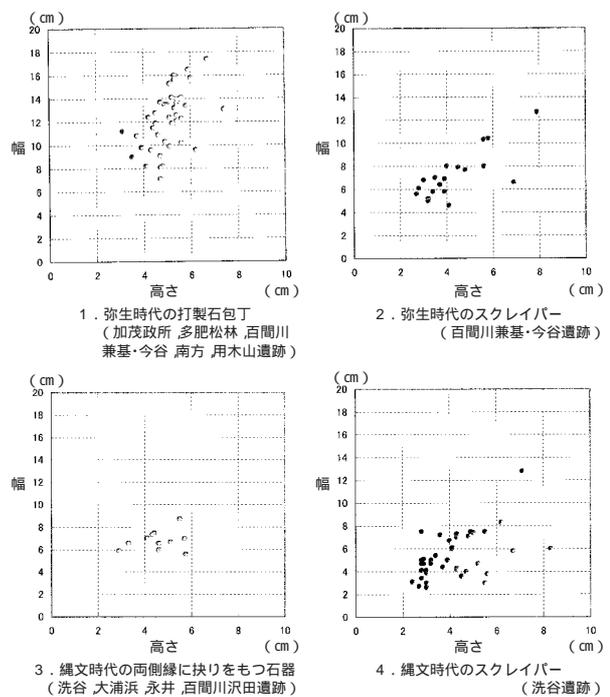


図224 各種石器の量量

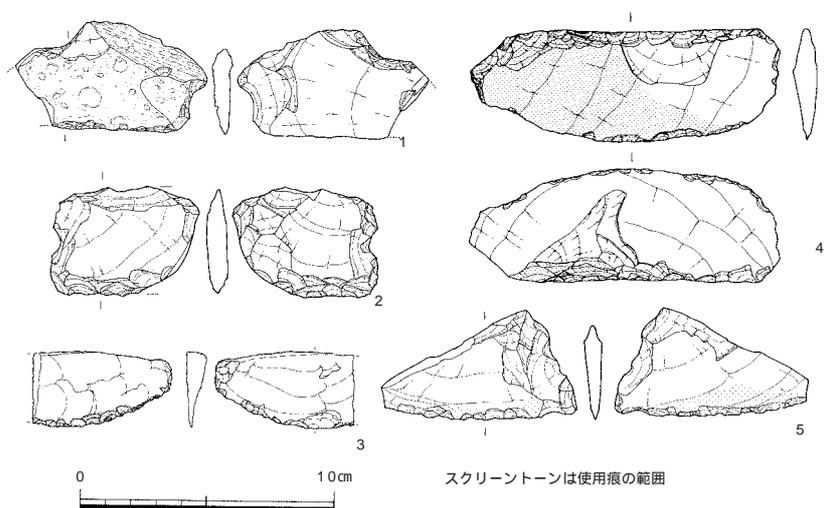


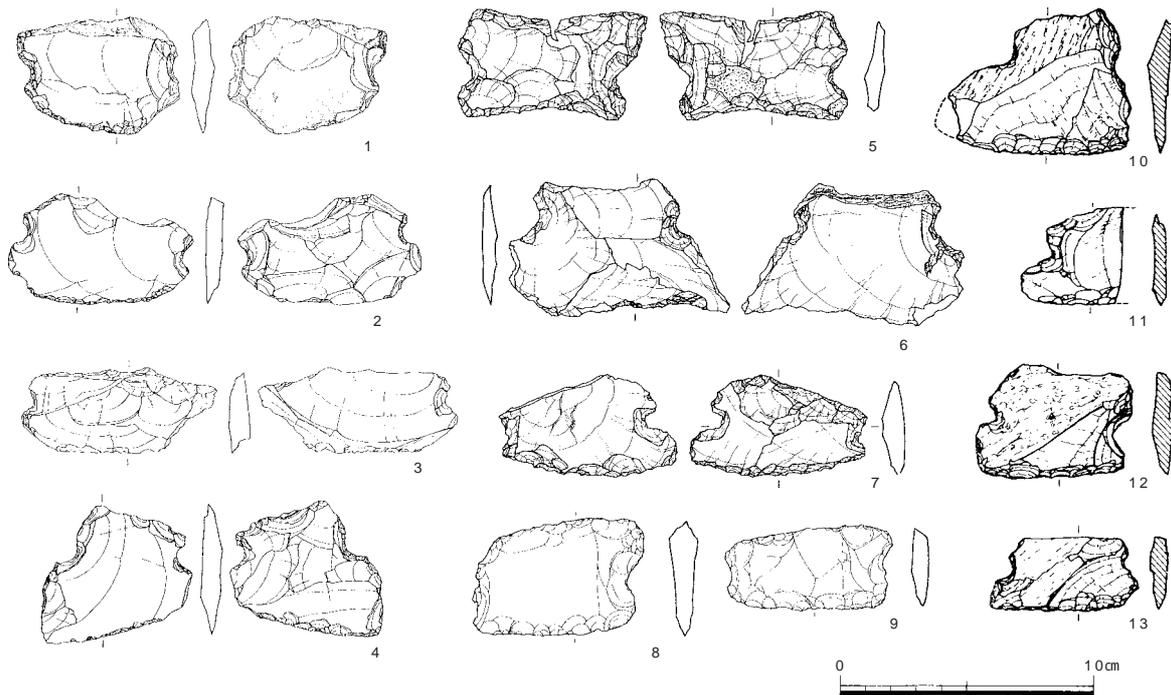
図225 津島岡大遺跡出土縄文時代の石器

(2) 縄文時代の両側縁に抉りをもつ石器

次に、このようなサヌカイト製打製石包丁の特徴を踏まえた上で、打製石包丁との関連性がしばしば指摘される、側縁に抉りをもつ縄文時代の石器について検討したい。津島岡大遺跡でもこのような抉りもつ縄文時代後期に属する石器が出土している(図225-1)。ただし、これらは抉りをもつといっても弥生時代の打製石包丁のように2つの抉りが側縁のほぼ同じ高さの対称的な位置につくられているのではなく、片方の抉りが側縁の上方に寄っている。同じような例は津島岡大遺跡以外にも香川県善通寺市永井遺跡、同坂出市大浦浜遺跡などでも出土しており比較的多くみられる(図226-2・4)。一方で弥生時代の打製石包丁と同じように、抉りが両側縁の対称的な位置につくられているものも、広島県福山市洗谷遺跡、岡山市百間川沢田遺跡などで出土している(図226-8・9・12・13)。ただし出土数はそれほど多くなく、縄文時代では非対称の位置に抉りがつくられたものの方が中心的である。

また、先述したように弥生時代の打製石包丁では背部に刃潰し加工が行われているが、縄文時代の抉りをもつ石器では、その加工が行われていない。一部のものは背部が自然面や裁断面などを呈しており手で強く握ったとしても問題ないものもあるが、打製石包丁のように穂摘みを行うのに適した背部加工は、縄文時代の抉りをもつ石器では定式化していないといえる。

次に、打製石包丁と異なる点は大きさである。先述したように、弥生時代中期の打製石包丁は、幅が5~18cm、高さが3~7cmほどあり大型の横長剥片が利用されているが、縄文時代の両側縁に抉りをもつ石器は幅5~9cm、高さ3~6cm程と小さい(図224-3)。製作方法も弥生時代の打製石包丁のような特異な製作方法は見出すことはできず、一般的スクレイパーとかかわらない。打製石包丁は、穂摘み具として主面に穂を押しつけて使用するのに非常に適したもちやすい大きさといえるが、縄文時代の抉りをもつ石器は石包丁と同様のもち方をするには小さく、適さない。後に述べるように、縄文時代の石器の中に「穂摘み」以外に、穂を主面に押しつけることなく刈り取る「穂刈り」の方法が用いられた可能性のあるものも存在する。しかし、たとえそのような方法が用いら



1~4. 永井 5~7. 大浦浜 8・9. 洗谷 10~13. 百間川沢田

図226 側縁に抉りを持つ縄文時代の石器

れたとしても、全体的に大きさが小さいものが多く、中には図226 - 13のように両側縁の挟りがほぼ対称的な位置にあるようなものでも長さが6 cm程しかないものもある。これらの石器は稲穂を摘んだり刈ったりするための「収穫具」としては不便なものが多いといえるだろう。

ただし、これらの石器の中にも部分的に残存するものであるが、縄文時代後期に属する津島岡大遺跡から出土したもののように、打製石包丁にみられる特有の使用痕と非常に類似する使用痕を観察できるものがある。使用痕に関しては後に再び述べるが、このような石包丁と非常に類似した使用痕をもつ石器については打製石包丁と同様にイネ科草木類が使用対象であったと捉えてよいのではないかと考える。挟りをもつ石器についても一部はイネ科草木類が使用対象であった可能性はあろう。

しかし、両端に挟りをもつ縄文時代の石器の一部にイネ科草木類を対象として使用されたものがあるとしても、弥生時代のサヌカイト製打製石包丁の場合、使用痕を肉眼でも十分に観察することができるものの割合は非常に高い。例えば岡山市加茂政所遺跡出土のサヌカイト打製石包丁42点の内、37点で使用痕を確認することができる。南方遺跡（済生会）においても、正報告が行われていないので正確な割合を算出するのは難しいが、筆者が実見した限り、9割以上の打製石包丁に肉眼でも十分に観察できる使用痕がみられる。それに比べ挟りをもつ縄文時代の石器の内、同じような使用痕がみられるのは、先ほどの津島岡大遺跡の例がある程度で、その割合は低い。このような違いについては、打製石包丁のようにイネ科草木類を対象として使用したが、その使用頻度の低さから使用痕が残らなかったという捉え方もできるかもしれない。ただ、そのように捉えたとしても打製石包丁の使用痕の顕著さを考えれば、極めて使用頻度が低かったということになる。

このように、上で述べた両側縁に挟りをもつ石器については、「側縁に挟りをもつ」という点を除けば打製石包丁との相違点も多い。背部の刃潰し加工がみられないことや製作方法が異なり大きさが小さいものが多いなど、収穫具としては適しているといい難い要素をもち、スクレイパーや石匙など他の刃器からの分化が未発達である。また、石包丁と同様の使用痕を観察できるものも極めて少ない。このようなことから、両側縁に挟りをもつ石器は、いくつかの使用目的の一つとしてイネ科植物を対象となることはあっても、それを主目的としてつくられた石器ではなく、打製石包丁のように特化した機能をもつ「収穫具」ではなかったと考える方が妥当であると思われる。

(3) 打製石包丁と類似した使用痕をもつ石器

次に、縄文時代の石器の中で両側縁に挟りをもたないものの打製石包丁と非常に類似する使用痕を観察できる石器について検討したい。

先ほど述べたように金山産サヌカイトを用いた弥生時代の打製石包丁は、光沢をもつ使用痕を肉眼でも明瞭に観察できるものがしばしばみられる。また、風化などによって光沢が失われたものでも、表面が使用によって著しく磨滅したものを多く観察することができる。このようなサヌカイト製の打製石包丁にみられる光沢や磨滅と非常に類似した使用痕をもつ石器が、縄文時代のサヌカイト製石器の中にも存在する。津島岡大遺跡では今回報告した17・22次調査出土のものも含め、そのような石器が3点出土している。光沢はあまり顕著ではないものの、打製石包丁にみられるような表面が滑らかに磨滅した独特の使用痕を明瞭に観察することができる。

弥生時代の石包丁の使用痕に関しては、金属顕微鏡などを用いた高倍率法による研究がすでに多く行われている（例えば阿子島1989、御堂島1990など）。金山産サヌカイト製の石包丁の使用痕に関して、原田幹による詳細な研究が行われており（原田2002）筆者も若干の検討を行ったことがある（高田2002）。ただし、原田が詳しく述べているようにサヌカイトは風化の進行が早く、使用痕についても風化の影響を受けることによって、イネ科草木植物を対象物とした際に生じるとされる典型的な「Aタイプ」あるいは「Bタイプ」の使用痕を観察することができなくなることが多い（原田2002）。このことから高倍率法によるサヌカイト製打製石包丁の使用痕観

察については、困難な場合が多いというのが現状である。

縄文時代の津島岡大遺跡出土資料についても、肉眼では弥生時代の打製石包丁と類似する磨滅した使用痕を観察することができるものの、金属顕微鏡による観察ではAタイプやBタイプの使用痕を認めることはできなかった。ただし、肉眼で観察する限りこれと同じような使用痕をもつ石器は、打製石包丁以外にはなく、弥生時代のスクレイパーなど他の刃器においては基本的にみられない。このことから、今後より客観的な検証方法を確立する必要があることはいうまでもないが、打製石包丁の使用対象をイネ科草木類であるとするなら、縄文時代のこの石器もやはり同じイネ科草木類が使用対象であったと考えることが自然であろう。

次に使用痕の分布範囲についてであるが、一般的に弥生時代の金山産サヌカイト製打製石包丁の場合、図223 - 2・4・5のように主面左側に寄った部分に最も顕著に使用痕がみられ、その下の刃部左側付近にも比較的明瞭な使用痕がみられるというのが典型的なパターンである。これは、右利きの人物が主面に穂を押しつけて手首を内側にひねり摘みとるという収穫方法が用いられたことによると想定できる。

津島岡大遺跡から出土した縄文時代の使用痕をもつ石器の中で、同じようなパターンが図225 - 4の石器においてみられる。この石器は、大きさが幅12cm、高さ4cmほどあり大型の剥片が利用されており、背部に刃潰し加工が行われていることや形態が半月形を呈するなど、弥生時代の石包丁と共通する点が多い。管見による限り、他にこのような特徴をもつ縄文時代のサヌカイト製石器は知らないが、共通点の多さから判断して弥生時代と同じような「穂摘み」を行うために使用された石器である可能性が高いのではないかと思われる。一方、残る2点(図225 - 3・5)は、石器の主面部分にはあまり使用痕を観察できず刃部付近に偏って分布している。また大きさについても4と比べて小さく、背部の刃潰し加工も行われていない。3の場合、半月形を呈し比較的整ったものもあるが、これらの石器は石包丁と似た使用痕をもつという点以外は一般的なスクレイパーなどと大きな違いはない。

このような刃部に偏った使用痕分布を示す石器について、御堂島正は長野県の横刃形石包丁の分析を行い「穂摘み」ではなく穂を切断する「穂刈り」による使用方法を想定している(御堂島1991)。摘みとるためには、穂を押しさえつける必要があるため、ある程度の大きさがあった方がよいであろうが、穂を切って刈りとるとすれば大きさがそれほどないものでも特に問題ないと思われる。このようなことから、津島岡大遺跡の図225 - 3・5資料も「穂刈り」に使用され、4との大きさ、形態、背部の刃潰しの有無などの相違は、使用方法の違いを反映したものと考えることもできるのではなかろうか。類例が少ないので推測の域をでないが、中部瀬戸内の縄文時代におけるサヌカイト製石器による収穫方法は、「穂摘み」と「穂刈り」が併存していた可能性を想定しておきたい。

(4) 縄文時代収穫具の性格

ここまで縄文時代の石器の中で、両側縁に抉りをもつ石器と弥生時代の打製石包丁と類似する使用痕をもつ石器について検討してきた。その結果、おおそ次のことがいえると思われる。

まず、抉りをもつ石器については、石包丁にくらべて他のスクレイパーや石匙などの刃器と、形態や大きさの上で分化が未発達で、使用痕についてもほとんどのもので観察することができない。よって、これらの石器が穂摘みだけを目的として使用された道具であるとは考えにくい。

一方で、打製石包丁と非常に類似した使用痕がみられ、収穫に使われた可能性が高いと思われる石器についてみると、形態や大きさの上でスクレイパーなどの他の刃器と何らかわらないものも含まれている。このことから、縄文時代においては弥生時代の石包丁のように他の器種から独立し、「穂摘み具」として特定の機能をもった石器が存在したとは考えにくい。スクレイパーや石匙など、多様な用途に用いられる石器の中で、比較的収穫具として適したものを選び使用していたというのが縄文時代における収穫具の実体ではなかろうか。また先述したように、収穫方法についてはいまだ「穂摘み」に限定されておらず、「穂刈り」による方法も併存してお

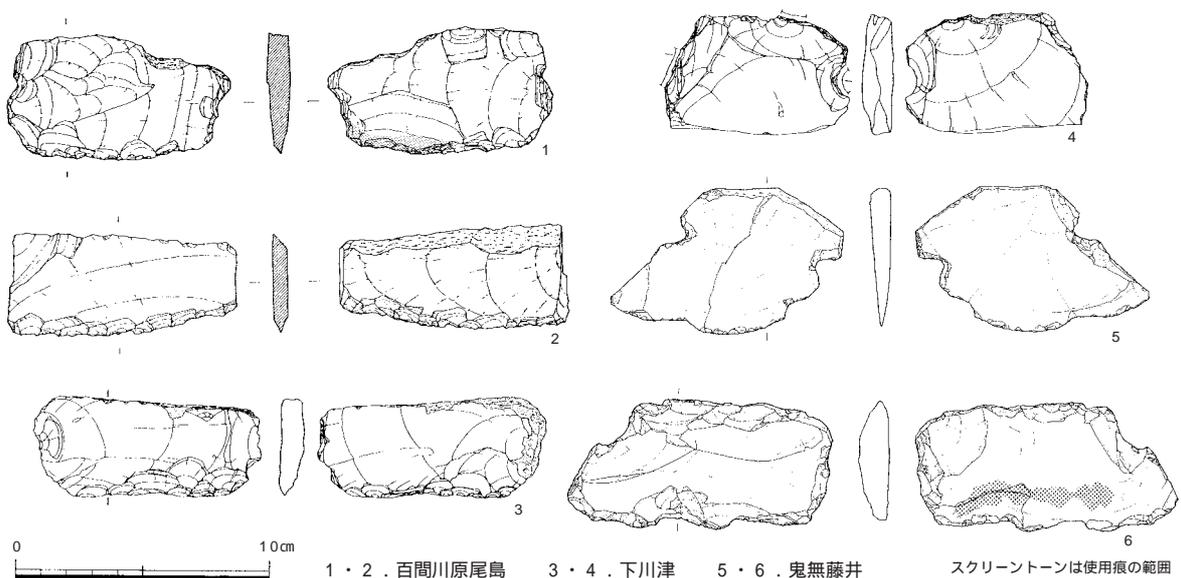
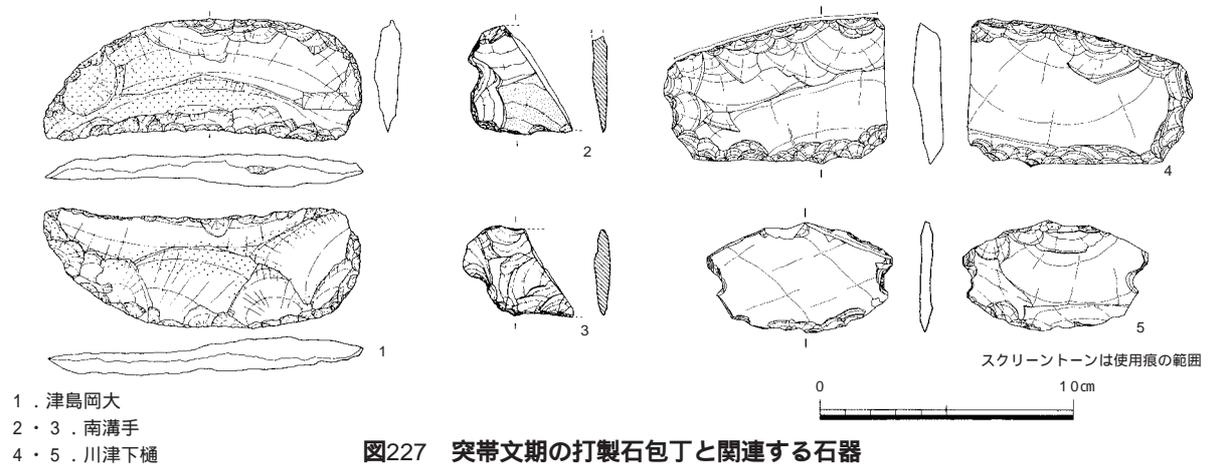
り、石器の大きさや形態もそれぞれの方法に合ったものが選択されていた可能性が考えられる。

(5) サヌカイト製打製石包丁の成立過程

最後に、このような性格をもつ縄文時代の収穫具がどのような過程をへて、「穂摘み具」として特定の用途をもつ打製石包丁へと変化したのかを検討したい。

まず収穫具として使用された可能性をもつ石器がいつまでさかのぼれるかということであるが、両側縁に抉りをもつ石器については、愛媛県松山市江口貝塚において縄文時代前期に属する可能性があるものが出土している。しかし繰り返し述べているように、抉りをもつ石器が必ずしも収穫具として使用されたとは限らないので、現状では津島岡大遺跡において石包丁と極めて類似した使用痕をもつ石器が出土している、縄文時代後期まではさかのぼることができるといえよう。

つづく縄文時代晩期については資料の不足から状況を捉えることができないが、弥生時代早期については、津島岡大遺跡や香川県坂出市川津下樋遺跡において、比較的大型で打製石包丁と同様の使用痕をもつ石器が出土している(図227-1・4)。また、注目されるのは岡山市百間川原尾島から出土している大型のスクレイパーで、こ



これは弥生時代以降、大型石包丁と呼ばれる石器と極めて類似するものである。大型石包丁は稲株を刈る機能が想定されている石器であり、この段階には稲株を刈る道具があらわれた可能性がある。

ただし、今のところ中部瀬戸内ではこの段階に確実にさかのぼる磨製石包丁は出土しておらず、つづく弥生時代前期に出土するようになる。弥生時代前期における石包丁については冒頭でも述べたように、磨製石包丁の出土の方が打製石包丁の数を上回る現象がみられる。津島岡大遺跡でも弥生前期に属すると思われる石包丁が出土しているが、いずれも磨製のものである。よって、この磨製石包丁の導入によって収穫具として特化した道具が初めて導入されたといえよう。一方、この段階の打製石包丁についてはそれほど出土数が多くないことから詳細なことは不明であるが、挟りが対照の位置につくものや、整ったものがみられることなどから、前段階に比べればスクレイパーなどとの分離が比較的進んだように思われる（図228）。ただし、大きさなどの点ではスクレイパーなどとあまりかわらないものが多く、未だシステムティックな製作方法は確立されていないと思われる。

しかし、中期になると打製石包丁が磨製石包丁を上回るとともに、長さ10cm前後の比較的大型でかたちが整ったものが増え、普遍的に背部の刃潰し加工が行われるなど定型的になる。また、製作方法についても変化がみられ、システムティックに大型の横長剥片を連続的に剥離する高度な技術が用いられるようになる。前段階までは、打製石包丁も他のスクレイパーなどと同様、比較的単純な技術を用いて素材となる剥片を剥離するというものであったが、この段階になると機能の分化にともなって、製作方法においてもスクレイパーなどの他の刃器からの分化が進んだと思われる。

このように、中部瀬戸内では弥生時代に使用されるようになったサヌカイト製の打製石包丁は、縄文時代においてイネ科植物の収穫に使用されていた石器がそのまま打製石包丁へと発展したのではなく、弥生時代前期における磨製石包丁の導入後、その影響によって生まれたと考えられる。つまり打製石包丁の誕生は、縄文時代からの伝統を部分的には受け継ぎつつも、それが内的に発展したのではなく、磨製石包丁という外部からのインパクトによって「穂摘み具」として特化した機能をもつ石器へと飛躍することができたことの結果といえよう。そして、その打製石包丁を非常にシステムティックな技術によって定型的に製作できるようになったことにより、中部瀬戸内では弥生時代中期以降に磨製石包丁ではなく打製石包丁が定着したと考えられる。

おわりに

以上、中部瀬戸内出土の縄文時代の石器について、収穫具の可能性のある石器と弥生時代の石包丁の類似点や相違点、さらにその石器の性格や打製石包丁が生み出される過程などについて検討した。推論に推論を重ねた部分も多く、特に金山産サヌカイト製の使用痕研究については、金属顕微鏡を用いた方法が十分に確立されていないなどの問題があり、今後より客観的な方法によってここで述べた仮説を検証していかなければならないことは言うまでもない。

註

- (1) 津島岡大遺跡第28次調査において、河道中より弥生時代中期の土器とともに出土している。
- (2) 弥生時代中期の典型的な金山産サヌカイト製打製石包丁の製作方法については、以前詳細に検討したので、参照されたい（高田2001）。

参考文献

- 阿子島香 1989 『石器の使用痕分析』考古学ライブラリー56、ニューサイエンス社
 高田浩司 2001 「吉備における弥生時代中期の石器の生産と流通」『古代吉備』第23集
 高田浩司 2002 「南方（済生会）遺跡出土のサヌカイト製石器の使用痕」『岡山市埋蔵文化財センター年報1 - 2000年（平成12）年度 - 』岡山市教育委員会
 原田 幹 2002 「サヌカイト製石器の使用痕分析 岡山県出土の石製農具関連資料の観察」『環瀬戸内海の考古学』平井勝氏追悼論文集
 平井典子 1988 「中・四国における弥生時代の石器」『考古学ジャーナル』No.290
 御堂島正 1990 「『横刃型石包丁』の使用痕分析 南信州弥生時代における打製石器の機能」『古代文化』43
 御堂島正 1991 「磨製石包丁の使用痕分析」『古代文化』第43巻11号

本文・挿図引用遺跡の文献

池の奥：西岡達哉 2003『池の奥遺跡・金比羅山遺跡』四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第四十六冊 香川県教育委員会・財団法人香川県埋蔵文化財センター・日本道路公団 江口貝塚：宮本一夫編 1993『江口貝塚 縄文前中期編』愛媛大学法文学部考古学研究報告第2冊 愛媛大学法文学部考古学研究室 大浦浜：大山真充・真鍋昌宏 1983『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 大浦浜遺跡』香川県教育委員会・本州四国連絡橋公団 加茂政所：平井泰男・弘田和司他編 1999『加茂政所遺跡 高松原古才遺跡 立田遺跡』山陽自動車道建設に伴う発掘調査17 岡山県埋蔵文化財発掘調査報告138 日本道路公団中国支社津山工事事務所・岡山県教育委員会、岡本寛久 1999『立田遺跡2 高松原古才遺跡2 加茂政所遺跡2 津寺遺跡6』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告143 岡山県教育委員会 川津下樋：片桐孝浩編 1996『四国縦断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第二十一冊 川津下樋遺跡』香川県教育委員会・財団法人香川県埋蔵文化財調査センター・日本道路公団 鬼無藤井：小川 賢編 2001『鬼無藤井遺跡』高松港頭地区再開発関連事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第二冊 高松市埋蔵文化財調査報告書第51集 高松市教育委員会 多肥松林：山下平重 1999『多肥松林遺跡』高校新設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第1冊 香川県教育委員会・財団法人香川県埋蔵文化財調査センター 津島岡大：山本悦世編 1992『津島岡大遺跡3 3次調査』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第5冊 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター、阿部芳郎編 1994『津島岡大遺跡4 第5次調査』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第7冊 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター、野崎貴博編 2003『津島岡大遺跡12 第19・21次調査』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第17冊 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター、山本悦世編 2004『津島岡大遺跡14 第15次調査』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第19冊 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター 下川津：西村尋文他 1990『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財調査報告7 下川津遺跡』香川県教育委員会・財団法人香川県埋蔵文化財調査センター・本州四国連絡橋公団 永井：渡辺明夫 1990『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第9冊 永井遺跡』香川県教育委員会・財団法人香川県埋蔵文化財調査センター・日本道路公団 百間川兼基：高畑知功編 1982『百間川兼基遺跡1 百間川今谷遺跡1』旭川用水路（百間川）改修工事に伴う発掘調査 岡山県埋蔵文化財発掘調査報告51 建設省岡山河川工事事務所・岡山県教育委員会 百間川沢田：二宮治夫編 1985『百間川沢田遺跡2 百間川長谷遺跡2』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告59 岡山県文化財保護協会、平井勝編 1993『百間川沢田遺跡3』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告84、建設省岡山河川工事事務所・岡山県教育委員会 百間川原尾島：江見正己編 1980『百間川原尾島遺跡1』旭川放水路（百間川）改修工事に伴う発掘調査 岡山県埋蔵文化財発掘調査報告39 建設省岡山河川工事事務所・岡山県教育委員会、正岡睦夫編 1984『百間川原尾島遺跡2』旭川放水路（百間川）改修工事に伴う発掘調査 岡山県埋蔵文化財発掘調査報告56 建設省岡山河川工事事務所・岡山県教育委員会 南方（済生会）：扇崎由・安川満 1996『上伊福・南方（済生会）遺跡（南方蓮田調査区）』岡山県埋蔵文化財調査の概要 1994年度 岡山市教育委員会、扇崎由・安川満 1997『上伊福・南方（済生会）遺跡（南方蓮田調査区）』岡山県埋蔵文化財調査の概要 1995年度 岡山市教育委員会 南溝手：平井泰男編 1995『南溝手遺跡1』岡山県立大学建設に伴う発掘調査 岡山県埋蔵文化財発掘調査報告100 岡山県教育委員会、平井泰男編 1996『南溝手遺跡2』岡山県立大学建設に伴う発掘調査 岡山県埋蔵文化財発掘調査報告107 岡山県教育委員会 用木山：神原英朗 1977『用木山遺跡』岡山県山陽新住宅市街地開発事業用地内埋蔵文化財発掘調査概報（4） 岡山県山陽町教育委員会

4. 糸里の溝について

はじめに

津島岡大遺跡では、これまでの発掘調査において糸里に関係すると考えられる遺構が確認されている。特に津島北地区では第3・6・9・12・22次調査地点で、一連のものともみられる東西方向の溝（以下「東西溝」と称する）が、古代・中世・近世・近代と、各時期において確認されており⁽¹⁾、以前から糸里の坪境にあたる溝として注目されてきた。

今回、本書で述べた第22次調査地点の古代～近代にかけての東西溝（溝22・24～27）の報告で、一連の溝については正式報告が完了することとなる。この東西溝は若干のずれはあるものの、ほぼ古代～近代まで同一地点で踏襲されている点に特に着目して、今一度、この東西溝を中心に糸里関連遺構についてまとめてみることにする。

岡山市域では糸里の地割りが現在にまで随所に残っていることが知られる⁽²⁾。高重進氏による詳細な検討⁽³⁾によれば、岡山大学構内では西門から南に延びる通称「南北道路」が、糸里施行当時の南北の基準線にあたるものと指摘されている。津島郷と弘世郷との郷境である。一方、東西の基準線については、現在の国道53号線から南に50～80m程、県総合グラウンド内に入った位置にあたるラインが、これに該当するとされる。津島郷と伊福郷との郷境である。岡山大学津島キャンパスは津島郷・弘世郷の2つの郷内に位置することとなる。

(1) 津島岡大遺跡の糸里関連遺構

津島岡大遺跡の糸里遺構については、近世遺構から地割りを検討したもの⁽⁴⁾と、半田山城の検討に関連して「福輪寺縄手」の歴史的・地理的位置に触れたものがある⁽⁵⁾。前者は主に近世における南北方向の遺構を取り扱い、地割りを検討したものである。これまで文献史学の見地から指摘されたきた点を、実際に発掘調査で検出された溝・道路遺構の計測値によって確認したものといえる。後者は、古代・中世山陽道の一部をなしていた「福輪寺縄手」が岡山大学構内を通過していた可能性を示唆したものである。

本節では、以上の成果を踏まえ、古代以降の東西溝の変遷をまず見ていくことにする。最も東に位置する第3次調査地点から西の第12次調査地点まで、構内座標では00 - 00ラインから14 - 00ライン間の700mのうち、およそ150mが判明している。これらの溝は単に用水路としての機能だけではなく、溝の脇は道として利用されていたことは想像に難くない。実際に第22次調査地点では、溝の両側で中世～近代の畦畔を確認でき、あるいは、第6・9次調査地点の古代溝の両側に見られるように、畦畔が認められない空白地帯の存在 = 道という想定もできる。東西溝一帯は、主要な用水路であるとともに主要な通路であったと言える。

以下に各時期の東西溝について簡単に触れておく（図229）。

a. 古代溝：第1次調査溝1、第3次調査溝4・5、第22次調査溝21、第6次調査溝13・14、第9次調査溝22～29、第12次調査溝27～29

幅10～12m、最深部で深さ1.5mを測る。断面形は緩やかな丸底～皿形を呈している。少なくとも2～3回の改修を経つつ、ほぼ同規格で利用される大規模な溝である。いずれの地点でも比較的多くの遺物を出土しており、埋没時期は10世紀後半と考えられる。

位置をみると西端では構内座標AW - 0～AW - 2ライン間に、東端ではAW - 2～AW - 4ライン間となる。基本的には東西方向に走行するが、東に行くに連れ若干南に振れている。

b. 中世溝：第3次調査溝6、第22次調査溝24・25、第6次調査溝15、第9次調査溝30、第12次調査溝31～33

調査地点によって、検出された溝の数が異なるが、古代溝の上にはほぼ重複して作られる一条の溝はどの地点でも確認される。幅4～6m、深さ0.3～0.4mで、断面の形状は緩やかな丸底を呈している。埋没時期は14世紀代

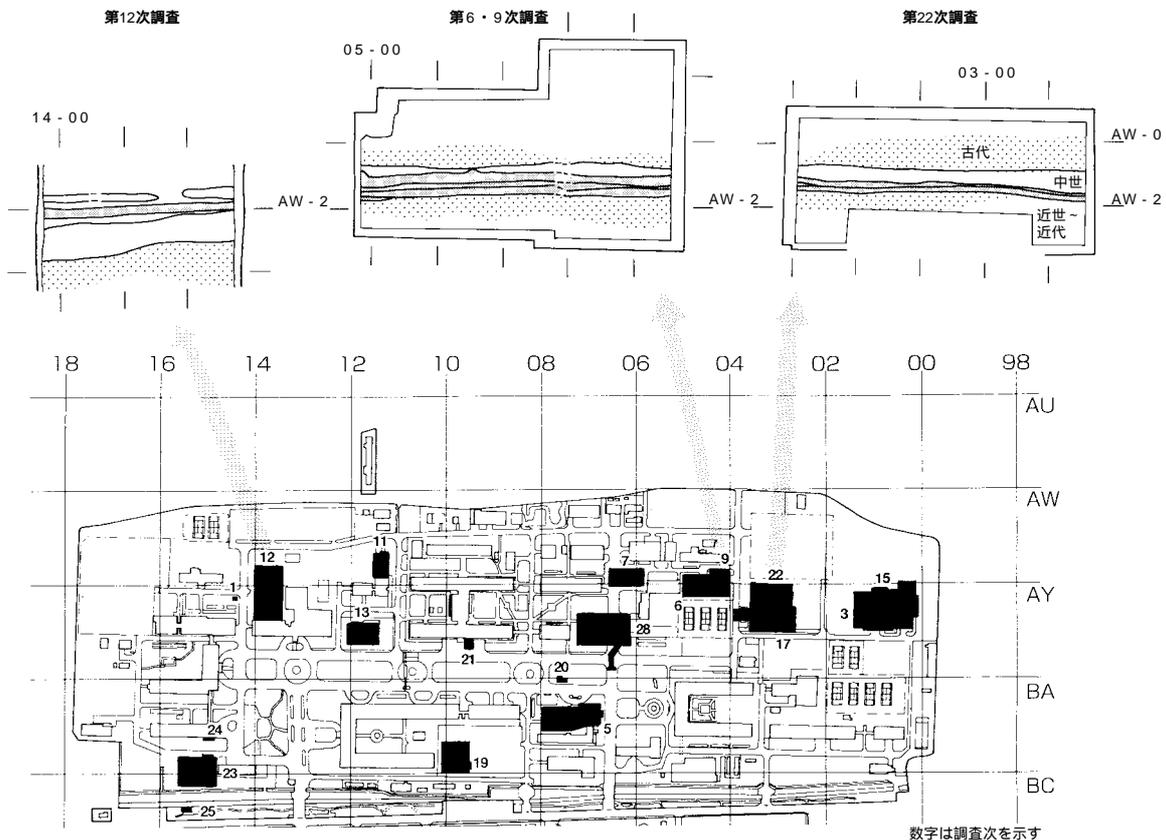


図229 第6・9・12・22次調査地点東西溝 (縮尺 1/1,200・1/8,000)

と考えられる。これを中世溝(古)と称しておく。位置的には西端ではAW-1～AW-2ライン間に、東端ではAW-2～AW-4ライン間を走行する。走行位置も古代溝と同様、東側に行くに連れ南に振れるようになる。

この中世溝(古)とは別に、第12次調査地点溝33、第22次調査地点溝24は、後述する近世溝と重複するものであり、溝の形状も近世溝と類似する。幅は狭く、断面形状は逆台形に近いもので、幅1.5～2m、深さ0.25～0.3mを測る。この溝を中世溝(新)と称しておく。中世溝(新)は、近世溝によって破壊されている部分が多く時期決定が難しいが、中世後半と考えている。中世溝(新)が掘削された時点では、中世溝(古)は埋没していたと思われる。位置的にはほぼAW-2ライン上を走行している。

c. 近世溝：第3次調査溝12・14、第22次調査溝26、第6次調査溝20・21、第9次調査溝31・33、第12次調査溝34

幅1.0～1.5m、深さ0.3m前後を測る。断面の形状は逆台形に近い。地点によって掘り返しの回数に若干差異が見られるようであるが、出土遺物の主体をなすのは17～18世紀代の陶磁器類である点は同様である。近代においても継続して使用される溝である。位置としては中世溝(新)以降、ほぼ同位置であり、AW-2ライン上を走行している。

d. 近代溝：第3次調査溝21・22、第22次調査溝27、第6次調査溝23、第9次調査溝34、第12次調査溝35

近世溝とほぼ同等の規格である。近世溝から継続して使用され続け、最終的には陸軍による造成土によって埋没している。埋没したのは1907～1908(明治40～41)年である。

(2) 中世から近世へ

まず注目したいのは、中世段階の溝の形態変化である。古代溝及び中世溝(古)段階のもの、中世溝(新)段階以降のものとは、溝の形態に大きな差異が認められる。また位置が変わっている点も見逃せない。図230に示したように古代溝とそれに重複して作られた中世溝は、規模の大小はあるが、規格としては幅広く緩やかな丸底をなす断面形状と言う点で類似する。ちょうどこの地点は古代以前にも弥生時代前期の河道、あるいは弥生時代後期の大溝が走行する位置にもあたるが、上述したような形状の特徴は、それらの河道や溝とも近似している。いわば自然形状を活かした溝と言える。走行方向が、東に行くに連れ若干南へと振れる点も、自然地形に沿ったものである。

時期をみてみると、中世溝(新)が掘削された時には、中世溝(古)は埋没しており、その埋没時期は14世紀代に求められる。それでは中世溝(新)の時期はどうかというと、近世溝と重複しており、近世溝によって破壊されている部分が多いため、時期決定が困難であるが、ほぼ中世後半期と考えている。

ここでは、この変化の起こった時期が中世後半であることに注意したい。津島岡大遺跡の北半部分は弥生時代以降、耕地として利用され続ける。津島岡大遺跡の各調査地点で、具体的には中世以前の土層を大きく削平するといった状況から地下げが行われたことが窺え、中世後半期には大規模な耕地の造成が行われていたことが想定されている⁶⁾。中世溝(古)から(新)へと変容する点を踏まえると、この造成は用水路の敷設替えも含んだ、やはり大規模なものであったことが推定される。

古代～中世における津島岡大遺跡の北半は耕地であり、確認されている遺構は溝と畦畔が大半を占める。ごく僅かに機能・用途不明のピットが検出されているところもあるが、居住域を示すような遺構は見つかっていない。周辺に目を向けると、北側に位置する半田山の西側山頂部に、平安時代後半～戦国時代前半と位置づけられている半田山山城の存在が知られている⁷⁾。この時期の集落は岡山大学キャンパス内には現在のところ見られず、キャンパスの北側から半田山山麓にかけての一带に位置するものと想定される。

一方、中世溝(新)以降、近代に至るまでは、ほぼ同規格の溝が使用される。断面の形状は逆台形を呈し、それまでに比べると幅狭であると言う点で上述した溝の形状とは異なる、より人為的な形状を呈した溝といえる。方向も中世以前のもののように南に振れることはなく、ほぼ東西方向に走行している。

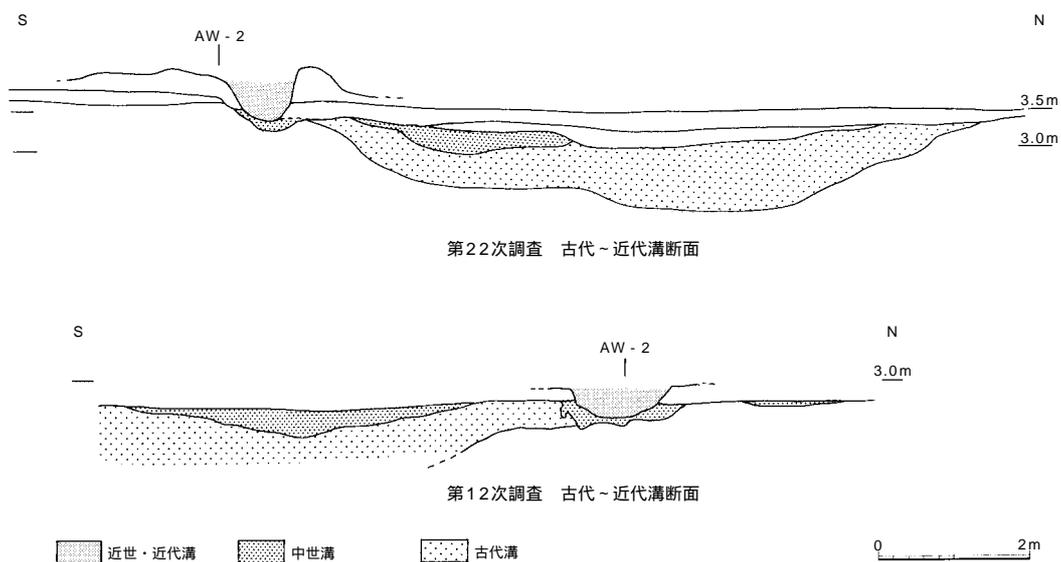


図230 第12・22次調査地点の古代～近代溝(縮尺 1/100)

次に近世溝の時期について概観してみよう。近世溝の出土品では、今回報告の第22次調査地点溝26出土の中国青花碗が最も古い時期のものであり、溝の使用開始時期を示している可能性が高い。その時期は、16世紀中葉～後半の時期に比定される。その他、どの調査地点においても若干の量の多寡はあるものの、近世溝については17世紀～18世紀にかけての遺物が主体を占めているが、その後も1908年に埋没するまで、ほぼ継続的に使用されていると見られる。

ちなみに出土した陶磁器類の内容をみると圧倒的に日用雑器が中心であり、一般的な農村集落が付近にあることを示している。いまのところ、発掘調査では耕作関連遺構（溝・土坑・畝等）が確認されているのみで、集落の位置は不明である。古地図中でみても、現在の岡山大学構内はすべて耕地と記録されている。集落は構内より北側にあたる半田山南側の山裾、現在の津島福居一帯に認められ、近世集落もこの一帯に推定されよう。

（3）東西溝と「福輪寺縄手」

以上、東西溝の形状と時期について見てきたが、次に東西溝の歴史的な位置づけについてまとめてみよう。

文献上で知りうる津島付近の中世の状況については土井氏がまとめている⁸⁾。津島付近の状況を示したものとしては『源平盛衰記』・『平家物語』に見られる「福輪寺（福隆寺ともいう）縄手」の記述がある。「福輪寺縄手」は、備前国府の中央を横切る直線道から続いている道と考えられている。文献上では「福輪寺縄手」の記載は、時期区分でいうと古代末～中世前半にあたる1183～1339年頃まで認められるようである⁹⁾。とすると、これまでに述べてきた古代溝と中世溝（古）の付近が、この福輪寺縄手に相当するものと考えられる。

岡山大学構内の東西溝が、「福輪寺縄手」と関係する可能性を具体的に示唆したのは高重氏である¹⁰⁾。第6次調査地点の古代溝に伴う畦畔が、第16坪と第21坪の境、すなわち1里を南北に2等分するライン上にあたるものと比定している。

福輪寺縄手の形状に関する記載としては「長さ二十余町、幅「弓杖一たけばかり」とあり、これから長さ2,198m、幅2.5m程と導き出される。また「左右は深田にて、馬の足をもよばねば、三千騎が心はさきにすすめども馬次第にぞあゆませける。」とあり、周囲には水田がひろがり、かつ湿田・沼田と示される湿地状に近かったことが窺える。幅の問題では、既調査地点のうち道の幅を確定もしくは推定出来る箇所は実は少ない。古代溝については、道と推定される箇所は、畦畔の認められない空白箇所にあたる。第17・22次調査地点では古代溝の南側約3m程、第9次調査地点の溝の北側約3m程が相当する。また第17次調査地点の溝の南で検出された「蹄痕」から、文献に記されたような湿地の状況が窺え、以上の2つの点は文献記載と合致している。

中世溝（古）についてはさらに情報が少なく、また近世溝等による重複・破壊により道幅は不明である。

条里制施行の際に、東西の基準線とされた福輪寺縄手のラインは時代が変わっても生き続けており、古代の条里を反映した地割りは中世後半の大造成を経ても、若干位置を変えて踏襲された。陸軍による造成以前の小字名と対照させると、中世溝（新）～近代溝の位置と、小字名の境界線とが見事に一致することがわかる。東西溝に関しては、溝の北側に、東より「久保」・「山之端」・「高橋」・「小橋・土井之下」の小字名が並び、南側には「八反田」・「九反田」・「法界田」・「法目黒」・「横田」との小字名が並び、

これらの小字の境界にあたる東西溝は、津島岡大遺跡内では、もう一箇所別の溝が確認されている。第26次調査地点の近世溝（SD11）である。この溝は構内座標BC-7ライン上を東西方向に走行する。前出の東西溝の325m南、ほぼ三町南に位置している¹¹⁾。同様に南北方向の遺構とも照合してみると、第26・27次調査地点の中世段階の南北方向畦畔は、この小字境に合致するものである¹²⁾。

小結

最後に周辺遺跡で確認されている条里の溝について触れておきたい。条里に関連するとみられる遺構の類例と

しては、近隣では、津島キャンパスの南方に広がる津島遺跡、北方下沼遺跡・北方横田遺跡・北方中溝遺跡・北方地藏遺跡といった隣接する遺跡群がある¹³。これらの遺跡では、古代～近世にかけての東西方向の溝が確認されている。

特に古代については、津島遺跡陸上競技場1区・溝42やこれに継続すると見られる北方遺跡群の大溝（中溝遺跡溝35・36ほか）が、津島郷と伊福郷の郷境の溝と想定されている。この郷境の溝は規模・時期をみても津島岡大遺跡の「東西溝」と近似点が多いと言える。この溝と、津島岡大遺跡の「東西溝」との距離はおよそ9町である¹⁴。

近世では津島遺跡でトレンチ調査であるものの、南北方向の溝を検出している¹⁵。この溝は「南北道路」に継続するものとみられ、津島郷・弘西郷との郷境の溝と考えられている。岡山大学構内でも既に見てきたように、近世の地割りについては、古代の糸里を反映したものとみられる区画が踏襲されていたことが、より範囲を拡大しても確認できる。

本稿では「東西溝」を中心に、糸里の境界となる溝についていくつかの視点から検討した。その結果、古代～中世前半までの「東西溝」は、文献記載にある「福輪寺縄手」である可能性が高いこと、中世後半以降の土地区画は古代の糸里区画に基づいて整備されており、岡山大学構内では東西方向、南北方向それぞれ複数の遺構でその区画が認められること、中世後半期に溝の位置・規格に変容が認められ、その画期は、大規模な造成期と一致することを確認した。このうち特に について補足すると、「東西溝」のラインは山陽道の一部をなし、糸里施行の際の基準線となっている。その他の地点では、古代のみ、あるいは近世のみといったように認められる遺構が、「東西溝」の位置では古代から近代までほぼ踏襲されているということは、このラインが重要な意味をもつことの傍証となるものとする。

以上、本稿では糸里の東西ラインを中心にこれまでの見解をまとめ、具体的な遺構の検討を加えた。今回は多く触れられなかった南北方向の遺構についても、区画単位の長さの再検討も含めてより広域的に検討していく必要がある。

註

- (1) 第3次：『津島岡大遺跡3（岡山大学構内遺跡発掘調査報告第5冊）』
第6・7次：『津島岡大遺跡6（岡山大学構内遺跡発掘調査報告第9冊）』
第9次：『津島岡大遺跡10（岡山大学構内遺跡発掘調査報告第14冊）』
第12次：『津島岡大遺跡11（岡山大学構内遺跡発掘調査報告第17冊）』
その他に第1次調査で上述の古代溝の継続部分が確認されている。
『岡山大学津島北地区小橋法目黒遺跡の調査』（岡山大学構内遺跡発掘調査報告第1冊）
- (2) 高重進 1989「第二章第五節 糸里制」『岡山県史 古代』
糸里制については、この文献の他、後述の文献を参考とした。
- (3) 高重進 1974「鹿田庄の故地について」『谷口澄夫先生古稀記念論文集』
- (4) 野崎貴博 2002「津島岡大遺跡における近世の糸里遺構について」『津島岡大遺跡12（岡山大学構内遺跡発掘調査報告第17冊）』
- (5) 土井基司 1990「半田山城測量後記」『岡山大学埋蔵文化財調査研究年報7 1989年度』
- (6) 山本悦世ほか 2003『津島岡大遺跡11（岡山大学構内遺跡発掘調査報告第16冊）』
- (7) 出宮徳尚「岡山県 半田山城」『日本城郭大系』第13巻
- (8) 前掲註5文献
高重進 1991「平安・鎌倉時代と岡大キャンパス」『岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報』第5号・第6号
- (9) 最初に見られる記載が、妹尾兼安の没年にあたること、また福輪寺（福隆寺）は暦応2年に妙善寺に改称されたとの記載に基づいた。
- (10) 高重進 1989「第二節第四章 山陽道」『岡山県史 古代』
- (11) ここでは、方一町区画の長さを108mとして考えた。前掲註4文献で区画長109mの根拠としていた第27次調査の中世畦畔の位置については、その後西へ5mのズレがあったことが判明しており、修正している。
- (12) 中世の畦畔は4～7層の各面で確認された。時期は、5b層の遺構が16世紀後半と比定されているのみで、他では出土遺物は見られない。中世後半期の範疇でとらえておきたい。
- (13) 島崎東ほか 2003『津島遺跡4』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告174
松本和男ほか 2004『津島遺跡5』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告181
- (14) 岡田博ほか 1998『北方下沼遺跡 北方横田遺跡 北方中溝遺跡 北方地藏遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告126
- (15) 現在確実に認められる古代の遺構から9町という単位がうかがえ、今後範囲をひろげて検討していくとともに、類例なども併せて考える必要がある。

考 察

- (15) 陸上競技場確認調査のうち、T47・T65で継続する南北方向の溝が確認されている。

参考文献

- 『岡山市史』古代編 1962
『岡山県史』第三巻 1989
『岡山県史』第十九巻編年史料 1988

第5章 自然科学的分析

1. 津島岡大遺跡第22次調査出土木材の樹種

能 城 修 一 (森林総合研究所木材特性研究領域)

津島岡大遺跡第22次調査で出土した55点の樹種を報告する。内訳は、弥生時代の谷1と溝から出土した木材3点と、古墳時代の溝20の木材3点、平安時代後期の溝から出土した木材47点、中世から近世の溝から出土した木材2点である。55点中には11分類群が認められた。ここでは、出土した樹種の木材解剖学的な記載を行い、代表的な試料の顕微鏡写真を示して同定の根拠を明らかにする。樹種同定用のプレパラート標本は、木材から横断面、接線断面、放射断面の切片をカミソリで切りとり、ガムクロラル（抱水クロラル50g、アラビアゴム粉末40g、グリセリン20ml、蒸留水50mlの混合物）で封入して作製した。プレパラートには、OKUF - 815からOKUF - 870の番号をふして標本番号とした。プレパラート標本は森林総合研究所に保管されている。

1. モミ属 *Abies* マツ科 図1: 1a 1c (OKUF - 820)

普通は垂直・水平のいずれの樹脂道も持たない針葉樹材。早材から晩材への移行は緩やかで、晩材はやや量多く明瞭。樹脂細胞はふつう見られない。放射組織は柔細胞のみからなり、分野壁孔はごく小型のトウヒ型で1分野に普通2～4個、放射柔細胞の垂直壁には単壁孔が著しく結節状を呈する。

2. ツガ属 *Tsuga* マツ科 図1: 2a 2c (OKUF - 821)

普通は垂直・水平のいずれの樹脂道も持たない針葉樹材。早材から晩材への移行はやや急で、晩材は量多く明瞭。樹脂細胞はふつう見られない。放射組織は柔細胞と上下端に位置する放射仮道管からなり、ごく小型のトウヒ型で1分野に普通2～4個、放射柔細胞の垂直壁には単壁孔が著しく結節状を呈し、放射仮道管には有縁壁孔対が見られる。

3. アカマツ *Pinus densiflora* Sieb. et Zucc. マツ科 図2: 3a 3c (OKUF - 817)

垂直・水平樹脂道をもつ針葉樹材。早材から晩材への移行は緩やかで、晩材は量多く明瞭。樹脂道の分泌細胞はほとんど残っていない。放射組織は柔細胞と上下端に位置する放射仮道管からなり、分野壁孔は窓状、放射仮道管の水平壁は鋸歯状。保存状態が良好な試料では、鋸歯の突起は著しく、一部が重鋸歯となり、ときに上下の突起が接するほどであるため、アカマツと同定した。保存状態が悪く、鋸歯の状態が明瞭に観察できないものはマツ属複維管束亜属とした。

4. ヒノキ *Chamaecyparis obtusa* (Sieb. et Zucc.) Endl. ヒノキ科 図2: 4a 4c (OKUF - 818)

垂直・水平のいずれの樹脂道も持たない針葉樹材。早材から晩材への移行は緩やかで、晩材は量少ない。早材の終わりに樹脂細胞が散在し、樹脂細胞には黒色の樹脂が詰まっている。放射組織は柔細胞のみからなり、分野壁孔は中型のトウヒ型で孔口は垂直にちかく開き、1分野に普通2個。

5. スギ *Cryptomeria japonica* (L. f.) D. Don スギ科 図3: 5a 5c (OKUF - 849)

垂直・水平のいずれの樹脂道も持たない針葉樹材。早材の仮道管は薄壁で径が大きく、早材から晩材への移行は緩やかで、晩材はやや量多く明瞭。早材の終わりに樹脂細胞が散在し、樹脂細胞には黒色の樹脂が詰まっている。放射組織は柔細胞のみからなり、分野壁孔は大型のスギ型で孔口は水平に開き、1分野に普通2個。

6. コナラ属クヌギ節 *Quercus* sect. *Aegilops* ブナ科 図3: 6a 6c (OKUF - 832)

早材のはじめには径200 μ mほどの大型で丸い単独管孔が緩く1～2列に配列し、晩材では小型で厚壁の丸い単独管孔が緩やかに放射状～火炎状に配列する環孔材。道管の穿孔は単一。木部柔細胞は晩材でいびつな接線状。放射組織は同性で、小型で単列のものと、幅200 μ mを越え高さが1mm以上となる大型のものとなる。

道管と放射柔細胞との壁孔は単壁孔状で柵状を呈する。

7. コナラ属アカガシ亜属 *Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis* ブナ科 図4: 7a 7c (OKUF - 831)

径100 μ mほどの中型で丸い厚壁の単独管孔が放射方向～緩い火炎状に配列する放射孔材。道管の穿孔は単一。木部柔細胞はいびつな接線状。放射組織は同性で、小型で単列のものと、幅100 μ mを越え高さが1mm以上となる大型のものとなる。大型の放射組織にはときに結晶細胞が認められる。道管と放射柔細胞との壁孔は単壁孔状で柵状を呈する。

8. ケヤキ *Zelkova serrata* (Thunb.) Makino ニレ科 図4: 8a 8c (OKUF - 857)

早材のはじめには径200 μ mほどの大型の管孔が1列に配列し、晩材では小型で薄壁の管孔が集合して斜め～接線方向につらなる塊をなす環孔材。道管の穿孔は単一。放射組織は異性で数細胞幅、上下端にしばしば大型の結晶細胞が認められる。

9. サカキ *Cleyera japonica* Thunb. ツバキ科 図5: 9a 9c (OKUF - 844)

径30 μ mほどの角張った管孔がほぼ単独で密に均一に散在する散孔材。道管の穿孔は30～40本ほどの横棒からなる階段状。放射組織は単列異性。

10. ウツギ属 *Deutzia* コキノシタ科 図5: 10a 10c (OKUF - 839)

径20 - 30 μ mほどの角張った単独管孔がやや疎らに均一に散在する散孔材。道管の穿孔は数十本ほどの横棒からなる階段状。放射組織は異性で4細胞幅くらい、高さは1mmを越え、しばしば鞘細胞をもつ。

11. カキノキ属 *Diospyros* カキノキ科 図6: 11a 11c (OKUF - 838)

径100 - 150 μ mほどの丸い厚壁の管孔が単独あるいは放射方向に2～3個複合して、疎らに散在する散孔材。木部柔細胞はいびつな接線状で著しい。道管の穿孔は単一。放射組織は異性で2～3細胞幅、層階状に配列する。道管と放射組織との壁孔はごく小型の対列状～交互状。

点数がまとまっている平安時代後期をみると、杭とそれ以外の木材とでは樹種の使用傾向が異なっており、杭にはモミ属と二葉松類、カシ類が多く、その他のものにはヒノキとスギが多い(表1)。これは杭には丸木をそのまま用いたものが多く、その他のものには板にして用いたものが多いためではないかと想定される。これまでの調査によると津島地区および鹿田地区の平安時代の杭材には、二葉松類とクヌギ節、モミ属の丸木や、アカガシ亜属の割材と丸木が多用されており、スギとヒノキは井戸枠や曲物、箆に利用されている(能城、1992、1993)。今回の木材の利用も同様な選択傾向を示している。

文献

- 能城修一 1992 岡山大学津島地区から出土した木材化石の樹種「津島岡大遺跡3 3次調査」、169 - 187. 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
- 能城修一 1993 岡山大学鹿田地区から出土した木製品の樹種「鹿田遺跡3」、119 - 146. 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター

表1 津島岡大遺跡第22次調査で出土した木材の樹種

樹種名	弥生前期 杭	弥生後期 杭	古墳 杭	平安後期						中～近世 杭	近代 板材
				曲物	下駄	札	板材	杭	その他		
モミ属	1					1	1	3	1		
ツガ属						1	1	1			
アカマツ			1				1	1	1	1	
マツ属複維管束亜属			2					2			1
ヒノキ	1			1	1		5		4		
スギ				1	1	1	5		2		
コナラ属クヌギ節								1			
コナラ属アカガシ亜属		1						4	1		
ケヤキ									1		
サカキ								1			
ウツギ属									1		
カキノキ属									1		
総計	2	1	3	2	2	3	13	13	12	1	1

表2 樹種一覧

標本	No.	図番号	樹種名	製品名	遺構	時代	本文中掲載番号
OKUF - 869			モミ属	杭	谷1	弥生前期	
OKUF - 870			ヒノキ	杭			
OKUF - 868			コナラ属アカガシ亜属	杭	溝10	弥生後期	
OKUF - 865			アカマツ	杭			
OKUF - 866			マツ属複維管束亜属	杭	溝20	古墳	
OKUF - 867			マツ属複維管束亜属	杭			
OKUF - 818		図2: 4a - 4c	ヒノキ	曲物	溝21	平安後期	
OKUF - 819			モミ属	杭			W18
OKUF - 820		図1: 1a - 1c	モミ属	杭			W19
OKUF - 821		図1: 2a - 2c	ツガ属	杭			W20
OKUF - 822			マツ属複維管束亜属	杭			W27
OKUF - 823			モミ属	杭			W32
OKUF - 824			マツ属複維管束亜属	杭			W23
OKUF - 825			スギ	棒状			
OKUF - 827			ヒノキ	桶底?			
OKUF - 828			ヒノキ	板材			
OKUF - 829			アカマツ	厚い板材			
OKUF - 830			ヒノキ	加工板			W13
OKUF - 831		図4: 7a - 7c	コナラ属アカガシ亜属	杭			W21
OKUF - 832		図3: 6a - 6c	コナラ属クヌギ節	杭			
OKUF - 833			アカマツ	杭			W17
OKUF - 834			コナラ属アカガシ亜属	杭			
OKUF - 835			コナラ属アカガシ亜属	木製品			
OKUF - 836			スギ	板材			W33
OKUF - 837			モミ属	札			
OKUF - 838		図6: 11a - 11c	カキノキ属	加工木			W8
OKUF - 839		図5: 10a - 10c	ウツギ属	ソケット状			
OKUF - 840			スギ	板材			
OKUF - 841			ヒノキ	杓子柄?			
OKUF - 842			ヒノキ	板材			
OKUF - 843			コナラ属アカガシ亜属	杭			W22
OKUF - 844		図5: 9a - 9c	サカキ	杭			W24
OKUF - 845			アカマツ	木製品			
OKUF - 846			ヒノキ	加工木			W9
OKUF - 847			ヒノキ	柄			W7
OKUF - 848			スギ	板材			
OKUF - 849		図3: 5a - 5c	スギ	方形スティック			
OKUF - 850			スギ	札			
OKUF - 851			コナラ属アカガシ亜属	杭			W28
OKUF - 852			ツガ属	板材	W15		
OKUF - 853			スギ	板材	W29		
OKUF - 854			モミ属	加工木	W16		
OKUF - 855			モミ属	板材			
OKUF - 856			ヒノキ	厚い板材			
OKUF - 857		図4: 8a - 8c	ケヤキ	加工木	W6		
OKUF - 858			樹皮	加工木	W30		
OKUF - 859			スギ	下駄	W2		
OKUF - 860			スギ	曲げ物	W3		
OKUF - 861			ヒノキ	下駄	W1		
OKUF - 862			ツガ属	農具?	W12		
OKUF - 863			ヒノキ	曲げ物?			
OKUF - 864			スギ	板材			
OKUF - 817		図2: 3a - 3c	アカマツ	杭	溝25	中～近世	
OKUF - 815			マツ属複維管束亜属	板材	溝27	近代	

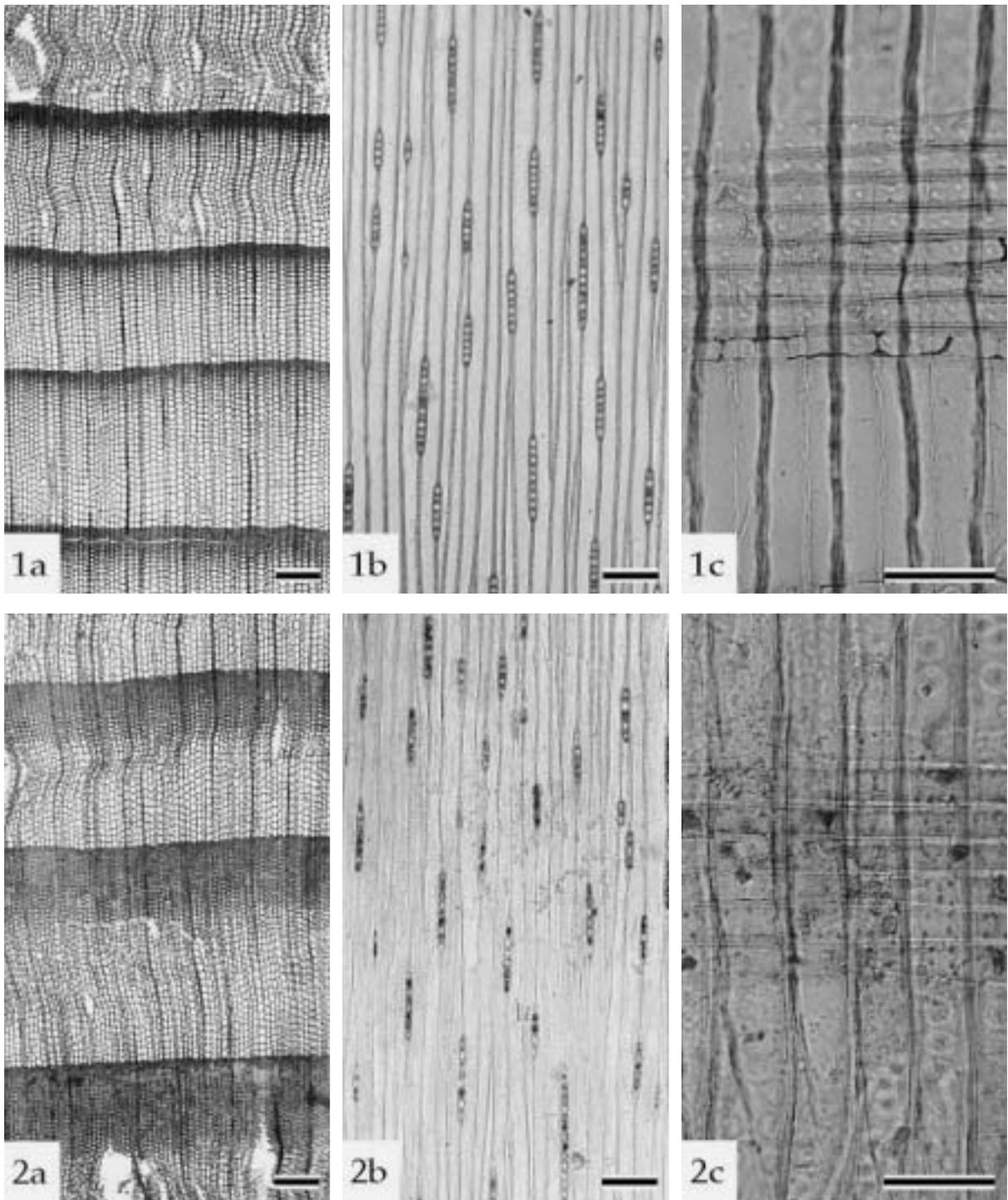


図1 . 津島岡大遺跡第22次調査出土木材の顕微鏡写真(1)

1a 1c : モミ属 (OKUF - 820), 2a 2c : ツガ属 (OKUF - 821). a : 横断面 (スケール=200µm),
 b : 接線断面, (スケール=100µm), c : 放射断面 (スケール=50µm).

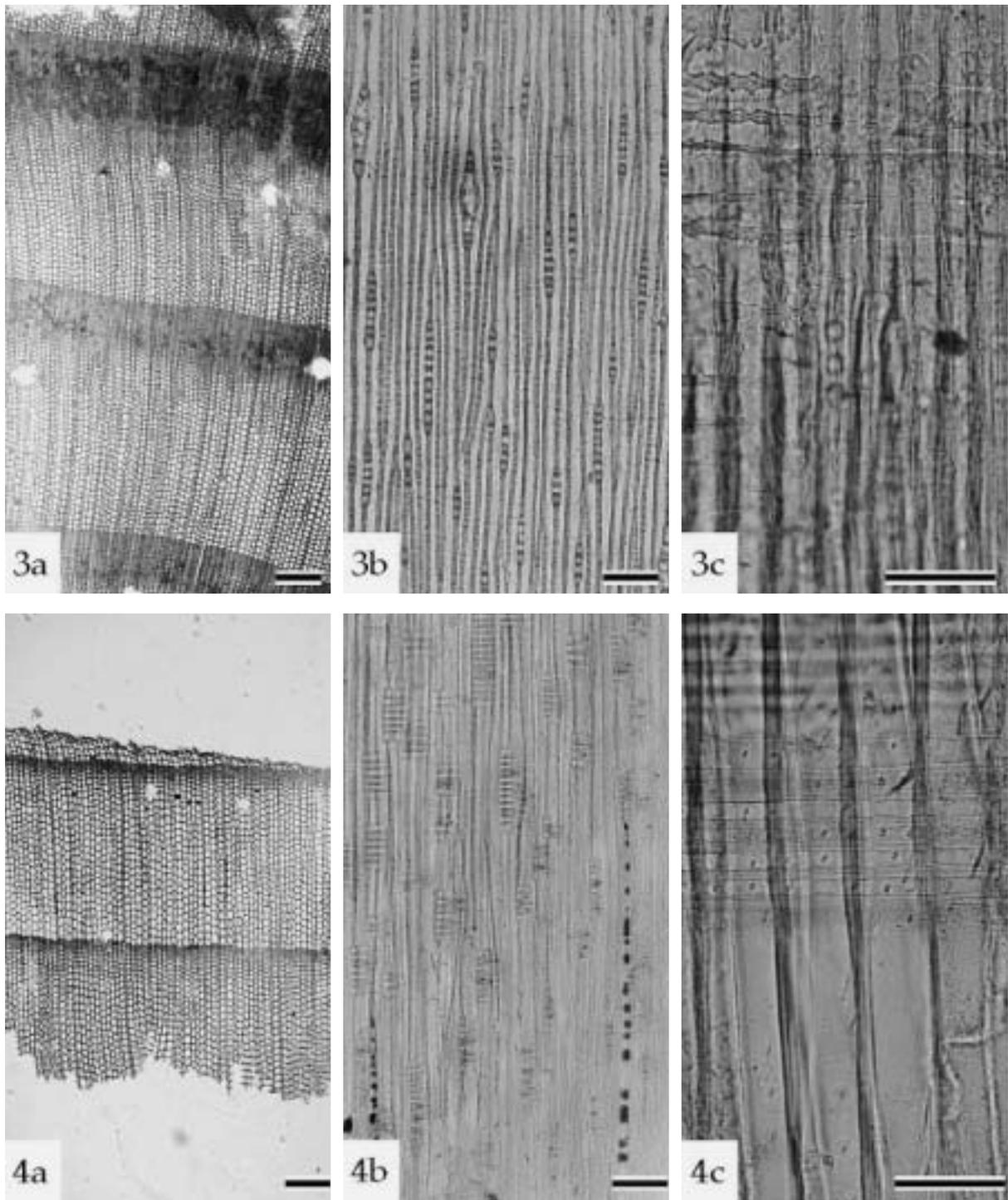


図2 . 津島岡大遺跡第22次調査出土木材の顕微鏡写真(2)

3a 3c : アカマツ(OKUF - 817), 4a 4c : ヒノキ(OKUF - 818). a : 横断面(スケール=200 μ m),
 b : 接線断面(スケール=100 μ m), c : 放射断面(スケール=50 μ m).

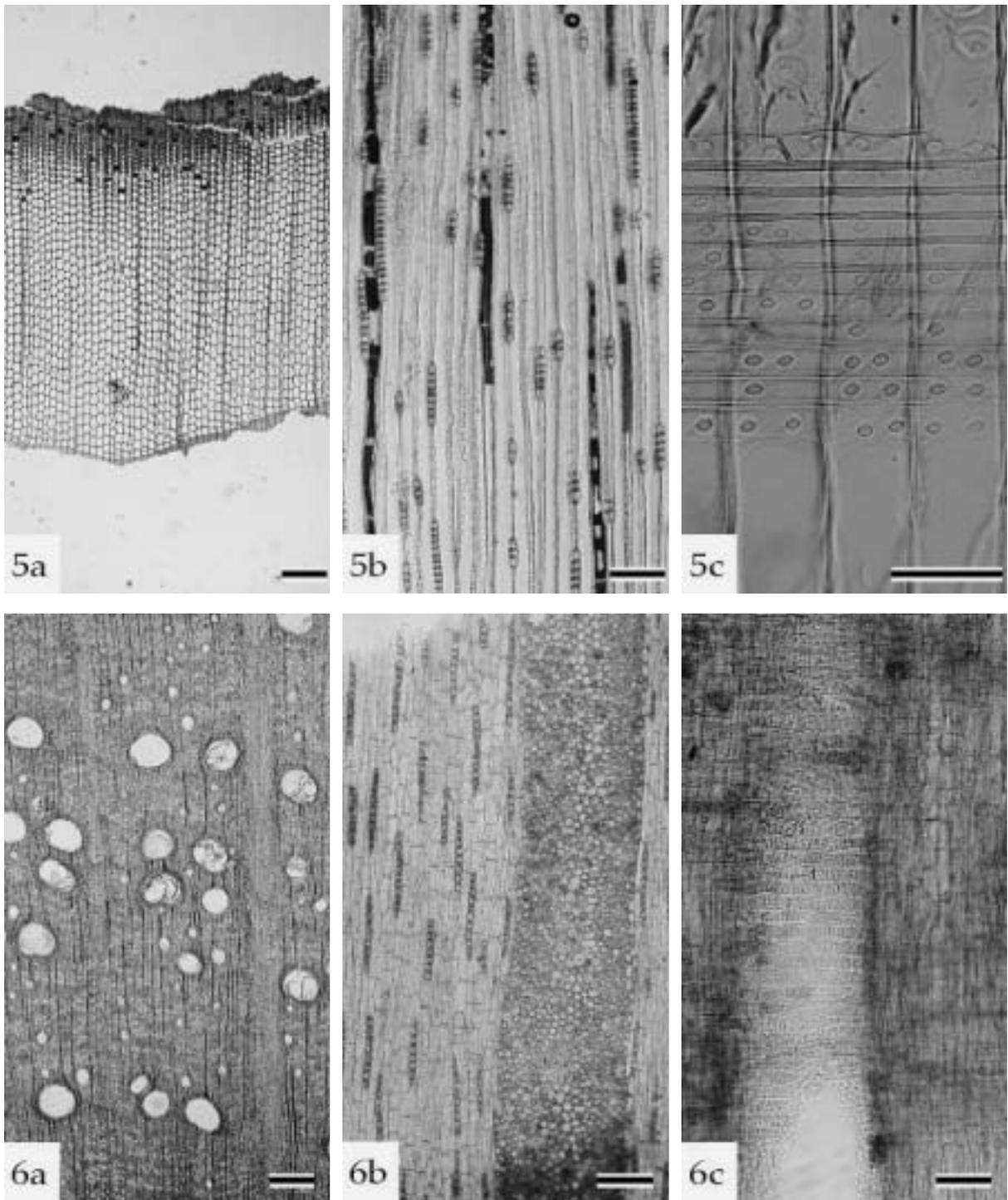


図3 . 津島岡大遺跡第22次調査出土木材の顕微鏡写真(3)

5a 5c : スギ(OKUF - 849), 6a 6c : コナラ属クヌギ節(OKUF - 832). a : 横断面(スケール=200 μ m),
 b : 接線断面(スケール=100 μ m), c : 放射断面(スケール=50 μ m).

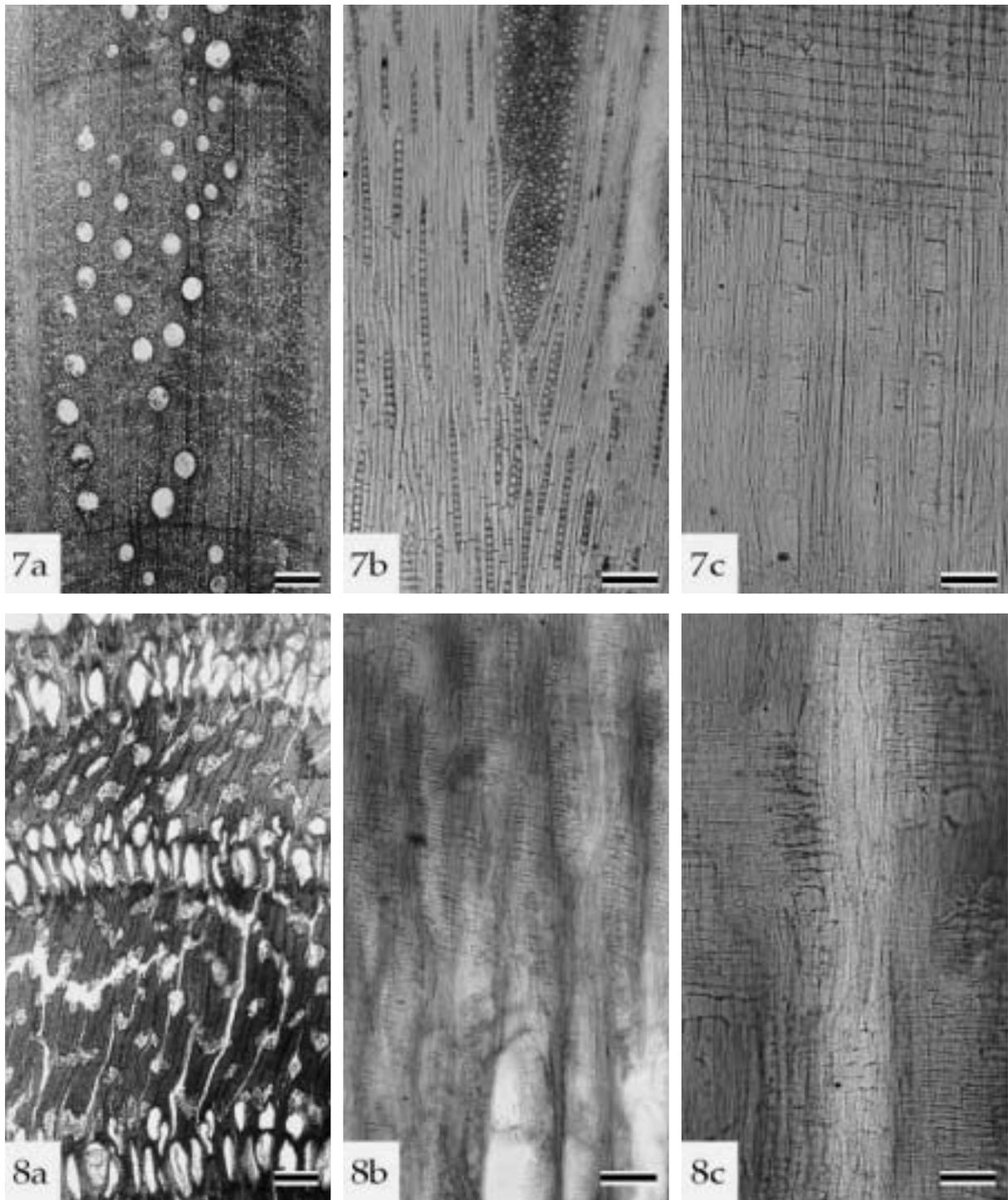


図4．津島岡大遺跡第22次調査出土木材の顕微鏡写真(4)

7a 7c：コナラ属アカガシ亜属 (OKUF - 831), 8a 8c：ケヤキ (OKUF - 857). a：横断面 (スケール=200 μ m),
b：接線断面 (スケール=100 μ m), c：放射断面 (スケール=50 μ m).

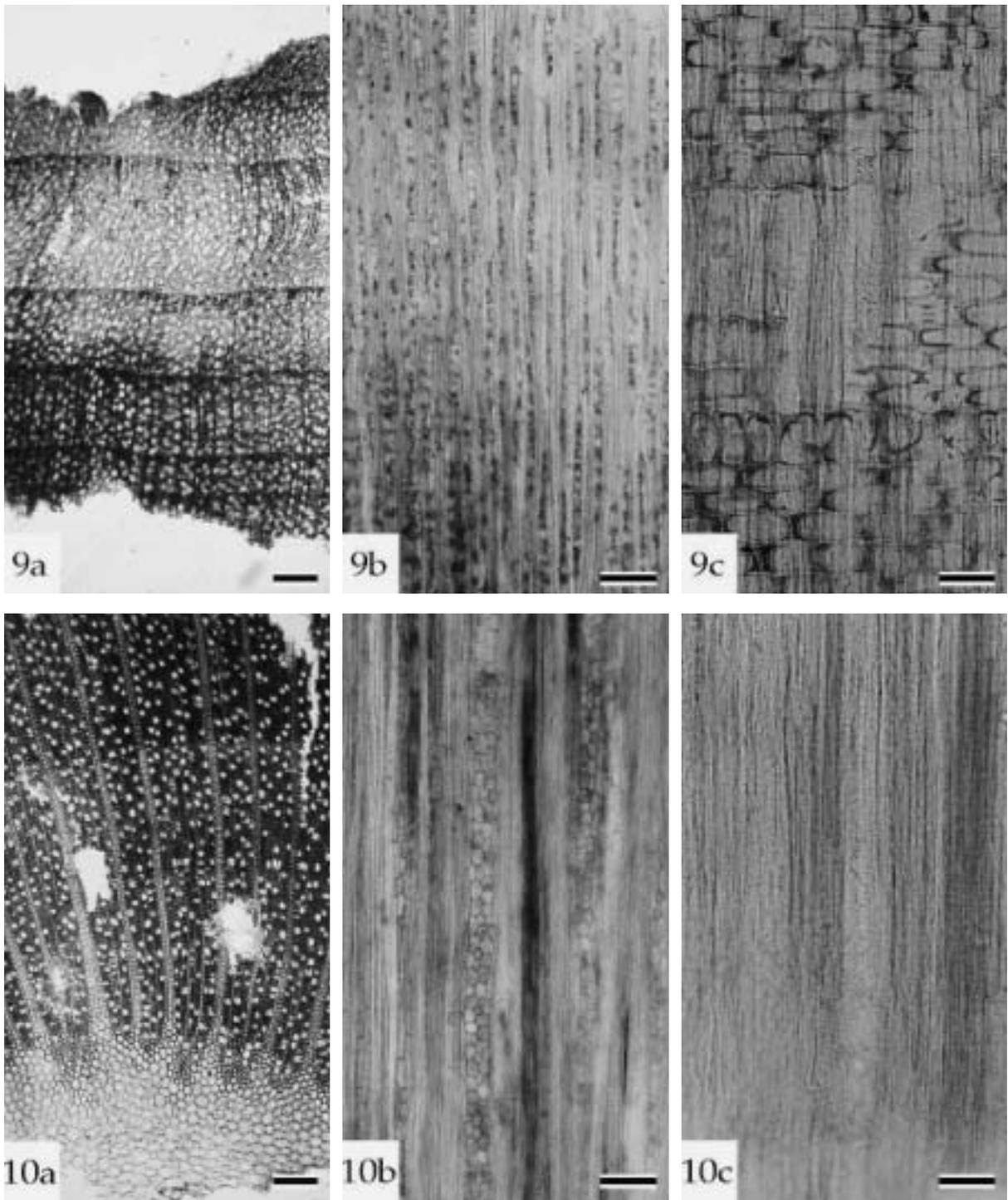


図5 . 津島岡大遺跡第22次調査出土木材の顕微鏡写真(5)

9a 9c : サカキ (OKUF - 844), 10a 10c : ウツギ属 (OKUF - 839). a : 横断面 (スケール = 200 μ m),
 b : 接線断面 (スケール = 100 μ m), c : 放射断面 (スケール = 50 μ m).

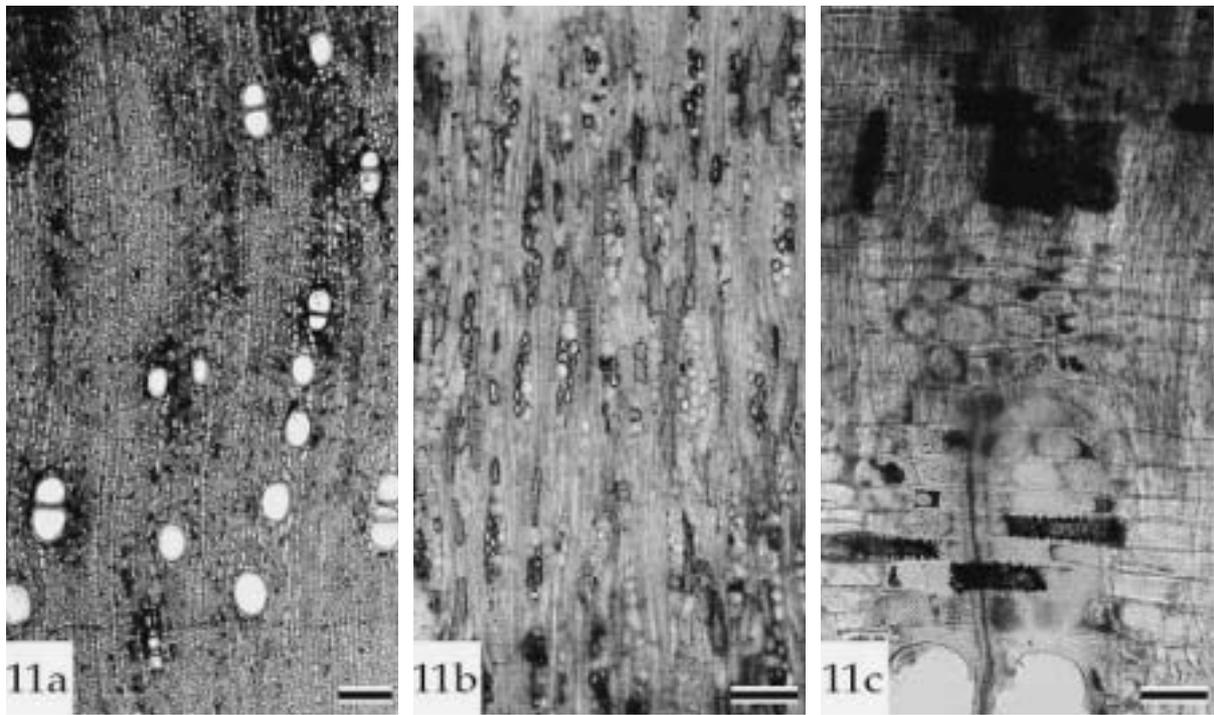


図6 . 津島岡大遺跡第22次調査出土木材の顕微鏡写真(6)

11a 11c : カキノキ属 (OKUF - 838). a : 横断面 (スケール = 200 μ m), b : 接線断面 (スケール = 100 μ m), c : 放射断面 (スケール = 50 μ m).

2. 津島岡大遺跡第17・22次調査における自然科学的分析

株式会社 古環境研究所

津島岡大遺跡第17・22次調査地点では、主に縄文時代後期～弥生時代の環境復元を目的として、植物珪酸体分析を行った(図1)。また、下記の計6点の土壌サンプルについて放射性炭素年代測定を依頼した。その目的は「黒色土」層の堆積年代とその性格の把握、縄文時代後期の遺構及び包含層の年代的位置づけ、の2点である。

第22次調査地点では、1999年7月の調査完了後に調査現場で、黒色土である13層と、縄文時代後期の包含層と考えられる15層の2地点の土壌試料採取の時点から依頼し、測定を実施した。第17次調査

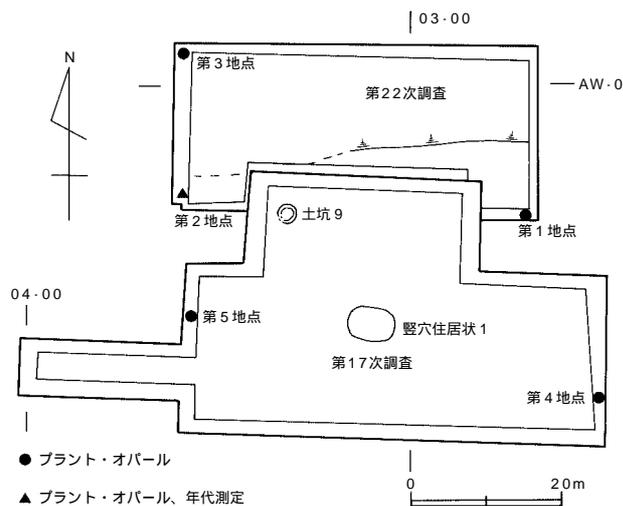


図1 試料採取地点(縮尺1/1000)

地点では、調査時に採取して保管していた試料を、2000年度に1点(竪穴住居状遺構1炉内土壌)、2004年度に3点(竪穴住居状遺構1炉内土壌1点、土坑9埋土2点)、2回に分けて分析を依頼した。以下に(株)古環境研究所による測定結果を掲載する。

(1) 植物珪酸体(プラント・オパール)分析(図2～4 表1)

1. はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内にガラスの主成分である珪酸(SiO_2)が蓄積したものであり、植物が枯れたあとでも微化石(プラント・オパール)となって土壌中に半永久的に残っている。植物珪酸体分析は、この微化石を遺跡土壌などから検出する分析であり、イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている(杉山、1987a)。また、イネの消長を検討することで埋蔵水田跡の検証や探査も可能である(藤原・杉山、1984)。

2. 試料

分析試料は、第22次調査の第1地点、第2地点、第3地点から採取された計35点、および第17次調査第4地点、第5地点において採取された4点の計39点である。試料採取箇所を図2・3に示す。

3. 分析法

植物珪酸体の抽出と定量は、プラント・オパール定量分析法(藤原、1976)をもとに、次の手順で行った。

- 1) 試料を105℃で24時間乾燥(絶乾)
- 2) 試料約1gに直径約40 μm のガラスビーズを約0.02g添加(電子分析天秤により0.1mgの精度で秤量)
- 3) 電気炉灰化法(550℃・6時間)による脱有機物処理
- 4) 超音波水中照射(300W・42kHz・10分間)による分散
- 5) 沈底法による20 μm 以下の微粒子除去
- 6) 封入剤(オイキット)中に分散してプレパラート作成

7) 検鏡・計数

同定は、イネ科植物の機動細胞に由来する植物珪酸体をおもな対象とし、400倍の偏光顕微鏡下で行った。計数は、ガラスビーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。試料1gあたりのガラスビーズ個数に、計数された植物珪酸体とガラスビーズ個数の比率をかけて、試料1g中の植物珪酸体個数を求めた。

また、おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重と各植物の換算係数（機動細胞珪酸体1個あたりの植物体乾重、単位： 10^{-5} g）をかけて、単位面積で層厚1cmあたりの植物体生産量を算出した。イネ（赤米）の換算係数は2.94（種実重は1.03）、ヒエ属（ヒエ）は8.40、ヨシ属（ヨシ）は6.31、ススキ属（ススキ）は1.24、メダケ節は1.16、ネザサ節は0.48、クマザサ属（チシマザサ節・チマキザサ節）は0.75、ミヤコザサ節は0.30である。タケ亜科については、植物体生産量の推定値から各分類群の比率を求めた。

4. 分析結果

分析試料から検出された植物珪酸体の分類群は以下のとおりである。これらの分類群について定量を行い、その結果を表1および図2～3に示した。主要な分類群について顕微鏡写真を示す。

〔イネ科〕

イネ、ヒエ属型、キビ族型、ジュズダマ属、ヨシ属、ススキ属型（おもにススキ属）、ウシクサ族A（チガヤ属など）

〔イネ科 タケ亜科〕

メダケ節型（メダケ属メダケ節・リュウキュウチク節、ヤダケ属）、ネザサ節型（おもにメダケ属ネザサ節）、クマザサ属型（チシマザサ節やチマキザサ節など）、ミヤコザサ節型（おもにクマザサ属ミヤコザサ節）、未分類等

〔イネ科 その他〕

表皮毛起源、棒状珪酸体（おもに結合組織細胞由来）、未分類等

〔樹木〕

ブナ科（シイ属）その他

5. 考察

(1) 稲作跡の検討

水田跡（稲作跡）の検証や探査を行う場合、一般にイネの植物珪酸体（プラント・オパール）が試料1gあたり5,000個以上と高い密度で検出された場合に、そこで稲作が行われていた可能性が高いと判断している。ただし、密度が3,000個/g程度でも水田遺構が検出される事例があることから、ここでは判断の基準を3,000個/gとして検討を行った。

1) 第1地点（図2 - 表1）

10層から16層までの層準について分析を行った。その結果、10層（試料6）および11層（試料7）からイネが検出された。このうち、弥生時代とされる11層（試料7）では密度が5,600個/gと高い値であり、古墳時代とされる10層（試料6）でも2,900個/gと比較的高い値である。したがって、これらの層では稲作が行われていた可能性が高いと考えられる。

2) 第2地点（図2 - 表1）

7層から17層までの層準について分析を行った。その結果、7層（試料6）から13層上部（試料15）までの各層からイネが検出された。このうち、古代とされる9b層（試料10、11）では密度が6,500～8,500個/gと高い値であり、中世とされる7層（試料6）および古代とされる8a層（試料7）と9a層（試料9）でも2,700～4,200個/gと比較的高い値である。したがって、これらの層では稲作が行われていた可能性が高いと考えられる。

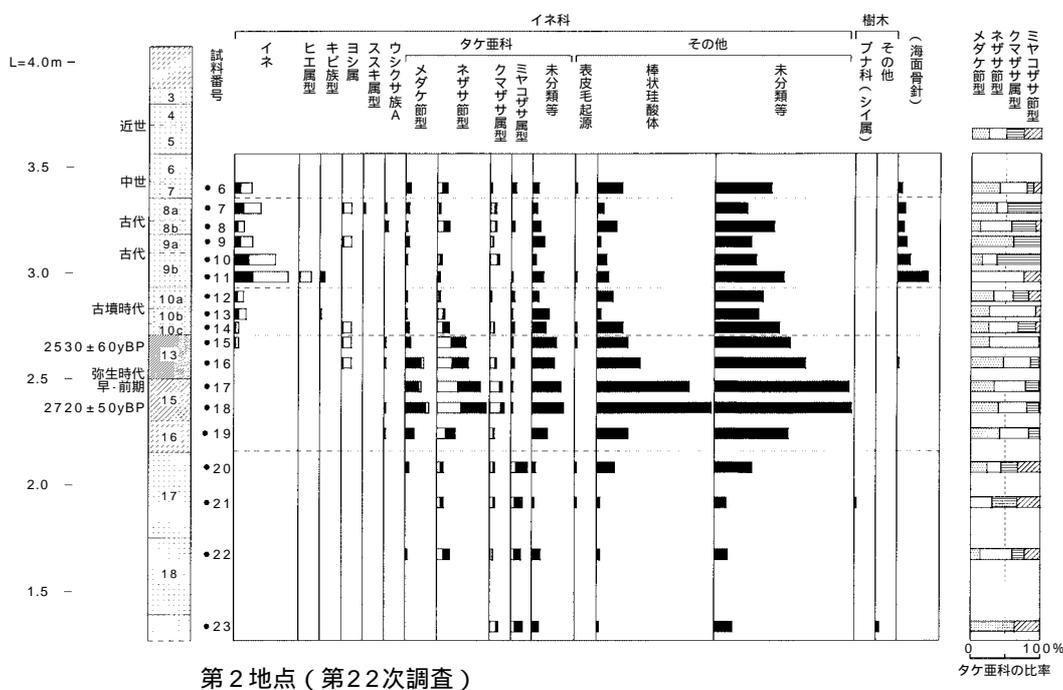
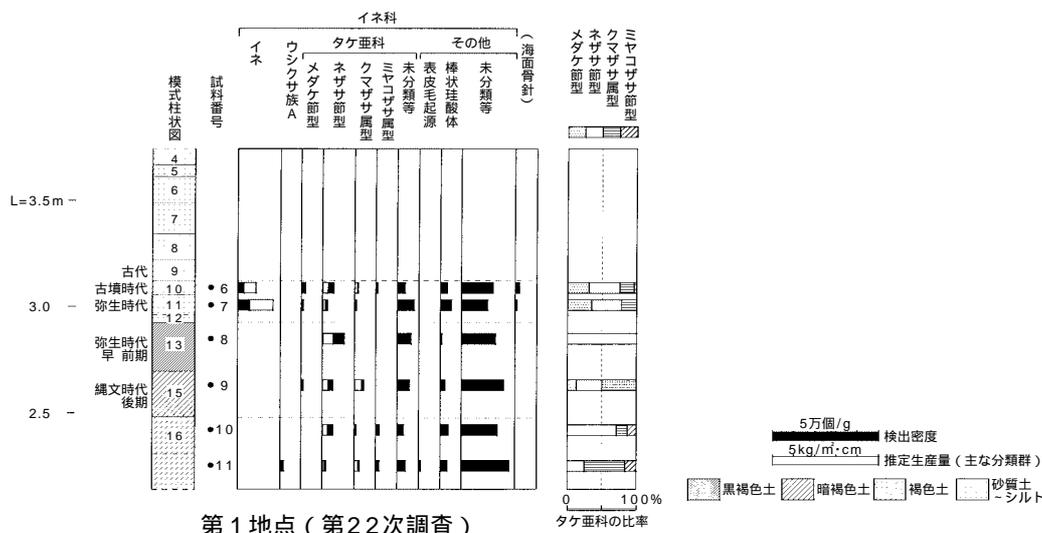


図2 第1・2地点分析結果

古墳時代とされる10a層(試料12)~10c層(試料14)では密度が700~1,800個/gと比較的低い値であり、弥生時代早期~前期とされる13層上部(試料15)でも700個/gと低い値である。イネの密度が低い原因としては、稲作が行われていた期間が短かったこと、土層の堆積速度が速かったこと、洪水などによって耕作土が流出したこと、採取地点が畦畔など耕作面以外であったこと、および上層や他所からの混入などが考えられる。弥生時代早期~前期とされる13層上部(試料15)については、土層の堆積状況などから直上の10層(古墳時代)からの混入の可能性が高いと考えられる。

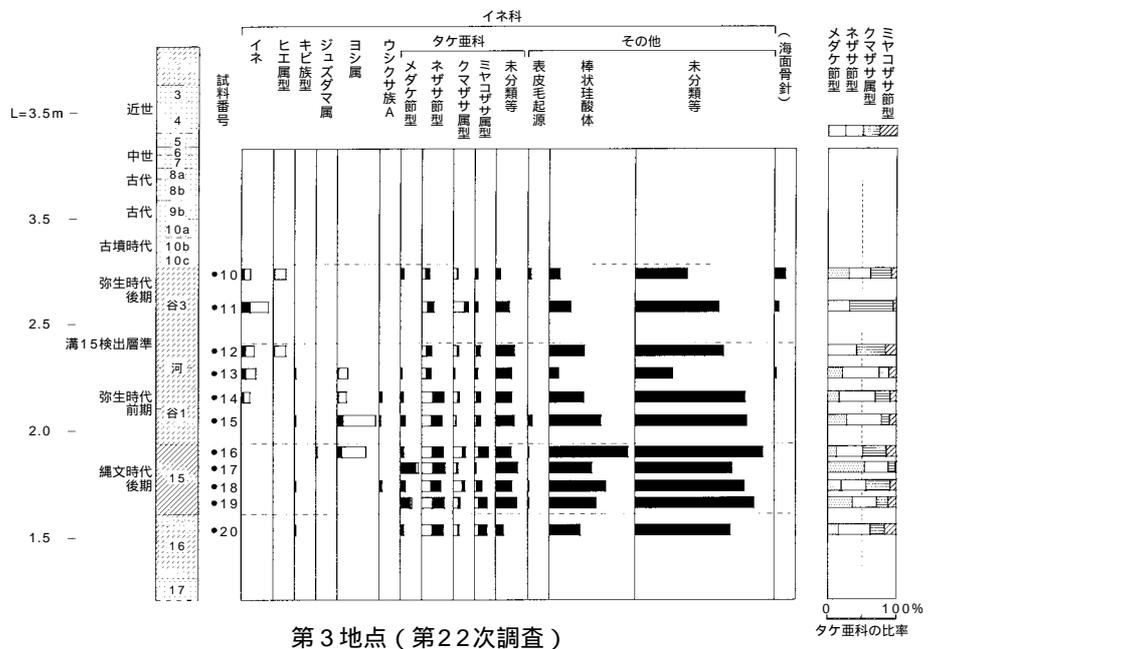
3) 第3地点 (図3- 表1)

谷1層から16層までの層準について分析を行った。その結果、谷1層(試料10)から谷3層上部(試料14)までの各層からイネが検出された。このうち、弥生時代中期とされる谷3層(試料11)では密度が4,300個/gと比較的高い値である。したがって、同層では稲作が行われていた可能性が高いと考えられる。

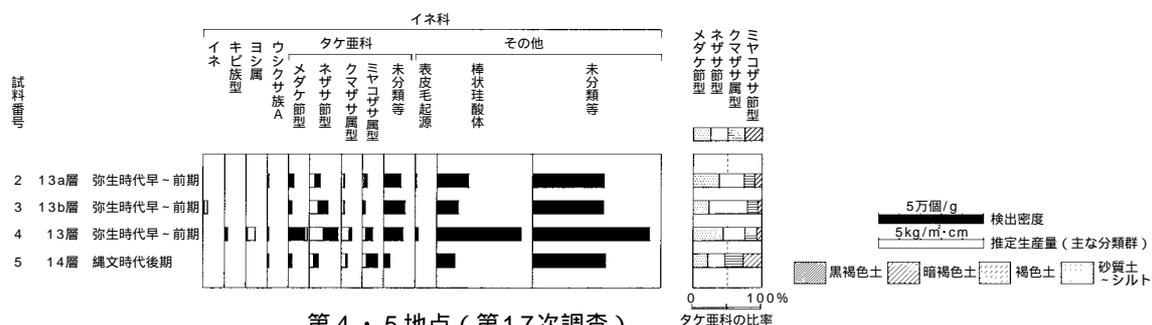
河道層(試料12、13)および弥生時代前期とされる谷1層(試料14)では、密度が1,400~2,300個/gと比較的低い値である。おそらく、当時は河道の周囲で稲作が行われており、そこから河道内にイネの植物珪酸体が混入したものと推定される。

4) 第17次調査 第4地点・第5地点 (図3- 表1)

第4地点で弥生時代早期~前期とされる13a層(試料2)と13b層(試料3) および第5地点で弥生時代早期~前期とされる13層(試料4)と14層(試料5)について分析を行った。その結果、弥生時代早期~前期とされる13b層(試料3)からイネが検出されたが、密度は700個/gと低い値である。



第3地点 (第22次調査)



第4・5地点 (第17次調査)

図3 第3~5地点分析結果

(2) イネ科栽培植物の検討

植物珪酸体分析で同定される分類群のうち、栽培植物が含まれるものには、イネ以外にもオオムギ族(ムギ類が含まれる)、ヒエ属型(ヒエが含まれる)、エノコログサ属型(アワが含まれる)、ジュズダマ属(ハトムギが含まれる)、オヒシバ属型(シコクビエが含まれる)、モロコシ属型などがある。このうち、本遺跡の試料からはヒエ属型とジュズダマ属が検出された。以下に各分類群ごとに栽培の可能性について考察する。

1) ヒエ属型

ヒエ属型は、第2地点の9b層(試料11)および第3地点の谷3層(試料10)と河道層(試料12)から検出された。ヒエ属型には栽培種のヒエの他にイヌビエなどの野生種が含まれるが、現時点では植物珪酸体の形態からこれらを完全に識別するには至っていない(杉山ほか, 1988)。また、密度も1,000個/g未満と低い値であること

表1 津島岡大遺跡における植物珪酸体分析結果

第22次調査
検出密度(単位: ×100個/g)

分類群	学名	第1地点										第2地点																
		6	7	8	9	10	11	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23			
イネ科	Gramineae (Grasses)																											
イネ	<i>Oryza sativa</i> (domestic rice)	29	56																									
ヒエ属型	<i>Echinochloa</i> type																											
キビ族型	Panicaceae type																											
ジュズダマ属	<i>Coix</i>																											
ヨシ属	<i>Phragmites</i> (reed)																											
ススキ属型	<i>Miscanthus</i> type																											
ウシクサ族A	<i>Andropogoneae</i> A type																											
タケ亜科	Bambusoideae (Bamboo)																											
メダケ節型	<i>Pleiblastus</i> sect. <i>Medake</i>	15	7	7																								
ネザザ節型	<i>Pleiblastus</i> sect. <i>Nezasa</i>	51	21	100	49	48	15	15	20	14	7	14	7	7	6	14	21	74	64	95	37	15	8					
クマザザ節型	<i>Sasa</i> (except <i>Miyabozasa</i>)	15	7	42	7	22	7	28	29	14	44	7	7	21	30	57	66	22	22	22	15	38						
ミヤコザザ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Miyabozasa</i>	7	7	14	15	20	20	15	7	14	6	14	7	15	7	7	75	52	45	53								
未分類等	Others	44	77	63	56	28	37	27	21	37	56	15	52	29	77	64	114	103	134	146	73	15	7	38	30			
その他のイネ科	Others																											
表皮毛起源	Husk hair origin																											
棒状珪酸体	Rod-shaped	29	49	6	21	35	30	116	28	88	14	44	52	72	18	121	143	200	431	532	146	82	15	15	8			
未分類等	Others	145	119	157	196	166	221	260	146	273	168	189	321	223	202	300	350	421	622	634	343	172	52	60	83			
樹木起源	Arboreal																											
ブナ科(シイ属)	<i>Castanopsis</i>																											
その他	Others																											
(海綿骨針)	Sponge	15	7																									
植物珪酸体総数	Total	334	336	326	370	298	362	633	313	538	301	384	564	382	369	613	799	1005	1520	1721	716	420	195	242	225			

おもな分類群の推定生産量(単位: kg/m²・cm)

イネ	<i>Oryza sativa</i> (domestic rice)	0.85	1.65																									
ヒエ属型	<i>Echinochloa</i> type																											
ヨシ属	<i>Phragmites</i> (reed)																											
ススキ属型	<i>Miscanthus</i> type																											
メダケ節型	<i>Pleiblastus</i> sect. <i>Medake</i>	0.17	0.08	0.08																								
ネザザ節型	<i>Pleiblastus</i> sect. <i>Nezasa</i>	0.24	0.10	0.48	0.23	0.23	0.07	0.23	0.07	0.28	0.10	0.06	0.07	0.17	0.27	0.65	0.71	0.98	1.12	0.42	0.14	0.14	0.29					
クマザザ節型	<i>Sasa</i> (except <i>Miyabozasa</i>)	0.11	0.05	0.31	0.05	0.17	0.05	0.21	0.22	0.10	0.33	0.05	0.16	0.22	0.42	0.49	0.16	0.17	0.17	0.11	0.28							
ミヤコザザ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Miyabozasa</i>	0.02																										

タケ亜科の比率(%)

メダケ節型	<i>Pleiblastus</i> sect. <i>Medake</i>	31	35	13																								
ネザザ節型	<i>Pleiblastus</i> sect. <i>Nezasa</i>	45	43	100	37	71	25	40	15	45	20	76	28	66	43	71	39	45	41	42	20	31	46					
クマザザ節型	<i>Sasa</i> (except <i>Miyabozasa</i>)	20	22	50	16	59	9	48	35	39	63	22	25	12	20	18	16	24	36	18	64							
ミヤコザザ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Miyabozasa</i>	4																										

第22次調査・第17次調査

検出密度(単位: ×100個/g)

分類群	学名	第3地点										第4地点					第5地点										
		10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	2	3	4	5	4	5	6	7	8						
イネ科	Gramineae (Grasses)																										
イネ	<i>Oryza sativa</i> (domestic rice)	15	43	21	23	14																					
ヒエ属型	<i>Echinochloa</i> type	7	7																								
キビ族型	Panicaceae type																										
ジュズダマ属	<i>Coix</i>																										
ヨシ属	<i>Phragmites</i> (reed)																										
ススキ属型	<i>Miscanthus</i> type																										
ウシクサ族A	<i>Andropogoneae</i> A type																										
タケ亜科	Bambusoideae (Bamboo)																										
メダケ節型	<i>Pleiblastus</i> sect. <i>Medake</i>	15																									
ネザザ節型	<i>Pleiblastus</i> sect. <i>Nezasa</i>	37	57	48	45	106	95	103	111	91	107	102	52	87	135	43											
クマザザ節型	<i>Sasa</i> (except <i>Miyabozasa</i>)	22	71	27	8	28	15	59	22	56	33	29	15	14	50	29											
ミヤコザザ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Miyabozasa</i>	15	14	27	15	28	29	66	7	35	60	58	22	14	50	72											
未分類等	Others	22	64	89	75	77	88	74	104	77	100	37	81	101	92	29											
その他のイネ科	Others																										
表皮毛起源	Husk hair origin	15																									
棒状珪酸体	Rod-shaped	51	100	165	45	162	242	368	200	265	220	146	148	101	397	87											
未分類等	Others	242	392	412	173	514	521	596	452	510	554	445	333	332	546	340											
樹木起源	Arboreal																										
ブナ科(シイ属)	<i>Castanopsis</i>																										
その他	Others																										
(海綿骨針)	Sponge	51	21	8																							
植物珪酸体総数	Total	441	742	796	406	964	1078	1317	971	1083	1129	840	688	672	1389	622											

おもな分類群の推定生産量(単位: kg/m²・cm)

イネ	<i>Oryza sativa</i> (domestic rice)	0.43	1.26	0.61	0.66	0.41																					
ヒエ属型	<i>Echinochloa</i> type	0.62	0.58																								
ヨシ属	<i>Phragmites</i> (reed)																										
ススキ属型	<i>Miscanthus</i> type																										
メダケ節型	<i>Pleiblastus</i> sect. <i>Medake</i>	0.17																									
ネザザ節型	<i>Pleiblastus</i> sect. <i>Nezasa</i>	0.18	0.27	0.23	0.22	0.51	0.46	0.49	0.53	0.44	0.51	0.49	0.25	0.42	0.65	0.21											
クマザザ節型	<i>Sasa</i> (except <i>Miyabozasa</i>)	0.17	0.54	0.21	0.06	0.21	0.11	0.44	0.17	0.42	0.25	0.22	0.11	0.11	0.37	0.22											
ミヤコザザ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Miyabozasa</i>	0.04	0.04	0.08	0.05	0.08	0.09	0.20	0.02	0.10	0.18	0.18	0.07	0.04	0.15	0.22											

タケ亜科の比率(%)

メダケ節型	<i>Pleiblastus</i> sect. <i>Medake</i>	31																								
ネザザ節型	<i>Pleiblastus</i> sect. <i>Nezasa</i>	32	32	44	53	52	50	38	34	36	35	47	36	57	31	26										
クマザザ節型	<i>Sasa</i> (except <i>Miyabozasa</i>)	30	63	40	14	22	12	34	11	35	17	21	16	15	18	27										
ミヤコザザ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Miyabozasa</i>	8	5	16	11	9	10	15	1	9	12	17	10	6	7	27										

から、ここでヒエが栽培されていた可能性は考えられるものの、イヌヒエなどの野・雑草である可能性も否定できない。

2) ジュズダマ属型

ジュズダマ属型は、第3地点の15層(試料16)から検出された。ジュズダマ属型には食用や薬用となるハトムギが含まれるが、現時点では栽培種と野草のジュズダマとを完全に識別するには至っていない。また、密度も700個/gと低い値であることから、ここでハトムギが栽培されていた可能性は考えられるものの、野草のジュズダマに由来するものである可能性も否定できない。

3) その他

イネ科栽培植物の中には未検討のものもあるため、その他の分類群の中にも栽培種に由来するものが含まれている可能性が考えられる。これらの分類群の給源植物の究明については今後の課題としたい。

(3) 植物珪酸体分析から推定される植生と環境

1) 植物珪酸体の検出状況

16層およびその下層では、メダケ節型、ネザサ節型、クマザサ属型、ミヤコザサ節型、棒状珪酸体、イネ科(未分類等)などが検出されたが、いずれも比較的少量である。16層から13層にかけては、第2地点などでメダケ節型やネザサ節型などが大幅に増加しており、第2地点の13層、第3地点の15層上部ではヨシ属が出現している。11層から10層にかけては、ほとんどの分類群が減少しており、かわってイネが出現・増加している。第3地点の谷1層でも、ヨシ属の減少に伴ってイネが出現している。

2) 植生と環境の推定

縄文時代後期以前の遺跡周辺は、ネザサ節やクマザサ属などの竹笹類を主体としたイネ科植生であったと考えられ、河川の影響など何らかの原因で、その他のイネ科植物の生育にはあまり適さない環境であったと推定される。

縄文時代後期～弥生時代前期とされる13～14層の堆積当時は、メダケ節やネザサ節などの竹笹類が多く生育するイネ科植生であったと考えられる。これらの植物は日当りの悪い林床では生育が困難であることから、当時の遺跡周辺は森林で覆われたような状況ではなく、比較的開かれた環境であったと推定される。また、河道周辺などの低地部はヨシ属などが生育する湿地的な環境であったと考えられ、そこを利用して弥生時代早期～前期頃に水田稲作が開始されたと推定される。

6. まとめ

植物珪酸体(プラント・オパール)分析の結果、弥生時代とされる11層、弥生時代中期とされる谷3層、古墳時代とされる10層、古代とされる8～9層からはイネが多量に検出され、それぞれ稲作が行われていた可能性が高いと判断された。また、弥生時代早期とされる第17次調査の13b層、弥生時代前期とされる第3地点の谷1層などでも、稲作が行われていた可能性が認められた。

縄文時代後期～弥生時代早期・前期とされる13～14層の堆積当時は、メダケ節やネザサ節などの竹笹類が多く生育する、比較的開かれた環境であったと推定される。また、河道周辺などの低地部はヨシ属などが生育する湿地的な環境であったと考えられ、そこを利用して弥生時代早期～前期頃に水田稲作が開始されたと推定される。

文献

- 杉山真二 1987a 遺跡調査におけるプラント・オパール分析の現状と問題点. 植生史研究, 第2号, p.27 - 37.
 杉山真二 1987b タケ亜科植物の機動細胞珪酸体. 富士竹類植物園報告, 第31号, p.70 - 83.
 杉山真二・松田隆二・藤原宏志 1988 機動細胞珪酸体の形態によるキビ族植物の同定とその応用 古代農耕追究のための基礎資料として 考古学と自然科学, 20, p.81 - 92.
 藤原宏志 1976 プラント・オパール分析法の基礎的研究(1) 数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法 考古学と自然科学, 9, p.15 - 29.
 藤原宏志・杉山真二 1984 プラント・オパール分析法の基礎的研究(5) プラント・オパール分析による水田址の探査 考古学と自然科学, 17, p.73 - 85.

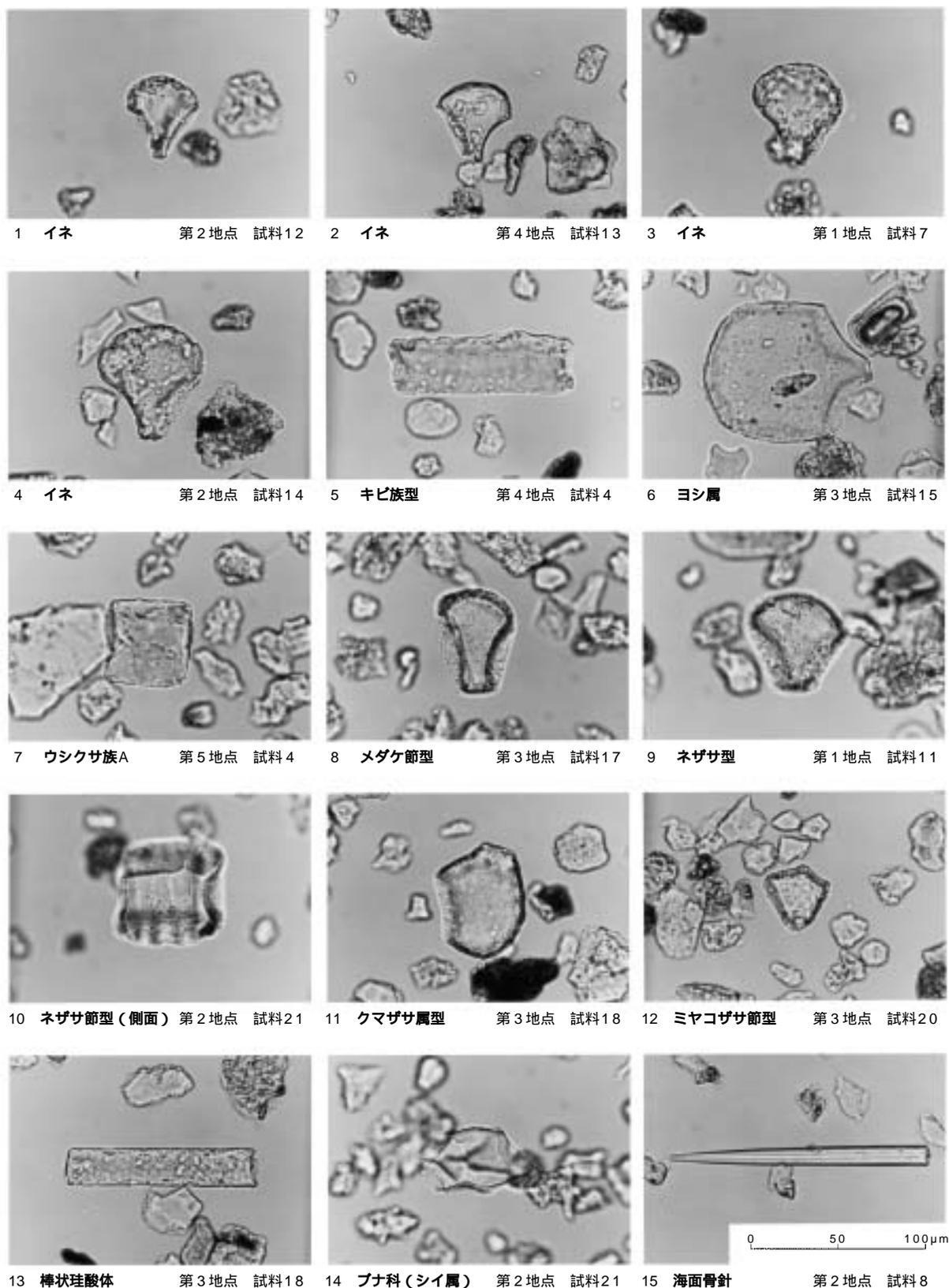


図4 植物珪酸体(プラント・オパール)の顕微鏡写真

(2) 放射性炭素年代測定

1 . 試料と方法

試料名	地区	地点・層準	種類	前処理・調整	測定法
No. 1	22次	第2地点、13層	土壌	酸 - アルカリ - 酸洗浄、石墨調整	AMS
No. 2	22次	第2地点、15層	土壌	酸洗浄、石墨調整	AMS
No. 3	17次	竪穴住居状遺構 1 炉内	土壌	酸洗浄、石墨調整	AMS
No. 4	17次	土坑 9、1 層	炭化物	酸 - アルカリ - 酸洗浄、石墨調整	AMS
No. 5	17次	土坑 9、3 層	炭化物	酸 - アルカリ - 酸洗浄、石墨調整	AMS
No. 6	17次	竪穴住居状遺構 1 炉内	土壌	酸 - アルカリ - 酸洗浄、石墨調整	AMS

AMS : 加速器質量分析法 (Accelerator Mass Spectrometry)

2 . 測定結果

試料名	¹⁴ C年代 (年BP)	¹³ C (‰)	補正 ¹⁴ C年代 (年BP)	暦年代 (西暦)	測定No. (Beta)
No. 1	2490 ± 60	- 22.3	2530 ± 60	交点 : BC775 1 : BC795 ~ 750、BC695 ~ 540 2 : BC810 ~ 415	134018
No. 2	2690 ± 50	- 23.0	2720 ± 50	交点 : BC840 1 : BC910 ~ 820 2 : BC975 ~ 805	134019
No. 3	2930 ± 50	- 23.8	2950 ± 50	交点 : BC1140 1 : BC1260 ~ 1055 2 : BC1305 ~ 1000	134022
No. 4	3900 ± 40	- 25.7	3890 ± 40	交点 : cal BC 2400、2380、2360 1 : cal BC 2460 ~ 2300 2 : cal BC 2470 ~ 2220	194639
No. 5	3870 ± 40	- 26.1	3850 ± 40	交点 : cal BC 2300 1 : cal BC 2400 ~ 2380、2360 ~ 2220 2 : cal BC 2460 ~ 2200	194640
No. 6	3740 ± 40	- 23.4	3770 ± 40	交点 : cal BC 2200 1 : cal BC 2270 ~ 2260、2220 ~ 2140 2 : cal BC 2300 ~ 2120、2100 ~ 2040	195251

(1) ¹⁴C年代測定値

試料の¹⁴C / ¹²C比から、単純に現在 (AD1950年) から何年前かを計算した値。¹⁴Cの半減期は、国際的慣例により Libby の5,568年を用いた。

(2) ^{δ¹³C}測定値

試料の測定¹⁴C / ¹²C比を補正するための炭素安定同位体比 (¹³C / ¹²C)。この値は標準物質 (PDB) の同位体比からの千分偏差 (‰) で表す。

(3) 補正¹⁴C年代値

¹³C測定値から試料の炭素の同位体分別を知り、¹⁴C / ¹²Cの測定値に補正值を加えた上で算出した年代。試料の¹³C値を - 25 (‰) に標準化することによって得られる年代である。

(4) 暦年代

過去の宇宙線強度の変動による大気中¹⁴C濃度の変動を較正することにより算出した年代 (西暦)。cal は calibration した年代値であることを示す。較正には、年代既知の樹木年輪の¹⁴Cの詳細な測定値、およびサンゴ

の U-Th 年代と ^{14}C 年代の比較により作成された較正曲線を使用した。

暦年代の交点とは、補正 ^{14}C 年代値と暦年代較正曲線との交点の暦年代値を意味する。 1σ (68% 確率) と 2σ (95% 確率) は、補正 ^{14}C 年代値の偏差の幅を較正曲線に投影した暦年代の幅を示す。したがって、複数の交点が表記される場合や、複数の 1σ ・ 2σ 値が表記される場合もある。

3. 所見

加速器質量分析法 (AMS 法) による放射性炭素年代測定の結果、No. 4 の炭化物では 3890 ± 40 年 BP (1 σ の暦年代で BC2460 ~ 2300 年)、No. 5 の炭化物では 3850 ± 40 年 BP (同 BC2400 ~ 2380、2360 ~ 2220 年)、No. 6 の土壌では 3770 ± 40 年 BP (同 BC2270 ~ 2260、2220 ~ 2140 年) の年代値が得られた。なお、各試料とも放射性炭素年代測定値よりも暦年代の年代幅が大きくなっているが、これは該当時期の暦年代較正曲線が不安定なためである。

参考文献

- Stuiver et al. 1998 INTCAL98 Radiocarbon Age Calibration, Radiocarbon, 40, p.1041 - 1083.
中村俊夫 1999 放射性炭素法・考古学のための年代測定学入門。古今書院、p.1 - 36.

第6章 結 語

津島岡大遺跡第17・22次調査では、縄文時代後期～近代にいたる遺構・遺物を検出し、いくつかの重要な成果を得ることができた。以下、時期毎に述べる。

【縄文時代】

まず縄文時代に関して特に第17次調査地点で検出された遺構・遺物の内容は、質・量ともに、津島岡大遺跡のなかでも際だって密度の高いものであった。竪穴住居状遺構2棟、大型土坑数基、溝からなる遺構群が、検出時に標高3mを超える安定的な微高地につくられていた。こういった遺構群から構成される居住域の内容が初めて明らかとなったことは大きな成果のひとつである。またその時期は縄文時代後期前葉の福田K式～縁帯文成立段階の時期をピークとしている。遺構・遺物からみて本地点では縄文時代中期末から人が活動を始め、後期前葉の福田K式の時期に最盛期を迎えたとみられる。その後も、津雲A式の時期までの遺構・遺物はみられるが、中葉に入るとそれほど目立たなくなるといえる。これまでも指摘されているように、中葉には集落の位置が変化していることを関連とした動きであろう。

集落構成の一端が明らかとなった一方で、住居周辺につくられた大型の土坑の機能・用途については、それを判断できる材料を得ることができなかった。また多数の土坑・ピット状の落ち込みが検出され、多くの出土遺物が見られたが、遺構と断定するには不確実なものもみられた。

さて、この居住域の北側にあたる第22次調査地点は、大半が谷地形にあっている。調査以前に予想された貯蔵穴群は全く見られず、遺構の点からは空白地点と言える。第17次調査地点に展開した集落の人々が利用していたと思われる貯蔵域としては、東側に位置する第3・15次調査地点、あるいは西側の第6・9次調査地点で確認されている、河道脇につくられた貯蔵穴群が該当するものと考えられる。こういった居住域と貯蔵域の位置関係は、津島岡大遺跡全体の土地利用の検討も含めて注目すべきである⁽¹⁾。

出土遺物に関しては、土器、石器についてそれぞれ分析を行った。縄文時代中期末～後期中葉にかけての時期に比定される大量の土器に対する分析では、その中でも主体となる福田K式の器種組成を復元し得た。また福田K式～津雲A式への型式変化の連続性を指摘した。

石器の分析では、まず器種構成と使用石材についての整理を行い、石鏃と石錘を主たる石器とする組成である点、石匙の代わりにスクレイパーを多く確保している点、磨製石斧や石鏃など石斧類の出土が目立つ点等の特徴を指摘した。また、そのなかでも収穫具について分析を進めた結果、本遺跡でみられる「石包丁」に類似した石器については、使用痕観察等からイネ科草木類を使用対象としていた可能性を指摘した。こういった詳細な分析の積み重ねから、より具体的な生業状況の解明が進んでいくことが期待されよう。

【弥生時代】

弥生時代については、いわゆる「黒色土」層について改めて触れておきたい。津島岡大遺跡で広く堆積が認められる黒色土層については、その形成時期は弥生時代早期～前期という点でほぼ見解の一致をみている。しかしその形成要因・過程についてはまだ不明な点が多いと言える。第5章に掲載しているように、黒色土の形成時期・要因の解明に向けては、自然科学的な視点からも分析を試みている。こういった作業は津島岡大遺跡の他の調査地点においてもデータの蓄積が進んできており、今後、総合的に検討を進める土台が固まりつつある⁽²⁾。

また本調査地点に関しては、「黒色土」層にあたる13層が第17次調査地点の5・6区において、弥生時代前期後半ごろに「動かされた」と考えられる特殊な堆積状況を示している。この現象は、今のところ、この地点に限って認められているものであり、その形成要因については不明である。この点についても今後の類例増加を待って検討していきたい。

【古代】

古代では、第22次調査地点において、東西方向の大溝を検出した。この溝は従来より条里の坪境の溝として注目されている溝の継続部分にあたる。これまでに第1・3・6・9・12次調査地点で同一溝が確認されている。同溝の底部には多くの土器が出土しており、10世紀後半～末前後に機能していた状況が残されている。また、杭・下駄・曲げ物といった木製品も多く検出された。調査区の中央付近の南岸では、堰状遺構を検出し、また杭はその大半を原位置で確認した。杭列の復元には至らなかったが、杭のまとまりなどから場所によって、護岸や堰といった水利機能を使い分けられていることが見受けられた。木製品については樹種同定を行った結果、用途に応じて樹種を選択していることが、今回報告分についても確認されることとなった。

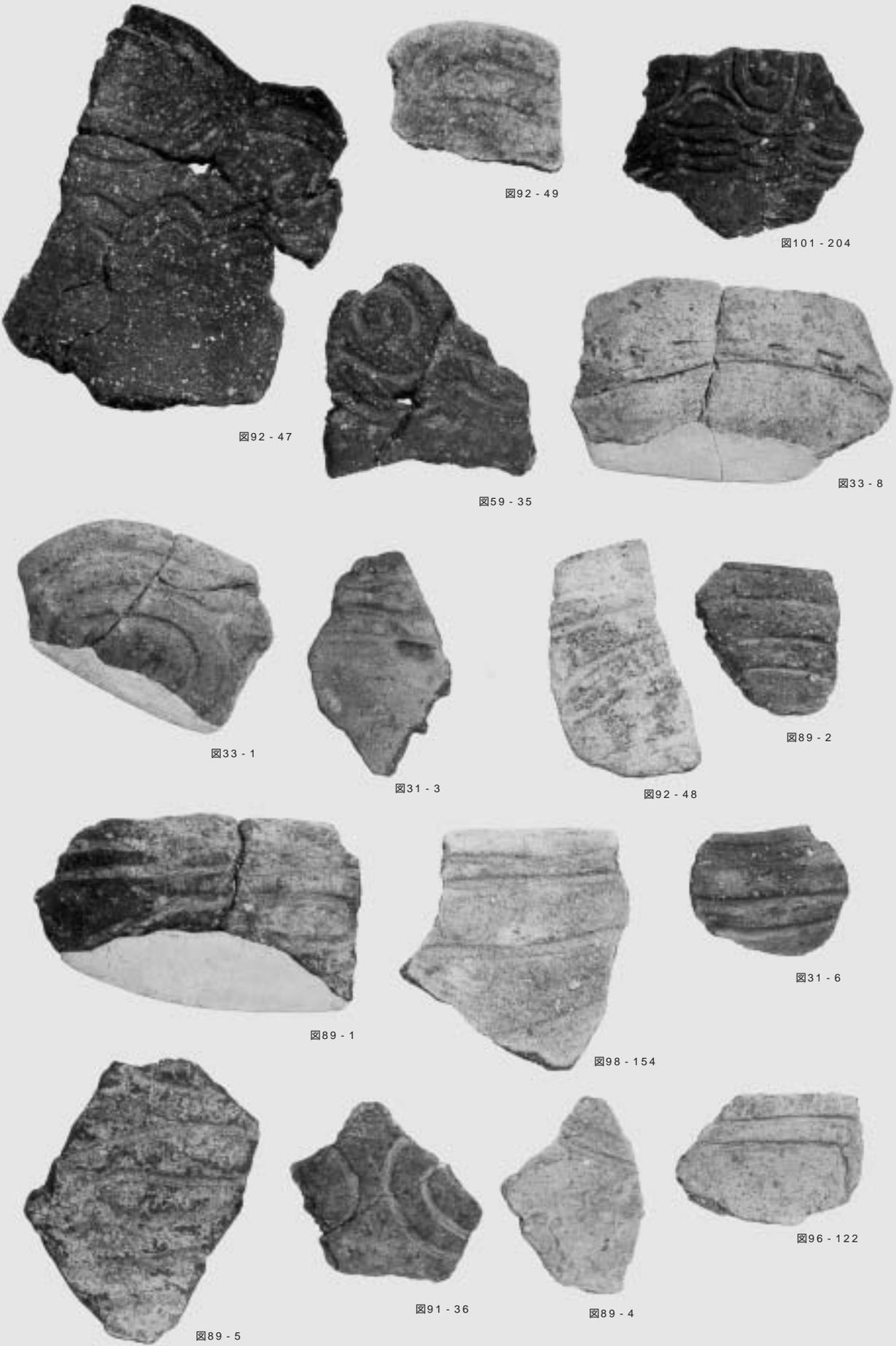
古代についてはいくつかの特殊な遺物に注目しておきたい。溝21出土の転用硯と、包含層出土ではあるが三彩の小片の存在である。古代の遺構として確認されているものは、溝と畦畔といった耕作関連遺構である。しかし上述した類の遺物はそれとは相容れない種と言えよう。考察でも触れているように、古代の大溝付近は、古代山陽道の一部にあたる主要な交通路であった可能性が高い。主要な道の近くに何らかの施設があった可能性を考えておきたい。少ないながらもこういった遺物の存在は、これまでの調査地点では認められておらず、本調査地点の特徴のひとつとすることができる。

第22次調査点では、古代以降、中世・近世・近代においても、東西方向の溝が検出されている。この位置が条里に関係することは以前から注意されてきたことであるが、今回の本報告を受けて、改めて条里の溝についても検討を試みた。その結果、溝が継続的につくられているこの東西方向の位置は、古代山陽道の一部であった「福輪寺縄手」である可能性が高いことを改めて示した。また溝の位置・規格は、中世後半期を画期として変容する。その時期が、大規模造成時期と合致していることも指摘した。ただ、条里関連では時代別にみていくと欠落しているラインも認められる。今回得られた知見を元に、より広域的な視野から、規格の問題も含めて、再検討する必要があるものと考えている。

以上、時代毎に記述を進めてきたが、個々の遺構・遺物に関して十分な分析を尽くしたとは言い難く、また課題として挙げた問題も多い。今後も機会をみて述べて行くこととしたい。

註

- (1) 山本悦世 2004「縄文時代後期の集落構造とその推移」『紀要2003』岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
- (2) 山本悦世・横田美香・岩崎志保 202『縄文時代の景観復元と生業に関する実証的研究』



(S=1/2)



図31 - 1



図31 - 2



図31 - 4



図114 - 386

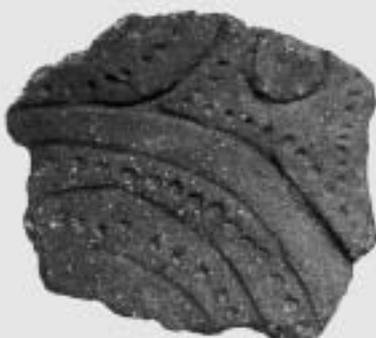


図114 - 389



図65 - 112



図89 - 3



図31 - 8



図33 - 6

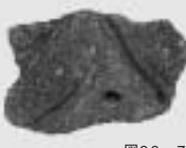


図33 - 7



図105 - 267



図68 - 158



図76 - 1



図76 - 2



図114 - 388



図114 - 390

(S=1/2)



図58 - 12
(S=1/3)



図98 - 159



図114 - 393



図21 - 1



図106 - 273



図106 - 277



図106 - 274

(S=1/2)



図106 - 271



図27 - 8



図27 - 16



図106 - 272



図59 - 30



図35 - 5



図45 - 1

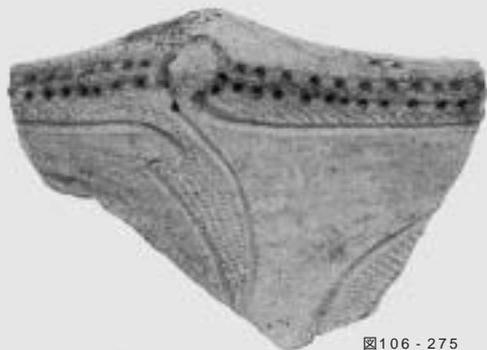


図106 - 275



図107 - 290



(外)



(内)

図93 - 73

(S=1/2)



図65 - 121

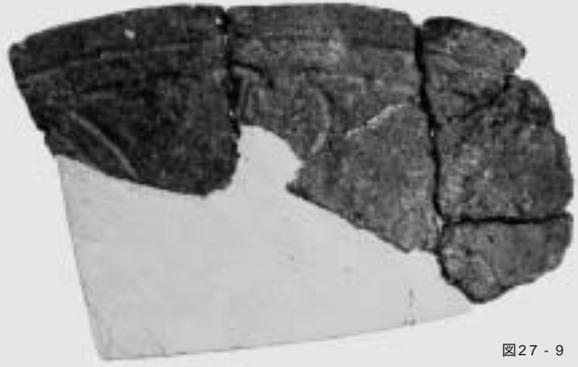


図27 - 9



図35 - 1



図57 - 2



図62 - 85

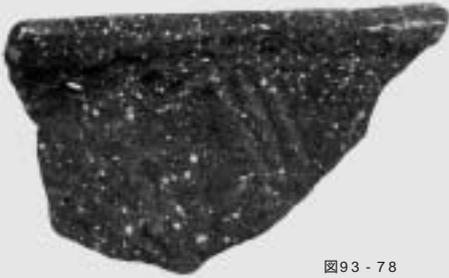


図93 - 78



図25 - 5



図35 - 6



図45 - 3

(S=1/2)

図版 6 縄文土器 6 (福田 K 式)

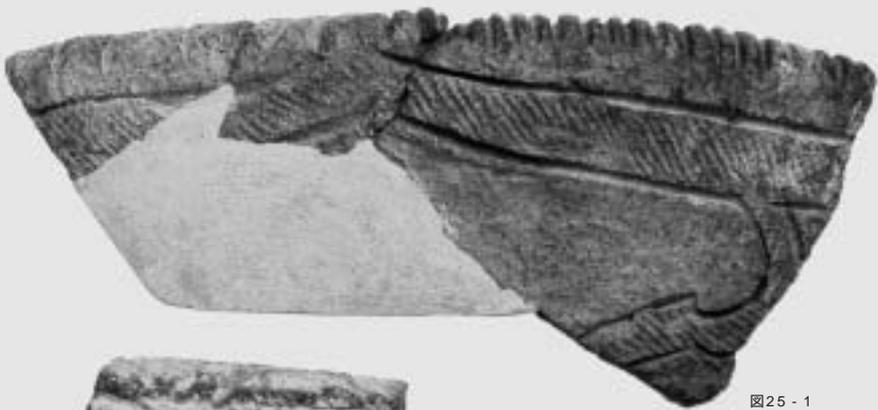


図25 - 1



図21 - 6

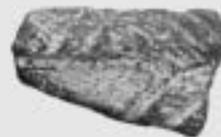


図93 - 76



図93 - 75



図107 - 299



図107 - 300

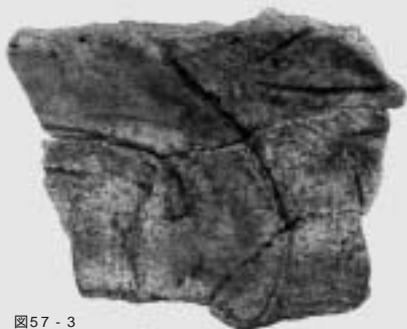


図57 - 3

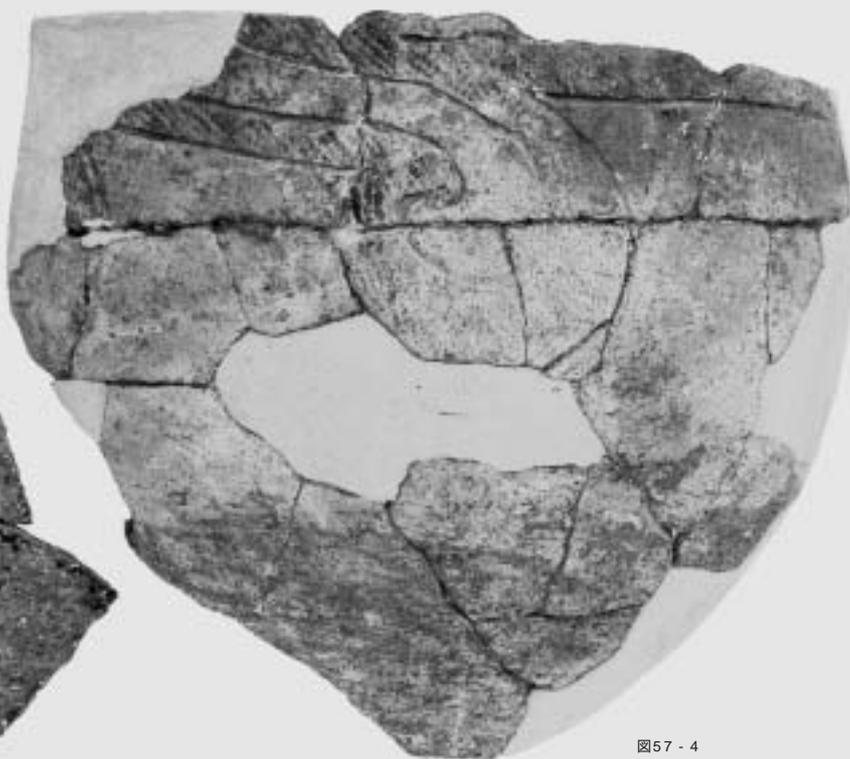


図57 - 4

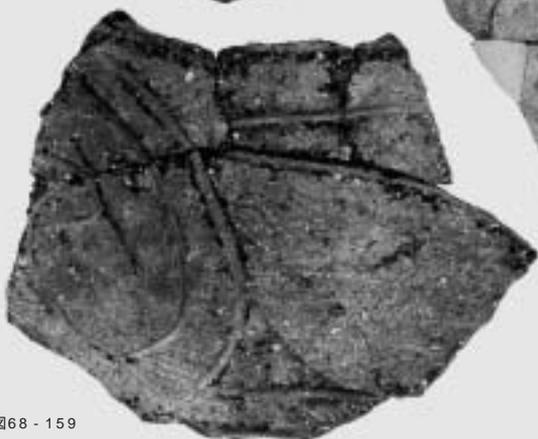


図68 - 159

(S=1/2)



図63 - 93

図63 - 98



図99 - 185



図24 - 27

図99 - 182



図94 - 84



図108 - 303



図99 - 181

(S=1/2)

図版 8 縄文土器 8 (福田 K 式) 縁帯文土器成立期



図108 - 306



図49 - 4



図21 - 9



図16 - 9



図108 - 301



図108 - 305



図49 - 5

(S=1/2)



図15 - 1(S=1/3)



図63 - 97

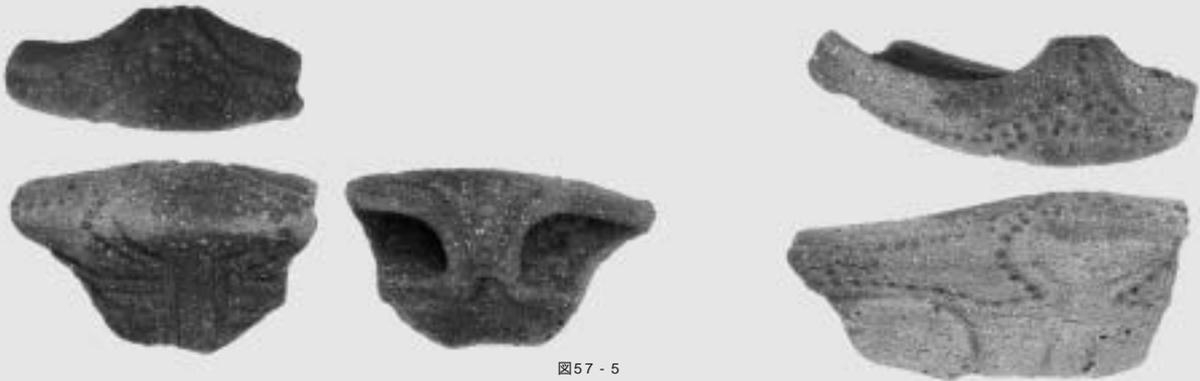


図57 - 5

図94 - 88

(S=1/2)



図27 - 21



図94 - 90



図57 - 6



図53 - 1(S=1/3)

図版10 縄文土器10 (縁帯文土器成立期)

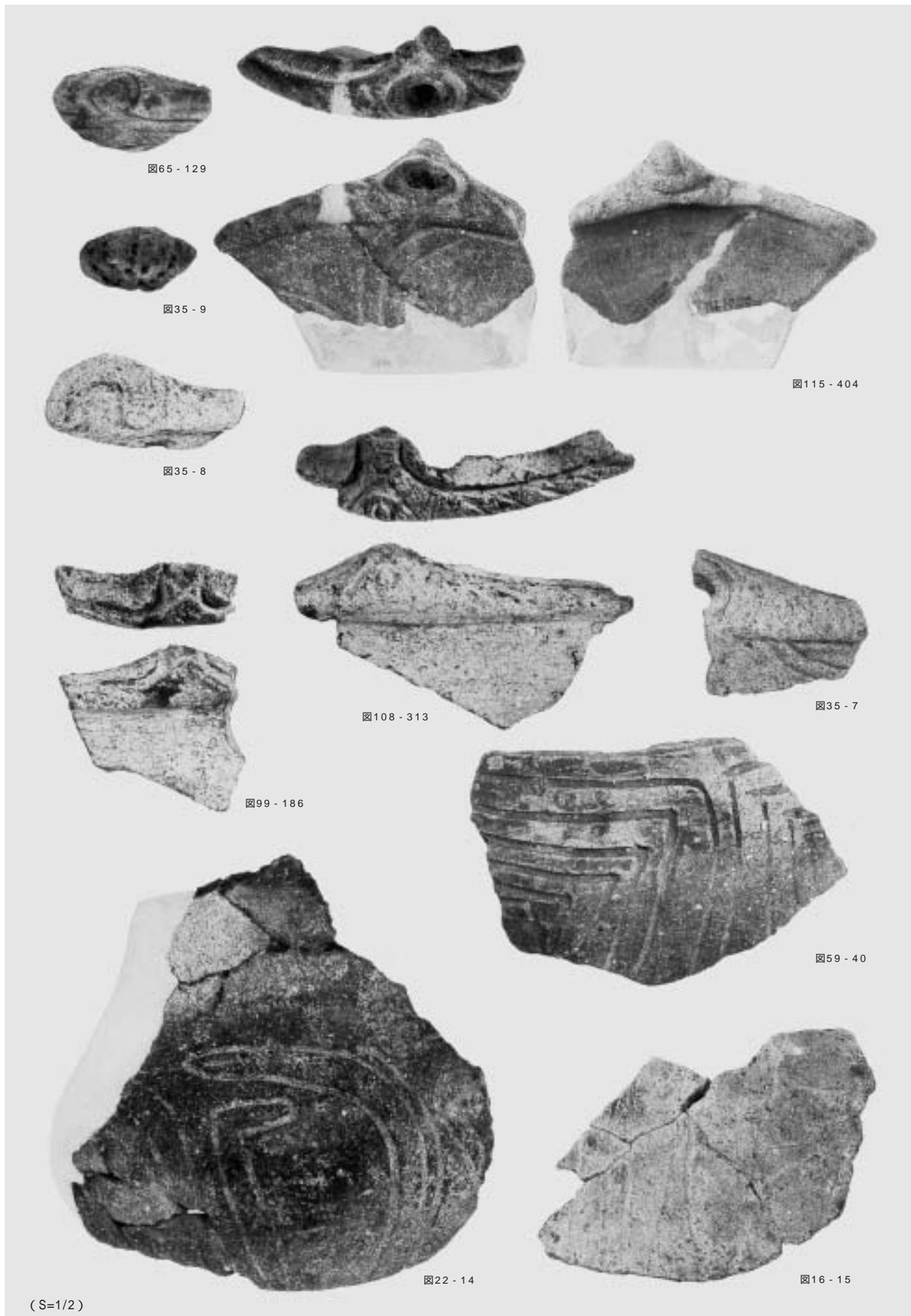




図65 - 130



図59 - 31



図55 - 1



図109 - 318



図115 - 406



図64 - 104



図94 - 101



図94 - 100

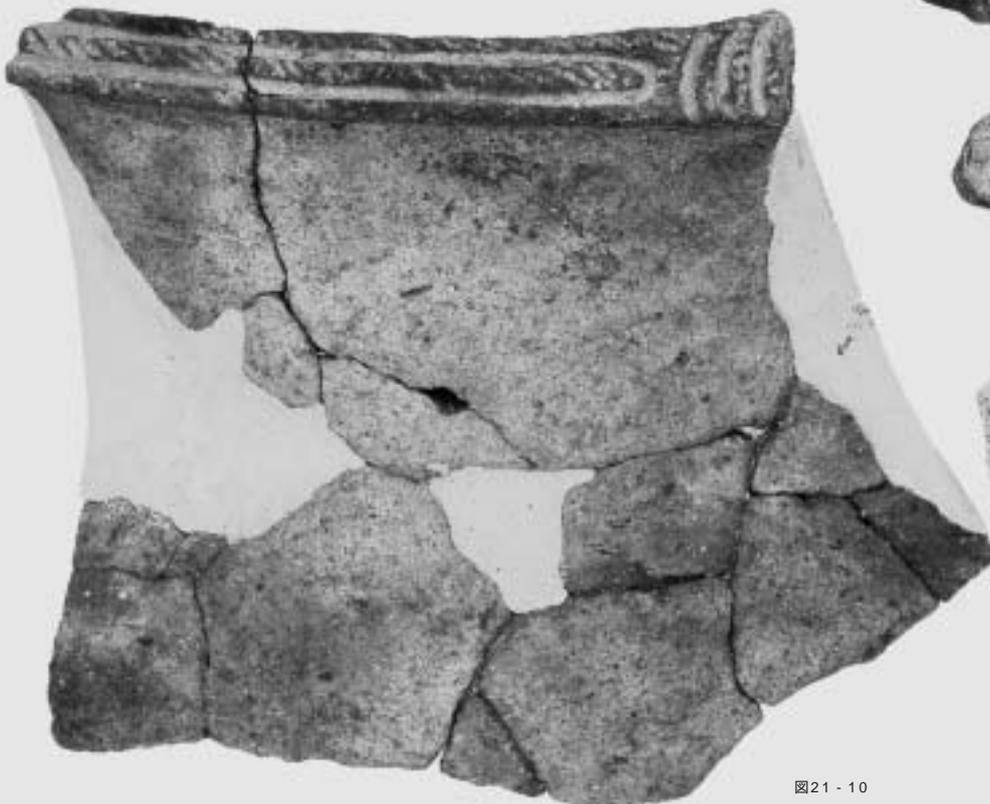


図21 - 10



図96 - 131

(S=1/2)



図68 - 163



図29 - 38



図112 - 360



図29 - 36



図96 - 130



図96 - 128



図117 - 424



図112 - 356

(S=1/2)



図61 - 67



図117 - 426



図103 - 243



図103 - 244



図29 - 45

(S=1/2)

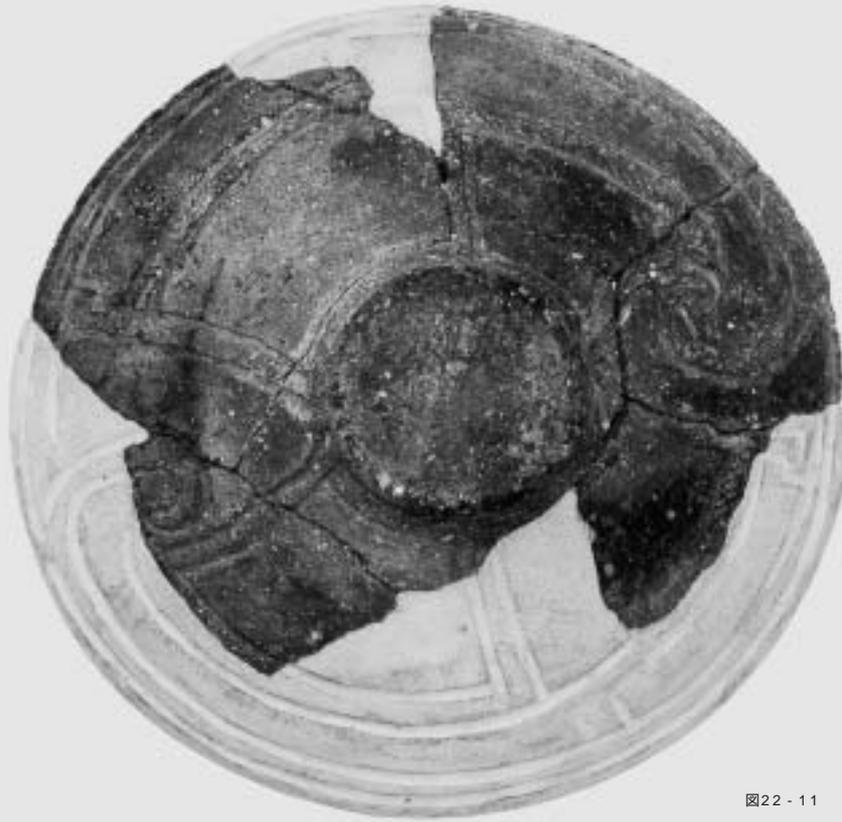


図22 - 11



図103 - 241

(S=1/2)



図35 - 11



図33 - 9



(内)



(外)

図68 - 167



(内)



(外)

図59 - 42



図29 - 37



図68 - 164



図89 - 14



図45 - 7



図45 - 6

[浅鉢]



図92 - 62



図89 - 21



図91 - 39



図65 - 134



図109 - 328



図109 - 327



図101 - 220



図115 - 409



図59 - 34

(S=1/2)

[異系統の土器等]

図版 16 縄文土器 16 (注口土器・双耳壺・その他)

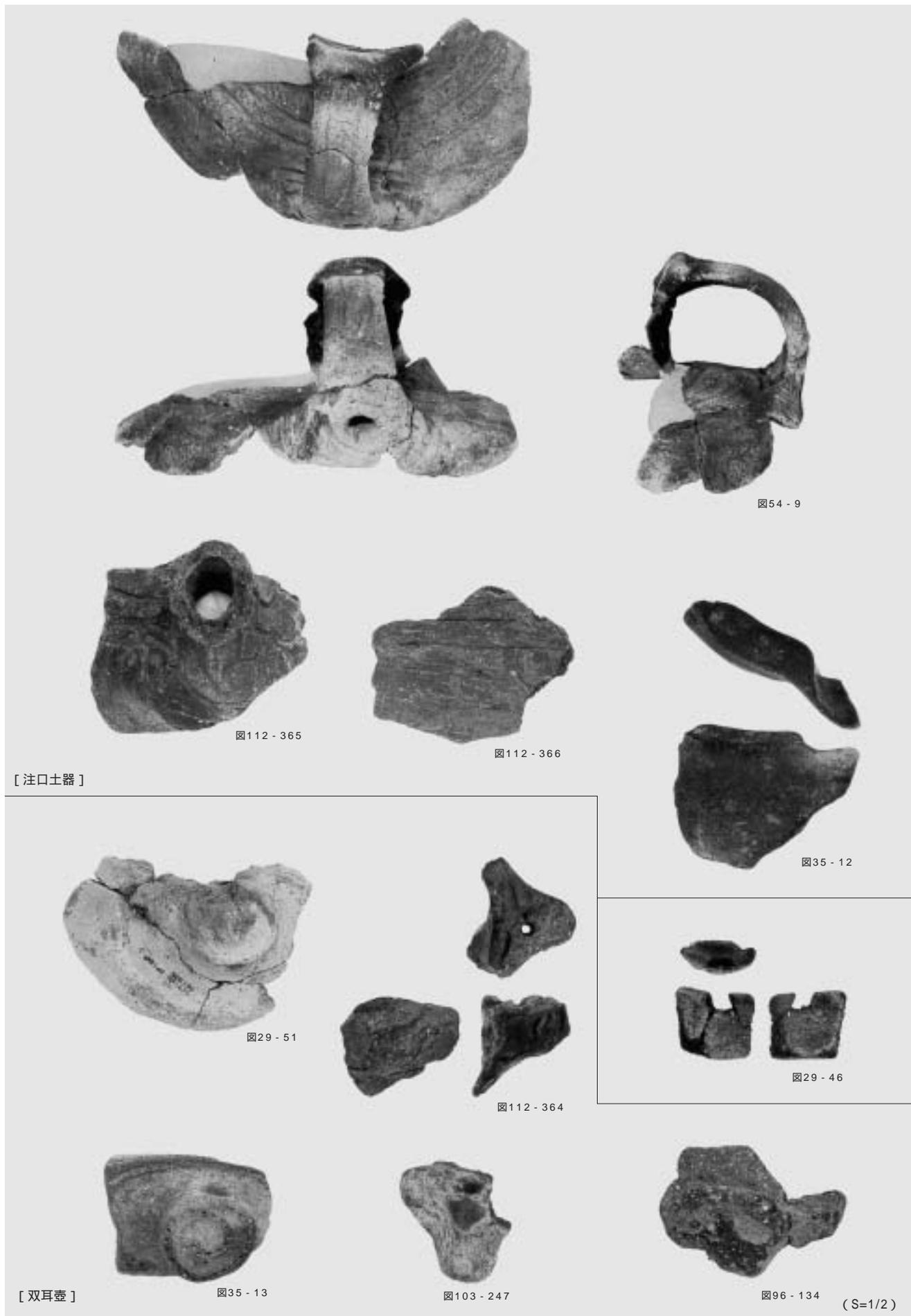




図111 - 348

[燃糸文]



図31 - 9



図33 - 12

[貝殻圧痕]

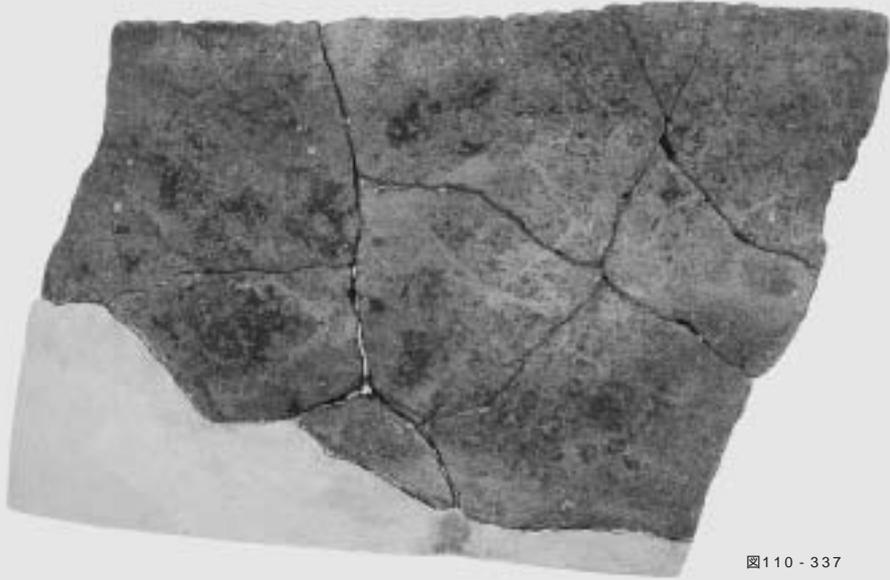


図110 - 337



図50 - 16

(S=1/2)



図16 - 3



図15 - 2(S=1/3)



図50 - 17

(S=1/2)



図49 - 12

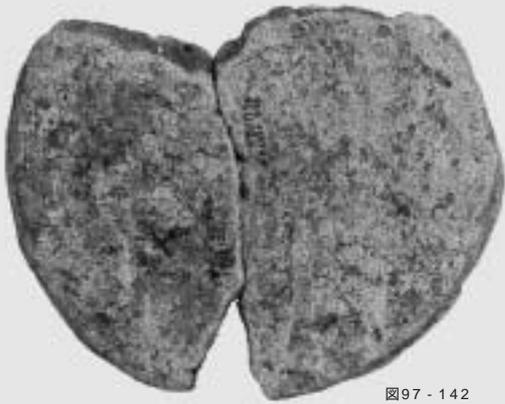


図97 - 142



図113 - 381



図113 - 377

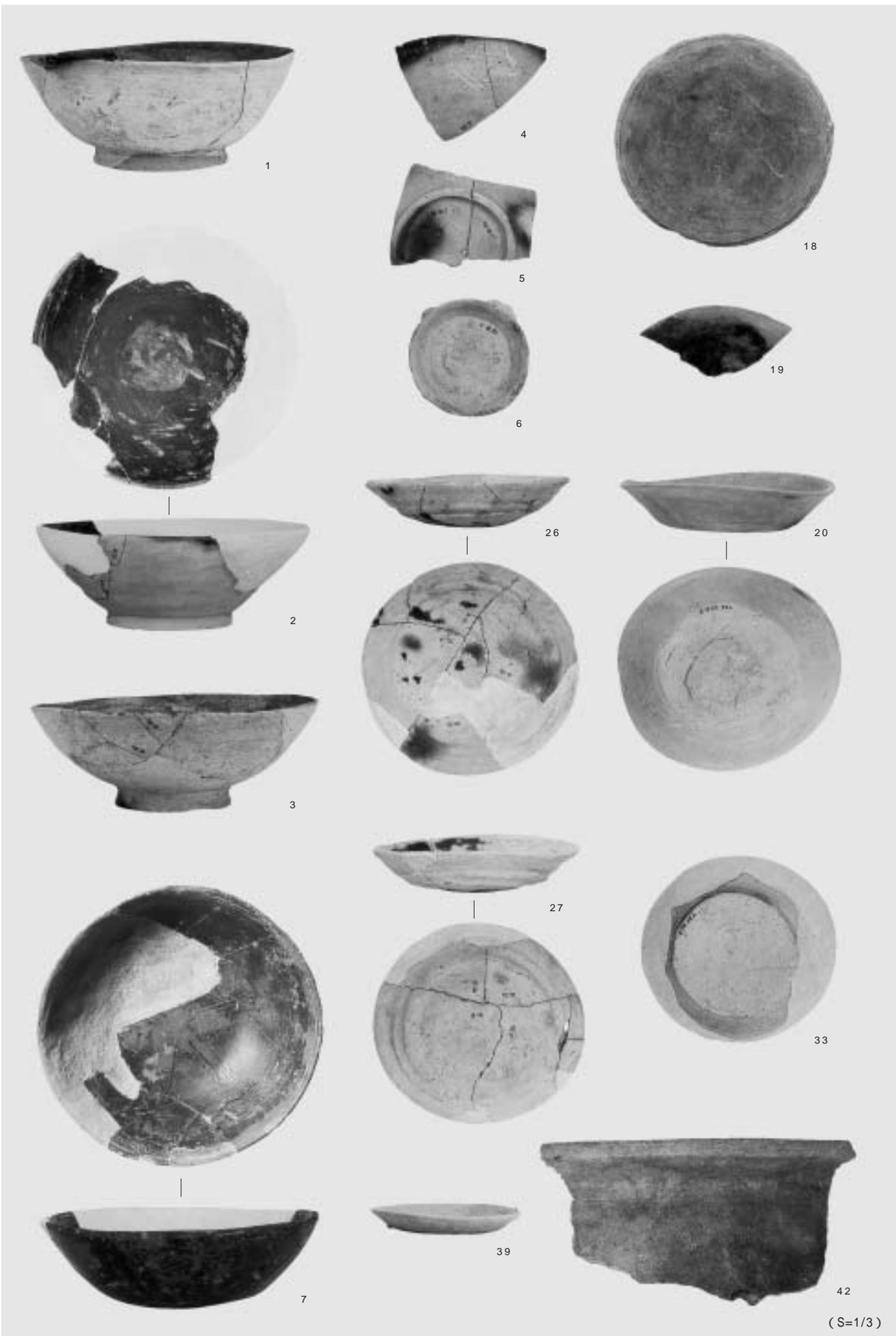


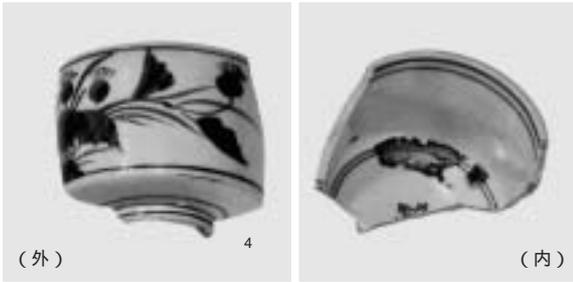
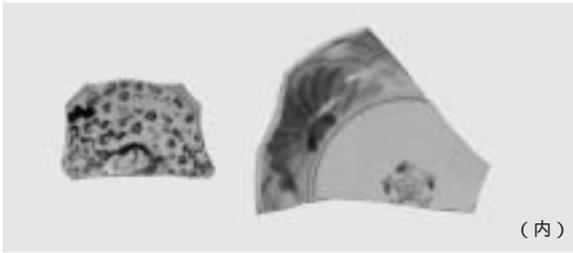
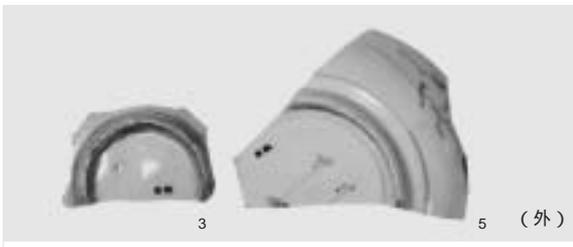
図97 - 153



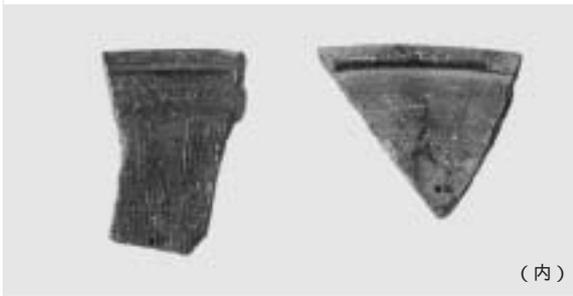
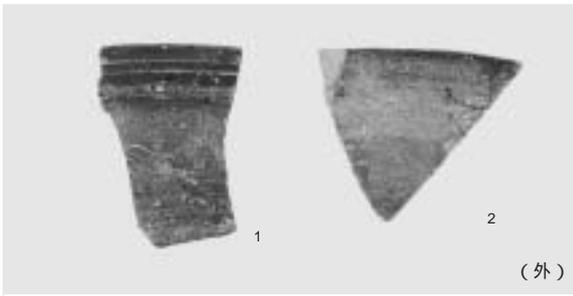
図113 - 375

(S=1/2)



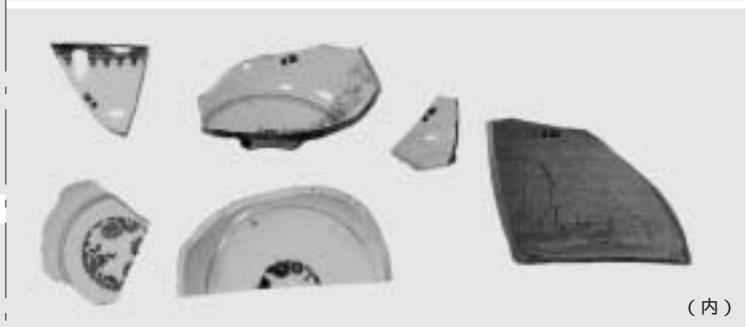
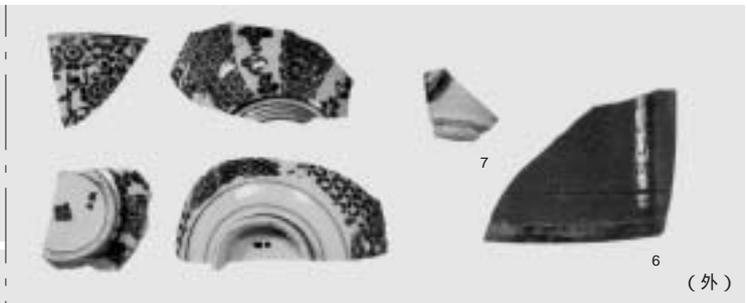


溝26 磁器

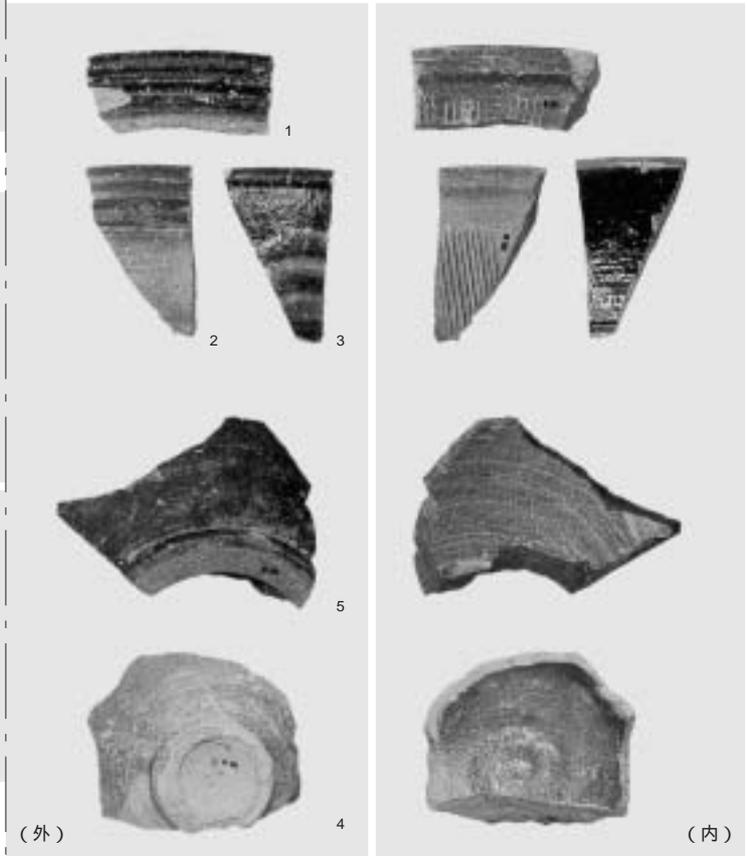


溝26 陶器

(S=1/3)

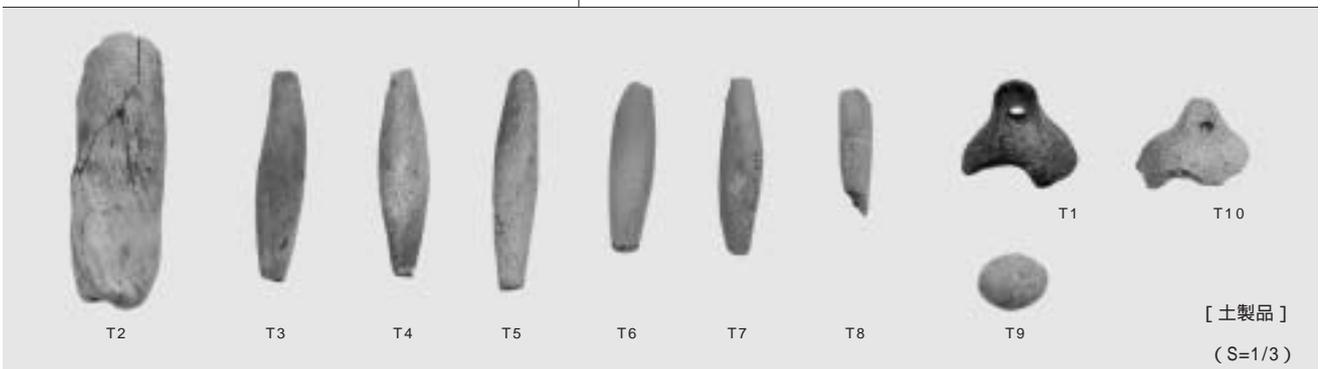


溝27 磁器

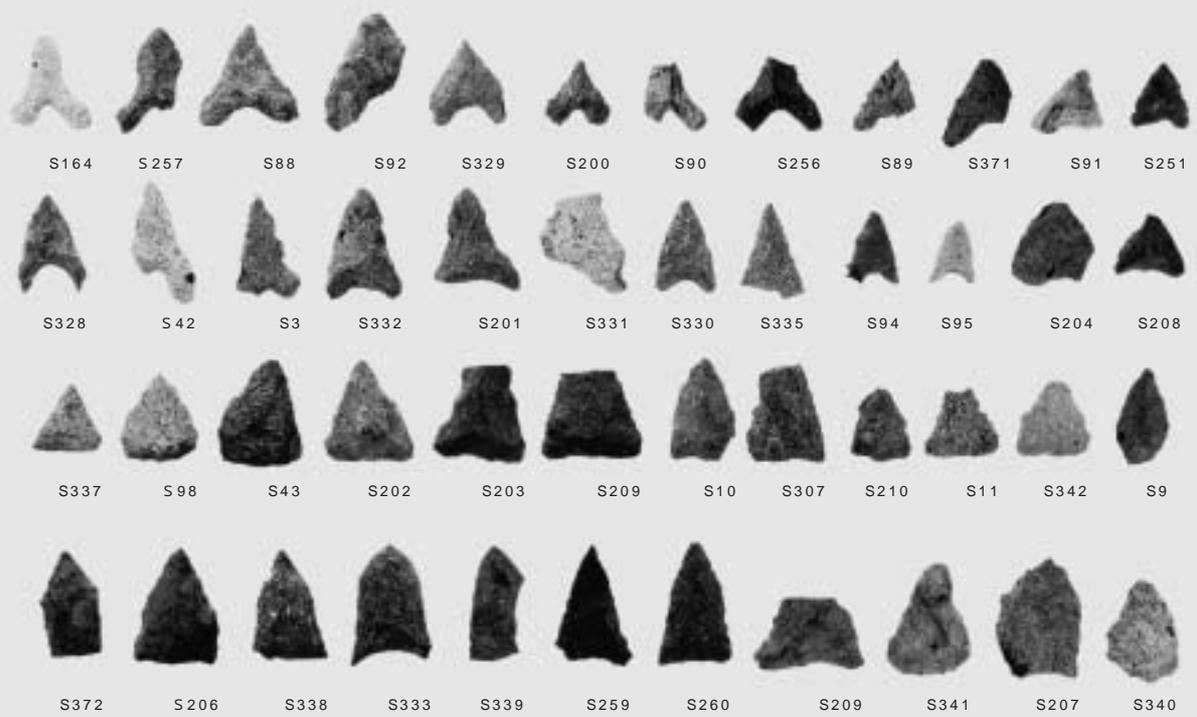


溝27 陶器

(S=1/3)



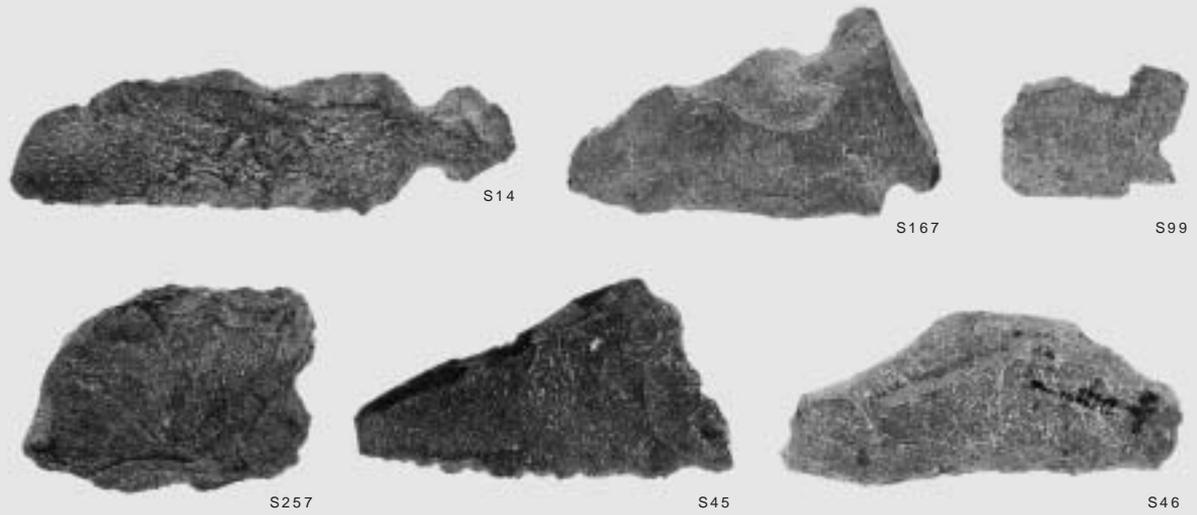
図版22 石器1 (石鏃・石錐・石匙・石匙・スクレイパー)



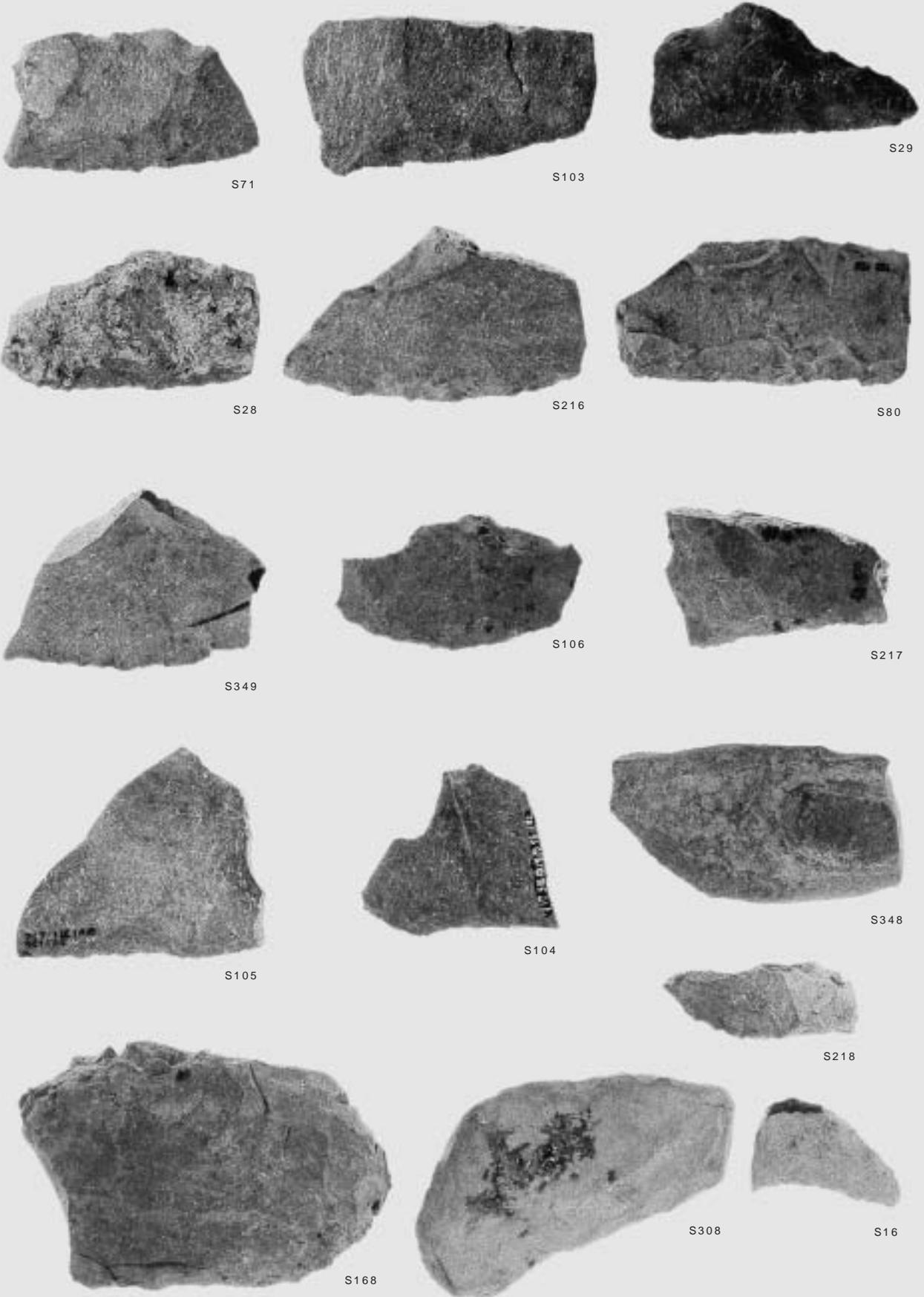
[石鏃]



[石錐]

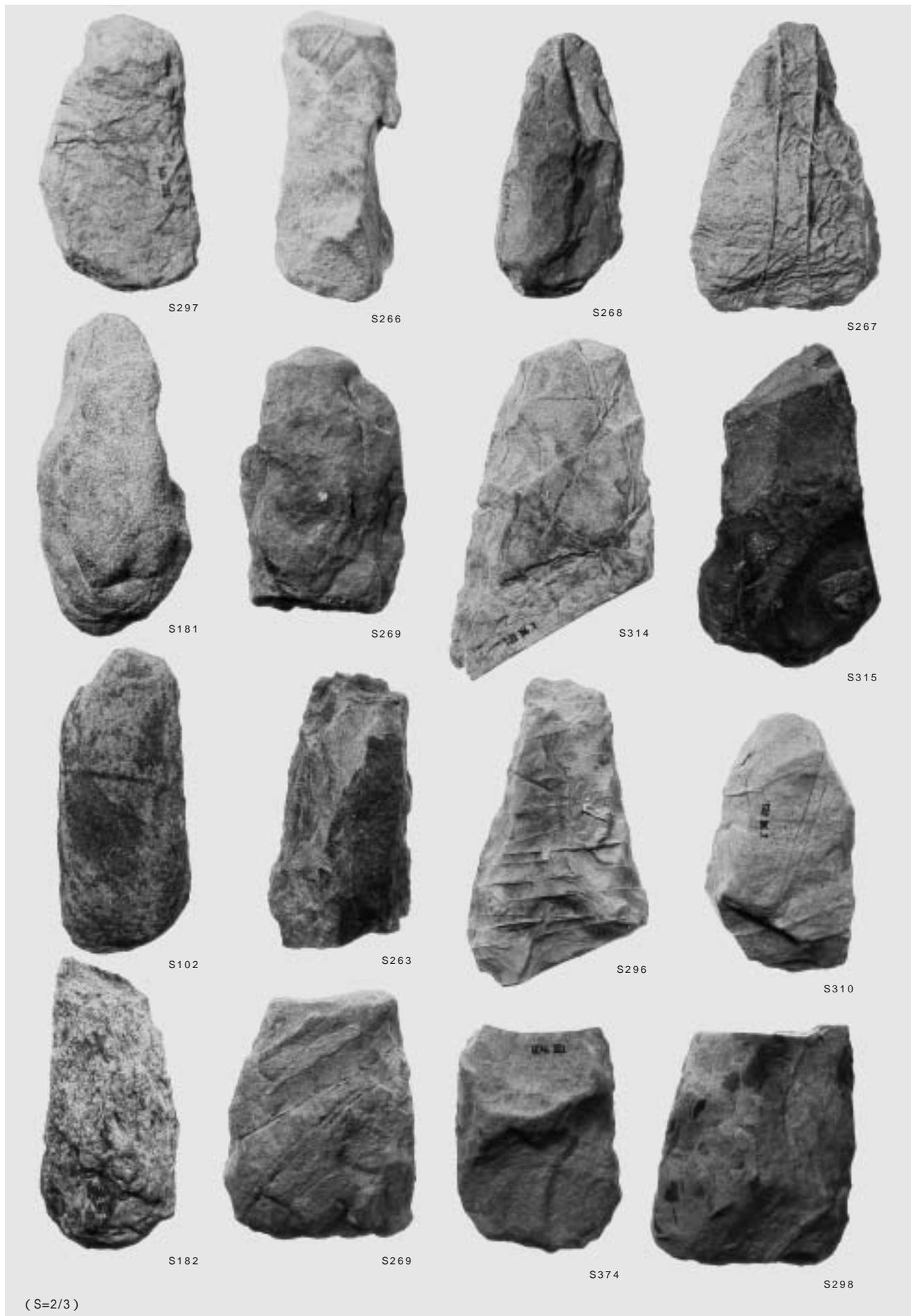


[石匙・スクレイパー]

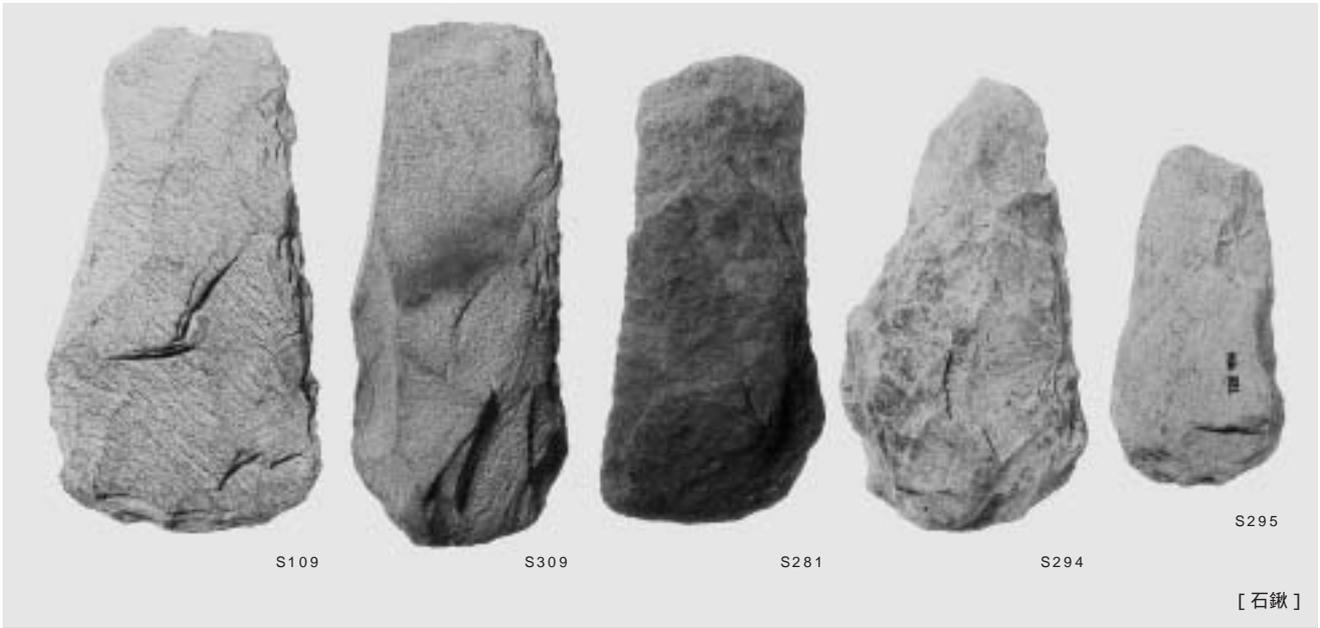


(S=2/3)

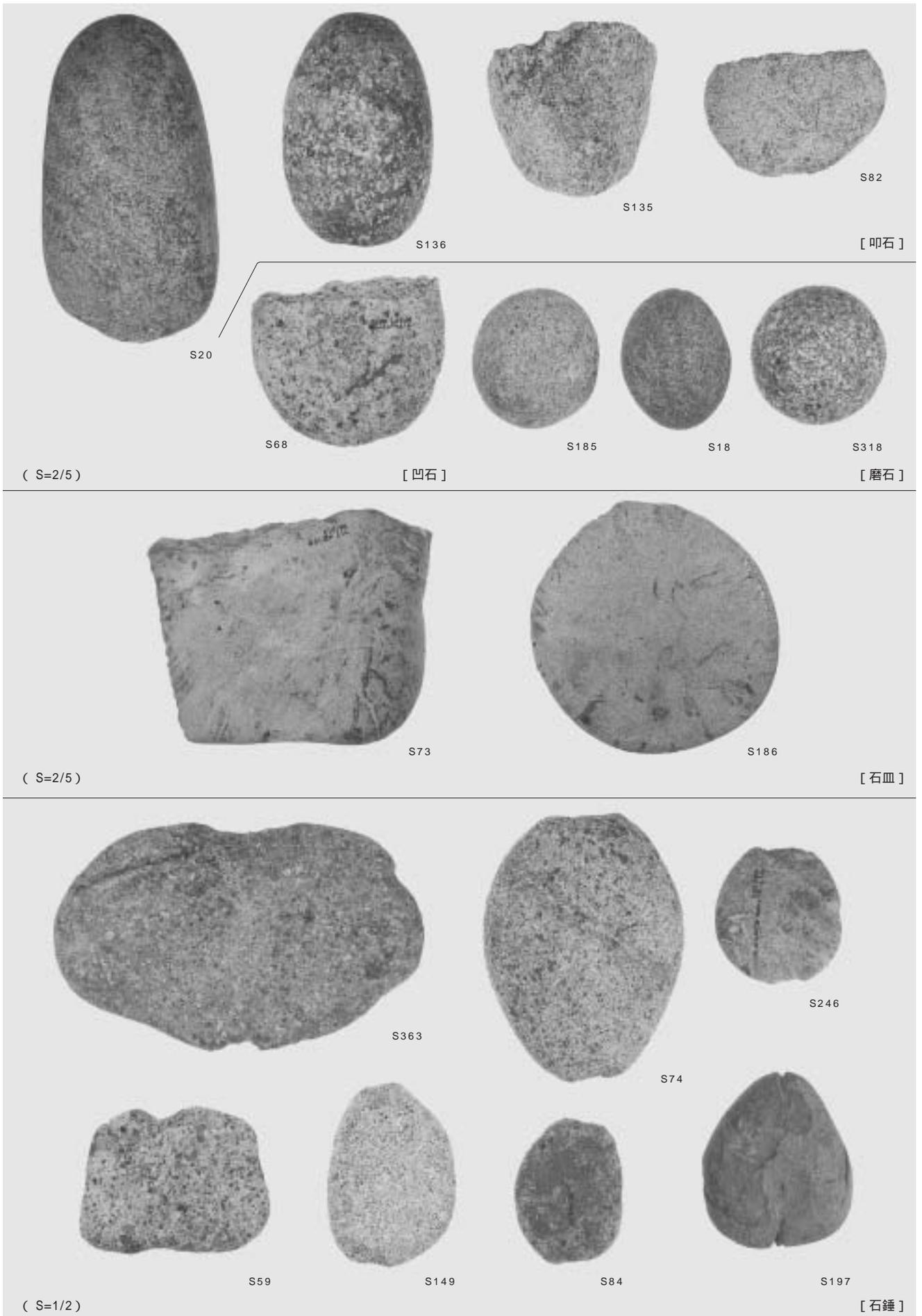
図版24 石器3 (石鋤)



(S=2/3)



図版26 石器5 (叩石・凹石・磨石・石皿・石錘)





—



S171



|



S252



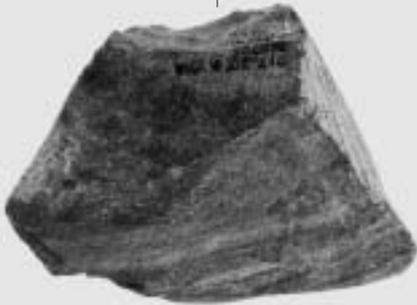
|



|



|



S359



S122



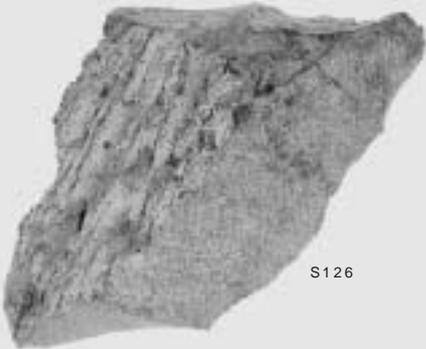
S130



|



|



S126



S250



S323

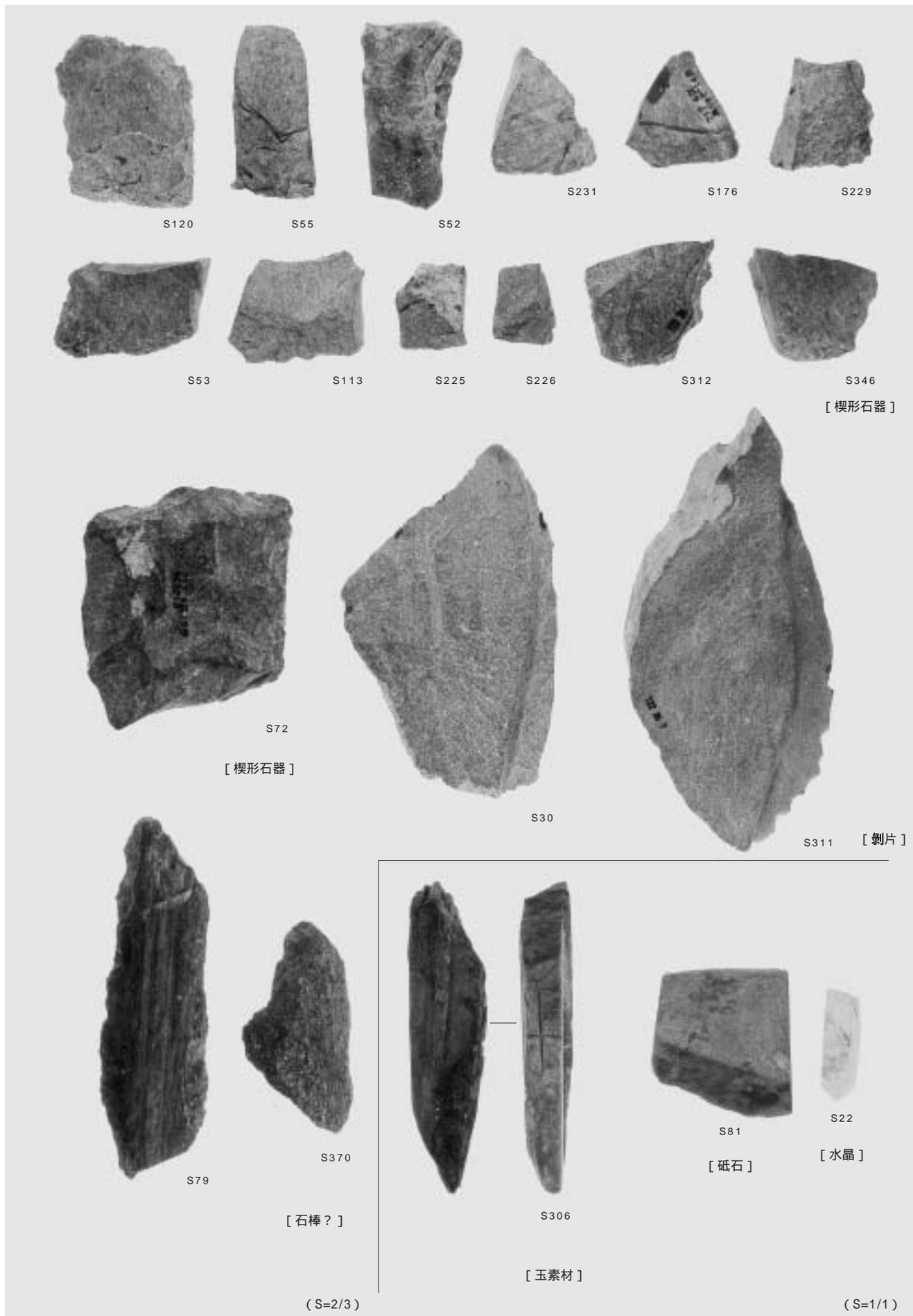


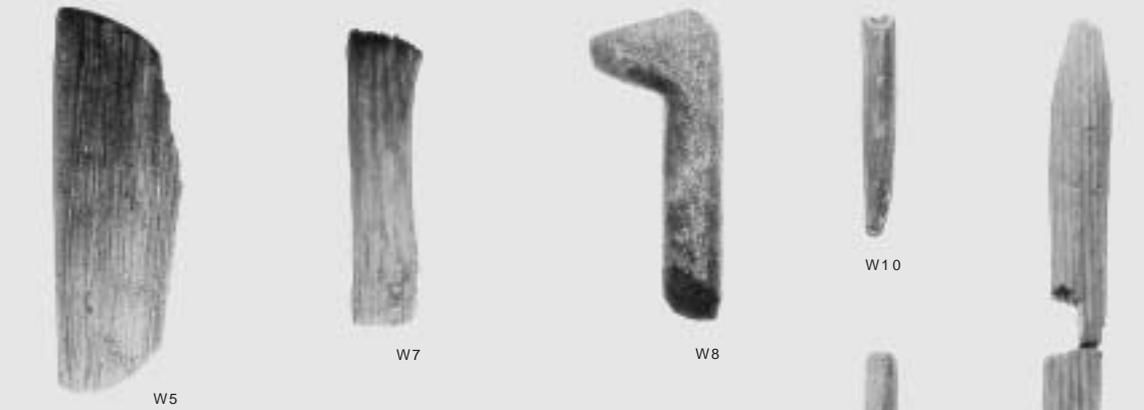
S21

(S=2/3)

(S=1/1)

図版28 石器7 (楔形石器・その他)





(S=1/4)

図版30 木製品2(溝21)



報告書抄録

ふりがな	つしまおかだいいせき							
書名	津島岡大遺跡16 第17・22次調査							
副書名	環境理工学部棟新営							
巻次								
シリーズ名	岡山大学構内遺跡発掘調査報告							
シリーズ番号	第21冊							
編著者名	岩崎志保・野崎貴博・高田貫太・高田浩司・山本悦世・能城修一							
編集機関	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター							
所在地	〒700 8530 岡山県岡山市津島中3丁目1番1号 TEL 086 251 7290							
発行年月日	2005年3月20日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡	所在地	市町村	遺跡番号					
つしまおかだいいせき 津島岡大遺跡 第17次 調査地点	おかやまけんおかやまし 岡山県岡山市 つしまなか 津島中3丁目 1番1号	33201		34度41分 23秒	133度55分 21秒	19960521 }	1,451m ²	校舎新営
つしまおかだいいせき 津島岡大遺跡 第22次 調査地点						19990301 }		
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
津島岡大遺跡 第17・22次 調査地点	集落	縄文時代	竪穴住居状遺構2棟、溝2条、 土坑・ピット805基、 焼土遺構8基		土器・石器			
	田畑	弥生時代	土坑1基、溝13条、 水田畦畔2面、河道		土器・石器			
	田畑	古墳時代	溝5条、水田畦畔、柱穴列		土器			
	田畑	古代	溝3条、水田畦畔		土器・石器・木製品			
	田畑	中世	溝2条、水田畦畔		土器・陶磁器・石器			
	田畑	近世～近代	土坑10基、溝2条、柱穴列		土器・陶磁器・石器			

2005年3月20日発行

岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第21冊
津島岡大遺跡16

編集・発行 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
岡山市津島中3丁目1番1号
(086)251-7290
印刷 西尾総合印刷株式会社横井支店
岡山市横井上90
(086)254-9001